第５次レッドデータブック：
絶滅のおそれのある日本の野生生物

The 5th Red Databook Reptiles and Amphibians: Threatened wildlife of Japan

爬虫類・両生類



環境省 編

令和８（2026）年３月

特に文献内で別途指定がない限り、この文献はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

表紙の写真：ミヤコトカゲ（左上）、ホムラハコネサンショウウオ（中上）、イイジマウミヘビ（右上）、ニホンイシガメ（左下）、オキナワシリケンイモリ（中下）、サドガエル（右下）

第５次レッドデータブック全体を引用する場合には以下のように記述してください。

引用表示：環境省（編），2026．第５次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　爬虫類・両生類．環境省，東京．721pp.

Citation: Ministry of the Environment, Japan (ed.). 2026. *The 5th Red Databook Reptiles and Amphibians: Threatened wildlife of Japan*. Ministry of the Environment, Japan, Tokyo. 721pp.

はじめに

私たちが生きる現代は「第６の大量絶滅時代」ともいわれ、過去５回発生した大絶滅より種の絶滅速度は速く、その主な原因は人間活動による影響と考えられています。2019 年に生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学-政策プラットフォーム（IPBES）により公表された「生物多様性と生態系サービスに関する地球規模評価報告書」によると、世界の陸地の約 75%は著しく改変され、海洋の 66%は複数の人為的な影響下にあり、1700 年以降湿地の 85%以上が消失するなど、人類史上かつてない速度で地球全体の自然が変化していると報告されています。また、過去 50 年間の地球上の種の絶滅は、過去 1,000 万年平均の少なくとも数十倍、あるいは数百倍の速度で進んでおり、適切な対策を講じなければ、今後更に加速すると指摘されています。

2019 年の国連総会においては、世界中の生態系の劣化を予防し、食い止め、反転させるための努力を支援し、拡大させるために、2030 年までに陸と海の 30%以上を保護・保全する「30by30 目標」が提唱されました。30by30 目標の達成に当たっては、自然保護を目的とした国立公園等の保護地域に加えて、それ以外の場所で生物多様性の保全に資する地域として OECM（Other Effective area-based Conservation Measures）の役割も重視されました。この OECM は、持続可能な生産活動の場を含め、より広範囲における生物多様性保全や生態系回復の動きを後押しできる可能性を有するものであり、我が国においても、民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている里地里山、企業緑地、社寺林などの区域を自然共生サイトとして認定する制度が始まりました。

また、2022 年 12 月に採択された新たな生物多様性に関する世界目標である「昆明・モントリオール生物多様性枠組」においては、「人間によって引き起こされる既知の絶滅危惧種の絶滅を阻止し、また絶滅リスクを大幅に減らすための種、特に絶滅危惧種を回復及び保全し、並びに適応能力の維持のために在来種、野生種及び家畜・栽培種の個体群内及び個体群間の遺伝的多様性を維持及び回復するために、生息域内及び生息域外保全や持続可能な管理の実践等を通じて緊急の管理行動を確保するとともに、共存に向けて人間と野生生物との軋轢を最小化するため、人間と野生生物の相互作用を効果的に管理する」ことが位置づけられました。これを受け、令和５年には、自然を回復軌道に乗せるため、生物多様性の損失を止め、反転させる「2030 年ネイチャーポジティブ」を掲げ、その実現のためのロードマップとして「生物多様性国家戦略 2023-2030」を策定しました。

「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」については、自然とのふれあいや関わりを維持しつつ、積極的な生息地・生育地の保全活動等を推進するため、平成 29 年度に「特定第二種国内希少野生動植物種」制度を創設しました。本制度は、主に里地里山など二次的自然に生息する両生類、淡水魚類、昆虫類などの指定を想定しており、調査研究や環境教育等を目的とした捕獲等の行為については規制されないため、自然との関わりやふれあいを維持しつつ、各地域で積極的な生息・生育地の保全活動等が展開され、対象種の保全が進むことが期待されます。

本書は、平成 24 年に公表した「第４次レッドリスト」並びにその解説版である「レッドデータブック 2014」、平成 29 年に公表した「環境省版海洋生物レッドリスト」及び「第４次レッドリスト」の内容を一部見直して公表した環境省レッドリスト 2020 について、最新の知見を踏まえ改訂を行い、「第５次レッドリスト・レッドデータブック」として編纂したものです。「第５次レッドリスト」では、これまでと異

なり、個別の分類群の事情を超えて統一的な評価を行うために、「レッドリスト作成の手引」を作成し、絶滅のおそれに関する基準をより具体的に規定するとともに、定量的な情報に基づいて評価することを原則とすることで、生息地・生育地の現状をより正確に反映できるよう努めました。また、都道府県レッドリストの作成が充実してきたことに伴う「絶滅のおそれのある地域個体群」（LP）の評価基準の見直しやクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの表示等による利用のしやすさの改善など、さまざまな見直しを行っております。

レッドリスト・レッドデータブックは、捕獲規制等の直接的な法的効力を生むものではありませんが、社会への警鐘として広く社会に情報を提供することにより、さまざまな場面で多様な活用が図られるものです。環境省においても、環境影響評価法に基づく環境アセスメント等、さまざまな環境政策において基礎資料として活用され、近年、規制を伴う政策との関連がますます強化される傾向にあります。特に、「種の保存法」との関係では、レッドリスト掲載種の中で特に保護の優先度の高い種について、生息状況等に関する詳細な調査の実施等によりさらなる情報収集を行い、その結果や生息地・生育地の自然的・社会的状況等に応じて同法に基づく国内希少野生動植物種に指定する等、必要な保護措置を講じていくこととしています。一方で、今回の改訂では、個体数が回復したこと等により絶滅危惧カテゴリーから除外された国内希少野生動植物種もあり、こうした種については、次回の見直しに向けて引き続き生息状況等を注視し、今後の評価結果も踏まえて、必要に応じて指定の解除を検討することとしています。

なお、掲載種の中には、人為による捕獲・採取圧（密猟・盗掘を含む）が主な減少要因となっている種が少なくありませんが、レッドリスト・レッドデータブックに掲載されることにより、かえって商業目的や観賞目的等による乱獲・盗掘等の対象となるおそれが増大することが懸念される種もあります。今回のレッドリスト・レッドデータブックに掲載された種を将来にわたって存続させていくには、国民をはじめ多様な主体が、その種がレッドリスト・レッドデータブックに掲載された意味を真摯に考えることが重要です。環境省としては、こうした観点からの普及啓発・広報や保護措置の充実等の各種対策を一層推進していく考えです。

今回のレッドリスト・レッドデータブック編纂に当たっては、レッドリスト掲載種の選定・評価からレッドデータブックの執筆まで、絶滅のおそれのある野生生物の選定評価検討会及び同分科会の委員各位、その他多くの研究者や専門家の方々から多大なるご指導、ご協力、ご尽力を賜りました。また、種の選定から本書の編纂にわたる過程において、データの整理等は（一財）自然環境研究センターが担当しました。

本書の編纂にご協力いただいた関係各位に対し、ここに改めて厚く感謝申し上げるとともに、本書が今後、行政、事業者、関係団体等、様々な主体による取組に広く活用されることを祈念します。

環境省自然環境局野生生物課
希少種保全推進室

目　次

はじめに i

環境省レッドリスト・レッドデータブック作成の目的と経緯 iv

第５次レッドリスト作成の検討体制 vii

第５次レッドリスト（爬虫類・両生類）の作成と評価結果 ix

第５次レッドリスト（爬虫類） xiii

第５次レッドリスト（両生類） xvi

第５次レッドデータブック（爬虫類・両生類）の掲載内容 xix

第５次レッドデータブック（爬虫類）各種の解説 1

第５次レッドデータブック（両生類）各種の解説 321

第５次レッドリスト（爬虫類・両生類）においてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった種（亜種を含む）または地域個体群の解説 705

■学名索引 718

■和名索引 720

環境省レッドリスト・レッドデータブック作成の目的と経緯

レッドリスト・レッドデータブックとは

レッドリストとは、日本に生息又は生育する野生生物について、生物学的観点から個々の種の絶滅の危険度を評価した上で絶滅危惧種を選定し、リストにまとめたものであり、おおむね５年ごとに見直しを行っている。絶滅危惧種の保存施策は、生物学的知見に立脚しつつ、時機を失うことなく適切に実施される必要があり、種の保存法に基づく希少野生動植物種保存基本方針に基づいてレッドリストを作成し、施策の推進に必要な各種の調査研究を積極的に推進することとしている。また併せて、レッドリストに掲載された種について、その生息状況等を取りまとめ編纂したレッドデータブックを作成し、おおむね 10 年ごとに見直しを行っている。

これまでのレッドリストの改訂状況

・初版レッドデータブック（平成３年）

野生生物の保全のためには、絶滅のおそれのある種を的確に把握し、一般への理解を広める必要があることから、環境省では、昭和 61 年度より「緊急に保護を要する動植物の種の選定調査」を行った。その結果を踏まえ、動物については平成３年に環境庁（当時）版レッドデータブック「日本の絶滅のおそれのある野生生物－脊椎動物編」及び「日本の絶滅のおそれのある野生生物－無脊椎動物編」を取りまとめた。

なお、植物については、平成元年に、日本植物分類学会が中心となって維管束植物を対象として編集した「我が国における保護上重要な植物種の現状」が、我が国で最初のレッドデータブックである。

・第２次レッドリスト・レッドデータブック（平成９年～18 年）

平成７年度には、国際自然保護連合（IUCN）で採択された新しいカテゴリー（ランク）の考え方を踏まえ、動物についてはレッドリストの見直し、植物については新たに環境省版としてレッドリストの作成に着手した。動物では、①哺乳類 ②鳥類、③爬虫類、④両生類、⑤汽水･淡水魚類、⑥昆虫類、⑦陸・淡水産貝類、⑧その他無脊椎動物（クモ形類、甲殻類等）、植物では⑨植物I（維管束植物）、⑩植物II（蘚苔類、藻類、地衣類、菌類）の計 10 分類群ごとに、平成９～12 年度にかけて順次レッドリストを公表した。また、このレッドリストを元に、分類群ごとのレッドデータブックを平成 12～18 年度に発行した。

・第３次レッドリスト（平成 18 年・19 年）

平成 14 年度より２回目のレッドリストの見直し作業に着手し、平成 18 年 12 月に鳥類、爬虫類、両生類、その他無脊椎動物の４分類群、平成 19 年８月に残りの哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物I（維管束植物）、植物II（蘚苔類、藻類、地衣類、菌類）の６分類群のレッドリストを公表した（動物については３回目、植物については２回目の公表）。新たにレッドリストに掲載された種や、カテゴリーが変更された種については、現行レッドデータブックの付属説明資料を作成した。

・第４次レッドリスト及びレッドデータブック 2014（平成 24 年～27 年）

平成 20 年度より、上記の見直しに引き続き、３回目のレッドリスト見直し作業に着手した。前回見直し後の生息・生育状況や生息・生育環境の変化等の最新の知見を収集し検討を行ってきた。平成 24 年度に 10 分類群のレッドリストについて見直し作業が終了し、新たな第４次レッドリストを取りまとめ、公表した。

・第４次レッドリストの随時見直し（平成 27 年～令和２年）

第４次レッドリストについては、平成 27 年度から令和２年度まで、生息状況の悪化等によりカテゴリーの再検討が必要な種について、時期を定めず必要に応じて個別に見直しを行った。

平成 27 年に、哺乳類の一部の種及び絶滅のおそれのある地域個体群（ゼニガタアザラシ、カモシカの地域個体群）についてカテゴリー（ランク）を見直したレッドリスト 2015 を公表した。

平成 29 年に、13 分類群の 60 種についてカテゴリーを見直したレッドリスト 2017 を公表した。絶滅危惧種は 38 種増加し、合計 3,634 種となった。また、平成 29 年 10 月には、レッドリスト 2017 において新規に掲載された種（亜種、変種等を含む。）及びカテゴリーが変更された種（合計 60 種）を対象に、レッドデータブックに代わる解説資料として、それらの評価理由や生息状況等を解説した「環境省レッドリスト 2017 補遺資料」を公表した。

平成 30 年に、67 種についてカテゴリーを見直したレッドリスト 2018 を公表した。絶滅危惧種は 41 種増加（44 種追加、３種削除）し、合計 3,675 種となった。また、レッドデータブックに代わる解説資料として、上記 67 種について随時見直しの評価理由や生息状況等を解説した「環境省レッドリスト 2018 補遺資料」を公表した。

平成 31 年に、トキ及びトキウモウダニについてカテゴリーを見直したレッドリスト 2019 を公表した。絶滅危惧種は 1 種増加し、合計 3,676 種となった。また、レッドデータブックに代わる解説資料として、上記２種について随時見直しの評価理由や生息状況等を解説した「環境省レッドリスト 2019 補遺資料」を公表した。

令和２年に、75 種のカテゴリーを見直したレッドリスト 2020 を公表した。絶滅危惧種は 39 種増加し、合計 3,716 種となった。平成 29 年度に公表された海洋生物レッドリストに掲載された種数とあわせると、環境省が絶滅危惧種と評価した種は 3,772 種となった。また、レッドデータブックに代わる解説資料として、上記 75 種について、随時見直しの評価理由や生息状況等を解説した「環境省レッドリスト 2020 補遺資料」を公表した。

・海洋生物レッドリスト（平成 29 年）

平成 23 年に「海洋生物多様性保全戦略」が策定され「海洋生物の希少性等の評価」の推進が位置づけられるなど、海洋の生物に対する関心の高まりを受け、平成 24 年度より海洋生物レッドリスト作成の作業を開始した。魚類、サンゴ類、甲殻類、頭足類、その他無脊椎動物の５分類群のうち、これまで評価を行っていなかった種について、新たにレッドリストを取りまとめ海洋生物レッドリストとして公表した。海洋生物レッドリストでは絶滅危惧種として 56 種が掲載された。なお、水産庁が資源評価を実施している種や小型鯨類などの 94 種は、水産庁が評価した。

・第５次レッドリスト・レッドデータブック（令和７年～）

令和２年度より、従来のレッドリストと海洋生物レッドリストの検討体制を統合した。令和７年３月に、①維管束植物、②蘚苔類、③藻類、④地衣類、⑤菌類の５分類群について、令和８年３月に、⑥鳥類、⑦爬虫類・両生類について第５次レッドリスト・レッドデータブックを公表した。今後、他の分類群についても順次公表することとしている。

第５次レッドリスト作成の検討体制

環境省第５次レッドリストの作成に当たっては、専門家による「絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会」を設置し、その下に分類群毎に分科会を設置して検討を進めることとした。

● 第５次レッドリスト検討体制（敬称略。50 音順。所属は原則として令和７（2025）年度現在。）

［絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会委員］

座　長：	石井 実（～令和７年）	大阪府立大学　名誉教授
		地方独立行政法人大阪府立環境農林水産総合研究所　理事長（故人）
	石井 信夫（令和８年～）	東京女子大学　名誉教授
委　員：	岩崎 敬二	奈良大学文学部地理学科　教授
	大高 明史	弘前大学　名誉教授
	尾崎 清明	山階鳥類研究所　副所長
	柏谷 博之	国立科学博物館　名誉研究員
	角野 康郎	神戸大学　名誉教授
	木村 清志	三重大学　名誉教授
	白山 義久	京都大学　名誉教授
	田中 次郎	東京海洋大学　名誉教授
	深見 裕伸	宮崎大学農学部海洋生物環境学科　教授
	逸見 泰久	熊本大学　名誉教授
	細谷 和海	近畿大学　名誉教授
	細矢 剛	国立科学博物館植物研究部　部長
	松井 正文	京都大学　名誉教授
	矢後 勝也	東京大学総合研究博物館　講師（令和８年～）
	山口 富美夫	広島大学　名誉教授

［分科会］

哺乳類分科会	座長：石井信夫	委員数：５名
鳥類分科会	座長：尾崎清明	委員数：７名
爬虫類・両生類分科会	座長：松井正文	委員数：５名
淡水魚類分科会	座長：細谷和海	委員数：10 名
海水魚類分科会	座長：木村清志	委員数：13 名
サンゴ類分科会	座長：深見裕伸	委員数：５名
昆虫類分科会	座長：石井　実（～令和７年）（故人） 矢後勝也（令和８年～）	委員数：12 名

（令和７年 12 月に逝去された石井実委員を含む）

甲殻類分科会	座長：逸見泰久	委員数：11 名 （令和６年まで 12 名）
軟体動物分科会	座長：岩崎敬二	委員数：10 名 （令和５年まで 11 名）
陸域その他無脊椎動物分科会	座長：大高明史	委員数：６名
海域その他無脊椎動物分科会	座長：白山義久	委員数：10 名
維管束植物分科会	座長：角野康郎	委員数：10 名
蘚苔類分科会	座長：山口富美夫	委員数：５名
藻類分科会	座長：田中次郎	委員数：６名
地衣類分科会	座長：柏谷博之	委員数：５名
菌類分科会	座長：細矢　剛	委員数：５名

第５次レッドリスト（爬虫類・両生類）の作成と評価結果

第５次レッドリスト（爬虫類・両生類）について

本リストに掲載された種数は、爬虫類では 63 種でレッドリスト 2020 から 1 種増加しただけであるが、両生類では 11 種も増加し 77 種となった。これらのうち、絶滅危険度の高い絶滅危惧Ⅰ類（CR,EN）とⅡ類（VU）の種数は、爬虫類では 37 種から 36 種と減少したが、両生類では 47 種から 60 種と大幅に増加している。その内訳の増減を見ると、爬虫類では絶滅危惧 IB 類(EN)が 9 種から 13 種に増加し、絶滅危惧Ⅱ類(VU)が 23 種から 17 種へ減少した。他方、両生類では EN が 20 種から 31 種と大幅に増加し、VU は 22 種のままで変化はなかった。両生類の EN の増加の主因は、レッドリスト 2020 の公表後に多くの種が記載され、それらの絶滅危惧度が高かったことにある。

第５次レッドリストにおける各種のカテゴリーには、下に記すように少なからぬ変動があったが、その主因のひとつには、国際基準に基づくとされる定量的評価の適用があろう。象徴的なのは 1991 年の初版レッドデータブックからレッドリスト 2020 まで両生類の CR にランクされてきたアベサンショウウオが、本リストでは EN に下降したことである。この変更は、散在する生息地を合わせるとこの種の分布面積が相対的に大きく見積もられたことによるものであるが、生息環境が改善したわけではない。レッドリスト作成のための現地調査の情報のうち、長年にわたって蓄積されているものはほとんどない。したがって、定量的評価という理想的な手法も、多くの場合、適切になされていないのが現状である。その一例が爬虫類における情報不足(DD)の種の増加に反映されており、レッドリスト 2020 の 3 種から 7 種に増加した。

本邦産の爬虫類・両生類の分類は今後も進むであろう。爬虫類では本レッドリスト作成の作業が終わってからも、新たに種が記載されたし、両生類でも、今後の再調査の必要性から今回は評価対象に含まれなかった種があるのに加え、広域分布する普通種の細分の研究も進みつつある。できるだけ定量的評価に基づこうとした本レッドリストが、どれだけ自然の実態を反映しているかを吟味しつつ、将来掲載される可能性のある種や個体群についても、詳しい生息情報を得られるような手立てが重要である。基礎的なデータは座っていれば集まるようなものではないから、多くの自然愛好家に呼びかけ、協力を仰ぐ必要がある。その一方で不法採集を招く、詳細な生息地情報の公表に注意せねばならない。かつては気味悪がられた爬虫類・両生類も広く社会に認知されるようになり、これらの保護活動に参加される人々も増加した。そうした中でのレッドリストの公表は誠に意義あるものと言えよう。こうした活動を通じて絶滅危険度が減少しつつある爬虫類・両生類の種の例もあるが、一方で、最近の太陽光パネルのような環境問題もあるし、近年の異常気象とそれに伴う自然災害はかつて想像できなかったものである。冷涼な気候条件に依存する渓流性サンショウウオなどは特に大きな影響を受けるであろう。こうした環境変化に対して将来、どのような保護策が考えられるのか、生息状況のデータを蓄積する体制を整えるべき時である。

令和８年３月

爬虫類・両生類分科会座長 松井　正文

［爬虫類・両生類分科会委員］

座　長：	松井　正文	京都大学　名誉教授
委　員：	太田　英利	兵庫県立大学　名誉教授
	竹中　践	東海大学　名誉教授
	戸田　守	琉球大学　熱帯生物圏研究センター　准教授
	福山　欣司	慶応義塾大学　名誉教授

協力者一覧（敬称略）

第５次レッドリスト・レッドデータブックは、下記の方々のご協力によって作成されたものです。ご協力いただきました方々のお名前を掲載し、厚く御礼申し上げます。

秋田耕佑、安里 瞳、阿南一穂、一般財団法人自然環境研究センター、江頭幸士郎、大川博志、岡本 卓、乙幡康之、亀崎直樹、川原康寛、草野 保、栗田隆気、栗山武夫、小林頼太、坂本真理子、笹井隆秀、佐藤孝則、島田知彦、鈴木 大、髙橋洋生、宅森美優、田辺真吾、照井滋晴、戸金 大、戸田光彦、富永 篤、中野紘一、中野康子、中原 亨、西川完途、長谷川雅美、日比野友亮、深草彩子、松尾公則、松田明音、見澤康充、宮崎真結、森口 一、山本拓海、湯本光子、吉川夏彦

（１）第５次レッドリスト（爬虫類・両生類）作成の手順

第５次レッドリスト（爬虫類・両生類）については、レッドリスト作成の手引の「第一　絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価における基本的事項」及び「第二　各分科会における基本的事項」に従って、評価対象となる種（亜種、変種等を含む、以下同じ）を選定したうえで１種ずつ各対象種の既知情報等を「第三　環境省レッドリストカテゴリーと判定基準」の各基準に当てはめてカテゴリー評価を実施した。その他、レッドリスト作成に係る詳細については、レッドリスト作成の手引を参照のこと。

参考：環境省レッドリストのカテゴリー

カテゴリー		定義と基本概念
絶滅 Extinct **(EX)**		我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
野生絶滅 Extinct in the Wild **(EW)**		飼育・栽培下、あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種
絶滅危惧	**絶滅危惧 IA 類** Critically Endangered **(CR)**	深刻な絶滅の危機に瀕している種 （現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なものであって、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの）
	絶滅危惧 IB 類 Endangered **(EN)**	絶滅の危機に瀕している種 （現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なものであって、IA 類（CR）ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの）
	絶滅危惧 II 類 Vulnerable **(VU)**	絶滅の危険が増大している種 （現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、「絶滅危惧 IA 類（CR）」または「絶滅危惧 IB 類（EN）」のカテゴリーに移行することが確実と考えられるもの）
準絶滅危惧 Near Threatened **(NT)**		存続基盤が脆弱な種 （現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位カテゴリーに移行する要素を有するもの）

情報不足 Data Deficient **(DD)**	カテゴリーを判定するための情報が不足している種 （現時点での絶滅危険度は確定できないが、今後情報が得られれば「絶滅危惧」等になりうるもの）

付属資料

絶滅のおそれのある地域個体群 Threatened Local Population **(LP)**	孤立した地域個体群で、絶滅のおそれが高いもの

出典：環境省レッドリストカテゴリーと判定基準を抜粋して作成

（２）第５次レッドリスト（爬虫類）掲載種数

今回の見直しの結果による第５次レッドリスト掲載種のカテゴリー内訳と、レッドリスト 2020 からの各カテゴリーにおける種数の変遷は、以下のとおりである。

表１ 第５次レッドリスト（爬虫類）掲載種のカテゴリー内訳

EX	EW	CR	EN	VU	NT	DD	LP	合計
0	0	6	13	17	18	7	2	63

表２ 各カテゴリーにおける種数の変遷（レッドリスト 2020 と第５次レッドリストの比較）

		第５次レッドリストにおける評価									
		EX	EW	CR	EN	VU	NT	DD	LP	不掲載	合計
内訳		0	0	6	13	17	18	7	2	5	68
レッドリスト 2020	EX	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	EW	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	CR	0	0	3	2	0	0	0	0	0	5
	EN	0	0	1	6	2	0	0	0	0	9
	VU	0	0	2	5	10	4	2	0	0	23
	NT	0	0	0	0	4	11	0	0	2	17
	DD	0	0	0	0	0	1	1	0	1	3
	LP	0	0	0	0	0	1	0	2	2	5
新規追加		0	0	0	0	1	1	4	0	0	6

（３）第５次レッドリスト（爬虫類）から明らかになった点

第５次レッドリストにおいて、絶滅危惧Ⅰ類（CR,EN）および絶滅危惧Ⅱ類（VU）を含む絶滅危惧種として掲載された爬虫類の種数は、前回の RL2020 の 37 種から 36 種となった。前回準絶滅危惧（NT）と評価された種のうち、ニホンイシガメ、アムールカナヘビ、タカラヤモリ、オキナワヤモリは、第５次レッドリストでは絶滅危険度が大きいと評価され、絶滅危惧種と位置付けられた。さらに、これまで絶滅危惧とされていた種でも、アカウミガメ、ヤエヤマイシガメ、クロイワトカゲモドキ、ミヤコトカゲなど８種は、絶滅危険度がより高いカテゴリーに引き上げられた。これらの要因には、開発等による生息環境の劣化・消失等が挙げられている。また今回は、オサガメ、クロウミガメ、ヒメウミガメ、アオマダラウミヘビなど日本では繁殖記録の少ない海産種も評価対象に加えられ、情報不足としてレッドリストに追加された。

一方で、前回絶滅危惧と評価された種のうち、オキナワキノボリトカゲ、キシノウエトカゲ、オキナワトカゲ、サキシマスジオは準絶滅危惧（NT）とカテゴリーが低くなった。ヒロオウミヘビとエラブウミヘビは情報不足（DD）と評価された。オガサワラトカゲ、イシガキトカゲ、クチノシマトカゲは、現時点での絶滅危険度は小さいという理由でレッドリスト不掲載となった。また、第５次レッドリストでは絶滅のおそれのある地域個体群（LP）の評価基準が変更となったことを受け、その基準を満たさない三島のヘリグロヒメトカゲと宮古諸島のサキシママダラはレッドリスト不掲載となった。

第５次レッドリスト（爬虫類）

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
RE0001	絶滅危惧IA 類（CR）	タイマイ	*Eretmochelys imbricata*
RE0002	絶滅危惧IA 類（CR）	マダラトカゲモドキ	*Goniurosaurus orientalis*
RE0003	絶滅危惧IA 類（CR）	イヘヤトカゲモドキ	*Goniurosaurus toyamai*
RE0004	絶滅危惧IA 類（CR）	ミヤコトカゲ	*Emoia atrocostata atrocostata*
RE0005	絶滅危惧IA 類（CR）	ミヤラヒメヘビ	*Calamaria pavimentata miyarai*
RE0006	絶滅危惧IA 類（CR）	キクザトサワヘビ	*Opisthotropis kikuzatoi*
RE0007	絶滅危惧IB 類（EN）	アカウミガメ	*Caretta caretta*
RE0008	絶滅危惧IB 類（EN）	リュウキュウヤマガメ	*Geoemyda japonica*
RE0009	絶滅危惧IB 類（EN）	ヤエヤマイシガメ	*Mauremys mutica kami*
RE0010	絶滅危惧IB 類（EN）	クロイワトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae*
RE0011	絶滅危惧IB 類（EN）	ケラマトカゲモドキ	*Goniurosaurus sengokui*
RE0012	絶滅危惧IB 類（EN）	クメトカゲモドキ	*Goniurosaurus yamashinae*
RE0013	絶滅危惧IB 類（EN）	センカクトカゲ	*Plestiodon takarai*
RE0014	絶滅危惧IB 類（EN）	ミヤコカナヘビ	*Takydromus toyamai*
RE0015	絶滅危惧IB 類（EN）	ヤエヤマタカチホヘビ	*Achalinus formosanus chigirai*
RE0016	絶滅危惧IB 類（EN）	ミヤコヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*
RE0017	絶滅危惧IB 類（EN）	シュウダ	*Elaphe carinata carinata*
RE0018	絶滅危惧IB 類（EN）	ミヤコヒバァ	*Hebius concelarus*
RE0019	絶滅危惧IB 類（EN）	イイジマウミヘビ	*Emydocephalus ijimae*
RE0020	絶滅危惧II類（VU）	アオウミガメ	*Chelonia mydas*
RE0021	絶滅危惧II類（VU）	ヤエヤマセマルハコガメ	*Cuora flavomarginata evelynae*
RE0022	絶滅危惧II類（VU）	ニホンイシガメ	*Mauremys japonica*
RE0023	絶滅危惧II類（VU）	ヤンバルトカゲモドキ	*Goniurosaurus nebulozonatus*
RE0024	絶滅危惧II類（VU）	オビトカゲモドキ	*Goniurosaurus splendens*
RE0025	絶滅危惧II類（VU）	タカラヤモリ	*Gekko shibatai*
RE0026	絶滅危惧II類（VU）	オキナワヤモリ	*Gekko* sp. 1
RE0027	絶滅危惧II類（VU）	ヤクヤモリ	*Gekko yakuensis*
RE0028	絶滅危惧II類（VU）	タシロヤモリ	*Hemidactylus bowringii*
RE0029	絶滅危惧II類（VU）	ミナミトリシマヤモリ	*Perochirus ateles*
RE0030	絶滅危惧II類（VU）	ヨナグニキノボリトカゲ	*Diploderma polygonatum donan*
RE0031	絶滅危惧II類（VU）	バーバートカゲ	*Plestiodon barbouri*
RE0032	絶滅危惧II類（VU）	アムールカナヘビ	*Takydromus amurensis*
RE0033	絶滅危惧II類（VU）	サキシマカナヘビ	*Takydromus dorsalis*
RE0034	絶滅危惧II類（VU）	コモチカナヘビ	*Zootoca vivipara*

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
RE0035	絶滅危惧II類（VU）	ヨナグニシュウダ	*Elaphe carinata yonaguniensis*
RE0036	絶滅危惧II類（VU）	イワサキワモンベニヘビ	*Sinomicrurus iwasakii*
RE0037	準絶滅危惧（NT）	ニシヤモリ	*Gekko* sp. 2
RE0038	準絶滅危惧（NT）	タワヤモリ	*Gekko tawaensis*
RE0039	準絶滅危惧（NT）	サキシマキノボリトカゲ	*Diploderma polygonatum ishigakiense*
RE0040	準絶滅危惧（NT）	オキナワキノボリトカゲ	*Diploderma polygonatum polygonatum*
RE0041	準絶滅危惧（NT）	キシノウエトカゲ	*Plestiodon kishinouyei*
RE0042	準絶滅危惧（NT）	オキナワトカゲ	*Plestiodon marginatus*
RE0043	準絶滅危惧（NT）	オオシマトカゲ	*Plestiodon oshimensis*
RE0044	準絶滅危惧（NT）	アオカナヘビ	*Takydromus smaragdinus*
RE0045	準絶滅危惧（NT）	イワサキセダカヘビ	*Pareas iwasakii*
RE0046	準絶滅危惧（NT）	アマミタカチホヘビ	*Achalinus werneri*
RE0047	準絶滅危惧（NT）	サキシマアオヘビ	*Cyclophiops herminae*
RE0048	準絶滅危惧（NT）	サキシマスジオ	*Elaphe taeniura schmackeri*
RE0049	準絶滅危惧（NT）	ダンジョヒバカリ	*Hebius vibakari danjoensis*
RE0050	準絶滅危惧（NT）	サキシマバイカダ	*Lycodon multifasciatus*
RE0051	準絶滅危惧（NT）	アカマダラ	*Lycodon rufozonatus rufozonatus*
RE0052	準絶滅危惧（NT）	ハイ	*Sinomicrurus boettgeri*
RE0053	準絶滅危惧（NT）	ヒャン	*Sinomicrurus japonicus*
RE0054	準絶滅危惧（NT）	トカラハブ	*Protobothrops tokarensis*
RE0055	情報不足（DD）	クロウミガメ	*Chelonia agassizii*
RE0056	情報不足（DD）	ヒメウミガメ	*Lepidochelys olivacea*
RE0057	情報不足（DD）	オサガメ	*Dermochelys coriacea*
RE0058	情報不足（DD）	ニホンスッポン	*Pelodiscus japonicus*
RE0059	情報不足（DD）	アオマダラウミヘビ	*Laticauda colubrina*
RE0060	情報不足（DD）	ヒロオウミヘビ	*Laticauda laticaudata*
RE0061	情報不足（DD）	エラブウミヘビ	*Laticauda semifasciata*
RE0062	絶滅のおそれのある地域個体群（LP）	大東諸島のオガサワラヤモリ	*Lepidodactylus lugubris*
RE0063	絶滅のおそれのある地域個体群（LP）	三宅島、八丈島、青ヶ島のオカダトカゲ	*Plestiodon latiscutatus*

（４）第５次レッドリスト（両生類）掲載種数

今回の見直しの結果による第５次レッドリスト掲載種のカテゴリー内訳と、レッドリスト 2020 からの各カテゴリーにおける種数の変遷は、以下のとおりである。

表３ 第５次レッドリスト（両生類）掲載種のカテゴリー内訳

EX	EW	CR	EN	VU	NT	DD	LP	合計
0	0	7	31	22	15	2	0	77

表４ 各カテゴリーにおける種数の変遷（レッドリスト 2020 と第５次レッドリストの比較）

		第５次レッドリストにおける評価									
		EX	EW	CR	EN	VU	NT	DD	LP	不掲載	合計
内訳		0	0	7	31	22	15	2	0	1	78
レッドリスト 2020	EX	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	EW	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	CR	0	0	4	1	0	0	0	0	0	5
	EN	0	0	1	18	1	0	0	0	0	20
	VU	0	0	0	5	17	0	0	0	0	22
	NT	0	0	0	2	2	14	0	0	1	19
	DD	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	LP	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
新規追加		0	0	2	5	2	1	1	0	0	11

（５）第５次レッドリスト（両生類）から明らかになった点

第５次レッドリストにおいて、絶滅危惧Ⅰ類（CR,EN）および絶滅危惧Ⅱ類（VU）を含む絶滅危惧種として掲載された両生類の種数は、前回の RL2020 の 47 種から 60 種に増加した。第５次レッドリストには、新たにゲイヨサンショウウオ、イズモサンショウウオ、タゴサンショウウオ、オキナワシリケンイモリ、ヒメタゴガエル、ムカシツチガエルなど 11 種が追加された。前回準絶滅危惧（NT）と評価された種のうち、イシヅチサンショウウオ、ツシマサンショウウオ、チョウセンヤマアカガエル、リュウキュウアカガエルは、絶滅危険度が大きいと評価され絶滅危惧種と位置付けられた。さらに、これまで絶滅危惧とされていた種でも、イヨシマサンショウウオ、トウキョウサンショウウオ、ヤマグチサンショウウオ、サドガエルなど６種は、絶滅危惧のカテゴリーがさらに高まった。一方で、ミヤコヒキガエルは、現時点での絶滅危険度は小さいという理由でレッドリスト不掲載となった。

両生類におけるレッドリスト掲載種数の増加やより高いカテゴリーへの変更の要因は、特に二次的自然環境に生息する種を中心に生息環境の劣化や消失が続いていることが挙げられている。また、分類変更によって種が分割され、それらの絶滅危険度が大きいと評価されたこともある。

第５次レッドリスト（両生類）

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
AM0001	絶滅危惧IA 類（CR）	アマクササンショウウオ	*Hynobius amakusaensis*
AM0002	絶滅危惧IA 類（CR）	ゲイヨサンショウウオ	*Hynobius geiyoensis*
AM0003	絶滅危惧IA 類（CR）	ミカワサンショウウオ	*Hynobius mikawaensis*
AM0004	絶滅危惧IA 類（CR）	ナンヨサンショウウオ	*Hynobius oni*
AM0005	絶滅危惧IA 類（CR）	トサシミズサンショウウオ	*Hynobius tosashimizuensis*
AM0006	絶滅危惧IA 類（CR）	ツクバハコネサンショウウオ	*Onychodactylus tsukubaensis*
AM0007	絶滅危惧IA 類（CR）	サドガエル	*Glandirana susurra*
AM0008	絶滅危惧IB 類（EN）	アベサンショウウオ	*Hynobius abei*
AM0009	絶滅危惧IB 類（EN）	アブサンショウウオ	*Hynobius abuensis*
AM0010	絶滅危惧IB 類（EN）	アキサンショウウオ	*Hynobius akiensis*
AM0011	絶滅危惧IB 類（EN）	ヤマグチサンショウウオ	*Hynobius bakan*
AM0012	絶滅危惧IB 類（EN）	ハクバサンショウウオ	*Hynobius hidamontanus*
AM0013	絶滅危惧IB 類（EN）	イワミサンショウウオ	*Hynobius iwami*
AM0014	絶滅危惧IB 類（EN）	アカイシサンショウウオ	*Hynobius katoi*
AM0015	絶滅危惧IB 類（EN）	イヨシマサンショウウオ	*Hynobius kuishiensis*
AM0016	絶滅危惧IB 類（EN）	イズモサンショウウオ	*Hynobius kunibiki*
AM0017	絶滅危惧IB 類（EN）	ブチサンショウウオ	*Hynobius naevius*
AM0018	絶滅危惧IB 類（EN）	オオスミサンショウウオ	*Hynobius osumiensis*
AM0019	絶滅危惧IB 類（EN）	イワキサンショウウオ	*Hynobius sengokui*
AM0020	絶滅危惧IB 類（EN）	サンインサンショウウオ	*Hynobius setoi*
AM0021	絶滅危惧IB 類（EN）	ソボサンショウウオ	*Hynobius shinichisatoi*
AM0022	絶滅危惧IB 類（EN）	ヒロシマサンショウウオ	*Hynobius sumidai*
AM0023	絶滅危惧IB 類（EN）	タゴサンショウウオ	*Hynobius tagoi*
AM0024	絶滅危惧IB 類（EN）	ホクリクサンショウウオ	*Hynobius takedai*
AM0025	絶滅危惧IB 類（EN）	トウキョウサンショウウオ	*Hynobius tokyoensis*
AM0026	絶滅危惧IB 類（EN）	ツシマサンショウウオ	*Hynobius tsuensis*
AM0027	絶滅危惧IB 類（EN）	ツルギサンショウウオ	*Hynobius tsurugiensis*
AM0028	絶滅危惧IB 類（EN）	ヒバサンショウウオ	*Hynobius utsunomiyaorum*
AM0029	絶滅危惧IB 類（EN）	キタサンショウウオ	*Salamandrella keyserlingii*
AM0030	絶滅危惧IB 類（EN）	オキナワシリケンイモリ	*Cynops ensicauda popei*
AM0031	絶滅危惧IB 類（EN）	オキナワイボイモリ	*Echinotriton andersoni*
AM0032	絶滅危惧IB 類（EN）	ホルストガエル	*Babina holsti*
AM0033	絶滅危惧IB 類（EN）	オキナワイシカワガエル	*Odorrana ishikawae*
AM0034	絶滅危惧IB 類（EN）	アマミイシカワガエル	*Odorrana splendida*

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
AM0035	絶滅危惧IB 類（EN）	コガタハナサキガエル	*Odorrana utsunomiyaorum*
AM0036	絶滅危惧IB 類（EN）	ナゴヤダルマガエル	*Pelophylax porosus brevipodus*
AM0037	絶滅危惧IB 類（EN）	チョウセンヤマアカガエル	*Rana uenoi*
AM0038	絶滅危惧IB 類（EN）	ナミエガエル	*Limnonectes namiyei*
AM0039	絶滅危惧II類（VU）	オオダイガハラサンショウウオ	*Hynobius boulengeri*
AM0040	絶滅危惧II類（VU）	オオイタサンショウウオ	*Hynobius dunni*
AM0041	絶滅危惧II類（VU）	ヒガシヒダサンショウウオ	*Hynobius fossigenus*
AM0042	絶滅危惧II類（VU）	マホロバサンショウウオ	*Hynobius guttatus*
AM0043	絶滅危惧II類（VU）	イシヅチサンショウウオ	*Hynobius hirosei*
AM0044	絶滅危惧II類（VU）	ベッコウサンショウウオ	*Hynobius ikioi*
AM0045	絶滅危惧II類（VU）	カスミサンショウウオ	*Hynobius nebulosus*
AM0046	絶滅危惧II類（VU）	オキサンショウウオ	*Hynobius okiensis*
AM0047	絶滅危惧II類（VU）	チクシブチサンショウウオ	*Hynobius oyamai*
AM0048	絶滅危惧II類（VU）	チュウゴクブチサンショウウオ	*Hynobius sematonotos*
AM0049	絶滅危惧II類（VU）	セトウチサンショウウオ	*Hynobius setouchi*
AM0050	絶滅危惧II類（VU）	コガタブチサンショウウオ	*Hynobius stejnegeri*
AM0051	絶滅危惧II類（VU）	ヤマトサンショウウオ	*Hynobius vandenburghi*
AM0052	絶滅危惧II類（VU）	シコクハコネサンショウウオ	*Onychodactylus kinneburi*
AM0053	絶滅危惧II類（VU）	ホムラハコネサンショウウオ	*Onychodactylus pyrrhonotus*
AM0054	絶滅危惧II類（VU）	オオサンショウウオ	*Andrias japonicus*
AM0055	絶滅危惧II類（VU）	アマミイボイモリ	*Echinotriton raffaellii*
AM0056	絶滅危惧II類（VU）	オットンガエル	*Babina subaspera*
AM0057	絶滅危惧II類（VU）	ヤエヤマハラブチガエル	*Nidirana okinavana*
AM0058	絶滅危惧II類（VU）	アマミハナサキガエル	*Odorrana amamiensis*
AM0059	絶滅危惧II類（VU）	ハナサキガエル	*Odorrana narina*
AM0060	絶滅危惧II類（VU）	リュウキュウアカガエル	*Rana ulma*
AM0061	準絶滅危惧（NT）	ヒダサンショウウオ	*Hynobius kimurae*
AM0062	準絶滅危惧（NT）	トウホクサンショウウオ	*Hynobius lichenatus*
AM0063	準絶滅危惧（NT）	クロサンショウウオ	*Hynobius nigrescens*
AM0064	準絶滅危惧（NT）	タダミハコネサンショウウオ	*Onychodactylus fuscus*
AM0065	準絶滅危惧（NT）	バンダイハコネサンショウウオ	*Onychodactylus intermedius*
AM0066	準絶滅危惧（NT）	アマミシリケンイモリ	*Cynops ensicauda ensicauda*
AM0067	準絶滅危惧（NT）	アカハライモリ	*Cynops pyrrhogaster*
AM0068	準絶滅危惧（NT）	ムカシツチガエル	*Glandirana reliquia*

掲載 No.	レッドリストカテゴリー	和名	学名
AM0069	準絶滅危惧（NT）	オオハナサキガエル	*Odorrana supranarina*
AM0070	準絶滅危惧（NT）	トノサマガエル	*Pelophylax nigromaculatus*
AM0071	準絶滅危惧（NT）	トウキョウダルマガエル	*Pelophylax porosus porosus*
AM0072	準絶滅危惧（NT）	アマミアカガエル	*Rana kobai*
AM0073	準絶滅危惧（NT）	オキタゴガエル	*Rana okiensis*
AM0074	準絶滅危惧（NT）	ツシマアカガエル	*Rana tsushimensis*
AM0075	準絶滅危惧（NT）	ヤクシマタゴガエル	*Rana yakushimensis*
AM0076	情報不足（DD）	エゾサンショウウオ	*Hynobius retardatus*
AM0077	情報不足（DD）	ヒメタゴガエル	*Rana kyoto*

第５次レッドデータブック（爬虫類・両生類）の掲載内容

本書では、上記のレッドリストに掲載された種の概要を示すため、種ごとに以下の項目と内容を記載した。

（１）判定対象種情報

１）評価分科会名

判定対象種を評価した分科会名を記載した。

２）高次分類群名

目名、科名を記載した。

３）和名

標準和名を記載した。

４）学名等

学名、記載者名を記載した。

５）日本における固有性

日本にのみ生息すると考えられる場合、「日本固有」と記載した。

（２）カテゴリー判定結果

１）カテゴリー区分

カテゴリーの記号と、名称として、「EX（絶滅）」、「EW（野生絶滅）」、「CR（絶滅危惧IA 類）」、「EN（絶滅危惧IB 類）」、「VU（絶滅危惧II類）」、「NT（準絶滅危惧）」、「DD（情報不足）」の、いずれかの区分を記載した。

２）カテゴリー判定基準

「レッドリスト作成の手引き」で定められた環境省レッドリストにおけるカテゴリー判定基準に基づき、各掲載種が具体的にどの判定基準によって評価されたのかを明示するとともに、その判断理由を記載した。

（３）概要

種の基礎的情報、我が国における現在の生息状況、存在を脅かす要因、保護対策の現状等、特にその種が現在おかれている状況を要約して記載した。

（４）協力者

レッドデータブックの執筆に際して、情報提供等の協力者がいる場合は、氏名、所属等を記載した。

（５）基礎情報

１）形態

その種の大きさや色など、基本的事項を簡潔に記載した。近縁種がある場合はその識別点も含めた。

２）生活史

出現期や生息環境選択性、生息に必要な条件などについて判明している事項を記載した。

３）生息環境

対象種の一般的な生息環境について簡潔に記載した。ただし、生息環境の現状や悪化状況などに関しては、本項目ではなく「生息地の現況」に記載した。また別表１の「生息・生育環境区分」に該当するカテゴリー及び別表２の「国土地域区分」の該当するカテゴリーを記載した。

４）分布域

個体群が縮小する以前の健全と考えられる時代の分布域を、分かる範囲で記載した。近縁種がある場合は分布域の違いを記述した。

また、島嶼群の名称は原則として自然環境保全基礎調査報告書の分布図に示されている表記を使用し、南西諸島地域では、大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島、尖閣諸島、大東諸島、等とした。琉球列島は、奄美・沖縄・宮古・八重山の各諸島を含むものとした。

（６）掲載種の基礎情報

１）分布域の現況

基本的に国内の分布域について現在の状況を記載した。産地数、過去と比べた現在の分布域の縮小の変遷、具体的な面積や分布域の分断状況等、詳細が分かる場合は、その内容も記載した。なお、現況が分からない場合は不明とした。

２）生息地の現況

基本的に国内の生息地について現在の状況を記載した。産地数、過去と比べた現在の生息範囲の縮小の変遷等、詳細が分かる場合は、その内容も記載した。なお、現況が分からない場合は不明とした。

３）個体数の現況

基本的に国内の個体数について現在の状況が分かる場合に記載した。なお、現況が分からない場合は不明とした。

（７）存続を脅かす要因

対象種の存続を脅かしていると考えられる要因について記載した。また、別表３の「存続を脅かす要因のタイプ区分」から該当するタイプ区分を過去（2000 年以前）と現在（2000 年以降）で分けて該当するカテゴリーを記載した。

（８）絶滅に至った経緯とその要因

絶滅と判定された種については、対象種が最後まで分布していた地域、絶滅に至るまでの個体数や分布域の推移、絶滅に至った要因（原因）等をまとめて記載した。

絶滅の要因が分かっている場合は、別表３の「存続を脅かす要因のタイプ区分」から該当するカテゴリーを記載した。

（９）特記事項

特筆すべき学術的重要性や、保護の意義、必要性、具体策等について記載した。また、前回の見直し以降、あるいはレッドリスト公表後に、学名又は和名の変更等につながる分類群の変更（新たな分類体

系による科や属等の分類群間の移動、種・亜種の統合・分離等）があった種については、必要に応じて、この項目にその旨を記載した。

（10）旧レッドリストカテゴリーと掲載名

過去のレッドリストからのカテゴリー及び学名並びに和名の変更の経過を、公表年次とともに記載した。分類変更によって種の分割が行われた場合、分けられた種や亜種については、基本的にその経過を記載しなかった。

（11）都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況

2025 年 3 月時点における 47 都道府県のレッドリスト・レッドデータブックに掲載されているカテゴリーについて記載した。なお、公表時期の違い等によって各都道府県のレッドリストと第５次レッドリストの分類体系が異なる場合があるが、掲載されている種名が同じものについてはこの項目に記載した。一方、異なるものについては基本的に記載しなかった。

（12）保護に係る法令指定状況

2026 年 3 月時点における、種の保存法に基づく国内希少野生動植物への指定状況、保護増殖事業計画策定状況、国指定天然記念物への指定状況、鳥獣保護管理法における対象の有無、都道府県の希少野生生物の保護に関する条例の指定状況について記載した。各法令で対象種の分類体系が異なる場合があるため注意が必要。なお、都道府県や市町村の天然記念物指定など、他の法令によって保護されている場合もあるが、この項目には記載されていないことに注意が必要。

（13）参考文献

原則として、カテゴリー判定の根拠になった文献（最近の分布や生息地の状況、推移等がわかるもの）を中心に本書を活用する方に役立つと考えられる文献名を掲載した。また、分類について様々な意見のある種や未記載種であっても種・亜種レベルで評価されているものは、学名並びに和名表記の根拠、及び別種とされている根拠となる文献を挙げた。

（14）アセスメントサマリー

カテゴリー判定結果、存続を脅かす要因、生息環境区分及び保護に係る法令指定状況について定型の英文を記載した。

（15）解説執筆者

レッドデータブックの執筆者の氏名、所属等を記載した。

別表１　第５次レッドリスト生息・生育環境区分

大区分	中区分	小区分	細区分
陸域	山地・丘陵地	高標高地（約 2500m 以上；高山帯に相当※1）	裸地
			森林
			草地
			田地・畑地
			耕作放棄地
			農業用水路
			湿地・湿原・細流
		中標高地（約 500–2500m まで；亜高山帯・山地帯に相当※1）	砂地・風衝地
			岩壁・ガレ場（石灰岩地等）
			洞窟・地下浅層・地下水域
		低標高地（約 500m 以下；低地帯・丘陵帯に相当※1）	河川源流域
			河川上流域
			河川中流域
			ため池・池沼
			湖・ダム湖
		その他（自由記入）	その他（自由記入）
	台地・平野・盆地・海岸	平地部	裸地
			森林
			草地
			田地・畑地
			耕作放棄地
			湿地・湿原
			住宅地
			商業・工業施設
			市街緑地
			砂地・礫地
		海岸部	河川中流域
			河川下流域
			河口域
			ワンド
			農業用水路
			小河川
			ため池・池沼
			潟・湖・ダム湖
			地下水域
			井戸
		その他（自由記入）	洞窟・地下浅層

大区分	中区分	小区分	細区分
			砂浜・礫浜
			海崖・岩浜・岩礁(磯)
			汽水域
			塩沼地・塩性湿地・河口干潟 (マングローブ湿地を含む)
			潟・汽水湖
			陸封潮溜まり (アンキアライン池・洞窟)
			その他(自由記入)
海域	沿岸※2	潮間帯 表層 (低潮線から水深 200m まで) 中深層以深 (水深 200m 以深) その他 (自由記入)	海面
			漂泳界(水柱環境)
			岩礁(磯)
			藻場
			アマモ場
			サンゴ礁
			干潟
			砂底・礫底
			泥底
			洞窟
			その他(自由記入)
	外洋※3	表層 (水深 200m まで) 中深層以深 (水深 200m 以深) その他 (自由記入)	海面
			漂泳界(水柱環境)
			岩底
			砂底・礫底
			泥底
			洞窟
			熱水噴出孔
			冷水湧出帯
			その他(自由記入)

※１：高度帯の区分は、高地植物学（柴田,1985）における区分に基づく。

※２：ここでは海岸線から接続水域まで（0km～約 44km(24 海里)）

※３：ここでは接続水域から排他的経済水域（EEZ）まで（約 45km～約 370km（200 海里））

別表２　「国土の特性に応じたグランドデザイン」における 7 つの地域区分（生物多様性国家戦略 2012－2020 より抜粋）

①奥山自然地域……相対的に自然性の高い地域
②里地里山・田園地域（人工林が優占する地域を含む）
……①と③の間に位置する地域
③都市地域……人間活動が集中する地域
④河川・湿地地域……各地域を結びつける生態系ネットワークの基軸となる水系
⑤沿岸域……海岸線を挟む陸域及び海域
⑥海洋域……沿岸域を取り巻く広大な海域
⑦島嶼地域……沿岸域・海洋域にある島々

別表３　存続を脅かす要因のタイプ区分

	新No	第 5 次 RL	要因の適用範囲に係る説明
A 開発	A01	森林伐採	自然林や二次林を含む伐採による森林の減少や消失に起因する場合に適用する。 樹洞の減少等の森林面積の減少を伴わないような要因を広義に含む。
	A02	湖沼開発	湖沼、ため池等の開発行為に起因する場合に適用する。 水域の消失だけでなく護岸整備や取水施設の設置等の開発行為に係る要因を広義に含む。
	A03	河川開発	全ての河川種別（一級、二級、準用、普通）における開発行為に起因する場合に適用する。 護岸整備、河床の掘削や整備、河道の付け替え等を含む。ダムをはじめとした河川工作物の建設に起因する場合は「ダム・河川工作物建設」の区分に含める。
	A04	海岸開発	海岸や砂浜域の開発行為に起因する場合に適用する。 海岸の埋め立てや護岸整備、港湾整備等に関する要因も広義に含む。
	A05	海砂採取	沿岸域における砂礫の採取に起因する場合に適用する。 周辺での海砂採取に伴う砂浜域の後退等の直接的に確認される要因を広義に含む。
	A06	湿地開発	湿地の開発行為に起因する場合に適用する。 湿地の埋め立てや周辺の湿地を維持するための水源の開発等も広義に含む。
	A07	圃場整備	水田、畑地等の農地整備に起因する場合に適用する。 圃場整備に伴う田面の乾田化や水路、畦の消失及びコンクリート化等の整備による要因を含む。
	A08	草地開発	草地として維持されている環境の開発に起因する場合に適用する。 開発行為に関係するものを広義に含む。
	A09	石灰採掘	石灰の採掘に起因する場合に適用する。 石灰採掘に関わる人為的な影響に関するものを広義に含む。
	A10	洞窟の消失や環境悪化	人為的影響による洞窟の消失、もしくは環境悪化に起因する場合に適用する。 開発行為をはじめレジャー等による環境悪化も含む。
B 建設	B01	ゴルフ場	ゴルフ場の開発に起因する場合に適用する。
	B02	スキー場	スキー場の開発に起因する場合に適用する。
	B03	土地造成	場所を問わず特に土地造成の影響に起因する場合に適用する。 宅地化、リゾート開発等の土地の造成に伴うものを広義に含む。
	B04	交通インフラ建設	道路工事や鉄道工事等の交通インフラの建設の影響に起因するものを広義に含んで適用する。 側溝への転落や生息場所の分断化、交通インフラ建設に起因する弊害も含む。自動車や鉄道等による交通事故は含まない。
	B05	ダム・河川工作物建設	ダム建設をはじめ、砂防ダム、堰堤、樋門、頭取工等の河川工作物による影響に起因する場合に適用する。
	B06	発電施設建設	太陽光や風力等の発電施設の建設の影響に起因するものを広義に含んで適用する。 発電施設のみではなく、それらに関係する送電設備建設等の影響に起因するものも広義に含む。
C 環境汚染	C01	水質汚濁	河川、水路、ため池等の水域における水質汚濁に起因する場合に適用する。 状況や物質を問わず汚濁が原因と特定可能な全ての要因を含む。
	C02	水温変化	河川、水路、ため池等の水域における水温変化に起因する場合に適用する。 水温変化が原因と特定可能な場合のみ使用する。
	C03	農薬汚染/化学物質汚染	農地（水田、畑、果樹園等）及びその周辺域（水路、畦等）における農薬汚染に起因する場合に適用する。 水質汚濁の場合でも特に農薬汚染と特定できる場合はこちらを選択する。
	C04	感染症/病原菌	病原体に起因するもの。感染症に関わるものを広義に含む。
	C05	大気汚染	大気汚染に起因するもの。大気汚染が原因であると特定できる場合のみ適用する。
D 捕獲・採取	D01	捕獲・狩猟/園芸採取	人による捕獲・採取行為に起因する場合に適用する。 狩猟、ペット業者による商業的採集、園芸採取、研究者による採集等に関係する要因を広義に含む。
	D02	食用・薬用採取	食用や薬用採取に起因する場合に適用する。 食用や薬用を目的の採取に関わる要因を広義に含む。
	D03	違法採集	人による捕獲・採取行為に起因する場合のうち、違法性が疑われる場合に適用する。 D01, D02 を選択した場合で、違法なものを含む場合は、本項目もチェックする。
	D04	混獲・錯誤捕獲	他種の捕獲・採取に付随した非意図的な捕獲・採取に起因する場合に適用する。 その他、混獲・錯誤捕獲に関係する要因を広義に含む。

	新No	第 5 次 RL	要因の適用範囲に係る説明
E 生物間相互作用	E01a	シカ食害	シカによる食害に起因する場合に適用する。食害に起因して生じた間接的な影響についても広義に含む。
	E01b	その他動物食害	シカ以外の動物による食害に起因する場合に適用する。 食害に起因して生じた間接的な影響についても広義に含む。
	E02a	捕食（外来種による）	外来種による捕食に起因するものに適用する。 国内外来種を含めた、人為的な移動に起因して侵入した生物による捕食の影響に関するもの。
	E02b	捕食（在来種による）	在来種による捕食に起因するものに適用する。 環境の変化等に伴う生態系のバランスの変化等で、自然分布域において在来種による捕食の影響が増大した場合等が該当する。
	E03a	競争/競合（外来種による）	外来種との競争に起因するものに適用する。国内外来種を含めた、人為的な移動に起因して侵入した生物との競争による影響が該当する。
	E03b	競争/競合（在来種による）	在来種による競争に起因するものに適用する。環境の変化等に伴う生態系のバランスの変化等で、在来種との競争の影響が増大した場合等が該当する。
	E04a	交雑（外来種による）	外来種との交雑に起因するものに適用する。国内外来種を含めた、人為的な移動に起因して侵入した生物との交雑による影響に関するもの。
	E04b	交雑（在来種による）	在来種との交雑に起因するものに適用する。環境の変化等に伴う生態系のバランスの変化等で、在来種との交雑が生じるようになった場合等が該当する。
	E05	宿主の減少	寄生・共生性の生物において、宿主である生物の減少に起因している場合に適用する。 なお、宿主の存続を脅かす要因がわかる場合には、併せて宿主の要因も選択する。
F その他人為的要因	F01	人の踏みつけ	人による踏みつけ行為に起因するものに適用する。 場所や意図等は問わず、踏みつけに起因するものを広義に含む。
	F02	交通事故	自動車、鉄道等の轢死による直接的な事故のみに適用する。道路工事やトンネル建設等よる間接的な影響は、「交通インフラ建設」に含める。
	F03	人工構造物への衝突	風力発電施設の風車ブレード等への生物の衝突に起因する場合に適用する。 その他、送電線、鉄塔等の人工構造物への衝突に係るものを広義に含む。
	F04	光害	水銀灯等の照明器具の設置方法や配光によって、生物の行動パターン等に変化を与えていることに起因する場合に適用する。光害に関係する間接的な要因も広義に含む。
	F05	管理放棄	人為的な管理により維持されていた二次的自然の管理放棄に起因するもの。草地の遷移、ため池の湿地化、水田の放棄等に起因するものを広義に含む。
G 環境変化	G01	遷移進行・植生変化/自然遷移	河原、草地、森林、湿地等の場所は問わず、遷移進行、植生変化、自然遷移に起因する場合に適用する。
	G02	基質・基物の減少及び消失	対象生物の生息・生育に必要な基質・基物となる生物・無機物の減少や消失に起因する場合に適用する。 なお、基質・基物が生物であり、その生物種の存続を脅かす要因が分かる場合には、併せてその要因を選択する。
	G03	自然災害	集中豪雨による土砂崩れや洪水、地震、津波、火山噴火等のあらゆる自然災害に起因する場合に適用する。
	G04	気候変動	気温や水温の上昇、頻繁な異常気象等の気候変動が原因の可能性が高いと判断される自然現象に起因する場合に適用する。適用に際しては、存続を脅かす要因となる現象の長期的な動向を考慮した上で気候変動の影響か否かを判断する。
Z その他/不明	Z01	分布・産地局限	地史的に生息・生育地が局限しており、環境改変や自然災害等で容易に絶滅する危険を有する場合に適用する。
	Z02	近交弱勢	生息・生息地の局限や個体数の急減等による、近親交配、遺伝的多様性の低下に起因する場合に適用する。
	Z03	その他（自由記入）	上記のいずれにも当てはまらない場合に適用する項目。基本的には上記のいずれかの項目を広義に解釈して当てはめることが望ましい。選択する場合には、具体的な要因の名称を自由記入欄に記述する。なお、第 5 次レッドリストにおいて全分類群の結果を集計した際に、同じ名称の要因が複数確認された場合には、今後の追加を検討する予定である。
	Z04	不明	存続を脅かす要因が明確ではない場合に適用する。 原因が明確ではないもの、不明なものはこの項目を選択する。

第５次レッドデータブック（爬虫類）各種の解説

カメ目 Testudines　ウミガメ科 Cheloniidae

タイマイ

***Eretmochelys imbricata* (Linnaeus, 1766)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　D				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　CR	基準 E:　－
D．成熟個体数が 50 未満であると推定される個体群である。 【推定根拠】 主要な産卵地である沖縄島、石垣島、黒島などの産卵数データから、近年日本で産卵する成熟メスは合計 20 個体未満程度と考えられる。成熟個体の性比を 1:1 と仮定すると、合計で成熟個体は 50 個体未満であると推定される。				
評価分科会：　爬虫類・両生類分科会				

概要

本種は、日本国内では南西諸島の奄美大島以南でわずかに産卵している。奄美大島以南のサンゴ礁海域は、餌となるカイメンが豊富に生育するために重要な餌場となっている。これらのサンゴ礁は開発によって減少しており、本種の生息適地もそれとともに減少すると予想される。また、産卵する砂浜も開発や護岸工事などに起因する侵食によって減少している。

基礎情報

【形態】

背甲の肋甲板や椎甲板には黒褐色から黄色の色彩でモザイク状の模様がある。四肢や頭部の背面は黒褐色の鱗板で被われ、黄色で縁どられていて美しい。腹面は黄色。肋甲板や椎甲板は後ろにせり出すように成長し、瓦状に重なっている。縁甲板も同様に成長するので、背甲の縁は鋸歯状になっている。腹面はウミガメ科の他種に比べ、くぼんでおり、やや痩せた印象を受ける。吻端はとがっており、頸部も長く、サンゴ礁の隙間に頭を突っ込み餌のカイメンなどを摂食するのに適応している。前額板は 4 枚。下顎に水平方向に長い大きな 1 枚の鱗板があることが他種にはない特徴である。

【生活史】

本種の生活史については全く明らかにされていない。幼体はサンゴ礁海域の砂浜でふ化した後に海洋に分散するが、その後は、甲長が 30 cm 程になりサンゴ礁に定着するまでほとんど発見されていない。サンゴ礁の浅海域に定着すると、サンゴ礁の隙間や礫の下に固着して生活するカイメン類を摂食して成長する。その成長速度は餌生物の密度に大きく依存すると考えられているが、成熟する年齢も分かってない。

【生息環境】

本種が餌とするのは、サンゴ礁に生息する特定のカイメンである。それらの分布域は調べられていないが、奄美大島付近までは恒常的に分布すると考えられる。とくに、沖縄島以南の南西諸島は西部太平洋でも密度が高く、世界的に見ても重要な摂餌海域と考えられる。産卵は奄美大島以南の外洋に面した砂浜で行われるが、本種はとくに陸域に深く入り込み、植生帯の中で産卵することも多い。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】砂浜・礫浜 【海域（沿岸）_潮間帯 表層】海面，漂泳界（水柱環境） 【海域（外洋）_表層】海面，漂泳界（水柱環境）
国土地域区分：	(5）沿岸域，(6）海洋域，(7）島嶼地域

【分布域】

インド～太平洋、大西洋のサンゴ礁海域に分布する。産卵地もサンゴ礁海域の島嶼部に存在するが、ウミガメ科の他の種のように、集中して産卵する砂浜をもたず、広い範囲の海域で、離散的に産卵する。日本では奄美大島以南の南西諸島でわずかに産卵する。南西諸島のサンゴ礁の発達した海域には、甲長が 30～50 cm の幼体が多く見られ、西部太平洋の重要な生育海域と考えられる。まれに、九州、四国、本州で発見されることがあるが、南から迷入してきた個体で、本来の分布ではないと考えられる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

本種の本来の分布域である奄美諸島以南のサンゴ礁海域は、内湾を中心にイシサンゴ類

が生息しにくい環境に変化しており、それとともにタイマイが生育できる健全なサンゴ礁は減少していると考えられる。また、本種が産卵する、あるいは産卵する可能性が高い同海域の外洋に面した砂浜は、開発による破壊が著しく、産卵が不可能になった砂浜も少なくない。奄美諸島での産卵は 1974 年以来確認されていなかったが、産卵しているというかなり確かな情報もある。

【生息地の現況】

奄美大島以南の南西諸島に残された砂浜でわずかに産卵するが、それらの砂浜でも産卵環境の悪化は急速に進んでいる。とくに八重山諸島に属する黒島の西の浜など多くの砂浜で砂の流出、すなわち砂浜の侵食が続いている。また、護岸工事によって、産卵に好適な場所が失われている。本種の餌場となるサンゴ礁も、陸域の土木工事等によって流れ込む赤土などにより急速に失われている。

【個体数の現況】

本種の個体数の増減を論じる資料はない。しかしながら、1995 年以降、10～20 回の産卵が毎年確認されており、その数に変動はない。種の保存法などで、タイマイの鱗板や剥製の流通に規制が行われた結果、捕獲されるタイマイは急速に減少している。

存続を脅かす要因

本種は南西諸島の沿岸で行われる刺し網漁で混獲され、溺死することが多いと考えられる。また、南西諸島の産卵地の砂浜は、さまざまな理由による砂の消失で、産卵地としての機能を失いつつあるところも少なくない。陸域の土木工事等による赤土流出や気候変動などにより、本種の餌場となるサンゴ礁が急速に失われている。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，混獲・錯誤捕獲
	（現在）	海岸開発，混獲・錯誤捕獲，気候変動

特記事項

剥製やべっ甲を目的とした採取は行われていない。国立・国定公園の指定動物に指定されている（西表石垣国立公園、慶良間諸島国立公園）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	タイマイ	*Eretmochelys imbricata*	EN
第４次 2019：	タイマイ	*Eretmochelys imbricata*	EN
第４次 2018：	タイマイ	*Eretmochelys imbricata*	EN
第４次 2017：	タイマイ	*Eretmochelys imbricata*	EN
第４次 2015：	タイマイ	*Eretmochelys imbricata*	EN
第４次：	タイマイ	*Eretmochelys imbricata*	EN

第３次:	タイマイ	*Eretmochelys imbricata*	EN
第２次:	タイマイ	*Eretmochelys imbricata*	EN
第１次:	タイマイ	*Eretmochelys imbricata*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（伊豆諸島）】情報不足(DD),【東京都（小笠原諸島）】情報不足(DD),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類,【沖縄県】絶滅危惧ⅠB類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 亀崎直樹，1994．タイマイ．水産資源保護協会（編），日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（I）．pp. 479-491，水産資源保護協会，東京.
- 亀崎直樹，2021．タイマイ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 89-90，サンライズ出版，彦根.
- Kamezaki, N. and K. Hirate, 1992. Size composition and migratory cases of hawksbill turtles, *Eretmochelys imbricata*, inhabiting the waters of the Yaeyama Islands, Ryukyu Archipelago. Jpn. J. Herpetol., 14: 166–169.
- 亀崎直樹・服部正策・鈴木博，2001．奄美諸島・加計呂間島におけるタイマイ繁殖の初記録．爬虫両棲類学会報，2001 (1): 16-17.
- 環境省自然環境局生物多様性センター，2025．2024 年度モニタリングサイト 1000 ウミガメ類調査報告書．環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田．23pp.
- Kawazu, I., K. Komesu, M. Kayou, T. Inoue, M. Kino, K. Maeda, and S. Fukada. 2021. Nesting and reproductive ecology of the hawksbill turtle, *Eretmochelys imbricata* (Reptilia: Cheloniidae), on Okinawajima Island, Japan. Biol. Mag. Okinawa, 59：45－50.
- Okuyama, J., H. Ishii, S. Tanizaki, T. Suzuki, O. Abe, H. Nishizawa, A. Yano, M. Tsujimura, T. Ishigaki, T. Ishigaki, M. Kobayashi, and H. Yanagida. 2020. Quarter-century（1993-2018）nesting trends in the peripheral populations of three sea turtle species at Ishigakijima Island, Japan. Chelonian Conserv. Biol., 19, 101-110.
- 上野真太郎・岡本 慶・石原 孝・亀崎直樹，2025．日本におけるウミガメ類の分布．爬虫両棲類学会報，2025(2): 127-144.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Eretmochelys imbricata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Eretmochelys imbricata* is listed as CR under criteria D. D. Population size estimated to number fewer than 50 mature individuals.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sandy beach/Pebble beach 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】Sea surface, Pelagic water (water column environment) 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface, Pelagic water (water column environment)
Threat types:	Coastal development, Bycatch, Climate change
Law designation status for conservation	—



執筆者:	亀崎直樹（岡山理科大学）
Author:	Naoki Kamezaki

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　トカゲモドキ科 Eublepharidae　　日本固有

マダラトカゲモドキ

***Goniurosaurus orientalis* (Maki, 1930)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　CR	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。

【地点数】1 地点

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

林道の敷設により生息地周辺へのアクセスがよくなり、轢死のリスクが高まっている。また、本グループの分類が見直されたことにより本種に対する注目度が上がったため、違法採集のリスクも増大している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

渡名喜島の固有種で、おもに常緑広葉樹林に覆われた地域とその周辺に見られる。生息範囲が極めて小さいうえ、集団構造も単調と予想されることから、開発や違法採集などの人為的な行為のみならず、新たな外来種の侵入や感染症の蔓延、山火事や土砂崩れなどによっても種全体が危険な水準に陥る可能性がある。

協力者:　栗田隆気（千葉県立中央博物館）・一般財団法人自然環境研究センター

基礎情報

【形態】

頭胴長はオスで最大 94 mm に達し、メスでは 100 mm を超える。胴背面に横帯と縦条成分を併せ持ち、その色が黄土色で赤味を帯びないこと、横帯の間に淡色の小班がみられること、虹彩はやや赤味を帯びつつも、クメトカゲモドキを除く琉球産の他のトカゲモドキ類ほど赤みが強くないことなどで特徴付けられる。沖縄諸島の渡名喜島に固有分布する。

【生活史】

生態や生活史はクロイワトカゲモドキに似ると考えられるが、具体的な情報はほとんどない。

【生息環境】

常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林、およびその周辺の石灰岩地などに生息する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

過去の生息状況についてはほとんど情報がなく、不明である。渡名喜村史によると、同島では農地確保のため明治時代に山に火を入れて、森林の多くが消失している。さらに、戦後も山の斜面は畑として利用されていたと記されており、本種の生息地は限られていた可能性が高い。より新しい時代では、1972 年と 1981 年にトカゲモドキを含む小動物の調査が行われているが、それらの調査では本種は発見されていない。その後、1998 年に島の南西部で複数個体が確認され、さらに島民からも発見の情報があった。これまで集落より北側の地域からは見つかっていない。1998 年以降の記録は、林道や道路の整備によって、本種の生息環境へのアクセスがよくなったことを反映している可能性がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

沖縄諸島の渡名喜島に分布する。渡名喜島は面積が全体でも 3.46 km^2に過ぎない。最近の調査では同島の集落よりも北側の地域からは個体は見つかっておらず、これまで個体が確認されている地点をもとに、環境や森林の連続性なども加味して本種の潜在的な生息地面積を考えた時、それはどんなに広く見積もっても 2.1 km^2を越えない。地勢や植生、発見地点などの情報から、少なくとも現在は、種全体が単一の集団として存続している可能性が高い。

【生息地の現況】

1980 年代には生息地内を横断する林道が整備され、周辺域でも環境が改変された場所があり、関係する地点で生息環境の悪化ないしは部分的な消失があったと思われる。その後

は特に大きな環境改変があったとは考え難いが、生息地周辺へのアクセスが良くなったことから轢死と違法採集のリスクが増大した。

【個体数の現況】

環境改変により、個体数は減少傾向にあったと考えられる。最近の調査では 10 を超える地点で個体が見つかっているが、その範囲は広くない。資料が不足していて、個体数やその減少率を具体的に推定するのは難しいが、そもそも生息地面積がとても狭いため、生息個体数が多くないのは間違いない。個体の記録地点は全て同じ森林内に点在していることから、全てが単一の個体群に属している可能性が高い。

存続を脅かす要因

現在、大きな環境改変はみられないが、生息地面積が極端に狭く、おそらくは種全体が一つの個体群として成り立っていることから、今後仮に、山火事や台風、土砂崩れなどの災害による偶発的かつ一時的な環境の劣化などが生じた場合は種全体の生息数が危険な水準まで一気に減少する可能性がある。交通事故による個体の減耗が懸念されるうえ、潜在的には、愛玩動物としての取引を目的とした個体の違法採集のリスクも高い。イエネコによる捕食も懸念される。

要因の区分：	（過去）	違法採集，分布・産地局限
	（現在）	捕食（外来種による），違法採集，分布・産地局限

特記事項

本種を含むトカゲモドキの仲間は特に沖縄諸島のなかで細かく分化しており、その分布様式は他の陸生爬虫類とは明らかに異なる。そのため、同地域のなかでの生物の多様化の要因や、島の成立を含む同島の古地理、古環境を知るうえで重要な存在ということができ、高い学術的価値を有する。沖縄県の天然記念物に指定されている。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義マダラトカゲモドキ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	マダラトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae orientalis*	CR
第４次 2019：	マダラトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae orientalis*	CR
第４次 2018：	マダラトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae orientalis*	CR
第４次 2017：	マダラトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae orientalis*	EN
第４次 2015：	マダラトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae orientalis*	EN
第４次：	マダラトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae orientalis*	EN

第３次:	マダラトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae orientalis*	EN
第２次:	マダラトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae orientalis*	EN
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- Grismer, L. L., H. Ota, and S. Tanaka, 1994. Phylogeny, classification, and biogeography of *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae) from the Ryukyu Archipelago, Japan, with description of a new subspecies. Zool. Sci., 11: 319–335.
- Honda, M., T. Kurita, M. Toda, and H. Ota, 2014. Phylogenetic relationships, genetic divergence, historical biogeography and conservation of an endangered gecko, *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae), from the Central Ryukyus, Japan. Zool. Sci., 31: 309–320.
- 栗田隆気，2021．マダラトカゲモドキ. 日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 106-107．サンライズ出版，彦根.
- 太田英利，2000．マダラトカゲモドキ．改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物（両生類・爬虫類），pp. 28‐29．環境省自然保護局野生生物課，東京.
- Ota, H., M. Honda, M. Kobayashi, S. Sengoku, and T. Hikida, 1999. Phylogenetic relationships of eublepharid geckos (Reptilia: Squamata): A molecular approach. Zool. Sci., 16: 659–666.
- 田中聡，2005．マダラトカゲモドキ．改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 102‐103．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇.
- 当山昌直，1983．沖縄群島の両生爬虫類相（II）-座間味村の両生爬虫類．沖縄県立博物館総合調査報告書 III-座間味村-，pp. 16‐22．沖縄県立博物館，那覇.
- 渡名喜村 (編), 1983. 渡名喜村市上巻．渡名喜村，南風原町．793 p.
- Werner, Y. L., H. Takahashi, and H. Ota, 2004. The varied foraging mode of the subtropical eublepharid gecko *Goniurosaurus kuroiwae orientalis*. J. Nat. Hist., 38: 119–134.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Goniurosaurus orientalis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Goniurosaurus orientalis* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Predation (by alien species), Illegal harvesting of biological resources, Limited distribution
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　トカゲモドキ科 Eublepharidae　　日本固有

イヘヤトカゲモドキ

***Goniurosaurus toyamai* Grismer, Ota et Tanaka, 1994**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B2ab

基準 A:　—	基準 B:　CR	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B2. 生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。
【過度に分断】
伊平屋島の地形と現在の土地利用形態から考えて、山系ごとに遺伝的な交流が妨げられていることは明らかである。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
減少要因は特定できていないが、反復した現地調査により、既知生息地のいずれにおいても発見個体数が少なくなっており、個体数が減少していることは明らかである。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

沖縄諸島伊平屋島の固有種で、常緑広葉樹林に覆われた山地とその周辺に見られる。現在では、少なくとも島内の 3 地域に寸断されて生息していると考えられる。近年の個体数の減少は国産の他の同属種より顕著であるが、その直接的な原因はよくわかっていない。現在まとまった数の個体が安定して見つかる場所もないことから、すでに種の存続が危ぶまれる状況にあるか、そうでないとしても、すぐにそういう状態に移行してもおかしくない。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長は 75～85 mm ほどで、国産の他のトカゲモドキ類に比べて胴の幅が広くがっちりした体格をしている。生体の虹彩は赤褐色ないし赤味がかった暗褐色。背面の地色は黒色ないし暗褐色で、胴部には桃色がかったクリーム色の横帯が 3 ないし 4 本あるが、背中部には縦条が一切見られない。明瞭な横帯を持ち、かつ、それらの横帯の間の暗色部に明色の小紋がほとんど見られない点で、オビトカゲモドキ（*Goniurosaurus splendens*）を除く国産の他種と識別できる。オビトカゲモドキとは、胸部に厚みのある敷石状の鱗がなく、一様に偏平な鱗が瓦状に並ぶ点、胴が太い体型をしている点で異なる。

【生活史】

5～8 月の夜間に活動中の個体が観察されている。博物館標本の調査結果から、少なくとも 6 月下旬～7 月上旬にかけて輸卵管卵をもったメスが現れ、一度に 2 個産卵するとされる。しかし繁殖期間や 1 シーズンあたりの産卵回数等は不明。世代期間、社会構造についても不明。おもにクモ類や昆虫類の幼虫などをはじめとする地上性の小型無脊椎動物を捕食する。

【生息環境】

おもに常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林に生息するが、住宅地近くでも見られる場合がある。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，河川源流域，河川上流域 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

沖縄諸島の伊平屋島に固有。国産の他の同属種は奄美諸島の徳之島と、沖縄諸島の沖縄島およびそれよりも西側の島々に分布している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

資料が不足しており、分布域の経時的な変化について十分に確からしく言及するのは難しいが、近年の発見個体数の減少は、国産の他の同属種よりも顕著である。生息環境があまり変わっていないと思われる場所も含め、既知の生息地で揃って発見個体数が減っていることから、生息地の縮小以外にも本種を減少に向かわせている要因が存在することが強く示唆されるが、その特定には至っていない。

【生息地の現況】

林道工事やダム建設などにより好適な生息地は縮小傾向にある。

【個体数の現況】

資料が少なく、個体数やその動態について具体的な推定値を出すことはできないが、全体として生息に適した環境が縮小していることに加え、目立った環境の変化がない場所でも揃って発見個体数が減っており、個体数は確実に減少している。

存続を脅かす要因

林道整備やダムの建設、森林伐採による生息地の縮小のほか、違法採集が行われているとの情報もあり、個体群への影響が懸念される。また、具体的な証拠はないがイエネコによる食害が個体数の減少に関与している可能性もある。また、未知の感染症や気候変動による影響も否定できない。面積の小さな単一の島に固有なため、個体群密度が低い現在の状況に、自然に起こる個体数変動の影響が加わると、すでに種の存続にとって危険なレベルにあると考えられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，捕食（外来種による），違法採集，分布・産地局限，不明
	（現在）	森林伐採，捕食（外来種による），違法採集，分布・産地局限

特記事項

本種を含む国産のトカゲモドキ類は奄美・沖縄諸島のなかで地理的に細かく分化しており、同地域における生物多様性創出の過程を解明するうえで学術的に高い価値がある。形態形質の変異分析に基づき、本種は徳之島に分布するオビトカゲモドキに近縁と考えられていたが、DNA 情報を使った分析からオビトカゲモドキの分岐は、イヘヤトカゲモドキを含む沖縄諸島の 6 種の分化に先立って起こったことが示されている。沖縄県の天然記念物に指定されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	イヘヤトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae toyamai*	CR
第４次 2019：	イヘヤトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae toyamai*	CR
第４次 2018：	イヘヤトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae toyamai*	CR
第４次 2017：	イヘヤトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae toyamai*	CR
第４次 2015：	イヘヤトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae toyamai*	CR
第４次：	イヘヤトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae toyamai*	CR
第３次：	イヘヤトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae toyamai*	CR
第２次：	イヘヤトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae toyamai*	CR
第１次：	クロイワトカゲモドキ	*Eublepharis kuroiwae*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠA類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- Grismer, L. L., H. Ota, and S. Tanaka, 1994. Phylogeny, classification, and biogeography of *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae) from the Ryukyu Archipelago, Japan, with description of a new subspecies. Zool. Sci., 11: 319–335.
- Honda, M., T. Kurita, M. Toda, and H. Ota, 2014. Phylogenetic relationships, genetic divergence, historical biogeography and conservation of an endangered gecko, *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae), from the Central Ryukyus, Japan. Zool. Sci., 31: 309–320.
- 栗田隆気，2021．イヘヤトカゲモドキ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 108．サンライズ出版，彦根．
- Kurita, T. and M. Toda, 2024. Genetic and morphological studies on *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae), with a description of a new species from the northern part of Okinawajima Island, Ryukyu Archipelago, Japan. Curr. Herpetol., 43: 86–114.
- 太田英利，2000．イヘヤトカゲモドキ．改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物（両生類・爬虫類），pp. 22‐23．環境庁自然保護局野生生物課，東京．
- 戸田守・田中聡，2017．イヘヤトカゲモドキ．改定・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 180．沖縄県環境部自然保護課，那覇．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Goniurosaurus toyamai has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Goniurosaurus toyamai* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Predation (by alien species), Illegal harvesting of biological resources, Limited distribution
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　トカゲ科 Scincidae

ミヤコトカゲ

***Emoia atrocostata atrocostata* (Lesson, 1830)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B2ab				
基準 A:　―	基準 B:　CR	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。

【過度に分断】

個体が比較的安定して見つかる範囲は、ほとんどの生息地で極めて狭く、現地調査の結果および海岸環境などから、それらの間には明らかな分布空白地帯がある。また、それらの間の遺伝的交流は限られていることが示唆されている。

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

護岸や埋め立てに加え、ホテルの建設等で自然海岸は一貫して減少しており、それに伴って個体数が減少していることに疑いの余地はない。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

日本国内では宮古諸島のみに分布し、この地域が東南アジアからオセアニアにかけて広域に分布する本種の分布の北限となっている。岩石海岸のみに分布し、実質的な生息地面積は非常に狭い。護岸工事や埋め立てをはじめとした海岸の開発による生息適地の分断・喪失、外来の捕食者（ニホンイタチ）の侵入・定着に伴い、宮古諸島内での分布域の縮小や、個体数の減少が強く懸念される。

基礎情報

【形態】

頭胴長は 60～100 mm ぐらいで、オスのほうが大きい地域とメスのほうが大きい地域がある。宮古諸島のものは成体の頭胴長が 66～80 mm 程度と小型でオスのほうが僅かに大きい。頭部は細長く、とくに吻部は細くなっている。下眼瞼は可動で、瞼の中央に大型の半透明な鱗があり、目を閉じても外界を見ることができると考えられている。四肢は頭胴長に比して長い。背面の地色はやや緑味を帯びた灰褐色で、側面はわずかに暗色を帯びるが地域差が大きい。頭部、四肢、尾部も含め、全体に淡色と暗色の小斑が散らばる。

【生活史】

宮古諸島における生活史や生態は不明。距離的に近い台湾の蘭嶼での研究および緑島の標本調査では、メスは 3 月下旬～8 月上旬にかけて、一度に 2 卵（ごくまれに 1 ないし 3 卵）を 1 ないし 2 回、産み落とすとされている。胃内容物として、台湾の個体群ではアリ類、ヨコバイ類、小型のカニが報告されている。フィリピンの個体群では十脚類や等脚類など海生の節足動物に強く依存していることが示されている。宮古諸島の個体群について、一例の観察ではあるが、ギンポの捕食が報告されている。フィリピンの個体群について、孵化後 9～9.5 ヶ月で成熟し、少なくとも 3～4 年は生存することが確認されている。

【生息環境】

海岸の岩礁、マングローブ林などに生息するとされているが、国内でマングローブ林に生息するという確かな証拠はない。特に転石がある岩礁で見つかる場合が多い。岩礁に隣接した人工的な石組みでできた堤防などでも見られる場合がある。干潮時には潮間帯に降りて盛んに活動する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【陸域_海岸部】海崖・岩浜・岩礁（磯）
国土地域区分：	(5) 沿岸域, (7) 島嶼地域

【分布域】

国内では宮古諸島の海岸のみから知られ、宮古島とそれに隣接する小さな岩礁、大神島の南東岸、池間島の南岸と西岸、伊良部島の東岸、来間島の北岸で記録されている。また一部の文献に、池間島の北東沖 8.5 km にあるフデ岩という無人島に本種が分布しているという記述があるが、のちに誤りであることが確認された。海外では台湾南部の海岸、緑島、蘭嶼、フィリピン、マレーシア、インドネシア、パラオ、ニューギニアなどに分布するが、系統的に大きく分化した集団を含み、宮古諸島の集団は、台湾、フィリピンのものと同じ系統に属することが分かっている。宮古諸島に近い八重山諸島や台湾の東北部などには見られない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1980 年代まで比較的高密度で本種が見られた宮古島西部の平良港周辺では、2000 年以降の目撃例はほとんどない。その付近では埋め立てや護岸が進み、少なくともかつて生息していた地点の一部は完全に消失している。また、伊良部島の東岸では確認が難しくなっており、宮古島に隣接するリーフ内の島状の岩礁地帯でも本種が消滅したと考えられる地域がある。来間島については調査が不十分で、現況は不明であるが、少なくとも西部と南部の岩礁域で行った調査では確認できていない。既知の分布地は、砂浜や護岸工事を施された海岸、埋立地などによって互いに分断されており、比較的連続した生息地は宮古島の南岸だけである。そもそも海岸域に生息が限られるため、個々の生息地面積も相当に狭い。遺伝的な解析から、宮古諸島内でも分断された地域の間での遺伝流動はある程度制限されていることが示唆されている。

【生息地の現況】

多くの生息地で、護岸工事や岩場の埋め立てにともなって生息地は明らかに縮小している。伊良部島ではかつて本種が見られていた場所でも発見が難しくなっており、外来種のニホンイタチによる食害の影響が疑われている。

【個体数の現況】

分布域の縮小にともなって減少してきているのは間違いないが、具体的な数や減少率は不明。

存続を脅かす要因

埋め立てや護岸など、自然海岸の環境改変と外来の捕食者が主な圧迫要因と考えられる。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，捕食（外来種による）
	（現在）	海岸開発，捕食（外来種による）

特記事項

宮古諸島のミヤコトカゲは、広域に分布する本種の個体群のうちでももっとも北に位置しており、熱帯起源の爬虫類における、季節変化のある環境への生理的・生態的順応を研究する上で格好の対象となり得る。実際に近縁なフィリピンのものと比べても体サイズが小さいなどの違いがみられ、宮古諸島個体群の生活史に興味が持たれる。他の分布地と大きく隔てられていることから、非飛翔性の陸生脊椎動物による漂流分散の過程を研究するうえでも興味深い対象といえる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ミヤコトカゲ	*Emoia atrocostata atrocostata*	VU
第４次 2019：	ミヤコトカゲ	*Emoia atrocostata atrocostata*	VU

第４次 2018：	ミヤコトカゲ	*Emoia atrocostata atrocostata*	VU
第４次 2017：	ミヤコトカゲ	*Emoia atrocostata atrocostata*	VU
第４次 2015：	ミヤコトカゲ	*Emoia atrocostata atrocostata*	VU
第４次：	ミヤコトカゲ	*Emoia atrocostata atrocostata*	VU
第３次：	ミヤコトカゲ	*Emoia atrocostata atrocostata*	VU
第２次：	ミヤコトカゲ	*Emoia atrocostata atrocostata*	VU
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Asato, H., T. Sasai, T., Yamamoto, and M. Toda, 2024. Population status of three endangered lizards in Shimojijima and Irabujima islands, Ryukyu Archipelago, Japan. Curr. Herpetol., 43: 159-168.
- Auffenberg, W., and T. Auffenberg, 1988. Resource partitioning in a community of Philippine skinks (Sauria: Scincidae). Bull. Am. Mus. Nat. Hist., 32: 152–219.
- Brown, W. C., 1991. Lizards of the genus *Emoia* (Scincidae) with observations on their evolution and biogeography. Mem. Calif. Acad. Sci., 15: 1–94.
- Huang, W. S., 2011. Ecology and reproductive patterns of the littoral skink *Emoia atrocostata* on an East Asian tropical rainforest island. Zool. Stud., 50: 506–512.
- 饒平名里美・当山昌直・安川雄一郎・陳 賜隆・高橋 健・久貝勝盛，1998．宮古諸島における陸生 爬虫両生類の分布について．平良市総合博物館紀要，5: 23‐38．
- Okada, S., H. Ota, M. Hasegawa, T. Hikida, H. Miyaguni, and J. Kato. 1992. Reproductive traits of seven species of lygosomine skinks (Squamata: Reptilia) from East Asia. Nat. Hist. Res., 2: 43–52.
- 岡本卓・栗田和紀，2021．ミヤコトカゲ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 145-146．サンライズ出版，彦根．
- Richmond, J. Q., H. Ota, L. L. Grismer, and R. N. Fisher, 2021. Influence of niche breadth and position on the historical biogeography of seafaring scincid lizards. Biol. J. Linn. Soc., 132: 74–92.
- 当山昌直，1976．ミヤコトカゲの生息の確認．沖縄生物学会誌，14: 61‐6．
- 当山昌直，1976．宮古群島の両生爬虫類相（I）．爬虫両棲類学雑誌，6: 64‐74．
- 当山昌直，1981．宮古群島の両生爬虫類．沖生教研会誌，14: 30‐39．

- 当山昌直，2005．ミヤコトカゲ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 114-115．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．
- 当山昌直，2019．両生類・爬虫類．宮古島市史編さん委員会（編），みやこの自然．pp. 419-442．宮古島市教育委員会，宮古島．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Emoia atrocostata atrocostata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Emoia atrocostata atrocostata* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sea Cliff/Rocky beach/Reef
Threat types:	Coastal development, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	―





執筆者:　　戸田守（琉球大学）

Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ナミヘビ科 Colubridae　　日本固有

ミヤラヒメヘビ

***Calamaria pavimentata miyarai* Takara, 1962**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B1ab

基準 A:　—	基準 B:　CR	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B1．出現範囲が 100 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。
【地点数】1 地点
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息域の全体で舗装道路や付随する側溝の整備、常緑広葉樹の自然林、二次林の伐採、農地化が進み、それにともなう土地の乾燥化が認められる。生息地の大部分で、生息環境は悪化している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

八重山諸島の与那国島の固有亜種。一年を通して適度に湿った腐植性の土壌・底質のある場所に生息する。乾燥、高温に弱く小型で移動能力も低いため、森林の伐採や舗装道路、側溝の敷設が、生息地の縮小・分断を引き起こしていると思われる。近年、人によって持ち込まれ定着したインドクジャクによる捕食圧の影響も、強く懸念される。

基礎情報

【形態】

成体の全長は 300～380 mm（頭胴長 290～340 mm）程度。頭部の幅は頸部の幅とほとんど変わらない。尾は太短く、先端は尖る。胴部のほぼ全域の背面で、滑らかな体鱗が 13 列に並ぶ。背面の地色は概ね緑褐色で、ミヤコヒメヘビ（*Calamaria pfefferi*）に比べて暗い。腹面の地色は鮮やかな黄緑色で、各腹板には暗帯がある。腹板数はオス 157～162 枚、メス 166～174 枚。尾下板数はオス 27 対、メス 19～21 対。

【生活史】

これまでに 3～8 月に発見されている。これ以外の時期に活動するかどうかは不明。生活史、生態には不明な点が多い。3 月末に得られた頭胴長 263 mm、 全長 284 mm のメスでは生殖腺は未成熟であった。その一方で 8 月に発見された、これまでの成熟個体中最小のオスは、頭胴長 301 mm、全長 320 mm であった。

【生息環境】

常緑広葉樹の自然林や二次林、さらには低木林、石灰岩植生の林床に生息し、比較的湿潤な場所に見られる。本亜種を含むヒメヘビ属はミミズ類を専食すると思われ、実際、生きた状態で発見された 1 成体は捕獲後、ミミズを吐き出した。また本亜種自身、直射日光による高温や乾燥に弱いことから、一年を通して乾燥せずミミズの多い腐食質の底質と、直射日光を遮る植生ないし岩の存在が、生息に必要な条件と考えられる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地 【陸域_平地部】森林，草地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

八重山諸島の与那国島のみに分布。

現在の生息状況

【分布域の現況】

これまでに確認された分布域は、与那国島中東部にある宇良部岳の斜面や山頂にある林、中部にあるテンダバナ周辺の林、南部にある比川近くの林、西部にある久部良岳の北側の林など。上記のように本種は、乾燥や高温に弱く、しかも移動能力があまり高くない。そのため土地の造成・農地化、舗装道路の整備とそれにともなう側溝の敷設により、分布が容易に分断されてしまうことが予想される。

【生息地の現況】

生息域の全体で舗装道路や付随する側溝の整備、常緑広葉樹の自然林、二次林の伐採、農地化が進み、それにともなう土地の乾燥化が認められる。生息地の大部分で、生息環境は悪化している。

【個体数の現況】

地元住民による側溝への墜落による大量死や、目撃頻度の低下などの話から、減少傾向にあることが予想されるが、具体的な数値は不明。

存続を脅かす要因

1980 年代の前半より続けられている森林の伐採や、おもに農地化を目的とした土地造成による乾燥化。舗装道路・側溝の敷設。外来性捕食者であるインドクジャクの侵入・定着。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，捕食（外来種による），その他（側溝への落下とそれによる分断）
	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，捕食（外来種による），その他（側溝への落下とそれによる分断）

特記事項

与那国島は、他の八重山の島々と台湾との間に位置しながら、周辺の海の深さなどから、そのいずれからも比較的長期間隔離されてきたと考えられている。本亜種の分布は、こうした隔離の存在を強く示唆しており、学術的に高い価値を有している。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ミヤラヒメヘビ	*Calamaria pavimentata miyarai*	VU
第４次 2019：	ミヤラヒメヘビ	*Calamaria pavimentata miyarai*	VU
第４次 2018：	ミヤラヒメヘビ	*Calamaria pavimentata miyarai*	VU
第４次 2017：	ミヤラヒメヘビ	*Calamaria pavimentata miyarai*	VU
第４次 2015：	ミヤラヒメヘビ	*Calamaria pavimentata miyarai*	VU
第４次：	ミヤラヒメヘビ	*Calamaria pavimentata miyarai*	VU
第３次：	ミヤラヒメヘビ	*Calamaria pavimentata miyarai*	VU
第２次：	ミヤラヒメヘビ	*Calamaria pavimentata miyarai*	VU
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 千木良芳範，2005．ミヤラヒメヘビ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 115．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．
- Inger, R. F. and H. Marx, 1965. The systematics and evolution of the Oriental colubrid snakes of the genus *Calamaria*. Fieldana: Zoology, 49: 1–304.
- Mori, A. and H. Moriguchi, 1988. Food habits of the snakes in Japan: A critical review. The Snake, 20: 98–113.
- 太田英利，1982．ミヤラヒメヘビ（*Calamaria pavimentata miyarai*）の死体拾得の報告、およびタイワンヒメヘビ（*Calamaria pavimentata formosana*）、ヒメヘビ（*Calamaria pfefferi*）との比較．The Snake，14: 40‐43．
- 太田英利，2009．ミヤラヒメヘビ、ヨナグニシュウダ．佐々木健志（編），琉球大学資料館（風樹館）収蔵タイプ標本目録，pp. 10‐11．琉球大学資料館（風樹館），西原．
- 太田英利・外間善雄，1996．ミヤラヒメヘビの生体の発見．Akamata，13: 10‐12．
- 当山昌直，1984．琉球の両生爬虫類．沖縄の生物，pp. 281‐300．沖生教研会，那覇．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Calamaria pavimentata miyarai has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Calamaria pavimentata miyarai* is listed as CR under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 100 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction, Predation (by alien species), Other
Law designation status for conservation	―



執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ナミヘビ科 Colubridae　　日本固有

キクザトサワヘビ

***Opisthotropis kikuzatoi* (Okada et Takara, 1958)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B1ab+2ab

基準 A:　—	基準 B:　CR	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B1+2．出現範囲が 100 km²未満かつ生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。

【過度に分断】

生息地は久米島の中北部と南部の丘陵地に限られ、分布面積は両方合わせても 10 km²未満と考えられる。上記の 2 つの分布域の間には耕作地や市街地が広がっており、 両地域の個体群は完全に分断されていると考えられる。

【地点数】1 地点

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

水質汚濁、捕食者侵入。特に中北部の生息場所では、ゴミの投機による水質汚濁の進行が懸念される。同じ渓流に生息するオオウナギの違法バッテリー漁の際、巻添えで感電・死亡する場合である。1953 年にウシガエルが久米島に放逐されており、その捕食圧もそれ以降上昇していると思われる。このほか白瀬川源流部では頭部の鱗板が左右非対称の個体が少なくなく、近親交配による遺伝的劣化、遺伝的多様性の低下も懸念される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

沖縄諸島の久米島固有の淡水生種で、常緑広葉樹の自然林および回復の進んだ二次林内とその周辺を流れる渓流にのみ生息するが、このような環境は、現在では島内でも大きく分断された 2 つの地域に限られる。このような生息範囲の狭さに加え、外来種であるウシガエル（*Rana catesbeiana*）による捕食や水質の悪化にともなう餌動物の減少などに起因する、個体群のさらなる縮小が懸念される。

基礎情報

【形態】

頭胴長は 450～550 mm、尾長は頭胴長の 18～21%程度。鼻孔は吻端近くに位置し、背方に開口する。前額板は普通単一であるが、部分的に不完全な縫合が入ることもある。体鱗は胴のほぼ全域で 15 列で、大部分は滑らかだが、総排出腔の背面周辺や尾部のものは隆起をもつ。背面の地色は黒褐色で、橙色ないし黄色の小斑が左右に一列ずつ並ぶ。腹面は胴部では淡黄色、尾部ではやや暗色を帯びる。

【生活史】

一年を通して活動。飼育下では日中、とくに日の出から正午にかけての時間帯に活動性の上がることが報告されている。野外では、日中にも夜間にも活動個体が確認されている。7 月に採集され、同じ年の 10 月初めまで飼育された成体メス（頭胴長 455 mm、尾長 102 mm）が、最大で 3.0×2.0 mm ほどの卵黄蓄積ろ胞を 11 個、卵巣にもっていたことが報告されている。世代期間、社会構造等は一切不明。おもにサワガニ類やテナガエビ類などの甲殻類を食べると考えられるが、カエルの幼生を食べたとの報告もある。久米島の生息地のうち、中北部内の 2 つの場所で観察された複数の個体の形態を比較したところ、多少の差異が認められた。一見よくまとまっているように見える地域内に、複数の個体群が存在する可能性も考える必要があろう。

【生息環境】

常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林内、および周辺の細流に生息する。一年を通して渇水せず、また餌となるサワガニ類やテナガエビ類などが豊富で、夏季に直射日光を避ける場所が十分にあり、かつあまりウシガエルの近づかない細流・湿地の存在が生息の必要条件と考えられる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，耕作放棄地，河川源流域，河川上流域，河川中流域 【陸域_平地部】森林，耕作放棄地，湿地・湿原，河川中流域，河川下流域，小河川
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

沖縄諸島の久米島のみに分布する。サワヘビ属の他の種は中国大陸東南部、海南島、インドシナ北・中部、ボルネオ北部、スマトラ、フィリピン南部などに分布するが、それらと久米島との間に位置する台湾や南琉球には見られない。キクザトサワヘビの分布は、他種の分布域から著しく飛び離れ、本属の分布の最東北端となっている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域は久米島島内でも中北部と南部の丘陵地に限られ、分布面積は両方合わせても 10 km²未満と考えられる。上記の 2 つの分布域の間には耕作地や市街地が広がっており、 両地域の個体群は完全に分断されていると考えられる。分布域の縮小率は資料がないため推定不能。

【生息地の現況】

久米島中北部の丘陵にある白瀬川の源流部では、1983 年以降になって、新たに川底にヘドロ状の土砂の堆積が認められ、生息環境はかなり悪化しているのではないかと思われる。南部の個体群については不明。

【個体数の現況】

個体数やその減少率を具体的に推定するのは不可能だが、少なくとも 1983 年以降の 15 年間で、中北部の生息域の 1 つである白瀬川源流部では、視認される個体の出現頻度は 1/10 以下に減少している。南部の個体群については不明。

存続を脅かす要因

水質汚濁、捕食者侵入。ゴミの投機による水質汚濁が、とくに中北部の生息場所ではその進行が懸念される。同じ渓流に生息するオオウナギの違法バッテリー漁の際、巻添えで感電・死亡する場合である。1953 年にウシガエルが久米島に放逐されており、その捕食圧もそれ以降上昇していると思われる。このほか白瀬川源流部では頭部の鱗板が左右非対称の個体が少なくなく、近親交配による遺伝的劣化、遺伝的多様性の低下も懸念される。

要因の区分：	（過去）	水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），近交弱勢
	（現在）	水質汚濁，捕食（外来種による），捕食（在来種による），近交弱勢，その他（環境改変による種間関係の変化）

特記事項

キクザトサワヘビは、中部琉球に分布する爬虫・両生類の中でもとくに極端な遺存固有の状態にあり、その存在には系統学的、生物地理学的にきわめて高い学術的意義がある。また日本国内では唯一の淡水生のヘビであり、生態的にもきわめて興味深い。沖縄県の天然記念物に指定されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	キクザトサワヘビ	*Opisthotropis kikuzatoi*	CR
第４次 2019：	キクザトサワヘビ	*Opisthotropis kikuzatoi*	CR
第４次 2018：	キクザトサワヘビ	*Opisthotropis kikuzatoi*	CR
第４次 2017：	キクザトサワヘビ	*Opisthotropis kikuzatoi*	CR
第４次 2015：	キクザトサワヘビ	*Opisthotropis kikuzatoi*	CR

第４次:	キクザトサワヘビ	*Opisthotropis kikuzatoi*	CR
第３次:	キクザトサワヘビ	*Opisthotropis kikuzatoi*	CR
第２次:	キクザトサワヘビ	*Opisthotropis kikuzatoi*	CR
第１次:	キクザトサワヘビ	*Opisthotropis kikuzatoi*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠA類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- Mori, A. and A. Nakachi, 1993. Laboratory observations on the daily activity of the endangered stream snake, *Opisthotropis kikuzatoi* (Reptilia, Squamata, Colubridae) from Kumejima Island, Japan. Island Studies in Okinawa, 12: 25–35.
- 沖縄県教育委員会（編），1993．キクザトサワヘビ生息実態調査報告書，沖縄県教育委員会，那覇．pp. 97.
- Ota, H., 2004. Field observations on a highly endangered snake, *Opisthotropis kikuzatoi* (Squamata: Colubridae), endemic to Kumejima Island, Japan. Cur. Herpetol., 23: 73–80.
- Ota, H. and A. Mori, 1984. On the fourth specimen of *Opisthotropis kikuzatoi*. The Snake, 17: 160–162.
- 太田英利・当山昌直，1996．キクザトサワヘビ．沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータおきなわ－，pp. 327‐328．沖縄県自然保護課，那覇.
- Toyama, M., 1983. Taxonomic reassignment of the colubrid snake, *Opheodrys kikuzatoi* from Kume-jima Island, Ryukyu Archipelago. Jpn. J. Herpetol., 10(2): 33–38.
- 当山昌直，1984．沖縄群島の両生爬虫類相（Ⅲ）－渡嘉敷島・久米島－．沖縄県立博物館紀要，10: 25‐36.
- 当山昌直，2005．キクザトサワヘビ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 97‐99．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇.
- Yang, J. H., Y. H. Sung and B. P. L. Chan, 2013. A new species of the genus *Opisthotropis* Günther, 1872 (Squamata: Colubridae: Natricinae) from Guangdong Province, China. Zootaxa, 3646: 289–296.
- Yang, J. H., Y. Y. Wang, B. Zhang, M. W. N. Lau, and W. H. Chou, 2011. Revision of the diagnostic characters of *Opisthotropis maculosa* Stuart and Chuaynkern, 2007 with notes on its distribution and variation, and a key to the genus *Opisthotropis* (Squamata: Natricidae). Zootaxa, 2785: 61–68.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Opisthotropis kikuzatoi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Opisthotropis kikuzatoi* is listed as CR under criteria B1ab+2ab.

B1+2. Extent of occurrence estimated to be less than 100 km² AND area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Abandoned farmland, River headwater, Upper river basin, Middle river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Abandoned farmland, Wetland, Middle river basin, Lower river basin, Small river
Threat types:	Water pollution, Predation (by alien species), Predation (by native species), Inbreeding depression, Other
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.



©山本拓海（東邦大学）

執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

カメ目 Testudines　ウミガメ科 Cheloniidae

アカウミガメ

***Caretta caretta* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　A2 ＋付加的事情				
基準 A:　CR	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、80%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

3 世代（75 年）

【過去の状況】

1950 年以降の長期モニタリングデータが蓄積されている徳島県大浜海岸では、1950-54 年の産卵上陸数は平均 74 回であった。同じ徳島県の蒲生田海岸でも 1950 年代の産卵上陸数は 150-800 回以上であった。

【近年の状況】

徳島県大浜海岸の上陸数は 2020-2024 年には平均 5 回にまで減少している。また、徳島県蒲生田海岸でも 2000 年以降は数十回にまで産卵上陸数が減少したことが報告されている（亀崎 2012）。以上より、1950 年代からの減少率は 80%以上となることから CR と評価される。なお、短期的に見れば近年の減少傾向がこれより緩やかに見える地域もあるが、この評価基準で使用可能な長期観測データとは位置づけにくい。

以上のように基準を形式的に適用し、絶滅危惧ⅠA類（CR）と判定されたが、次の付加的事情を考慮すると、形式的なカテゴリー判定結果は、本種の絶滅のおそれを過大評価していると考えられるため、カテゴリーを 1 段階引き下げる。

【考慮すべき付加的事情の種類】

4) その他

【具体的理由】

モニタリングサイト 1000 や亀崎（2012）の情報を見ると、全国的にはここ 30 年程で増減を繰り返しながら近年徐々に減少しているものの、減少の程度は徳島の場合ほど大きくはないと考えられる。このことから、徳島県のデータを用いた基準 A による評価だけでは本種全体の絶滅のおそれを過大に評価する可能性があることを考慮し、カテゴリーを 1 段階引き下げる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

アカウミガメの北太平洋個体群は北太平洋の温帯・亜熱帯に広く分布する。産卵地は千

葉県から南西諸島の日本に限られている。上陸産卵回数は 1997 年まで減少したが、その後は一時的に増加した。2012 年には 25,947 回の上陸が記録されており、日本で産卵するメスは 10,000 個体前後と推察されている。しかし、2014 年からはまた減少を続け、その数は 2021 年では半分以下に減少している。本種は、日本でふ化したのち、太平洋に分散して成長する。甲長が 60 cm を超えると、日本近海に回帰する。脅威は沿岸域における混獲と砂浜の侵食である。

基礎情報

【形態】

甲羅の形はハート形をしており、背甲にはカメフジツボやワレカラ類などが藻類とともに生息していることが多い。成体の背面は褐色、腹面は淡黄色で、ふ化幼体は全身が黒褐色である。相対的に頭部が大きく、顎も頑強である。直甲長は産卵に上陸するメスで 70～100 cm、また、太平洋沿岸を回遊する集団で 65～90 cm である。

【生活史】

産卵は 5～8 月にかけて南日本の太平洋岸で行われる。卵は一度に 100～120 個産下され、メスはシーズン内に複数回産卵する。卵は 50～70 日でふ化し、幼体は夜間に脱出し海に入り、黒潮に流されて太平洋の広い範囲に分散する。その間、浮遊性の動物を摂食して成長する。ふ化後、15～20 年ほど経過すると、再び日本近海に回帰し、成熟に至る。

【生息環境】

本種は動物食性なので熱帯よりも餌の豊富な水温 15 度以上の温帯海域を好む。ふ化幼体は外洋で漂流生活を行い、流れ藻に隠れて生活・成長する。また、未成熟個体はカリフォルニア半島沖の湧昇流海域のように栄養塩が豊富で、餌となる動物が多い海域に集中して分布する。成体は底性や浮遊性の動物を食べることから、水深 300 m 以浅の東シナ海や日本の南部の海域も重要な索餌海域である。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】砂浜・礫浜 【海域（沿岸）_潮間帯 表層】海面，漂泳界（水柱環境），岩礁（磯），砂底・礫底，泥底 【海域（外洋）_表層】海面，漂泳界（水柱環境）
国土地域区分：	（5）沿岸域，（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

インド～太平洋、大西洋、地中海の温帯海域に分布しており、主要な産卵地も南日本以外にオーストラリアの北東岸、オマーン、南アフリカ、ギリシャ、アメリカ合衆国南東岸、ブラジルなどにある。太平洋集団においては、南日本でふ化した幼体は、黒潮に流され北太平洋に広く分散する。幼体の多くは、カリフォルニア半島沖で成長した後に日本近海まで回遊してくる。従って、日本産のアカウミガメの分布は北太平洋の温帯域を中心に広い範囲にある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

太平洋の温帯域を中心に広く分布する。これらの海域では漁業が盛んに行われており、本種も混獲されている。瀬戸内海などの浅海域は摂餌場所であったと予想されるが、漁業活動等により分布域ではなくなった。また、大阪府堺市から泉南市にかけて、兵庫県神戸市須磨区から垂水区にかけて、別府湾の砂浜は、産卵地であったが現在では埋め立てられ、

繁殖地としての機能を失った。さらに、日本の海岸線の砂の浸食は他の地域でも激しく、御前崎（静岡）、蒲生田（徳島）の海岸もその機能を失いつつある。

【生息地の現況】

関東地方から九州地方にかけての太平洋沿岸や南西諸島の砂浜で産卵するが、その多くの海岸で侵食が懸念されている。とくに深刻なのは宮崎県の海岸で、大淀川河口から北に向かって産卵のための環境は劣化している。このような産卵地の劣化は、全国的に深刻である。また、定置網など沿岸漁業による混獲死も報告されている。

【個体数の現況】

南九州の砂浜では、1990～97 年まで上陸・産卵回数が顕著に減少したが、その後、増加に転じ、2012 年頃に最大となり再び減少する。四国地方、紀伊半島、東海地方の海岸では、1990～97 年にかけての減少傾向は同じだが、その後の回復度合いが南九州よりも低い。とくに、四国地方の蒲生田海岸と日和佐大浜海岸は復活の兆しがない。また、屋久島うみがめ館の調査結果は 2014 年には 9000 回を超えた上陸が 2018 年には 3000 回を下回り、日本全域での産卵個体数の激減が懸念される。

存続を脅かす要因

存続を脅かすもっとも重要な要因は漁業による溺死である。毎年、日本の海岸線では 200 個体程度のアカウミガメの死体が打ち上がるが、その多くが漁業による溺死と考えられる。とくに、定置網はその形状によっては多くのウミガメを溺死させる。また、高知県や和歌山県ではアカウミガメを食す文化がある。産卵場となる砂浜海岸からの砂の消失も深刻である。産卵海岸のほとんどで人工構造物に起因する砂の流出が見られ、繁殖地としての機能を失った砂浜が増加している。また、むやみな卵移植や子ガメの放流会も脅威となっている。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，捕獲・狩猟/園芸採取，混獲・錯誤捕獲，光害
	（現在）	海岸開発，捕獲・狩猟/園芸採取，混獲・錯誤捕獲，光害，気候変動

特記事項

徳島県の長期観測データはアカウミガメの長期傾向を示すものとして世界的に見ても非常に貴重なものである。アメリカ合衆国の ESA（Endangered Species Act）において、アカウミガメの北部太平洋個体群は Endangered と位置づけられている。国立・国定公園の指定動物に指定されている（屋久島国立公園、西表石垣国立公園、慶良間諸島国立公園）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アカウミガメ	*Caretta caretta*	EN

第４次 2019：	アカウミガメ	*Caretta caretta*	EN
第４次 2018：	アカウミガメ	*Caretta caretta*	EN
第４次 2017：	アカウミガメ	*Caretta caretta*	EN
第４次 2015：	アカウミガメ	*Caretta caretta*	EN
第４次：	アカウミガメ	*Caretta caretta*	EN
第３次：	アカウミガメ	*Caretta caretta*	EN
第２次：	アカウミガメ	*Caretta caretta*	VU
第１次：	アカウミガメ	*Caretta caretta*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岩手県】留意，【宮城県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【福島県】準絶滅危惧(NT)，【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類，【千葉県】最重要保護生物(A)，【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【東京都（小笠原諸島）】情報不足(DD)，【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類，【石川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福井県】県域絶滅危惧Ⅱ類，【静岡県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【愛知県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【三重県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【大阪府】CR+EN，【兵庫県】Aランク，【和歌山県】準絶滅危惧(NT)，【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【岡山県】情報不足，【徳島県】絶滅危惧ⅠB類，【愛媛県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【福岡県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【佐賀県】絶滅危惧Ⅰ類，【長崎県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【熊本県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【大分県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【宮崎県】準絶滅危惧(NT-g)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類，【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

都道府県条例指定種【静岡県・愛知県・徳島県・熊本県】

参考文献

- Hatase, H., 2003. Migrations and habitat use of sea turtles. Zool. Sci., 20(12): 1524.
- Ishihara, T., N. Kamezaki, Y. Matsuzawa, F. Iwamoto, T. Oshika, Y. Miyagata, C. Ebisui, and S. Yamashita, 2011. Reentery of juvenile and subadult loggerhead turtles into natal waters of Japan. Curr. Herpetol., 30(1): 63–68.
- 亀崎直樹，2003．ウミガメからみた沿岸域，特に砂浜と海岸の現状と未来．沿岸域，16(1): 45‐53．
- 亀崎直樹，2010a．海洋におけるウミガメ保護，pp. 197‐200，朝倉書店，東京．
- 亀崎直樹，2010b．ウミガメの産卵場としての砂浜の保全，pp. 192‐196，朝倉書店，東京．
- 亀崎直樹，2021．アカウミガメ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 87-88，サンライズ出版，彦根．
- 亀崎直樹（編），2012．ウミガメの自然誌：産卵と回遊の生物学．東京大学出版会，東京．301pp.

- Kamezaki, N., Y. Matsuzawa, O. Abe, H. Asakawa, T. Fujii, K. Goto, S. Hagino, M. Hayami, M. Ishii, T. Iwamoto, T. Kamata, H. Kato, J. Kodama, Y. Kondo, I. Miyawaki, K. Mizobuchi, Y. Nakamura, Y. Nakashima, H. Naruse, K. Omuta, M. Samejima, H. Suganuma, H. Takeshita, T. Tanaka, T. Toji, M. Uematsu, A. Yamamoto, T. Yamato, and I. Wakabayashi, 2003. Loggerhead Turtles Nesting in Japan., pp. 210–217, Smithsonian Books, Washington, D. C.
- 上野真太郎・岡本 慶・石原 孝・亀崎直樹，2025．日本におけるウミガメ類の分布．爬虫両棲類学会報，2025(2): 127‐144.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Caretta caretta has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Caretta caretta* was formally listed as CR under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥80% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

However, after taking additional factors into consideration, the risk of extinction for this species was considered to be overestimated. Therefore, the formal listing was revised to EN.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sandy beach/Pebble beach 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】Sea surface, Pelagic water (water column environment), Reef, Sandy bottom/Gravelly bottom, Muddy bottom 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface, Pelagic water (water column environment)
Threat types:	Coastal development, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Bycatch, Light pollution, Climate change
Law designation status for conservation	Prefectural Ordinance-Designated Species【Shizuoka・Aichi・Tokushima・Kumamoto】.





執筆者:	亀崎直樹（岡山理科大学）
Author:	Naoki Kamezaki

公表年月：2026 年 3 月

カメ目 Testudines　イシガメ科 Geoemydidae　　日本固有

リュウキュウヤマガメ

***Geoemyda japonica* Fan, 1931**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A: ―	基準 B: EN	基準 C: ―	基準 D: ―	基準 E: ―

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
分布範囲内の各地で、圃場整備や林道の敷設・拡張等に伴う環境改変が進行しているほか、外来の捕食者や外来のイノシシにより継続的に圧迫を受けている。加えて、違法な採集もリスクになっている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

沖縄島、渡嘉敷島、久米島だけに分布する沖縄諸島固有種。山地の森林や回復の進んだ二次林の林床に生息し、とくに渓流沿いや谷部に多い。圃場整備や林道の敷設・拡張に伴う生息環境の悪化、生息地の消失、外来の捕食者、外来のイノシシによる林床の過度の撹乱、販売用の違法採集などにより分布範囲の縮小と個体数の減少が懸念される。産卵数が少ないため、一度個体群が縮小すると回復は容易でないと考えられる。

基礎情報

【形態】

甲長は 65～156 mm 程度。背甲は長卵形かつわずかにドーム型で、椎甲板と左右の肋甲板の上にそれぞれ 1 本ずつの顕著な隆起（キール）がある。背甲後部の縁甲板は後外角が鋭く尖出し、背甲の後縁は顕著に鋸歯状になる。背甲の地色は褐色または赤褐色で、隆条に沿って暗褐色となるが個体変異も大きい。腹甲はほぼ全面が黒色で、黄色の縁取りがある。頭部と頸部の基色は赤褐色から暗褐色までさまざまなものがあるが、多くの場合、赤みの強い線状または斑点状の不規則な模様が入る。吻端は裁断状で、側方からみるとほぼ垂直。

【生活史】

交尾は主に 8～12 月、産卵は 4～9 月上旬にみられ、メスは、普通一度に 1～2 個の卵を、1 シーズンに 2～3 回産卵する。卵は長径 40～50 mm、短径 20～25 mm の細長い回転楕円体で、2～3 ヶ月ほどで甲長 33～36 mm の幼体が孵化する。孵化後 2～3 年で性成熟サイズに達することが知られている。野生個体の糞分析の結果から、おもに陸貝類や節足動物などの小型無脊椎動物を捕食するほか、カエル類など脊椎動物の死体、さらにはイヌビワの果実をはじめとする植物質も摂ることが知られている。一方、孵化して間もない幼体の捕食者としてアカマタの報告がある。

【生息環境】

山地の森林、回復の進んだ二次林の林床に生息する。とくに渓流に隣接した場所を好む傾向があり、浅い流れの中で見つかることもある。稜線近くの谷間で見つかることも多い。また、山間部の果樹園などでもみられる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，田地・畑地，湿地・湿原・細流，河川源流域 【陸域_平地部】森林，田地・畑地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

沖縄諸島の沖縄島、渡嘉敷島、久米島に分布。渡嘉敷島の近くの慶留間島からも記録があるが、人為的に持ち込まれたものと考えられる。沖縄島では、かつては中部地域や本部半島にも生息していたとされる。さらに遺跡からの記録として、沖縄島の南部からも確認されている。現生の姉妹種スペングラーヤマガメは、大陸中国の南東部やインドシナ半島北部に分布。後期更新世の絶滅種アマミヤマガメは、奄美諸島の徳之島から出土している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

沖縄島ではかつては恩納村やうるま市以北の中部地域や本部半島にも生息していたとされるが、2000 年代以降の分布は名護市北部から大宜味村以北の地域にほぼ限られ、分布範囲は縮小している。沖縄島の中南部で個体が見つかることもあり、状況からして、人為

的に運ばれたものである可能性が非常に高いが、在来集団の残存である可能性も完全には排除できない。久米島では、少なくとも 1990 年代以降は生息地が北部の宇江城岳周辺と南東部のアーラ岳周辺に限られており、現在も分断された状態にあると考えられる。渡嘉敷島では、近年特に発見事例が少なくなっていて、分布域も限定される可能性が高いが、詳細は不明。

【生息地の現況】

分布域の広い範囲で林道や圃場の整備などに伴う人為的な環境改変が続いており、生息地は縮小している。渡嘉敷島では 1990 年ごろに持ち込まれたイノシシが野外で増え、2010 年代以降、様々な問題を引き起こしている。現在では、山地の斜面、沢沿い、林道沿いなど、いたるところでイノシシが底質を掘り返し、本種にも直接的・間接的に被害をもたらしている可能性が高い。

【個体数の現況】

個体数に関する直接的なデータはないが、近年の目撃頻度は明らかに減少しており、個体数が減少傾向にあるのは明らかである。特に、発見頻度から考えて、やんばると渡嘉敷島における個体数の減少は顕著である。

存続を脅かす要因

圃場整備、林道の敷設・拡張による生息地の縮小、環境の悪化が本種の生息に負の影響を与えている。加えて、イエネコやフイリマングースなどによる影響も懸念される。また、本来本種の分布域には自然分布しないミナミイシガメ（亜種ヤエヤマイシガメを含む）やセマルハコガメとの交雑個体も見つかっており、遺伝子汚染が進行する懸念もある。これらの事柄に加え、渡嘉敷島ではイノシシが増え、島内の山地や丘陵地のいたるところで土を掘り返した跡がみられる状況になっており、直接的、間接的に本種の存続に大きな負の影響を与えていると考えられる。また、海外のマーケットでの本種の販売が確認されており、実際に最近、本種をまとまった数を密輸しようとした事案が複数発生し、商業目的のためにかなりの個体が捕獲されていることが改めて浮き彫りになった。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，圃場整備，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），交雑（外来種による）
	（現在）	森林伐採，河川開発，圃場整備，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），交雑（外来種による）

特記事項

近縁種から地理的に大きく離れて分布する遺存性の高い種で、生物地理学的に高い学術的価値を有する。なお産卵数が非常に少ないため、一度縮小してしまった個体群の回復には時間がかかると思われる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	リュウキュウヤマガメ	*Geoemyda japonica*	VU
第４次 2019：	リュウキュウヤマガメ	*Geoemyda japonica*	VU
第４次 2018：	リュウキュウヤマガメ	*Geoemyda japonica*	VU
第４次 2017：	リュウキュウヤマガメ	*Geoemyda japonica*	VU
第４次 2015：	リュウキュウヤマガメ	*Geoemyda japonica*	VU
第４次：	リュウキュウヤマガメ	*Geoemyda japonica*	VU
第３次：	リュウキュウヤマガメ	*Geoemyda japonica*	VU
第２次：	リュウキュウヤマガメ	*Geoemyda japonica*	VU
第１次：	リュウキュウヤマガメ	*Geoemyda spengleri japonica*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，国指定天然記念物

参考文献

- 沈彦鵬・福山伊吹・福山亮部・浜中京介・山本拓海・岡本康汰・安里瞳，2022．沖縄島北部におけるアカマタによるリュウキュウヤマガメの捕食例．Akamata，29: 5‐9．
- 福家悠介．2016．アカマタによるリュウキュウヤマガメの捕食例．Akamata，26: 3‐7．
- Janssen, J. and C. R. Shepherd, 2019. Trade in endangered and critically endangered Japanese herpetofauna endemic to the Nansei Islands warrants increased protection. Curr. Herpetol., 38: 99–109.
- 太田英利・濱口寿夫（編），2003．沖縄県天然記念物調査シリーズ 第 41 集-リュウキュウヤマガメ・セマルハコガメ生息実態調査報告書．沖縄県教育委員会，那覇．99pp．
- 太田英利，2014．リュウキュウヤマガメ．環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編）レッドデータブック 2014‐日本の絶滅のおそれのある野生生物－3 爬虫類・両生類．pp. 32‐33．ぎょうせい，東京．
- 鈴木大，2021．リュウキュウヤマガメ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 97-98．サンライズ出版，彦根．
- 髙橋亮雄，2017．琉球列島の第四紀陸生および淡水生カメ類相とその動物地理学的意義．化石研究会会誌，50: 10‐21．

- 当山昌直，2017．リュウキュウヤマガメ．沖縄県環境部自然保護課（編）改定・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版（動物編）－レッドデータおきなわ－．pp. 183‐184．沖縄県環境部自然保護課，那覇.
- Yasukawa, Y., H. Ota, and T. Hikida, 1992. Taxonomic re-evaluation of the two subspecies of *Geoemyda spengleri* (Gmelin, 1789) (Reptilia : Emydidae). Jpn. J. Herpetol., 14(3): 143–159.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Geoemyda japonica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Geoemyda japonica* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Farmland, Wetland/Marsh/Stream, River headwater 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Field preparation, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Hybridization (with alien species)
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Nationally Designated Natural Monument.





©浅野真輝（自然環境研究センター）

執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

カメ目 Testudines　イシガメ科 Geoemydidae　　日本固有

ヤエヤマイシガメ

***Mauremys mutica kami* Yasukawa, Ota et Iverson, 1996**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
本亜種が分布する石垣島、西表島、与那国島では継続的に水田が減少しており、それに伴って本種の生息地も減少し続けている。また、販売目的の捕獲も個体数減少の一因になっていると考えられる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

八重山諸島に分布する日本の固有亜種。背甲は褐色ないしオリーブ色で基亜種よりも扁平。水田や農業用のため池などに多いが、山地森林の中を通る林道沿いや、谷筋の池でも観察される。水田の減少と販売目的の違法採集が本亜種の存続を脅かす主要因と考えられる。さらに、基亜種のミナミイシガメがペットとして流通しており、それらが本亜種の生息範囲に持ち込まれ、逸走した場合、交雑による遺伝的汚染の進行が強く懸念される。

基礎情報

【形態】

背甲長はオスで最大 189 mm、メスで 176 mm に達する。オスは大型で、腹甲は凹む。背甲は褐色で基亜種ミナミイシガメよりも色が薄い傾向がある。基亜種よりも甲の高さが低く、幅広のため、扁平にみえる。頭部の基色は、基亜種が茶色や暗褐色なのに対し、本亜種は黄褐色ないしオリーブ色で、目の後方の黄色い模様は無いか目立たない。腹甲は各甲板に暗色の部分があるが、そのサイズは基亜種よりも小さく、互いにつながらずに独立している。

【生活史】

オスのほうが大型になるサイズの性的二型は、水中でオスが半ば強制的にメスに乗りかかり交尾することと関係していると考えられている。飼育下で、8 月から 9 月初旬に 4 個の卵を産んだという記録がある。半水性で、水中にいることが多いが、降雨のある夜間に地上を徘徊している個体を見かけることもある。雑食性で、落下した陸生植物の果実、魚類、両生類の幼生、昆虫類、ミミズなど様々なものを餌とする。

【生息環境】

水田や池、湿地などに多いが、穏やかな流水域で見られることもある。農業用のため池や水田などの人為的環境で多く見られるが、少なくとも西表島や与那国島では山地森林の中を通る林道沿いの集水桝や、谷筋に自然にできたと思われる池でも普通に観察されることから、丘陵地にもかなりの個体が生息しているものと思われる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】ため池・池沼 【陸域_平地部】森林，田地・畑地，湿地・湿原，農業用水路，小河川，ため池・池沼
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域，(4) 河川・湿地地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

八重山諸島の固有亜種で、石垣島、西表島、与那国島に分布する。基亜種のミナミイシガメ *Mauremys mutica mutica* は台湾、中国南部ベトナムなどに分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

本亜種の分布は石垣島、西表島、与那国島の 3 島に限定され、水田や人工的なため池などを主たる生息地としている。水田の面積は 3 島全てで大幅に減少していることから、生息範囲は狭まっていると考えられる。外来種として、宮古島や沖縄島をはじめ、沖縄県の他の多くの島に定着しており、場所によってはその密度は低くない。

【生息地の現況】

水田の減少に加え、農薬の使用の影響も指摘されており、本亜種の生息環境は悪化している。

【個体数の現況】

石垣島、西表島、与那国島における水田の面積は、2009 年の資料ではおよそ 640ha に過ぎない。この数字と、センサス調査に基づく生息密度の概算値から、3 島を合計した個体数はおよそ 33,000 個体と推定されている。水田以外で本種を見かけることも少なくないことから、推定個体数については再評価が必要と思われるが、それでも個体数は限られていると考えるべきである。

存続を脅かす要因

水田の減少と販売目的の捕獲が本亜種の存続を脅かす 2 大要因と考えられる。水田の面積は、本亜種が分布する 3 島のいずれにおいても顕著に減少しており、全体では、過去数十年の間に半分以下になっているという資料がある。石垣島では最近の土地開発がこれに拍車をかけている。販売目的の捕獲について、2010 年代半ばに、1 年半の間におよそ 6,000 個体が捕獲されていたという資料があり、仮に、現存個体数が 33,000 個体だとすると、1 年間で全体の 12%にあたる個体が採られていたことになる。現在では、本亜種の輸出は制限されているものの、依然、売買用のカメ類の需要は高いと思われ、最大限の警戒が必要である。また、轢死も個体数減少の一因になっている可能性がある。さらに、基亜種との交雑による遺伝的汚染も懸念される。基亜種ミナミイシガメはペットとして販売されており、また、国内に定着個体群も存在するため、それらが八重山諸島の 3 島に持ち運ばれ遺棄された場合、遺伝的汚染は容易に進行してしまうと考えられる。また、沖縄県の島々に定着している同亜種の個体群のなかにはすでに純系のヤエヤマイシガメではないものも混じっている可能性もあり、そういう意味でも、島間の個体の持ち運びは慎むべきである。

要因の区分：	（過去）	湿地開発，圃場整備，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	河川開発，湿地開発，圃場整備，捕獲・狩猟/園芸採取

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヤエヤマイシガメ	*Mauremys mutica kami*	VU
第４次 2019：	ヤエヤマイシガメ	*Mauremys mutica kami*	VU
第４次 2018：	ヤエヤマイシガメ	*Mauremys mutica kami*	VU
第４次 2017：	ヤエヤマイシガメ	*Mauremys mutica kami*	VU
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—

第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

都道府県条例指定種【沖縄県】

参考文献

- 嶋津信彦，2019．沖縄におけるヤエヤマイシガメの 2 つの顔．九州両生爬虫類研究会（編），九州・奄美・沖縄の両生爬虫類-カエルやヘビのことをもっと知ろう，pp. 210-211．東海大学出版部，平塚.
- 鈴木大，2021．ミナミイシガメ ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 94-95．サンライズ出版，彦根.
- 戸田守，2017．ヤエヤマイシガメ．沖縄県環境部自然保護課（編）改定・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 202-203．沖縄県環境部自然保護課，那覇.
- Yasukawa, Y., H. Ota, and J. B. Iverson, 1992. Geographic variation and sexual size dimorphism in *Mauremys mutica* (Cantor, 1842) (Reptilia: Bataguridae), with description of a new subspecies from the Southern Ryukyus, Japan. Zoological Science, 13: 303–317.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Mauremys mutica kami has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Mauremys mutica kami* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland, Wetland, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond
Threat types:	River development, Wetland development, Field preparation, Hunting and collecting animals/Gathering plants
Law designation status for conservation	Prefectural Ordinance-Designated Species【Okinawa】.



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　トカゲモドキ科 Eublepharidae　　日本固有

クロイワトカゲモドキ

***Goniurosaurus kuroiwae* (Namiye, 1912)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A: ―	基準 B: EN	基準 C: ―	基準 D: ―	基準 E: ―

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
分布域の全域で人為的な環境改変が進み、広い範囲で生息地は互いに分断されていると考えられる。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
分布域のほぼ全域で人為的な環境改変が進み、生息地は継続的に消失している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

沖縄諸島の 4 島に分布するこの地域の固有種で、常緑広葉樹林に覆われた山地とその周辺および植生に覆われた石灰岩地に見られる。分布域の広い範囲が人間活動が盛んな地域と重なるため、環境改変により個体群が縮小、断片化している。小島嶼の一部では個体数が極めて少ないと考えられる。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長は 75～95 mm ほどで、沖縄島内で側所的に分布するヤンバルトカゲモドキ（*G. nebulozonatus*）とほぼ同じ。生体の虹彩は赤褐色ないし暗赤褐色。背面のパターンは変異に富むが、伊江島のものを除き、多くの場合胴の後半にまで続く桃色の背中線を持つ。また、ほとんどの個体が明瞭な横帯を欠く。伊江島のものでは、少なくとも胴前半部に明色の背中線を持ち、加えて明瞭な横帯を持つことが多い。横帯と横帯の間にはフレーク状の小斑がある。伊江島のものは背中線および横帯の色彩も変異に富み、淡桃色からオレンジ色、黄色みの強いものまで様々。背中線や横帯の輪郭がぼやけずにはっきりしている点でヤンバルトカゲモドキと区別できる。腹面には偏平な鱗が瓦状に並ぶ。

【生活史】

4～10 月に目撃される個体が多くなり、6～7 月にもっとも活動性が高くなる。産卵期は 5～8 月で、メスはこの間に少なくとも 1 ヶ月以上の間隔を空け、複数回産卵する。産卵場所は詳しくは分かっていないが、石灰岩洞窟の中から卵殻が見つかっている。一度に 2 卵が産み落とされ、9～11 月頃に頭胴長 40 mm ほどの孵化幼体が現れる。孵化幼体は雌雄ともに生後 20 ヶ月ほどで頭胴長 75 mm に達し、繁殖に参加する。野外での寿命は 4～5 年程度の場合が多いが、7 歳の個体も確認されている。林床で活動するクモ類、昆虫類、ムカデ類、ワラジムシ類等をおもな餌としている。おもに探索型の採餌をする。

【生息環境】

常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林に生息し、そういった植生を伴う石灰岩地域でよく見られる。洞窟やその周辺でしばしば数が多い。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，岩壁・ガレ場（石灰岩地等），洞窟・地下浅層・地下水域 【陸域_平地部】森林，市街緑地，洞窟・地下浅層
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（3）都市地域，（7）島嶼地域

【分布域】

沖縄島の名護市以南（本部半島を含む）、伊江島、瀬底島、屋我地島に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

沖縄島では本部半島と南部でそれぞれ比較的連続した生息地がある。沖縄島の中部～中南部では密度は低く、分布も不連続で、都市部の周囲では極度に断片化している。伊江島では、生息場所での個体密度こそ低くないが、個々の生息地は非常に小規模で、互いに隔てられている。瀬底島と屋我地島では生息が確認されている地点が限られており、分布域はとても狭いと考えられる。

【生息地の現況】

沖縄島中南部および伊江島、屋我地島では、本種の生息条件を満たす森林は非常に限られており、しかも断片化が進んでいる。瀬底島ではわかっている生息地は非常に限られており、その周辺でも環境改変により潜在的な生息地が失われている。本種が比較的多く見られる沖縄島の本部半島と南部でも、開発に伴って継続的に生息地の消失が進んでいる。

【個体数の現況】

資料が不足していて、個体数やその減少率を具体的に推定するのは不可能だが、瀬底島では発見するのが容易でなくなってきており、すでに危険なレベルまで個体数が減少している可能性が高い。また、沖縄島の各地と屋我地島では継続的に環境改変が行われ、生息地の消失に伴い個体数は大幅に減少していると考えられる。

存続を脅かす要因

森林伐採、宅地造成、道路や圃場の整備など、さまざまな人間活動に伴う環境改変により生息地が消失している。また、商業目的の違法採集も圧迫要因になっていると考えられる。外来性の食肉類による捕食の影響も懸念される。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，海岸開発，圃場整備，洞窟の消失や環境悪化，土地造成，交通インフラ建設，捕食（外来種による），違法採集，分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，海岸開発，圃場整備，洞窟の消失や環境悪化，土地造成，交通インフラ建設，捕食（外来種による），違法採集，分布・産地局限

特記事項

沖縄島のなかで交雑帯を形成しながらもヤンバルトカゲモドキと側所的に分布するメカニズム、およびそういった分布様式の形成課程は十分に解明されていないが、狭い島嶼のなかでの種の多様化や共存のしくみを知る上で高い学術的価値を持つといえる。本種を含む琉球産トカゲモドキ類全体としても島嶼域で多くの種が形成され、維持されてきたと考えられるため、そのプロセスを理解するために引き続き研究が必要である。またそういった研究をとおして、琉球地域の古地理、古環境を知ることにも繋がる可能性があることから、その学術的価値は高い。沖縄県の天然記念物に指定されている。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義クロイワトカゲモドキ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	クロイワトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae kuroiwae*	VU
第４次 2019：	クロイワトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae kuroiwae*	VU

第４次 2018：	クロイワトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae kuroiwae*	VU
第４次 2017：	クロイワトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae kuroiwae*	VU
第４次 2015：	クロイワトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae kuroiwae*	VU
第４次：	クロイワトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae kuroiwae*	VU
第３次：	クロイワトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae kuroiwae*	VU
第２次：	クロイワトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae kuroiwae*	VU
第１次：	クロイワトカゲモドキ	*Eublepharis kuroiwae*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- Grismer, L. L., H. Ota, and S. Tanaka, 1994. Phylogeny, classification, and biogeography of *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae) from the Ryukyu Archipelago, Japan, with description of a new subspecies. Zool. Sci., 11: 319–335.
- 栗田隆気・川村玲未，2011．沖縄県名護市屋我地島からのクロイワトカゲモドキの初記録．Akamata，22: 15‐20．
- Kurita, T. and M. Toda, 2013. Validation and application of skeletochronology for age determination of the Ryukyu ground gecko, *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae). Asian Herpetol.Res., 4: 233–241.
- Kurita, T., M. Honda, and M. Toda, 2018. Species delimitation and biogeography of the Ryukyu ground geckos, *Goniurosaurus kuroiwae* ssp. (Squamata: Eublepharidae), by use of mitochondrial and nuclear DNA analyses. J. Zool. Syst. Evol. Res., 56: 209-222.
- Kurita, T., R. Kawamura, and M. Toda, 2013. Limestone cave as a cradle of the Ryukyu ground gecko, *Goniurosaurus kuroiwae*. Herpetol. Rev., 44: 569–572.
- Tanaka, S. and M. Nishihira, 1987. A field study of seasonal, daily, and diel activity patterns of *Eublepharis kuroiwae kuroiwae*. Herpetologica, 43: 482–489.
- Tanaka, S. and M. Nishihira, 1989. Growth and reproduction of the gekkonid lizard *Eublepharis kuroiwae kuroiwae*. In: M. Matsui, T. Hikida and R. C. Goris (eds.), Current Herpetology in East Asia, pp. 349–357. Herpetological Society of Japan, Kyoto.
- 戸田守・田中聡，2017．クロイワトカゲモドキ．沖縄県環境部自然保護課（編）改定・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 191‐193．沖縄県環境部自然保護課，那覇．

- 戸田守，2014．クロイワトカゲモドキ． 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編），レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物－3 爬虫類・両生類，pp. 34-35．ぎょうせい，東京．
- Werner, Y. L., H. Takahashi, Y. Yasukawa, and H. Ota, 2006. Factors affecting foraging behaviour, as seen in a nocturnal ground lizard, *Goniurosaurus kuroiwae kuroiwae*. J. Nat. Hist., 40: 439–459.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Goniurosaurus kuroiwae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Goniurosaurus kuroiwae* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area), Cave/Shallow underground/Subterranean water body 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Urban green area, Cave/Shallow underground
Threat types:	Logging and wood harvesting, Coastal development, Field preparation, Loss of caves and environmental deterioration, Land development, Transportation infrastructure construction, Predation (by alien species), Illegal harvesting of biological resources, Limited distribution
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　トカゲモドキ科 Eublepharidae　　日本固有

ケラマトカゲモドキ

***Goniurosaurus sengokui* Honda et Ota, 2017**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
渡嘉敷島ではかつて比較的高い頻度で個体がみられ、少なくとも 1970 年代後半までは集落内でも普通に生息していたとされるが、近年までに集落付近で発見する機会は激減している。また、林道等で見かける個体の数も減っていることから、実質的な生息地面積や個体数は減少し続けていると考えられる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

沖縄諸島の渡嘉敷島と阿嘉島に分布する固有種で、渡嘉敷島では山地渓流沿いや林道沿いを中心に、集落の近辺でも見られる。ただし生息地の環境改変は続いており、個体群のさらなる縮小が懸念される。阿嘉島では極めて限られた範囲からしか見つかっておらず、個体群は危機的状況にある。

基礎情報

【形態】

頭胴長はオスで最大 88 mm、メスで 92 mm に達する。胴背面に横帯と縦条成分を併せ持ち、その色は桃色やオレンジ色など変異に富むものの多少なりとも赤味を帯びること、横帯の間に淡色の小班がみられること、虹彩が赤味を帯びることなどで特徴付けられる。

【生活史】

主に、常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林に生息し、メスは 6～7 月にかけて 1 度に 2 卵を産卵する。

【生息環境】

常緑広葉樹の自然林や二次林の林床や渓流沿いの岩場などに生息する。渡嘉敷島では林道沿いのほか、ある程度人の生活圏に隣接した地域でも見られる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，岩壁・ガレ場（石灰岩地等），河川源流域，河川上流域 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

沖縄諸島の渡嘉敷島と阿嘉島の 2 島だけに分布する。かつて渡嘉敷島では、集落や林道沿い、渓流沿いなど様々な環境、様々な地点で生息が確認され、比較的高い頻度で個体がみつかる場所もあった。一方、阿嘉島では、本種が初めて記録された 1983 年以降長年情報がなく、個体群が消滅した可能性も考えられていたが、近年、その存続が確認された。

現在の生息状況

【分布域の現況】

本種の主要な生息地である渡嘉敷島は全体でも面積 15.29 km^2であり、そのなかの実際の生息地面積は広く見積もっても 12 km^2ほどである。過去には、比較的多くの個体がみられる場所もあったが、そういう場所は近年では明らかに減少している。阿嘉島での生息実態は長年不明であったが、2017 年に同島から 2 個体目となる個体が発見され、集団の存続が確認された。現在までに 2 つの地点で生息が確認され、それぞれ複数の個体が見つかっているが、各々の範囲は数値で示せないほど狭く、危機的な状態であることに変わりはない。

【生息地の現況】

両島とも林道の整備、土地改良などにより生息環境は悪化している。また、阿嘉島にはイタチが定着しており、本種を含む小動物の一部は大きな影響を受けていると考えられる。一方、渡嘉敷島には、最近になってイノシシ（イノブタ）が定着・拡散し、山地の広い範囲で底質が掘り返され、本種を含む地表性の小動物に甚大な被害をもたらしているも

のと思われる。

【個体数の現況】

資料が不足していて、個体数やその減少率を具体的に推定するのは不可能だが、少なくとも渡嘉敷島では生息適地の消失と外来種の影響で個体数は減少していると考えられる。阿嘉島においてはさらに情報が少なく、個体数の増減を評価する状況にないが、個体群が再発見されて以降の調査によっても、発見地点、発見個体数とも非常に限られていることから、集団の存続にとって危険な水準にあることは間違いない。

存続を脅かす要因

道路の建設や森林伐採、土地改良などの環境改変による生息地の消失が存続を脅かす主要因となっている。また、集落近辺の伝統的な石垣が減ったことが個体数減少の一要因となっている可能性が指摘されている。観光に関連した来島者数が増えていることに伴って違法採集のリスクも増大している。さらに渡嘉敷島では、人為的に持ち込まれたイノシシ（イノブタ）による土の掘り返しがひどく、直接的または間接的に本種の生息に悪影響を与えていると考えられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕食（外来種による），違法採集，分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，捕食（外来種による），違法採集，分布・産地局限

特記事項

本種を含む国産のトカゲモドキ類は奄美・沖縄諸島のなかで地理的に細かく分化しており、同地域における生物多様性創出の過程を解明するうえで学術的に高い価値がある。阿嘉島の集団の本種への帰属は画像データに基づいていたが、最近の DNA を使った研究によって、本集団は確かに他種とは異なり、渡嘉敷島の集団に近いことが確かめられた。なお系統的には、ケラマトカゲモドキは、地理的に隣接する渡名喜島のマダラトカゲモドキや久米島のクメトカゲモドキに近いことが示されている。沖縄県の天然記念物に指定されている。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義マダラトカゲモドキ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ケラマトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae sengokui*	EN
第４次 2019：	ケラマトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae sengokui*	EN
第４次 2018：	ケラマトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae sengokui*	EN
第４次 2017：	—	—	—

第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- Grismer, L. L., H. Ota, and S. Tanaka, 1994. Phylogeny, classification, and biogeography of *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae) from the Ryukyu Archipelago, Japan, with description of a new subspecies. Zool. Sci., 11: 319–335.
- Honda, M., T. Kurita, M. Toda, and H. Ota, 2014. Phylogenetic relationships, genetic divergence, historical biogeography and conservation of an endangered gecko, *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae), from the Central Ryukyus, Japan. Zool. Sci., 31: 309–320.
- 栗田隆気，2021．ケラマトカゲモドキ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 107．サンライズ出版，彦根．
- Kurita, T., and M. Toda, 2024. Genetic and morphological studies on *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae), with a description of a new species from the northern part of Okinawajima Island, Ryukyu Archipelago, Japan. Curr. Herpetol., 43: 86–114.
- Ota, H., M. Honda, M. Kobayashi, S. Sengoku and T. Hikida, 1999. Phylogenetic relationships of eublepharid geckos (Reptilia: Squamata): A molecular approach. Zool. Sci., 16: 659–666.
- 戸田守，2014．マダラトカゲモドキ．環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編）レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物－3 爬虫類・両生類，pp. 16-17．ぎょうせい，東京．
- 戸田守・田中聡，2017．マダラトカゲモドキ．沖縄県環境部自然保護課（編）改定・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 184-185．沖縄県環境部自然保護課，那覇．
- 当山昌直，1983．沖縄群島の両生爬虫類相（II）-座間味村の両生爬虫類．沖縄県立博物館総合調査報告書 III-座間味村-，pp. 16-22．沖縄県立博物館，那覇．

- Werner, Y. L., H. Takahashi, and H. Ota, 2004. The varied foraging mode of the subtropical eublepharid gecko *Goniurosaurus kuroiwae orientalis*. J. Nat. Hist., 38: 119–134.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Goniurosaurus sengokui has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Goniurosaurus sengokui* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area), River headwater, Upper river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction, Predation (by alien species), Illegal harvesting of biological resources, Limited distribution
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　トカゲモドキ科 Eublepharidae　　日本固有

クメトカゲモドキ

***Goniurosaurus yamashinae* (Okada, 1936)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab				
基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
久米島の地形と現在の土地利用状況から考えて、2 つの山系の間で遺伝的な交流が妨げられていることはほぼ明らかである。それぞれの地域のなかでも個体群はいくつかに寸断されていると思われる。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
農地開発などの影響によって生息域の減少が進んでいる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

沖縄諸島久米島の固有種で、虹彩が赤みを帯びず、黄褐色である点で近縁種と区別できる。常緑広葉樹林に覆われた山地とその周辺に見られる。土地改良や林道整備等による生息地の環境改変が続いており、個体群のさらなる縮小が懸念される。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長は 75～85 mm ほどで、胴部の模様が横帯を基調とする点で類似するイヘヤトカゲモドキ（*Goniurosaurus toyamai*）と比べると、より細身の体型をしている。他の全ての国産の同属種で虹彩が赤味を帯びているのに対し、本種では赤味がなく黄褐色であるのが最大の特徴。胴背面に 4 本ある横帯も黄色味を帯びたクリーム色で、幼体では黄色味も弱く白に近い。背面に縦条はなく、横帯と横帯の間には不規則な小斑がある。腹面には一様に偏平な鱗が瓦状に並ぶ。

【生活史】

4～9 月の夜間に活動中の個体が観察されている。少なくとも 6 月中旬～7 月中旬にかけて輸卵管卵をもったメスが現れ、一度に 2 個産卵することが分かっている。しかし繁殖期間や 1 シーズンあたりの産卵回数等は不明。世代期間、社会構造についても不明。国産の同属種と同様、地上性の無脊椎動物を捕食すると考えられるが、具体的な知見はない。

【生息環境】

おもに常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林内に生息するが、畑の近辺にも出現することがある。洞窟内でも確認されている。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，岩壁・ガレ場（石灰岩地等），洞窟・地下浅層・地下水域 【陸域_平地部】森林，田地・畑地，洞窟・地下浅層
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（7）島嶼地域

【分布域】

沖縄諸島の久米島に固有。国産の他の同属種は、奄美諸島の徳之島と、沖縄諸島の沖縄島およびその西側の島々に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

資料が少なく、分布域の経時的な変化については不明。久米島の中央部では本種の生息に適した環境は限られるため、同島北部の宇江城岳を中心とする分布域と、同島南部のアーラ岳山系の分布域は寸断されていると考えられる。

【生息地の現況】

土地改良や林道整備により生息条件を満たす環境は縮小、断片化の傾向にある。

【個体数の現況】

資料が少なく、個体数やその動態について具体的な推定値を出すことはできないが、全体として生息に適した環境が縮小していることから、個体数も減少傾向にあると考えられる。

存続を脅かす要因

林道建設や農地改良による生息地の縮小が、個体数減少のもっとも大きな要因と考えられる。また、違法採集が繰り返し行われ、最近でも摘発事例があるなど、違法採集者による捕獲圧も本種の減少の一因と考えられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，違法採集
	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，違法採集

特記事項

本種を含む国産のトカゲモドキ類は奄美・沖縄諸島のなかで地理的に細かく分化しており、同地域における生物多様性創出の過程を解明するうえで学術的に高い価値がある。形態形質の変異分析に基づき、クメトカゲモドキは本種のなかでもっとも最初に分化したとされていたが、DNA 分析の結果から、徳之島のオビトカゲモドキの分岐のほうが古いことが示されている。沖縄県の天然記念物に指定されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	クメトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae yamashinae*	CR
第４次 2019：	クメトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae yamashinae*	CR
第４次 2018：	クメトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae yamashinae*	CR
第４次 2017：	クメトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae yamashinae*	CR
第４次 2015：	クメトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae yamashinae*	CR
第４次：	クメトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae yamashinae*	CR
第３次：	クメトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae yamashinae*	CR
第２次：	ヤマシナトカゲモドキ（クメトカゲモドキ）	*Goniurosaurus kuroiwae yamashinae*	EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- Grismer, L. L., H. Ota, and S. Tanaka, 1994. Phylogeny, classification, and biogeography of *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae) from the Ryukyu Archipelago, Japan, with description of a new subspecies. Zool. Sci., 11: 319–335.
- Honda, M., T. Kurita, M. Toda, and H. Ota, 2014. Phylogenetic relationships, genetic divergence, historical biogeography and conservation of an endangered gecko, *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae), from the Central Ryukyus, Japan. Zool. Sci., 31: 309–320.
- Janssen, J. and C. R. Shepherd, 2019. Trade in endangered and critically endangered Japanese herpetofauna endemic to the Nansei Islands warrants increased protection. Curr. Herpetol., 38: 99–109.
- 栗田隆気．2021．クメトカゲモドキ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 107-108．サンライズ出版，彦根.
- 戸田守，2014．クメトカゲモドキ．環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編）レッドデータブック 2014‐日本の絶滅のおそれのある野生生物－3 爬虫類・両生類，pp. 4‐5．ぎょうせい，東京.
- 戸田守・田中聡，2017．クメトカゲモドキ．沖縄県環境部自然保護課（編）改定・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 185‐186．沖縄県環境部自然保護課，那覇.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Goniurosaurus yamashinae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Goniurosaurus yamashinae* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area), Cave/Shallow underground/Subterranean water body 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland, Cave/Shallow underground
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure

	construction, Illegal harvesting of biological resources
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　トカゲ科 Scincidae　　日本固有

センカクトカゲ

***Plestiodon takarai* Kurita, Ota et Hikida, 2017**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab				
基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
分布は従来から尖閣諸島の 4 島（合わせても 7 km²足らず）に限られており、しかもそのうち最大の生息地である魚釣島では、野生化したヤギにより植生の破壊が進んでいる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

尖閣諸島の固有種。ユーラシア大陸東部や台湾のアオスジトカゲに近縁で、東アジアの生物地理を考える上で、また小島嶼における特殊化を考える上で貴重な資料を提供している。生息地面積は最大でも、合わせて 7 km²足らずの 4 小島嶼に限られる。このうち面積で全体の半分以上を占める魚釣島では、外来種であるヤギの増加にともなう植生の劣化・環境の破壊が進んでおり、生息範囲の縮小や個体数の減少が強く懸念される。

基礎情報

【形態】

全長 145～172 mm で、尾は非再生のものの場合、全長の 55%前後を占める。後鼻板がなく、大腿部の後側に不規則な形状の大型鱗のかたまりがあり、また後肛板の 1 対にキールがある。胴部の体鱗は 28 列の場合が多い。幼体の地色は黒色ないし暗褐色で、5 本の白色ないし淡黄色の縦条が走る。幼体の尾は、先端側の半分のみが青色で、基部側の半分は褐色。このような幼体色は成長とともに失われ、成体では尾も含めて全体的に褐色となる。

【生活史】

メスは地表の岩の下を掘るなどして作った空所に 6、7 個産卵し、同属の他種と同様、ふ化するまでそばにいて保護する。尖閣諸島でのふ化の時期は 6 月下旬で、この頃になると全長 73 mm 前後の幼体が地表に現れる。

【生息環境】

尖閣諸島では岩場や草地、灌木林などの広い範囲で観察される。魚釣島では海鳥の営巣地周辺にも多く、育雛中の親鳥が吐き戻したヒナの餌（半消化の魚）の一部を利用するのが観察されている。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】草地，岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【陸域_平地部】草地
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（7）島嶼地域

【分布域】

尖閣諸島の魚釣島、南小島、北小島、久場島だけに見られる。琉球の他の島々からも記録されたことがあるが、尖閣諸島以外からの記録はすべてイシガキトカゲやオキナワトカゲといった近似種の誤同定に起因している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

産地は尖閣諸島の 4 島のみであり、生息面積は全部合わせても最大で 7 km^2足らずの範囲に限られている。

【生息地の現況】

分布域全体の面積の半分以上を占める魚釣島では、野生化したヤギによる植生の食害とそれにともなう土壌の浸食が進んでおり、1971 年、1979 年、1991 年に魚釣島で上陸調査を行った池原貞雄博士の私信によると、餌の供給源のひとつと考えられる海鳥の営巣数も減っている。そしてこうした環境の悪化から、島内で実際に生息できる範囲が年々狭まっていることが考えられる。

【個体数の現況】

個体数やその近年における変動は不明。しかしながら、尖閣諸島における分布面積の大半を占める魚釣島での野生化したヤギに起因する植生の後退や、それにともなう土地の浸

食により個体数が減少傾向にあることが強く懸念される。

存続を脅かす要因

分布は従来から尖閣諸島の 4 島（合わせても 7 km²足らず）に限られており、しかもそのうち最大の生息地である魚釣島では、野生化したヤギによる植生の破壊が進んでいる。

要因の区分：	（過去）	遷移進行・植生変化/自然遷移，分布・産地局限，その他（外来種（ヤギ）による植生改変）
	（現在）	遷移進行・植生変化/自然遷移，分布・産地局限，その他（外来種（ヤギ）による植生改変）

特記事項

本種は、台湾や大陸東部に分布するアオスジトカゲに近縁であることから、尖閣諸島が琉球の他の島々と違ってユーラシア大陸東部や台湾と、より最近（更新世末期の氷期）まで一体化した時期があったという古地理を反映しており、生物地理学的に貴重な資料となっている。また、それにもかかわらず大陸や台湾の集団との間で体色や鱗相に変異が生じており、小島嶼の集団における特殊化という観点からも学術的価値が高い。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	センカクトカゲ	*Plestiodon takarai*	EN
第４次 2019：	センカクトカゲ	*Plestiodon takarai*	EN
第４次 2018：	センカクトカゲ	*Plestiodon takarai*	EN
第４次 2017：	アオスジトカゲ	*Plestiodon elegans*	EN
第４次 2015：	アオスジトカゲ	*Plestiodon elegans*	EN
第４次：	アオスジトカゲ	*Plestiodon elegans*	EN
第３次：	アオスジトカゲ	*Plestiodon elegans*	EN
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】情報不足(DD)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Brandley, M., H. Ota, T. Hikida, A. Nieto Montes de Oca, M. Feria Ortiz, X. Guo, and Y. Wang, 2012. The phylogenetic systematics of blue-tailed skinks (*Plestiodon*) and the family Scincidae. Zool. J. Linn. Soc., 165: 163–189.
- Hikida, T. 1989, The Ryukyu blue-tailed skink, *Eumeces marginatus*, not distributed in Taiwan. J. Taiwan Mus., 42: 81–88.
- Kato, J. and H. Ota, 1994. Notes on the breeding of the five-lined skink, *Eumeces elegans*. Acta Zoologica Taiwanica, 5: 77–81.
- Ota, H., 2004. Notes on the reproduction and variation in the blue-tailed lizard, *Eumeces elegans* (Reptilia: Scincidae), on Kita-kojima Island of the Senkaku Group, Ryukyu Archipelago. Cur. Herpetol., 23: 37–41.
- Ota, H., N. Kamezaki, M. Toda and S. Okada, 2010. Osumi Islands: (iii) amhibians/reptiles, Tokara and Amami Islands: (iii) amhibians/reptiles, Okinawa and Kerama Islands: (iii) amhibians/reptiles, Daito Islands: (iii) amhibians/reptiles, Miyako Islands: (iii) amhibians/reptiles, Yaeyama and Senkaku Islands: (iii) amhibians/reptiles, Amphibians/Reptiles, references. In: S. Yasumura (ed.), Nansei Islands Biological Diversity Evaluation Project Report, pp. 6–7, 12–14, 20–21, 20, 32–33, 37–39, 196–201. WWF Japan, Tokyo.
- Ota, H., N. Sakaguchi, S. Ikehara and T. Hikida, 1993. The herpetofauna of the Senkaku Group, Ryukyu Archipelago. Pacific Sci., 47: 248–255.
- 横畑泰志・横田昌嗣・太田英利，2009．尖閣諸島魚釣島の生物相と野生化ヤギ問題．広島大学平和科学研究センター（IPSHU）研究報告，42: 307‐326.
- Yokohata, Y., Y. Ikeda, M. Yokota, and H. Ishizaki, 2003. The effects of introduced goats on the ecosystem of Uotsuri-Jima, Senkaku Islands, Japan, as assessed by remote-sensing techniques. Biosphere Conserv., 5: 39–46.
- Zhao, E. M., and K. Adler, 1993. Herpetology of China. Society for the Study of Amphibians and Reptiles. Oxford, Ohio. 522pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Plestiodon takarai has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Plestiodon takarai* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Grassland, Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland
Threat types:	Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution, Other
Law designation status for conservation	—





執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　カナヘビ科 Lacertidae　　日本固有

ミヤコカナヘビ

***Takydromus toyamai* Takeda et Ota, 1996**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A:　—	基準 B:　EN	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
宮古島のなかで、本種の生息に適する森林に面した草地は農耕地などにより激しく断片化しており、野外調査の結果から、それらの間の地域に、基本的に本種が生息しない空白地帯があることはほぼ明らかである。また、周辺離島における本種の分布もほとんどの場合局地的であり、現在の農地の多くが本種の生息に適さないことはほぼ間違いない。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
人為的な環境改変による生息地の消失は現在でも進行しており、今後、それに歯止めがかかると予測できる要素はない。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

宮古諸島に分布する日本固有種。細長い体型と長い尾をもち、体色は緑色。草むらを生息場所とし、日中に活動中の個体が見られる。以前は普通種であったが、近年顕著に数を減らしている。直近の 10 年間においても減少は明らかで、わかっているだけでも既知の生息地がいくつか消失している。圃場整備や宅地の造成、その他の土地開発に伴って生息適地は継続的に減少している。そのほかにも、農薬の使用を含む農業形態の変化、ニホンイタチ、インドクジャク、イエネコ等による捕食、ペット販売を目的とした違法採集の影響が考えられる。生息地は不連続であり、個々の生息地の縮小と断片化とが複合的に効いて、分布域のほとんどで大幅な個体数の減少を招いていると考えられる。

基礎情報

【形態】

体型は細長く、尾が長い。頭胴長は 45～65 mm で、尾はその 3～3.5 倍の長さ。背面は鮮やかな緑色で四肢は褐色であることが多い。ごく稀に胴背面が淡褐色の個体が出現する。アオカナヘビと体色は似ているが、アオカナヘビに見られる頭胴部側面の白線がない。また、アオカナヘビに見られるような、オスの体表に広く褐色部が存在するという意味での性的二型はない。咽頭板は 3 対、鼠径孔は 1 対でアオカナヘビと同様だが、腹面鱗列数がアオカナヘビは 6 列であるのに対してミヤコカナヘビは 8 列。

【生活史】

一年に複数回産卵し、一度に 1～3 個（通常は 2 個）の卵を産む。草の根元や浅い土中に産卵すると思われるが詳細は不明。卵は 1 ヶ月半ほどで孵化する。産卵期は 3～9 月と長期におよび、5 月から孵化幼体の加入が始まる。春季～夏季の幼体の成長は著しく早く、シーズンの前半に孵化した個体は 2.5 ヶ月ほどで成熟し、同年のうちに繁殖に参加する。繁殖後も生存して翌シーズンに繁殖する場合もあるが、2 年を超えて生残することはかなり稀。標識再捕獲法による調査から、大多数の個体は 1 年以上生存しないと考えられる。昼行性で、おもに昆虫やクモなどの小型節足動物を捕食する。冬季には活動性が低下するが、気温が高い日には活動している個体をみかける。縄張りなどの行動は知られていないが、成体のほとんどで、交尾痕以外にも体表に他個体によって付けられたと考えられる噛み跡が確認されるため、多少なりとも排他的な行動をとると思われる。

【生息環境】

主に林縁部の草地に生息する。農耕地や民家の庭などでも確認されるほか、林内でみられることもある。乾燥に弱く、朝、夜露を舐めて吸水するため、露が降りる環境であることが重要と考えられる。草本で覆われた農業用の水路のなかで見つかることもある。日中、日なたで体温調節を行い活発に活動する。地面に降りることもあるが、主にススキなどの草の上で活動し、つる植物や、低木の枝を利用することもある。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路 【陸域_平地部】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，住宅地，市街緑地，農業用水路
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（3）都市地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

宮古諸島に固有で、宮古諸島のなかでは多良間島と水納島を除く全ての島に生息する。過去の産地記録や生息状況を記した資料は限られるが、聞き取り調査の結果などから、1970 年代ごろまでは農耕地や集落内を含む人の生活圏の周辺で普通に見られていたことが示唆され、少なくとも宮古島と伊良部島の広い範囲にかなりの密度で生息していたと考えられる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現在は、生息を確認できる地点が点在している状況で、多くの生息地は狭い範囲に限定されているうえ、確認される個体数も少ない。宮古島では、島の中央部から東にかけての地域で特に少なく、現在でも個体が確認されているのは数カ所にも満たない。池間島、来間島、伊良部島、下地島でも個体の確認地点はぞれぞれの島の一部に局在している。大神島では比較的広い範囲に分布している可能性が高いが、数は多くない。

【生息地の現況】

文献記録をはじめ過去に生息の情報があった地点でも、ほとんど個体を確認できなくなっている場所がある。それ以外の地域においても、一見、本種が好みそうな環境であるにも関わらず、個体が確認できない場所が非常に多い。また、ここ数年間のうちに、人為的な環境改変により完全に消失してしまった生息地も複数ある。イタチによる捕食が確認されており、インドクジャクにも食害されている可能性がある。農耕地でも生息しているところがあるが、個体を見つけるのは容易でない。かつては畑に普通にいたという情報があることから、農耕地における生息数の減少は著しいものと考えられる。

【個体数の現況】

2000 年頃までは、比較的多くの個体を見ることができる生息地もあったが、現在はほとんどの生息地で個体密度は相当低い状態にあると考えられる。ここ数年の間に完全に消失した生息地も複数あることから、個体数の減少は明らかである。

存続を脅かす要因

かつてのどこででも普通に見られた状況から減少した要因として、圃場整備や宅地造成などの環境改変と、農薬散布をはじめとする農業形態の変化が最も影響していると考えられる。生息地は不連続であり、個々の生息地の縮小と断片化とが複合的に効いて、分布域のほとんどで大幅な個体数の減少を招いていると考えられる。ただし、土地造成や農薬と直接関係しない緑地の周辺でも本種を見ることが少なくなっており、イタチやインドクジャク、イエネコによる食害も大きな圧迫要因の一つとなっていると考えられる。ペット用の販売のために本種が流通していたことが確認されているうえ、違法に採集されているという情報もあり、それも減少要因の一つと考えられる。

要因の区分：	（過去）	圃場整備，草地開発，ゴルフ場，土地造成，農薬汚染/化学物質汚染，捕食（外来種による），管理放棄，違法採集
	（現在）	圃場整備，草地開発，土地造成，捕食（外来種による），管理放棄，発電施設建設，違法採集

特記事項

分子系統学的解析から、本種は、地理的に隣接して分布し、体色もよく似たサキシマカナヘビやアオカナヘビとは系統が異なり、台湾のスタイネガーカナヘビ *T. stejnegeri* や中国のキタカナヘビ *Takydromus septentrionalis* に近縁であることが示されている。とはいえ、それらの種とも明確に分化している独立種である。近年の地質学的研究から、数十万年より前にはほぼ全域が水没していたと考えられる宮古諸島の近傍に大きな陸塊があり、そこが宮古島の固有種の起源ではないかという説が唱えられたが、台湾や中国に最近縁種を持つミヤコカナヘビの起源については、その説に基づいても十分合理的に説明できず、課題を残している。このように、島の陸生生物相の成り立ちや島の成立を知るうえで学術的に貴重な存在ということができる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ミヤコカナヘビ	*Takydromus toyamai*	CR
第４次 2019:	ミヤコカナヘビ	*Takydromus toyamai*	CR
第４次 2018:	ミヤコカナヘビ	*Takydromus toyamai*	CR
第４次 2017:	ミヤコカナヘビ	*Takydromus toyamai*	CR
第４次 2015:	ミヤコカナヘビ	*Takydromus toyamai*	CR
第４次:	ミヤコカナヘビ	*Takydromus toyamai*	CR
第３次:	ミヤコカナヘビ	*Takydromus toyamai*	EN
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業

参考文献

- Asato, H., and M. Toda. 2025. Precocious maturation and semi-multivoltine lifecycle in a subtropical grass lizard, *Takydromus toyamai*. Curr. Zool., 71: 184-195.
- 安里瞳・立津槙斗・神里秀美・徳嶺夏南子・徳嶺美南子・上地翔平・伊川佳那・石川作実・儀間朝宜・権田雅之・才木美香・戸田守．2021．ミヤコカナヘビの夜間の寝場所の選択について．Akamata，30: 29-33．

- 河内紀浩・中村泰之・渡邉環樹，2018．国内由来の外来種ニホンイタチ *Mustela itatsi* による絶滅危惧種ミヤコカナヘビ *Takydromus toyamai* の捕食．哺乳類科学 58(1): 73‐77．
- Lin, Si-Min, C. A. Chen, and K. Y. Lue, 2002. Molecular phylogeny and biogeography of the grass lizards genus *Takydromus* (Reptilia: Lacertidae) of East Asia. Mol. Phylogenet. Evol., 22: 276–288.
- 饒平名里美・当山正直・安川雄一郎・陳賜隆・高橋健・久貝勝盛，1998．宮古諸島における陸棲爬虫両生類の分布について．平良市総合博物館紀要，5: 23‐38．
- Ota, H., M. Honda, S. L. Chen, T. Hikida, S. Panha, H. S. Oh, and M. Matsui, 2002. Phylogenetic relationships, taxonomy, character evolution and biogeography of the lacertid lizards of the genus *Takydromus* (Reptilia: Squamata): a molecular perspective. Biol. J. Linn. Soc., 76: 493–509.
- 才木美香・新城宗史・久貝春陽・戸田守，2018．住民からの目撃情報に基づくミヤコカナヘビ（爬虫綱: 有隣目: カナヘビ科）の分布状況．沖縄生物学会誌，56: 1-10．
- Takeda, N. and H. Ota, 1996. Description of a new species of *Takydromus* from the Ryukyu Archipelago, Japan, and a taxonomic redefinition of *T. smaragdinus* Boulenger 1887 (Reptilia: Lacertidae). Herpetologica, 52: 77–88.
- 竹中践，2014．ミヤコカナヘビ．環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編）レッドデータブック 2014‐日本の絶滅のおそれのある野生生物－3 爬虫類・両生類．pp. 6‐7．ぎょうせい，東京．
- 竹中践, 2021．ミヤコカナヘビ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 149-151．サンライズ出版，彦根．
- 立津槙斗・神里秀美・徳嶺夏南子・徳嶺美南子・上地翔平・伊川佳那・石川作実・儀間朝宜・権田雅之・戸田守・才木美香．2022．聞き取り調査に基づくミヤコカナヘビ（爬虫綱：有鱗目）の過去の生息状況．沖縄生物学会誌，60: 1‐10．
- 戸田守・当山昌直，2017．ミヤコカナヘビ．沖縄県環境部自然保護課（編）改定・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 186‐187．沖縄県環境部自然保護課，那覇．
- 戸田守・高橋洋生，2018．ミヤコカナヘビの保全―現状と今後の展望―．爬虫両棲類学会報，2018（2）:187-193．
- 当山昌直，2019．両生類・爬虫類．宮古島市史 第 3 巻自然編第一部 みやこの自然，宮古島市史編さん委員会（編），pp. 419‐444．宮古島市教育員会，宮古島市，
- Watanabe, N, M. Otsubo, H. Ota, M. Toda, A. Tominaga, S. Chiyonobu, T. Sato, and Y. Iryu, 2023. Geological history of the land area between Miyako Jima Island and Okinawa Jima Island of the Ryukyus, Japan, and its phylogeographical significances for the terrestrial organisms of these and adjacent islands. Prog. Earth Planet. Sci., 10: 40.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Takydromus toyamai has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Takydromus toyamai is listed as EN under criteria B2ab. B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c: a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations. b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Residential area, Urban green area, Agricultural ditch
Threat types:	Field preparation, Grassland development, Land development, Predation (by alien species), Abandonment of management, Power plant construction, Illegal harvesting of biological resources
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs.





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　タカチホヘビ科 Xenodermidae　　日本固有

ヤエヤマタカチホヘビ

***Achalinus formosanus chigirai* Ota et Toyama, 1989**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab				
基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
生息に適した森林が範囲が縮小し、生息地が分断されている。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
森林伐採や土地造成、舗装道路・側溝の敷設などによって、本種の好適生息環境は狭まってきており、その一方で潜在的な捕食者、餌のミミズをめぐる競合者である外来種オオヒキガエル、キジ、インドクジャクなどの侵入、増加は続いており、生息状況は悪化していると思われる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

八重山諸島の石垣島と西表島の固有亜種で、常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林の林床とその周辺に生息。乾燥に弱く、小型で移動能力も低いため、森林伐採や土地造成、舗装道路・側溝の敷設などが、生息地の縮小、分断を引き起こしていると考えられる。このほかとくに石垣島では、外来性動物であるオオヒキガエルやキジ、インドクジャクの侵入・増加にともなう、これらからの捕食圧やエサ（ミミズ）をめぐるこれらとの競合の影響も懸念される。

基礎情報

【形態】

頭胴長 250～410 mm ほどの細長いヘビ。体鱗は最外列のものも含めて明瞭なキールをもち、胴中央で普通 27 列、まれに 25 列に並ぶ。腹板はオスで 159～167 枚、メスでは 179 枚前後。尾下板は左右に二分せず、オスで 95～97 枚、メスでは 72 枚前後。頬板と眼前板は癒合し、さらに前額板とも癒合している。全身の鱗の表面が、虹色の光沢を帯びる。背面は黒褐色で、正中部に黒色の縦条がある。腹面はやや黄味がかったクリーム色ないし淡灰色。

【生活史】

発見例が少なく不明な点が多いが、8 月初めに、全長 25 mm 足らずのふ化幼体のものと思われる乾燥死体が確認されており、おそらくこの時期がふ化期だと思われる。これまで日中は物陰や鍾乳洞内に静止した状態で見つかる一方、夜間や早朝には地表を移動しているところも観察されており、夜行性の傾向が強いと思われる。餌としてはミミズを食べていた 1 例が知られるのみ。

【生息環境】

発見例が少ないため詳細は不明だが、皮膚が薄く乾燥に弱いことから、タカチホヘビ属の他種と同様、照葉樹の自然林や回復の進んだ二次林などの林床、石灰岩植生内など、一年を通して湿潤な場所がおもな生息環境と思われる。実際、例数は少ないが、これまでの発見のほとんどはこうした湿潤な場所やその周辺から記録されている。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

八重山諸島の石垣島と西表島に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

本亜種の分布の知られる 2 島それぞれの中でも、土壌の乾燥した場所、例えば人間の居住地や畑地、牧草地、低木林、海岸植生などのほとんどでは生息は考えにくく、分布範囲は常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林およびその周辺に限られると思われる。

【生息地の現況】

本種の分布する石垣島と西表島それぞれで、湿潤な土壌を有する場所はここ数十年の間に狭まってきており、その一方で潜在的な捕食者、餌のミミズをめぐる競合者である外来種オオヒキガエル、キジ、インドクジャクなどの侵入、増加は続いており、生息地の縮小、分断が進行中と思われる。

【個体数の現況】

生息に適した場所の縮小から個体数が減少傾向にあるのは間違いないが、具体的な数値等は不明。

存続を脅かす要因

宅地や農耕地拡大のための土地の造成、森林の伐採が土壌の乾燥化を招き、存在を脅かす主要因と考えられる。タカチホヘビ類は運動能力が低く乾燥や高温に弱いため、舗装道路や側溝の敷設により簡単に個体群が分断され、局地的な消滅が生じることも考えられる。また、とくに石垣島では、潜在的な捕食者であり競合相手とも考えられる外来種オオヒキガエル、キジ、インドクジャクの侵入、増加が大きなインパクトをもたらしていることが強く懸念される。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，競争/競合（外来種による）
	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，競争/競合（外来種による）

特記事項

台湾には基亜種タイワンタカチホヘビ（*Achalinus formosanus formosanus*）が固有分布する。基亜種であるタイワンタカチホヘビはヤエヤマタカチホヘビよりはるかに大型（最大で全長約 850 mm）で、生息環境も大きく異なっている（生息地は標高 1,500～3,000 m の山地に限られる）。これらのことから今後の研究の進展にともない、後者が八重山諸島固有の独立種に再分類される可能性が考えられる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヤエヤマタカチホヘビ	*Achalinus formosanus chigirai*	VU
第４次 2019：	ヤエヤマタカチホヘビ	*Achalinus formosanus chigirai*	VU
第４次 2018：	ヤエヤマタカチホヘビ	*Achalinus formosanus chigirai*	VU
第４次 2017：	ヤエヤマタカチホヘビ	*Achalinus formosanus chigirai*	VU
第４次 2015：	ヤエヤマタカチホヘビ	*Achalinus formosanus chigirai*	VU
第４次：	ヤエヤマタカチホヘビ	*Achalinus formosanus chigirai*	VU
第３次：	ヤエヤマタカチホヘビ	*Achalinus formosanus chigirai*	NT
第２次：	ヤエヤマタカチホヘビ	*Achalinus formosanus chigirai*	NT
第１次：	ヤエヤマタカチホヘビ	*Achalinus formosanus chigirai*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 千木良芳範，2005．ヤエヤマタカチホヘビ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 124‐125．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．
- Ota, H. and M. Toyama, 1989. Taxonomic re-definition of *Achalinus formosanus* Boulenger (Xenoderminae: Colubridae: Ophidia), with description of a new subspecies. Copeia, 1989(3): 597–602.
- Ota, H. and M. Toyama, 1989. Two additional specimens of *Achalinus formosanus chigirai* (Colubridae: Ophidia) from the Yaeyama Group, Ryukyu Archipelago. Jpn. J. Herpetol., 13: 40–43.
- 高良鉄夫，1978．西表島（沖縄）産タカチホヘビ属の一種（予報）．爬虫両棲類学雑誌，7(4): 92．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Achalinus formosanus chigirai has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Achalinus formosanus chigirai* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction, Competition (with alien species)
Law designation status for conservation	―





執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ナミヘビ科 Colubridae　　日本固有

ミヤコヒメヘビ

***Calamaria pfefferi* Stejneger, 1901**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　—	基準 B:　EN	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
宮古島、伊良部島ともに、宅地や農耕地の開発にともなう土地の乾燥化が進んでおり、好適な生息環境は明らかに縮小している。また舗装道路、側溝の敷設も確実に増加しており、生息域の分断も進行している。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
森林伐採や草地開発、土地の造成など。舗装道路や付随する側溝の敷設を目的とした道路工事は生息地の分断を進め、また外来性の捕食者の増加などの影響も強く懸念される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

宮古諸島の宮古島と伊良部島の固有種で、一年を通して適度に湿った腐植性の堆積物がある場所に生息する。乾燥、過湿、高温に弱く、小型で移動能力も低いため、土地開発や舗装道路・側溝の敷設が、生息地の縮小、分断を引き起こしていると考えられる。外来種のイタチやインドクジャクによる捕食の影響も懸念される。

基礎情報

【形態】

頭胴長は普通 135～180 mm。頭部の幅は頸部の幅とほとんど変わらない。眼は比較的大きく、瞳孔は丸い。尾は全長の 8～10%程度を占め、太短く先端は尖る。胴部背面には体鱗が 13 列に並ぶ。体鱗の表面は滑らかで、虹色の光沢を帯びる。背面の地色は概ね淡褐色ないし黄土色。腹面は、地色は淡い赤褐色で、小黒斑が散らばる。腹板数はオス 142～152 枚、メスでは 158～162 枚。尾下板は左右に二分し、オス 24～26 対、メスは 13～15 対。

【生活史】

これまでに 4～7 月と 11 月に発見されているが、これ以外の季節、とくに 8～10 月の盛夏～初秋に活動するかどうかについては不明。生息密度、繁殖習性、世代あたりの期間、社会構造などについても、一切が不明。餌として確実な捕食記録があるのはミミズ類のみであり、昆虫類も食べるとする記述もあるが、再確認する必要があろう。

【生息環境】

常緑広葉樹の自然林、二次林、低木林の林床、一年を通して乾燥しない土壌を有する草地、石灰岩の岩場などに生息する。ミミズを餌とし、乾燥、高温にきわめて弱く、皮膚の角質層が薄いため過湿にも弱いと思われる。したがって一年を通して乾燥した状態や過湿の状態にならない腐食質の底質と、直射日光を遮る植生や岩などの存在が、生息に必要な条件と考えられる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地 【陸域_平地部】森林，草地，耕作放棄地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

宮古諸島の宮古島と伊良部島のみに分布する。このうち宮古島では島の中部、東部、南部で、伊良部島では中部と北部で見つかっているが、いずれも発見例はきわめて少ない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域の面積は全部合わせても 50 km^2未満と推定される。本種は上記のように乾燥、過湿、高温に弱くしかも移動能力はあまり高くないことが予想される。分布域の縮小率は不明。

【生息地の現況】

宮古島、伊良部島ともに、宅地や農耕地の開発にともなう土地の乾燥化が進んでおり、好適な生息環境は明らかに縮小している。また舗装道路、側溝の敷設も確実に増加しており、生息域の分断も進行している。宮古島と伊良部島にはともに外来の捕食者であるイタチとインドクジャクが生息しており、その影響も深刻と思われる。

【個体数の現況】

個体数が減少傾向にあるのは、宮古島東部などにおける近年の急激な目撃頻度の低下から考えてもほぼ間違いないが、具体的な個体数推定などは行われていない。

存続を脅かす要因

森林伐採や草地開発、土地の造成など。舗装道路や付随する側溝の敷設を目的とした道路工事は生息地の分断を進め、また外来性の捕食者の増加などの影響も強く懸念される。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，捕食（外来種による）

特記事項

ヒメヘビ属は熱帯アジアを中心に多様化している。本種はこの属の分布範囲の中で東北端に他種とは不連続に分布しており、遺存種と考えられる。乾燥や過湿、高温に弱く、移動能力の低い本種が宮古諸島の一部に固有分布する事実は、この地域が、多くの研究者によってこれまで考えられてきた以上に古い歴史をもつことを意味しており、高い生物地理学的価値を有する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ミヤコヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	EN
第４次 2019：	ミヤコヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	EN
第４次 2018：	ミヤコヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	EN
第４次 2017：	ミヤコヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	EN
第４次 2015：	ミヤコヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	EN
第４次：	ミヤコヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	EN
第３次：	ミヤコヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	EN
第２次：	ヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	EN
第１次：	ヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠB類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Inger, R. F. and H. Marx, 1965. The systematics and evolution of the Oriental colubrid snakes of the genus *Calamaria*. Fieldana: Zoology, 49: 1–304.
- Mori, A. and H. Moriguchi, 1988. Food habits of the snakes in Japan: A critical review. The Snake, 20: 98–113.
- 饒平名里美・当山昌直・安川雄一郎・陳 賜隆・高橋 健・久貝勝盛，1998．宮古諸島における陸生 爬虫両生類の分布について．平良市総合博物館紀要，5: 23‐38．
- 太田英利，1982．ミヤラヒメヘビ（*Calamaria pavimentata miyarai*）の死体拾得の報告、およびタイワンヒメヘビ（*Calamaria pavimentata formosana*）、ヒメヘビ（*Calamaria pfefferi*）との比較．The Snake，14: 40‐43．
- 千石正一，1996．ミヤコヒメヘビ．千石正一・松井正文・疋田 努・仲谷一宏（編），日本動物大百科第 5 巻，両生類・爬虫類・軟骨魚類，pp. 97．平凡社，東京．
- 高良鉄夫，1962．琉球列島における陸棲蛇類の研究．琉球大学農家政工学部学術報告，9: 1‐202，22pls．
- 当山昌直，2005．ミヤコヒメヘビ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 104‐105．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Calamaria pfefferi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Calamaria pfefferi* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Abandoned farmland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Grassland development, Land development, Transportation infrastructure construction, Predation (by alien species)

Law designation status for conservation	—



執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ナミヘビ科 Colubridae

シュウダ

***Elaphe carinata carinata* (Günther, 1864)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
最大の生息地である魚釣島では、野生化したヤギによる植生の破壊が進んでいる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

大型の無毒蛇で、成体は全長 2 m を超える。国内での分布は尖閣諸島のみで、この地域と国外の分布地であるユーラシア大陸東部や台湾との古地理学的な関係を考える上で、貴重な存在となっている。生息地面積は最大でも、合わせて 5 km²ほどの 3 小島嶼に限られる。このうち面積で全体の 2/3 以上を占める魚釣島では、外来種であるヤギの増加にともなう植生の劣化・環境の破壊が進んでおり、生息範囲の縮小や個体数の減少が強く懸念される。

基礎情報

【形態】

全長 1,320～2,300 mm。体鱗には強いキールが発達し、体鱗列数は頸部で 21～25 列、胴中央で 23 列（まれに 21 列）、肛門前で 15～19 列。腹板は 210～225 枚、尾下板は 85～100 対。背面は黒ずんだベージュ色ないし褐色で、やや緑味を帯びることが多い。頭部から胴の前半にかけてには普通、輪郭の不明瞭な黒色の小斑が不規則に散らばる。腹面はややくすんだ黄土色ないし黄緑色で、背面よりも明るいことが多い。

【生活史】

尖閣諸島での生活史や生態については一切が不明であるが、国外での観察例から考えて、他のヘビやトカゲ、そしておそらくは小型哺乳類や鳥類も捕食していると思われる。

【生息環境】

本亜種が分布する尖閣諸島の 3 島のうち魚釣島では、これまで海岸近くの草地やその後背部に位置する灌木の群落周辺、ガレ場などで発見されている。残る南小島、北小島でも海岸近くのガレ場や海鳥の営巣地周辺で確認されているが、詳細は不明。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地 【陸域_平地部】森林，草地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

尖閣諸島の魚釣島、南小島、北小島だけに見られる。久場島（黄尾嶼）にも本種が分布するとしている文献もあるが、標本等の具体的な証拠はなく、確認が必要である。国外では台湾や周辺離島、大陸中国東部・南部、ベトナム北部などに分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

国内で本亜種が記録されている尖閣諸島の 3 島は、全部合わせても総面積が 5 km^2足らずであり、分布はきわめて狭い範囲に限定されている。

【生息地の現況】

国内で本種が分布する島のうち、全体の 2/3 を超える面積を占める魚釣島では、野生化したヤギによる植生の食害とそれにともなう土壌の浸食が進んでおり、1971 年、1979 年、1991 年に魚釣島で上陸調査を行った池原貞雄博士の私信によると、餌の供給源のひとつと考えられる海鳥の営巣数も減っている。そして環境の悪化から、島内で実際に生息できる範囲が年々狭まっていることが考えられる。

【個体数の現況】

個体数やその近年における変動は不明。しかしながら、尖閣諸島における分布面積の大半を占める魚釣島での、野生化したヤギの増加に起因する植生の後退や、それにともなう土地の浸食、海鳥の営巣地縮小に起因する個体数の減少が強く懸念される。また北小島に

ついては、比較的最近（1995 年 6 月中旬）に行われた上陸調査でも、短期間であったとはいえ 1 個体も目撃されず、個体数は決して多くないと考えられる。

存続を脅かす要因

国内の分布は従来から尖閣諸島の 3 島（合わせても 5 km²足らず）に限られており、しかもそのうち最大の生息地である魚釣島では、野生化したヤギによる植生の破壊が進んでいる。

要因の区分：	（過去）	遷移進行・植生変化/自然遷移，分布・産地局限
	（現在）	遷移進行・植生変化/自然遷移，分布・産地局限

特記事項

シュウダは大陸沿岸のいくつかの島嶼を含むユーラシア東部・南部に広く分布する一方で、南西諸島を含む国内では尖閣諸島のみから知られる。本亜種の尖閣個体群の存在は、同様の分布パタンを示すアオスジトカゲやアカマダラの尖閣個体群と同様、この島嶼群が琉球の他の島々と違いユーラシア大陸東部や台湾と、より最近（更新世末期の氷期）まで一体化した時期があったという古地理を反映しており、生物地理学的に貴重な資料となっている。別亜種ヨナグニシュウダ（*Elaphe carinata yonaguniensis*）は、八重山諸島の与那国島に固有。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	シュウダ	*Elaphe carinata carinata*	EN
第４次 2019：	シュウダ	*Elaphe carinata carinata*	EN
第４次 2018：	シュウダ	*Elaphe carinata carinata*	EN
第４次 2017：	シュウダ	*Elaphe carinata carinata*	EN
第４次 2015：	シュウダ	*Elaphe carinata carinata*	EN
第４次：	シュウダ	*Elaphe carinata carinata*	EN
第３次：	シュウダ	*Elaphe carinata carinata*	EN
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】情報不足(DD)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 中村健児・上野俊一，1963．原色日本両生爬虫類図鑑．保育社，大阪．214pp.
- Ota, H., N. Kamezaki, M. Toda and S. Okada, 2010. Osumi Islands: (iii) amhibians/reptiles, Tokara and Amami Islands: (iii) amhibians/reptiles, Okinawa and Kerama Islands: (iii) amhibians/reptiles, Daito Islands: (iii) amhibians/reptiles, Miyako Islands: (iii) amhibians/reptiles, Yaeyama and Senkaku Islands: (iii) amhibians/reptiles, Amphibians/Reptiles, references. In: S. Yasumura (ed.), Nansei Islands Biological Diversity Evaluation Project Report, pp. 6–7, 12–14, 20–21, 20, 32–33, 37–39, 196–201. WWF Japan, Tokyo.
- Ota, H., N. Sakaguchi, S. Ikehara and T. Hikida, 1993. The herpetofauna of the Senkaku Group, Ryukyu Archipelago. Pacific Science, 47: 248–255.
- Peng, G., Q. Liu, E. A. Myers, S. Liu, Y. Xu, Y. Liu, and Y. -Z. Wang, 2012. Evaluation of the validity of the ratsnake subspecies *Elaphe carinata deqenensis* (Serpent: Colubridae). Asian Herpetological Research, 3: 219–226.
- Schulz, H.-D., 1996. A Monograph of the colubrid snakes of the genus *Elaphe* Fitzinger. Koeltz Scientific Books, Havlickuv Brod. 439pp.
- 千石正一，1996．チュウゴクシュウダ．千石正一・松井正文・疋田 努・仲谷一宏（編），日本動物大百科 第 5 巻 両生類・爬虫類・軟骨魚類，p. 98．平凡社，東京.
- Smith, H. M., H. Ota, and V. Wallach, 1995. Coluber phyllophis Boulenger, 1894 (Reptilia: Serpentes): Proposed suppression. Bulletin of Zoological Nomenclature, 52: 166–169.
- 横畑泰志・横田昌嗣・太田英利，2009．尖閣諸島魚釣島の生物相と野生化ヤギ問題．広島大学平和科学研究センター（IPSHU）研究報告，42: 307‐326.
- Yokohata, Y., Y. Ikeda, M. Yokota, and H. Ishizaki, 2003. The effects of introduced goats on the ecosystem of Uotsuri-Jima, Senkaku Islands, Japan, as assessed by remote-sensing techniques. Biosphere conservation, 5: 39–46.
- Zhao, E. M. and K. Adler, 1993. Herpetology of China. Society for the Study of Amphibians and Reptiles. Oxford, Ohio. 522pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Elaphe carinata carinata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Elaphe carinata carinata* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland
Threat types:	Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ナミヘビ科 Colubridae　　日本固有

ミヤコヒバァ

***Hebius concelarus* (Malnate, 1963)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2. 生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
生息が確認されている地点を含む緑地は互いに分断されており、なおかつ、それらを地理的に分かつ地域では断続的に大規模な圃場整備等による土地改変が進んでいる。そのため、本種の生息地は過度に分断された状態になっていると考えられる。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
継続的な開発や圃場整備により、各地で生息適地は確実に狭まっている。加えて、外来の捕食者による直接的、間接的な悪影響も存在すると考えられ、個体数は減り続けていると思われる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

宮古諸島の宮古島と伊良部島の固有種。頭胴長は最大でも 660 mm 程度で、近縁のガラスヒバァよりも明らかに小型。池や河川の近くなど水場で見つかることが多いが、そうでないところにも出現する。本種が分布する 2 つの島の双方で急速に開発が進んでおり、潜在的に生息に適した環境は確実に縮小している。また、イタチなどによる捕食の影響も懸念される。系統的には、ガラスヒバァの沖縄諸島個体群に近く、生物地理学的な観点で高い学術的価値を持つ。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長はオス 400～530 mm、メス 390～600 mm 程度。腹板数 157～169 枚、尾下板数 94～102 対。体鱗は明瞭なキールをもち、体鱗列数は胴の前部から中部にかけては 19 列、後部では 17 列。背面の地色は黒に近い黒褐色で、胴の前半部にはおよそ 1 鱗長の白い横帯が数本あるが、それらは通常、背中部付近で途切れ、左右でずれるか分離している。白帯は胴の後方では小さな白斑に変わる。頸部に良く目立つ白色の斑紋があるが、琉球の他の同属種と違い、左右のものは大きく離れており、ほとんどの場合、両方がまとまって Y 字状や V 字状にならない。腹面はレモン色ないし象牙色で、腹板の側縁には暗色の小斑がある。

【生活史】

生活史や生態についてはほとんど知見がない。繁殖については、5 月上旬に捕獲された個体が、飼育下で 6 月下旬に長さ 30～35 mm、幅 9～12 mm の白い殻に覆われた 3 卵を産んだ記録がある。野外でサキシマヌマガエルとその幼生、ホオグロヤモリ、サキシマスベトカゲなどの捕食例がある。

【生息環境】

池や河川に隣接した森林の林床に多いが、草原、低木林、疎林などでも観察されている。草本や木本にも登り、地上高 2 m を超える枝の上でも発見されている。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林，耕作放棄地，湿地・湿原，河川中流域，小河川
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域，(4) 河川・湿地地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

宮古諸島の宮古島と伊良部島に分布する。宮古島のなかでも本種が記録されている地点は非常に限られていた。近年の調査により、新たな場所でも見つかり、個体が確認されている範囲は大幅に広がったが、分布が拡大しているというより、精力的な調査により知見が増えた結果ととらえるべきである。伊良部島では 1959 年と 1960 年に採集された、産地の詳細不明な 2 点の標本が存在するほか、2011 年に島の南東部で路上死体を確認したという情報がある。それ以外に本種の情報はなく、その生息範囲は不明である。

現在の生息状況

【分布域の現況】

宮古島および伊良部島における本種の分布について、従来の知見があまりにも限られているため、その継時的な動向を評価するのは難しい。伊良部島では近年の発見例がなく、個体群がすでに消滅しているか、存続していたとしても、その分布範囲は極めて限定的である可能性が高い。

【生息地の現況】

主要な産地の一つと考えられる宮古島中北部の緑地は保全林となっているが、ニホンイタチやインドクジャク、外来カメ類の存在によって、小動物の生息地としての質が劣化していると考えられる。また、緑地内の下草の過度な管理もそれを助長している。その他の確認地点の多くは、どこまでが生息範囲なのか評価が難しいぐらい狭い緑地に隣接していて、安定した個体群が存在するのか判然としない場合もある。伊良部島ではニホンイタチの密度が高く、圃場整備により乾燥していて本種の生息に適さない地域が多い。

【個体数の現況】

個体数やその具体的な減少率は不明であるが、潜在的な生息適地は明らかに減少していることから、個体数が減少傾向にあるのは間違いない。伊良部島ではニホンイタチの影響が強く、乾燥している地域も多いため、すでに個体群が消滅している可能性がある。

存続を脅かす要因

圃場整備や開発にともない、潜在的な本種の生息適地は確実に減少している。またイタチなどの外来の捕食者が悪影響を与えていると考えられる。

要因の区分：	（過去）	河川開発，圃場整備，草地開発，土地造成，捕食（外来種による），競争/競合（外来種による）
	（現在）	圃場整備，草地開発，土地造成，捕食（外来種による），競争/競合（外来種による）

特記事項

宮古諸島の陸生脊椎動物は、八重山諸島あるいは中国大陸に最近縁の種ないし集団をもつものが多く、生物地理学的に沖縄諸島との類縁性は低いとされてきた。しかし、本種は明らかに沖縄諸島の集団に近く、その由来についての説明が難しい存在であった。最近、主に地質学的データに基づき、沖縄諸島と宮古諸島を橋渡しする古陸塊があったとする新説が唱えられ、本種の由来を説明するものとして注目を集めている。このように本種は、島の成因を考える上でも貴重な存在であり、高い学術的価値を有する。加えて本種はガラスヒバァのなかでも沖縄島-久米島の集団に近縁であり、同じガラスヒバァの伊平屋島集団、奄美諸島集団はそれよりも系統的に離れていることから、本種群の分類を考える上でも重要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ミヤコヒバァ	*Hebius concelarus*	EN
第４次 2019：	ミヤコヒバァ	*Hebius concelarus*	EN
第４次 2018：	ミヤコヒバァ	*Hebius concelarus*	EN
第４次 2017：	ミヤコヒバァ	*Hebius concelarus*	EN
第４次 2015：	ミヤコヒバァ	*Amphiesma concelarum*	EN

第４次:	ミヤコヒバァ	*Amphiesma concelarum*	EN
第３次:	ミヤコヒバァ	*Amphiesma concelarum*	EN
第２次:	ミヤコヒバァ	*Amphiesma concelarum*	VU
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- 角田羊平・青柳 克・徳山孟伸・才木美香・笹井隆秀・戸田守・前之園唯史，2016．宮古島および伊良部島における稀少なヘビ 2 種，ミヤコヒバァとサキシマバイカダの観察例．Akamata，26: 25‐30.
- 皆藤琢磨，2016．頸部に Y 字模様をもつミヤコヒバァ標本について．Akamata，26: 38‐40.
- Kaito, T. and Toda, M., 2016. The biogeographical history of Asian keel back snakes of the genus *Hebius* (Squamata: Colubridae: Natricinae) in the Ryukyu Archipelago, Japan. Biol. J. Linn.Soc., 118: 187–199.
- 皆藤琢磨・戸田守．2021．ヤコヒバァ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 179-181．サンライズ出版，彦根.
- 饒平名里美・当山昌直・安川雄一郎・陳 賜隆・高橋 健・久貝勝盛，1998．宮古諸島における陸生爬虫両生類の分布について．平良市総合博物館紀要，5: 23‐38.
- 太田英利，1996．ミヤコヒバァ．千石正一・松 井正文・疋田 努・仲谷一宏（編），日本動物大百科 第 5 巻 両生類・爬虫類・軟骨魚類，pp. 100．平凡社，東京.
- Ota, H. and S. Iwanaga, 1997. A systematic review of the snakes allied to *Amphiesma pryeri* (Boulenger) (Squamata : Colubridae) in the Ryukyu Archipelago, Zool. J. Linn. Soc., 121: 339–360.
- 太田英利・高橋 健，1997．ミヤコヒバァ（*Amphiesma concelarum* Malnate，1963）の伊良部島からの記録．沖縄生物学会誌，35: 47‐48.
- 当山昌直，2005．ミヤコヒバァ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 117．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇.
- Watanabe, N., K. Arai, M. Otsubo, M. Toda, A. Tominaga, S. Chiyonobu, T. Sato, T, Ikeda, A. Takahashi, H. Ota, and Y. Iryu, 2023. Geological history of the land area between Okinawa Jima and Miyako Jima of the Ryukyu Islands, Japan, and its phylogeographical significance for the terrestrial organisms of these and adjacent islands. Prog. Earth Planet. Sci., 10: 40.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hebius concelarus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hebius concelarus* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Abandoned farmland, Wetland, Middle river basin, Small river
Threat types:	Field preparation, Grassland development, Land development, Predation (by alien species), Competition (with alien species)
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　コブラ科 Elapidae

イイジマウミヘビ

***Emydocephalus ijimae* Stejneger, 1898**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B1. 出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
個体の定住性が高いことが確認されており、地域間の交流は比較的限定的と考えられる。本種の生息場所となるサンゴ礁が各地で消滅している現状を踏まえると、集団は分断化し、絶滅リスクが高まっている可能性が高い。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
本種の好適生息場所となるサンゴ礁は白化や開発などによって全体的に衰退傾向にあり、生息個体数は減少していると予想される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

背面の体鱗に比べ腹板の幅が明瞭に広い点、第 2 上唇板が他の上唇板に比べて顕著に大きい点などで、日本の他のウミヘビ類から容易に識別できる。国内での分布は南西諸島近海に限られる。胎生で成体メスは 2～3 年に 1 回、11～1 月に 1～4 子を出産する。新生個体は 2 年ほどで性的に成熟する。サンゴ礁に生息し、サンゴ礁魚類の卵を専食するため、造礁サンゴの白化や死滅によって生じるサンゴ礁魚類の減少にともない、生息密度が低下すると考えられる。

基礎情報

【形態】

全長はオスで 570～840 mm、メスでは 630～1,070 mm 程度。体型は日本近海に見られるウミヘビ類の中では比較的太短く、横断面は胴の前部では丸いが後方では徐々に側偏する。尾は極端に縦長で、他のウミヘビ類と同様、オール状になっている。第 2 上唇板が著しく大型化しており、また成体のオスでは吻端板の中央に、先端のやや尖った顕著な突起がある。体鱗は頸部で 15～17 列、胴中央で 17～19 列、肛門前で 15 列。腹板はエラブウミヘビ属や陸生の多くのヘビ類と同様、背面の体鱗に比して顕著に大型化しており、134～144 枚。尾下板は対をなさず、オスで 24～30 枚、メスで 19～24 枚。体色はやや黄色味がかった肌色ないしクリーム色で、黒色ないし暗灰色の環帯が、胴部に 25～30 本、尾部に 4～6 本ある。

【生活史】

排卵は 4 月下旬～6 月上旬に生じる。胎生で、妊娠メスは 11～1 月頃、全長 300～340 mm ほどの幼体を 1～4 子を出産する。出産の頻度は、多くの成体メスで 2～3 年に 1 回と低い。雌雄ともに、生後 2 年前後で性成熟に達する。

【生息環境】

浅海に生息しており、水深が 10 m を超えるような場所にはあまり見られない。サンゴ礁やその周辺でよく観察され、とりわけサンゴ礁魚類の豊富な場所で、高頻度に見られる傾向がある。対照的にサンゴ礁の発達が悪い、砂底や泥底、枯死したサンゴ片が堆積したような場所ではあまり見られない。

生息環境区分：	【海域（沿岸）_表層】岩礁（磯），サンゴ礁
国土地域区分：	（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

国内ではトカラ海峡以南の琉球列島近海に分布しており、とくに宝島、奄美大島南部、沖縄島中部・南部、慶良間諸島、石垣島、鳩間島、西表島周辺の浅海域で多く記録されている。国外にも分布するが、目撃記録や採集記録の得られている範囲は、東アジア海域に分布する他のウミヘビ類に比べて狭く、おおむね台湾東部の緑島や蘭嶼周辺に限られている。フィリピン以南にも同属の個体群が見られるが、別種と考えられている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

太平洋の広域で造礁サンゴの白化や死滅が見られた 1990 年代末を境に、慶良間諸島や瀬底島の周辺をはじめとする分布域のほぼ全域で、生息密度の急激な低下が観察された。それ以降、分布域の縮小や分断が急激に進行していると考えられる。

【生息地の現況】

瀬底島や座間味島のサンゴ礁では、それぞれ 1980 年代ないし 1990 年代の後半までは、

本種が非常に高密度で観察された。しかしそれ以降、これらの場所や周辺の広い範囲で造礁サンゴの白化や死滅、サンゴ礁のガレ場化、藻場化が進み、その進行にともなって生息するサンゴ礁魚類の密度や多様性も、明らかに低下しており、多くの場所で餌条件が悪化している。

【個体数の現況】

個体数に関する直接的なデータはないが、生息場所における目撃頻度から考えて 1980 年代後半～2000 年代初めにかけての 10 年あまりの間に、少なくとも瀬底島や座間味島の周辺では、生息密度は 1/4 ないしそれ以下になったと考えられる。

存続を脅かす要因

赤土の流入や造礁サンゴの白化、サンゴ礁の衰退ガレ場化、藻場化により、サンゴ礁魚類における多様性・生息密度の低下が生じることが、その卵を専食するイイジマウミヘビにとっての餌条件の悪化につながり、その存続を脅かす最大の要因となっている。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，気候変動
	（現在）	海岸開発，気候変動

特記事項

魚卵専食の一方で、天敵はイタチザメくらいであり、したがって明らかにサンゴ礁における食物網の上位を占めている。そのため、本種の生息状況は、その海域のサンゴ礁生態系全体の健全さの指標ともなると考えられる。一年あたりの一腹子数は、出産頻度も考慮するとウミヘビ類としてはきわめて少なく、加えて移動性も低いため、一旦、生息密度が下がると、環境が改善されても個体群の回復に少なからず時間を要することが懸念される。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	イイジマウミヘビ	*Emydocephalus ijimae*	VU
第４次 2019：	イイジマウミヘビ	*Emydocephalus ijimae*	VU
第４次 2018：	イイジマウミヘビ	*Emydocephalus ijimae*	VU
第４次 2017：	イイジマウミヘビ	*Emydocephalus ijimae*	VU
第４次 2015：	イイジマウミヘビ	*Emydocephalus ijimae*	VU
第４次：	イイジマウミヘビ	*Emydocephalus ijimae*	VU
第３次：	イイジマウミヘビ	*Emydocephalus ijimae*	VU
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】情報不足

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Masunaga, G. and H. Ota, 2003. Growth and reproduction of the sea snake, *Emydocephalus ijimae*, in the central Ryukyus, Japan: a mark and recapture study. Zoological Science, 20: 461–470.
- Masunaga, G., R. Matsuura, T. Yoshino, and H. Ota, 2003. Reproductive biology of the viviparous sea snake, *Emydocephalus ijimae* (Reptilia: Elapidae: Hydrophiinae), under a seasonal environment in the Northern Hemisphere. Herpetological Journal, 13: 113–118.
- Masunaga, G., T. Kosuge, N. Asai and H. Ota, 2008. Shark predation of sea snakes (Reptilia: Elapidae) in the shallow waters around the Yaeyama Islands of the southern Ryukyus, Japan. Marine and Freshwater Biodiversity, 1(e96): 1–4.
- 太田英利，1997．イイジマウミヘビ．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（IV），pp. 331‐337，345．日本水産資源保護協会，東京．
- 太田英利・増永元，2005．琉球のウミヘビ．矢野和成（編），南の島の自然誌，pp. 159‐172．東海大学出版会，秦野．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Emydocephalus ijimae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Emydocephalus ijimae* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Marine area (Coastal area)_Surface water】Reef, Coral reef

Threat types:	Coastal development, Climate change
Law designation status for conservation	–





執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

カメ目 Testudines　ウミガメ科 Cheloniidae

アオウミガメ

***Chelonia mydas* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2

基準 A:　VU	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

3 世代（120 年）

【過去の状況】

小笠原諸島では 1880 年から捕獲数の記録が残されており（Kondo et al., 2017）、日本においてはもっとも長期にわたる本種の観測データとなっている。現在から約 3 世代前に相当する 1900 年頃の小笠原諸島での捕獲数は 200～1400 個体と記録されている。

【近年の状況】

小笠原諸島における 2015 年頃の来遊数は毎年約 250～600 個体程と推定されている。直近のデータは公表されていないが、現在もこれと同レベルまたはそれよりもやや多いと考えられる。過去を約 800 個体、現在を約 500 個体として比較すると減少率は 30%を超える。なお、南西諸島でも本種の産卵は見られ、その挙動は小笠原とは異なる可能性があることも指摘されているが、小笠原諸島個体群は国内全体の個体数の半数以上を占めると考えられることから、今回の評価では、小笠原諸島の長期的な傾向が国内全体の傾向を反映しているものと見なし、減少率の推定には小笠原諸島の雌個体数データを用いた。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

アオウミガメは南西諸島と小笠原諸島の砂浜で産卵する。産卵巣の数は徐々に増加し、その個体群サイズは回復しつつある。南西諸島から本州の沿岸は、本種の重要な餌場であり、多くの幼体や亜成体が生息している。これらの海域ではマクサを餌にしていることが多いが、そのマクサなどの餌が磯焼けなどで減少していることが懸念される。また、他の種と同様に、砂浜の消失や護岸の建設は本種にとっても脅威となる。

基礎情報

【形態】

背甲や四肢、頭部の色彩は濃緑色から黒色、腹面は白色から淡黄色である。甲長が 50 cm 以下の個体は背甲の肋甲板、椎甲板に放射状の褐色の模様が入ることが多い。体表全体がアカウミガメやタイマイに比べ滑らかで、嘴も尖っておらず、角質化した表皮からなる顎は鋸歯状になっている。鱗板では前額板が 1 対からなるのが特徴である。

【生活史】

本種の産卵が行われ、ふ化幼体が産出する砂浜は、アカウミガメとは分布が異なっていることから、アカウミガメのようにふ化幼体が広く大洋に分散するのとは異なった生活史をもつと予想される。しかし、甲長が 30 cm 以下の幼体が見つかることは少なく、ふ化後数年の間、どこでどのような生活をしているのか分かっていない。甲長が 30 cm を超えると、外洋を漂う生活から浅海域に留まる生活に移行すると考えられ、それ以降は主に植物食性になると思われる。その後、餌場を移動したり、再び外洋に出て動物食になるなどしながら成長し、数十年かけて成熟すると予想される。

【生息環境】

本種が餌とする海藻類、とくにマクサやキリンサイといった紅藻類やリュウキュウスガモなどの水中顕花植物が豊富に生育することが生息環境として重要である。マクサが生育するのは水深 10 m 以浅の岩礁海域であり、また、そのような環境は休息するような岩穴やくぼみが多く、生息に適している。また、産卵に適した砂浜は、島嶼の外洋に面した海岸で、砂が豊富に堆積し、アダンやモンパノキなど低木が繁茂する場所である。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】砂浜・礫浜，海崖・岩浜・岩礁（磯） 【海域（沿岸）_潮間帯 表層】海面，漂泳界（水柱環境），岩礁（磯），藻場，アマモ場，サンゴ礁，砂底・礫底，泥底 【海域（外洋）_表層】海面，漂泳界（水柱環境）
国土地域区分：	（5）沿岸域，（6）海洋域，（7）島嶼地域

【分布域】

インド洋～太平洋、大西洋、地中海の温帯を含む熱帯域に分布する。産卵地も熱帯海域の島嶼部を中心に広く分布し、フィリピンやマレーシアなどの特定の島嶼ではとくに集中して産卵する場所も確認されている。日本はその産卵海域の北縁部に位置し、屋久島・種子島以南の南西諸島と小笠原諸島の砂浜で産卵している。また、太平洋側では三陸海岸、日本海側では能登半島付近から南西諸島にかけて、アオウミガメの幼体から亜成体が多く分布している。かつては内湾のアマモ場も餌場として使っていたと予想される。ダイバーから得られる情報からは、南日本の沿岸域でも、八重山諸島、慶良間諸島、沖縄島、沖永良部島、種子島、屋久島、高知県柏島、八丈島などの沿岸で密度が高いと思われる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

本種は植物食性であり、昨今の磯焼けや藻場の衰退による藻類や海草の減少により、その分布域は狭まっていると考えられる。とくに、瀬戸内海や有明海などの浅海域にかつて豊富に存在したアマモ場は餌場として利用されていた可能性が高いが、現在は分布していない。しかしながら、近年の捕獲圧の減少や卵の保護、さらには自然保護思想の普及によって近年生息数が増えており、西表島や黒島ではその増加が記録されている。また、西表島や久米島などでは、漁師の網にかかって網が破られるという問題も浮上している。

【生息地の現況】

現在、重要な索餌海域となっている本州、四国地方、九州地方の浅海の岩礁地帯は、磯焼けによって藻類の生育が悪化している可能性がある。また、西表島では本種の捕食によるリュキュウスガモの衰退が見られ、問題になっている。南西諸島の産卵地である砂浜では、開発や付近の海洋構造物の建設によって、産卵の適地となる植生帯の破壊や砂の消失が起こっている。

【個体数の現況】

個体数の相対変動の指標となる上陸・産卵回数に関する情報は南西諸島に関しては日本ウミガメ協議会にある程度集められている。それによると、八重山諸島（石垣島や黒島）や慶良間諸島、沖縄島、沖永良部島、奄美大島では全体的に増加している。また、小笠原諸島でも年毎の変動はあるものの ELNA の調査では増加している。海中でダイバーがアオウミガメと遭遇する頻度も高くなっており、八重山諸島から四国地方にかけての沿岸で増加していると考えられる。西表島や久米島では船上から観察される個体も増えて、30 分で 10 個体を超えることも珍しくはない。

存続を脅かす要因

本種は沿岸の岩礁地帯に生息しているため、秋～冬に行われるイセエビを狙った刺網に絡んで溺死することが多いと考えられる。さらに、屋根の設置された定置網や一般に「ツボ網」と呼ばれる漁業での混獲死は少なくない。また、南西諸島にある産卵地の砂浜は、さまざまな理由による砂の消失で、産卵地としての機能を失いつつあるところも少なくない。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，混獲・錯誤捕獲，光害
	（現在）	海岸開発，混獲・錯誤捕獲，光害，気候変動

特記事項

小笠原諸島で産卵する集団と沖縄県で産卵する集団は、遺伝的に異なる集団である。また、広義アオウミガメ *Chelonia mydas* には狭義アオウミガメ *Chelonia mydas mydas* とクロウミガメ *Chelonia mydas agassizii* の 2 亜種が認められていたが、形態的に異なるクロウミガメ *Chelonia agassizii* が独立種として認められるようになり、2021 年に発行された「新

日本両生爬虫類図鑑」にも別種として掲載された。日本近海に生息するのはおもに狭義アオウミガメ *Chelonia mydas* であるが、東太平洋に分布の中心があるクロウミガメ *Chelonia agassizii* もまれに見られる。国立・国定公園の指定動物に指定されている（屋久島国立公園、西表石垣国立公園、慶良間諸島国立公園）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アオウミガメ	*Chelonia mydas mydas*	VU
第４次 2019：	アオウミガメ	*Chelonia mydas mydas*	VU
第４次 2018：	アオウミガメ	*Chelonia mydas mydas*	VU
第４次 2017：	アオウミガメ	*Chelonia mydas mydas*	VU
第４次 2015：	アオウミガメ	*Chelonia mydas mydas*	VU
第４次：	アオウミガメ	*Chelonia mydas mydas*	VU
第３次：	アオウミガメ	*Chelonia mydas mydas*	VU
第２次：	アオウミガメ	*Chelonia mydas*	VU
第１次：	アオウミガメ	*Chelonia mydas*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岩手県】留意,【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【東京都（小笠原諸島）】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【三重県】準絶滅危惧(NT),【和歌山県】準絶滅危惧(NT),【岡山県】情報不足,【愛媛県】情報不足(DD),【高知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【長崎県】情報不足(DD),【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【宮崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU-r),【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類,【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 亀田和成・石原孝，2009．日本沿岸におけるアオウミガメの消化管内容物．うみがめニュースレター，81: 17‐23.
- 亀田和成（編），2013．日本のアオウミガメ．日本ウミガメ協議会，竹富町．122pp.
- 亀崎直樹，2021．アオウミガメ，日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 86-87，サンライズ出版，彦根.
- Okamoto, K. and N. Kamezaki, 2014. Morphological variation in *Chelonia mydas* (Linnaeus, 1758) from the coastal waters of Japan, with special reference to the turtles allied to *Chelonia mydas agassizii* Bocourt, 1868. Cur. Herpetol., 33 (1): 46–56.

- 菅沼弘行，1994．アオウミガメ，日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(I)，pp. 469‐478，水産資源保護協会，東京．
- 菅沼弘行・立川浩之・佐藤文彦・山口真名美・木村ジョンソン，1994．1983～1990 年の小笠原諸島・父島におけるアオウミガメ（*Chelonia mydas*）の産卵状況．亀崎直樹・籔田慎司・菅沼弘行（編），日本のウミガメの産卵地，pp. 95‐109．日本ウミガメ協議会，大阪．
- 上野真太郎・岡本 慶・石原 孝・亀崎直樹，2025．日本におけるウミガメ類の分布．爬虫両棲類学会報，2025(2): 127‐144.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Chelonia mydas has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Chelonia mydas* is listed as VU under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sandy beach/Pebble beach, Sea Cliff/Rocky beach/Reef 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】Sea surface, Pelagic water (water column environment), Reef, Algae bed, Eelgrass bed, Coral reef, Sandy bottom/Gravelly bottom, Muddy bottom 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface, Pelagic water (water column environment)
Threat types:	Coastal development, Bycatch, Light pollution, Climate change
Law designation status for conservation	—





執筆者:	亀崎直樹（岡山理科大学）
Author:	Naoki Kamezaki

公表年月：2026 年 3 月

カメ目 Testudines　イシガメ科 Geoemydidae　　日本固有

ヤエヤマセマルハコガメ

***Cuora flavomarginata evelynae* Ernst et Lovich, 1990**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab

基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
森林伐採や道路整備等による環境改変に伴う生息環境の悪化と外来種の影響により、個体数は継続的に減少していると考えられる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

八重山諸島の石垣島と西表島のみに分布し、常緑広葉樹の自然林や、回復の進んだ二次林に生息する。森林伐採や道路整備による生息環境の悪化、外来の捕食者や商業目的の違法な採集等による個体数の減少が懸念される。特に石垣島ではオオヒキガエル、インドクジャク、キジなどの外来種による捕食や競合の影響が懸念される。

基礎情報

【形態】

甲長は 110～170 mm 程度で、背甲はドーム状に盛り上がる。椎甲板の隆起は比較的明瞭で、隆起に沿って淡黄褐色の縦条がある。肋甲板の隆起は鈍く、各甲板の中央には輪郭が不明瞭な明色斑がある。背甲後縁の切れ込みはほとんどない。腹甲の中央に蝶番構造があり、前後の甲板は可動で四肢や頭部を完全に甲羅に収めることができる。背甲の地色は黒褐色、腹甲もほぼ全面が黒色ないし黒褐色であるが、胸甲板と腹甲板の橋部分と縁甲板の腹面側は黄色で、暗色の腹面を縁取っている。側頭部から喉にかけては鮮やかな黄色。

【生活史】

3 月下旬から 5 月上旬にかけて交尾の観察例がある。メスは 4 月下旬～6 月上旬頃、深さ 5～8 cm ほどの穴に長さ 40～51 mm、幅 24～27 mm ほどの卵を一度に 1～3 個ほど産む。8 月の中・下旬に、甲長 32～38 mm ほどの幼体が孵化する。雑食性で、シイ、カシ、フトモモ、アダンなどの実やパイナップル、サツマイモといった植物質、昆虫類、ミミズ類、陸貝類、ブラーミニメクラヘビなどの小動物、さらには大型動物の死体まで、さまざまなものを食べる。本種の可動式の腹甲は、捕食者に対する防除に役立っていると考えられているが、少なくとも若い個体がカンムリワシにこじ開けられるところが観察されている。

【生息環境】

主に常緑広葉樹の自然林および回復の進んだ二次林に生息するが、郊外では民家周辺でもみられる。湿地や河川に近い湿潤な環境に多い。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，湿地・湿原・細流 【陸域_平地部】森林，耕作放棄地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

石垣島と西表島のみに分布する八重山諸島固有亜種。基亜種は台湾や中国大陸東部に、アジアハコガメ属の他の種は中国南部やインドシナ半島、マレーシアなどに分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

石垣島では、於茂登岳やそれにつらなる山麓以外では見かけることが少なくなっており、生息面積が縮小している可能性がある。西表島では島のほぼ全域で見られるが、林床の乾燥した山地や二次植生の場所には少ない。沖縄島でも時折見つかるが、島外からの持ち込みに由来する。宮古島には定着個体群が存在する。

【生息地の現況】

石垣島内での主要な生息場所である於茂登岳とその連山周辺の常緑広葉樹林も、林縁部から乾燥化が進んでいる。オオヒキガエル、キジ、インドクジャクといった外来種は幼体

の捕食者ともなり得、餌を巡って競合する可能性もある。

【個体数の現況】

個体数を推定するだけの資料はないが、生息環境の悪化に伴い、減少傾向にあると考えられる。

存続を脅かす要因

森林伐採や道路整備に伴う環境改変のほか、商業目的の違法な採集も個体数減少の要因となっている可能性が高い。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），競争/競合（外来種による）
	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），競争/競合（外来種による）

特記事項

八重山諸島のセマルハコガメ集団を、台湾や大陸中国のものとは別種とする見解もあるが、その形態的・遺伝的分化の程度は必ずしも大きくなく、種のレベルで分割するには無理があると思われる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヤエヤマセマルハコガメ	*Cuora flavomarginata evelynae*	VU
第４次 2019：	ヤエヤマセマルハコガメ	*Cuora flavomarginata evelynae*	VU
第４次 2018：	ヤエヤマセマルハコガメ	*Cuora flavomarginata evelynae*	VU
第４次 2017：	ヤエヤマセマルハコガメ	*Cuora flavomarginata evelynae*	VU
第４次 2015：	ヤエヤマセマルハコガメ	*Cuora flavomarginata evelynae*	VU
第４次：	ヤエヤマセマルハコガメ	*Cuora flavomarginata evelynae*	VU
第３次：	ヤエヤマセマルハコガメ	*Cuora flavomarginata evelynae*	VU
第２次：	セマルハコガメ	*Cuora flavomarginata evelynae*	VU
第１次：	セマルハコガメ	*Cuora flavomarginata flavomarginata*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国指定天然記念物

参考文献

- Chen, T. H. and K. Y. Lue, 1999. Population characteristics and egg production of the yellow-margined box turtle, *Cuora flavomarginata flavomarginata*, in northern Taiwan. Herpetologica, 55: 487–598.
- Chen, T. H. and K. Y. Lue, 2002. Growth patterns of the yellow-margined box turtle (*Cuora flavomarginata*) in northern Taiwan. J. Herpetol., 36: 201–208.
- Honda, M., Y. Yasukawa, R. Hirayama, and H. Ota, 2002. Phylogenetic relationships of the Asian box turtles of the genus *Cuora* sensu lato (Reptilia : Bataguridae) inferred from mitochondrian DNA sequences. Zool. Sci., 19: 1305–1312.
- 小林峻・伊澤雅子，2017．西表島におけるカンムリワシによるヤエヤマセマルハコガメの捕食事例．Akamata，27: 25‐28．
- Lue, K. Y. and T. H. Chen, 1999. Activity, movement patterns, and home range of the yellow-margined box turtle (*Cuora flavomarginata*) in northern Taiwan. J. Herpetol, 33: 590–600.
- 太田英利，1995．セマルハコガメ．日本水産資源保護協会（編），日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（II），pp. 449‐454．日本水産資源保護協会，東京．
- 太田英利，1995．琉球列島における爬虫・両生類の移入．沖縄島嶼研究，13: 63‐78．
- 太田英利・濱口寿夫（編），2003．沖縄県天然記念物調査シリーズ 第 41 集-リュウキュウヤマガメ・セマルハコガメ生息実態調査報告書．沖縄県教育委員会，那覇．99pp．
- Ota, H., Y. Yasukawa, J. Fu, and T. H. Chen, 2009. *Cuora flavomarginata* (Gray 1863). In: A. G. J. Rhodin, P. C. H. Prichard, P. P. van Dijk, R. A. Saumure, K. A. Buhlmann, and J. B. Iverson (eds.), Conservation Biology of Freshwater Turtles and Tortoises: A Compilation Project of the IUCN/SSC Tortoise and Freshwater Turtle Specialist Group. Chelonian Research Monographs 5, published on line, doi: 10.3854/crm. 5. 035.flavomarginata.vl.2009.
- 鈴木大，2021．ヤエヤマセマルハコガメ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 97．サンライズ出版，彦根．
- 田中聡，2005．ヤエヤマセマルハコガメ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 109‐111．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．

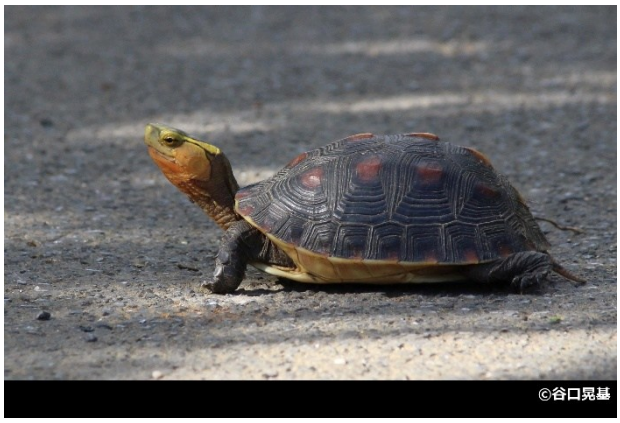
アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cuora flavomarginata evelynae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cuora flavomarginata evelynae* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Wetland/Marsh/Stream 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Abandoned farmland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Competition (with alien species)
Law designation status for conservation	Nationally Designated Natural Monument.





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

カメ目 Testudines　イシガメ科 Geoemydidae　　日本固有

ニホンイシガメ

***Mauremys japonica* (Temminck et Schlegel, 1838)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B1ab

基準 A:　—	基準 B:　VU	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B1．出現範囲が 20000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
ニホンイシガメは主に河川や湖沼といった淡水域にみられるが、陸域環境も多く利用するため、個体群の維持には淡水域と陸域が混在する水辺環境の存在がとくに重要である。そのような本種において好適な生息環境は、河川改修や圃場整備等に加え、里地里山の管理放棄等の影響により消失や減少が各地で進行している。さらに湖沼や河川の中下流域の水辺環境は、外来種のクサガメやミシシッピアカミミガメが優占する事態が進行しており、本種が健全に生息する地域は分断化され個体群が孤立してきている。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
ニホンイシガメの生息地の中で平地を中心とした水辺環境では、外来種のクサガメやミシシッピアカミミガメが侵入し、餌資源や生息場所などをめぐる競合が生じており、各地でニホンイシガメの個体群の衰退や局所的な絶滅を生じている。また、クサガメとの間に異種間交雑が生じており、複数の地点から交雑個体が見つかっている。この交雑個体は繁殖能力を有することが確認されており、遺伝的に純粋なニホンイシガメ個体群の消失が懸念される。さらに、アライグマによる影響も深刻である。2010 年代以降より、千葉県や福岡県で実施された調査によると、アライグマが侵入した地域では、捕食被害を受けてニホンイシガメの個体数が急速かつ顕著に減少したことが報告されている。その他の多くの地点からも、アライグマによるものとみられる捕食被害が報告されている。加えて、ペット取引による野生個体の乱獲も起きている。これら一連の生息阻害要因は本種の生息範囲全体で影響を及ぼしているとみられ、各地のニホンイシガメの個体群維持が困難になっており、個体群の衰退と消失が進行している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

ニホンイシガメは、本州、四国、九州および周辺島嶼に生息する日本固有種である。小川や河川、池などに生息し、湿地や水田でもよく見られる。本種は、河川改修工事や水田の圃場整備による生息地の減少や、ペット取引による乱獲、外来種アライグマによる捕食

圧、クサガメやミシシッピアカミミガメといった外来種との餌や生息地などの資源をめぐる競争、そしてクサガメとの間の交雑を介した遺伝的撹乱の影響により、絶滅の危機に瀕している。

基礎情報

【形態】

背甲は褐色か暗褐色で、腹甲は黒色。背甲は卵形で、背中線上はにぶく不連続な隆条をもち、後縁部はにぶい鋸歯状を呈する。頭部は灰褐色で、四肢は暗灰褐色または黒褐色。前肢の肘部の後縁に黄色の縦条があり、さらにその前方部に灰色の縦条が入ることもある。爪は前肢が 5 本、後肢が 4 本。尾は比較的長い。背甲長はオスが 13 cm、メスが 20 cm 程度。幼体やオスは甲が扁平だが、メスは甲高でドーム状となる。

【生活史】

淡水性で河川や湖沼等の淡水域にみられるが、陸域でも活動する。藻類や植物、果実類といった植物性のものから、貝や昆虫、甲殻類といった無脊椎動物から、魚類、爬虫類や鳥類の死体等、動物質のものまで食べる雑食性。卵生で 5 月末から 8 月初期に産卵する。孵卵時の温度で性別が決まる、温度依存性決定。交尾時期は春季と秋季。冬季は河川や湖沼の水中で越冬する。オスは 10 年から 15 年、メスは 20 年から 30 年ほど生きるとされるが、正確な寿命は不明。

【生息環境】

河川や湖沼といった淡水環境に生息する、さらに周辺の陸域や水田などの環境もよく利用している。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】田地・畑地，農業用水路，湿地・湿原・細流，河川上流域，河川中流域，ため池・池沼，湖・ダム湖 【陸域_平地部】田地・畑地，湿地・湿原，河川中流域，河川下流域，ワンド，農業用水路，小河川，ため池・池沼，潟・湖・ダム湖
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

本州（新潟県から関東以南）、四国、九州、周辺島嶼。

現在の生息状況

【分布域の現況】

小規模な絶滅が各地で生じていると考えられるが、詳細は不明。

【生息地の現況】

詳細は不明だが、開発等により生息環境の劣化・消失が続いていると考えられる。

【個体数の現況】

減少傾向にあるとみられる。全体のデータはないが、千葉県等のモニタリングでは明確な減少が示されており、これは全体の傾向を反映していると考えられる。

存続を脅かす要因

温度依存的性決定のため、産卵地域の温度環境の制限が性比のアンバランスを生じる可能性が指摘されている。低山地の沢周辺の樹林伐採、護岸整備などによる環境悪化や土地開発、水田の耕作放棄などによる生息地消失が進んでいる。ペット用の商業捕獲の影響による減少が懸念される。外来種のクサガメやハナガメとの交雑が生じ、遺伝的撹乱の影響が懸念される。生息域において、外来種のクサガメやミシシッピアカミミガメとの競争的生息分布の縮小が報告されている。外来捕食者のアライグマによる捕食被害が各地で報告されており、個体数の減少が予測されている場所、ならびに局所的に絶滅したとみられる地域もある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，土地造成，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，競争/競合（外来種による），交雑（外来種による）
	（現在）	森林伐採，湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，土地造成，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），競争/競合（外来種による），交雑（外来種による），気候変動

特記事項

ミトコンドリア DNA に基づく遺伝的変異を調べた研究により、遺伝的に異なる 2 系統の存在が確認されている。一方は本州の大部分と四国に見られ、もう一方は中国地方の西部と九州に見られる。広島県や島根県域において、両系統が混在する地域がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ニホンイシガメ	*Mauremys japonica*	NT
第４次 2019：	ニホンイシガメ	*Mauremys japonica*	NT
第４次 2018：	ニホンイシガメ	*Mauremys japonica*	NT
第４次 2017：	ニホンイシガメ	*Mauremys japonica*	NT
第４次 2015：	ニホンイシガメ	*Mauremys japonica*	NT
第４次：	ニホンイシガメ	*Mauremys japonica*	NT
第３次：	ニホンイシガメ	*Mauremys japonica*	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【宮城県】情報不足(DD),【茨城県】情報不足②現状不明種,【群馬県】絶滅危惧ⅠA類(CR),【埼玉県】情報不足(DD),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠA類(CR),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA類(CR),【東京都（北多摩）】絶滅危惧ⅠA類(CR),

【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【神奈川県】絶滅危惧Ⅰ類，【新潟県】準絶滅危惧(NT)，【富山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【石川県】準絶滅危惧(NT)，【福井県】県域準絶滅危惧，【山梨県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【長野県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【岐阜県】準絶滅危惧，【静岡県】準絶滅危惧(NT)，【愛知県】準絶滅危惧(NT)，【三重県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【滋賀県】希少種，【京都府】要注目種，【大阪府】NT，【兵庫県】Cランク，【奈良県】絶滅危惧種，【和歌山県】準絶滅危惧(NT)，【鳥取県】準絶滅危惧(NT)，【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類，【広島県】準絶滅危惧(NT)，【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【徳島県】絶滅危惧ⅠB類，【香川県】準絶滅危惧(NT)，【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【高知県】注目種，【福岡県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【佐賀県】情報不足，【長崎県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【熊本県】準絶滅危惧種(NT)，【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【宮崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)，【鹿児島県】準絶滅危惧

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kagayama, S., D. Ogano, M. Taniguchi, K. Mine, S. Ueno, H. Takahashi, N. Kamezaki, and M. Hasegawa, 2020. Species distribution modeling provides new insights into different spatial distribution patterns among native and alien freshwater turtles in Japan. Current Herpetology, 39(2): 147-159.
- Kagayama, S., A. Shimofuji, K. Ohtake, S. Shishikura, D. Ogano, and M. Hasegawa, 2021. Changes in population structure of the freshwater turtle *Mauremys japonica* following the invasion of feral raccoon *Procyon lotor* in the southern tip of the Boso Peninsula, Japan. Current Herpetology, 40(1): 22-39.
- 小菅康弘，2011．千葉県における淡水ガメの大量死：捕食者はアライグマ？．亀楽，1: 10-11．
- 楠田哲士，2019．ニホンイシガメの生息域外保全に向けた考え方の整理と全国の取り組み事例の紹介．亀楽，17: 10‐18．
- Matsuda, Y., S. Kaburagi, N. Kamezaki, H. Ota, H. Takahashi, T. Imazu, S. Kagayama, and K. Kawamura, 2024. Density-dependent unidirectional hybridization between the Japanese pond turtle, *Mauremys japonica*, and the exotic Reeves' pond turtle, *Mauremys reevesii*, in Japan, inferred from molecular and morphological analyses. Zoological Journal of the Linnean Society, zlae070.
- Okada, Y., T. Yabe, and S. Oda, 2010. Temperature-dependent sex determination in the Japanese pond turtle, *Mauremys japonica* (Reptilia: Geoemydidae). Current Herpetology, 29(1): 1-10.
- Okada, Y., T. Yabe, and S. Oda, 2011. Interpopulation variation in sex ratio of the Japanese pond turtle *Mauremys japonica* (Reptilia: Geoemydidae). Current Herpetology, 30 (1): 53-61.
- 鈴木大，2021．ニホンイシガメ，日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 94．サンライズ出版，彦根．

- Suzuki, D. and T. Hikida, 2011. Mitochondrial phylogeography of the Japanese pond turtle, *Mauremys japonica* (Testudines, Geoemydidae). Journal of Zoological Systematics and Evolutional Research, 49(2): 141–147.
- 鈴木大，谷口真理，加賀山翔一，2025．日本の淡水棲および陸棲のカメ類の分布パターン．爬虫両棲類学会報，2025(2): 145‐155.
- 鈴木大，會津光博，菊水研二，2015．アライグマの食害を受けたと考えられるニホンイシガメ．爬虫両棲類学会報，2015(1): 15‐17.
- 鈴木大，矢部隆，野呂達哉，疋田努，2012．外来種ハナガメによる遺伝的撹乱（学会講演要旨）．爬虫両棲類学会報，2012(1): 47.
- Suzuki, D., T. Yabe, and T. Hikida, 2014. Hybridization between *Mauremys japonica* and *M. reevesii* inferred by nuclear and mitochondrial DNA analyses. Journal of Herpetology, 48(4): 445–454.
- Ueno, S., N. Kamezaki, K. Mine, D. Suzuki, S. Hosoya, K. Kikuchi, K. Okamoto, M. Torii, K. Kadowaki, K. Okamoto, and M. Sano. 2022. Reproductive ability of the hybrid between Japanese pond turtle (*Mauremys japonica*) and Reeves' pond turtle (*Mauremys reevesii*). Zoological Science, 39(2): 186-192.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Mauremys japonica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Mauremys japonica* is listed as VU under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 20,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream, Upper river basin, Middle river basin, Reservoir/Pond, Lake/Dam 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland, Wetland, Middle river basin, Lower river basin, Inlet, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam
Threat types:	Logging and wood harvesting, Lake development, River development, Wetland development, Field preparation, Land development, Dam/River structures construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by

	alien species), Competition (with alien species), Hybridization (with alien species), Climate change
Law designation status for conservation	—





執筆者:	鈴木大（東海大学）・竹中践（東海大学）
Author:	Dai Suzuki and Sen Takenaka

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　トカゲモドキ科 Eublepharidae　　日本固有

ヤンバルトカゲモドキ

***Goniurosaurus nebulozonatus* Kurita et Toda, 2024**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－

D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。

【判断理由】

本種の分布域は、概して生息地面積が狭い国産のトカゲモドキ属のなかでは相対的に広い方ではあるものの、環境改変による生息地の消失が進んでいることを考えると、その生息地面積は十分広いとは言えない。古宇利島では、もともと生息地範囲は限定的であったが、2005 年に古宇利大橋が開通してから島内各所での環境改変が続いており、生息範囲は危険なレベルにまで狭まっていると考えられる。また、ペットとしての人気が高く、違法採集のリスクにもさらされている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

沖縄島の北部と古宇利島だけに分布する中琉球の固有種で、常緑広葉樹林に覆われた山地や石灰岩地に見られる。沖縄島の北部では環境改変に伴い生息地が徐々に狭まっていると考えられる。環境改変に伴う生息地の消失は古宇利島でより深刻であり、すでに島内の限られた場所にしか生息せず、危険なレベルにあると思われる。違法採集も本種を圧迫する要因の一つであり、取り締まりの強化が望まれる。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長は 75-95 mm ほどで、クロイワトカゲモドキ（*Goniurosaurus kuroiwae*）とほぼ同じ。生体の虹彩は赤褐色ないし暗赤褐色。背面のパターンは変異に富むが、背中線を欠くことが多い。胴背面の横帯はある場合もない場合もあるが、横帯がある場合は地色との境界がぼやける。背中線も横帯もない個体は、暗褐色ないし黒褐色の地に、細かい淡黄色の不規則な小斑が散在する。腹面は淡褐色で、偏平な鱗が瓦状に並ぶ。

【生活史】

4～10 月に目撃される個体が多くなる。卵を持ったメスは 6～9 月に観察され、この間にメスは複数回産卵すると考えられるが、実際の回数や間隔などは不明。産卵場所もよく分かっていない。一度に 2 卵が産み落とされ、孵化幼体は 9 月初旬から出現し始める。林床で活動し、ミミズ類、クモ類、ムカデ類、バッタ類、ゴキブリ類、昆虫の幼虫などを食べる。幼体はヨコエビ類への依存度が高い。本種の捕食者としては、ガラスヒバァ、ヒメハブ、ナミエガエルが知られている。

【生息環境】

主に、常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林に生息し、そういった植生を伴う石灰岩地域で数は多いが、非石灰岩地域にも生息する。海岸近くから山地までみられ、墓地や公園など、多少なりとも人為的に撹乱された環境でもみられる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

沖縄島の北部（国頭郡）と古宇利島に分布する。分布の南限付近ではクロイワトカゲモドキとの間に交雑帯がみられる。国内の別の同属種は、奄美諸島の徳之島と、沖縄島の名護市・本部半島以南、および沖縄諸島の沖縄島よりも西側に位置する島々に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

沖縄島では比較的広範囲に分布しているが、古宇利島では屋我地島を介して沖縄島との間に架橋がかかってから環境改変が続いており、生息範囲は狭まっている。

【生息地の現況】

沖縄島では比較的広範囲に分布しているが、林道や圃場の整備に伴い、生息地面積は徐々に狭まっていると考えられる。古宇利島では断続的な環境改変により生息環境は悪化している。

【個体数の現況】

資料が不足していて、個体数やその減少率を具体的に推定するのは不可能だが、生息適

地の減少に伴い、個体数は減少していると考えられる。

存続を脅かす要因

道路や圃場の整備など、さまざまな人間活動に伴う環境改変により生息適地が減少している。また、最近も多数の個体が密猟される事案が発生するなど、ペット販売的の違法採集も圧迫要因になっていると考えられる。また、最近も多数の個体が密猟される事案が発生するなど、ペット販売的の違法採集

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による）

特記事項

沖縄島のなかで交雑帯を形成しながらも近縁種であるクロイワトカゲモドキと側所的に分布する特異な分布様式を示す。そういった分布様式の形成課程や維持メカニズムは十分に解明されていないが、島内での種多様化や共存のしくみを知る上で高い学術的価値を持つといえる。本種を含む琉球産トカゲモドキ類全体でみても、狭い範囲で多くの種が形成され、維持されてきたと考えられるため、そのプロセスを理解するために引き続き研究が必要である。そういった研究をとおして琉球地域の古地理、古環境を知ることにも繋がると期待されることから、その学術的価値は高い。沖縄県の天然記念物に指定されている。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義クロイワトカゲモドキ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- Grismer, L. L., H. Ota and S. Tanaka, 1994. Phylogeny, classification, and biogeography of *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae) from the Ryukyu Archipelago, Japan, with description of a new subspecies. Zool. Sci., 11: 319–335.
- Honda, M., T. Kurita, M. Toda, and H. Ota, 2014. Phylogenetic relationships, genetic divergence, historical biogeography and conservation of an endangered gecko, *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae), from the Central Ryukyus, Japan. Zool. Sci., 31: 309–320.
- Kadota, Y., 2011. Is *Ovophis okinavensis* active only in the cool seasonμm Temporal foraging pattern of a subtropical pit viper in Okinawa, Japan. Zool. Stud., 50: 269–275.
- 越野一志，2015．ナミエガエルによるクロイワトカゲモドキの捕食例．Akamata，25: 13-14.
- Kurita, T. and M. Toda, 2022. Comparison of morphological identification and DNA metabarcoding for dietary analysis of faeces from a subtropical lizard. Wildlife Res., 50: 224–236.
- Kurita, T. and M. Toda, 2024. Genetic and morphological studies on *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae), with a description of a new species from the northern part of Okinawajima Island, Ryukyu Archipelago, Japan. Curr. Herpetol., 43: 86–114.
- Kurita, T., M. Honda, and M. Toda. 2018. Species delimitation and biogeography of the Ryukyu ground geckos, *Goniurosaurus kuroiwae* ssp. (Squamata: Eublepharidae), by use of mitochondrial and nuclear DNA analyses. J. Zool. Syst. Evol. Res., 56: 209-22 2.
- 湊和雄．1994，山原の自然 亜熱帯の森．平凡社，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Goniurosaurus nebulozonatus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Goniurosaurus nebulozonatus* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)

	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　トカゲモドキ科 Eublepharidae　　日本固有

オビトカゲモドキ

***Goniurosaurus splendens* (Nakamura et Uéno, 1959)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－
D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。 【判断理由】 農地開発などにより生息環境は悪化している。1 つの島にしか分布しておらず、ペットとして人気があり、販売のための違法採集がなされている可能性が高いことも考えると、現在の生息地面積が種の存続の観点から十分広い状態にあるとは言えない。				
評価分科会：　爬虫類・両生類分科会				

概要

奄美諸島徳之島の固有種で、おもに常緑広葉樹林に覆われた山地とその周辺に見られる。他の同属種との分岐は古く、系統的固有性が高い種として位置づけられる。生息地の環境改変は続いており、個体群のさらなる縮小が懸念される。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長は普通 65～81 mm ほどで、国産の他の同属種に比べてやや小さく、胴の模様が横帯を基調とする点でイヘヤトカゲモドキ（*Goniurosaurus toyamai*）に似るが、本種は明らかに細身の体型をしている。生体の虹彩は赤褐色ないし赤味がかった暗褐色。背面の地色は黒褐色で、胴部には淡桃色の横帯が 3 本ある一方、ケラマトカゲモドキ（*Goniurosaurus sengokui*）などに見られるような淡色の縦条成分はない。これらの横帯の間の暗色部には、淡色の斑紋等はほとんど見られない。腹面は淡褐色で、胸部の鱗は互いに重ならず敷石状である点で他の種と区別できる。

【生活史】

おもに 5～9 月の夜間に活動中の個体が多く観察される。博物館標本の観察から、少なくとも 6 月上旬～7 月中旬にかけて輸卵管卵をもったメスが現われ、一度に 2 個産卵することが分かっている。飼育下での観察により、卵は硬い卵殻をもたず、その大きさは 19×11 mm 程度であること、ふ化までに 2 ヶ月～2 ヶ月半を要すること、飼育条件下では 1 ヶ月ほどの間隔で 1 シーズンに 3 回は産卵すること、ふ化幼体の全長は 55～60 mm であることなどが知られている。世代期間は不明。オスは、飼育下では排他性があるようである。野外での直接観察や博物館標本の調査結果から、おもにミミズや昆虫の幼虫など地上性の小型無脊椎動物を捕食するとされる。

【生息環境】

おもに常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林に生息するが、森林に隣接した農耕地や住宅地周辺などにも出現する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林，耕作放棄地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

奄美諸島の徳之島に固有。他の同属種は沖縄諸島の沖縄島およびその西側の島々に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

資料が少なく、分布域の経時的な変化については詳しくは分からないが、徳之島の中部や南部で土地改良が進み、分布域は狭まっていると考えられる。

【生息地の現況】

土地改良により、とくに低地で生息地の消失、あるいは断片化が進んでいる。

【個体数の現況】

資料が少なく、個体数やその変化について具体的な推定値を出すことはできないが、生

息適地は明らかに減少していることから、個体数も減少傾向にあると考えられる。

存続を脅かす要因

農業用の土地改良、道路の敷設や拡張・整備、森林伐採による生息地の縮小のほか、販売を目的とした違法捕獲も行われている可能性が高く、個体群への影響が懸念される。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，違法採集
	（現在）	森林伐採，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，違法採集

特記事項

本種を含む琉球産トカゲモドキ類は奄美・沖縄諸島のなかで地理的に細かく分化しており、同地域における生物多様性創出の過程を解明するうえで学術的に高い価値がある。そのなかで本種はいち早く分化したと考えられており、他種との比較の文脈で学術的に高い価値を持つ。鹿児島県の天然記念物に指定されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オビトカゲモドキ	*Goniurosaurus splendens*	EN
第４次 2019：	オビトカゲモドキ	*Goniurosaurus splendens*	EN
第４次 2018：	オビトカゲモドキ	*Goniurosaurus splendens*	EN
第４次 2017：	オビトカゲモドキ	*Goniurosaurus splendens*	EN
第４次 2015：	オビトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae splendens*	EN
第４次：	オビトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae splendens*	EN
第３次：	オビトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae splendens*	EN
第２次：	オビトカゲモドキ	*Goniurosaurus kuroiwae splendens*	EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- Grismer, L. L., H. Ota, and S. Tanaka, 1994. Phylogeny, classification, and biogeography of *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae) from the Ryukyu Archipelago, Japan, with description of a new subspecies. Zool. Sci., 11: 319–335.
- Henkel, F. W. and W. Schmidt, 1995. Geckoes: Biology, Husbandry, and Reproduction. Krieger, Florida. 237pp.
- Honda, M., T. Kurita, M. Toda, and H. Ota, 2014. Phylogenetic relationships, genetic divergence, historical biogeography and conservation of an endangered gecko, *Goniurosaurus kuroiwae* (Squamata: Eublepharidae), from the Central Ryukyus, Japan. Zool. Sci., 31: 309–320.
- Janssen, J. and C. R. Shepherd, 2019. Trade in endangered and critically endangered Japanese herpetofauna endemic to the Nansei Islands warrants increased protection. Curr. Herpetol., 38: 99–109.
- Kaverkin, J., S. Mamet, and M. Toriba, 1994. Husbandry and reproduction of the eublepharid gecko *Goniurosaurus kuroiwae splendens* in captivity. Akamata, 10: 23–36.
- 栗田隆気，2021．オビトカゲモドキ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 108．サンライズ出版，彦根．
- 太田英利，2003．オビトカゲモドキ．鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物-動物編 - 鹿児島県レッドデータブック，pp. 84．鹿児島県環境生活部環境保護課，鹿児島県．
- 戸田守，2014．オビトカゲモドキ． 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編）レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物－3 爬虫類・両生類．pp. 14-15．ぎょうせい，東京．

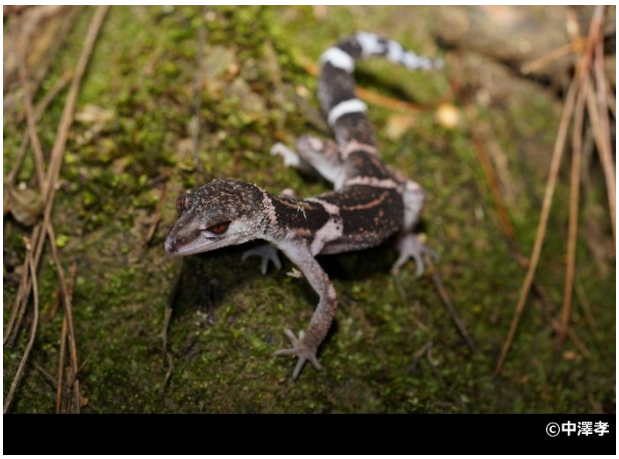
アセスメントサマリー（Assessment summary）

Goniurosaurus splendens has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Goniurosaurus splendens* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Abandoned farmland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Field preparation, Land development, Transportation infrastructure construction, Illegal harvesting of biological resources
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ヤモリ科 Gekkonidae　　日本固有

タカラヤモリ

***Gekko shibatai* Toda, Sengoku, Hikida et Ota, 2008**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－
D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。 【判断理由】 本種の分布は小島 2 島に限定されており、他のヤモリ類の定着・拡大により、短期間のうちに種の存続が危ぶまれる状況に陥る可能性がある。				
評価分科会：　爬虫類・両生類分科会				

概要

黄色い上唇板と黒い下唇板のコントラストが特徴的なヤモリで、トカラ諸島の宝島と小島の固有種。山地部の樹林内、それに隣接する人工構造物、集落内の樹木や家屋の外壁、海岸露岩など様々な環境に生息する。現状で生息数は少なくないが、近年、本種の主要な生息域である宝島にホオグロヤモリが侵入し、過去にはミナミヤモリの記録もある。ヤモリ類では、種間の競合あるいは交雑を通して種が置き換わる事例が知られており、分布域が限られる本種は、他のヤモリの定着・拡大によって大きな影響を受ける懸念がある。

基礎情報

【形態】

頭胴長 55～75 mm 程度。鼻間板は大型で、成体のオスにも前肛孔がない。胴部背面の顆粒状の細鱗に大型の結節状鱗が混じる。側肛疣は一対。背面の地色は暗褐色ないし栗色で、胴背中部に輪郭のやや不明瞭な暗帯がある。上唇部は黄色で、暗褐色ないし黒色の下唇部と強いコントラストをなす。腹面は薄黄ないしクリーム色で、頭部や四肢を中心に黒色ないし暗灰色の斑紋が散らばる。

【生活史】

飼育下で、1 個体のメスが同じ年の 5 月下旬と 6 月下旬にそれぞれ 2 個ずつ付着性の卵を産むのが観察されている。卵は長径が 12-15 mm ほどあり、2.5 ヶ月ほどの孵卵期間を経て、頭胴長 28-30 mm ほどの幼体が孵化する。昆虫やクモなどを餌とし、ブラーミニメクラヘビや同種の幼体の捕食例もある。

【生息環境】

常緑広葉樹に覆われた山地部の樹林内、それに隣接する人工構造物、集落内の樹木、さらには家屋の外壁でも見られる。また、海岸部にも生息しており、夜間に露岩や、時に砂浜、砂利浜で活動中の個体を見かける。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，田地・畑地，耕作放棄地，岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【陸域_平地部 海岸部】森林，田地・畑地，耕作放棄地，住宅地，砂浜・礫浜，海崖・岩浜・岩礁（磯）
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

トカラ諸島の宝島と小島だけに分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布する 2 島の面積は合わせても 7.5 km^2 程度である。今のところ、島内の広い範囲で確認され、分布域の大きな変化は見られない。

【生息地の現況】

生息地の物理的な環境が大きく変わったという情報はないが、本種の主要な分布域である宝島で 2017 年にホオグロヤモリの侵入が確認され、潜在的な競争者として本種を圧迫する懸念がある。同島からは、過去にミナミヤモリの記録もあり、その他のヤモリ類の侵入の懸念もある。特にミナミヤモリが定着した場合には競合や交雑、繁殖干渉などを通して本種に大きな影響が及ぶ可能性が高い。

【個体数の現況】

個体数について具体的な資料はない。様々な環境に出現し、密度も低くはないことから、少なくとも宝島では一定数の個体がいると思われる。

存続を脅かす要因

他のヤモリ類の侵入・定着が、本種の存続にとって最も大きな脅威と考えられる。宝島にはホオグロヤモリが侵入し、過去にはミナミヤモリの記録もある。ヤモリ類の場合、種間の競合あるいは交雑を通して種が置き換わった事例があり、宝島ではホオグロヤモリの分布拡大やミナミヤモリの定着が起こった場合、本種が受ける影響は相当に大きいと考えるべきである。気候変動によりヤモリ類が従来の分布域外に侵入する事例が増えているが、今のところそれを抑制する有効な手立てはなく、今後、上記 2 種以外の種が侵入するリスクも高い。

要因の区分：	（過去）	分布・産地局限
	（現在）	競争/競合（外来種による），分布・産地局限

特記事項

本種は宝島と小島に分布し、その間に位置する小宝島には形態的には似ているが系統の異なるアマミヤモリが分布している。その奇異な分布様式は競争排除により形成されたと推測され、島嶼の生物相の形成課程を考える上で貴重な存在である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	タカラヤモリ	*Gekko shibatai*	NT
第４次 2019：	タカラヤモリ	*Gekko shibatai*	NT
第４次 2018：	タカラヤモリ	*Gekko shibatai*	NT
第４次 2017：	タカラヤモリ	*Gekko shibatai*	NT
第４次 2015：	タカラヤモリ	*Gekko shibatai*	NT
第４次：	タカラヤモリ	*Gekko shibatai*	NT
第３次：	タカラヤモリ	*Gekko* sp.2	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】準絶滅危惧

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Ota, H., 1989. A review of the geckos (Lacertilia: Reptilia) of the Ryukyu Archipelago and Taiwan. In: M. Matsui, T. Hikida, and R. C. Goris (eds.), Current Herpetology in East Asia, pp. 222-261. Herpetological Society of Japan, Kyoto.
- 太田英利・岡田滋，2003．爬虫類・両生類．鹿児島県環境生活部環境保護課（編），鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物，動物編．鹿児島県レッドデータブック，pp. 82-116．財団法人鹿児島県環境技術協会，鹿児島．
- Tao, S. D. and M. Toda, 2023. Variation in cold tolerance of northern edge populations of the common house gecko (*Hemidactylus frenatus*). Herpetol. Conserv. Biol., 19: 73–83.
- 戸田守，2016．しごく身近な野生動物 -ヤモリ類の多様性と出現環境．水田拓（編著）奄美群島の自然史学 ： 亜熱帯島嶼の生物多様性，pp. 137‐155．東海大学出版部，秦野．
- Toda, M., S. Sengoku, T. Hikida, and H. Ota, 2008. Description of two new species of the genus *Gekko* (Squamata: Gekkonidae) from the Tokara and Amami Island Groups in the Ryukyu Archipelago, Japan. Copeia, 2008: 452-466.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Gekko shibatai has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Gekko shibatai* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Farmland, Abandoned farmland, Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest, Farmland, Abandoned farmland, Residential area, Sandy beach/Pebble beach, Sea Cliff/Rocky beach/Reef
Threat types:	Competition (with alien species), Limited distribution
Law designation status for conservation	—



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ヤモリ科 Gekkonidae　　日本固有

オキナワヤモリ

***Gekko* sp. 1**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab

基準 A:　―	基準 B:　VU	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
本種の減少にはミナミヤモリが介在していると考えられるため、例えばすでに存在する林道でも新たに舗装や護岸のなどの環境整備をすると、開放環境に強いミヤミヤモリの勢力が拡大し、オキナワヤモリが圧迫されるようである。沖縄島以外の生息地では本種が単独で生息する地域は非常に少なく、ミナミヤモリの侵入・拡大が進行している。これは沖縄島北部の山地森林域も例外ではなく、本種の後退傾向は明らかである。なお、オキナワヤモリの本来の生息環境も減少している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

　沖縄島と沖縄諸島の幾つかの離島に生息する沖縄諸島の固有種。主にスダジイを中心とする森林地域に生息するが、一部の離島ではスダジイ林以外にも生息する。同属種で形態的にもよく似ているミナミヤモリと競合していると考えられ、徐々に種の置き換わりが進行している。水納島（本部町）ではすでに個体群が消滅している可能性もある。伊是名島でも生息範囲は急速に狭まっており、沖縄島の本部半島においても局所的にしか生息しない。

基礎情報

【形態】

同所的に生息するミナミヤモリよりも明らかに大型で、頭胴長は 62-73 mm 程度。オスの成体は 5～8 個の前肛孔をもつが、沖縄島のものでは 6 個以下の場合が多い。胴部背面は顆粒状細鱗に覆われ大型の結節状鱗がかなり密に混じる。側肛疣は一対。背面の地色は灰色ないし灰褐色で、胴背中部に縦に並ぶ暗色斑は左右に分離してハの字をなすか、その前縁が互いに接してへの字状になる。暗帯と暗帯の間は多くの場合淡色で、背面の地色が濃い状態の個体ではひし形の明帯にみえる。腹面は白色に近い場合が多く、ミナミヤモリと違ってほとんど黄色味を帯ない。一方、頭部の腹面が黄色い個体が時折出現し、ときに鮮やかなオレンジ色を呈する。頭胴部の腹面に黒色ないし暗灰色の小斑が散らばることが多く、特に久米島の集団では黒斑は著しく大きく、虫食い状斑になる。

【生活史】

昆虫などの無脊椎動物を主に捕食するが、シマグワの果実やイチジク属の果実を摂食する場合もある。夏季に発見数が多くなるが、冬季にも活動している個体を見かける。生活史に関する情報は限られているが、2 月に交尾の観察例がある。メスは少なくとも春から夏にかけて 1 度に 2 個の卵を複数回産む。卵は基質にくっつく粘着卵で、産み付けられてから 2 ヶ月ちょっとで頭胴長 25 mm ほどの幼体が孵化する。

【生息環境】

常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林に多く、周辺の岩場や、林道ののり面などの人工構造物でも見られる。路面や林床で見かけることも少なくなく、地面にも頻繁に降りると思われる。広葉樹林に隣接した家屋の外壁でみかけることはあるが、開けた二次林や集落内には基本的に出現しない。ただし、水納島と伊是名島では集落周辺や海岸林、渡名喜島では海崖などの比較的にひらけた環境にも出現する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【陸域_平地部 海岸部】森林，海崖・岩浜・岩礁（磯）
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

沖縄諸島の沖縄島、伊平屋島、伊是名島、水納島、渡名喜島、久米島に分布する。沖縄島においては北部の山地森林やその周辺が主な分布域であり、現在までにわかっている島内の分布南限は金武町の森林地帯である。本部半島の山地森林でも確認されているが、分布範囲は極めて狭い可能性が高い。沖縄島以外の島においても、主に比較的自然度の高い森林環境に生息するが、伊是名島や水納島では海岸林やモクマオウなどの人工林で見つかることもある。また、渡名喜島では海崖でも見つかっている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

水納島ではこれまで本種の記録が数例しかなく、競合すると思われるミナミヤモリが常に同所的に見られることから、個体群は間もなく消滅するか、すでに消滅した可能性がある。 伊是名島でも、集落に隣接する環境で本種が全く確認できなくなった場所がある。その他の島でも部分的にミナミヤモリへの置き換わりが進行している。

【生息地の現況】

林道の敷設や農地開発その他の人為的環境改変により本種とっての生息適地は徐々に減少している。

【個体数の現況】

個体数についての具体的な情報はないが、森林と開放的な環境とが隣接する場所ではミナミヤモリへの置き換わりが進行しており、加えて本来の生息適地自体も徐々に減っていることから個体数が減少していることは間違いない。

存続を脅かす要因

沖縄島のやんばる地域のスダジイが優占する自然度の高い森林を除き、既知生息地のほとんど全てでミナミヤモリが同所的かつ同地的（syntopic）に出現し、競合を通して本種が後退していると思われる。伊平屋島や久米島の広葉樹林を横切る林道でも徐々にミナミヤモリが増えている兆候があるが、林道からはずれた広葉樹林内での詳しい状況は不明。ミナミヤモリは規模の大きな林道沿いを含め、開放的な環境に多く出現するため、林道の整備などに伴って本種の後退が急速に進行していると考えられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，圃場整備，競争/競合（在来種による）
	（現在）	森林伐採，圃場整備，競争/競合（在来種による）

特記事項

本種はミナミヤモリと形態的に酷似するが、集団遺伝学的な分析により、両者が同所的に出現する地域でさえ生殖的な交流がないことが示されており、互いに独立した種である（Toda et al., 2001）。ミナミヤモリとの間に分類学的な混乱があった中国の *Gekko liboensis* もこれらとは明らかに異なる種であることが示されており（Jono et al., 2015）、他の既知種で本種に該当すると思われるものもないため、オキナワヤモリは沖縄諸島固有の未記載種と考えられる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オキナワヤモリ	*Gekko* sp. 1	NT
第４次 2019：	オキナワヤモリ	*Gekko* sp. 1	NT
第４次 2018：	オキナワヤモリ	*Gekko* sp. 1	NT
第４次 2017：	オキナワヤモリ	*Gekko* sp. 1	NT

第４次 2015：	オキナワヤモリ	*Gekko* sp. 1	NT
第４次：	オキナワヤモリ	*Gekko* sp. 1	NT
第３次：	オキナワヤモリ（通称クメヤモリ）	*Gekko* sp.1	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Jono, T., L. Ding, T. Kaito, and M. Toda, 2015. Reevaluation of the taxonomic status of a poorly known Gecko, *Gekko liboensis* (Reptilia: Squamata). Asian Herpetol. Res., 6: 229–236.
- 戸田守，2008．オキナワヤモリとミナミヤモリの識別点について（予報）．Akamata， 19: 23-30.
- Toda, M., T. Hikida, and H. Ota, 2001. Discovery of sympatric cryptic species within *Gekko hokouensis* (Gekkonidae: Squamata) from the Okinawa Islands, Japan, by use of allozyme data. Zool. Scr., 31: 1-11.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Gekko sp. 1 has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Gekko* sp. 1 is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)

	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest, Sea Cliff/Rocky beach/Reef
Threat types:	Logging and wood harvesting, Field preparation, Competition (with native species)
Law designation status for conservation	—



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ヤモリ科 Gekkonidae　　日本固有

ヤクヤモリ

***Gekko yakuensis* Matsui et Okada, 1968**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
ホテルや公園の建設、港湾整備などに伴う土地改変によりミナミヤモリの分布が拡大し、競争あるいは交雑を介して本種は継続的に衰退している。現在でもその流れは弱まることなく、分布域のほぼ全域で虫食い状に生息状況が悪化している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

大隅諸島と九州地方南部の沿岸部近く、長崎県の一部に分布し、常緑広葉樹林内やそれに接した海岸露岩地などに生息する。ミナミヤモリとの交雑が分布域内の多数の場所で進行しており、純系個体群の消滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

国内の同属種のなかでは大型の種で、頭胴長は普通メスで 61～67 mm、オスで 57～66 mm で、最大値は雌雄ともに 73 mm に達する。体の背面は灰褐色ないし緑褐色で、背中部に縦に並ぶ暗色斑は多くの場合左右に二分し、体軸方向に沿った 2 列の点線のようになる。腹面には通常、多数の暗色斑があり、時に虫食い状になる。上・下唇板は黄色味を帯びており、周囲の鱗よりも色は明るい。形態的にはミナミヤモリとよく似ているが、体が大きく、鼻間板が周囲の鱗よりも顕著に大きいこと、尾の背面、環状溝前縁にある対になった大型鱗が尾の先端付近まで続く点でミナミヤモリと区別できる。オスの前肛孔の数は 3～8 個の範囲で変異するが 5～6 個のことが多く、ミナミヤモリよりも発達が悪い。

【生活史】

少なくとも 3 月には活動を開始し、夏場にかけて多くの個体が出現する。産卵期は 6～9 月で、一度に 2 個の卵を産む。年に複数回産卵すると思われるが詳細は不明。卵は長径 15 mm、短径 10 mm ほどで、2 つ並べてガジュマルの木の窪みや森林に接した露岩の隙間などに産み付けられる。森林内の東屋や廃墟などではしばしば多数の卵が壁面に固めて産み付けられており、その数は時に 3 桁に及ぶ。成熟年齢や寿命は不明。昆虫類などを中心に小型の無脊椎動物を食べる。

【生息環境】

おもに常緑広葉樹林内やその林縁部に生息する。海岸の岩場は主要な生息場所のひとつであるが、周囲に植生が乏しい露岩はあまり好まない。道路脇の壁面など、森林に隣接する人工物ではしばしば多くの個体が見られ、漁村などでは民家の壁面でも普通に見られる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【陸域_平地部】森林，市街緑地，海崖・岩浜・岩礁（磯）
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

大隅諸島の屋久島、種子島、馬毛島および九州地方南部と周辺の小島に分布するほか、長崎県の一部の離島からも見つかっている。九州地方では沿岸部とその周辺地域に分布し内陸部では見られない。同属種のミナミヤモリ（*Gekko* hokouehsis）、ニシヤモリ（*Gekko* sp.）、ニホンヤモリ（*Gekko japonicus*）とはそれぞれ、本種の分布域の南側、西側、北側で一部重複する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

地理的な分布範囲が縮小している証拠はないが、環境改変にともなって、各地でより開

放的な環境を好むミナミヤモリやニホンヤモリが勢力を拡大しており、その影響でヤクヤモリの分布域は徐々に狭まっている。

【生息地の現況】

護岸や開発により、生息地の広い範囲でミナミヤモリやニホンヤモリが増えている。その結果、雑種集団の形成や、種の置き換わりが進行している具体的な証拠がある。このように他種が介在した純系個体群の存続の危機は比較的小規模な環境改変によってももたらされると考えられ、この点を考慮するとその生息環境は明らかに悪化していると言える。

【個体数の現況】

個体数やその動態については資料が乏しく不明であるが、ミナミヤモリとの交雑個体の出現頻度は各地で増加傾向にあり、その結果として、ヤクヤモリの純系個体の数は減っている。

存続を脅かす要因

同属種のミナミヤモリと各地で交雑し、交雑個体も稔性をもっているため場所によっては雑種集団が形成されている。経年的な種組成の変化を調べた研究では、調査した 7 地点全てで、ここ 20 年ほどの間に交雑個体やミナミヤモリの増加がみられ、かつて交雑個体が優先していた地点ではヤクヤモリが全く確認できなくなったというデータが示されている。屋久島や種子島にもミナミヤモリが持ち込まれ、少なくとも屋久島では遺伝子浸透が進行している。行動学的な実験から、ミナミヤモリのメスは、オスの求愛コールによって自種と他種を識別できるのに対し、ヤクヤモリのメスはそれができないことが示されており、交雑による影響をより受けやすいことが指摘されている。DNA 分析により、交雑帯におけるミナミヤモリから本種への遺伝子浸透は限定的であることが示されているが、2 種の交雑の様式は環境によって異なる可能性もあり、より広い視点からの再評価が望まれる。加えて、環境改変によって、より開放的な環境を好むニホンヤモリが増え、本種と置き換わった地点もある。さらに宮崎と屋久島に国内外来種のオキナワキノボリトカゲ（*Diploderma polygonatum polygonatum*）が定着し、競合による本種への悪影響が心配されている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，海岸開発，土地造成，交通インフラ建設，交雑（在来種による）
	（現在）	森林伐採，海岸開発，土地造成，交通インフラ建設，交雑（在来種による）

特記事項

本種はミナミヤモリと近縁でありながら、その分布範囲は互いに重なり、島嶼部では 2 種が排他的に分布する点で、種分化や種間競争の理解のための高い学術的価値を有する。しかし、環境改変や種の人為的な持ち運びにより、本来の分布パターンは崩壊に向かって

いる。長崎県から見つかった個体群は地理的に不連続になっており、その起源に興味が持たれるが、十分な調査・研究はなされていない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ヤクヤモリ	*Gekko yakuensis*	VU
第４次 2019:	ヤクヤモリ	*Gekko yakuensis*	VU
第４次 2018:	ヤクヤモリ	*Gekko yakuensis*	VU
第４次 2017:	ヤクヤモリ	*Gekko yakuensis*	VU
第４次 2015:	ヤクヤモリ	*Gekko yakuensis*	VU
第４次:	ヤクヤモリ	*Gekko yakuensis*	VU
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【長崎県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【宮崎県】準絶滅危惧(NT-r)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Jono, T., 2016. Absence of temporal pattern in courtship signals suggests loss of species recognition in gecko lizards. Evolutionary Ecology, 30: 583–600.
- Jono, T., T. Kawamura, and R. Koda, 2013. Invasion of Yakushima Island, Japan, by the subtropical lizard *Japalura polygonata polygonata* (Squamata: Agamidae). Current Herpetology, 32: 142–149.
- 前之園唯史・戸田守，2007．琉球列島における両生類および陸生爬虫類の分布．Akamata，18: 28‐46.
- 長崎県レッドデータブック編集委員会，2011．長崎県レッドデータブック 2011-ながさきの希少な野生動植物-普及版．pp. 199．長崎県環境部自然環境課，長崎.
- 岡田純，1998．日南海岸で発見されたヤクヤモリ．比婆科学，185: 1‐5.
- 岡田純，1998．柴田保彦氏が採集した大隅半島周辺のヤモリ標本の検討．比婆科学，185: 7‐13.
- Okamoto, K., A. Tominaga, and M. Toda, 2024. Demographic imbalance in the hybrid zone led to asymmetric gene flow between two closely related geckos, *Gekko hokouensis* and *Gekko yakuensis* (Squamata: Gekkonidae). Biological Journal of the Linnean Society, 141: 118–132.

- 柴田保彦，1981．種子島のヤクヤモリ．自然史研究，1: 149‐154．
- 竹中践，2002．ヤクヤモリの林内神社の利用．Akamata，16: 19‐21．
- 竹内寛彦・戸田守，2006．馬毛島からのヤクヤモリの記録．日本爬虫両生類学会報，2006: 26‐27．
- Toda, M. and T. Hikida, 2011. Possible incursions of *Gekko hokouensis* (Reptilia: Squamata) into non-native area: An example from Yakushima Island of the Northern Ryukyus, Japan. Current Herpetology, 30: 33–39.
- Toda, M., S. Okada, H. Ota, and T. Hikida, 2001. Biochemical assessment of evolution and taxonomy of the morphologically poorly diverged geckos, *Gekko yakuensis* and *G. hokouensis* (Reptilia: Squamata) in Japan, with special reference to their occasional hybridization. Biological Journal of the Linnean Society, 73: 153–165.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Gekko yakuensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Gekko yakuensis* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Urban green area, Sea Cliff/Rocky beach/Reef
Threat types:	Logging and wood harvesting, Coastal development, Land development, Transportation infrastructure construction, Hybridization (with native species)
Law designation status for conservation	―



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ヤモリ科 Gekkonidae

タシロヤモリ

***Hemidactylus bowringii* (Gray, 1845)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－
D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。 【判断理由】 奄美大島において、ホオグロヤモリの定着・拡大により、本種の目撃数が少なくなっている地域が拡大している。ホオグロヤモリは加計呂麻島からも見つかっており、さらに拡大すれば、本種の減少が加速し、分布域がさらに縮小する可能性がある。この状況を考えれば、現在の分布範囲はすでに限定的とみなすべきである。				
評価分科会：　爬虫類・両生類分科会				

概要

頭胴長は 40～55 mm 程。胴部背面の顆粒状細鱗に大型の結節状鱗が混ざらない点、成体オスにある左右の前肛大腿孔列が孔のない 2、3 枚の鱗によって隔てられる点、尾に（非再生部分も含め）大型鱗の環状列がない点などにより、同属のホオグロヤモリと区別される。奄美諸島を除く琉球列島地域では近年全く確認がなく、奄美大島と喜界島でも高頻度で目撃される地域は急速に狭まっている。要因として、外来種であるホオグロヤモリとの競争排除があるものと考えられる。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長は 40～55 mm 程度。指下板は中央で二分する。背面は灰褐色で、多数の不規則な暗色斑が散らばるのと同時に、左右背側部に丸みを帯びた小さな明色斑が縦に並ぶ。ただし、基色が明るくなった状態では、これらの模様はほとんど確認することができない。背面は一様に顆粒状鱗で覆われ大型鱗を欠くこと、前・後肢とも第 1 指がよく発達することでホオグロヤモリと区別できる。オスは 23～31 個の前肛大腿孔列を持つが、中央部の前肛孔のない 2～5 枚の鱗で左右に隔てられる。尾には、ホオグロヤモリの尾にみられるような環状突起を持たない。

【生活史】

中国や台湾の個体群を対象にした研究により、5 月中旬～8 月下旬に産卵すること、孵化幼体は 6 月下旬から 9 月下旬にかけて出現すること、卵は球形に近く長径 8.7～8.9 mm、短径 7.6 mm 程度で、基質に付着しないこと、一腹卵数は 2 で、孵卵期間は 43～60 日程であること、孵化時の頭胴長は 28 mm 前後であることなどが分かっている。また、孵化後 9-11 ヶ月間で性成熟に達すると推定されている。昆虫などの節足動物を食べる。

【生息環境】

奄美大島では主に郊外の東屋や人工構造物などでみられる。民家の外壁にもいるが、灯火周辺にはホオグロヤモリがいて、本種は直接灯火の光が当たらない壁面にいることが多い。大島郡瀬戸内町の島では、上述した環境のほか、集落内外の道路沿いの壁面などでも普通に見られる。山地森林には生息しない。香港ではもっとも普通にいる爬虫類の一つで、人の生活圏から森林に広く生息するようである。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】田地・畑地，耕作放棄地 【陸域_平地部】田地・畑地，耕作放棄地，住宅地，市街緑地
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域，(5) 沿岸域，(7) 島嶼地域

【分布域】

奄美諸島の北部、徳之島、沖縄島、宮古島、多良間島、石垣島から記録されているが、奄美諸島以外の地域における戦後の確かな記録は 1970 年代の宮古島と多良間島のものしかない。奄美諸島では、大島郡瀬戸内町の請島、与路島、加計呂麻島と奄美大島、喜界島に分布している。1980 年代には徳之島の伊仙町でも高頻度で見られたという情報がある。一方で、奄美諸島における本種の記録は、奄美大島の名瀬で 1964 年に見つかったものが初めてであり、人為的に持ち込まれたものであるという見方もある。海外では台湾、中国、ベトナム、ミャンマーの一部に分布する。近年までバングラディッシュ、インド、ネパールなどにも分布するとされていたが、ミャンマーより西側のものは別種とされている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1970 年代にタシロヤモリの標本が採集された宮古島や多良間島では、それ以降確認されていない。1980 年代には徳之島の伊仙町でも本種が高頻度で見られたという情報があるが、その後の調査では確認されていない。このように徳之島以南の地域では、本種の個体群は急速に縮小し、おそらくは消滅したものと考えられる。現在は、大島郡瀬戸内町の島々と奄美大島、喜界島で比較的容易に見られるが、それらの島では同属種のホオグロヤモリが侵入・拡大し、住宅が多い環境を中心に、各地でこの種への置き換わりが急速に進行している。

【生息地の現況】

奄美大島では、以前は市街地でもタシロヤモリが普通に見られたが、現在では多くの地域でホオグロヤモリが優占し、本種は明らかに減少している。2000 年以前にはホオグロヤモリが侵入していなかった奄美諸島北部の分布地のうち、奄美大島と喜界島ではホオグロヤモリが拡大している。ホオグロヤモリは加計呂麻島にも侵入しており、ナキヤモリ属としてタシロヤモリが単独で分布するのは、もはや請島と与路島だけとなっている。

【個体数の現況】

情報が少なく、詳細は不明だが、徳之島以南の地域では 1970 年代から 1990 年代までに激減し、おそらくは個体群は消滅したと考えられる。奄美諸島の北部でもホオグロヤモリが侵入・定着した 2000 年以降、確実に数が減っている。

存続を脅かす要因

同属種ホオグロヤモリとの競合が、本種の存続を脅かす主要因であることはほぼ間違いない。ホオグロヤモリの分布域が北へと拡大するのに伴って、本種の個体群が消滅してきたと考えられる。同様な現象は台湾でも見られる。近年、島内でホオグロヤモリが拡大している奄美大島と喜界島では、大きな環境改変がないにも関わらず、タシロヤモリが減っている地域が複数ある。このままでは本種の国内の個体群が消滅する可能性もある。

要因の区分：	（過去）	競争/競合（外来種による）
	（現在）	競争/競合（外来種による）

特記事項

中国や台湾との間に特に目立った遺伝的分化が見られない点は奇異であり、少なくとも現在奄美諸島にみられる個体群は外来である可能性がある。DNA を使った分析が進められているものの、現時点では外来個体群であるとの確証は得られていないため、第 5 次レッドリストにおいては評価対象種とした。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	タシロヤモリ	*Hemidactylus bowringii*	VU

第４次 2019：	タシロヤモリ	*Hemidactylus bowringii*	VU
第４次 2018：	タシロヤモリ	*Hemidactylus bowringii*	VU
第４次 2017：	タシロヤモリ	*Hemidactylus bowringii*	VU
第４次 2015：	タシロヤモリ	*Hemidactylus bowringii*	VU
第４次：	タシロヤモリ	*Hemidactylus bowringii*	VU
第３次：	タシロヤモリ	*Hemidactylus bowringii*	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】情報不足(DD)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kurita, T., 2013. Current status of the introduced common house gecko, *Hemidactylus frenatus* (Squamata: Gekkonidae), on Amamioshima Island of the Ryukyu Archipelago, Japan. Curr. Herpetol., 32: 50–60.
- 栗田隆気，2021．タシロヤモリ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 119-120．サンライズ出版，彦根.
- McMahan, C. D. and G. R. Zug, 2007. Burmese *Hemidactylus* (Reptilia, Squamata, Gekkonidae): Geographic variation in the morphology of *Hemidactylus bowringii* in Myanmar and Yunnan, China. Proc. California Acad. Sci. 58: 485–509.
- 日本爬虫両棲類学会（編），2021．新日本両生爬虫類図鑑．サンライズ出版，彦根．232pp.
- Ota, H., 1986. A review of reptiles and amphibians of the Amami Group, Ryukyu Archipelago. Memoirs Faculty of Science, Kyoto Univ., 11: 57–71.
- Ota, H., 1989. A review of the geckos (Lacertilia: Reptilia) of the Ryukyu Archipelago and Taiwan. Current Herpetology in East Asia, pp. 222–261. Herpetological Society of Japan, Kyoto.
- 太田英利，2003．タシロヤモリ．鹿児島県環境生活部環境保護課（編），鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物，動物編 －鹿児島県レッドデータブック－，pp. 99．財団法人鹿児島県環境技術協会，鹿児島.
- 太田英利，2014．タシロヤモリ．環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編），レッドデータブック 2014 日本の説滅の恐れのある野生生物 3 爬虫類・両生類，pp. 38-39．ぎょうせい，東京.

- Purkayastha, J., M. Das, A. M. Bauer, S. Sengupta, and S. K. Dutta, 2010. Notes on the *Hemidactylus bowringii* complex (Reptilia: Gekkonidae) in India, and a change to the national herpetofaunal list. Hamadryad, 35: 20–27.
- 当山昌直，1976．宮古群島の両生爬虫類相（I）．爬虫両棲類学雑誌，6: 64‐74.
- 当山昌直，1981．宮古群島の両生爬虫類．沖生教研会誌，14: 30‐39.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hemidactylus bowringii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hemidactylus bowringii* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Farmland, Abandoned farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland, Abandoned farmland, Residential area, Urban green area
Threat types:	Competition (with alien species)
Law designation status for conservation	—



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ヤモリ科 Gekkonidae

ミナミトリシマヤモリ

***Perochirus ateles* (Duméril, 1856)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－

D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。

【判断理由】

国内にある 2 つの生息地のうちの一つ、南鳥島では本種個体群が消滅した可能性が高く、南硫黄島が唯一の生息地である。南硫黄島は無人島であり、容易に環境改変などが進行するとは考え難いが、南鳥島やグアムなどの状況を考えれば、仮に南硫黄島にホオグロヤモリなどの競争種が侵入した場合、比較的短時間のうちに本種の個体群が消滅してしまう危険性があり、最大限の注意が必要である。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

国内に生息するヤモリ科の種の中では体が最も大きく、頭胴長はオスで 55‐88 mm に達する。胴部背面は一様に顆粒状鱗で覆われる。第 1 指趾は極端に矮小化している。尾は偏平で、側縁には一定間隔で円錐形のやや大型の鱗があり、全体として鋸歯状となっている。国内では南鳥島と南硫黄島のみから知られていたが、南鳥島の個体群は、おそらく外来種の影響によりすでに消滅したと思われる。国外では最西端域を除くミクロネシア全域に分布。

基礎情報

【形態】

国産のヤモリ科なかでは最大の種で、頭胴長はオスで 55～88 mm。頭胴部背面は栗色または灰褐色で暗褐色と淡褐色の不規則な小斑が密に散らばる。胴部背面の鱗は細かく顆粒状で、大型鱗はない。頤板は三角形で、第 1 下唇板より大きい。第 1 指趾は退行傾向が著しく、第 2 指趾に比して極端に小さい。指下板は第 1 指趾のものを除き基部に比べ先端方向で拡大し、末端の 4～8 枚は左右に 2 分する。海外の個体群では、成体オスは 2～6 個の前肛孔をもつが、南硫黄島産の個体はこれを欠く。尾は偏平で、左右の側縁には一定間隔で円錐形のやや大型の鱗があり、そのため全体として鋸歯状を呈する。

【生活史】

生活史や生態に関する知見は限られているが、夜行性で、南硫黄島ではおもに樹幹部などで活動すること、センダンなどの花のすぐ近くに静止し、訪花昆虫を捕食すること、夕刻になるとオスがメスを追うことがあることなどが短期間の野外観察や飼育下での観察から報告されている。メスは 1 度に 2 個、球形に近い粘着卵を産む。孵化幼体は頭胴長 20 mm で、オスは 57 mm、メスは 52 mm で性成熟したという報告がある。

【生息環境】

主に森林に生息するが、植生がまばらな島にも分布する。南硫黄島ではアカテツ、センダンなどが優占する樹林とその周辺の岩場などに生息し、標高が低い場所から比較的高い場所まで高密度で見られるが、海岸線近くの岩場には比較的少ないようである。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内での分布記録は南鳥島（マーカス島）と南硫黄島に限られる。国外での分布はパラオを除くカロリン諸島、マリアナ諸島など、西端域を除くミクロネシアのほぼ全域に及んでいる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現在、国内の分布地のひとつである南鳥島では全島的にホオグロヤモリとオガサワラヤモリがみられ、ミナミトリシマヤモリはまったく見つからないことから、この島の集団はすでに消滅したものと考えられる。国外でも例えばグアムなど、以前に分布記録のあった多くの場所から姿を消しており、分布の空白地が増加している。

【生息地の現況】

国内の生息地のうち、無人島の南硫黄島では、自然に起こる崖崩れなどを除いて大規模な環境変化はない。一方、20 世紀初頭に自然物に関する総合調査が行われた南鳥島では、それ以降、灯台や測候所、空港施設などが建設された。これらがもたらした環境変化の具

体的な内容は不明であるが、現在は、20 世紀はじめの段階ではおそらく生息していなかった外来種のクマネズミ、イエネコ、オガサワラヤモリ、ホオグロヤモリ、アフリカマイマイなどが侵入し、定着している。現在では、植生もギンネムやモクマオウが優先している。

【個体数の現況】

南硫黄島の個体群については、人為的影響からはほぼ独立しており、具体的な数値は不明なものの、それなりに高い水準で安定していると予想される。それとは対照的に、南鳥島の個体群は、1903 年の調査で「至る所に多数が見られる」と記述されていた半世紀後の 1952 年の調査では 1 個体も確認されていない。2007 年に全島的な踏査が行われ、様々な環境でホオグロヤモリとオガサワラヤモリが見られた一方、本種は全く確認されなかったことから、同島の個体群は完全に消滅してしまったと考えられる。

存続を脅かす要因

南鳥島における個体群の消滅の経緯については、正確な時期をはじめ不明な点が多く、要因の特定は困難である。ただ国外（マリアナ諸島）の事例を見る限り、ネコ、ネズミ類、ヘビ類といった外来種による捕食圧や、ホオグロヤモリなどとの競争圧に対し脆弱なことが示唆される。南鳥島でも、クマネズミやオガサワラヤモリ、ホオグロヤモリが高密度でおり、それらの影響により個体群が消滅した可能性が高い。現在の状況で、国内唯一の生息地となった南硫黄島に上述したような外来種が侵入する機会はほとんどないと思われるが、仮に侵入が起こった場合、本種の集団が消滅に向かう可能性は非常に高い。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，捕食（外来種による），競争/競合（外来種による）
	（現在）	捕食（外来種による），競争/競合（外来種による）

特記事項

国内の個体群は本種の分布域のうち最北限に位置しており、亜熱帯気候への生理的適応の視点から興味深い研究対象となり得る。また成体オスにおける前肛孔の有無等、他地域の個体群との間に形態的差異も見られ、分類学的研究においても貴重な研究対象と思われる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ミナミトリシマヤモリ	*Perochirus ateles*	VU
第４次 2019：	ミナミトリシマヤモリ	*Perochirus ateles*	VU
第４次 2018：	ミナミトリシマヤモリ	*Perochirus ateles*	VU
第４次 2017：	ミナミトリシマヤモリ	*Perochirus ateles*	VU
第４次 2015：	ミナミトリシマヤモリ	*Perochirus ateles*	VU
第４次：	ミナミトリシマヤモリ	*Perochirus ateles*	VU

第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（小笠原諸島）】情報不足(DD)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 堀越和夫，2007．南硫黄島のトカゲ類．小笠原研究，33: 129‐134．
- 星野一三雄，2005．南鳥島からのオガサワラヤモリ *Lepidodactylus lugubris*（爬虫綱: 有鱗目）の新記録．爬虫両棲類学会報，2005: 107‐109．
- 川上和人，2007．平成 19 年度国指定鳥獣保護区指定に関する調査（南鳥島）報告書．独立行政法人森林総合研究所，つくば市．17pp．
- 栗田隆気，2021．ミナミトリシマヤモリ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 122-124．サンライズ出版，彦根．
- 太田英利，2014．ミナミトリシマヤモリ．環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編），レッドデータブック 2014 日本の説滅の恐れのある野生生物 3 爬虫類・両生類，pp. 36‐37．ぎょうせい，東京．
- Sakagami, S., 1961. An ecological perspective of Marcus Island, with special reference to land animals. Pacific Sci., 15: 82–104.
- 千石正一，1983．南硫黄島の爬虫類．環境庁自然保護局（編），南硫黄島の自然，pp. 287‐301．日本野生生物研究センター，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Perochirus ateles has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Perochirus ateles* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland

Threat types:	Predation (by alien species), Competition (with alien species)
Law designation status for conservation	–



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　アガマ科 Agamidae　　日本固有

ヨナグニキノボリトカゲ

***Diploderma polygonatum donan* (Ota, 2003)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－
D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。 【判断理由】 与那国島の一部にしか生息しない。島嶼では、本種の脅威として想定される生息阻害要因（外来種、病原体、大規模な開発や自然災害等による生息環境の改変等）の影響が、比較的速やかに全体に及ぶ可能性がある。				
評価分科会：　爬虫類・両生類分科会				

概要

成体は全長 198～232 mm、頭胴長 55.5～71.5 mm。オスはくすんだ淡灰色で、背中に 4、5 個の不規則な暗色斑が、体側には不規則な白斑が並ぶ。メスは鮮やかな緑色。八重山諸島の与那国島の固有亜種で、丘陵地にある常緑広葉樹の二次林のうち、やや開けた場所に多い。森林の伐採にともなう生息地の縮小がおもな減少要因。外来性の捕食者であるインドクジャクの侵入や、愛好者等による採集の影響も懸念される。

基礎情報

【形態】

成体は全長 198～232 mm、頭胴長はオス 57.7～71.0 mm、メス 55.5～70.5 mm 程度。四肢や尾は細長く、同様に細長い指の先には鋭いかぎ爪を備える。体表の鱗は、頭部の背面や側面を除き瓦上で、つやがなく、そのほとんどにキールがある。胴部側面の鱗は周辺のものに比べて大型化しており、かつ不規則に配置されている。オスはくすんだ淡灰色で、背中には 4、5 個の不規則な暗色斑が、体側には不規則な形状の白斑が並ぶ。メスは鮮やかな緑色で、背中にはオスと同じく 4、5 個の暗色斑が並ぶ。雌雄とも尾には 10 本前後の暗帯がある。

【生活史】

産卵期は 3 月下旬～8 月中旬で、その間、メスは一度に 1～3 個（普通 2 個）の卵を 2～3 回産む。卵は、周囲の温度条件によっても異なるが普通 6～7 週間ほどでふ化する。ふ化した幼体は頭胴長 24.5～25.5 mm、体重 0.5～0.6g ほどで、早いものはその翌夏には性成熟を迎える。寿命については知見がないが、捕獲された時点で成体であった 1 オスが飼育下で 3 年 4 ヶ月生存した記録がある。アリ類を多く食べるほか、樹木の樹液がしみ出している場所の周辺ではアブ、チョウ、ガも捕え、地表に降りて小型の甲虫などを捕食することもある。

【生息環境】

おもに常緑照葉樹の二次林やその周辺に見られる。自然度の高い森林の内部などのうっそうとした環境には少なく、むしろその周辺のやや開けた場所に多いが、海辺の疎林や集落内の庭木といった、より開けた環境にはほとんど見られない。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

八重山諸島の与那国島のみに分布。

現在の生息状況

【分布域の現況】

本亜種が固有分布する与那国島は面積 30 km^2の小島で、そのうち中西部から南東部にかけて広がる、面積 8 km^2あまりの丘陵地が主要な分布範囲と考えられるが、詳細は不明。

【生息地の現況】

宇良部岳周辺などを中心に、至る所でさまざまな規模での常緑広葉樹林の伐採、農地の造成が進められており、生息環境は明らかに縮小・分断傾向にあると思われる。しかしながら残された生息範囲の面積や個体群内の分断の程度は不明。

【個体数の現況】

宇良部岳の周辺を中心に、1980 年代半ばまで多くの個体が見られた場所のいくつかで、2000 年代には二次林の伐採などで生息環境が目に見えて悪化している。依然、生息する場所は少なくはないが、いずれの場所でも目撃頻度は明らかに下がっており、個体数の減少は明らかである。ただし具体的な個体数やその減少率は不明。

存続を脅かす要因

分布がもともと狭い範囲に限定されており、しかも主要な生息地である丘陵地の常緑広葉樹の二次林が伐採でさらに狭まっている。さらに最近、人為的に持ち込まれ定着したインドクジャクからの捕食圧や、愛好者等による捕獲圧も、存続を脅かす要因と思われる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），分布・産地局限

特記事項

与那国島は他の八重山の島々と台湾との間に位置しながら、周囲の海域が深いためそのいずれからも比較的長期間、隔離されてきたと考えられる。本亜種の存在は、ヨナグニシュウダ（*Elaphe carinata yonaguniensis*）やミヤラヒメヘビ（*Calamaria pavimentata miyarai*）など、他の与那国島固有の分類群や遺伝的に特異な集団とともに、こうした長期にわたる隔離の存在を強く示唆しており、学術的に高い価値を有する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヨナグニキノボリトカゲ	*Diploderma polygonatum donan*	VU
第４次 2019：	ヨナグニキノボリトカゲ	*Japalura polygonata donan*	VU
第４次 2018：	ヨナグニキノボリトカゲ	*Japalura polygonata donan*	VU
第４次 2017：	ヨナグニキノボリトカゲ	*Japalura polygonata donan*	VU
第４次 2015：	ヨナグニキノボリトカゲ	*Japalura polygonata donan*	VU
第４次：	ヨナグニキノボリトカゲ	*Japalura polygonata donan*	VU
第３次：	ヨナグニキノボリトカゲ	*Japalura polygonata donan*	VU
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- Ota, H., 1991. Taxonomic redefinition of *Japalura swinhonis* Günther (Agamidae: Squamata), with a description of a new subspecies of *J. polygonata* from Taiwan. Herpetologica, 47: 280–294.
- Ota, H., 2003. A new subspecies of the agamid lizard, *Japalura polygonata* (Hallowell, 1861) (Reptilia: Squamata), from Yonagunijima Island of the Yaeyama Group, Ryukyu Archipelago. Cur. Herpetol., 22: 61–71.
- 田中聡，2005．ヨナグニキノボリトカゲ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 120．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．
- 田中聡，2009．ヨナグニキノボリトカゲの生態について．与那国総合調査報告書，pp. 13‐22．沖縄県立博物館・美術館，那覇．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Diploderma polygonatum donan has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Diploderma polygonatum donan* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Limited distribution
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　トカゲ科 Scincidae　　日本固有

バーバートカゲ

***Plestiodon barbouri* (Van Denburgh, 1912)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
環境改変などで森林面積は減少しており、生息地が縮小していることから個体数は減少していると考えられる。また、林道沿いなどでは、同所的に生息するオキナワトカゲやオオシマトカゲへの置き換わりが進行しており、数が減っている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

中琉球の固有種。琉球列島に分布する他の同属種とは系統的にやや異なり、遺存的な性質が強いと考えられている。島嶼間で遺伝的分化がみられ、複数の分類群に分けられる可能性がある。湿潤な林床を備えた常緑広葉樹の自然林と回復の進んだ二次林およびその周辺にしか見られず、多くの島でこのような環境の縮小や外来種による捕食の影響で個体数が継続的に減少していると思われる。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長は 50～70 mm ぐらい。体鱗列数は胴中央で 22～24。普通 1 枚の後鼻板をもつが小形で、片側または両側欠く個体もいる。幼体では頭胴部背面の地色は黒色ないし濃い黒褐色で、5 本の淡色縦条がはしる。尾は基部まで鮮やかなコバルト色。頭胴部の腹面はオキナワトカゲよりも明らかに黒っぽい。オスでは多くの場合、成長とともにこのような幼体色は失われ、頭胴部の背面や尾部の地色は光沢のある暗褐色ないし栗色に変わる。これに対しメスは成熟後も幼体色をある程度残すものが多い。

【生活史】

7 月上旬に、頭胴長 30 mm ぐらいの孵化幼体が出現する。成熟後に捕獲されたオスが飼育下で 4 年 11 ヶ月ほど生存した記録があり、条件さえ良ければさらに長く生きると考えられている。おもに徘徊性のクモ類や昆虫を食べていると言われるが、そのほかにも陸産貝類、ミミズなどが胃内容物として知られている。本種の捕食者としてヒャンが知られている。

【生息環境】

山地森林や回復の進んだ二次林に生息する。山間部の道路沿いや公園などでよく見かける。山間部の果樹園でもみかけるが、開放的な環境が広範囲に広がっているところではオキナワトカゲ、もしくはオオシマトカゲが出現し、本種はみられない。自然度の高い森林から大きく離れた疎林、人工林、草地などにも本種は生息しない。日のあまり入らない森林内の林床で見ることはまずないが、そういった環境に全く生息しないかどうかは不明。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

奄美諸島の奄美大島、枝手久島、加計呂麻島、請島、与路島、徳之島と、沖縄諸島の沖縄島、伊平屋島、渡嘉敷島、渡名喜島、久米島に分布する。各島の山林に生息し、沖縄島での分布は北部に限られる。かつては本部半島にも生息していた。本種が分布するすべての島にオキナワトカゲもしくはオオシマトカゲが分布し、トカゲ属としてバーバートカゲだけが単独で分布する島は存在しない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

沖縄島での分布は北部に限られるが、その南端付近の名護市では確認が難しくなっており、南限は確実に北上している。また、本部半島では最近の確実な記録がなく、集団が消滅した可能性がある。奄美大島と徳之島、久米島でも、林道の敷設や山地部での圃場整備などの影響で、生息範囲は大幅に縮小したと思われる。徳之島北部の天城山系と中部の井

之川岳山系の間、久米島中北部の宇江城山系と南部のアーラ岳山系の間には農地が広がり、森林が不連続になっているため、本種の分布も寸断されていると考えられる。伊平屋島では、東部の前岳、南部の嘉陽山、腰岳から後岳に続く山系は平野部で区切られており、少なくとも現在、本種の集団が 3 地域に分断されていることはほぼ間違いない。

【生息地の現況】

各地で林道の敷設や圃場整備に伴い森林が縮小している。また林道の拡張により周囲が乾燥し、生息環境が悪化している。少なくとも沖縄県の 5 島では、山間部の林道沿いでもオキナワトカゲが広範囲に出現し、本種と競合していると考えられる。沖縄島と奄美大島にはマングースという強力な外来の捕食者がいたが、奄美大島では 2024 年に根絶宣言が出された。

【個体数の現況】

具体的な個体数は不明であるが、多くの島で林道沿いで本種を見かけることが少なくなっており、近年でも個体数の減少が進行していると思われる。

存続を脅かす要因

林道の敷設や圃場整備にともなう森林の縮小は本種の存続に大きな負の影響を与えている。このうち林道については、その敷設や拡張整備が周辺環境の乾燥化をもたらし、おそらくはそれが、低地性の同属種オオシマトカゲおよびオキナワトカゲの山地部への侵入・拡大の要因になっている。渡嘉敷島や久米島では、少なくとも林道に面した環境では山林の中心部でさえもオキナワトカゲが見られ、一方、本種の確認数が減っている。このように、環境撹乱によるオキナワトカゲ、もしくはオオシマトカゲへの置換は、本種にとって大きな脅威と考えられる。また、イエネコとフイリマングースは本属のトカゲ類の存続にとって大きな脅威である。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，捕食（外来種による），競争/競合（在来種による）
	（現在）	森林伐採，捕食（外来種による），競争/競合（在来種による）

特記事項

DNA を使った最近の研究により、本種は島間で遺伝的に大きく分化していることが示唆されている。また同所的に生息する同属種オキナワトカゲおよびオオシマトカゲとの種間関係は生態学的に興味深い。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	バーバートカゲ	*Plestiodon barbouri*	VU
第４次 2019：	バーバートカゲ	*Plestiodon barbouri*	VU
第４次 2018：	バーバートカゲ	*Plestiodon barbouri*	VU

第４次 2017：	バーバートカゲ	*Plestiodon barbouri*	VU
第４次 2015：	バーバートカゲ	*Plestiodon barbouri*	VU
第４次：	バーバートカゲ	*Plestiodon barbouri*	VU
第３次：	バーバートカゲ	*Plestiodon barbouri*	VU
第２次：	バーバートカゲ	*Eumeces barbouri*	VU
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類，【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

都道府県条例指定種【鹿児島県】

参考文献

- 阿部愼太郎，1992．マングースたちは奄美で何を食べているか．チリモス，3: 1‐18．
- Brandley, M., H. Ota, T. Hikida, A. Nieto Montes de Oca, M. Feria Ortiz, X. Guo, and Y. Wang, 2012. The phylogenetic systematics of blue-tailed skinks (*Plestiodon*) and the family Scincidae. Zool. J. Linn. Soc., 165: 163–189.
- Hikida, T., 1993. Phylogenetic relationships of the skinks of the genus *Eumeces* (Scincidae: Reptilia) from East Asia, Japan. Jpn J. Herpetol., 15: 1–21.
- 伊與田翔太・城野哲平，2025．渡名喜島からのバーバートカゲの初記録．Akamata (34): 71-74.
- 丸田裕介，2022．ヒャンによるバーバートカゲの捕食例．Akamata, 31: 1‐4．
- 岡本卓・栗田和紀，2021．バーバートカゲ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 135-137．サンライズ出版，彦根．
- 太田英利，2003．バーバートカゲ．鹿児島県環境生活部環境保護課（編），鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編 －鹿児島県レッドデータブック－，財団法人鹿児島県環境技術協会，鹿児島．87pp．
- 佐藤文保，2019．久米島のトカゲ類の記録–2012 年-2018 年–．久米島博物館紀要 (19): 7-25.
- 当山昌直，1983．奄美大島におけるトカゲ属の一観察例．Akamata，8: 21‐22．
- 当山昌直，1984．沖縄群島の両生爬虫類相 -渡嘉敷島・久米島-．沖縄県立博物館紀要，10: 25‐36．
- 当山昌直，2005．バーバートカゲ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 114‐115．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Plestiodon barbouri has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Plestiodon barbouri* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Predation (by alien species), Competition (with native species)
Law designation status for conservation	Prefectural Ordinance-Designated Species【Kagoshima】.



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　カナヘビ科 Lacertidae

アムールカナヘビ

***Takydromus amurensis* Peters, 1881**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A4 D2

基準 A:　VU	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　VU	基準 E:　―

A4．過去と未来の両方を含む 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間において 30%以上の減少があると推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

10 年（世代時間不明）

【過去の状況】

過去の記録はないが、現在の生息地と類似のハビタットが少なくとも 11 カ所存在したことが地図情報から推定できる。

【近年の状況】

現地調査によって 9 カ所で生息が確認されている。

【今後の状況予測】

現在生息が確認されている場所の半数ほどは、道路建設等の開発による環境変化が著しく、今後生息状況が悪化すると推定される。

D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。

【判断理由】

本種は上対馬にしか生息しておらず、本種の脅威として想定される生息阻害要因（外来種、病原体、大規模な開発や自然災害等による生息環境の改変等）の影響が、比較的速やかに全体に及ぶ可能性がある。現地調査により、現在の生息地の生息環境の悪化が継続していることも確認されている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は、対馬では森林内の小河川に沿った日当たりのよいガレ場や草むらで見られる。成体は、倒木や樹木の根元、岩の下といった隠れ場所にすぐに逃げ込む。成体の頭胴長は 55～78 mm で、全長は 185～250 mm。卵生で、平均一腹卵数は 4 程度、年に 2 回産卵する。孵化した幼体は全長が約 70 mm 程度。成熟年齢は 2、3 歳。ハビタットである丘陵地の明るい流れのある場所は、交通網の整備のための道路建設や森林開発によって変化してきていて、個体数は減少している。

基礎情報

【形態】

全長 185～250 mm、頭胴長 55～78 mm。他のカナヘビ属の種と同様、細長い体型で尾が長いが、ニホンカナヘビと似て、属内ではやや太めの体型。色彩もニホンカナヘビと似て、褐色に暗褐色の斑模様や帯模様が入る。腹部後半から尾にかけての側部の帯模様は暗褐色の楔形の模様が連続する。上唇、下唇部に黒色斑紋がある。側面に白色の縦条が通る。腹面は白色ないし褐色がかった白色で最外に暗褐色の小斑が並ぶ。咽頭板は 4 対。鼠蹊孔は 3～4 対。頸環板が頭部腹面にあって胴部腹板との境をなす。腹板は 8 列、頸環板と前肛板までのあいだに 22～28 枚ぐらい、背面の鱗は 6～8 列。前肛板は大きく、1 枚。

【生活史】

春から夏に年 2 回産卵する。一腹卵数は 3～8 で、平均 4 卵ほど。孵化直後の幼体は全長 70 mm ほどで、2 歳で成熟する。他のカナヘビ類と同様に昆虫類、クモ類などの無脊椎動物を捕食する。

【生息環境】

山地から丘陵にかけて、沢沿いの明るい場所を中心に生活する。カナヘビ属としてはめずらしく、地面の隙間に逃げ込む習性がある。沢沿いなどの斜面の明るい場所で日に当たっているところを見ることが多い。樹木の根元や倒木の下、石が重なっている所の隙間に逃げ込む。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地，河川上流域，河川中流域 【陸域_平地部】森林，草地，河川中流域，小河川
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

国外では、朝鮮半島から中国東北部、ロシア沿海地方南部の、山地、丘陵域に分布する。国内では対馬に分布する。対馬の分布記録は上対馬のみ。

現在の生息状況

【分布域の現況】

対馬において分布が初確認された 1966 年以降、国内における本種の分布地点の報告は対馬の上対馬のみである。既知の分布地点の中には、道路建設等の開発の影響で、消滅または生息環境が悪化し個体数が減少したと考えられる事例が生じているが、分布地点は上対馬に散在していることから、分布域自体は縮小していない。

【生息地の現況】

本種のハビタットは、斜面の樹木の根元や岩などのすきまがある場所で、森林の沢沿いに散在することが多い。谷あいに道路建設が行われると、本種のハビタットとなっている場所をかく乱することがあり、生息地の減少や改変をともなうことがある。とくに西岸地

域と東岸地域を結ぶ交通網の整備では、丘陵の河川沿いに道路が建設されることが多いことから、本種の生息地が影響を受けてきた。近年においても、それは続いていて、整備された交通網からの開発の広がりもみられる。

【個体数の現況】

生息する個体は、隠れ入る地面のすきまを中心として行動し、散在して生息していることから、個体数密度の推定はむずかしい。個体が確認できる地点は減少してきている。

存続を脅かす要因

針葉樹の植林や森林伐採による生息環境（沢周辺の斜面地）の消失が進行しているほか、丘陵の谷の開口部の舗装道路建設や土地造成、宅地化などが急速に進み、好適な生息環境が失われてきている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，草地開発，土地造成，交通インフラ建設
	（現在）	森林伐採，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，分布・産地局限

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アムールカナヘビ	*Takydromus amurensis*	NT
第４次 2019：	アムールカナヘビ	*Takydromus amurensis*	NT
第４次 2018：	アムールカナヘビ	*Takydromus amurensis*	NT
第４次 2017：	アムールカナヘビ	*Takydromus amurensis*	NT
第４次 2015：	アムールカナヘビ	*Takydromus amurensis*	NT
第４次：	アムールカナヘビ	*Takydromus amurensis*	NT
第３次：	アムールカナヘビ	*Takydromus amurensis*	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 日本爬虫両棲類学会（編），2021．新日本両生爬虫類図鑑，サンライズ出版，彦根．232pp.
- 関慎太郎，2018．野外観察のための日本産爬虫類図鑑 第 2 版．緑書房，東京．212pp.
- 柴田保彦，1966．対馬のアムールカナヘビ（予報）．大阪市立自然史博物館研究報告，19: 13-17.
- 竹中践，1987．対馬産アムールカナヘビとツシマスベトカゲについて．対馬の自然 対馬自然資源調査報告書，pp. 161-173，長崎県，長崎.
- Takenaka, S., 1989. Reproductive ecology of Japanese lacertid lizards. In: M. Matsui, T. Hikida and R. Goris (eds), Current Herpetology in East Asia, pp. 364-369. Herpetological Soc. Japan, Kyoto.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Takydromus amurensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Takydromus amurensis* is listed as VU under criteria A4 D2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

4. An observed, estimated, inferred, projected or suspected population size reduction of ≥30% over any 10 year or three generation period, whichever is longer (up to a maximum of 100 years in the future), where the time period must include both the past and the future, and where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland, Upper river basin, Middle river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Middle river basin, Small river
Threat types:	Logging and wood harvesting, Grassland development, Land development, Transportation infrastructure construction, Limited distribution
Law designation status for conservation	―





執筆者:	竹中践（東海大学）
Author:	Sen Takenaka

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　カナヘビ科 Lacertidae　　日本固有

サキシマカナヘビ

***Takydromus dorsalis* Stejneger, 1904**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab D2

基準 A:　—	基準 B:　VU	基準 C:　—	基準 D:　VU	基準 E:　—

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
生息環境は、疎林と湿地が混在する場所で、そのような環境は農地開発によって造成されてきた。残存する生息地においても、草地化の進行や森林の遷移によって本種が見られなくなってきており、一部の生息地を除いて生息環境の点在化が進んでいる。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
国内希少野生動植物種への指定により、採集による減少要因はなくなったと考えられるが、生息地におけるそれぞれの好適ハビタットの範囲は、農地造成等の影響により継続的に減少している。また、石垣島、黒島、小浜島では外来種の天敵が増加している。

D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。
【判断理由】
本種は八重山諸島の 4 島のみに分布し、その 4 島における現状の好適な生息環境の範囲は合計で 9.3 km²以下と推定される。島嶼では、本種の脅威として想定される生息阻害要因（外来種、病原体、大規模な開発や自然災害等による生息環境の改変等）の影響が、比較的速やかに全体に及ぶ可能性がある。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

八重山諸島に分布する日本固有種。カナヘビ属の中では大型で、細長い体型と長い尾をもち、体色はあざやかな緑色。おもに成体は樹上の枝葉上で行動し、幼体は草の上で行動する。昼行性で日なたで活動する。分布地の島では開発による低地林の減少が見られ、とくに西表島では近年急速に開発が進んでいる。黒島では開発により樹林が縮小した上に移入天敵のインドクジャクの影響により減少した可能性があり、近年本種は確認されなくなっている。

基礎情報

【形態】

全長 250～320 mm、頭胴長 60～70 mm。背面、側面は鮮やかな緑色で眼の前後に黒条がある。腹面は淡緑黄色。雌雄同色。アオカナヘビなど他のカナヘビ属の種は背面の鱗が大きく角形であるのに対して、背面の鱗が小さく円形で背面は滑らかである。咽頭板は 4 対。鼠径孔は 2～3 対。

【生活史】

春から夏にかけて複数回、1～2 卵を産む。成熟年齢は不明。成体が樹上の高い枝や葉上で行動するのに対して、幼体は草むらや低木で行動することが多い。黒島では樹林が発達していないためか成体も草むらで生活する。

【生息環境】

草地および明るい樹林に生息する。樹上性の習性が強く、低木の樹冠と草むらを広く利用して行動する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地 【陸域_平地部】森林，草地，湿地・湿原，小河川
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域，(4) 河川・湿地地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

八重山諸島の石垣島、西表島、黒島、小浜島に分布。黒島と小浜島ではきわめて個体数が減少しているが、近年の確認報告はある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

石垣島と西表島では低地の開発により、平地と山地・丘陵地の林縁部の生息地で分布域が縮小してきている。黒島と小浜島では牧草地と耕作地の開発により、島の一部の樹林と隣接する草地に生息分布が局限している状態であったが、その生息地においても個体の確認がきわめて少ない状況にある。

【生息地の現況】

西表島では近年、丘陵周辺の農地開発や道路建設によって急激な生息環境の消失があった。また、観光開発も進んでおり、低地および丘陵周辺の生息環境は悪化している。黒島では島中央部の牧草地開発により生息地の規模が脆弱になっており、インドクジャクの増加によっても安全に生活できる生息地がなくなっている可能性がある。石垣島では開発による生息地の縮小後、その状況はよく分かっていない。

【個体数の現況】

具体的な個体数密度の推定は行われていない。しかし、生息環境が維持されている地域の縮小によって、全体の個体数が急激に減少していることは明らかである。

存続を脅かす要因

繁殖に適した湿潤な地表環境、幼体が生息する草地、成体が生息する明るい樹林環境がそろっていることが必要と考えられ、開発・造成によって好適な生息環境が失われてきている。もともとの生息環境としての明るい樹林周辺の藪と草むらの入り交じった地域の面積の少なさから開発の影響は大きい。黒島のように移入天敵の影響も考えられ、他の分布地域でもその要因への警戒が必要であると考えられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，湿地開発，草地開発，捕食（外来種による），違法採集，分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，湿地開発，草地開発，捕食（外来種による），発電施設建設，違法採集，分布・産地局限

特記事項

背鱗が細かいことなどの形態的特徴から、かつてはカナヘビ属とは別属とされていた。分子系統学的分析から本種がカナヘビ属に含められることが妥当であることが確かめられている。石垣市自然環境保全条例の保全種、竹富町自然環境保護条例の希少野生動植物種に指定されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	サキシマカナヘビ	*Takydromus dorsalis*	VU
第４次 2019：	サキシマカナヘビ	*Takydromus dorsalis*	VU
第４次 2018：	サキシマカナヘビ	*Takydromus dorsalis*	VU
第４次 2017：	サキシマカナヘビ	*Takydromus dorsalis*	VU
第４次 2015：	サキシマカナヘビ	*Takydromus dorsalis*	VU
第４次：	サキシマカナヘビ	*Takydromus dorsalis*	VU
第３次：	サキシマカナヘビ	*Takydromus dorsalis*	VU
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅のおそれのある地域個体群(LP)(小浜島、黒島)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- 峯光一・石田憲・福原亮史，2016．八重山諸島の竹富町黒島におけるサキシマカナヘビの生息確認報告．AKAMATA，26: 35-37．
- 日本爬虫両棲類学会（編），2021．新日本両生爬虫類図鑑，サンライズ出版，彦根．232pp．
- Ota, H., M. Honda, S-L. Chen, T. Hikida, S. Panha, H-S. Oh, and M. Matsui, 2002. Phylogenetic relationships, taxonomy, character evolution and biogeography of the lacertid lizards of the genus *Takydromus* (Reptilia: Squamata): a molecular perspective. Biol. J. Linn. Soc., 76: 493-509.
- 千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏（編），1996．日本動物大百科 5 両生類・爬虫類・軟骨魚類，平凡社，東京．189 pp．
- Takenaka, S., 1989. Reproductive ecology of Japanese lacertid lizards. In: M. Matsui, T. Hikida and R. Goris (eds.), Current Herpetology in East Asia, pp. 364-369. Herpetological Society of Japan, Kyoto.
- 竹中践・皆藤琢磨・戸田守，2015．小浜島におけるサキシマカナヘビの標本採集およびその他の爬虫類・両生類の記録．AKAMATA，25:36-40．
- 当山正直・太田英利，1990．西表島崎山半島における両生・爬虫類の生態的分布．南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する研究．平成元年度西表島崎山半島地域調査報告書，pp. 167-172，環境省自然保護局，東京．
- 当山正直・太田英利，1991．琉球列島の両生・爬虫類．平成 2 年度南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する研究報告書，pp. 233-254，環境省自然保護局，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Takydromus dorsalis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Takydromus dorsalis* is listed as VU under criteria B2ab D2.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming

Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Wetland, Small river
Threat types:	Logging and wood harvesting, Wetland development, Grassland development, Predation (by alien species), Power plant construction, Illegal harvesting of biological resources, Limited distribution
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	竹中践（東海大学）
Author:	Sen Takenaka

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　カナヘビ科 Lacertidae

コモチカナヘビ

***Zootoca vivipara* (Lichtenstein, 1823)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab

基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
各湿原地域は、牧場地域や人の居住地域等によって分断されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息地となっている各湿原地域で出現する個体の相対的な目撃頻度が減少してきている。その原因解明と対策はとられていない。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は、ヨーロッパ西部、北部からロシア東部、日本にかけて分布し、トカゲ類ではもっとも分布範囲が広い。国内では北海道北部のいくつかの湿原を中心に分布する。北海道の個体群の繁殖様式は胎生で、数匹の子どもを 7 月に産む。日光浴の場所は体温調節するための生活上重要な場所であるが、生息地の湿原に敷設された木道でバスキングを行うことは、天敵の哺乳類や鳥類に捕食される危険を増加させる。人間が採集することも容易くなる。開発による生息地の減少だけでなく、湿原における個体数も減少してきていると考えられ、現在、コモチカナヘビは国立公園の動物採集が禁止される区域でのみ見られるようになりつつある。

基礎情報

【形態】

全長 140～180 mm、頭胴長 55～75 mm。出生時の全長は 45 mm 程度。背面は褐色で暗褐色の斑紋があり、背中に縞模様状に縦列する。腹面はメスが淡黄色、オスはオレンジ色で暗色の斑紋が入り変異が多い。背面と側面の鱗は細かく粒状で光沢は強くない。体型は、カナヘビ属の種と比較してずんぐりしていて、頭部もとがっていない。咽頭板は 4 対。内股に沿って並ぶ大腿孔は 10 対ほど。腹板は 8 列で、頸環板から前肛板までの間に 26～29 枚。前肛板は大きく、平滑で 1 枚。

【生活史】

胎生で 5 個体前後の羊膜に包まれた子を年に 1 回、7 月頃に産む。出生後 2、3 年で成熟する。繁殖後も生存して経年的に繰り返し繁殖する。昼行性で、日光浴により体温調節しながら活動する。妊娠しているメスが体内の胚の発生を促進するためにも日光浴が必要と考えられる。日照がないときは巣穴に隠れていると考えられる。また、暑いときにも活動している個体を見ることは少ない。出現時はほとんど地表で活動し、倒木などに上がることはあるが、高い草葉上に上がることはない。昆虫やクモ類などの小さな節足動物をおもに捕食する。

【生息環境】

国内の分布域では、おもに湿原内の低木が生えている草地に生息する。水ぎわや木の根元などに巣穴をもつ。国外での生息環境は多様で、普通の林道や海岸付近の地衣類が繁茂する砂地でも見られる。冷涼な気候に生息するが、日光浴で体温調節することによって活発に活動できることから、日なたの谷地坊主などの目立たずに日光浴ができる複雑な草薮環境が好適である。

生息環境区分：	【陸域_平地部】草地，湿地・湿原
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域，(4) 河川・湿地地域

【分布域】

イギリス、スペインなどからロシアにかけて広く分布し、サハリンから北海道の宗谷地方まで分布が広がっている。国内での本種の分布の初確認は 1961 年と比較的新しく、それ以後の記録しかない。国内では北海道北部のサロベツ原野周辺（豊富町、幌延町）から稚内市、猿払村、浜頓別町に分布する。北海道の分布は、サハリンとともに本種の分布域の東端にあたる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

北海道北部は牧場開発が広く行われており、開発以前の分布状況は不明。現在の分布地も、周辺はほとんどが牧場に囲まれている。かつては村落内での確認記録もあるが、現在まとまって生息がみられるのは 6、7 ヶ所の湿原に限られてきている。

【生息地の現況】

現在の生息地のほとんどが湿原であり、低木の混じった環境を中心に生息している。その多くは保護された地区にあるが、自然観察等を目的とした木道敷設によって本種の日光浴を行う行動が目立つ状況となり、その影響が危惧される。

【個体数の現況】

個体数の具体的な推定は行われていないが、生息地点が少なく、サロベツ湿原以外は生息地の面積が小さく個体群サイズは小さいと考えられる。

存続を脅かす要因

もともと分布域が限られているうえに、生息に適した湿原の環境は少なかったと考えられ、長期的な牧草地等の農耕地開発によって、分布域を縮小してきたと考えられる。近年でも、生息地となっている湿原周辺の開発は行われている。保護されている地区の湿原では生息環境が維持されているが、木道敷設によって捕食者である哺乳類の接近が容易になることや、本種の日光浴行動が目立つ場所で行われることによる鳥類などの天敵による捕食やヒトによる採集の危惧があげられる。

要因の区分：	（過去）	湿地開発，圃場整備，草地開発，土地造成，捕食（在来種による），違法採集，分布・産地局限
	（現在）	湿地開発，圃場整備，草地開発，土地造成，捕食（在来種による），違法採集，分布・産地局限

特記事項

陸上の爬虫類ではもっとも分布域の広い種であるが、その東端の分布域であることや生物地理学上の学術的意義は大きい。浜頓別町の天然記念物に指定されていている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	コモチカナヘビ	*Zootoca vivipara*	VU
第４次 2019：	コモチカナヘビ	*Zootoca vivipara*	VU
第４次 2018：	コモチカナヘビ	*Zootoca vivipara*	VU
第４次 2017：	コモチカナヘビ	*Zootoca vivipara*	VU
第４次 2015：	コモチカナヘビ	*Zootoca vivipara*	VU
第４次：	コモチカナヘビ	*Zootoca vivipara*	VU
第３次：	コモチカナヘビ	*Lacerta vivipara*	VU
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧Ⅱ類(Vu)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Arnold, E. N., O. Arribas, and S. Carranza, 2007. Systematics of the Palaearctic and Oriental lizard tribe Lacertini (Squamata: Lacertidae: Lacertinae), with descriptions of eight new genera. Zootaxa, 1430: 1-86.
- 北海道環境生活部環境室自然環境課（編），2001．両生類・爬虫類．北海道の希少野生生物：北海道レッドデータブック 2001，pp. 191-195，北海道，札幌.
- 犬飼哲夫・太田嘉四夫・阿部永・小林恒明，1967．陸上動物．「サロベツ総合調査報告書－サロベツ地域開発着手時の実態」，pp. 199-231，北海道開発局，札幌.
- 工藤晃央・稲毛真・佐川志朗・門崎允昭，2000．サロベツ湿原のコモチカナヘビ．森林野生動物研究会誌，25・26: 99-107.
- 日本爬虫両棲類学会（編），2021．新日本両生爬虫類図鑑，サンライズ出版，彦根．232pp.
- 千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏（編），1996．日本動物大百科 5 両生類・爬虫類・軟骨魚類，平凡社，東京．189pp.
- Takenaka, S., 1991. A note on the reproduction of the lizard *Lacerta vivipara* in Hokkaido, Japan. Jpn. J. Herpetology 14(2):79-80.
- 竹中践，1996．北海道の両生類と爬虫類の保護の課題．北方林業，48 (2): 7-10.
- 竹中践，1993．爬虫類・両生類相とその分布．東正剛・阿部永・辻井達一（編），生態学からみた北海道，pp. 198-208，北海道大学図書刊行会，札幌.
- 徳田龍弘，2011．北海道爬虫類・両生類ハンディ図鑑，北海道新聞社，札幌．95pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Zootoca vivipara has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Zootoca vivipara* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Wetland
Threat types:	Wetland development, Field preparation, Grassland development, Land development, Predation (by native species), Illegal harvesting of biological resources, Limited distribution
Law designation status for conservation	—





執筆者:	竹中践（東海大学）
Author:	Sen Takenaka

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ナミヘビ科 Colubridae　　日本固有

ヨナグニシュウダ

***Elaphe carinata yonaguniensis* Takara, 1962**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－
D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。 【判断理由】 与那国島のみに分布する。島嶼では、本種の脅威として想定される生息阻害要因（外来種、病原体、大規模な開発や自然災害等による生息環境の改変等）の影響が、比較的速やかに全体に及ぶ可能性がある。				
評価分科会：　爬虫類・両生類分科会				

概要

八重山諸島の与那国島のみに分布する大型の無毒蛇。山地と平地の境界を占める二次林や、サトウキビ畑、集落など開けた場所に隣接する低木林の周辺で姿を見ることが多い。爬虫類食の傾向が強いが、機会さえあれば小鳥やネズミなども捕食する。近年、おもな生息環境となる二次林、低木林などの伐採が著しく、加えてここ数年は幼体の捕食者、成体の競合相手となる外来性のインドクジャクの侵入・定着もあり、影響が強く懸念される。

基礎情報

【形態】

成体の全長は 1,220～2,200 mm 程度。基亜種と同様、体鱗には強いキールが発達。体鱗列数は基亜種よりも多く、頸部で 26～27 列、胴中央で 25 列、総排出口前で 19 列。腹板は 225 枚前後、尾下板は 95 対前後。背面はややくすんだベージュ色ないし黄土色で、わずかに緑味を帯びることもある。腹面も黄土色ないし黄緑色であるが、背面よりもやや明るい。

【生活史】

繁殖、成長、寿命などについては一切具体的な知見がない。活動中の個体の目撃頻度が高いのは 4～7 月。冬季には活動性が落ちるが、それでも暖かい日には姿を現わすこととこともあり、完全な冬眠状態にはならないようである。食性についても具体的な知見は少ないが、野外で捕獲された個体の胃内容物としてキシノウエトカゲ（*Plestiodon kishinouyei*）、およびヒヨドリ（*Hypsipetes amaurotis*）が知られている。また飼育下でラットやニワトリのヒヨコ、それに従来分布の重ならないシマヘビ（*Elaphe quadrivirgata*）などを捕食した事例があり、全体として爬虫類食の傾向が強い一方で、ネズミや小鳥などの恒温動物も、機会さえあれば食べることが考えられる。

【生息環境】

常緑広葉樹の二次林や低木林と、耕作地など開けた場所との境界、疎林に生息する。とくに山地と平地の境界を占める疎林やサトウキビ畑などと低木林が隣接する場所、すなわち日光浴や餌の発見が容易な一方で、危険を感じたとき逃げ込める茂みも近くにある環境を好む。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地 【陸域_平地部】森林，草地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

八重山諸島の与那国島のみに分布。

現在の生息状況

【分布域の現況】

唯一の分布地である与那国島では、頻度はさまざまであるが島内のほぼ全域で見られる。

【生息地の現況】

1980 年代後半以降、宇良部岳をはじめとする丘陵地を中心に山林の伐採が進み、さらに 2000 年代には外来種であるインドクジャクの定着も認められ、生息環境は悪化していると思われる。

【個体数の現況】

目撃頻度の低下から、減少傾向にあると考えられるが、具体的な数値等は不明。

存続を脅かす要因

森林伐採、外来性のインドクジャクによる幼体の捕食、餌動物を巡る競合。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，捕食（外来種による），競争/競合（外来種による）
	（現在）	森林伐採，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），競争/競合（外来種による）

特記事項

与那国島は他の八重山の島々と台湾との間に位置しながら、周辺海域が深いため、そのいずれからも比較的長期間、隔離されていたと考えられる。本亜種の存在は、ヨナグニキノボリトカゲ（*Diploderma polygonatum donan*）やミヤラヒメヘビ（*Calamaria pavimentata miyarai*）など、他の与那国島固有の分類群や遺伝的に特異な集団とともに、こうした長期にわたる隔離の存在を強く示唆し、学術的に高い価値を有する。基亜種シュウダ（*Elaphe carinata carinata*）は、国内では尖閣諸島の魚釣島、南小島、北小島のみに、国外では台湾や周辺離島、大陸中国東部、南部、ベトナム北部などに分布。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヨナグニシュウダ	*Elaphe carinata yonaguniensis*	EN
第４次 2019：	ヨナグニシュウダ	*Elaphe carinata yonaguniensis*	EN
第４次 2018：	ヨナグニシュウダ	*Elaphe carinata yonaguniensis*	EN
第４次 2017：	ヨナグニシュウダ	*Elaphe carinata yonaguniensis*	EN
第４次 2015：	ヨナグニシュウダ	*Elaphe carinata yonaguniensis*	EN
第４次：	ヨナグニシュウダ	*Elaphe carinata yonaguniensis*	EN
第３次：	ヨナグニシュウダ	*Elaphe carinata yonaguniensis*	EN
第２次：	ヨナグニシュウダ	*Elaphe carinata yonaguniensis*	VU
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 太田英利，1981．ヨナグニシュウダの食性及び行動に関する報告．日本両生爬虫類研究会誌，20: 5‐6.
- 太田英利，2009．ミヤラヒメヘビ、ヨナグニシュウダ．佐々木健志（編），琉球大学資料館（風樹館）収蔵タイプ標本目録，pp. 10‐11．琉球大学資料館（風樹館），西原.
- Peng, G., Q. Liu, E. A. Myers, S. Liu, Y. Xu, Y. Liu, and Y. Z. Wang, 2012. Evaluation of the validity of the ratsnake subspecies *Elaphe carinata deqenensis* (Serpent: Colubridae). Asian Herpetological Research, 3: 219–226.
- Schulz, H. -D., 1996. A Monograph of the Colubrid Snakes of the Genus *Elaphe* Fitzinger. Koeltz Scientific Books, Havlickuv Brod. 439pp.
- 千石正一，1996．ヨナグニシュウダ．千石正一・松井正文・疋田 努・仲谷一宏（編），日本動物大百科 第 5 巻 両生類・爬虫類・軟骨魚類，98pp. 平凡社，東京.
- Smith, H. M., H. Ota and V. Wallach, 1995. Coluber phyllophis Boulenger, 1894 (Reptilia: Serpentes): Proposed suppression. Bulletin of the Zoological Nemenclature, 52: 166–169.
- 高良鉄夫，1962．琉球列島における陸棲蛇類の研究．琉球大学農家政工学部学術報告，9: 1‐202，22pls.
- 当山昌直，2005．ヨナグニシュウダ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 117‐118．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇.
- Zhao, E. M. and K. Adler, 1993. Herpetology of China. Society for the Study of Amphibians and Reptiles. Oxford, Ohio. 522pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Elaphe carinata yonaguniensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Elaphe carinata yonaguniensis* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Competition (with alien species)
Law designation status for conservation	―



執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　コブラ科 Elapidae　　日本固有

イワサキワモンベニヘビ

***Sinomicrurus iwasakii* (Maki, 1935)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2				
基準 A:　―	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　VU	基準 E:　―
D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。 【判断理由】 島嶼では、本種の脅威として想定される生息阻害要因（外来種、病原体、大規模な開発や自然災害等による生息環境の改変等）の影響が、比較的速やかに全体に及ぶ可能性がある。				
評価分科会：　爬虫類・両生類分科会				

概要

八重山諸島の石垣島と西表島の固有亜種で、常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林の林床とその周辺に生息。湿潤な場所を好むことから、森林伐採や土地造成などが、生息地の縮小、分断を引き起こしていることが考えられる。このほかとくに石垣島では、外来性動物であるオオヒキガエルやキジ、インドクジャクなどが侵入・増加しており、それにともなう捕食圧の増加や競合の影響も懸念される。

基礎情報

【形態】

全長は普通 300～500 mm ほどで比較的小型だが、近年、全長 800 mm という大型の個体も見つかっている。体鱗は滑らかでキールはなく、胴部のほぼ全域で 13 列に並ぶ。頭部は、前端は丸くて幅は頸部とほとんど変わらず、尾は比較的短くて後端はやや尖る。背面の地色は赤紫色で、頭部から尾部にかけて、黒色の環状紋が約 40 個ある。一つ一つの環状紋の前後には、幅の狭い白色ないしクリーム色の縁取りがあり、 さらに頭部にはこうした縁取りよりはるかに幅が広く良く目立つ白帯がある。腹面の地色はクリーム色。

【生活史】

これまでの発見例が極端に少なく、繁殖や生活史に関する知見はない。食性については、ブラーミニメクラヘビやサキシママダラ、飼育下ではタカチホヘビ類などを捕食するのが観察されており、他の亜種についての観察からも、爬虫類食、とくにヘビ類食の傾向が強いと考えられる。

【生息環境】

常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林がおもな生息環境で、林床に堆積した落ち葉の中や、朽ちた倒木の下などで見つかっている。夜間には渓流周辺の灌木上などでも見つかっている。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

八重山諸島の石垣島と西表島に固有。

現在の生息状況

【分布域の現況】

ヤエヤマタカチホヘビなどと同様、分布の知られる 2 島それぞれの中でも、人間の居住地や畑地、牧草地、開けた二次林、海岸植生など土壌の乾燥した場所での生息は考えにくく、常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林とその周辺のみと思われる。

【生息地の現況】

本種の分布する石垣島と西表島それぞれで、湿潤な土壌を有する場所はここ数十年の間に狭まってきており、その一方でとくに石垣島では潜在的な捕食者、競争相手である外来種オオヒキガエル、キジ、インドクジャクなどの侵入、増加が続いており、生息地の縮小、分断が進行中と思われる。

【個体数の現況】

近年は以前にも増して観察例が少なくなっており、個体数の減少は明らかであるが、具体的な数は不明。

存続を脅かす要因

居住地や耕作地の造成、森林の伐採などが土壌の乾燥化を招き、存在を脅かす主要因と考えられる。またとくに石垣島では、潜在的な捕食者であり競争相手とも考えられる外来種オオヒキガエル、キジ、インドクジャクの侵入、増加が大きなインパクトをもたらしていることが懸念される。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，捕食（外来種による），競争/競合（外来種による）
	（現在）	森林伐採，土地造成，捕食（外来種による），競争/競合（外来種による）

特記事項

ワモンベニヘビ（*Sinomicrurus macclellandi*）の 4 つある亜種のうちのひとつとされていたが、分類の見直しにより独立種とされた。本種を含むワモンベニヘビ類は八重山諸島を分布の東北限として、台湾や中国南部、インドシナ、南アジア北部などの広い範囲に分布しており、この地域の古地理・古環境履歴に関する情報を多くもたらすことが期待される。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	イワサキワモンベニヘビ	*Sinomicrurus macclellandi iwasakii*	VU
第４次 2019：	イワサキワモンベニヘビ	*Sinomicrurus macclellandi iwasakii*	VU
第４次 2018：	イワサキワモンベニヘビ	*Sinomicrurus macclellandi iwasakii*	VU
第４次 2017：	イワサキワモンベニヘビ	*Sinomicrurus macclellandi iwasakii*	VU
第４次 2015：	イワサキワモンベニヘビ	*Sinomicrurus macclellandi iwasakii*	VU
第４次：	イワサキワモンベニヘビ	*Sinomicrurus macclellandi iwasakii*	VU
第３次：	イワサキワモンベニヘビ	*Sinomicrurus macclellandi iwasakii*	VU
第２次：	イワサキワモンベニヘビ	*Hemibungarus macclellandi iwasakii*	NT
第１次：	イワサキワモンベニヘビ	*Calliophis macclellandii iwasakii*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Castoe, T. A., E. N. Smith, R. M. Brown, and C. L. Parkinson, 2007. Higher-level phylogeny of Asian and American coralsnakes, their placement within the Elapidae (Squamata), and the systematic affinities of the enigmatic Asian coralsnake *Hemibungarus calligaster* (Wiegmann, 1834). Zool. J. Linn. Soc., 151: 809–831.
- 千木良芳範，2005．イワサキワモンベニヘビ．改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 127．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．
- Maki, M., 1935. A new poisonous snake (*Calliophis iwasakii*) from Loo-Choo. Transact. Nat. Hist. Soc. Formosa, 25: 216–219.
- Ota, H., 1991. Systematics and biogeography of terrestrial reptiles of Taiwan. In: Y. S. Lin and K. -H. Chang (eds.), Proceedings of the First International Symposium on Wildlife Conservation, pp. 47–112. Council of Agriculture, Taipei, ROC.
- Slowinski, J. B., J. Boundy, and R. Lawson, 2001. The phylogenetic relationships of Asian coral snakes (Elapidae: *Calliophis* and *Maticora*) based on morphological and molecular characters. Herpetologica, 57(2): 233–245.
- Smart, U, M. J. Ingrasci, G. C. Sarker, H. Lalremsanga, R. W. Murphy, H. Ota, M-C. Tu, Y. Shouche, N. L. Orlov, and E. N. Smith. 2021. A comprehensive appraisal of evolutionary diversity in venomous Asian coralsnakes of the genus *Sinomicrurus* (Serpentes: Elapidae) using Bayesian coalescent inference and supervised machine learning. J. Zool. Syst. Evol. Res., 59(8): 2212–2277.
- 高良鉄夫，1962．琉球列島における陸棲蛇類の研究．琉球大学農家政工学部学術報告，9: 1‐202，22pls．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Sinomicrurus iwasakii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sinomicrurus iwasakii* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Predation (by alien species), Competition (with alien species)
Law designation status for conservation	―



執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ヤモリ科 Gekkonidae　　日本固有

ニシヤモリ

***Gekko* sp. 2**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②④

基準 A:　—	基準 B:　VU 未満	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
生息環境の消失および競合種の分布域拡大により個体数は明らかに減少している。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
本種の主な生息環境である天然岩場海岸は分布域の広い範囲に渡って消失傾向にある。加えて、岩場海岸の周辺地域が開発されることでニホンヤモリが侵入・増加し、競争をとおして本種を圧迫している。

④交雑可能な別種が侵入している。
【判断理由】
最近の研究により、もともと本種しかいなかった地域にニホンヤモリとミナミヤモリが侵入し、本種を圧迫してきたことが示された。さらに、本種とこれら 2 種との交雑も確認されており、繁殖干渉をとおした種の後退や、遺伝的汚染の進行が懸念される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

九州西岸の一部とその沖合の島嶼に分布する日本の固有種で、頭部と胴背面に大型鱗が密に散在し、腹面が黄色いのが特徴のヤモリ。男女群島や、宇治・草垣群島など、僅かな陸生脊椎動物しか棲まないような小島嶼にも分布している。主として、自然度の高い岩場海岸の壁面などに生息し、海浜性の節足動物を餌としている。開発に伴う生息適地の減少に加え、ニホンヤモリとの競合によって出現範囲は狭まっており、一部の地域集団はすでに消滅してしまったと考えられる。従来本種しかいなかった島嶼にもニホンヤモリやミナミヤモリが侵入し、さらに影響が拡大する可能性が高い。

基礎情報

【形態】

国内の同属種のなかでは大型の種で、頭胴長はメスで 65 mm、オスで 61 mm を超えるものが多く、大きなものはメスで 77 mm、オスでも 73 mm に達する。体は他の国産種よりもがっしりしている。体の背面は灰褐色で、背中部に縦に暗色斑が並び、背側面にも不規則な暗色小斑がある。腹面は多少なりとも黄色味を帯び、はっきりと黄色い場合が多い。頭胴部の背面には顆粒状鱗に混じって大型鱗が密に入り、それが四肢にもおよぶ点で他の国産の同属種と区別できる。側肛疣は 1 対で、オスは 8 個ほどの前肛孔を持つ。

【生活史】

海岸の露岩などに生息し、昆虫類のほか、フナムシや小型の貝類を食べることもある。メスは 5 月下旬から 7 月にかけて 1 度に 2 個の卵を産む。頭胴長 51 mm のメスが卵を持っていたという報告があり、孵化の翌年か翌々年に繁殖を開始するものと思われる。冬季には日の当たる海岸露岩の割れ目に多くの個体が集合して越冬する姿が確認されている。また、同様な環境で多くの卵が確認される。

【生息環境】

主に海崖の露岩に出現するが、海岸に隣接した場所であれば、人工壁や建物でもみられる。樹林内で見つかることはほとんどないが、上部に照葉樹が生えた自然度の高い崖地や、そういった環境に囲まれた人工壁で多くの個体がみられ、人為的に強く撹乱を受けた場所には生息しない。五島列島中通島では標高 400 m を超える渓流沿いの露岩でも見つかっている。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【陸域_海岸部】海崖・岩浜・岩礁（磯）
国土地域区分：	(5) 沿岸域, (7) 島嶼地域

【分布域】

九州の西岸の一部とその沖合の島嶼に分布する。長崎県では男女群島、五島列島、平戸、崎戸諸島、長崎県本土の西彼杵半島西岸と周辺の小島に分布する。長崎半島からも記録があるが、現在も生息しているかは不明。鹿児島県では、長島、阿久根、いちき串木野、南さつま市の笠沙周辺、甑島列島、宇治群島、草垣群島に分布している。天草を含め、熊本県からは見つかっていない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

環境改変に伴い、分布域の広い範囲で同属種のニホンヤモリが台頭し、本種を圧迫することによって、本種の出現範囲は継続的に後退していると考えられる。海岸部での人為的撹乱の度合いが大きい長崎半島ではそれが進行し、地域個体群が消滅してしまったと思われる。おそらく、鹿児島県本土の個体群も同様な経過を辿り、現在の不連続な分布が形成

されたものと思われる。いちき串木野市やみなみ薩摩市の個体群は、その出現範囲の狭さからすでにそうとう規模が小さいと思われ、周囲にニホンヤモリやミナミヤモリが高密度で生息する状況から、やがて消滅に向かう可能性は低くない。

【生息地の現況】

天然海岸が減っていることに伴い、生息地は縮小している。分布域の広い範囲で同属のニホンヤモリが同所的に分布しており、競合または繁殖干渉によりネガティブな影響を受けている。ニホンヤモリは人為的に撹乱された環境にも多く出現するため、海浜の開発によって競争種のニホンヤモリが増えるという状況が各地で進行している。長崎半島など、かつてニシヤモリが見つかっていた地点でもニホンヤモリに置き換わってしまった場所がある。従来ニシヤモリのみが分布していた甑島列島にもニホンヤモリとミナミヤモリが侵入し、その影響が懸念される。

【個体数の現況】

具体的な情報はないが、生息適地の縮小と競合種の分布拡大により、減少していることは明らかである。DNA を使った研究から、ニホンヤモリが国内に定着し、長崎の離島に分布を広げたのに伴って本種の個体数が顕著に減少したという分析結果がある。

存続を脅かす要因

開発に伴って生息地が消失している。護岸やホテルの建設など、比較的小規模な環境撹乱であっても、それに伴って創出された開放的な環境にニホンヤモリが入り込み、本種を圧迫している。ニホンヤモリは、そういった場所を起点に周囲の天然の岩場海岸にまで進出する場合も少なくないようで、それによりニシヤモリの地域個体群が危機的な状況に追い込まれていると考えられる。ニホンヤモリおよびミナミヤモリとの交雑も確認されており、繁殖干渉による負の影響もあると考えるべきである。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，競争/競合（外来種による）
	（現在）	海岸開発，競争/競合（外来種による），交雑（外来種による）

特記事項

側肛疣が 1 対で、頭部と胴の背面のみならず四肢の背面にも大型鱗が混じり、腹面が黄色いという特徴は既知のいずれの種とも異なり、独立した種と考えられる。九州では西岸の狭い範囲にしか分布しない一方、その沖合にあるほとんどの島嶼群に生息するという分布様式は脊椎動物としては非常にユニークであり、地域の動物相の形成過程を研究していく上で高い学術的価値を持つ。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	—	—	—

第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【長崎県】準絶滅危惧種(NT)，【鹿児島県】準絶滅危惧

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Chiba, M. and S. Chiba, 2024. Hidden invasiveness of non-native Schlegel's Japanese gecko (Reptilia: Squamata: Gekkonidae) and three-way competition among natives and non-natives in Japan. Mol. Ecol., 2024;00:e17420.
- 松尾公則，2019．長崎県に生息する 4 種のヤモリ属．長崎県生物学会誌，84: 33‐37.
- 松尾公則・江島正郎，1989．男女群島のニシヤモリの生態．日本の生物，3: 44‐46.
- 松尾公則・江島正郎・松永邦輔，1988．五島列島中通島のヤモリ属の一種．日本の生物，2: 61.
- 岡田滋，2003．ニシヤモリ．鹿児島県環境生活部環境保護課（編），鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物，動物編 －鹿児島県レッドデータブック－，pp. 88．財団法人鹿児島県環境技術協会，鹿児島.
- 岡本康汰・戸田守，2022． 鹿児島県におけるヤモリ属の分布および接触域における交雑について．九州両生爬虫類研究会誌 (13): 53‐59.
- Okamoto, K., A. Tominaga, and M. Toda, 2024. Demographic imbalance in the hybrid zone led to asymmetric gene flow between two closely related geckos, *Gekko hokouensis* and *Gekko yakuensis* (Squamata: Gekkonidae). Biol. J. Linnean Soc., 141: 118–132.
- Sengoku, S., 1989. Notes on a *Gekko* population in the Danjo Group, Nagasaki Prefecture, Japan. Matsui, M., T. Hikida and R. C. Goris (eds.), Current Herpetology in East Asia, pp. 180–184 Hrepetological Society of Japan, Kyoto.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Gekko sp. 2 has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Gekko* sp. 2 is listed as NT under criteria ①②④.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

④Different species capable of hybridizing are invading.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sea Cliff/Rocky beach/Reef
Threat types:	Coastal development, Competition (with alien species), Hybridization (with alien species)
Law designation status for conservation	—



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ヤモリ科 Gekkonidae　　日本固有

タワヤモリ

***Gekko tawaensis* Okada, 1956**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②④

基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
環境改変により生息地は明らかに減少している。加えて、交雑や繁殖干渉を通したニホンヤモリとの置き換わりが各地で進行している。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
各種の環境改変、特に本種の主要な生息環境である自然岩場海岸の改変は、分布域の広い範囲で進んでおり、生息地面積は一貫して減少している。また、各地で見られる岩場海岸周辺での開発行為がニホンヤモリの増加を助長し、交雑や競争を誘発している。

④交雑可能な別種が侵入している。
【判断理由】
海岸や丘陵地に人為的に攪乱された環境が創出されることでニホンヤモリがさらに拡大し、本種を激しく圧迫している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

瀬戸内海沿岸とその周辺の島々および四国太平洋岸に分布する日本の固有種で、背面を覆う複雑な暗色斑と尾の暗帯が目立つヤモリ。自然林に覆われた岩場海岸の露岩の他，丘陵地の露岩にも生息する。

基礎情報

【形態】

胴の背面に大型鱗を欠き、オスでも前肛孔をもたないのが特徴。頭部は、特に目より後方が幅広く偏平で、目の前後に走る明色と暗色線が良く目立つ。頭胴長はメスで 62 mm、オスで 60 mm 程度のものが多く、それぞれ最大 72 mm と 66 mm に達する。尾には明色と暗色の明瞭なバンドがある。

【生活史】

小型の昆虫類などを食べ、6～8 月に露岩の隙間などに 2 個の卵を産みつける。

【生息環境】

海岸や、海に面した丘陵地のウバメガシ林などを伴う露岩がある環境に生息し、しばしばその周辺の人工物でも見られる。香川県や愛媛県では内陸部の露岩地にも生息する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【陸域_海岸部】森林，海崖・岩浜・岩礁（磯）
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

本州、四国、九州の瀬戸内海沿岸部とその周辺の島々、および四国太平洋岸に分布し、その分布域は、同属のニホンヤモリのそれにほぼ包含される。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域の広い範囲で天然海岸が減少していることに伴い、生息域、生息個体数ともに減少している。

【生息地の現況】

西日本の広い範囲で天然海岸は減少しており、生息地は狭まっている。

【個体数の現況】

個体数に関する具体的な資料はないが、分布域の多くで生息適地が減少していることに加え、沿岸部の人為的環境改変により各地で同属のニホンヤモリが台頭し、交雑を介して種の置きかわりが進行していることから、継続的に個体数が減少していることは間違いない。かつて本種がみられた場所で、環境は大きく変わっていないにも関わらずニホンヤモリに置き換わってしまった場所も少なくない。

存続を脅かす要因

本種の生息適地である海岸露岩や海に面した斜面の露岩地は分布域の全域で明らかに減っており、生息地が減少している。集団遺伝学的研究により、地域集団間の遺伝的交流

は限られていることが示されており、個体群の断片化が進んでいると考えられる。特に紀伊半島西部ではもともと限られた範囲でしか生息が確認できていなかったが、環境改変による生息地の減少と、潜在的な競合種であるニホンヤモリの台頭により、より開放的な環境を好むニホンヤモリが優占し、タワヤモリを圧迫していて、本種は危機的状況にある。両種の交雑は複数の地点で確認されており、それによる純系個体群の減少も懸念される。		
要因の区分：	（過去）	土地造成，競争/競合（外来種による），競争/競合（在来種による），交雑（外来種による）
	（現在）	土地造成，競争/競合（外来種による），競争/競合（在来種による），交雑（外来種による）

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	タワヤモリ	*Gekko tawaensis*	NT
第４次 2019：	タワヤモリ	*Gekko tawaensis*	NT
第４次 2018：	タワヤモリ	*Gekko tawaensis*	NT
第４次 2017：	タワヤモリ	*Gekko tawaensis*	NT
第４次 2015：	タワヤモリ	*Gekko tawaensis*	NT
第４次：	タワヤモリ	*Gekko tawaensis*	NT
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【大阪府】CR+EN，【兵庫県】B ランク，【和歌山県】情報不足(DD)，【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類，【広島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類，【香川県】準絶滅危惧(NT)，【愛媛県】準絶滅危惧(NT)，【高知県】情報不足(DD)，【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【宮崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岡田 純・戸田守，1999．タワヤモリの新産地．比婆科学，189: 1‐12.

- 谷岡仁，2015．高知県と愛媛県におけるタワヤモリ *Gekko tawaensis* の新産地（ヤモリ科目：ヤモリ科）．四国自然史科学研究，8: 22‐25．
- Toda, M., S. Okada, T. Hikida, and H. Ota, 2006. Extensive natural hybridization between two geckos, *Gekko tawaensis* and *G. japonicus* (Reptilia: Squamata), throughout their broad sympatric area. Biochem. Genet., 44: 1-17.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Gekko tawaensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Gekko tawaensis* is listed as NT under criteria ①②④.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

④Different species capable of hybridizing are invading.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Forest, Sea Cliff/Rocky beach/Reef
Threat types:	Land development, Competition (with alien species), Competition (with native species), Hybridization (with alien species)
Law designation status for conservation	—





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　アガマ科 Agamidae　　日本固有

サキシマキノボリトカゲ

***Diploderma polygonatum ishigakiense* (Van Denburgh, 1912)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①

基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
島嶼によっては個体数が極度に少なく、環境の急変によって容易に消失することが懸念される。小浜島では減少している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

全長はオスで約 270 mm、メスで約 200 mm に達する。頸部には、良く目立つたてがみ状の鱗が並ぶ。宮古諸島と八重山諸島に分布する。常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林、人工林に生息する。森林の伐採にともなう生息環境の縮小や、また残された生息地には外来性種のイタチやクジャクが定着しており、こうした様々な影響で各地の生息状況が悪化している。

基礎情報

【形態】

全長 188～258 mm、頭胴長 50～63 mm 程度。四肢や尾は細長く、同様に細長い指の先には鋭いかぎ爪を備える。鱗は頭部の背面や側面では相互に重複がないが、それ以外の大部分では瓦状で、つやがなくそのほとんどにキールがある。胴部の体鱗は側面のものも含め概ね大きさが揃っており、ヨナグニキノボリトカゲの同じ部分の体鱗に比べ、規則的に配列されている。体の地色はくすんだ褐色ないし茶色で、やや緑味を帯びることもあるがオキナワキノボリトカゲのオスやヨナグニキノボリトカゲのメスのように鮮やかな緑色となることはない。オスの体側には左右に 1 本ずつ縦に白帯が走る。メスには白帯はなく、胴部背面を 3～5 本の暗帯が横切る。

【生活史】

オスは一定の範囲を縄張りとして他のオスを排除する。メスは 6～8 月に 1～2 回、一度に 1～3 個産卵する。

【生息環境】

常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林に多いが、開けた二次林や人工林にも見られることがある。おもに昆虫やクモなどを食べる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

南琉球の西表島、小浜島、石垣島、伊良部島、宮古島などに分布。その一方で、八丈島では外来性の繁殖集団が形成されており、新たな分布地となっている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

小浜島、石垣島、伊良部島、宮古島などでは、分布範囲の縮小、分断が見られる。

【生息地の現況】

森林の伐採にともない生息環境は縮小し、残された生息地には外来性種のイタチやクジャクが定着して生息環境が悪化している。

【個体数の現況】

生息環境の縮小や、外来性種のイタチやクジャクによる捕食の影響から、生息範囲や個体数は縮小・減少はしている。ただし具体的な個体数やその減少率は不明。

存続を脅かす要因

森林の伐採にともない生息環境は縮小し、残された生息地には外来性種のイタチやクジ

ャクが定着し、これらの影響で、生息範囲や個体数は縮小・減少はしている。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，捕食（外来種による）

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	サキシマキノボリトカゲ	*Diploderma polygonatum ishigakiense*	NT
第４次 2019：	サキシマキノボリトカゲ	*Japalura polygonata ishigakiensis*	NT
第４次 2018：	サキシマキノボリトカゲ	*Japalura polygonata ishigakiensis*	NT
第４次 2017：	サキシマキノボリトカゲ	*Japalura polygonata ishigakiensis*	NT
第４次 2015：	サキシマキノボリトカゲ	*Japalura polygonata ishigakiensis*	NT
第４次：	サキシマキノボリトカゲ	*Japalura polygonata ishigakiensis*	NT
第３次：	サキシマキノボリトカゲ	*Japalura polygonata ishigakiensis*	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Ota, H., 1991. Taxonomic redefinition of *Japalura swinhonis* Gunther (Agamidae : Squamata), with a description of a new subspecies of *J. polygonata* from Taiwan. Herpetologica, 47: 280-294.
- 田中聡，2004．小浜島における両生爬虫類の現状について．小浜島総合調査報告書，pp. 21-33．沖縄県立博物館，那覇.
- 田中聡，2005．サキシマキノボリトカゲ． 沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ -，pp. 120．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇.

- 当山昌直・太田英利．1990．西表島、崎山半島における両生爬虫類の生態分布．南西諸島の野生生物の保存に不可欠な条件に関する研究，pp. 167-172．環境庁自然保護局，東京．

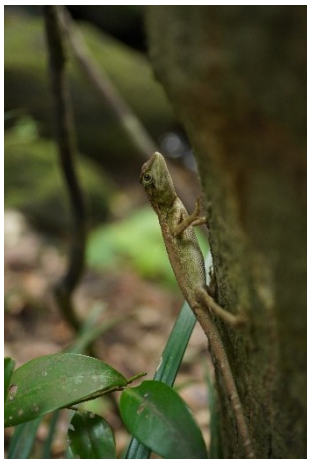
アセスメントサマリー（Assessment summary）

Diploderma polygonatum ishigakiense has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Diploderma polygonatum ishigakiense* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	—



執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　アガマ科 Agamidae　　日本固有

オキナワキノボリトカゲ

***Diploderma polygonatum polygonatum* Hallowell, 1861**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①④

基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
島嶼によっては個体数が極度に少なく、環境の急変によって容易に消失することが懸念される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

全長はオスで約 310 mm、メスで約 240 mm に達する。頸部には、良く目立つたてがみ状の鱗が並ぶ。中琉球の沖縄諸島と奄美諸島の固有亜種だが、屋久島や九州本土にも外来集団が定着している。常緑広葉樹の自然林の周縁部や二次林など、木がある一方で比較的見通しの良い環境に生息する。近年、多くの島で、外来性捕食者の影響による個体数の減少が著しく、加えて森林の伐採、宅地造成、農地化による生息地の分断、縮小も続いている。

基礎情報

【形態】

全長はオスで最大 310 mm、メスで 240 mm 前後。尾は全長の約 70%を占め、頭胴長はオスで最大 93 mm、メスで 77 mm に達する。頸部から胴部にかけての背中線上に鋸歯状の大型鱗が並んでいる。この鱗は成体のオスでとくに発達し、また頸部のものはとくに顕著で目立つ。成体のオスは緑色で、左右の胴の側面には普通 1 本ずつ、黄色ないし淡黄色の縦条が走る。一方成体メスでは地色は緑色ないし淡褐色で、胴の背面には黒褐色の横帯が 3～5 本並ぶ。雌雄とも、社会行動や捕食者による攻撃の際、体全体を黒褐色にまで変化させることがある。幼体は茶褐色で、このような体色の変化はない。

【生活史】

産卵期は 4 月中旬～9 月上旬。この間メスは、一度に 1～4 個を落葉下や自分で掘ったものを含む地表の凹みに産卵する。多くの成体メスが、期間中に少なくとも 2 回産卵する。ふ卵期間は 1 ヶ月半程度で、ふ化直後の頭胴長は 22～25 mm。オスは 10～50 m^2ほどの縄張りをもち、他のオスを排除する。縄張りオスの体色は鮮やかな緑色となり、高い木の幹など見通しの良い場所に止まることが多い。活動期間はおもに 3～10 月であるが、冬季でも暖かい日には活動個体が見られる。動物食で視覚に依存し、待ち伏せ型の採餌を行うことが多い。餌はアリ類が大多数を占めるが、鱗翅類の幼虫やクモ類、そして時にはセミ類やヤモリ類の幼体なども餌としている。

【生息環境】

常緑広葉樹の自然林や二次林、人工林のほか、集落内の茂みや庭木にも見られる。密な自然林では周縁部に多い一方で林内には少なく、ある程度視界の開けた見通しの良い場所を好む。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地，耕作放棄地 【陸域_平地部】森林，草地，耕作放棄地，市街緑地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

中琉球の沖縄諸島と奄美諸島の計 20 あまりの島嶼に分布している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

沖縄諸島の久米島、阿嘉島、座間味島、沖縄島、津堅島や、奄美諸島の奄美大島、喜界島などでは分布範囲の縮小、分断が見られる。また、かつて本亜種が生息していた与論島は、完全に分布の空白となってしまっている。その一方で、大隅諸島の屋久島や鹿児島県の指宿市、宮崎県の日南市、長崎県の松浦市、静岡県の浜松市では外来性の繁殖集団が形成されており、新たな分布地となっている。

【生息地の現況】

分布範囲の多く、とくに久米島、沖縄島、津堅島、徳之島などで、生息に好適な二次林が失われている。また座間味島、阿嘉島、与論島、喜界島などでは人為的に持ち込まれた捕食者のイタチが、沖縄島と奄美大島では同じくフイリマングースが、オキナワキノボリトカゲの生息地内で定着している。

【個体数の現況】

久米島の中北部では 1983 年 7 月～1994 年 7 月の調査で生息密度が、1 ヘクタールあたり 165 個体から 21 個体への激減が認められた。沖縄島南部の那覇市でも、1980 年代半ばから約 20 年ほどの間に、生息密度が 1/5～1/10 にまで低下してしまったとの指摘がある。一部地域で回復した事例もあるが、その他のほとんどの島々を含め、全体的には現在も減少傾向にあることは間違いない。ただし具体的な個体数やその減少率は不明。

存続を脅かす要因

外来性捕食者であるフイリマングースやイタチによる捕食圧が、沖縄島や奄美大島をはじめ多くの島で本亜種の存続を脅かす最大の要因になっており、例えば 1950 年代まで本亜種生存の報告があった与論島では、1960～70 年代のイタチの導入・定着により、個体群が完全に消滅したと思われる。森林伐採、土地造成による生息環境の喪失も大きな脅威となっているであろう。対して 1990 年代まで大きな問題となった愛好者等による捕獲は、完全になくなったわけではないにせよ、一時期に比べ減少し、2010 年以降は乱獲は少なくなり、場所にもよるが久米島などでは個体群の回復傾向が認められる。また奄美大島では 2020 年以降マングース防除が進み、その効果が表れてくることが期待される。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，土地造成，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による）

特記事項

オキナワキノボリトカゲは、旧世界の熱帯を中心に多様化しているキノボリトカゲ科の中でももっとも北東に分布する種で、本科の進化史や琉球の生物地理を考えるうえで、きわめて貴重な存在と言える。また日本の他のほとんどのトカゲ類と違って明瞭な社会構造をもっており、生態学、行動学分野でも興味深い研究対象となっている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オキナワキノボリトカゲ	*Diploderma polygonatum polygonatum*	VU
第４次 2019：	オキナワキノボリトカゲ	*Japalura polygonata polygonata*	VU
第４次 2018：	オキナワキノボリトカゲ	*Japalura polygonata polygonata*	VU
第４次 2017：	オキナワキノボリトカゲ	*Japalura polygonata polygonata*	VU
第４次 2015：	オキナワキノボリトカゲ	*Japalura polygonata polygonata*	VU

第４次:	オキナワキノボリトカゲ	*Japalura polygonata polygonata*	VU
第３次:	オキナワキノボリトカゲ	*Japalura polygonata polygonata*	VU
第２次:	キノボリトカゲ	*Japalura polygonata polygonata*	VU
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】準絶滅危惧,地域個体群(情報不足)(与論島個体群),【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 阿部愼太郎，1992．マングースたちは奄美で何を食べているか．チリモス，3: 1‐18．
- Nakamura, Y., A. Takahashi, and H. Ota, 2013. Recent cryptic extinction of squamate reptiles on Yoronjima Island of the Ryukyu Archipelago, Japan, inferred from garbage dump remains. Acta Herpetologica, 8: 19–34.
- Ota, H., 1991. Taxonomic redefinition of *Japalura swinhonis* Günther (Agamidae : Squamata), with a description of a new subspecies of *J. polygonata* from Taiwan. Herpetologica, 47: 280–294.
- Ota, H., 2003. A new subspecies of the agamid lizard, *Japalura polygonata* (Hallowell, 1861)(Reptilia: Squamata), from Yonagunijima Island of the Yaeyama Group, Ryukyu Archipelago. Cur. Herpetol., 22(2): 61–71.
- 太田英利，2003．オキナワキノボリトカゲ．鹿児島県環境生活部環境保護課（編），鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編－鹿児島県レッドデータブック－，pp. 90．財団法人鹿児島県環境技術協会，鹿児島．
- Ota, H., I. Hoshino, and Y. Sueyoshi, 2006. Colonization by the subtropical lizard, *Japalura polygonata polygonata* (Squamata: Agamidae), in southeastern Kyushu, Japan. Cur. Herpetol., 25: 29–34.
- 太田英利・那須哲夫・末吉豊文・星野一三雄・森田哲夫・岩本俊孝，2012．鹿児島県 本土部における国内外来種オキナワキノボリトカゲ *Japalura polygonata polygonata* (Hallowell，1861)（爬虫綱，アガマ科）の生息状況．Nature of Kagoshima，38: 1‐8．
- 貴島靖仁・太田英利・那須哲夫・森田哲夫・末吉豊文・星野一三雄・岩本俊孝，2012．日南市に生息する国内移入種オキナワキノボリトカゲの生息密度及び生息環境に関する研究．九州両生爬虫類研究会誌，3: 57‐65．
- 田中聡，2005．オキナワキノボリトカゲ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 113‐114．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．

- Tanaka, S. and M. Nishihira, 1981. Notes on an agamid lizard, *Japalura polygonata*. Biol. Mag. Okinawa, 19: 33–39.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Diploderma polygonatum polygonatum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Diploderma polygonatum polygonatum* is listed as NT under criteria ①④.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

④Different species capable of hybridizing are invading.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland, Abandoned farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Abandoned farmland, Urban green area
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	—





執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　トカゲ科 Scincidae　　日本固有

キシノウエトカゲ

***Plestiodon kishinouyei* (Stejneger, 1901)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　—	基準 B:　VU 未満	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
本種が生息する複数の島にイタチが導入されており、それらの島では深刻なレベルで個体数の減少が見られる。その他の島でも断続的に環境改変が続き、本種の生息地は狭まっていることから個体数が減少していることは間違いない。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
本種の主たる生息環境は海岸植生の周辺、畑地、集落周辺などであり、人の生活圏に隣接しているため、多くの場所で継続的に環境改変がなされ、生息条件は悪化している。特に宮古諸島ではそれが加速しており、今後の状況を注視する必要がある。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

宮古・八重山諸島の固有種。日本最大のトカゲで、全長 400 mm を超えることもある。産卵期は 5 月頃で、6 月下旬から 7 月上旬にかけて幼体が一斉に出現する。昆虫やミミズなどの無脊椎動物のほか、カエル、小型のトカゲなども捕食する。平地の草原、畑地、開けた二次林などに多い。極めて小さな島を含む、宮古・八重山諸島のほとんどの島に分布する。イタチが定着している島々では個体数は極めて少なく、個体群の存続が危ぶまれている。沿岸部の開発や道路整備に伴う生息環境の消失に加え、交通量の増加に伴う轢死の増加によっても個体数は減少していると考えられる。

基礎情報

【形態】

日本最大のトカゲで、成体は頭胴長 140～172 mm、全長 280～410 mm に達する。体格はがっしりしていて全体的に太短く、成熟したオスは相対的に頭幅が大きくなる。体鱗は胴部で普通 24～26 列。後頤板が前後に 2 分すること、下側の第 2 列側頭板が扇型をしていることで国産の他の同属種と区別できる。背面の地色は淡褐色ないし褐色で、メスはかなり成長しても明色の縦条が残る。幼体はイシガキトカゲなどの幼体と同様、黒に近い黒褐色の地に 7 本の淡色縦条をもつ。尾は青いが、イシガキトカゲより青みが弱く、水色。淡色縦条のうち最外列の左右各 2 本は、前肢の付け根より前で波打ち、不規則に途切れる。

【生活史】

交尾期は 3～4 月、産卵期は 5 月頃と思われ、6 月上旬に草積みの下で卵に寄り添っているメスが観察されている。飼育化で 12 卵を産んだ例がある。6 月下旬から 7 月上旬に頭胴長 40～43 mm ほどの孵化幼体が一斉に現れる。幼体の成長は早く、1 年で頭胴長 90 mm ほどになる。成体は大型の餌も捕食し、甲虫やバッタ類、鱗翅類の幼虫、ミミズといった無脊椎動物のほか、サキシマヌマガエルやイシガキトカゲなどの捕食例もある。普通は、日中に日光浴をして体温をあげてから活動するが、晩夏から秋にかけて夜間に本種が活動しているところが観察されている。

【生息環境】

比較的開けた環境を好み、海岸植生の周辺や畑地、集落周辺の草むらなどで頻繁に見られるが、森林の林縁部や河川沿いなどにも出現する。明らかに平地に多く、渓流沿いの日がよく当たる環境を除き、山地の森林内にはほとんどいないと思われる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地 【陸域_平地部】草地，田地・畑地，耕作放棄地，住宅地，砂地・礫地，砂浜・礫浜
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

与那国島、波照間島、西表島、石垣島、多良間島、伊良部島、宮古島をはじめ、八重山諸島と宮古諸島のほぼ全ての島に分布。中国大陸から台湾西部にかけて分布する *Plestiodon chinensis* と台湾東部に分布する *Plestiodon leucostictus* からなるクレードと姉妹群をなす。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1980 年代の初め頃までは多くの島で普通に見られたようであるが、近年では、大神島、池間島、水納島を除く宮古諸島の島々、波照間島などで数が少なく、発見が難しい島もある。宮古諸島の伊良部島、下地島と、八重山諸島の波照間島では個体群が消滅した可能性

も指摘されていたが、最近になって、伊良部島を除く 2 島では現在も個体群が存続していることが確認された。

【生息地の現況】

宮古島、伊良部島、下地島、多良間島と波照間島で本種を見るのが難しくなっているのは、外来種のイタチがいることが主な要因と考えてまず間違いない。宮古島では個体が安定してみられる場所はなく、複数個体がみられた場所でも 2〜3 年のうちにその場所では姿を見なくなる。黒島や小浜島などではインドクジャクによる捕食の可能性も指摘されている。そのほか、舗装道路の敷設とそれにともなう轢死も増えており、生息環境は悪化している。

【個体数の現況】

宮古島、伊良部島、下地島、多良間島、波照間島ではすでに個体数は非常に少ない。特に宮古島を除く 4 島では、本種が目撃される地域も限られ、個体を見つけるのが難しい状態にある。個体数が減少しているのは間違いないが、具体的な値は不明。

存続を脅かす要因

外来種のイタチのほか、ネコによる捕食も個体数減少の主要因と考えられる。波照間島のケースでは、同所的にいるイシガキトカゲは少なくないことから、イタチに関しては昆虫を巡る競合もあるのかもしれない。そのほか沿岸部の開発や道路整備に伴う生息環境の消失と、交通量の増加にともなう轢死事故の増加によっても負の影響を受けている。

要因の区分：	（過去）	交通事故，捕食（外来種による）
	（現在）	交通事故，捕食（外来種による）

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	キシノウエトカゲ	*Plestiodon kishinouyei*	VU
第４次 2019：	キシノウエトカゲ	*Plestiodon kishinouyei*	VU
第４次 2018：	キシノウエトカゲ	*Plestiodon kishinouyei*	VU
第４次 2017：	キシノウエトカゲ	*Plestiodon kishinouyei*	VU
第４次 2015：	キシノウエトカゲ	*Plestiodon kishinouyei*	VU
第４次：	キシノウエトカゲ	*Plestiodon kishinouyei*	VU
第３次：	キシノウエトカゲ	*Plestiodon kishinouyei*	VU
第２次：	キシノウエトカゲ	*Eumeces kishinouyei*	NT
第１次：	キシノウエトカゲ	*Eumeces kishinouyei*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国指定天然記念物

参考文献

- Brandley, M., H. Ota, T. Hikida, A. Nieto Montes de Oca, M. Feria Ortiz, X. Guo, and Y. Wang, 2012. The phylogenetic systematics of blue-tailed skinks (*Plestiodon*) and the family Scincidae. Zool. J. Linn. Soc., 165: 163–189.
- Diaz-Sacco, J. J., 2015. Nocturnal activity records of the Kishinoue's giant skink, *Plestiodon kishinouyei*, on Iriomote-jima Island. Curr. Herpetol. 34(2): 172–176.
- 樋上正美・村田行，1987．キシノウエトカゲの抱卵巣の観察例．Akamata，4: 1-2．
- 木寺法子・堤ひとみ，2021．キシノウエトカゲにおける交尾後の追尾行動および闘争行動の野外観察記録．Akamata，30: 17‐20．
- Kurita, K., Y. Nakamura, T. Okamoto, S. M. Lin, and T. Hikida, 2017. Taxonomic reassessment of two subspecies of Chinese skink in Taiwan based on morphological and molecular investigations (Squamata, Scincidae). Zookeys, 687: 131–148.
- 饒平名里美・当山昌直・安川雄一郎・陳 賜隆・高橋 健・久貝勝盛，1998．宮古諸島における陸生爬虫両生類の分布について．平良市総合博物館紀要，5: 23‐38．
- 岡本卓・栗田和紀，2021．キシノウエトカゲ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 139-141．サンライズ出版，彦根．
- 太田英利，1981．波照間島の爬虫両生類相．爬虫両棲類学雑誌，9: 54‐60．
- 澤田明・大林恭子・安里瞳，2023．波照間島におけるキシノウエトカゲの近年の記録．Akamata，32: 42‐47．
- 田中聡，2014．小浜島における両生爬虫類の現状について．小浜島総合調査報告書，pp. 21‐33．沖縄県立博物館，那覇．
- 当山昌直，1976．繁殖期のキシノウエトカゲの野外観察．両生爬虫類愛好会誌，4: 7‐9．
- 当山昌直，2005．キシノウエトカゲ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）-レッドデータおきなわ-，pp. 121‐122．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．
- 当山昌直・戸田守・田中聡・徳里政哉（編），2013．キシノウエトカゲ生息実態調査報告．沖縄県天然記念物調査シリーズ第 46 集．沖縄県教育委員会，那覇．148pp．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Plestiodon kishinouyei has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Plestiodon kishinouyei* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Residential area, Sandy area/Gravelly area, Sandy beach/Pebble beach
Threat types:	Vehicle collision, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	Nationally Designated Natural Monument.



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　トカゲ科 Scincidae　　日本固有

オキナワトカゲ

***Plestiodon marginatus* Hallowell, 1861**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①

基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
沖縄島のマングース拡散防止柵の南側での本種の減少は著しく、このままでは個体群が消滅してしまう可能性がある。また、中之島でも移入されたイタチの影響により、集落の近辺にしか生息しない可能性が高い。このうち沖縄島の名護市以南の地域は本種の潜在的生息地面積の半分以上を占めるが、その範囲の大多数の個体群が壊滅的な状況であることは重く受け止められるべきである。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

　沖縄諸島のほぼ全域と奄美諸島の与論島、沖永良部島、トカラ諸島の中之島に分布する。海岸植生や集落の周辺といった開けた環境を好み、主に昆虫やクモ類、ミミズなどの無脊椎動物を食べる。沖縄島の名護以南、座間味島、阿嘉島、慶留間島など外来食肉類がいる地域で生息密度が著しく低くなっており、地域個体群の存続が危ぶまれる。

基礎情報

【形態】

頭胴長 60～90 mm。胴部の体鱗は 24～28 列で 26 列のことが多い。後鼻板はない。幼体の背面には、暗褐色の地に 5 本の黄白縦条が走る。このうち背中寄りの 3 本が尾の中央か、それより尾端側まで伸びる点でオオシマトカゲと区別できるが、与論島、沖永良部島、中之島の個体群では、その範囲は基部寄りの 1/3 程度に留まる。与論島、沖永良部島の個体群は幼体時の尾が鮮やかな青色であることでオオシマトカゲと区別できる。また粟国島の個体群では幼体時の尾の青味がより鮮やかで、背面の縦条は尾の基部付近で終わる。

【生活史】

交尾期は 3 月下旬～5 月下旬で、メスは 5 月中旬～下旬頃、石の下などに空所を造り 5～8 個の卵を産む。産卵後、メスはそのまま巣に留まり、卵が孵るまで転卵や卵殻表面の汚れの除去など、卵の世話をする。孵化幼体は 7 月の初め頃に現れ、雌雄ともに通常 2 年目の春から生殖に参加する。昆虫、クモ、ミミズなどの無脊椎動物を食べる。

【生息環境】

海岸植生帯のなかやその周辺、集落の近辺や墓地、草地など、開けた環境に多い。自然度の高い森林内には生息せず、その出現は林道沿いなどに限られる。砂地や土手、石灰岩の岩場などでよく見かける。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，田地・畑地，耕作放棄地 【陸域_平地部 海岸部】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，住宅地，市街緑地，砂地・礫地，砂浜・礫浜
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

沖縄諸島と奄美諸島の与論島、沖永良部島、トカラ諸島の中之島に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

沖縄島では 1980 年代までは那覇市近郊なども含め、多くの場所で見られたが、その後減少し、現在、名護市以南の地域で本種が確認できる地点はわずかしかない。那覇や名護では、周囲を市街地に囲まれた一部の緑地に局在する状況となっている。周辺離島においては、海岸植生付近や集落の周辺などでしばしば高い密度で生息しているが、座間味島や中之島など、イタチが定着している島では明らかに数が少ない。

【生息地の現況】

やんばるや離島では、集落や墓地、海岸風衝林など、比較的保存されやすい環境に多いため、生息地の多くが失われているとはいえない。しかし、畑地の減少や海岸の開発、道路整備などに伴い、好適な生息環境は徐々に減っている。沖縄島の名護以南の地域には外来種のマングースが多く、本種にとって大きな脅威となっている。また、同じく外来種の

イタチが座間味島、阿嘉島、慶留間島、与論島、沖永良部島、中之島におり、本種を圧迫する大きな要因となっている。

【個体数の現況】

具体的な数字は不明であるが、イタチもしくはマングースがいる地域では明らかに数が少なく、特に沖縄島の名護市以南の地域では小さな個体群がそれぞれ孤立している状態に陥っていて、本来あるべきメタ個体群構造は崩壊しかかっていると考えられる。

存続を脅かす要因

イタチとマングースによる食害が、本種の存続を脅かす最大の要因と考えられる。沖縄島の北部に設置されたマングース北上防止策の北側ではマングースの密度が低い状態になっており、そこではオキナワトカゲが多く見つかるという調査結果がある。また、本種と近縁なトカゲ属の種がイタチの導入によって壊滅的になっている事例も知られている。このようにイタチとマングースが本種にとって大きな脅威となっていることはほぼ間違いない。

要因の区分：	（過去）	捕食（外来種による）
	（現在）	捕食（外来種による）

特記事項

沖縄島の中部を境に遺伝的な差異がみられ、離島のものもそれらの 2 群のどちらかに振り分けられる。中之島の集団は、沖縄島の北側の集団に近縁であることが示されている。近縁種のオオシマトカゲ（*Plestiodon oshimensis*）やイシガキトカゲ（*Plestiodon stimpsonii*）とともに南西諸島のなかで複雑な分散と多様化の歴史をもっていると考えられ、学術的に高い価値がある。また、面積がとても小さな島にも分布することから、小島嶼における集団維持や遺伝的多様性の維持機構の解明、あるいはいくつかの島でバーバートカゲと同所的に分布することから、島嶼における同属種との共存の仕組みを考えるうえでも貴重な研究対象となっている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オキナワトカゲ	*Plestiodon marginatus*	VU
第４次 2019：	オキナワトカゲ	*Plestiodon marginatus*	VU
第４次 2018：	オキナワトカゲ	*Plestiodon marginatus*	VU
第４次 2017：	オキナワトカゲ	*Plestiodon marginatus*	VU
第４次 2015：	オキナワトカゲ	*Plestiodon marginatus marginatus*	VU
第４次：	オキナワトカゲ	*Plestiodon marginatus marginatus*	VU
第３次：	オキナワトカゲ	*Plestiodon marginatus marginatus*	NT

第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類,地域個体群(消滅危惧Ⅰ類)(中之島個体群),【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

都道府県条例指定種【鹿児島県】

参考文献

- Brandley, M., H. Ota, T. Hikida, A. Nieto Montes de Oca, M. Feria Ortiz, X. Guo, and Y. Wang, 2012. The phylogenetic systematics of blue-tailed skinks (*Plestiodon*) and the family Scincidae. Zool. J. Linn. Soc., 165: 163–189.
- Kato, J., H. Ota, and T. Hikida, 1994. Biochemical systematics of the *latiscutatus* species-group of the genus *Eumeces* (Scincidae: Reptilia) from East Asian Islands. Biochem. Syst. Ecol., 22: 491–500.
- Kurita, K., and T. Hikida, 2014. Divergence and long-distance overseas dispersals of island populations of the Ryukyu five-lined skink, *Plestiodon marginatus* (Scincidae: Squamata), in the Ryukyu Archipelago, Japan, as revealed by mitochondrial DNA phylogeography. Zool. Sci., 31: 187–194
- 栗田和紀・角田羊平，2010．沖縄島におけるオキナワトカゲの分布状況．Akamata，21: 39‐43．
- Kurita, K., T. Hikida, M. Toda, 2017. An investigation for population maintenance mechanism in a miniature garden: Genetic connectivity or independence of small islet populations of the Ryukyu five-lined skink. J. Hered., 105: 773–783.
- 岡本卓・栗田和紀，2021．オキナワトカゲ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 137．サンライズ出版，彦根．
- 笹井隆秀・大嶋大地，2010．座間味島におけるオキナワトカゲの再発見．Akamata，21: 33‐35．
- 当山昌直，2005．オキナワトカゲ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 120‐121．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Plestiodon marginatus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Plestiodon marginatus* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are

likely to continue. ①The number of individuals is decreasing.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Farmland, Abandoned farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Residential area, Urban green area, Sandy area/Gravelly area, Sandy beach/Pebble beach
Threat types:	Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	Prefectural Ordinance-Designated Species【Kagoshima】.



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　トカゲ科 Scincidae　　日本固有

オオシマトカゲ

***Plestiodon oshimensis* (Thompson, 1912)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①				
基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
喜界島では、おそらく移入されたイタチの影響により、容易に個体を見つけることができないぐらいに数が少ない。同じくイタチが定着している諏訪之瀬島では個体を発見するのは難しくなっており、この先個体群が消滅する可能性が高い。奄美大島でも現在の出現範囲は広くないが、マングースの根絶により今後回復する可能性はある。その他の島でも生息適地は徐々に減少していると考えられる。無人島においては海岸植生付近などでしばしば高い密度で生息している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

与論島と沖永良部島を除く奄美諸島の全域と、硫黄鳥島、トカラ諸島の宝島、小宝島、諏訪之瀬島に分布する。海岸植生や集落の周辺といった開けた環境を好み、主に節足動物を食べるが、他のトカゲ類の捕食事例もある。喜界島や諏訪之瀬島では外来食肉類による影響が著しく、個体群の存続が危ぶまれる。その他の島でも人為的環境改変に伴い生息状況は徐々に悪化している。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長は 60～95 mm で島によって変異があり、徳之島には大型の個体が多い。胴部の体鱗は 24～28 列のものが多いが、硫黄鳥島の個体群では 34 列ある。後鼻板はない。幼体の背面には、暗褐色の地に 5 本の黄白縦条が走る。このうち背中寄りの 3 本は尾にまで伸びるが、尾の基部側 1/3 を超えることはない。

【生活史】

メスは 7 月頃に、砂岩の斜面の穴などに 7 個ほどの卵を産む。産卵後、メスはそのまま巣に留まり、卵が孵るまで世話をする。7 月下旬には頭胴長 26 mm ぐらいの幼体が孵化する。主に節足動物を食べるが、他のトカゲ類の捕食も報告されている。

【生息環境】

海岸植生帯や集落およびその近辺、草地など、開けた環境に多い。自然度の高い森林内には生息せず、その出現は林道沿いなどに限られる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】田地・畑地，耕作放棄地 【陸域_平地部 海岸部】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，住宅地，市街緑地，砂浜・礫浜
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（3）都市地域，（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

与論島と沖永良部島を除く奄美諸島の島々、硫黄鳥島、トカラ諸島の宝島、小宝島、小島、諏訪之瀬島に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

喜界島、諏訪之瀬島では容易に個体を見つけることができないぐらいに数が少ない。奄美大島でも多くはない。その他の島でも生息適地は徐々に減少していると考えられる。大島郡瀬戸内町の無人島においては海岸植生付近などでしばしば高い密度で生息している。

【生息地の現況】

集落や海岸風衝林など、比較的保存されやすい環境に生息するため、生息地の多くが失われているとはいえないが、集落近辺や海浜、畑地周辺の環境整備などによって好適な生息環境は徐々に減っている。奄美大島では、本種の生息に強い負の影響を与えて来たと考えられるマングースの防除事業が奏功し、事態は大きく改善した。今後の個体群の動向を見ていく必要がある。諏訪之瀬島と喜界島には、本種を含むトカゲ属の存続にとって脅威となるイタチが定着している。

【個体数の現況】

個体数に関する具体的な資料はないが、イタチがいる地域またはマングースがいた地域では明らかに数が少ない。特に諏訪之瀬島では個体の発見が難しい状況が続いていて、個

体群はすでに非常に危機的な状態にあると考えられる。喜界島でも数は相当少ないと思われる。

存続を脅かす要因

イタチとマングースによる食害が、本種の存続を脅かす最大の要因と考えられる。海浜や集落周辺の道路整備などに伴う環境改変も本種が減っている要因である。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，捕食（外来種による）
	（現在）	海岸開発，捕食（外来種による）

特記事項

近縁種のオキナワトカゲ（*Plestiodon marginatus*）やイシガキトカゲ（*Plestiodon stimpsonii*）とともに南西諸島のなかで複雑な分散と多様化の歴史をもっていると考えられ、学術的に高い価値がある。また、面積がとても小さな島にも分布することから、小島嶼における集団維持や遺伝的多様性の維持機構の解明、あるいはいくつかの島でバーバートカゲと同所的に分布することから、島嶼における同属種との共存の仕組みを考えるうえでも貴重な研究対象となっている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオシマトカゲ	*Plestiodon oshimensis*	NT
第４次 2019：	オオシマトカゲ	*Plestiodon oshimensis*	NT
第４次 2018：	オオシマトカゲ	*Plestiodon oshimensis*	NT
第４次 2017：	オオシマトカゲ	*Plestiodon oshimensis*	NT
第４次 2015：	オオシマトカゲ	*Plestiodon marginatus oshimensis*	NT
第４次：	オオシマトカゲ	*Plestiodon marginatus oshimensis*	NT
第３次：	オオシマトカゲ	*Plestiodon marginatus oshimensis*	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】準絶滅危惧,地域個体群(消滅危惧Ⅰ類)(諏訪之瀬島・喜界島個体群)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 阿部慎太郎，2022．奄美マングースバスターズによる奄美大島の外来マングース根絶の快挙まであと少し．ランドスケープ研究， 86: 110‐113．
- 疋田努，2017．オオシマトカゲ．環境省レッドリスト 2017 補遺資料．環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室，東京．17pp．
- Kurita, K. and T. Hikida, 2014. Divergence and long-distance overseas dispersals of island populations of the Ryukyu five-lined Skink, *Plestiodon marginatus* (Scincidae: Squamata), in the Ryukyu Archipelago, Japan, as revealed by mitochondrial DNA phylogeography. Zool. Sci., 31: 187–194.
- Kurita, K. and T. Hikida, 2014. A new species of *Plestiodon* (Squamata: Scincidae) from Kuchinoshima Island in the Tokara Group of the Northern Ryukyus, Japan. Zool. Sci., 31: 464–474.
- 岡本卓・栗田和紀，2021．オオシマトカゲ. 日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 137-138．サンライズ出版，彦根．
- 太田英利．2003．トカラ列島、諏訪之瀬島・中之島のオキナワトカゲ．鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物－鹿児島県レッドデータブック－，pp. 102, 財団法人鹿児島県環境技術協会，鹿児島．
- 戸田守・角田羊平・前之園唯史，2017．奄美諸島の 6 つの無人島の両生爬虫類相．Akamata，27: 56‐64．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Plestiodon oshimensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Plestiodon oshimensis* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Farmland, Abandoned farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Residential area, Urban green area, Sandy beach/Pebble beach
Threat types:	Coastal development, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	―



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　カナヘビ科 Lacertidae　　日本固有

アオカナヘビ

***Takydromus smaragdinus* Boulenger, 1887**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　—

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
徳之島、沖永良部島、沖縄島、渡嘉敷島において明らかに個体数が減少しているか、減少していることの聞き取りがある。また、伊江島については近年の生息確認が得られていない。奄美大島においても調査記録のある地点での明らかな個体数減少がみられる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

沖縄諸島と奄美諸島等に分布する日本固有種。細長い体型と長い尾をもち、体色は緑色系。草むらや藪を生息場所とし、昼行性で日なたで活動する。以前は、草むらで普通に見られたが、近年ほとんどの島嶼で激減している。特に、徳之島と沖永良部島では島内のほとんどの地域で確認できない状況となっており、絶滅が危惧される。要因としては、土地造成や農薬散布、移入天敵の増加が考えられるが、島によって状況は異なる。

協力者:　安里瞳（沖縄美ら島財団）・森口一（日本蛇族学術研究所）

基礎情報

【形態】

体形は細長く、尾が長い。全長 200～300 mm、頭胴長 50～70 mm。メスは背面と体側部が若草色で頭側から腹側部まで細い白条が通る。オスは背部が緑色で、側面は帯状に褐色が入り、メスと同様頭側から腹側まで細い白条が通る。腹面は白色ないし緑がかった白色ないし黄色。尾部から腰部は茶色がかっているものが多い。徳之島個体群は、オスもメスと同様の体色である。徳之島個体群はふ化個体および成体の体サイズが他より大きい。体鱗は背部の鱗が角形でやや大きく、キール（条線）がある。腹面の鱗も角形で大きい。体側部の鱗は小さく粒状。顎下の咽頭板は 3 対。総排出口のわきにある鼠径孔は 1 対、胴部腹面の腹板は 6 列。

【生活史】

4～8 月初旬にかけて数回、普通 1 回に 2 卵を産卵する。卵は 1 ヶ月ほどでふ化する。草の根元や浅い土中に産卵し、産卵後の親の世話などは行わない。縄張りなどの行動は知られていない。ふ化の翌年に成熟し繁殖する。寿命はよく分かっていないが、成熟した年の繁殖後も生存して経年的に繁殖を繰り返す。昼行性。明るい草むらと藪が混在した場所に生息し、日なたで体温調節を行って活発に活動する。地面に降りることもあるが、おもに草の上や低木の枝の上で行動する。冬眠はしないが、冬季は不活発になる。昆虫やクモなどの小節足動物をおもに補食する。

【生息環境】

草地や明るい林の周辺に生息する。以前はサトウキビ畑や耕作地周辺の草むら、人家の庭にも多く生息していたが、近年はそのような環境では見られなくなりつつある。山地や丘陵の林道周辺では草むらと樹林を利用して行動する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】草地，田地・畑地，耕作放棄地 【陸域_平地部】草地，田地・畑地，耕作放棄地
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

南西諸島のトカラ列島の宝島から奄美諸島、沖縄諸島にかけて分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

種の分布域に大きな変化はないが、各島における目撃地域や目撃数は大きく減少している。とくに徳之島では、生息が確認されない地域が拡大している。沖永良部島では近年ほとんど見られないが、2007 年と 2017 年に標本採集をともなう本種の生息確認記録が得られており、生息が継続していることが確認されている。

【生息地の現況】

徳之島では、耕作地周辺の平地部で生息が確認されない地域が拡大している。海岸に近

い草むらなどでも生息が確認できる範囲は縮小している。山地の山林地域では生息が確認できるがその範囲は限定されつつある。移入天敵は知られておらず、また草むらや樹林などの植生の状況に目立った変化はないが、耕作地周辺で減少が急激に生じていることから農薬散布などの人為影響が減少要因と考えられる。沖永良部島では、1940 年頃には畑周辺にも生息していたという聞き取り情報があることから以前は普通に島内で見られた可能性があるが、近年ほとんど見られなくなった。イタチの移入後に本種が減少した可能性が高い。イタチの目撃頻度は現在でも高く、イタチが減少要因である場合には、その影響は継続していると考えられる。

【個体数の現況】

沖永良部島では、本種の確認自体が限定的な情報しか得られていないために個体数の状況は不明である。しかし、研究調査での確認状況や住民の本種の認知の低さから、個体数がきわめて低密度であるか、生息する場所が限定的であることが推定できる。徳之島は、最近 10 年程度の期間においても生息が見られなくなった地点が増えている。林道周辺で比較的多くの個体数が見られる地点があるが、そのような地点は少ない。

存続を脅かす要因

種としては、土地開発による生息地の減少のほか、畑周辺等の草むらの環境悪化、農薬散布の影響や人為移入されたマングースやイタチといった外来捕食者の影響によって各島嶼で減少が見られている。とくに減少が著しい沖永良部島と徳之島の個体群について存続を脅かす要因の判定を行った。沖永良部島では、イタチによる捕食が要因として大きいと推定できる。徳之島では耕作地域での減少が著しく、農薬などの人為影響が大きいと推定できる。両地域とも減少要因を取り除くことができる状況にはない。

要因の区分：	（過去）	圃場整備，草地開発，土地造成，農薬汚染/化学物質汚染，捕食（外来種による）
	（現在）	圃場整備，草地開発，土地造成，農薬汚染/化学物質汚染，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による）

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	沖永良部島、徳之島のアオカナヘビ	*Takydromus smaragdinus*	LP
第４次 2019：	沖永良部島、徳之島のアオカナヘビ	*Takydromus smaragdinus*	LP
第４次 2018：	沖永良部島、徳之島のアオカナヘビ	*Takydromus smaragdinus*	LP
第４次 2017：	沖永良部島、徳之島のアオカナヘビ	*Takydromus smaragdinus*	LP
第４次 2015：	沖永良部島、徳之島のアオカナヘビ	*Takydromus smaragdinus*	LP

第４次:	沖永良部島、徳之島のアオカナヘビ	*Takydromus smaragdinus*	LP
第３次:	沖永良部島、徳之島のアオカナヘビ	*Takydromus smaragdinus*	LP
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】地域個体群(消滅危惧Ⅱ類)(沖永良部島・徳之島),分布特性上重要

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 小林海瑠，2018．沖永良部島におけるアオカナヘビの記録と生息状況．AKAMATA，28: 29-33．
- 中村泰之，2008．沖永良部島におけるアオカナヘビの生息分布の標本にもとづく初記録．AKAMATA，19: 20-22．
- 日本爬虫両棲類学会（編），2021．新日本両生爬虫類図鑑．サンライズ出版，彦根．232pp．
- 竹中践，2006．沖永良部島のアオカナヘビについて．爬虫両棲類学会報，2006: 24-26．
- 竹中践・森口一・林聡彦，2004．奄美諸島におけるアオカナヘビの生息分布の現状（講演要旨）．爬虫両棲類学会報，2004: 38 ．
- 戸田守・高橋洋生，2002．アオカナヘビの与論島からの記録．AKAMATA，16: 25-26．
- 当山正直・倉本満・森田忠義・前田憲男，1989．奄美大島における両生・爬虫類の分布：南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する研究．環境庁自然保護局（編），昭和63 年度奄美大島調査報告書，pp. 163-171．環境庁自然保護局，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Takydromus smaragdinus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Takydromus smaragdinus* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Grassland, Farmland, Abandoned farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Farmland, Abandoned

	farmland
Threat types:	Field preparation, Grassland development, Land development, Pesticide/Toxic chemical pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	—



執筆者:	竹中践（東海大学）
Author:	Sen Takenaka

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　セダカヘビ科 Pareidae　　日本固有

イワサキセダカヘビ

***Pareas iwasakii* (Maki, 1937)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②				
基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　VU 未満	基準 E:　－
生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生息条件が悪化している。 【判断理由】 石垣島では外来種のオオヒキガエルやクジャクによる影響が懸念される。				
評価分科会：　爬虫類・両生類分科会				

概要

八重山諸島の石垣島と西表島に固有のヘビ類で、胴は細く側偏する。生態は詳しくわかっていないがカタツムリ類を専食していると考えられる。石垣島では、外来種のオオヒキガエルやクジャクが本種の生息地に定着しており影響が懸念される。石垣島の中部および西部における目撃頻度は以前と比べて下がっており、個体数が減少している可能性がある。

基礎情報

【形態】

全長 500～700 mm。胴は細く側偏する。眼は大きく虹彩はオレンジ色ないし赤味がかった黄土色。腹板は 188～199 枚、吻端は尖らない。下顎腹面には頤（おとがい）溝がなく、咽頭板は左右非対称。上顎の歯は短く、とくに前端の歯は非常に短く、あまり尖らない。下顎の歯は鋭く尖り、前方のものほど発達が良い。このような顎・歯の構造は、餌のカタツムリの軟質部を、殻から引き出し食べるのに便利。頭部から頸部にかけて暗褐色の縦条があり、胴部には 50～70 本の不明瞭な暗帯がある。

【生活史】

5 月に最多で 11 卵を産んだ記録がある。

【生息環境】

森林やサトウキビ畑や低木林内の樹上や地表で、夜間に活動中の個体を見かけることがある。餌はカタツムリだけと思われる。西表島の動物に関する書に、本種によるアオガエル類（ヤエヤマアオガエル）の捕食に関する記述があるが、記録を再確認する必要があろう。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地 【陸域_平地部】森林，草地，耕作放棄地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

八重山諸島の石垣島と西表島の固有種。

現在の生息状況

【分布域の現況】

石垣島中部、西部の草地、サトウキビ畑周辺では、以前は時折本種が目撃されたが、近年その頻度が概ね下がっており、個体数の減少が懸念される。外来種オオヒキガエルの増加による餌の減少や、幼体への捕食圧の増加などが考えられる。

【生息地の現況】

石垣島では外来種オオヒキガエルが定着・増加している。

【個体数の現況】

石垣島の中部および西部の草地、サトウキビ畑周辺では、以前は時折本種が目撃されたが、近年その頻度が概ね下がっている。

存続を脅かす要因

石垣島中部、西部の草地、サトウキビ畑周辺では、以前は時折本種が目撃されたが、近年その頻度が概ね下がっており、個体数の減少が懸念される。外来種オオヒキガエルの増

加による餌の減少や、幼体への捕食圧の増加などが考えられる。		
要因の区分：	（過去）	捕食（外来種による），競争/競合（外来種による）
	（現在）	捕食（外来種による），競争/競合（外来種による）

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	イワサキセダカヘビ	*Pareas iwasakii*	NT
第４次 2019：	イワサキセダカヘビ	*Pareas iwasakii*	NT
第４次 2018：	イワサキセダカヘビ	*Pareas iwasakii*	NT
第４次 2017：	イワサキセダカヘビ	*Pareas iwasakii*	NT
第４次 2015：	イワサキセダカヘビ	*Pareas iwasakii*	NT
第４次：	イワサキセダカヘビ	*Pareas iwasakii*	NT
第３次：	イワサキセダカヘビ	*Pareas iwasakii*	NT
第２次：	イワサキセダカヘビ	*Pareas iwasakii*	NT
第１次：	イワサキセダカヘビ	*Pareas iwasakii*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 千木良芳範．2005．イワサキセダカヘビ．改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）-レッドデータおきなわ-，pp. 125．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇.
- Hoso, M., 2007. Oviposition and hatchling diet of a snail-eating snake *Pareas iwasakii* (Colubridae: Pareatinae). Current Herpetology, 26: 41-43.
- 太田英利．1996．イワサキセダカヘビ．沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 －レッドデータおきなわ－，pp . 337-338．沖縄県環境保健部自然保護課，那覇.

- Ota, H., J. T. Lin, T. Hirata, and S. L. Chen, 1997. Systematic review of colubrid snakes of the genus *Pareas* (Squamata : Reptilia) from the East Asian islands. Journal of Herpetology, 31: 79-87.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Pareas iwasakii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pareas iwasakii* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Abandoned farmland
Threat types:	Predation (by alien species), Competition (with alien species)
Law designation status for conservation	—



執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　タカチホヘビ科 Xenodermidae　　日本固有

アマミタカチホヘビ

***Achalinus werneri* Van Denburgh, 1912**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
沖縄島中南部では森林伐採や土地造成、舗装道路・側溝の敷設などにより、生息地の縮小や分断が生じていると考えられる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

全長 300～600 mm ほどの小型のヘビで、奄美諸島と沖縄諸島の一部の島嶼に分布する。湿潤な森林とその周辺に生息し、ミミズを捕食することが知られている。乾燥に弱く、移動能力も低いため、森林伐採や土地造成、舗装道路・側溝の敷設などによる影響を受けやすく、一部地域では生息地の縮小と分断が生じていると考えられる。

基礎情報

【形態】

頭胴長は成体で 240～420 mm、ふ化直後では 108～124 mm ほどで、尾長はその約 1/3～2/5 に達する。体型は全体的に細長い。体鱗は虹色の光沢を帯び、胴中央で 23 列（ごくまれに 21 列）に並ぶ。腹板はオス 157～171 枚、メス 174～191 枚。尾下板は左右に分かれておらず、オスで 90～98 枚、メスで 67～85 枚。体色は、背面が暗褐色で、しばしば正中線上に黒色の縦条が走る。腹面は黄色。

【生活史】

一腹卵数は 3～8 個。輸卵管卵をもつ個体は 4 月上旬～6 月上旬に見られ、5 月中旬には産卵も観察されている。

【生息環境】

落ち葉の中や枯れ草の下といった物陰に隠れる性質が強く、そのため人目につきにくいが、少なくとも沖縄島では今のところ必ずしも少なくはない。森林床のほか、陸水に隣接した草地など比較的開けた環境にも見られるが、乾燥や高温にはきわめて弱い。ミミズ類を捕食する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林，草地，耕作放棄地
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（7）島嶼地域

【分布域】

奄美諸島の奄美大島、枝手久島、加計呂麻島、徳之島、沖縄諸島の沖縄島、渡嘉敷島に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

沖縄島の中南部では、森林伐採や土地造成、舗装道路・側溝の敷設などにより、生息地の縮小や分断が生じていると考えられる。

【生息地の現況】

山地や丘陵、また墓地や拝所周辺の湿潤な森林に生息する。沖縄島中南部の生息地は、開発等の影響で縮小・分断が生じている。

【個体数の現況】

落ち葉の中や枯れ草の下といった物陰に隠れる性質が強く、そのため人目につきにくいが、少なくとも分布域全体を考えると、今のところ個体数は必ずしも少なくはない。

存続を脅かす要因

運動能力が低いため、舗装道路や側溝の敷設、土地開発などにより簡単に個体群が分断

され、局地的な消滅が生じると思われる。外来種マングースによる捕食の影響も懸念される。		
要因の区分：	（過去）	土地造成，交通インフラ建設，捕食（外来種による）
	（現在）	土地造成，交通インフラ建設，捕食（外来種による）

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アマミタカチホヘビ	*Achalinus werneri*	NT
第４次 2019：	アマミタカチホヘビ	*Achalinus werneri*	NT
第４次 2018：	アマミタカチホヘビ	*Achalinus werneri*	NT
第４次 2017：	アマミタカチホヘビ	*Achalinus werneri*	NT
第４次 2015：	アマミタカチホヘビ	*Achalinus werneri*	NT
第４次：	アマミタカチホヘビ	*Achalinus werneri*	NT
第３次：	アマミタカチホヘビ	*Achalinus werneri*	NT
第２次：	アマミタカチホヘビ	*Achalinus werneri*	NT
第１次：	アマミタカチホヘビ	*Achalinus werneri van*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】準絶滅危惧，【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 千木良芳範．2005．アマミタカチホヘビ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）-レッドデータおきなわ-，pp. 123-124．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．
- 太田英利・岡田滋．2003．爬虫類・両生類．鹿児島県環境生活部環境保護課（編），鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物，動物編．鹿児島県レッドデータブック，pp. 82-116．財団法人鹿児島県環境技術協会，鹿児島．

- Ota, H. and M. Toyama. 1989. Taxonomic re-definition of *Achalinus formosanus* Boulenger (Xenoderminae: Colubridae), with description of a new subspecies. Copeia, 1989(3): 597-602.
- 田中聡．1986．沖縄島南部石灰岩林における蛇類の夜間調査．Akamata, 3: 19―23．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Achalinus werneri has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Achalinus werneri* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Abandoned farmland
Threat types:	Land development, Transportation infrastructure construction, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	―



執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ナミヘビ科 Colubridae　　日本固有

サキシマアオヘビ

***Cyclophiops herminae* (Boettger, 1895)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②				
基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　―	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―
生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生息条件が悪化している。 【判断理由】 特に西表島では、晩春から晩夏にかけて路上轢死体が目立つ。				
評価分科会：　爬虫類・両生類分科会				

概要

八重山諸島の固有種で、おもに森林やその周辺にみられ、ミミズ類を捕食する。開発等による森林の縮小に加えて、外来種が定着しており、生息状況の悪化が懸念される。

基礎情報

【形態】

頭胴長 400～700 mm。頭部は小さく、幅は頸部の幅とほとんど変わらない。体鱗は胴中央で普通 17 列であるが、まれに 19 列の個体も見られる。腹板数は 161～164 枚、尾下板数は 52～64 対。背面の地色は灰褐色で、やや青味ないし緑味を帯びることもある。胴部には、ところどころに小さな黒斑が見られることが多い。腹面は淡いクリーム色で、とくに模様はない。

【生活史】

8 月末に、飼育下で 8 卵を産んだとの報告、並びに 8 月中旬に得られた礫死体に 9 個の輸卵管卵が確認されたとの報告があることから、7 月末までに産卵を終える種の多い琉球列島の陸生ヘビ類の中では、例外的に産卵期が遅いと思われる。

【生息環境】

山地から平地まで、また湿潤な常緑広葉樹林の自然林から、比較的乾燥した灌木林、人工林内までさまざまな場所で見られるが、いずれでも生息密度はあまり高くない。ミミズ類を捕食する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

八重山諸島の石垣島、西表島、波照間島、小浜島、黒島、竹富島などに分布。宮古諸島にも分布するとの記述もあるが、標本や写真などの直接的証拠に基づく再確認が必要。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布する島嶼では、山地から平地の常緑広葉樹林のほか、比較的乾燥した灌木林、人工林内までさまざまな場所で見られる。

【生息地の現況】

詳細は不明だが、主要な生息環境である湿潤な森林は減少しているほか、外来種が生息地に定着していることから、生息環境は悪化傾向にあると考えられる。

【個体数の現況】

生息に適した場所の縮小から個体数が減少傾向にあるのは間違いないが、具体的な数値等は不明。

存続を脅かす要因

イタチ（波照間島）やクジャク（小浜島、黒島）、オオヒキガエル（石垣島）などの外来

種による捕食がおもな危急要因と考えられる。		
要因の区分：	（過去）	捕食（外来種による）
	（現在）	捕食（外来種による）

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	サキシマアオヘビ	*Cyclophiops herminae*	NT
第４次 2019：	サキシマアオヘビ	*Cyclophiops herminae*	NT
第４次 2018：	サキシマアオヘビ	*Cyclophiops herminae*	NT
第４次 2017：	サキシマアオヘビ	*Cyclophiops herminae*	NT
第４次 2015：	サキシマアオヘビ	*Cyclophiops herminae*	NT
第４次：	サキシマアオヘビ	*Cyclophiops herminae*	NT
第３次：	サキシマアオヘビ	*Cyclophiops herminae*	NT
第２次：	サキシマアオヘビ	*Cyclophiops herminae*	NT
第１次：	サキシマアオヘビ	*Opheodrys herminae*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 太田英利，1981．波照間島の爬虫両生類相．爬虫両棲類学会誌，9: 54―60.
- 高良鉄夫，1962．琉球列島における陸棲蛇類の研究．琉球大学農家政工学部学術報告，9: 1-202，22 pls.
- 田中聡，2004．小浜島における両生爬虫類の現状について．小浜島総合調査報告書，pp. 21-33．沖縄県立博物館，那覇.

- 当山昌直，2005．サキシマアオヘビ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）-レッドデータおきなわ-，pp. 125-126．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cyclophiops herminae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cyclophiops herminae* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	—



執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ナミヘビ科 Colubridae　　日本固有

サキシマスジオ

***Elaphe taeniura schmackeri* (Boettger, 1895)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②				
基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　VU 未満	基準 E:　－
生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生息条件が悪化している。 【判断理由】 特に西表島では、晩春から晩夏にかけて路上轢死体が目立つ。				
評価分科会：　爬虫類・両生類分科会				

概要

最大で全長約 2.5 m に達する大型の無毒蛇で、おもに小型哺乳類や鳥類などの温血動物を餌としている。南琉球の八重山諸島と宮古諸島に分布し、それらの島々では在来生態系の最上位の一角を占めているが、近年、個体数の減少、生息域の縮小が著しい。生息地周辺での舗装道路の整備にともなう轢死数の増加や、イタチ、インドクジャクといった外来性捕食者の人為的移入、定着がおもな危機要因となっている。

基礎情報

【形態】

全長 1,320～2,510 mm。体型は比較的細長い。頭部は頸部より明瞭に幅広いが、前後方向に長く、吻端は尖らない。体鱗はその多くに弱いキールを備えており、頸部で 27～29 列、胴中央で 25～27 列、総排出口前で 19～21 列に並ぶ。腹板は 248～265 枚、尾下板は 103～126 対。背面は黄褐色ないし褐色で、やや緑味を帯びることもある。胴部には不明瞭な暗色の斑紋がおよそ 4 列に並び、尾部には左右に黒色の縦条が走る。

【生活史】

これまでの一例報告的な知見を総合すると、産卵期は 6 月下旬～7 月中旬で、成体のメスはこの時期、一度に 6～11 卵を産み落とすこと、卵は通常 2 ヶ月程度で発生を終え、8 月下旬～9 月中旬にふ化することが考えられる。ネズミやオオコウモリ、鳥などの温血動物をおもに捕食すると考えられるが、幼体ではサキシマキノボリトカゲを捕食していた例が知られている。

【生息環境】

八重山諸島では、おもに常緑広葉樹の自然林や回復の進んだ二次林などで見つかることが多い。宮古諸島ではより開けた二次林や灌木林、石灰岩植生のほか、耕作地（畑地）や民家の周辺で見つかることも少なくない。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地 【陸域_平地部】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，洞窟・地下浅層
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

宮古諸島の宮古島、大神島、池間島、伊良部島、下地島、来間島、多良間島、および八重山諸島の石垣島、小浜島、西表島に分布。種スジオナメラ（*Elaphe taeniura*）としては、サキシマスジオの分布を東北端として、台湾、大陸中国東部、南部、インドシナ、マレーシア、ネパールなどに分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

従来の分布域のうち、開けた場所や舗装道路に隣接した場所を中心に、分布域の縮小が認められる。

【生息地の現況】

西表島を含む本亜種の分布する多くの島で、舗装道路の設置や整備、交通量の増加による生息地の分断・縮小が進んでいる。さらに西表島以外のすべての島で幼体の潜在的な捕食者である外来性のインドクジャク、宮古諸島ではさらに成体も含めた捕食者であるイタチの侵入・増加により、生息環境が著しく悪化している。

【個体数の現況】

目撃される頻度から考えると、近年、個体数はほとんどの島で明らかに減少しているが、具体的な数字は不明。

存続を脅かす要因

主要な産地である石垣島や西表島では近年、舗装道路の整備にともない生息地周辺での交通量が増加しており、そのため路上での轢死と、それにともなう明らかな目撃頻度の低下が認められる。また宮古諸島では人為的に移入されたイタチによる捕食の影響も受け、さらに近年では西表島を除くほとんどの島々で、幼体の潜在的な捕食者である外来種のインドクジャクも増えている。

要因の区分：	（過去）	交通事故，捕食（外来種による）
	（現在）	交通事故，捕食（外来種による）

特記事項

東アジアの熱帯・亜熱帯域に広く分布し分化の著しい種であるスジオナメラ（*Elaphe taeniura*）の中にあって、その分布の最北東端を占めており、生物地理学的に高い価値を有している。またイリオモテヤマネコやカンムリワシなどとともに在来生態系の頂点を占めており、その健全さを示す指標となっている。近年行われた分子系統学的解析により別属に分ける考え方も示されているが、ここでは従来の分類に従っておく。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	サキシマスジオ	*Elaphe taeniura schmackeri*	VU
第４次 2019：	サキシマスジオ	*Elaphe taeniura schmackeri*	VU
第４次 2018：	サキシマスジオ	*Elaphe taeniura schmackeri*	VU
第４次 2017：	サキシマスジオ	*Elaphe taeniura schmackeri*	VU
第４次 2015：	サキシマスジオ	*Elaphe taeniura schmackeri*	VU
第４次：	サキシマスジオ	*Elaphe taeniura schmackeri*	VU
第３次：	サキシマスジオ	*Elaphe taeniura schmackeri*	VU
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 中村健児・上野俊一，1963．原色日本両生爬虫類図鑑．保育社，大阪．214pp.
- Ota, H., N. Kamezaki, M. Toda, and S. Okada, 2010. Osumi Islands: (iii) amhibians/reptiles, Tokara and Amami Islands: (iii) amhibians/reptiles, Okinawa and Kerama Islands: (iii) amhibians/reptiles, Daito Islands: (iii) amhibians/reptiles, Miyako Islands: (iii) amhibians/reptiles, Yaeyama and Senkaku Islands: (iii) amhibians/reptiles, Amphibians/Reptiles, references, In: S. Yasumura (ed.), Nansei Islands Biological Diversity Evaluation Project Report, pp. 6–7, 12–14, 20–21, 20, 32–33, 37–39, 196–201. WWF Japan, Tokyo.
- Schulz, H. -D., 1996. A Monograph of the Colubrid Snakes of the Genus *Elaphe* Fitzinger. Koeltz Scientific Books, Havlickuv Brod. 439pp.
- 高良鉄夫，1962．琉球列島における陸棲蛇類の研究．琉球大学農家政工学部学術報告，9: 1‐202，22pls.
- 瀧口勲，2007．宮古島産サキシマスジオの飼育下での産卵と孵化．Akamata，18: 12‐16.
- 田中 聡，2004．小浜島における両生爬虫類の現状について．小浜島総合調査報告書，pp. 21‐33．沖縄県立博物館，那覇.
- Utiger, U., N. Helfenberger, B. Schätti, C. Schmidt, M. Ruf, and V. Ziswiler, 2002. Molecular systematics and phylogeny of Old World and New World ratsnakes, *Elaphe* Auct., and related genera (Reptilia, Squamata, Colubridae). Russian Journal of Herpetology, 9: 105–124.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Elaphe taeniura schmackeri has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Elaphe taeniura schmackeri* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Cave/Shallow underground
Threat types:	Vehicle collision, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	—



執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ナミヘビ科 Colubridae　　日本固有

ダンジョヒバカリ

***Hebius vibakari danjoensis* (Toriba, 1986)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
本亜種の主要な生息地である男島にはクマネズミが侵入している。ネズミ類は潜在的にヘビ類の卵や仔ヘビなどを食害すると考えられる。現在のところ、ネズミによって本亜種が大きく圧迫されているという明らかな根拠はないが、小島の単調な生態系を考えたとき、個体数のバランスが崩れてその影響が急速に表面化する可能性もあり、今後の動向に注意が必要である。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

長崎県男女群島に固有の亜種で、現在わかっている範囲では男島と寄島に分布が限定される。頭胴長が 20 cm に満たない極めて小型のヘビで、相対的に尾が長く、尾下板数が多いことで、日本本土や中国大陸のヒバカリとは明確に区別できる。森林に住み、現時点で生息密度は低くないと思われるが、ネズミなどが増えれば大きな負の影響を受ける可能性がある。極めて小さな島嶼に分布が限定されるため、急激な個体数の減少などに注意する必要がある。

基礎情報

【形態】

頭胴長は 126‐179 mm と極めて小型のヘビで、尾は頭胴長の 40‐50%程度。体鱗はキールをもち、多くの場合頸部と胴中央部で 19 列、総排出口の付近では 17 列であるが、全て 17 列である場合もある。腹板 127～134 枚、尾下板は 88～89 対。頭部は暗褐色、胴部は淡褐色で背側に 2 本の明色斑の縦列が走り、黒褐色の斑点も散らばる。頸部にはよく目立つ明色横帯があり、もっとも後ろの上唇板から斜め後ろに延びる。

【生活史】

ミミズを餌とし、活動時以外は岩や枯れ木などの下に潜んでいるようである。一腹卵数は 1 ないし 2 個で、長径が 30 mm を超える相対的に大きな卵を産む。

【生息環境】

林内に生息するが、岩場付近での目撃例もある。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

男女群島の男島にのみ生息すると考えられていたが、近年、寄島からも発見された。

現在の生息状況

【分布域の現況】

近年の調査で寄島にも生息していることが確認されたが、寄島における詳しい生息状況などは不明。一方、少なくとも女島では本種を対象にかなり本格的な調査が行われたにも関わらず発見には至っていないことから、本種の分布は、現時点では男島と寄島の 2 島に限られると考えられる。

【生息地の現況】

無人島であり、かつ急峻な島であるため、特に大きな環境改変などはなされていないといってよい。とはいえ、男島にはクマネズミが侵入・定着しており、女島ほどではないにせよ、現地調査でも遺骸が確認されるなど、その密度は低くないことが示唆されている。現時点でクマネズミの食害により本亜種が減少している証拠はないが、今後その影響が表面化する可能性もあり、注意が必要である。

【個体数の現況】

個体数について具体的な資料はないが、男島の森林ではそれなりに個体が見つかることから、少なくとも近年大幅に減っていると考える理由はない。

存続を脅かす要因

釣り人を中心に、男島の岩礁域には人が上陸しており、外来種の混入やゴミの放置などが懸念される。すでにネズミ類が侵入していることから、仮に今後個体数が増加していくようであれば、食害による本種への悪影響が顕在化する可能性が考えられ、今後の動向を見守っていく必要がある。

要因の区分：	（過去）	分布・産地局限
	（現在）	捕食（外来種による），分布・産地局限

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ダンジョヒバカリ	*Hebius vibakari danjoensis*	DD
第４次 2019：	ダンジョヒバカリ	*Hebius vibakari danjoensis*	DD
第４次 2018：	ダンジョヒバカリ	*Hebius vibakari danjoensis*	DD
第４次 2017：	ダンジョヒバカリ	*Hebius vibakari danjoensis*	DD
第４次 2015：	ダンジョヒバカリ	*Amphiesma vibakari danjoense*	DD
第４次：	ダンジョヒバカリ	*Amphiesma vibakari danjoense*	DD
第３次：	ダンジョヒバカリ	*Amphiesma vibakari danjoense*	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 皆藤琢磨・戸田守，2021．ダンジョヒバカリ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 185-186．サンライズ出版，彦根．
- 松尾公則，1994．男女群島の爬虫類・哺乳類．長崎県生物学会誌，44: 22-28．
- Toriba, M., 1986. Preliminary study on the systematic status of a Danjo Islands snake. Jpn. J. Herpetol., 11: 124-136.

- 内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎，2002．決定版日本の両生爬虫類．平凡社，東京．335pp．
- 浦田明夫・山口鉄男，1973．男女群島の爬虫類．長崎県生物学会（編），男女群島の生物（男女群島学術調査報告書），pp. 54-58．長崎県生物学会，長崎．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hebius vibakari danjoensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hebius vibakari danjoensis* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest
Threat types:	Predation (by alien species), Limited distribution
Law designation status for conservation	—





執筆者:	戸田守（琉球大学）・江頭幸士郎（北九州市立自然史・歴史博物館）
Author:	Mamoru Toda and Koshiro Eto

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ナミヘビ科 Colubridae　　日本固有

サキシマバイカダ

***Lycodon multifasciatus* (Maki, 1931)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
特に宮古諸島における自然環境の改変のスピードは著しく、非森林にも生息する本種の潜在的な生息地は確実に縮小していると考えられる。とはいえ、個体数が減っていることを示す具体的な根拠はなく、現在進行中の潜在的な生息地の消失により、現時点で種全体が確実に危険な水準に移行するとまではいえない。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

頭胴長 500～750 mm ほどのスマートなヘビで、胴部から尾部までを暗色の横帯が覆う。八重山諸島のものでは地色は灰褐色だが、宮古諸島のものは概して黄色味を帯びる。両諸島間で体色パターンにも違いがあり、両者の分類学的関係を巡って再検討の必要性が指摘されている。産卵期は少なくとも 5 月を含み、卵は 2 ヶ月弱で孵化する。主にトカゲ類を餌とする。宮古諸島の宮古島、伊良部島、下地島と、八重山諸島の石垣島、西表島に分布する。八重山諸島では主に自然度の高い森林環境に生息するが、宮古諸島では草地でも見られる。環境改変による生息適地の減少、外来種による捕食、交通量の増加に伴う轢死事故などの影響で個体数は継続的に減っていると考えられる。

基礎情報

【形態】

頭胴長は 500～750 mm ぐらいで細身の体型をしている。体鱗列は胴の大部分で 17 列。腹板は 229～238 枚で側綾を備え、尾下板は 106～119 対ある。背面の地色は灰褐色または黄褐色で、黒色ないし黒褐色の横帯が胴部に 54～81 本、尾部に 26～45 本ある。横帯の幅は胴の前方で広く、後半にいくにしたがって細くなり、特に八重山諸島の集団でこの特徴が顕著である。宮古諸島のものは概して体色が黄色味を帯びる。中国・ベトナムから台湾にかけて分布するバイカダ *Lycodon ruhstrati* は腹板数や尾下板数、胴部と尾部の暗帯数が明らかに少ない。

【生活史】

5～6 月に 2～6 個の卵を産んだ記録がある。卵の長径は 30～50 mm、短径は 10～13 mm 程度で、卵が産み落とされてから 53～55 日後に頭胴長 192～214 mm の幼体が孵化している。爬虫類を餌としており、これまで、サキシマキノボリトカゲ、サキシマカナヘビ、オガサワラヤモリ、ミナミヤモリのほか、地上性のサキシマスベトカゲ、キシノウエトカゲの捕食が報告されている。

【生息環境】

比較的自然度の高い森林に生息し、樹上生傾向が強いと考えられていたが、宮古諸島では草地の草本の上でも観察されている。また、植生帯に隣接する人工壁の穴や、廃屋の壁の隙間などからも見つかっている。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林，草地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

宮古諸島の宮古島、伊良部島、下地島と八重山諸島の石垣島、西表島に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

情報が不足しているため、分布域の継時的な変化について確からしいことは言えない。宮古諸島では、従来、発見例が著しく限られていたが、近年、かなり情報が増えた。それによると、少なくとも宮古島と伊良部島では本種の分布が島の一部に局在するわけではないことが分かってきたが、全島的に生息しているとも言い切れない状況にある。

【生息地の現況】

道路の敷設や農地開発などをはじめとする人為的な環境改変により生息地は徐々に狭まっていると考えられる。特に、森林以外の環境で見つかる頻度の高い宮古諸島では、人為的環境改変の影響は強いと考えられる。

【個体数の現況】

個体数に関する具体的な情報はないが、生息に適する環境の消失に伴い、個体数は継続的に減っているものと思われる。

存続を脅かす要因

人為的な環境改変に伴って森林環境が徐々に減少していることと、特に宮古諸島では外来種のイタチなどによる捕食の影響が懸念される。また、人の生活形態の変化や島への入込客数の増加に伴って交通量が増え、轢死も増えていると考えられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，圃場整備，草地開発，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，河川開発，圃場整備，草地開発，交通事故，捕食（外来種による）

特記事項

八重山諸島と宮古諸島の間で体色パターンに大きな違いがあることが指摘されており、両者の関係を巡って遺伝学的・分類学的検討が必要である。また、両地域の間で生息環境も異なっている可能性があり、島嶼の環境に応じた生態学的特性の多様化という視点でも高い学術的価値がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	サキシマバイカダ	*Lycodon ruhstrati multifasciatus*	NT
第４次 2019：	サキシマバイカダ	*Lycodon ruhstrati multifasciatus*	NT
第４次 2018：	サキシマバイカダ	*Lycodon ruhstrati multifasciatus*	NT
第４次 2017：	サキシマバイカダ	*Lycodon ruhstrati multifasciatus*	NT
第４次 2015：	サキシマバイカダ	*Lycodon ruhstrati multifasciatus*	NT
第４次：	サキシマバイカダ	*Lycodon ruhstrati multifasciatus*	NT
第３次：	サキシマバイカダ	*Lycodon ruhstrati multifasciatus*	NT
第２次：	サキシマバイカダ	*Lycodon ruhstrati multifasciatus*	NT
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 角田羊平・青柳 克・徳山孟伸・才木美香・笹井隆秀・戸田 守・前之園唯史，2016．宮古島および伊良部島における稀少なヘビ 2 種，ミヤコヒバァとサキシマバイカダの観察例．Akamata，26: 25‐30.
- 日本爬虫両棲類学会（編），2021．新日本両生爬虫類図鑑，pp. 164-165．サンライズ出版，彦根.
- 饒平名里美・当山昌直・安川雄一郎・陳陽隆・高橋健・久貝勝盛，1998．宮古諸島における陸生爬虫両生類の分布について．平良市総合博物館紀要，5: 23-38.
- 岡本康汰，2022．西表島産サキシマバイカダの飼育下での産卵と孵化．Akamata，31: 23‐27.
- Ota, H., 1888. Taxonomic notes on *Lycodon ruhstrati multifasciatus* (Colubridae : Ophidia) from East Asia. J. Taiwan Mus., 41: 85–91.
- 高木亮太郎，2023．サキシマバイカダによるキシノウエトカゲの捕食例．Akamata，32: 11‐15.
- 高橋健，1996．サキシマバイカダの伊良部島からの記録．Akamata，13: 9.
- 竹内寛彦，2021．サキシマバイカダ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 165．サンライズ出版，彦根.
- 当山昌直，2005．サキシマバイカダ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）-レッドデータおきなわ-，pp. 126-127．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇.
- Vogel, G. and Branchtel, N., 2008. Contribution to the knowledge of *Lycodon ruhstrati* (Fischer, 1886) in Vietnam–taxonomy and biology of a little-known species. Salamandra, 44: 207–224.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lycodon multifasciatus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lycodon multifasciatus* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Field preparation, Grassland development, Vehicle collision, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	—



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ナミヘビ科 Colubridae

アカマダラ

***Lycodon rufozonatus rufozonatus* Cantor, 1842**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②				
基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　VU 未満	基準 E:　－
生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生息条件が悪化している。 【判断理由】 魚釣島では野生化したヤギ、対馬では外来のイノシシ及びシカが生息環境に悪影響を及ぼしていると考えられる。				
評価分科会：　爬虫類・両生類分科会				

概要

ユーラシア大陸東部の亜熱帯・温帯域や沿岸の島嶼域に分布し、国内では対馬、および尖閣諸島の魚釣島に分布する。森林、灌木林、草地、岩場といった幅広い環境に見られ、食性幅も広くトカゲや他のヘビ、カエルなどのほか、小型の哺乳類や小鳥なども食べる。対馬では森林環境の劣化や消失、また魚釣島では野生化したヤギによる植生の破壊やそれにともなう土壌の浸食がそれぞれ進んでおり、本種への影響が危惧される。

基礎情報

【形態】

全長 600～1,250 mm。体鱗はおおむね滑らかで、頸部で 19 列、胴中央で 17 列、肛門前で 15 列。腹板 190～215 枚、尾下板は左右に二分し 60～87 対。背面の地色は通常赤褐色ないし紅色で、対馬のものはとくにこの部分の赤味が鮮やかな傾向を示す。一方、地色が全く赤味を帯びない個体もまれに出現する。胴部と尾部にそれぞれ 50～80 本、15～30 本の暗帯がある。

【生活史】

詳しい生態はわかっていないが、対馬では 5 月に交尾行動が観察されている。飼育下では、6 月下旬から 7 月下旬にかけて行われ、メスが 5～20 個の卵を産んだ記録がある。

【生息環境】

森林、灌木林、草地、岩場といった幅広い環境に見られる。食性幅が広く、おもにトカゲや他のヘビ、カエルなどを捕食するほか、小型の哺乳類や小鳥なども食べる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原・細流 【陸域_平地部】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

ユーラシア大陸東部の亜熱帯・温帯域や沿岸の島嶼域に分布する。国内の分布は対馬、および尖閣諸島の魚釣島に限られる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

対馬では、頻度にばらつきはあるが島内のほぼ全域に分布する。尖閣諸島の魚釣島における生息状況は不明。

【生息地の現況】

対馬では森林の伐採や土地の造成が、また魚釣島では野生化したヤギによる植生の破壊やそれにともなう土壌の浸食がそれぞれ進んでおり、生息環境の縮小、生息密度の低下が危惧される。

【個体数の現況】

詳細は不明であるが、本種にとって好適生息環境が縮小していることから、各地の生息密度も低下していると考えられる。

存続を脅かす要因

近年、対馬では森林の伐採や土地の造成が、また魚釣島では野生化したヤギによる植生

の破壊やそれにともなう土壌の浸食がそれぞれ進んでおり、生息環境の縮小、生息密度の低下が危惧される。加えて対馬では最近、外来性のイノシシが増加しており、その捕食圧の影響も懸念される。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，遷移進行・植生変化/自然遷移，その他（外来種（ヤギ）による植生改変）
	（現在）	森林伐採，土地造成，遷移進行・植生変化/自然遷移，その他（外来種（ヤギ）による植生改変）

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アカマダラ	*Dinodon rufozonatum rufozonatum*	NT
第４次 2019：	アカマダラ	*Dinodon rufozonatum rufozonatum*	NT
第４次 2018：	アカマダラ	*Dinodon rufozonatum rufozonatum*	NT
第４次 2017：	アカマダラ	*Dinodon rufozonatum rufozonatum*	NT
第４次 2015：	アカマダラ	*Dinodon rufozonatum rufozonatum*	NT
第４次：	アカマダラ	*Dinodon rufozonatum rufozonatum*	NT
第３次：	アカマダラ	*Dinodon rufozonatum rufozonatum*	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【長崎県】準絶滅危惧種(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 池原貞雄・安部琢哉，1980．陸上動物調査（1）（主に陸上脊椎動物及び大型陸上動物）．尖閣諸島調査報告書（学術調査編），pp. 1-45．沖縄開発庁，東京．
- 松尾公則，2005．長崎県の両生・爬虫類．長崎新聞社，長崎．150 pp.
- Ota, H., N. Sakaguchi, S. Ikehara, and T. Hikida, 1993. The herpetofauna of the Senkaku Group, Ryukyu Archipelago. Pacific Science, 47: 248-255.

- 横畑泰志・横田昌嗣・太田英利，2009．尖閣諸島魚釣島の生物相と野生化ヤギ問題．広島大学平和科学研究センター（IPSHU）研究報告，42: 307-326.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lycodon rufozonatus rufozonatus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lycodon rufozonatus rufozonatus* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland/Marsh/Stream 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Other
Law designation status for conservation	—



執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　コブラ科 Elapidae　　日本固有

ハイ

***Sinomicrurus boettgeri* (Fritze, 1894)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
沖縄島における近年の目撃例はほぼ北部に限定され、本島中南部では森林地帯でさえ、本種の個体数はかなり減っているものと思われる。久米島でも発見の機会は少なくなっている。その他の島では、そもそもの発見例が限られるため数の増減の評価は難しいが、多くの個体が生息していると言える地域はない。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
沖縄島の名護以南の地域では開発により潜在的生息環境の消失が続いている。またマングースによる負の影響もあると考えられる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

沖縄諸島の固有種で、多くの島から記録がある。赤褐色と黒色のストライプ、白と黒のバントを併せ持つ美しいヘビで、山地から平地の森林域に生息する。ヒャンの徳之島集団は体色パターンが本種に酷似している。もともと発見事例が限られることから個体数は多くないと考えられるが、森林環境の減少に伴い個体数はさらに減少していると思われる。また、沖縄島と慶良間諸島の一部ではそれぞれマングースとイタチにより負の影響を強く受けているものと思われる。

基礎情報

【形態】

頭胴長はオスで 345～530 mm、メスで 315～494 mm。体鱗は滑らかで、胴のほぼ全域で 13 列に並ぶ。腹板数に地理的変異があり、オスが 165～196 枚、メスでは 170～196 枚。尾下板は 27～31 対。胴部背面の地色は淡い赤褐色ないし橙色で、黒縦条が普通 5 本走る。このうち少なくとも中央のものは 1 鱗幅ないしはそれよりも太い。また胴部には、白色で縁取られた黒い横帯が 6～14 本ある。これらの横帯は腹面で繋がらず、全体として環状になることはない。伊江島、渡名喜島、慶良間諸島の一部、久米島のものはこのような黒色横帯を欠く場合が多く、あっても痕跡的である。尾は短く、円筒状で、急に終わって先端だけが尖る。

【生活史】

爬虫類食と考えられており、餌としてブラーミニメクラヘビ、オキナワヒメトカゲ、クロイワトカゲモドキ、オキナワトカゲなどが報告されている。6 月の中旬～下旬に 5 卵程度を産む。5 月に久米島でコンバットの観察例がある。

【生息環境】

山地から平地にかけての森林に生息し、石灰岩地でもみられる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

伊平屋島から久米島に至る沖縄諸島の多くの島々に分布している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

本種の分布が知られている多くの島で開発に伴う森林の消失が進み、分布域は狭まっていると考えられる。慶良間諸島の島々などでは長年本種の目撃記録がなく、現状は不明。

【生息地の現況】

沖縄島にはマングース、慶良間諸島にはイタチといった外来種がおり、本種を圧迫していると思われる。

【個体数の現況】

具体的な資料はないが、生息域の広い範囲にわたって生息適地は減少しており、個体数は減っていると考えられる。特に、主要な分布地の一つである沖縄島では、中部から南部での目撃例が減っており、個体数の減少は間違いない。

存続を脅かす要因

開発による生息適地の消失、外来種のマングースによる捕食などが主な減少要因と考えられる。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，圃場整備，交通インフラ建設，捕食（外来種による）

特記事項

本種の体色に警告色としての機能は無いことが示唆されているが、体色パターンは徳之島の集団と酷似しており、その進化的な意味に興味がもたれる。また、一部の地域で黒色横体を欠く変異もあり、体色パターンの機能を考える上で興味深い。沖縄諸島の 25 を超える島々から記録があるが、多くの小島では最近の情報が全くなく、生息実態は不明である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ハイ	*Sinomicrurus japonicus boettgeri*	NT
第４次 2019：	ハイ	*Sinomicrurus japonicus boettgeri*	NT
第４次 2018：	ハイ	*Sinomicrurus japonicus boettgeri*	NT
第４次 2017：	ハイ	*Sinomicrurus japonicus boettgeri*	NT
第４次 2015：	ハイ	*Sinomicrurus japonicus boettgeri*	NT
第４次：	ハイ	*Sinomicrurus japonicus boettgeri*	NT
第３次：	ハイ	*Sinomicrurus japonicus boettgeri*	NT
第２次：	ハイ	*Hemibungarus japonicus boettgeri*	NT
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】準絶滅危惧，【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kaito, T., H. Ota, and M. Toda, 2017. The evolutionary history and taxonomic reevaluation of the Japanese coral snake, *Sinomicrurus japonicus* (Serpentes, Elapidae), endemic to the Ryukyu Archipelago, Japan, by use of molecular and morphological analyses. J. Zool. Syst. Evol. Res., 55(2): 156–166.

- Mochida., K., W. Y. Zhang, and M. Toda, 2015. The function of body coloration of the hai coral snake *Sinomicrurus japonicus boettgeri*. Zool. Stud. 54: 1–6.
- 太田英利・岩永節子，1996．野外でハイ（有鱗目コブラ科）のコンバットダンスを観察．Akamata，13: 13-14．
- Ota, H., A. Ito, and H. C. Lin, 1999. Systematic review of the elapid snakes allied to *Hemibungarus japonicus* (Günther, 1868) in the East Asian islands with description of a new subspecies from the central Ryukyus, Japan. J. Herpetol., 33: 675—687.
- Smart, U, M. J. Ingrasci, G. C. Sarker, H. Lalremsanga, R. W. Murphy, H. Ota, M-C. Tu, Y. Shouche, N. L. Orlov, and E. N. Smith. 2021. A comprehensive appraisal of evolutionary diversity in venomous Asian coralsnakes of the genus *Sinomicrurus* (Serpentes: Elapidae) using Bayesian coalescent inference and supervised machine learning. J. Zool. Syst. Evol. Res., 59(8): 2212–2277.
- 戸田守・千木良芳範，2017．ハイ．沖縄県環境部自然保護課（編），改定・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp．210-211．沖縄県環境部自然保護課，那覇．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Sinomicrurus boettgeri has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sinomicrurus boettgeri* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Field preparation, Transportation infrastructure construction, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	—



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　コブラ科 Elapidae　　日本固有

ヒャン

***Sinomicrurus japonicus* (Günther, 1868)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　—	基準 B:　VU 未満	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
本種が好む環境特性は十分にわかっていないが、比較的自然度の高い環境で見かけることが多いことから、奄美大島や徳之島における農地開発や林道の敷設に伴う森林伐採などの森林環境の改変は本種の生息にとってマイナスになると考えられる。もともと数が多い種でないことはほぼ明らかであり、生息環境の悪化が本種に与える影響は小さくないと考えられる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

奄美諸島の固有種。橙褐色の地に黒色のストライプと黒い環帯を併せ持つ美しいヘビで、山地から丘陵地の森林域に生息する。徳之島の集団は体色パターンがハイに酷似している。もともと発見事例が限られることから個体数は多くないと考えられるが、森林環境の減少にともない個体数はさらに減少していると思われる。奄美大島と徳之島以外の島嶼では目撃事例が少なく、生息実態はよくわかっていない。

基礎情報

【形態】

頭胴長はオスで 282～502 mm、メスで 372～445 mm。体鱗は滑らかで、胴のほぼ全域で 13 列に並ぶ。腹板数はオスで 192～211 枚、メスでは 201～217 枚。尾下板は 27～31 対。胴部背面の地色は橙褐色で小型の個体は赤みが強いことが多い。黒縦条は、原則、背中部のものが一番太いが、その幅は 1 鱗幅を超えない。体側の黒縦条はしばしば非常に細く、無い場合もある。黒縦条と直行する黒い環帯が頸部から尾の先端にかけて 13～19 本ある。環帯の幅は背側で 3 体鱗長、腹側でおよそ 2 腹板長あり、白く縁取られることはない。徳之島のものは全くパターンが異なり、沖縄諸島のハイに酷似している。

【生活史】

爬虫類食と考えられており、餌としてブラーミニメクラヘビ、バーバートカゲなどが報告されている。ハイに比べて日中に見かけることが多い。一腹卵数は 2～4 個で、6 月に産み落とされた卵から頭胴長 145 mm の幼体が 8 月初旬に孵ったという記録がある。

【生息環境】

山地および丘陵地の森林に生息する。暗い森林の林床や河川の近くなど湿潤な環境で見かけることが多いが、ガレ場などでも見かけるという情報もある。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

奄美諸島の固有種で、奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島、徳之島に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

各島で森林環境が減少していることから、それに伴って分布範囲は狭まっていると考えられる。奄美大島と徳之島以外の島々ではそもそも目撃例が非常に限られていて、生息状況はよくわかっていない。

【生息地の現況】

森林環境は減っており、それに伴って生息地面積は狭まっていると思われる。

【個体数の現況】

もともと発見頻度は高くないため、個体数の変動の評価は容易でないが、生息適地の減少により、個体数も減少しているものと考えられる。

存続を脅かす要因

農地開発や林道の敷設・整備に伴う生息適地の縮小が存続を脅かす主要因と考えられ

る。奄美大島では、マングースによる捕食の影響も懸念されていたが、2024 年に根絶宣言が出され、マングース・フリーの状態となった。本種への影響は検証されていないため、今後の動向を注視する必要がある。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，圃場整備，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，圃場整備

特記事項

徳之島の集団はハイと酷似しており、その進化的な意味に興味がもたれる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヒャン	*Sinomicrurus japonicus japonicus*	NT
第４次 2019：	ヒャン	*Sinomicrurus japonicus japonicus*	NT
第４次 2018：	ヒャン	*Sinomicrurus japonicus japonicus*	NT
第４次 2017：	ヒャン	*Sinomicrurus japonicus japonicus*	NT
第４次 2015：	ヒャン	*Sinomicrurus japonicus japonicus*	NT
第４次：	ヒャン	*Sinomicrurus japonicus japonicus*	NT
第３次：	ヒャン	*Sinomicrurus japonicus japonicus*	NT
第２次：	ヒャン	*Hemibungarus japonicus japonicus*	NT
第１次：	ヒャン	*Calliophis japonicus*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】準絶滅危惧

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kaito, T., H. Ota, and M. Toda, 2017. The evolutionary history and taxonomic reevaluation of the Japanese coral snake, *Sinomicrurus japonicus* (Serpentes, Elapidae), endemic to the Ryukyu Archipelago, Japan, by use of molecular and morphological analyses. J. Zool. Syst. Evol. Res., 55(2): 156–166.
- 日本爬虫両棲類学会（編），2021．新日本両生爬虫類図鑑．サンライズ出版，彦根．232pp.

- 太田英利・岡田滋．2003．爬虫類・両生類．鹿児島県環境生活部環境保護課（編），鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物，動物編．鹿児島県レッドデータブック，pp. 82-116．財団法人鹿児島県環境技術協会，鹿児島．
- Ota, H., A. Ito, and H. C. Lin, 1999. Systematic review of the elapid snakes allied to *Hemibungarus japonicus* (Günther, 1868) in the East Asian islands with description of a new subspecies from the central Ryukyus, Japan. J. Herpetol., 33: 675—687.
- Smart, U, M. J. Ingrasci, G. C. Sarker, H. Lalremsanga, R. W. Murphy, H. Ota, M-C. Tu, Y. Shouche, N. L. Orlov, and E. N. Smith. 2021. A comprehensive appraisal of evolutionary diversity in venomous Asian coralsnakes of the genus *Sinomicrurus* (Serpentes: Elapidae) using Bayesian coalescent inference and supervised machine learning. J. Zool. Syst. Evol. Res., 59(8): 2212–2277.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

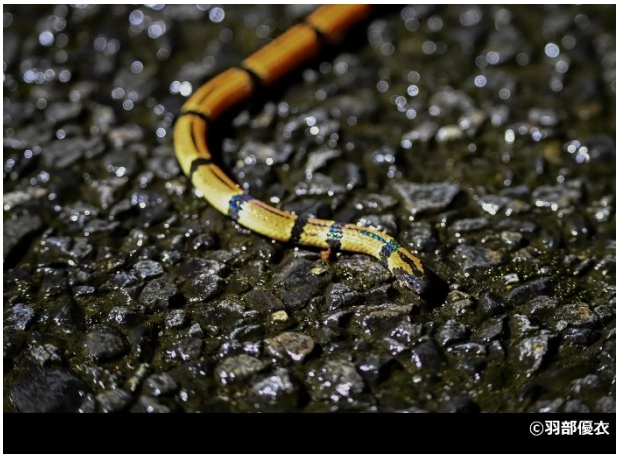
Sinomicrurus japonicus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sinomicrurus japonicus* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Field preparation
Law designation status for conservation	—





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

有鱗目 Squamata　クサリヘビ科 Viperidae　　日本固有

トカラハブ

***Protobothrops tokarensis* (Nagai, 1928)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　③

基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
③過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。
【判断理由】
宝島では、少なくとも近年までは商業目的で本種の採集が行われていた。捕獲数は不明であるが、本種の潜在的生息地面積が非常に狭く、したがって生息個体数も限られるであろうことを考えると、このような採集が大きな圧迫要因になっている可能性がある。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

トカラ諸島の宝島と小宝島の固有種。ハブに近縁であるが、明らかに小型で鱗数も少なく、模様も単調化している。両島とも森林から集落、海岸の後背植生帯まで様々な環境で見られる。数が少ないわけではないが、少なくとも宝島では近年までまとまった数の個体が商業目的で捕獲されており、分布が 2 つの小島に限定されることを考えると、既に種の存続を圧迫している可能性があり、個体数の変化に注意が必要である。

基礎情報

【形態】

頭胴長は 650-950 mm ぐらいで、大型個体はオスに偏り、1,200 mm を超えることもあるが、近縁のハブより明らかに小さい。体鱗はキールをもち、胴中央部で 31～33 列、腹板は 199～210 枚、尾下板はオスで 78～83 対、メスで 72～78 対。体の斑紋はハブよりも単調で、典型的なものでは対になった楕円の輪が左右少しずれて頸部から尾部まで続く。色彩二型があり、片方は地色が淡褐色ないし灰褐色で、他方は黒褐色。

【生活史】

トカゲや小鳥、ネズミなどを捕食し、秋には多くの個体が木に登っているのが見られ、渡り途中のキビタキなどを捕食している。7 月下旬～8 月上旬に 2～7 卵を産み、卵は 45-60 日で孵化する。

【生息環境】

二次林、灌木林、草地などに生息し、集落の近辺や海岸部にも出現する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【陸域_平地部 海岸部】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，住宅地，市街緑地
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（7）島嶼地域

【分布域】

トカラ諸島の宝島と小宝島に分布。

現在の生息状況

【分布域の現況】

宝島・小宝島でともに生息密度は低くないが、2 つの小島に固有であり、生息範囲は最大でも 8.1 km^2程である。

【生息地の現況】

近年大きな環境改変はない。

【個体数の現況】

具体的な個体数や個体の増減は不明。ただし、少なくとも近年までは商業目的でまとまった数が捕獲されており、産地が局限されることを考えれば、それによる影響は無視できない。

存続を脅かす要因

宝島では、少なくとも近年までは商業目的で継続的にまとまった数の個体が捕獲されており、産地が局限される本種への影響が懸念される。

要因の区分：	（過去）	食用・薬用採取，分布・産地局限
	（現在）	食用・薬用採取，分布・産地局限

特記事項

系統的にはハブの奄美諸島の集団にきわめて近いことが分かっており、本種は奄美のハブと隔離された後、短期間のうちに急速に小型化し、さらに体鱗列数や腹板数まで減らしたものと考えられ、学術的に貴重である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	トカラハブ	*Protobothrops tokarensis*	NT
第４次 2019：	トカラハブ	*Protobothrops tokarensis*	NT
第４次 2018：	トカラハブ	*Protobothrops tokarensis*	NT
第４次 2017：	トカラハブ	*Protobothrops tokarensis*	NT
第４次 2015：	トカラハブ	*Protobothrops tokarensis*	NT
第４次：	トカラハブ	*Protobothrops tokarensis*	NT
第３次：	トカラハブ	*Protobothrops tokarensis*	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】準絶滅危惧

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 森哲・戸田守，2021．トカラハブ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 200-201．サンライズ出版，彦根．
- 永井亀彦，1928．トカラハブとエラブウナギ．鹿児島県博物調査第三輯．鹿児島県教育調査会，鹿児島．
- 太田英利，2003．トカラハブ．鹿児島県環境生活部環境保護課（編），鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編 －鹿児島県レッドデータブック－，p. 96．財団法人鹿児島県環境技術協会，鹿児島．

- Shibata, H., T. Chijiwa, S. Hattori, K. Terada, M. Ohno, and Y. Fukumaki, 2016. The taxonomic position and the unexpected divergence of the Habu viper, *Protobothrops* among Japanese subtropical islands. Mol. Phylogenet. Evol., 101: 91–100.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Protobothrops tokarensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Protobothrops tokarensis* is listed as NT under criteria ③.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

③There is significant pressure from over-harvesting.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Residential area, Urban green area
Threat types:	Harvesting of biological resources for food and medicinal use, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

カメ目 Testudines　ウミガメ科 Cheloniidae

クロウミガメ

***Chelonia agassizii* Bocourt, 1868**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生息地においても生息密度が低く希少である。

【判断理由】

主に東太平洋に生息するが、まれに太平洋を渡って日本にもやってくると思われ、定置網等で毎年確認されている。なお、IUCN ではアオウミガメ東部太平洋個体群として VU と評価されている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

　アオウミガメに似るが背甲の後端がくびれていることや腹側がやや黒いことで別種とされるようになった。また、成体の大きさがアオウミガメより小さく 80 cm 程度しかないのも特徴である。メキシコや中米の太平洋岸とガラパゴスに産卵地があり、東太平洋に分布するが、その一部が日本にも来遊すると考えられている。アオウミガメと同じように植物食性である。

基礎情報

【形態】

本種の特徴として、背甲の後端は絞り込んでいて、背甲全体がハート形に見える。また、甲羅全体がアオウミガメに比べてドーム型をしている。また、腹面の色彩はアオウミガメは黄白色であるのに対し、本種はやや黒いのも特徴である。さらに、口腔内には棘が発達している。甲長はやや小さく、最大で 80 cm。

【生活史】

本種の産卵場はメキシコや中米の太平洋に面した海岸およびガラパゴス諸島であり、ガラパゴス諸島ではマングローブ域で集団で交尾することが知られている。孵化幼体から成体までの生活史はアオウミガメとほぼ同じであるが、一部の個体が太平洋を横断して流れついたものが日本でも時々見られると考えられる。

【生息環境】

本種の生息環境である東太平洋はマグロのはえ縄漁が活発に行われている海域である。

生息環境区分：	【海域（沿岸）_表層】海面，漂泳界（水柱環境），藻場，アマモ場 【海域（外洋）_表層】海面，漂泳界（水柱環境）
国土地域区分：	(5）沿岸域，(6）海洋域

【分布域】

本種は 20 世紀までは日本で確認されたことはなかった。しかし、2000 年以降、日本沿岸でも捕獲されるようになった。本来は東太平洋の北部に多いが、まれに太平洋を渡って日本にもやってくると思われる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

日本近海でも稀に確認されるが、分布の現況について詳細は不明。

【生息地の現況】

主な分布域である東太平洋においてはマグロの延縄漁が行われており、混獲されている可能性がある。また、日本近海でも様々な漁業が行われており、混獲が脅威となっている。

【個体数の現況】

日本に来遊する個体の増減について詳細は不明。

存続を脅かす要因

延縄漁業、定置網、海外の産卵地では砂浜海岸の消失。

要因の区分：	（過去）	海砂採取，混獲・錯誤捕獲
	（現在）	海砂採取，混獲・錯誤捕獲

特記事項

本種は形態的にアオウミガメ *Chelonia mydas* とは異なるが、mtDNA 分析ではアオウミガメの東部太平洋個体群に過ぎないということで、独立種としない考えもある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Okamoto, K. and N. Kamezaki, 2014. Morphological Variation in *Chelonia mydas* (Linnaeus, 1758) the Turtles Allied to *Chelonia mydas agassizii* Bocourt, 1868. Current Herpetology, 33(1):46-56.
- 上野真太郎・岡本 慶・石原 孝・亀崎直樹，2005．日本におけるウミガメ類の分布．爬虫両棲類学会報，2025(2): 127‐144.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Chelonia agassizii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Chelonia agassizii* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due

to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category. ①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.	
Habitat types:	【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface, Pelagic water (water column environment), Algae bed, Eelgrass bed 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface, Pelagic water (water column environment)
Threat types:	Marine sand mining, Bycatch
Law designation status for conservation	—





執筆者:	亀崎直樹（岡山理科大学）
Author:	Naoki Kamezaki

公表年月：2026 年 3 月

カメ目 Testudines　ウミガメ科 Cheloniidae

ヒメウミガメ

***Lepidochelys olivacea* (Eshscholtz, 1829)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生息地においても生息密度が低く希少である。

【判断理由】

太平洋の個体群はインドから東南アジアにかけて分布している。それらの海域の環境は年々悪化している。日本では産卵しないが、低頻度で回遊個体が見つかる。IUCN レッドリストでは VU と評価されている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

ヒメウミガメはインドから東南アジアの砂泥底の海洋に生息するウミガメであるが、まれに日本にも流れ着くことがあり、定置網などで捕獲される。他種に比べると小さく、最大でも甲長は 70 cm である。背面は灰色やオリーブ色であり、腹面は白い。背甲の肋甲板は他種より多く 6 対以上、堆甲板も 5 枚以上のことが多い。

基礎情報

【形態】

形態としてはアカウミガメに似るが、色彩がオリーブ色または灰色であることや、肋甲板は 6 対よりも多く、また対をなさないこともある。椎甲板も多く、5 枚以上のことが多い。多種のウミガメと比べ小さい。また、ウミガメの中では小さく、甲長は最大でも 70 cm 以下である。

【生活史】

本種はフィリピン近海やインドネシア近海などの比較的泥の多い海域に分布しているが、まれに日本近海で捕獲される。産卵地はインドネシアやフィリピンである。日本で見られる個体はそれらに一部が流されてきたものと推察される。インドの東部には本種が集団で産卵する砂浜がある。

【生息環境】

海洋の中でも比較的泥の多い環境を好み、そこで節足動物を食べていると推察されている。日本の近くではフィリピンに生息地があるが、詳細は不明である。

生息環境区分：	【海域（沿岸）_表層】海面，漂泳界（水柱環境），アマモ場，泥底 【海域（外洋）_表層】海面，漂泳界（水柱環境），泥底
国土地域区分：	（5）沿岸域，（6）海洋域

【分布域】

太平洋の個体群の本来の分布域はインドから東南アジアにかけての海域で、インド、フィリピン、インドネシアに産卵場がある、インド東部では日中に大量の本種が産卵する現象（アリバダ）がみられる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

太平洋の個体群は主にインドから東南アジアにかけて分布しており、日本近海でも稀に回遊個体が見られるが詳細は不明。

【生息地の現況】

近代化によって生息地の環境は悪化していると考えられている。

【個体数の現況】

日本に来遊する個体の増減について詳細は不明。

存続を脅かす要因

混獲、海外の産卵地では砂浜海岸の消失。

要因の区分：	（過去）	海砂採取，混獲・錯誤捕獲
	（現在）	海砂採取，混獲・錯誤捕獲

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Nishimura, S., K. Shirai, T. Tatsuki, and C. Sugihara. 1972. The Pacific ridley turtle in Japanese and adjacent waters. Publications of the Seto Marine Biological Laboratory, 19(6): 415-426.
- 上野真太郎・岡本 慶・石原 孝・亀崎直樹，2025．日本におけるウミガメ類の分布．爬虫両棲類学会報，2025(2): 127‐144.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lepidochelys olivacea has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lepidochelys olivacea* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data,

including habitat status, to determine its category. ①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.	
Habitat types:	【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface, Pelagic water (water column environment), Eelgrass bed, Muddy bottom 【Marine area (Open sea)_Surface water】Sea surface, Pelagic water (water column environment), Muddy bottom
Threat types:	Marine sand mining, Bycatch
Law designation status for conservation	—



執筆者:	亀崎直樹（岡山理科大学）
Author:	Naoki Kamezaki

公表年月：2026 年 3 月

カメ目 Testudines　オサガメ科 Dermochelyidae

オサガメ

***Dermochelys coriacea* (Vandelli, 1761)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生息地においても生息密度が低く希少である。

【判断理由】

本種はインド洋、太平洋、大西洋に広く分布し、低頻度ではあるが、日本近海でも回遊個体が毎年発見される。本種は世界的に減少傾向にあり、この傾向は日本近海を利用する集団においても同様である可能性が高い。IUCN レッドリストでは、種として VU、西部太平洋個体群として CR と評価されている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は日本では産卵しないが、日本近海に来遊しているようで、定置網などに入ることもある。背面は黒く、腹面は白い。他のウミガメのような大きな鱗板はなく、星形の細かい鱗で甲羅はおおわれている。また、7 本のキールが背甲にあり、多種と容易に区別できる。常に遊泳するため四肢を動かしており、水族館でも飼育は難しい。餌は海洋でクラゲやサルパを食べている。太平洋の産卵地はニューギニア島や中米にある。

基礎情報

【形態】

背面は黒く、斑点状の白斑が付く。腹面はやや白くなるが個体変異が大きい。他種に見られる大きな鱗板はなく、小さな星状の鱗板が背甲と腹甲を覆う。背甲には 7 本のキールが前後に走り特徴的であり、本種の識別は容易である。また、頭部はクラゲやサルパを泳ぎながら摂食するために、上顎がかぎ状になっている。四肢は比較的なめらかで、高速で遊泳するために長く大きい。

【生活史】

卵はウミガメの中では最大であり直径が 10 cm を超えることがある。卵は 100 個程度産卵されるが、その中には卵黄を含まない小さなものもある。卵は他の種と同じく約 60 日で孵化する。また、他種と同じように温度で性が決定する。孵化した幼体は海に向かい、その後の成長についてはよくわかっていない。ただし、その成長は早く、1 年で甲長 40-50 cm になったとする記録もある。成熟にどれ位の年数を要するか詳細は不明であるが、最短 9 年で産卵すると考えられている。その後も成長し 170 cm にもなる。回遊しながらクラゲやサルパを食べる。

【生息環境】

本種は大洋を広く回遊しており、一生を通して回遊をやめることはない。従って、産卵地を除くと、主な生息地は極域をのぞく外洋である。

生息環境区分：	【海域（沿岸）_表層】海面，漂泳界（水柱環境） 【海域（外洋）_表層 中深層以深】海面，漂泳界（水柱環境）
国土地域区分：	（5）沿岸域，（6）海洋域

【分布域】

産卵以外の生活の場は、北極や南極近くの極域をのぞく外洋である。太平洋の主な産卵場所はメキシコ・コスタリカなど中米、ニューギニア島周辺、マレー半島など。

現在の生息状況

【分布域の現況】

本種が主な生息地とする外洋でも、漁業やプラスチックごみの影響が及ぶ範囲は増大傾向にある。また、太平洋の主な産卵場所のうち、マレー半島の産卵群はほぼ絶滅した。日本の分布の現況について詳細は不明。

【生息地の現況】

外洋の環境は比較的変化が少ないと思われるが、マグロの延縄等では頻繁に混獲され、特に栄養塩の豊富なメキシコ沖での混獲は影響が懸念されている。近年、途上国の水産業への進出により漁業活動が活発化しており、本種にとっての脅威は増大している。さらに、プラスチックゴミを食べて腸閉塞を起こす個体もわずかであるが記録されており、海洋廃棄物の影響の増加も懸念される。また、沿岸域にも近づく個体が、大型の定置網にはまれ

に網に入ることがあり、水死することがある。産卵地やその周辺でも、混獲や卵の採取などの影響があると考えられている。

【個体数の現況】

マレー半島東岸のマレーシア、トレンガヌ州ではかつては数万回の産卵があったが、産卵回数が激減してほぼ絶滅状態である。理由については、混獲や卵の採取などと考えられている。中米のメキシコからコスタリカにかけての産卵地でも産卵回数の減少が伝えられている。ニューギニア島北部においても、調査は行われていないが、混獲が多く発生しており、減少傾向にあると考えられている。日本に来遊する個体の増減について詳細は不明だが、全国各地で混獲または打ちあがる個体数は減ってきている。

存続を脅かす要因

本種を減少させる要因は、マグロをとるための延縄に誤ってかかることや、巻き網などの網に入ることである。沿岸の定置網でも入網することがあり、特に最近では中層定置網という天井網のついた網が流通しており、本種の減少要因になっている。海外の産卵地では砂浜海岸の消失も存続を脅かす要因となっている。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，混獲・錯誤捕獲
	（現在）	海岸開発，混獲・錯誤捕獲

特記事項

本種の産卵地は基本的には日本にない。しかしながら、2002 年に偶発的に奄美大島で産卵した例がある。また、日本海沿岸では冬期にへい死した個体が打ちあがるが、その数も近年減っている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（伊豆諸島）】情報不足(DD)，【東京都（小笠原諸島）】情報不足(DD)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kamezaki, N., K. Oki, K. Mizuno, T. Toji, and O. Doi, 2002. First nesting record of the leatherback turtle, *Dermochelys coriacea*, in Japan. Curr. Herpetol., 21(2): 95-97.
- Nishimura, S., 1964. Consideration on the migration of the leatherback turtle in the Japanese and adjacent waters. Publ. Seto Mar. Biol. Lab., 12(2): 177-189.
- 上野真太郎・岡本 慶・石原 孝・亀崎直樹，2025．日本におけるウミガメ類の分布．爬虫両棲類学会報，2025(2): 127‐144.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Dermochelys coriacea has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Dermochelys coriacea* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Marine area (Coastal area)_Surface water】Sea surface, Pelagic water (water column environment) 【Marine area (Open sea)_Surface water, Deeper water】Sea surface, Pelagic water (water column environment)
Threat types:	Coastal development, Bycatch
Law designation status for conservation	―





執筆者:	亀崎直樹（岡山理科大学）
Author:	Naoki Kamezaki

公表年月：2026 年 3 月

カメ目 Testudines　スッポン科 Trionychidae

ニホンスッポン

***Pelodiscus japonicus* (Temminck et Schlegel, 1838)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①

基準 A:　—	基準 B:　データ不足	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生息地においても生息密度が低く希少である。

【判断理由】

生息実態が十分把握されていないが、生息密度が低いと考えられる。外来種チュウゴクスッポンが生息地に侵入しており、これとの競合と種間交雑等による影響により、本種の生息状況は各地で悪化傾向にあると推測される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

背甲が甲板でなく薄い皮膚で覆われる水生のカメ類で、ふつう背甲長は 130～180 cm。河川や湖沼などに生息し、肉食性傾向が強く小魚、水生昆虫、貝類などの動物質を食べる。本州、四国、九州と周辺島嶼に分布するが、詳しい分布状況は不明。食用利用されており養殖等の影響で人為的に分布がかく乱されている。各地の生息状況も詳しくわかっていないが、本種の潜在的生息地に定着している外来種カメ類から資源をめぐる競合等の影響を受けているほか、同属のチュウゴクスッポンとは種間交雑もするため遺伝子汚染が進行していると推測される。

基礎情報

【形態】

甲長は普通 130～180 mm だが、まれに 250 mm 近くに達する個体も見られる。引っ込めると完全に甲の中に収まる頸部と頭部は、伸ばすと甲よりも長い。本種は、チュウゴクスッポンに比べ、長さの割に幅が広い甲をもつ傾向がある。しかしチュウゴクスッポンの中にも、幅の広い甲をもつものは少なくなく、この特徴だけで両種を明確に識別するのは困難。甲の表面は湿った皮革質に覆われており、スッポン科以外のカメ類のほとんどがもつ、甲を覆う角質の鱗板は見られない。吻は細長く、尖った先端に鼻孔が開いている。

【生活史】

6～8 月に 8 個から多い時は 50 個超も産卵する。

【生息環境】

河川や湖沼などに生息し、小魚、水生昆虫、貝類などの動物質を食べる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】河川上流域，河川中流域，ため池・池沼
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(4) 河川・湿地地域

【分布域】

日本および極東ロシア，中国北東部，朝鮮半島に分布する。日本では本州、四国、九州と周辺の離島に分布。

現在の生息状況

【分布域の現況】

詳細は不明。

【生息地の現況】

詳細は不明。

【個体数の現況】

詳細は不明だが、外来種チュウゴクスッポンが本種の生息地に広範囲に侵入していると考えられ、競合と交雑により本種の純粋な個体群は縮小していると推察される。

存続を脅かす要因

台湾や大陸から持ち込まれた外来種チュゴクスッポン *Pelodiscus sinensis* も日本各地に定着しており、こうした集団との間での競争や交雑の進行が懸念されるが、実態は不明。

要因の区分：	（過去）	競争/競合（外来種による），交雑（外来種による）
	（現在）	競争/競合（外来種による），交雑（外来種による）

特記事項

日本に自然分布するスッポンは *Pelodiscus sinensis* とされてきたが、分類の見直しによって日本及び極東ロシア、中国北東部の集団は別種ニホンスッポン *Pelodiscus japonicus* とされた。本種には *Pelodiscus maackii* の学名が用いられる場合もあるが下位同物異名との指摘がある。日本には、別種である狭義 *Pelodiscus sinensis*（チュウゴクスッポン）が外来種として広く定着しており、ニホンスッポン等に悪影響を及ぼしているおそれがある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ニホンスッポン	*Pelodiscus sinensis*	DD
第４次 2019:	ニホンスッポン	*Pelodiscus sinensis*	DD
第４次 2018:	ニホンスッポン	*Pelodiscus sinensis*	DD
第４次 2017:	ニホンスッポン	*Pelodiscus sinensis*	DD
第４次 2015:	ニホンスッポン	*Pelodiscus sinensis*	DD
第４次:	ニホンスッポン	*Pelodiscus sinensis*	DD
第３次:	ニホンスッポン	*Pelodiscus sinensis japonicus*	DD
第２次:	スッポン	*Trionyx sinensis*	DD
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【宮城県】情報不足(DD),【茨城県】情報不足②現状不明種,【群馬県】情報不足(DD),【埼玉県】情報不足(DD),【千葉県】情報不足,【東京都（本土部）】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【東京都（区部）】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【東京都（北多摩）】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【東京都（南多摩）】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【東京都（西多摩）】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【富山県】情報不足(DD),【福井県】県域準絶滅危惧,【岐阜県】情報不足,【静岡県】情報不足(DD),【愛知県】情報不足(DD),【三重県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【滋賀県】要注目種,【京都府】要注目種,【兵庫県】要調査種,【奈良県】情報不足種,【和歌山県】情報不足(DD),【鳥取県】情報不足(DD),【岡山県】情報不足,【広島県】準絶滅危惧(NT),【山口県】情報不足(DD),【徳島県】準絶滅危惧,【香川県】情報不足(DD),【愛媛県】情報不足(DD),【高知県】情報不足(DD),【福岡県】情報不足(DD),【佐賀県】情報不足,【長崎県】情報不足(DD),【大分県】情報不足(DD),【宮崎県】情報不足(DD-2),【鹿児島県】分布特性上重要

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 太田英利・佐藤寛之，1997．スッポン．日本水産資源保護協会（編），日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（IV），pp. 322-330．日本水産資源保護協会，東京．
- Sato, H. and H. Ota. 1999. False biogeographical pattern derived from artificial animal transportations: A case of the Soft-shelled Turtle, *Pelodiscus sinensis*, in the Ryukyu Archipelago, Japan. pp. 317-334. In: H. Ota (ed.), Tropical Island Herpetofauna: Origin, Current Diversity, and Conservation. Elsevier Science, Amsterdam.
- 佐藤寛之・吉野哲夫・太田英利，1997．沖縄県内の島嶼におけるスッポン（*Pelodiscus sinensis*）（爬虫綱，カメ目）の起源と分布の現状について．沖縄生物学会誌，35: 19-26．
- 鈴木大，2021．ニホンスッポン．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 99-100，サンライズ出版，彦根．
- TTWG [Turtle Taxonomy Working Group: Rhodin, A. G. J., J. B. Iverson, U. Fritz, N. Gallego-García, A. Georges, H. B. Shaffer, and P. *P*. *van* Dijk]. 2025. Turtles of the World: Annotated Checklist and Atlas of Taxonomy, Synonymy, Distribution, and Conservation Status (10th Ed.). In: Rhodin, A. G. J., J. B. Iverson, P. *P*. *van* Dijk, C. B. Stanford, E. V. Goode, K. A. Buhlmann, and R. A. Mittermeier (eds.). Conservation Biology of Freshwater Turtles and Tortoises: A Compilation Project of the IUCN SSC Tortoise and Freshwater Turtle Specialist Group. Chelonian Research Monographs 10:1–575.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Pelodiscus japonicus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pelodiscus japonicus* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Upper river basin, Middle river basin, Reservoir/Pond
Threat types:	Competition (with alien species), Hybridization (with alien species)
Law designation status for conservation	―



執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　コブラ科 Elapidae

アオマダラウミヘビ

***Laticauda colubrina* (Schneider, 1799)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　④

基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。

【判断理由】

海岸の岩場の特定の洞窟内に集まり、その中の陸上部分にできた湿った割れ目などに潜り込んで産卵すると考えられる。海岸の開発等により、生息環境は悪化していると推測される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

頭動長は普通 700～1,450 mm ほど。前額板は普通 3 枚。腹板は 195～248 枚。胴部背面は青灰色、腹面は腹面の基色は白または黄白色。黒色の環帯が胴部に 20～65 個、尾に 3～8 個ある。青灰色の明帯は、黒色の暗帯よりも幅が広い。日本では、宮古諸島以南に分布する。半陸生で、海中で採餌し、陸に上がって消化、休息、産卵、水の摂取などを行う。邦産の同属 3 種の中でもっとも陸生傾向が強い。繁殖生態など不明な点が多く残されているが、海岸環境やサンゴ礁環境の悪化、沿岸漁業での混獲などにより、分布の縮小・分断、個体数の減少が懸念される。

基礎情報

【形態】

胴部の背面は青灰色で、およそ 2～3 鱗長の幅をもつ黒色の暗帯が胴に 20～65 個、尾に 3～8 個ある。暗帯と暗帯の間隔は暗帯の幅より明らかに広い。腹面の基色は白または黄白色。頭部は黒く、吻端部は黄白色、眼の上側から側頭板にかけての部分と第 3 上唇板から口裂の下側後方にかけての部分も黄白色で、この色彩が普通吻端部にまで拡がっている。頭部の腹面には、咽頭板の後部に始まって後走する 1 対の黒条があり、その間の部分は黄色味を帯びた白色。頭部の鱗板の配列などはヒロオウミヘビとよく似ているが、本種の前額板が普通 3 枚であるのに対し、ヒロオウミヘビでは 2 枚。体鱗列数も 2 種間で異なり、本種は胴の前方と中央部とで 19～25 列、後方では 19～23 列。腹板は 195～248 枚あって、腹板の幅は長さの 4 倍に及ぶ。肛板は 2 分し、尾下板は雄で 27～47 対、雌で 27～38 対。頭胴長は 700～1450 mm 程度で性的二型を示す。尾長は、雄で頭胴長の 12～14%、雌で 9～12%ぐらい。

【生活史】

卵生で、一度に 3～13 個の卵を産む。アンダマン諸島では海に開口した洞窟の奥で産卵することが観察されている。国内での産卵は未確認であるが、八重山諸島では 8 月頃多数のメスが夜間に洞窟の奥に入っていくのが観察される。海外では上陸した雌に対して複数の雄が集まる集団交尾が確認されている。孵卵期間は長く、121～192 日と半年程度かかる場合もある。孵化幼体の頭胴長は 303～337 mm 程度。

【生息環境】

半陸生で、海中で採餌し、陸に上がって消化、休息、産卵、水の摂取などを行う。上陸地として岩礁海岸を利用する。邦産の同属 3 種の中でもっとも陸生傾向が強く、切り立った壁を登る能力が高い。また、陸での脱水率が小さく、海岸線から離れた内陸でも目撃される。サンゴ礁域で採餌活動をおこない、ウツボなどの細長い体形をしたウナギ目魚類を専食する。サンゴ礁の発達した水深 20 m 以浅の海域に多いが、産卵場所の周辺では、例えば沖縄島の中城湾南西部や硫黄島周辺のように、サンゴ礁のあまり発達しない、岩礁や砂泥形質の場所でも観察される。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】海崖・岩浜・岩礁（磯） 【海域（沿岸）_潮間帯 表層】岩礁（磯），藻場，アマモ場，サンゴ礁
国土地域区分：	(5) 沿岸域，(7) 島嶼地域

【分布域】

分布域はヒロオウミヘビと大きく重複するが、本種は国内では宮古諸島の池間島を北限とし沖縄諸島以北には分布しない。奄美諸島の記録はヒロオウミヘビの誤同定の可能性が高い。

現在の生息状況

【分布域の現況】

国内では宮古諸島以南の八重山諸島に分布するが、詳細は不明。

【生息地の現況】

琉球列島浅海域のサンゴ礁の多くが、1980 年代以降には陸域の開発にともなう赤土の流出やオニヒトデの大量発生で、また 1990 年代後半以降には夏季の高温海水塊の影響で、白化や死滅、ガレ場化、藻場化が進んだ。それにともなっておそらく餌となるウツボ類などの生息密度も低下し、生息条件（餌条件）が悪化している。本種は本邦産の同属 3 種の中でもっとも陸生傾向が強く、海岸開発により生息環境は全体的に悪化していると考えられる。

【個体数の現況】

個体数や減少率の詳細は不明だが、本邦産の同属種と同様、近年、個体数が減少している可能性が高い。

存続を脅かす要因

海岸の開発にともなう産卵環境の悪化、赤土の流出や夏季の高温海水塊の出現にともなうサンゴ礁の縮小、ウツボ類の減少。エラブウミヘビの場合のような食用を目的とした捕獲はほとんどないが、混獲はしばしば起こっており、個体数の減少をもたらしていると思われる。

要因の区分：	（過去）	海岸開発
	（現在）	海岸開発

特記事項

エラブウミヘビ亜科の種は近年、ウミヘビ亜科やウミガメ類など他の海棲爬虫類と違い海水から水分をまかなう能力に乏しく、陸域からの水供給に依存する割合の高いことが明らかになり、生理生態学的に注目されている。また近年のミトコンドリア DNA を指標とした集団遺伝学的研究からは、琉球～台湾海域全体でも遺伝的多様性はそれほど高くないことが示された。しかしその一方で単一の浅い海域（たとえば石西礁湖）内でも遺伝的な不連続性が見られ、生息地への高い固執性（philopatry）が推定される。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	—	—	—
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—

第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Bacolod, P. T., 1983. Reproductive biology of two sea snakes of the genus *Laticauda* from central Philippinse. Philippine Scientist, 20: 39–56.
- Ineich, I. and P. Laboute, 2002. Sea Snakes of New Caledonia. IRD Êditions, Paris. 302pp.
- Lillywhite, H. B., L. S. Babonis, C. M. Sheehy, III, and M. C. Tu, 2008. Sea Snakes (*Laticauda* spp.) require fresh drinking water: Implication for the distribution and persistence of populations. Physiological and Biochecal Zoology, 81(6): 785–796.
- Masunaga, G., T. Kosuge, N. Asai and H. Ota, 2008. Shark predation of sea snakes (Reptilia: Elapidae) in the shallow waters around the Yaeyama Islands of the southern Ryukyus, Japan. Marine and Freshwater Biodiversity, 1(e96): 1–4.
- 太田英利・増永元，2005．琉球のウミヘビ．矢野和成（編），南の島の自然誌，pp． 159‐172．東海大学出版会，秦野．
- 田原義太慶・福山伊吹・福山亮部・堺淳，2024．日本ヘビ類大全，誠文堂新光社．272pp.
- 高橋寛，1984．琉球列島におけるウミヘビ類の頻度．The Snake，16: 71‐74．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Laticauda colubrina has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Laticauda colubrina* is listed as DD under criteria ④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Sea Cliff/Rocky beach/Reef 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone, Surface water】Reef, Algae bed, Eelgrass bed, Coral reef
Threat types:	Coastal development
Law designation status for conservation	—



執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　コブラ科 Elapidae

ヒロオウミヘビ

***Laticauda laticaudata* (Linnaeus, 1758)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　④				
基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。 【判断理由】 海岸の洞窟、岩場にできた特定の洞窟内に集まり、その中の陸上部分にできた湿った割れ目などに潜り込んで産卵する。主要な産卵場所の周辺でも海岸の開発による沿岸海流の変化などが生じており（たとえば久高島）、生息環境は悪化している。				
評価分科会：　爬虫類・両生類分科会				

概要

全長は普通 480～1,360 mm ほど。前額板 2 枚、吻端板は二分せず。腹板は大型で 225～250 枚。胴部背面は青灰色、腹面は黄色で、黒色の環帯が胴部に 30～60 本、尾部に 4～6 本ある。環帯の幅は、地色の部分の幅と同じか、やや広い。琉球列島周辺の浅海域に広く分布。海岸の湿った洞窟内に上陸し、割れ目などに潜り込んで産卵。海岸環境やサンゴ礁環境の悪化、沿岸漁業での混獲などによる分布の縮小・分断、個体数の減少が懸念される。

基礎情報

【形態】

全長は普通 480～1,360 mm だが、まれに 1,500 mm を超える。体型は比較的細長く、横断面は胴の前部では丸いが、後方では徐々に側偏し、尾は極端に縦長でオール状。前額板は 2 枚、吻端板は二分しない。体鱗は胴の大部分で 19 列、肛門前では 17 列。腹板は大型で 225～250 枚。尾下板は 30～48 対。胴の背面は青灰色、腹面は黄色で、黒色の環帯が胴部に 30～60 本、尾部に 4～6 本。環帯の幅は、環帯と環帯の間の地色の部分の幅と同じか、それよりも広い。

【生活史】

それぞれの地域でエラブウミヘビの同所的集団とほぼ同時期に上陸・産卵すると言われるが、前種に比べ繁殖に関する情報が少ない。例えば久高島では、同じ場所に上陸・産卵するエラブウミヘビに比べ産卵のピークがやや早いとの報告もある。産卵期にはエラブウミヘビと同様（しばしばエラブウミヘビとともに）、海岸の岩場にできた特定の洞窟内に集まり、その中の陸上部分にできた湿った割れ目などに潜り込んで産卵する。一腹卵数は 1～7 程度。ふ卵には 140 日前後を要する。産卵期にはメスだけでなく、しばしばオスも同じ場所に上陸し、交尾が見られる。餌のほとんどはウツボ類やアナゴ類などのウナギ目魚類だが、海外ではハゼ科の魚を食べた例も知られている。

【生息環境】

サンゴ礁の発達した水深 20 m 以浅の海域に多いが、サンゴ礁があまり発達しない砂底や泥底の場所にも見られる。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】洞窟・地下浅層，砂浜・礫浜 【海域（沿岸）_表層】岩礁（磯），藻場，アマモ場，サンゴ礁
国土地域区分：	(5) 沿岸域，(7) 島嶼地域

【分布域】

東シナ海のうち、サンゴ礁や砂底、泥底の浅海域のほぼ全域に見られる。産卵場所は口永良部島、小宝島、宝島、久高島、池間島、宮古島、石垣島、西表島など。国外での分布は、太平洋西部とインド洋東部熱帯・亜熱帯の浅海のうち、産卵に適した場所のある島嶼から数キロ以上深みで隔てられたものを除く、ほぼ全域。

現在の生息状況

【分布域の現況】

琉球列島のほぼ全体の浅海域で観察されているが、餌の関係か、エラブウミヘビに比べ海底が砂地の場所でもよく見られる。水深 30 m を超える深い場所にはほとんど見られず、また、同じ国内の亜熱帯海域でも、尖閣諸島、大東諸島、小笠原諸島などの近海では観察記録がない。本土の近海でも発見されることがあるが、これらは近隣の北琉球個体群からの一時的な分散や、黒潮に乗ったより遠方からの漂着個体で、本土での繁殖は確認されて

いない。

【生息地の現況】

琉球列島浅海域のサンゴ礁の多くが、1980 年代以降には陸域の開発にともなう赤土の流出やオニヒトデの大量発生で、また 1990 年代後半以降には夏季の高温海水塊の影響で、白化や死滅、ガレ場化、藻場化が進んだ。それにともなっておそらく餌となるウツボ類などの生息密度も低下し、生息条件（餌条件）が悪化している。また主要な産卵場所の周辺での海岸開発により沿岸海流の変化などが生じており（例えば久高島）、生息環境は全体的に悪化している。

【個体数の現況】

エラブウミヘビと同様、多くの産卵場所で、上陸する個体数の減少傾向が示唆されており、近年、個体数が減少しているのはほぼ確実であるが、具体的な個体数や減少率は不明。

存続を脅かす要因

海岸の開発にともなう産卵環境の悪化、赤土の流出や夏季の高温海水塊の出現にともなうサンゴ礁の縮小、ウツボ類の減少。エラブウミヘビの場合のような食用を目的とした捕獲はほとんどないが、混獲はしばしば起こっており、個体数の減少をもたらしていると思われる。

要因の区分：	（過去）	海岸開発
	（現在）	海岸開発

特記事項

エラブウミヘビ亜科の種は近年、ウミヘビ亜科やウミガメ類など他の海棲爬虫類と違い海水から水分をまかなう能力に乏しく、陸域からの水供給に依存する割合の高いことが明らかになり、生理生態学的に注目されている。また近年のミトコンドリア DNA を指標とした集団遺伝学的研究からは、琉球～台湾海域全体でも遺伝的多様性はそれほど高くないことが示された。しかしその一方で単一の浅い海域（たとえば石西礁湖）内でも遺伝的な不連続性が見られ、生息地への高い固執性（philopatry）が推定される。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヒロオウミヘビ	*Laticauda laticaudata*	VU
第４次 2019：	ヒロオウミヘビ	*Laticauda laticaudata*	VU
第４次 2018：	ヒロオウミヘビ	*Laticauda laticaudata*	VU
第４次 2017：	ヒロオウミヘビ	*Laticauda laticaudata*	VU
第４次 2015：	ヒロオウミヘビ	*Laticauda laticaudata*	VU
第４次：	ヒロオウミヘビ	*Laticauda laticaudata*	VU

第３次:	ヒロオウミヘビ	*Laticauda laticaudata*	VU
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】情報不足，【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Bacolod, P. T., 1983. Reproductive biology of two sea snakes of the genus *Laticauda* from central Philippinse. Philippine Scientist, 20: 39–56.
- Ineich, I. and P. Laboute, 2002. Sea Snakes of New Caledonia. IRD Êditions, Paris. 302pp.
- Lillywhite, H. B., L. S. Babonis, C. M. Sheehy, III, and M. C. Tu, 2008. Sea Snakes (*Laticauda* spp.) require fresh drinking water: Implication for the distribution and persistence of populations. Physiological and Biochecal Zoology, 81(6): 785–796.
- 増永元，2005．ヒロオウミヘビ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp．130‐131．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．
- Masunaga, G., T. Kosuge, N. Asai, and H. Ota, 2008. Shark predation of sea snakes (Reptilia: Elapidae) in the shallow waters around the Yaeyama Islands of the southern Ryukyus, Japan. Marine and Freshwater Biodiversity, 1(e96): 1–4.
- 太田英利，2003．ヒロオウミヘビ．鹿児島県環境生活部環境保護課（編），鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編 －鹿児島県レッドデータブック－，p．95．財団法人鹿児島県環境技術協会，鹿児島．
- 太田英利・増永元，2005．琉球のウミヘビ．矢野和成（編），南の島の自然誌，pp．159‐172．東海大学出版会，秦野．
- 高橋寛，1984．琉球列島におけるウミヘビ類の頻度．The Snake，16: 71‐74．
- Tandavanitij, N., S. Mitani, and M. Toda, 2013. Origin of *Laticauda laticaudata* and *Laticauda semifasciata* (Elapidae: Laticaudinae) individualts collected from the Main Islands of Japan as inferred from molecular data. Current Herpetology, 32(2): 135–141.
- Tandavanitij, N., H. Ota, Y. C. Cheng, and M. Toda, 2013. Geographic genetic structure in two laticaudine sea krait. *Laticauda laticaudata* and *Laticauda semifasciata* (Serpentes: Elapidae), in the Ryukyu-Taiwan region as inderred from mitochondrial cytochrome b sequences. Zoological Science, 30(8): 633–641.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Laticauda laticaudata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Laticauda laticaudata* is listed as DD under criteria ④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Cave/Shallow underground, Sandy beach/Pebble beach 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Reef, Algae bed, Eelgrass bed, Coral reef
Threat types:	Coastal development
Law designation status for conservation	—



執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　コブラ科 Elapidae

エラブウミヘビ

***Laticauda semifasciata* (Reinwardt, 1837)**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　④

基準 A:　データ不足	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。

【判断理由】

海岸の洞窟、岩場にできた特定の洞窟内に集まり、その中の陸上部分にできた湿った割れ目などに潜り込んで産卵する。主要な産卵場所の周辺でも海岸の開発による沿岸海流の変化などが生じており（たとえば久高島）、生息環境は悪化している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

全長は、オス 740～1,330 mm、メス 830～1,410 mm。前額板は 3 枚で、吻端板は上下に二分。腹板は大型で 195～210 枚。暗褐色の横帯が胴部に 35～45 本、尾部に 5～7 本あり、それぞれ腹面では背面に比べて狭く、成体では腹面で不明瞭。琉球列島のサンゴ礁域のほぼ全域に分布。海岸の湿った洞窟内に上陸し、割れ目などに潜り込んで産卵。海岸環境やサンゴ礁環境の悪化、食用目的での捕獲などの人為的影響による個体数の減少が懸念されている。

基礎情報

【形態】

全長はオスで 740～1,330 mm、メスでは 830～1,410 mm。体型は同属の他種に比べて太短く、横断面は胴の前部では丸いが、後方では徐々に側偏し、尾は極端に縦長でオール状。前額板は 3 枚で、吻端板は上下に二分する。体鱗は胴のほとんどで 21～23 列。腹板は大型で 195～210 枚。尾下板はオスで 37～43 対、メスでは 32～38 対。背面は青灰色、腹面はやや青みを帯びた黄色ないしクリーム色。暗褐色の横帯が胴部に 35～45 本、尾部に 5～7 本ある。この横帯は腹面では背面に比べて幅が狭まり、また成体では腹面で不明瞭となる。

【生活史】

産卵上陸の見られる時期は琉球列島内でもエリアによって若干異なり、八重山諸島の石垣島では 5～8 月、宮古諸島の宮古島では 4～7 月、沖縄諸島の久高島では 8～12 月とされ、この時期になると海岸の岩場（おもに琉球石灰岩）にできた特定の洞窟内に集まり、さらにその中の陸上部分にできた割れ目などの湿った隙間に潜り込んで産卵する。一腹卵数は 1～10 程度。飼育下での観察から、ふ化までには 137～159 日を要するとされる。産卵期にはメスだけでなくしばしばオスも同じ場所に上陸し、交尾が見られる。自然条件下での寿命は不明であるが、飼育下では少なくとも 25 年あまりの生存が知られている。餌としてはウツボ、ハゼ、ベラ、ギンポ、スズメダイ、カサゴなどさまざまな魚類が記録されているほか、甲殻類（十脚類）の捕食例もある。

【生息環境】

サンゴ礁の発達した水深 20 m 以浅の海域に多いが、産卵場所の周辺では、例えば沖縄島の中城湾南西部や硫黄島周辺のように、サンゴ礁のあまり発達しない、岩礁や砂泥形質の場所でもよく観察される。

生息環境区分：	【陸域_海岸部】洞窟・地下浅層 【海域（沿岸）_表層】岩礁（磯），サンゴ礁，砂底・礫底
国土地域区分：	（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

東シナ海のうち、サンゴ礁の発達する浅海域のほぼ全域に見られる。産卵場所は北琉球の硫黄島、口永良部島、諏訪之瀬島、中琉球の小宝島、宝島、与論島、久高島、南琉球の池間島、宮古島、石垣島、西表島、仲の神島などから知られる。国外では南シナ海東部、フィリピン周辺海域を経てスラウェシ近海、モルッカ近海に至る南北に長く東西に狭い範囲に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

活動個体は琉球列島のほぼ全体の浅海域で観察されているが、30 m を超える深い場所に

はほとんど見られず、また、同じ国内の亜熱帯海域でも、尖閣諸島、大東諸島、小笠原諸島などの近海では、ほとんどないし全く記録がない。小笠原諸島の兄島などからも、近年、継続的な目撃情報があるらしく、今後調査が必要となる。九州地方以北の本土の近海でも発見されることがあるが、これらは黒潮に運ばれた漂着個体とされ、本土周辺では繁殖地は確認されていない。

【生息地の現況】

琉球列島浅海域のサンゴ礁域の多くで、1980 年代以降には陸域の開発にともなう赤土の流出やオニヒトデの大量発生で、また 1990 年代の後半以降には、夏季の高温海水塊の影響による白化や死滅、ガレ場化、藻場化が進んだ。それにともないサンゴ礁魚類の密度や多様性も低下しており、多くの場所で餌条件が悪化していると思われる。また主要な産卵場所の周辺でも海岸の開発による沿岸海流の変化などが生じており（たとえば久高島）、生息環境は悪化している。

【個体数の現況】

多くの産卵場所で、上陸する個体数の減少傾向が示唆されており、近年、個体数が減少しているのはほぼ確実であるが、具体的な個体数や減少率は不明。

存続を脅かす要因

海岸の開発にともなう産卵環境の悪化、赤土の流出や夏季の高温海水塊の出現にともなうサンゴ礁の縮小、さらには食用を目的とした無計画な捕獲やさし網などによる混獲などが存続を脅かしていると思われる。

要因の区分：	（過去）	海岸開発，洞窟の消失や環境悪化，捕獲・狩猟/園芸採取，気候変動
	（現在）	海岸開発，洞窟の消失や環境悪化，捕獲・狩猟/園芸採取，気候変動

特記事項

エラブウミヘビ亜科の種は近年、ウミヘビ亜科やウミガメ類など他の海棲爬虫類と違い、海水から水分をまかなう能力に乏しく、陸域からの水供給に依存する割合が高いことが明らかになり、生理生態学的に注目されている。また近年のミトコンドリア DNA を指標とした集団遺伝学的研究から、遺伝的多様性が非常に高く、深い海域で隔てられたエリア（台湾（蘭嶼）、南琉球、中琉球、北琉球）間で遺伝子流動が制限されていることが明らかになった。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	エラブウミヘビ	*Laticauda semifasciata*	VU
第４次 2019：	エラブウミヘビ	*Laticauda semifasciata*	VU

第４次 2018：	エラブウミヘビ	*Laticauda semifasciata*	VU
第４次 2017：	エラブウミヘビ	*Laticauda semifasciata*	VU
第４次 2015：	エラブウミヘビ	*Laticauda semifasciata*	VU
第４次：	エラブウミヘビ	*Laticauda semifasciata*	VU
第３次：	エラブウミヘビ	*Laticauda semifasciata*	VU
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【宮崎県】情報不足(DD-2)，【鹿児島県】準絶滅危惧，【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kuwabara, R., R. Shimizu, and T. Haneda, 1990. Ecological considerations on the sea snake *Laticauda laticaudata* in the Ryukyu Islands from trends in the catch. In: R. Hirano and I. Hanyu (eds.), The second Asian fisheries forum, pp. 773–776. Asian Fisheries Society, Manila, Philippines.
- Lillywhite, H. B., L. S. Babonis, C. M. Sheehy, III and M. C. Tu, 2008. Sea Snakes (*Laticauda* spp.) require fresh drinking water: Implication for the distribution and persistence of populations. Physiological and Biochecal Zoology, 81(6): 785–796.
- 増永元，2005．エラブウミヘビ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp．129‐130．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．
- Masunaga, G., T. Kosuge, N. Asai and H. Ota, 2008. Shark predation of sea snakes (Reptilia: Elapidae) in the shallow waters around the Yaeyama Islands of the southern Ryukyus, Japan. Marine and Freshwater Biodiversity, 1(e96): 1–4.
- 太田英利，1995．エラブウミヘビ．日本水産資源保護協会（編），日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（II），pp．463‐468，479．日本水産資源保護協会，東京．
- 太田英利，2003．エラブウミヘビ．鹿児島県環境生活部環境保護課（編），鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編 －鹿児島県レッドデータブック－，p. 94．財団法人鹿児島県環境技術協会，鹿児島．
- 太田英利・増永元，2005．琉球のウミヘビ．矢野和成（編），南の島の自然誌，pp．159‐172．東海大学出版会，秦野．
- 高橋寛，1984．琉球列島におけるウミヘビ類の頻度．The Snake，16: 71‐74．

- Tandavanitij, N., H. Ota, Y. C. Cheng, and M. Toda, 2013. Geographic genetic structure in two laticaudine sea krait. *Laticauda laticaudata* and *Laticauda semifasciata* (Serpentes: Elapidae), in the Ryukyu-Taiwan region as inderred from mitochondrial cytochrome b sequences. Zoological Science, 30(8): 633–641.
- Toriba, M. and E. Nakamoto, 1987. Reproductive biology of Erabu sea snake, *Laticauda semifasciata* (Reinwardt). The Snake, 19: 101–106.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Laticauda semifasciata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Laticauda semifasciata* is listed as DD under criteria ④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】Cave/Shallow underground 【Marine area (Coastal area)_Surface water】Reef, Coral reef, Sandy bottom/Gravelly bottom
Threat types:	Coastal development, Loss of caves and environmental deterioration, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Climate change
Law designation status for conservation	—


©笹井隆秀（沖縄美ら島財団）


©山本拓海（東邦大学）

執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　ヤモリ科 Gekkonidae

大東諸島のオガサワラヤモリ

***Lepidodactylus lugubris* (Duméril et Bibron, 1836)**

カテゴリー判定結果	絶滅のおそれのある 地域個体群（LP）	②		
基準 A: ―	基準 B: EN	基準 C: ―	基準 D: ―	基準 E: ―

B1+2．出現範囲が 5000 km²未満かつ生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。

【地点数】5 地点以下

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

南大東島と北大東島に、本種と競合するホオグロヤモリが定着しており、ホオグロヤモリしか見つからない地点が拡大している。さらに別の潜在的競合種であるオンナダケヤモリとミナミヤモリもそれぞれ両島に侵入した。このうち後者はオガサワラヤモリの大東個体群と生息環境の重複が大きく、大きな影響が及ぶ可能性が高い。そのほか、琉球列島にいるクローン C と呼ばれるオガサワラヤモリのクローンタイプも見つかっており、本集団のクローン多様性が失われる可能性は増大している。

以上より、絶滅のおそれがあり、かつ次の基準に該当する地域個体群である。

②地域型としての特徴を有し、生物地理学的観点から見て重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大していると判断されるもの。

【判断理由】

太平洋諸島に広く分布するオガサワラヤモリには複数のクローンが含まれる。大東諸島の個体群は、琉球列島や小笠原の個体群を含む他のいずれの地域からも見つかっていない複数の固有クローンで構成されている。本種は 2 つの両性生殖種の交雑に起源すると考えられているが、遺伝子解析の結果、よく研究されているクローン A とは遺伝子組成が大きく異なり、異なる起源をもつことが示唆されている。大東個体群はさらに、両性生殖種が同所的にいない状況にあって多数のクローンを有する点でも非常に特異的であり、本種群の進化的成り立ちを知る上で貴重な存在である。本個体群はすでに、外来のホオグロヤモリとの競合により負の影響を被っていると考えられるが、近年になってさらにオガサワラヤモリクローン C や他のヤモリ類が相次いで大東諸島に侵入しており、さらなる個体数減少の懸念が増している。他種やクローン間の競合による特定のクローンの消滅は比較的短期間に起こってしまう場合もあることから、クローン多様性の低下が強く懸念される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

メスのみで構成される単為生殖種で、頭胴長 30～40 mm ほどの小型のヤモリ。複数のクローンが存在することが知られているが、大東諸島の集団は他の地域のものとは遺伝的に異質で、さらに 12 ものクローンを含む点で非常に特異的であり、多様性保全の観点、学術的価値の観点から非常に貴重な存在である。外来種ホオグロヤモリによる影響で生息域、生息数ともに減少しており、さらに別の複数のヤモリ類が侵入したことで、本集団が極端に縮小してしまう危険性は増大している。

基礎情報

【形態】

メスばかりからなる種で、単為生殖（クローン繁殖）を行う。成体の頭胴長は 30～40 mm ほど。胴背面は一様に細かい顆粒状鱗で覆われ、大型の結節状鱗はない。前・後肢とも第 1 指は他の指に比べて発達が悪く、末端にかぎ爪がない。指下板は末端の 3～5 枚のみが左右に二分する。体の地色は普通淡褐色ないし淡灰色で、胴背面に黒色の斑紋がある。その大きさや形はクローン間で異なる。

【生活史】

一年中、発達した卵胞を持った個体が見られることから、周年繁殖しているとされている。ただし、同緯度に位置する沖縄島のクローンで冬季に産卵を休止する可能性が指摘されており、大東諸島においてもクローン間で変異がある可能性もある。1 回に通常 2 個の粘着卵を、東屋の壁面や森林の樹木の樹皮下などさまざまな場所に産み付ける。卵は鶏卵形。孵卵期間は 25～30℃の孵卵条件で 2 ヶ月半ほど、20℃以下の条件では 3 ヶ月半～4 ヶ月弱である。孵化直後の幼体は頭胴長 17～20 mm で、およそ 10 ヶ月～1 年で 30 mm に達し、繁殖を開始する。寿命は 3～4 年が普通であるが、飼育下で最長 6 年 8 ヶ月間生存した例がある。餌は昆虫をはじめとする小型の節足動物で、胃内容物調査から、冬季にも採餌することが確認されている。また花の蜜を摂ることから、花粉の媒介に寄与している可能性もある。

【生息環境】

常緑広葉樹林の二次林、ビロウ林、海岸性低木林やそれに隣接する人工構造物など、さまざまな環境に見られるが、集落内で発見されることは比較的稀である。林縁部や海岸林でしばしば高密度で見られるが、サトウキビ畑の中を通る道沿いの街路樹などにも生息している。しばしば同じ地点で複数のクローンタイプが見つかる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】裸地，森林，耕作放棄地，岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【陸域_平地部 海岸部】森林，田地・畑地，耕作放棄地，市街緑地，海崖・岩浜・岩礁（磯）
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

北大東島と南大東島の広い範囲に生息している。沖大東島にも生息する可能性があるが、上陸調査の例がないため実態は不明。大東諸島からは多数のクローンが知られており、そのほとんどが大東諸島に固有と考えられている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布が知られている 2 島とも、島の広い範囲でみつかるが、耕作地や集落などではホオグロヤモリが優占する。

【生息地の現況】

2 島とも外来種であるホオグロヤモリが広く分布しており、その増加に伴うオガサワラヤモリへの負の影響が懸念される。海外では、ホオグロヤモリによって本種が一部の地域で駆逐された事例も知られている。そのほか最近になって、別の外来種であるオンナダケヤモリと国内外来種のミナミヤモリが確認されたほか、与論島以南の琉球列島に生息するオガサワラヤモリの 3 倍体クローン（クローン C）も記録されるなど、競争を通した固有クローンの集団の縮小・消滅を懸念する材料は増えている。

【個体数の現況】

個体数の実数は不明だが、個体数は少なくはなく、森林や海岸林では普通に見られる。ホオグロヤモリの分布拡大、土地開発などにより個体数は徐々に減っていると考えられるが、比較的高い密度で見られる場所も少なくないことから、全数としてとても少ない状況ではない。とはいえ、本種の大東諸島集団が、実際にはいくつものクローンの集合体であることを考えると、クローンのなかには極めて個体数が限られるものもあると考えるのが自然であり、クローン多様性の保全を考えたときには、同諸島への外来ヤモリ類の侵入は非常に大きな脅威である。

存続を脅かす要因

幼体の捕食者であり、成体とも餌やシェルターを巡って競合すると思われる外来種ホオグロヤモリの分布拡大により既に大きな影響を受けている。近年島外から侵入したと考えられるオガサワラヤモリの 3 倍体クローン（クローン C）と、北大東島から報告されたミナミヤモリは、在来クローンとの生息環境の重複がより大きいため、それらが島内で分布を拡大すれば、甚大な影響が出る可能性がある。

要因の区分：	（過去）	捕食（外来種による），競争/競合（外来種による）
	（現在）	ゴルフ場，捕食（外来種による），競争/競合（外来種による）

特記事項

大東諸島のオガサワラヤモリは近隣地域の集団と由来が異なると考えられ、同諸島に多数のクローンが存在することとあわせて、多様性保全の観点から非常に大切な集団といえる。一方で、その由来やクローン多様性の創出課程は十分に解明されておらず、単為生殖種の起源や進化的帰結を理解するための研究対象として、非常に高い学術的価値を持つ。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	大東諸島のオガサワラヤモリ	*Lepidodactylus lugubris*	LP
第４次 2019：	大東諸島のオガサワラヤモリ	*Lepidodactylus lugubris*	LP
第４次 2018：	大東諸島のオガサワラヤモリ	*Lepidodactylus lugubris*	LP

第４次 2017：	大東諸島のオガサワラヤモリ	*Lepidodactylus lugubris*	LP
第４次 2015：	大東諸島のオガサワラヤモリ	*Lepidodactylus lugubris*	LP
第４次：	大東諸島のオガサワラヤモリ	*Lepidodactylus lugubris*	LP
第３次：	大東諸島のオガサワラヤモリ	*Lepidodactylus lugubris*	LP
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅のおそれのある地域個体群(LP)(大東諸島)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Case, T. J., D. T. Bolger, and K. Petren, 1994. Invasions and competitive displacement among house geckos in the tropical pacific. Ecology 75: 464–477.
- Ineich, I., 1999. Spatio-temporal analysis of the unisexual-bisexual *Lepidodactylus lugubris* complex (Reptilia, Gekkonidae). p. 199–228. Tropical Island Herpetofauna: Origin, Current Diversity, and Conservation. Amsterdam.
- Murakami, Y. and Hayashi, F., 2019. Molecular discrimination and phylogeographic patterns of clones of the parthenogenetic gecko *Lepidodactylus lugubris* in the Japanese Archipelago. Popul. Ecol., 61: 315–324.
- 太田英利，2001．オガサワラヤモリ．遺伝的多様性とは，pp. 12-13．環境省自然保護局生物多様性センター，富士吉田.
- Yamashiro, S., M. Toda, and H. Ota, 2000. Clonal composition of the parthenogenetic gecko, *Lepidodactylus lugubris*, at the northernmost extremity of its range. Zool. Sci., 17: 1013-1020.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lepidodactylus lugubris has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lepidodactylus lugubris* is listed as LP under criteria B1+2ab + LP②.

B1+2. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km² AND area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy
(iii) area, extent and/or quality of habitat
(iv) number of locations or subpopulations
(v) number of mature individuals

Local population that meets any of the following criteria.
②The local population that possesses distinctive regional characteristics and is considered important from a biogeographical perspective. This population is considered to be at risk of extinction at the local level.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Bare area, Forest, Abandoned farmland, Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest, Farmland, Abandoned farmland, Urban green area, Sea Cliff/Rocky beach/Reef
Threat types:	Golf course development, Predation (by alien species), Competition (with alien species)
Law designation status for conservation	—



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有鱗目 Squamata　トカゲ科 Scincidae

三宅島、八丈島、青ヶ島のオカダトカゲ

***Plestiodon latiscutatus* Hallowell, 1861**

カテゴリー判定結果	絶滅のおそれのある 地域個体群（LP）	②		
基準 A:　―	基準 B:　CR	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B1. 出現範囲が 100 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。

【過度に分断】

いずれも小島嶼の集団であるため、それぞれが孤立個体群であるであることは自明。国内外来種のニホンイタチが三宅島、八丈島、青ヶ島に 1960 年代以降に導入され、八丈島では 1960 年代から、三宅島では 1980 年代半ばから、青ヶ島でも三宅島とほぼ同時期に減少を始めた。各島のイタチ個体群の生息密度はその後も高い状態が継続しており、三宅島・八丈島・青ヶ島のオカダトカゲ個体群は依然として低密度状態にある。オカダトカゲの生息地は各島内に散在するが、長期間安定的に目撃できる場所は少ない。また八丈島では、2000 年代に近縁種ニホントカゲの導入が確認され、オカダトカゲとの交雑が進み、純粋なオカダトカゲが生息する場所が狭められている。したがって、3 島すべてにおいて、島内各地に、本種がほとんどあるいは全く生息しない地点（調査したにも関わらず発見できなかった地点）があり、残存する生息地はそれぞれ孤立し、消失の危機にあると考えられる。

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

三宅島、八丈島、青ヶ島ともに、主たる減少要因となっているニホンイタチの密度が高いままである。特に、三宅島と青ヶ島においては、イタチは島内全域に渡ってオカダトカゲに継続的に捕食圧をかけていると考えられる。また、いずれの島でも、トカゲがイタチから身を隠す石垣などの構造物が改変され、個々の生息地の低密度化が更に進行する懸念もある。八丈島においては、ニホントカゲの導入による交雑が進行しているため、八丈島の個体群が最も危機的な状態にある。外来のニホントカゲについては、以下のような状態にある。八丈島では、北東部に見られるほぼ純系のニホントカゲ集団が、オカダトカゲ集団に比べて高密度かつ連続的に広く（500 m 程度に渡る）分布する傾向にある。また、大賀郷集落北部において純系に近いオカダトカゲ生息地点の近く（900 m ほど）にニホントカゲ型遺伝子頻度の高い交雑集団が見られるケースもある。ニホントカゲ型の遺伝子の供給が今後も継続し、純系のオカダトカゲ集団が交雑集団に置き換わってゆくと予想される。

以上より、絶滅のおそれがあり、かつ次の基準に該当する地域個体群である。

②地域型としての特徴を有し、生物地理学的観点から見て重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大していると判断されるもの。
【判断理由】
伊豆諸島では島嶼ごとにオカダトカゲの捕食者の構成が異なり、各島嶼のオカダトカゲ集団は、その捕食圧や捕食者の特性に応じて、色彩や繁殖生態が多様化している。三宅島・八丈島・青ヶ島の集団は、哺乳類・ヘビ類の捕食者を欠く環境下で他集団や近縁種に見られない独自の特徴を獲得しており、生物地理学的に重要な個体群である。また、強力な捕食者を欠く環境に適応した個体群であることが、ニホンイタチの捕食圧に対する著しい脆弱性と関連すると考えられる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

伊豆諸島と伊豆半島の固有種で、海岸から常緑広葉樹林の林床まであらゆる環境に生息する。肉食性の哺乳類やシマヘビのいない三宅島、八丈島、青ヶ島では極めて高密度で生息し、少ない一腹卵数、隔年繁殖など独特の生活史的特性を示していた。しかし、1980 年代前半にかけてニホンイタチが導入され急速に個体群が縮小し、現在、個体群消滅の危機に瀕している。八丈島では外来ニホントカゲとの交雑により遺伝的固有性が消失する恐れがある。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長は 60～96 mm 程度。胴部の体鱗は普通 28～30 列。*Plestiodon* 属の幼体は普通、頭胴部では暗色の地に明瞭な淡色の縦条が走り、また尾部は鮮やかな青色をしているが、本種ではこうした幼体色は微弱で、かつ成長にともなって急速に失われる傾向にある。地域の捕食者相に応じて形態的特徴が異なり、鳥類のみが捕食者である三宅島、八丈島、青ヶ島の集団は成体が大型になり、幼体色が微弱な傾向が強く、頭胴部の縦条が著しく不明瞭で、尾の青い部分は先端付近のみに限られる。かつての三宅島、八丈島、青ヶ島のように、高密度で生息し、少ない一腹卵数、隔年繁殖など独特の生活史的特性を示し、幼体が固有の色彩パタンを呈する個体群の安定的な生息地は八丈小島にしか残っていない。

【生活史】

活動中の個体は 3～11 月に見られ、12～2 月は越冬期と考えられる。交尾は 4 月中旬～5 月末に行われる。三宅島ではメスは隔年で 4～12 個の卵を産み、世話をする。ふ化後 3 年以上かかって性成熟し、平均寿命は 6 年弱と考えられている。縄張りはない。三宅島、八丈島、青ヶ島においては、かつては高密度で生息し、少ない一腹卵数、隔年繁殖など独特の生活史的特性を示していたが、伊豆諸島各島へのニホンイタチの導入後は、それらの特徴を持つ個体群の安定的な生息地は、イタチが分布しない無人島である八丈小島にしか残っていない。*Plestiodon* 属のトカゲでは、交尾期にオス同士が互いに頭部を咬み合う闘争を行うが、高密度で生息していた三宅島ではこのような行動はほとんど見られない。

【生息環境】

草原や海岸、火山のガレ場、疎林、常緑広葉樹の自然林・二次林、農山村内に生息する。三宅島ではイタチの導入以前には島内のあらゆる環境下で見られたが、導入後その大半で姿を消してしまい、現在では民家周辺の石垣を中心に生存しているに過ぎない。八丈島では、集落付近の石垣や茂み、畑地周辺などに生存している。一般にクモ類やミミズ類をはじめ、多くの地表性・半地中性無脊椎動物を食べる。三宅島では陸生甲殻類の端脚類を多く食べ、餌が不足する夏期にはアリ類も食べる。餌となる無脊椎動物に富み、同時に捕食者を回避するための隠れ場所があることが生息のための必要条件と考えられる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】裸地，森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【陸域_平地部 海岸部】裸地，森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，住宅地，市街緑地，砂地・礫地
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（5）沿岸域，（7）島嶼地域

【分布域】

種としては伊豆半島とその周辺、初島、伊豆諸島のうち大島から青ヶ島までのほとんどの島に分布する。島嶼集団ごとに遺伝的組成の違いが見られ、八丈島と青ヶ島の集団は八丈小島の集団とともに他の集団から分化している一方で互いにきわめて近縁で、三宅島の

集団は他のいずれの集団とも異なる独自の遺伝的組成を持つ。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現在の分布域は、三宅島では集落周辺に散在し、それらを合わせても数十 ha 程度に限られる。八丈島では、島の西岸沿いの大賀郷永郷から八重根付近、横間ヶ浦、樫立、中之郷集落にかけて生息地が散在し、合わせて数十 ha 程度。青ヶ島については不明だが、集落内や外輪山沿いの各地に生息地が散在するようだ。かつては島全体に分布していたが、ニホンイタチの導入後は住宅地やその周辺の農地の石垣などをおもな生息場所として生き残っている。三宅島ではニホンイタチ導入後の十年間で生息個体数が 18%以下に縮小したと推定され、他の 2 島でも急速に縮小したのは確かだが具体的な値は不明。八丈島では、1960 年代初頭に高密度で生息していた記録のある末吉地区で現在全く見られなくなっている。また、八丈富士の東側山麓に近縁種かつ外来ニホントカゲが高密度で生息し、島の北半部各地でオカダトカゲとの交雑集団を形成している。オカダトカゲが生息する大賀郷北部でも交雑個体が散見され、純系のオカダトカゲのみからなる集団は八重根・向里付近から中之郷にかけての地域に限られていると考えられる。

【生息地の現況】

ニホンイタチによる捕食圧のため、草原、ガレ場、森林など本来の生息場所は生存不能となっている。各島嶼個体群の命脈の最後の砦ともいえる民家や農地周辺の石垣も、1980 年代半ばより進められている道路の拡張工事にともない撤去、あるいは隠れ場所として利用できない隙間のないコンクリート製のものに置き換えられてきており、生息環境は悪化している。

【個体数の現況】

三宅島では、ニホンイタチ導入以前の 1970 年代後半～1980 年代初めの調査により、ふ化幼体を除いた生息個体数は 400,000 頭/km²との推定値が得られている。これがニホンイタチの導入で急速に減少し、1985 年には 50,000～100,000 個体程度、現在では多く見積っても数百個体程度と推定されている。八丈島、青ヶ島においても、これとよく似た減少率を示すと思われる。いずれの島でもオカダトカゲの減少が目立ち始めるのはイタチを導入してから 5 年以内で、三宅島では早くも 3 年で 1/100 程度の著しい減少が見られた。現在でも、局所的にオカダトカゲが増え、幼体が目撃されるようになった場所があったとしてもそれは一時的傾向に過ぎず、本種が長期間安定的に目撃される場所が存在するのは難しい状況にある。

存続を脅かす要因

人為的に導入されたニホンイタチによる捕食の影響が、八丈島では 1960 年代初頭から、三宅島では 1980 年代から、青ヶ島では 1980 年代から現在にいたるまで継続している。イタチは、オカダトカゲが低密度になったあとも、主たる餌を節足動物等にシフトして高密

度状態を保っている。最近の調査では、イタチの生息密度は在来個体群を形成している伊豆大島よりも外来個体群を形成している三宅島の方が高密度になっていることが明らかにされており、このことからも各島のオカダトカゲ個体群には高い捕食圧がかかり続けていると考えられる。付随的な要因として、1980 年代半ば以降に進められている、道路工事にともなう石垣の撤去・改修があげられる。八丈島では、国内外来種のニホントカゲとの浸透性交雑が進行し、イタチの捕食圧による減少と相まって、遺伝的独自性の消失の危機にある。		
要因の区分：	（過去）	捕食（外来種による）
	（現在）	捕食（外来種による），交雑（外来種による）

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	三宅島、八丈島、青ヶ島のオカダトカゲ	*Plestiodon latiscutatus*	LP
第４次 2019:	三宅島、八丈島、青ヶ島のオカダトカゲ	*Plestiodon latiscutatus*	LP
第４次 2018:	三宅島、八丈島、青ヶ島のオカダトカゲ	*Plestiodon latiscutatus*	LP
第４次 2017:	三宅島、八丈島、青ヶ島のオカダトカゲ	*Plestiodon latiscutatus*	LP
第４次 2015:	三宅島、八丈島、青ヶ島のオカダトカゲ	*Plestiodon latiscutatus*	LP
第４次:	三宅島、八丈島、青ヶ島のオカダトカゲ	*Plestiodon latiscutatus*	LP
第３次:	三宅島、八丈島、青ヶ島のオカダトカゲ	*Plestiodon latiscutatus*	LP
第２次:	三宅島, 八丈島, 青ヶ島のオカダトカゲ	*Eumeces okadae*	LP
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【東京都（伊豆諸島）】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Brandley, M. C., T. Kuriyama, and M. Hasegawa, 2014. Snake and bird predation drive the repeated convergent evolution of correlated life history traits and phenotype in the Izu Island scincid lizard (*Plestiodon latiscutatus*). PLoS ONE, 9: e92233.
- Hasegawa, M., 1984. Biennial reproduction in the lizard *Eumeces okadae* on Miyake-jima, Japan. Herpetologica, 40: 194-199.
- Hasegawa, M., 1985. Effect of brooding on egg mortality in the lizard *Eumeces okadae* on Miyake-jima, Izu Islands, Japan. Copeia, 1985: 497-500.
- Hasegawa, M., 1990a. The thrush *Turdus celaenops*, as an avian predator of juvenile *Eumeces okadae* on Miyake-jima, Izu Islands. Japanese Journal of Herpetology, 33: 65-69.
- Hasegawa, M., 1990b. Demography of an island population of the lizard, *Eumeces okadae*, on Miyake-jima, Izu Islands. Researches on Population Ecology, 32: 119-133.
- Hasegawa, M., 1994a. Insular radiation in life history of the lizard *Eumeces okadae* in the Izu Islands, Japan. Copeia, 1994 (3): 732-747.
- Hasegawa, M., 1994b. Demography, social structure and sexual dimorphism of the lizard *Eumeces okadae*. In: P. J. Jarman and A. Rossiter. (eds.), Animal Societies, Individuals, Interactions and Organization, pp.248-263. Kyoto University Press, Kyoto.
- Hasegawa, M., 1999. Impacts of introduced weasel on the insular food web. In: H. Ota (ed.), Tropical Island Herpetofauna: Origin, Current Diversity, and Conservation, p.129-154. Elsevier, Amsterdam.
- Hasegawa, M., 2003a. Ecological diversification of Insular Terrestrial reptiles: A review of the Studies on the Lizard and Snakes of the Izu Islands. Global Environmental Research, 7: 59–67.
- Hasegawa M., 2003b. Intraspecific Variation in sexual dimorphism and mating system in relation to interisland differences in predation pressure, p.172-189. In: Fox,S.F., J.K.McCoy and T.A.Baird (eds), Lizard Social Behavior, Johns Hopkins University Press, Kyoto.
- Hasegawa, M. and S. Nishikata, 1991. Predation by an introduced weasel *Mustela itatsi* upon *Eumeces okadae* on Miyake-jima, Izu Islands. Natural History Research, 1(2): 53-57.
- Hasegawa, M. and Y. Taniguchi, 1993. Visual prey discrimination of queen and worker ants by a generalist lizard. Journal of Ethology, 11:55-62.
- Hasegawa, M. and Y. Taniguchi, 1996. Behavioral discrimination of prey with various defense mechanisms by the lizard *Eumeces okadae*. Journal of Ethology, 14: 89-97.
- Kubo, K., T. Tachikawa, M. Hirose, M. Hasegawa, and E. Inoue, 2025. Habitat use and abundance of an introduced population of the Japanese weasel (*Mustela itatsi*): Comparison with the native population. PLoS ONE, 20(5): e0324 200.
- 栗山武夫，2012．オカダトカゲの色彩パタンの進化―捕食者に対応した地理的変異―．日本生態学会誌（特集 1 種間相互作用の島嶼生物地理）, 62: 329‐338.
- Kuriyama T., K. Miyaji, M. Sugimoto, and M. Hasegawa. 2006. How do lizards produce their conspicuous colorμm Ultrastructure of the dermal chromatophores in a lizard with conspicuous body and tail coloration (Scincidae: *Plestiodon latiscutatus*). Zoological Science, (23): 793-799.

- Kuriyama, T., G. Morimoto, K. Miyaji, and M. Hasegawa, 2016. Cellular basis of anti-predator adaptation in a lizard with autotomizable blue tail against specific predators with different colour vision. Journal of Zoology, 300: 89–98.
- 栗山武夫・岡本卓・長谷川雅美・疋田努・五箇公一，2009．伊豆諸島八丈島へのニホントカゲの侵入．爬虫両棲類学会報, 2009: 124‐127.
- Moyer, J.T., H. Higuchi, K. Matsuda, and M. Hasegawa. 1985. Threat to unique terrestrial and marine environments and biota in a Japanese National park. Environmental Conservation, 12(4): 293-301.
- Okamoto, T., T. Kuriyama, and K. Goka, 2013. An impact assessment of the alien lizard *Plestiodon japonicus* (Scincidae, Reptilia) on a threatened island population of the native lizard *P. latiscutatus* at an early phase of the biological invasion. Biological Invasions, 15: 2029–2037.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Plestiodon latiscutatus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Plestiodon latiscutatus* is listed as LP under criteria B1ab + LP②.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 100 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Local population that meets any of the following criteria.

②The local population that possesses distinctive regional characteristics and is considered important from a biogeographical perspective. This population is considered to be at risk of extinction at the local level.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Bare area, Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Bare area, Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Residential area, Urban green area, Sandy area/Gravelly area
Threat types:	Predation (by alien species), Hybridization (with alien species)
Law designation status for conservation	—





執筆者:	岡本卓（京都大学）・栗山武夫（兵庫県立大学）・長谷川雅美（東邦大学）
Author:	Taku Okamoto, Takeo Kuriyama, and Masami Hasegawa

公表年月：2026 年 3 月

第５次レッドデータブック（両生類）各種の解説

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

アマクササンショウウオ

***Hynobius amakusaensis* Nishikawa et Matsui, 2014**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B2ab

基準 A:　―	基準 B:　CR	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。
【過度に分断】
生息地は河川、平地によって分断されており、それぞれの生息地面積は極めて狭いため、残存する小集団の絶滅リスクは高い状態にある。
【地点数】1 地点
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
地元の方への聞きこみから、過去生息していたと考えられる地域で調査したが発見に至っていない。生息する可能性のある山域で、再生可能エネルギーのための土地開発が行われている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

　国内の小型サンショウウオの中でももっとも分布面積の狭い種であり、生息地の破壊が絶滅に直結する可能性のある種である。

基礎情報

【形態】

体は中型、頑丈で、全長は 107～142 mm。尾は頭胴長よりも短い。鋤骨歯列はU字型に近いV字型で、体側には通常 13 本の肋条をもつ。前後肢を体側に沿って折り返すと、1.5～3.5 肋鰓分の隙間を生じる。後肢は 5 趾性。尾は後半部で側偏し、特に繁殖期のオスは末端の丈が高い。背面は一様な石板色～茶褐色の地色に、白い小点をもつ。腹面は背面より淡色。中型であることと、白い小点をもつこと、尾の側偏が中程度であることで同じく九州に分布するソボサンショウウオ、オオスミサンショウウオ、ブチサンショウウオ、チクシブチサンショウウオ、コガタブチサンショウウオと区別される。幼生はソボサンショウウオやベッコウサンショウウオの幼生に似ているがより小型である。ハコネサンショウウオの幼生と違い、四肢後面に皮膚のひだをもたず、背鰭は胴の中央から始まり、四肢端の黒色の爪も強くは発達しない。

【生活史】

繁殖は年 1 回、4 月上旬～下旬である。繁殖場所は山地にある川幅の中程度の渓流で、とくに源流近くが利用され、水中にある大きな岩石・倒木の下など、日光の差し込まない場所に産卵がなされる。1 メスの産卵数は 13～43 個程度。幼生は 5 月頃から水中で成長・発育し、一部は年内、多くは越冬して翌年の 9 月頃までに変態する。幼生は水生昆虫、ミミズ類、ヨコエビ類、落下するクモ類、陸生昆虫類を食べ、共食いもする。変態後は渓流近くや斜面で、積み重なった岩石の間、林床の落葉・倒木の下などで生活し、クモ類、昆虫類、ミミズ類を餌とする。土中や石下で越冬するが、12 月にも活動することがある。繁殖個体の平均年齢、成熟時期、野外での寿命は不明である。

【生息環境】

夏緑広葉樹林、照葉樹林に生息する。既知の分布地点は標高 400～500 m の間にある。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（7）島嶼地域

【分布域】

天草諸島の一部。天草にはカスミサンショウウオも生息するが、本種より低い標高に分布し同地的に見られることはない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

生息地は河川、平地によって分断されている。分布域縮小率は資料が少なく推定不能。

【生息地の現況】

天草諸島では生息域の各所で近年イノシシが増加しており捕食されている。また再生エネルギー開発などの影響により生息地が減少している可能性がある。

【個体数の現況】

個体数は不明だが減少している可能性が高い。

存続を脅かす要因

山岳道路、砂防堰堤の建設と、それにともなう土砂の渓流への流入のような生息環境の消失が種の存続を脅かしている。増えすぎたイノシシによる捕食や、愛好者等による産卵環境の破壊や乱獲のおそれ、再生エネルギー開発による生息環境の破壊のおそれがある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，違法採集，その他動物食害
	（現在）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，違法採集，その他動物食害

特記事項

非常に狭い分布面積であり、さらなる生息地調査が必要である。天草の各地で計画されているダムや風力発電の建設により、未発見の個体群への影響が懸念される。熊本県希少野生動植物種に指定されている（オオダイガハラサンショウウオとして）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アマクササンショウウオ	*Hynobius amakusaensis*	CR
第４次 2019：	アマクササンショウウオ	*Hynobius amakusaensis*	CR
第４次 2018：	アマクササンショウウオ	*Hynobius amakusaensis*	CR
第４次 2017：	アマクササンショウウオ	*Hynobius amakusaensis*	CR
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【熊本県】情報不足(DD)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- 松井正文，2000．本州・九州地域のオオダイガハラサンショウウオ，環境庁自然保護局野生生物課（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－(爬虫類・両生類)．pp. 110‐111，財団法人自然環境研究センター，東京．
- 松井正文・西川完途，2021．アマクササンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 19．サンライズ出版，彦根．
- Nishikawa, K. and M. Matsui, 2014. Three new species of the salamander genus *Hynobius* (Amphibia, Urodela, Hynobiidae) from Kyushu, Japan. Zootaxa, 3852 (2): 203–226.
- Nishikawa, K., M. Matsui, S. Tanabe, and M. Sakamoto, 2003. Occurrence of a lotic breeding *Hynobius* salamander (Amphibia, Urodela) on Kamishima of the Amakusa Islands, Japan. Current Herpetology, 22(1): 1–8.
- 坂本真理子・阪田和弘・西川完途・松井正文，2014．天草産の流水産卵性サンショウウオの繁殖に関する観察．九州両生爬虫類研究会誌，5: 52‐55．
- 吉川夏彦・坂本真理子，2016．種の保存法指定種の現実-有尾両生類の事例-．日本爬虫両棲類学会報，2016(2): 153-163．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius amakusaensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius amakusaensis* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Illegal harvesting of biological resources, Other animal feeding damage
Law designation status for	Nationally rare species of wild fauna and flora.

conservation	



執筆者:	西川完途（京都大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Kanto Nishikawa and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ゲイヨサンショウウオ

***Hynobius geiyoensis* Sugawara, Naito, Iwata et Nagano, 2022**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B2ab

基準 A:　―	基準 B:　CR	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。
【過度に分断】
生息地が二地域に分かれるが、各生息地点は道路等で遮断されている。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
周辺の多くがミカン畑に利用されていて、湿地環境の減少や乾燥化、農薬の影響が懸念される。生息環境は悪化傾向にある。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は広島県大崎上島および愛媛県高縄半島固有の止水産卵型の小型サンショウウオである。2019 年にカスミサンショウウオが分けられた際、新種アキサンショウウオとされたが、2022 年に東広島市、大崎上島、愛媛県のものはゲイヨサンショウウオとして新種記載された。その後の研究で、原記載にある東広島のものは誤りとされた。分布域は 2 地域の極めて狭い範囲に限られている。

基礎情報

【形態】

体はやや大型（オス全長 93～126 mm、平均 108 mm）。四肢は比較的短く、普通は尾の上下縁には黄色の条線がない。アキサンショウウオとヒロシマサンショウウオより、頭胴長や尾が長く、第 5 趾は発達する。

【生活史】

広島県南部の大崎上島と四国北西部（愛媛県今治市の高縄半島の丘陵地）のみから知られる。成体や幼体は丘陵地の林床や草地で生活し、2～3 月に湿地や水田の溝などに産卵する。孵化した幼生は、止水中で生活し、初夏までに変態、上陸する。

【生息環境】

丘陵地と隣接する湿地環境。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流，ため池・池沼 【陸域_平地部】森林，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，農業用水路，ため池・池沼
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

原記載では広島県東広島市にも分布するとされていたが、その後の調査で誤りであることが確認された。広島県南部の大崎上島と四国北西部（愛媛県今治市の高縄半島の丘陵地）のみから知られる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

広島県南部の大崎上島と四国北西部（愛媛県今治市の高縄半島の丘陵地）の限られた地域のみから知られる。

【生息地の現況】

生息地の周辺にはミカン畑が多いため、湿地環境が減少、林床の乾燥化、農薬の影響が懸念される。

【個体数の現況】

愛媛県においては、条例で保護され、保護区も設定されていて個体数は安定している。広島県での 1 地点あたりの確認卵嚢数は 10 対程度。

存続を脅かす要因

周辺地域は、ミカンなど果樹栽培が盛んな地域であることから、湿地環境の乾燥化や農薬の使用等が生存を脅かしている。

要因の区分：	（過去）	湿地開発，圃場整備，土地造成，農薬汚染/化学物質汚染，遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害，分布・産地局限
	（現在）	湿地開発，圃場整備，土地造成，農薬汚染/化学物質汚染，自然災害，分布・産地局限

特記事項

他の小型サンショウウオ類同様、分布域が限られているだけでなく、生物地理や地史を考えていく上で重要な種といえる。愛媛県特定希少野生動植物に指定されている。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義カスミサンショウウオ・広義アキサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【愛媛県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- Matsui, M., Okawa, H., Nishikawa, K., Aoki, G., Eto, K., Yoshikawa, N., Tanabe, S., Misawa, Y., and Tominaga, A. 2020. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. Current herpetology, 38(1): 32-90.

- Sugawara, H., J. I. Naito, T. Iwata, and M. Nagano, 2022. Molecular phylogenetic and morphological problems of the Aki Salamander *Hynobius akiensis*: Description of two new species from Chugoku, Japan. Bulletin of the Kanagawa Prefectural Museum, Natural Science, 51: 35–46.
- Tomimori, Y., M. Matsui, H. Okawa, K. Nishikawa, S. Tanabe, and R. Kamasaka, 2023. Reassessment of species delimitation using nuclear markers in three lentic-breeding salamanders from the Chugoku District of Japan (Amphibia: Caudata: Hynobiidae). Zootaxa, 5293(1), 145-160.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius geiyoensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius geiyoensis* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Agricultural ditch, Reservoir/Pond
Threat types:	Wetland development, Field preparation, Land development, Pesticide/Toxic chemical pollution, Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.



執筆者:	田辺真吾（日本爬虫両棲類学会）・松井正文（京都大学）
Author:	Shingo Tanabe and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ミカワサンショウウオ

***Hynobius mikawaensis* Matsui, Misawa, Nishikawa et Shimada, 2017**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B2ab

基準 A:　―	基準 B:　CR	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。

【過度に分断】

生息地は大きく 2 地域に分断されており、その間の地域には集落や大規模な造成地等が存在するため、2 地域間の交流は困難な状態にある。両地点あわせてこれまでに 25 の産卵地が見つかっているが、それらはそれぞれ別の谷に位置しており、各産卵地の間を日常的に個体が行き来する状況にはなく、下位個体群として認識される。生息地の沢はほぼ同じ水系に属しているため、人の手が入らない状態であれば沢間の個体の往来は比較的容易であったと推測されるが、現在では多くの沢において下流部は人家や耕作地、道路等の開発によって本種の生息や移動に適さない状態となっており、尾根筋を超えた移動も頻繁には起こらないと推測されることから、下位個体群間の行き来が困難な状況が現出している可能性が高い。卵嚢対数から推測される各下位個体群の規模は、大きくとも 100 個体程度と推測され、数個体分の痕跡しか確認できないようなごく小規模なものも存在する。以上から、本種では大部分の個体が比較的隔離された小さな下位個体群に見られると言ってよい状況にある。

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

生息地の多くは人工林にあり、その多くが私有地でもあるため、潜在的に伐採や造成の可能性を有している。生息地域内には農園や伐採地、保養地などが存在しており、これまでもそうした土地の造成に伴って多くの生息地点が消失してきた可能性が高い。個別の対策を取らなければ今後もそのような土地利用に伴う生息地の消失が続くことが懸念される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種はこれまでに愛知県東部の特定の地域を流れる沢沿いの湿地からしか見つかっておらず、推定される生息範囲はごく小さい。繁殖集団の中には 100 個体程度の生息が推定される比較的大規模なものもあるが、多くはごく小規模な集団として存在する。人工林に点在する各産卵地は、人為的な環境改変に伴って分断されており、各集団が存続するための基盤は脆弱であると言わざるを得ない。また、飼育、販売目的の採集圧や、外来種アラ

イグマによる捕食、シカの食害による繁殖地周辺の林床植生（ササ）の減少など、現在は表面化していないものの、今後生じ得る懸念もいくつか考えられ、そうした偶発的な環境変化を引き金として種の絶滅に陥ってしまう危険性は高いと考えられる。

基礎情報

【形態】

止水性小型サンショウウオ類の 1 種。成体の頭胴長は雌雄とも 50～61 mm 程度。背面は一様なオリーブ色だが、頭部前半部と四肢には銀白色の細点を有する。腹面は背面より明るく、オスで喉部分が白色の婚姻色に覆われる以外は一様な色彩。卵嚢は紐形かつコイル状で、孵化直前の長さは 217～244 mm、幅 11.5～12 mm 程度。卵径は 3.1～4.8 mm 程度。一腹卵数は 19～56 個で 1 対 2 個の卵嚢に包まれる。分子遺伝学的には同じ止水性のクロサンショウウオ及びホクリクサンショウウオと近縁であり、特に後者とは形態的特徴も似るが、外部形態の比率等の違いがあり、別種レベルの分化が認められる。

【生活史】

繁殖期は 3 月から 5 月に及ぶが、最盛期は 4 月中旬から下旬。産卵場所は小渓流の源流部やそれに隣接する泥湿地で、泥の中に沈んだ木の枝や葉に産卵されることが多いが、ある程度流れのあるオープンスペースに産卵することもある。繁殖期の水温は 6.3℃～10.7℃。春先に越冬幼生が確認されることがあるが、多くの個体は当年で変態すると見られる。

【生息環境】

丘陵地（標高 500～700 m 程度）の沢の源流部に位置する泥質の湿地を産卵場所とする。既知の産卵場所の周囲はいずれも人工林（スギ植林地及び針広混交林）または竹林に囲まれ、林床はササに覆われることが多く、繁殖期以外の時期にはそうした林床で暮らしていると考えられる。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】森林，湿地・湿原・細流
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

愛知県東部（新城市、岡崎市、豊田市）の標高 500～700 m 程度の丘陵地に局在する。本種はミトコンドリア DNA の塩基配列に基づいた解析では北陸地方に生息するホクリクサンショウウオ等との類縁関係が指摘されていることから、かつては中部地方に広く生息していた祖先種が分布を縮小し、愛知県東部に遺存的に残存した集団であると考えられている（Matsui et al., 2017）。ただし、本欄で対象としている明治時代以降で明確に絶滅した集団は確認されていない。2017 年に新種記載されてから分布域に大きな変化はない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

愛知県内においては、現在知られている産地以外にも本種の生息が疑われる過去の記録があるが、いずれも標本や写真記録を欠くため正確な種同定ができない。

【生息地の現況】

生息地の多くは人工林を流れる渓流の源流部湿地にあり、林床にはササが密生してい

る。生息地周辺では局地的な人工林の伐採がしばしばみられ、部分的な個体群の消滅を招く可能性がある。また、過去には道路の建設や土地の造成で多くの集団が失われてきた可能性が高い。

【個体数の現況】

2023 年現在で 25 地点の産卵地が知られているが、そのうち 9 地点は、1～数対程度の卵嚢が発見されたのみで、ごく小規模なものである。一方、40 対以上の卵嚢が確認できる比較的規模の大きい産地は 2 地点あり、その他は 5～20 対程度の卵嚢が確認できる中程度の産卵地である。各地点で確認された卵嚢数の最大値を単純に合計すると 250 対程度となる。

存続を脅かす要因

本種の生息地の多くは人工林に点在しており、伐採される可能性を潜在的にはらんだ状態にある。現在生息地周辺では大規模な皆伐は行われていないが、局地的な伐採はしばしばみられ、そのことが部分的な個体群の消滅を招く可能性がある。また、過去には道路の建設や土地の造成で多くの集団が失われてきた可能性が高く、今後もそうした環境改変の影響で集団が縮小することも考えられる。

産卵地の 1 地点においては外来種であるアライグマの出現が確認されており、捕食圧による密度の低下も懸念される。また、本種の産卵地の多くでは、その周囲の林床にササの密生が見られるが、近隣の地域ではシカの増殖によって林床のササの衰退が問題となっている。もしこの地域でもシカの個体群密度が上昇して林床のササ帯が消滅した場合、本種の存続に大きな影響が現れる可能性がある。

現状では本種の違法採集や販売の事例は確認されていないが、小型サンショウウオ類は飼育愛好家も多く、他種では販売目的と思われる大規模な採集の事例もあるため、本種でも十分注意する必要がある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，湿地開発，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，湿地開発，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，分布・産地局限

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ミカワサンショウウオ	*Hynobius mikawaensis*	CR

第４次 2019：	ミカワサンショウウオ	*Hynobius mikawaensis*	CR
第４次 2018：	ミカワサンショウウオ	*Hynobius mikawaensis*	CR
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【愛知県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

都道府県条例指定種【愛知県】

参考文献

- Matsui, M., Misawa, Y., Nishikawa, K., and Shimada, T., 2017. A new species of lentic breeding salamander (Amphibia, Caudata) from Central Japan. Current Herpetology, 36(2): 116-126.
- 大竹勝・島田知彦．2016．両生類．豊田市生物調査報告書作成委員会（編），豊田市生物調査報告書分冊その 3，pp. 187-209.
- 大竹勝．2009．サンショウウオの一種．愛知県環境調査センター（編），愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編，pp. 187.
- 島田知彦，2020．ミカワサンショウウオの産卵地で観察されたアライグマによるアズマヒキガエルの捕食例．爬虫両棲類学会報，2020(1): 54‐56.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius mikawaensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius mikawaensis* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest, Wetland/Marsh/Stream
Threat types:	Logging and wood harvesting, Wetland development, Land development, Transportation infrastructure construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution
Law designation status for conservation	Prefectural Ordinance-Designated Species【Aichi】.





執筆者:	島田知彦（愛知教育大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Tomohiko Shimada and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ナンヨサンショウウオ

***Hynobius oni* Kanamori, Nishikawa, Matsui et Tanabe, 2022**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B1ab+2ab

基準 A:　—	基準 B:　CR	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B1+2．出現範囲が 100 km²未満かつ生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。

【過度に分断】

極めて限られた山域にだけ分布し、生息域となる個々の渓流上流部は互いに連続していない。これらの孤立した小集団は、気候変動や林道建設、森林伐採等に起因する生息環境の悪化により絶滅リスクが高い状態にある。

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

近年の異常気象（特に集中豪雨）の急激な増加によって、生息に適した渓流環境が破壊され、または悪化する懸念が増加している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

2022 年にイシヅチサンショウウオから分けられた。四国南西部の極めて限られた山域の固有種である。山地の渓流沿いに生息する。渓流環境の悪化が生存を脅かしている。

基礎情報

【形態】

全長は 124～161 mm と大型で、肋条数は通常 13 本、後肢は 5 指性。尾は著しく側偏するなど、イシヅチサンショウウオときわめてよく似ているが、体が小さく、頭胴長に対して前後肢間が長く、 尾が短く、鼻孔間が狭く、上眼瞼が長く、尾中央部の幅が広いことで区別される。幼生の背面は黄褐色で、斑点が散布する。卵嚢は大きく湾曲し、外皮は強靭で、遊離端が発達している。

【生活史】

四国南西部の固有種で、山地の渓流沿いに生息し、成体や幼体は林床の浅い土壌中や倒木、石の下などに潜んでいる。4 から 5 月の繁殖期になると渓流に集まり水中の石の下などに産卵する。孵化した幼生は、渓流中で生活し、夏期に変態する。動物食で幼生時は水中の、変態上陸後は陸上の昆虫や甲殻類、ミミズなど様々な小動物を捕食する。

【生息環境】

主に山地の自然林や二次林に生息する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】森林，河川源流域，河川上流域 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

四国国南西部（愛媛県宇和島市、愛南町、高知県四万十市）。

現在の生息状況

【分布域の現況】

四国国南西部（愛媛県宇和島市、愛南町、高知県四万十市）。

【生息地の現況】

生息環境は、現在のところシカの食害による林床植生の変化や、地表性植物の減少による林床の乾燥化など、極度の劣化は認められないものの、豪雨による破壊などを被り易い脆弱性を持っている。

【個体数の現況】

個体数に関する情報はない。

存続を脅かす要因

気候変動による集中豪雨等に伴う渓流環境の変化や、林道建設及び森林伐採による影響が懸念される。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，ダム・河川工作物建設，自然災害，分布・産地局限

	（現在）	森林伐採，土地造成，ダム・河川工作物建設，自然災害，気候変動，分布・産地局限

特記事項

比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義イシヅチサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【愛媛県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kanamori, S., K. Nishikawa, M. Matsui, and S. Tanabe, 2022. A new species of lotic breeding salamander (Amphibia, Caudata, Hynobiidae) from Shikoku, Japan. PeerJ, 10: e13891.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius oni has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius oni* is listed as CR under criteria B1ab+2ab.

B1+2. Extent of occurrence estimated to be less than 100 km² AND area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimates indicating at least two of a-c: a. Severely fragmented or known to exist at only a single location. b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Dam/River structures construction, Natural disasters, Climate change, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



©江頭幸士郎（北九州市立自然史・歴史博物館）



©江頭幸士郎（北九州市立自然史・歴史博物館）

執筆者:	田辺真吾（日本爬虫両棲類学会）・松井正文（京都大学）
Author:	Shingo Tanabe and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

トサシミズサンショウウオ

***Hynobius tosashimizuensis* Sugawara, Watabe, Yoshikawa et Nagano, 2018**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B2ab

基準 A:　—	基準 B:　CR	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B2．生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 ヶ所の地点に限定されている。
【過度に分断】
生息地が 1 地域に限られているうえに分断しており、残存する小集団では水場の減少や水質の悪化により絶滅リスクが高い状態にある。
【地点数】1 地点
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息地は 1972 年に発見された限られた地域のみで、その後に新たな確認例がない。そこでの安定した産卵場所は 2018 年までに、壊滅に近い状態まで減少し、現在は人工池で産卵が維持されているとの報告がある。保全対策は行われているものの、種々の開発にともなう水体の減少、汚水や農薬の流入による繁殖環境の悪化、生息地消失のリスクが完全に取り除かれない限り、継続的な減少が予測される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は止水産卵性の種で、分布域は四国地方西南部の狭い地域に限られている。近年は保護活動が実施され個体数は安定しているものの、依然として絶滅リスクは高い。

基礎情報

【形態】

頭胴長 60～73 mm。オオイタサンショウウオに似るが、背面は一様に緑褐色で、黒斑がない。腹面は淡色。卵嚢は長く、数回巻く。分子系統学的にはアブサンショウウオと近縁とされる。

【生活史】

丘陵地の林床や草地に生息し、湿地や池、緩やかな流れの溜まりなどに産卵する。産卵期は 1～4 月で 2 月が最盛期。一腹卵数は、54～117 個。孵化率は 80%を超える。幼生は多くが 7～8 月に変態・上陸する。変態直後幼体の全長は、52 mm 程度。四国西南部に固有のナンヨサンショウウオとは、地理的にも垂直的にも隔離されている。

【生息環境】

丘陵地や低山地にある常緑広葉樹の二次林、湿地に生息する。丘陵地や低山地で、変態後の生活場所となる森林と、繁殖場所となる渇水しない各種水体が必要である。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地，耕作放棄地，湿地・湿原・細流，ため池・池沼 【陸域_平地部】森林，草地，耕作放棄地，湿地・湿原，ため池・池沼
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

高知県土佐清水市にのみ分布する。標高 300 m 程の丘陵地のスギ植林内の小さな沢や湿地周辺に生息する。かつて多数が産卵した湿地が 1 ヶ所消失した。

現在の生息状況

【分布域の現況】

高知県土佐清水市の 1 地域。

【生息地の現況】

生息地は開墾地である。1970 年代に 5 ヶ所あった繁殖場所が 2000 年までには 2 ヶ所に減少した。その後、代替地の整備や創生が行われ、現在では 10 ヶ所程度で産卵が確認されている。

【個体数の現況】

現在は保全対策として整備されている代替の湿地や池十数ヶ所によって個体群が維持されている。毎年約 100 腹分の産卵が確認されていることから、生息個体数は成体だけで約 200 個体と推定されている。

存続を脅かす要因

種々の開発にともなう水体の減少、汚水や農薬の流入による繁殖環境の悪化といった生

息地消失がもっとも影響が大きく、近年もその程度は弱まっていない。愛好者等による違法捕獲の可能性もある。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，湿地開発，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，農薬汚染/化学物質汚染，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害
	（現在）	森林伐採，湿地開発，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，農薬汚染/化学物質汚染，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害

特記事項

他の小型サンショウウオ類同様、分布域が限られているだけでなく、生物地理や地史を考えていく上で重要な種といえる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	トサシミズサンショウウオ	*Hynobius tosashimizuensis*	CR
第４次 2019：	オオイタサンショウウオ	*Hynobius dunni*	VU
第４次 2018：	オオイタサンショウウオ	*Hynobius dunni*	VU
第４次 2017：	オオイタサンショウウオ	*Hynobius dunni*	VU
第４次 2015：	オオイタサンショウウオ	*Hynobius dunni*	VU
第４次：	オオイタサンショウウオ	*Hynobius dunni*	VU
第３次：	オオイタサンショウウオ	*Hynobius dunni*	VU
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- 松井正文，2000．オオイタサンショウウオ．環境庁（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック―（爬虫類・両生類），pp. 82-83．財団法人自然環境研究センター，東京.

- 松井正文・田辺真吾，2021．トサシミズサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 25-26．サンライズ出版，彦根．
- 佐藤真一，1996．オオイタサンショウウオ．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（III），pp. 244‐249．日本水産資源保護協会，東京．
- Sugawara H, Watabe T, Yoshikawa T, Nagano M. 2018. Morphological and molecular analyses of *Hynobius dunni* reveal a new species from Shikoku, Japan. Herpetologica, 74: 159-168
- 田辺真吾．2002．オオイタサンショウウオ．高知県レッドデータブック（動物編），pp. 162-163．高知県文化環境部環境保全課，高知．
- 渡部孝．2018．トサシミズサンショウウオ．高知県レッドデータブック 2018 動物編．pp. 81．高知県文化環境部環境保全課，高知．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius tosashimizuensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius tosashimizuensis* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland, Abandoned farmland, Wetland/Marsh/Stream, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Abandoned farmland, Wetland, Reservoir/Pond
Threat types:	Logging and wood harvesting, Wetland development, Grassland development, Land development, Transportation infrastructure construction, Water pollution, Pesticide/Toxic chemical pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	田辺真吾（日本爬虫両棲類学会）・松井正文（京都大学）
Author:	Shingo Tanabe and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ツクバハコネサンショウウオ

***Onychodactylus tsukubaensis* Yoshikawa et Matsui, 2013**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B1ab

基準 A:　－	基準 B:　CR	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B1．出現範囲が 100 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。

【過度に分断】

本種の生息域は筑波山周辺と加波山周辺の 2 つに大きく分断されているものと思われる。また加波山周辺の内部でも、足尾山の集団は孤立した小集団となっており、加波山との中間地域で生息が確認できないなど分断化している。さらに筑波山内部でも西側斜面の個体群は他の生息地との間に遺伝的に若干の違いがみられ、分断化している可能性が高い。

【地点数】1 地点

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

本種は生息地の標高が低く人里に近いにも関わらず、生息に冷涼湿潤な森林と水量、水温が安定した渓流が必須である。そうした環境は近年の温暖化によって不安定化し、減少しつつあると考えられる。また、生息地の多くが人工林であることもあり、継続的な保全対策がなければ容易に生息環境が打撃を受け、個体数の減少や絶滅につながると予想される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

全長 13～17 cm、背面に比較的明瞭な黄褐色から赤褐色の縦帯をもち、体側から腹面に細かな白点を散布する。尾が同属他種に比べて著しく短く、オスで頭胴長と同程度か少し長く、メスでは頭胴長よりやや短い。茨城県の筑波山系にのみ分布する。概ね標高 350 m 以上の場所に生息するが、南限は筑波山南麓、北限は加波山の北に位置する燕山付近である。主な生息環境は落葉広葉樹林や植林地を流れる渓流およびその周辺の林床。産卵は初夏に渓流源流部の伏流水中でおこなわれる。森林の伐採、河川改修・砂防ダム建設、林道建設、放流外来魚による捕食、観光利用の増大、温暖化による影響が危惧される。2015 年には種の保存法に基づく国内希少野生動植物種に指定された。

基礎情報

【形態】

全長 13～17 cm、体は細長く、背面に比較的くっきりとした褐色から赤褐色の縦帯をもち、体側から腹面に細かな白点を散布する。繁殖期には雌雄ともに指先に黒い爪があらわれるが、同属他種に比べて発達が悪い。尾が同属他種に比べて著しく短く、オスで頭胴長と同程度か少し長く、メスでは頭胴長よりやや短い。幼生は同属他種と同様に頭は角ばっており、外鰓は小さく、尾びれの丈は低く、四肢に膜びれをもち、指先には黒いかぎ爪をもつ。

【生活史】

渓流源流部の地下水中で初夏に産卵し、孵化した幼生は翌春に渓流に泳ぎ出し、3 年ほどかけて成長し、変態・上陸する。上陸から成熟までの期間は不明。

【生息環境】

茨城県の筑波山系にのみ分布する。概ね標高 350 m 以上の場所に生息するが、繁殖場所は標高 600～700 m の間で確認されている。南限は筑波山南麓、北限は加波山の北に位置する燕山付近である。 主な生息環境は落葉広葉樹林や植林地を流れる渓流およびその周辺の林床である。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，洞窟・地下浅層・地下水域，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域

【分布域】

確かな記録は茨城県の筑波山および加波山周辺のみ。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現在生息が確認されているのは茨城県の筑波山系のみで、南北 10 km ほどの範囲の標高 300-350 m 以上の場所に限定される。過去に周辺の比較的低標高の山地の数地点でハコネサンショウウオの報告があるが疑わしい。

【生息地の現況】

主な生息環境は落葉広葉樹林や植林地を流れる渓流およびその周辺の林床である。いまのところおおむね安定している生息地が多いが、人工林内の生息地では伐採による影響を容易に受ける可能性が高い。登山者によると思われる生息環境となる渓流や湧水の踏み荒らしや掘り起こしがみられる。

【個体数の現況】

この数年の増減は不明だが、1980 年代ごろに比べると大きく減少している場所が多いようである。

存続を脅かす要因

生息地となる森林の伐採、河川改修・砂防ダム建設、林道建設による生息河川の分断、放流された外来魚やウシガエルによる捕食、温暖化。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），気候変動

特記事項

筑波山では観光客の増加による湧水の利用など環境負荷の増大が問題となっている。ある渓流では幼生・成体が多く生息する上流部で、山麓のため池などから移動してきたとみられるウシガエル亜成体 1 匹が確認された。胃内容物から本種は見つからなかったが、潜在的な捕食者として脅威である。また、生息地の渓流でもまれにヤマメ等の外来サケ科魚類が確認されており、放流の防止やその生態系への影響の普及啓発が必要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ツクバハコネサンショウウオ	*Onychodactylus tsukubaensis*	CR
第４次 2019：	ツクバハコネサンショウウオ	*Onychodactylus tsukubaensis*	CR
第４次 2018：	ツクバハコネサンショウウオ	*Onychodactylus tsukubaensis*	CR
第４次 2017：	ツクバハコネサンショウウオ	*Onychodactylus tsukubaensis*	CR
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【茨城県】絶滅危惧ⅠB 類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- 早瀬長利・山根爽一，1982．茨城県筑波山系におけるハコネサンショウウオ *Onychodactylus japonicus*（Houttuyn）の水中生活．日本生態学会誌，32: 395-403．
- 環境庁．1978．第 2 回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書（両生類・爬虫類）茨城県．35pp．
- 小菅次男．1979．第 2 回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書（両生類・は虫類）茨城県．環境庁．
- 吉川夏彦，2015．最近の日本産ハコネサンショウウオ属の分類に関する雑記．両生類誌，27: 1-8．
- Yoshikawa, N. and M. Matsui., 2013. A new salamander of the genus *Onychodactylus* from Tsukuba Mountains, eastern Honshu, Japan (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). Cur Herpetol, 32: 9–25.
- 吉川夏彦・坂本真理子．2016．種の保存法指定種の現実―有尾両生類の事例―．爬虫両棲類学会報．2016: 153‐163．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Onychodactylus tsukubaensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Onychodactylus tsukubaensis* is listed as CR under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 100 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Cave/Shallow underground/Subterranean water body, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Climate change
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	吉川夏彦（国立科学博物館）
Author:	Natsuhiko Yoshikawa

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

サドガエル

***Glandirana susurra* (Sekiya, Miura et Ogata, 2012)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B2ab

基準 A:　―	基準 B:　CR	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。
【過度に分断】
これまでの現地調査により国中平野のごく限られた水田とため池にしか生息していないことが確認されている。残存する小集団のどの生息地にも連続性がなく、絶滅リスクが高い状態にある。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
平成 29 年度調査から、数年間で生息場所の減少（62 か所→41 か所）が確認されており、今後の圃場整備等の影響により、更に生息地が分断化されていく可能性が高い。さらに、もっとも生息密度の高い新貝地区では、令和 5 年度から大規模（約 140 ha）な圃場整備が 8 年計画で開始されている。この他、ウシガエル・オオクチバスなどの外来種が定着した環境での本種の確認事例はなく、各下位個体群の減少が予測される。以上のことから、生息地面積や成熟個体等について、継続的な減少が容易に予測される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は佐渡島のみに分布している。おもに水田やため池に生息し、水辺を離れることは少ない。5 月中旬頃から夏場にかけて産卵するが、幼生は年内に変態せず、翌年の夏頃に変態すると考えられている。そのため、本種の生息条件の 1 つとして年間を通した水辺の存在が重要となっている。本種は、典型的な水田依存性生物であるため、圃場整備や中干しなどによる水田環境の悪化の影響を強く受けている。国中平野には約 6,000 ha におよぶ広大な水田が広がっているが、本種は水環境の良好な極限られた場所にしか生息しておらず、見つけることが困難なほどである。一方、もう一つの重要な生息地であるため池も、ブラックバスやウシガエルなどの外来生物の侵入が続いており、危機的な状況となっている。

協力者:　宅森美優（昭和大学 富士山麓自然・生物研究所）・小林頼太（東京環境工科専門学校）

基礎情報

【形態】

体長はオスで 40 mm、メスで 45 mm ほどである。ツチガエルに似るが、皮膚は滑らかで、腹面が黄色みを帯びることなどから容易に識別できる。背面には細長い隆条が散在し、その隙間には小さな顆粒状突起が広がる。後肢腹面には暗褐色の斑紋がある。後肢趾間のみずかきはよく発達している。

【生活史】

水田やため池などに生息し、水辺を離れることはほとんどない。繁殖期は 5 月から 8 月。水田やその周辺の用水路などで繁殖する。オスは鳴嚢をもたず、鳴き声は長く続く。メスは数十個ほどの卵からなる卵塊を、水中の植物などに付着させるように産卵する。孵化した幼生は水田や水路などで成長し、越冬して翌年に変態すると考えられている。佐渡島ではツチガエルと生殖隔離されており、人工交雑すると雑種は異常になる。

【生息環境】

佐渡島の水田やため池に生息する。既知の生息場所は水田 36 か所、ため池 26 か所、互いに分断している。国中平野の広い範囲に水田はあるが、本種はごく限られた水田にしか生息しない。似たように見える水田あるいは、隣接する水田であっても、本種の生息が確認できない。解明できていない生息条件があるもと推測される。なお、ウシガエルが侵入しているため池には本種が生息していないことが分かっている。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】田地・畑地，ため池・池沼 【陸域_平地部】田地・畑地，ため池・池沼
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

佐渡島のみに生息する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

佐渡島のみに生息する。出現範囲に大きな変化はないが、圃場整備等の影響によって生息地の分断化が進行している。

【生息地の現況】

平成 29 年度調査から、数年間で本種が見られる場所は減少（62 か所→41 か所）したことが確認されており、今後の圃場整備等の影響により、更に生息地が分断化されていく可能性が高い。もっとも生息密度の高い新貝地区では、令和 5 年度から大規模な圃場整備が 8 年計画で開始されている。この他、ウシガエル・オオクチバスなどの外来種が定着した環境での本種の確認事例はなく、各下位個体群の減少が予測される。以上のことから、生息地面積や成熟個体等について、継続的な減少が容易に予測される。

【個体数の現況】

孤立した個体群がほとんどで、個体数は安定していないと推定される。国中平野の水田では、大規模な圃場整備が進行中で、個体数が減少すると推測される。

存続を脅かす要因

本種の生存を脅かすおもな要因として、圃場整備に伴う水田の乾燥化、コンクリート製水路による移動の妨害、農薬などによる餌資源の減少、中干しによる幼生生育場所の消失などが挙げられる。また、ため池においては外来種の侵入や管理放棄による植生変化などが本種の存続を脅かしている。

要因の区分：	（過去）	湿地開発，圃場整備，農薬汚染/化学物質汚染，捕食（外来種による），捕食（在来種による），分布・産地局限
	（現在）	湿地開発，圃場整備，農薬汚染/化学物質汚染，捕食（外来種による），捕食（在来種による），分布・産地局限，その他（水田の中干し）

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	サドガエル	*Glandirana susurra*	EN
第４次 2019：	サドガエル	*Glandirana susurra*	EN
第４次 2018：	サドガエル	*Glandirana susurra*	EN
第４次 2017：	サドガエル	*Glandirana susurra*	VU
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【新潟県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岸本圭子・満尾世志人，2020．佐渡島固有種サドガエルの保全に向けて．爬虫両棲類学報, 2020: 178-185.
- Kishimoto-Yamada, K., R. Satoh, M. Kokura, Y. Mitsuo, 2025. Where does the island-endemic frog *Glandirana susurra* survive during the nonirrigated seasonμm Agriculture, Ecosystems and Environment, 381: 109433.
- 松井正文・前田憲男，2018．日本産カエル大鑑．文一総合出版，東京．272pp.
- Miyu, T. R., M. Soga, Y. Saito, M. J. Evans, R. Kobayashi, K. Sekiya, A. Tanikawa, T. Miyashita, and K. T. Yoshida. 2022. Conservation genetics of the endangered Sado wrinkled frog *Glandirana susurra* reveals strong regional endemism and population bottlenecks. Wetlands, 42(7): 66.
- 日本爬虫両棲類学会（編），2021．新 日本両生爬虫類図鑑．サンライズ出版，彦根．232pp.
- 関谷國男，2022．サドガエル．佐渡市生活環境課環境対策係（編），佐渡島のの希少な動植物 普及版レッドデータブック，pp. 24．佐渡市.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Glandirana susurra has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Glandirana susurra* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Farmland, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland, Reservoir/Pond
Threat types:	Wetland development, Field preparation, Pesticide/Toxic chemical pollution, Predation (by alien species), Predation (by native species), Limited distribution, Other
Law designation status for conservation	—





執筆者:	福山欣司（慶応義塾大学）
Author:	Kinji Fukuyama

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

アベサンショウウオ

***Hynobius abei* Sato, 1934**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A: ―	基準 B: EN	基準 C: ―	基準 D: ―	基準 E: ―

B2. 生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
生息地の多くが農耕地や道路等によって分断されており、残存する小集団は絶滅リスクが高い状態にある。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息地のいくつかで渇水、乾燥化、シカによる植生の変化が生じており、継続的な生息地の悪化、消失が推察される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種の分布域は狭く、京都府下丹後半島、兵庫県但馬地方、福井県西部、石川県南西部の一部に限られており、生息環境が消失したために絶滅した個体群の例がある。

基礎情報

【形態】

全長はオスで 107 mm、メスで 96 mm 程度。肋条数は 12 本のことが多い。鋤骨歯列は比較的深いU字型。前後肢を体側に沿って折り返すと前後の指間に 1～2 肋鰭分の隙間ができる。後肢は 5 指性。背面は暗褐色、腹面は淡褐色で、若い個体では青白色の小点を密布する。卵嚢表面には明瞭な縦の条線をもつ。雌雄ともに尾が著しく側偏し、オスでは鰭状を呈するのが特徴。ホクリクサンショウウオより頭部が大きく、胴部、尾部は短い。カスミサンショウウオと異なり尾の縁に淡色の条線を欠く。トウホクサンショウウオに比べ卵嚢外被の縦方向の条線はより明瞭だが横方向の条線はずっと弱い。

【生活史】

繁殖は 11 月中旬～12 月下旬にかけての降雪期に、湧水がある水溜りや溝の、泥底で落葉、枯木などの堆積のある箇所でなされる。繁殖密度は不明だが、1 繁殖場所で約 20 個体までが普通である。繁殖参加個体の性比は 1：1 と見積られる。1 メスの産卵数は 26～109（平均約 71）個である。繁殖行動は暗い水底の物陰で行われ、光を極端に嫌う。幼生は 2 月中旬から水中で水生の小さな節足動物、環形動物を食べ、共食いもしながら成長・発育し、7 月初め、遅い場合には 8 月下旬までに変態、上陸するが、一部は幼生のまま越冬し、翌年に変態する。変態後は林床でミミズ、クモ等を食べる。性的成熟は 2～3 歳と推定され、繁殖に参加するオスは 4 歳、メスは 6 歳のものが多い。寿命は不明であるが、野外では 10 歳以上と推定される個体が確認されている。

【生息環境】

分布域の多くでは人里近くの低地二次林、京都府の一部と兵庫県では山地の混交樹林に生息し、その内部またはそれに沿う形で存在する渇水することの無い湧水のある場所を必要とする。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，耕作放棄地，湿地・湿原・細流，ため池・池沼 【陸域_平地部】森林，耕作放棄地
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

京都府京丹後市・伊根町・与謝野町、兵庫県豊岡市・香美町、福井県あわら市・越前町・越前市・美浜町・若狭町、石川県小松市・能美市から報告がある。多くの産地は 1990 年以降に発見されたもので、最近では 2004 年に石川県内、2006 年に福井県嶺南若狭地方で確認された。

現在の生息状況

【分布域の現況】

近年、種々の土地開発にともなう環境影響評価調査が進むとともに、新たな生息地も発

見されている。しかし、確認されている地点数は少なく、また農耕地や道路等によって分断され孤立している。最近本種が発見された石川県下での生息地点は能美市の 6 地域、小松市の 10 地域との報告がある。

【生息地の現況】

低地二次林、山地の混交樹林とも生息環境は悪化しているが、とくに低地二次林でその程度は高い。山地の一部ではシカの食害による植生の変化により、乾燥化や餌動物の減少を招いている。アライグマやアメリカザリガニ等の捕食性の種の侵入も確認されている。

【個体数の現況】

近年各地から分布が知られてきたが、現存個体数は極めて少ないと考えられる。石川県下では 2004 年 12 月～2008 年 3 月の調査から成体の総個体数は 200 個体以下と推定されている。モニタリング調査の行われている近畿地方の生息地保護区の場合、毎年、「大岡生息地保護区」周辺で 20–30 個体、「善王寺長岡生息地保護区」では 10–20 個体の成体が確認されている。

存続を脅かす要因

低地では道路建設、宅地や農地の開発、ゴミの不法投棄によって環境は悪化しており、道路建設による生息地消失の後、側溝に産卵せざるを得なくなった個体群が、数年のうちに絶滅した例がある。山地ではスキー場やゴルフ場の建設が生息環境を劣化させてきた疑いがある。かつては食用ないし薬用とされた可能性があるが、近年は希少種として著名になったため、愛好者等による違法な採集の例がある。外来種のアメリカザリガニによって成体や卵嚢の生存が脅かされている例や、近年、アライグマによる成体の捕食例が報告されている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，ゴルフ場，スキー場，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），発電施設建設，違法採集
	（現在）	森林伐採，湿地開発，ゴルフ場，スキー場，土地造成，交通インフラ建設，捕食（外来種による），違法採集

特記事項

本種は日本海側にホクリクサンショウウオとサンインサンショウウオに挟まれた特異な分布様式を示す。遺伝的にも他の種とはかけ離れており、日本産小型サンショウウオ類の進化を探るうえで、非常に重要な種である。京都府の天然記念物に指定されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アベサンショウウオ	*Hynobius abei*	CR
第４次 2019：	アベサンショウウオ	*Hynobius abei*	CR

第４次 2018：	アベサンショウウオ	*Hynobius abei*	CR
第４次 2017：	アベサンショウウオ	*Hynobius abei*	CR
第４次 2015：	アベサンショウウオ	*Hynobius abei*	CR
第４次：	アベサンショウウオ	*Hynobius abei*	CR
第３次：	アベサンショウウオ	*Hynobius abei*	CR
第２次：	アベサンショウウオ	*Hynobius abei*	CR
第１次：	アベサンショウウオ	*Hynobius abei*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【福井県】県域絶滅危惧Ⅰ類，【京都府】絶滅寸前種，【兵庫県】A ランク

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，保護増殖事業，都道府県条例指定種【京都府】

参考文献

- 長谷川巌，2003．福井県産アベサンショウウオの生息状況．爬虫両棲類学会報，2003 (1): 28‐29．
- 川内一憲・藤井豊・長谷川巌，2005．石川県産アベサンショウウオの産卵環境と発見状況．両生類誌，15: 22．
- 松井正文，1995．アベサンショウウオ．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（II），pp. 405‐409．日本水産資源保護協会，東京．
- 松井正文，2000．アベサンショウウオ．環境庁自然保護局野生生物課（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-（爬虫類・両生類），pp. 72‐73．財団法人自然環境研究センター，東京．
- 松井正文，2021．アベサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 19‐20，サンライズ出版，彦根．
- 宮崎光二・石原一彦・野田英樹・松村初男・山本邦彦，2011．石川県産アベサンショウウオの生活史．石川県立自然史資料館研究報告，(1): 1-13．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius abei has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius abei* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Abandoned farmland, Wetland/Marsh/Stream, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Abandoned farmland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Wetland development, Golf course development, Ski resort development, Land development, Transportation infrastructure construction, Predation (by alien species), Illegal harvesting of biological resources
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Conservation and reproduction programs. Prefectural Ordinance-Designated Species【Kyoto】.



執筆者:	田辺真吾（日本爬虫両棲類学会）・松井正文（京都大学）
Author:	Shingo Tanabe and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

アブサンショウウオ

***Hynobius abuensis* Matsui, Okawa, Nishikawa et Tominaga, 2019**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　—	基準 B:　EN	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
多くの産地は市街地や山地によって著しく分断されており、残存する小集団は絶滅リスクが高い状態にある。すでに絶滅した地点が多い。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息に必要な水の枯れない止水環境と、それに隣接した森林、草地などの陸上環境という条件は、都市近郊では丘陵地に集中しているが、その様な場所は近年もっとも開発が進む環境となっており、この状況が改善されなければ生息状況は更に悪化していくと推測される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は中国地方の狭い範囲（島根県・山口県）のみから知られるが、多くの産地は市街地や山地によって著しく分断され、すでに絶滅した地点が多い。

協力者:　川原康寛（萩博物館）

基礎情報

【形態】

体は大型（オス頭胴長 48～69 mm）で胴は短く、肋条は 12 本。四肢は長い。尾は非常に長く、下縁に黄色の条線がない。鋤骨歯列は U 字型。背面は褐色で暗褐色と銀白色の斑紋を散布し、腹面は色が淡く銀白色の斑紋をもつ。トサシミズサンショウウオを姉妹種としアキサンショウウオ・ヒバサンショウウオのなす群と姉妹群をなす。ヒバサンショウウオより尾は長く、丈が高く、幅が狭くて、四肢が長く、アキサンショウウオより大型で、頭が幅広く、尾と四肢が長く、前後肢の重なりが大きい。卵嚢は巻いた太いひも状で透明、外皮は薄くて弱い条線がある。

【生活史】

成体は丘陵地から山地の森林の林床に生息する。12 月から 4 月にかけて、雌は水田周辺の溝や水溜まり、池などに 26～160 個ぐらいを含む卵嚢対を産出する。2 月から 3 月頃に孵化が始まり、幼生は水中の小動物を捕食するが、幼生の生息密度が高い場所では共食いがおこり大型の幼生がみられる。幼生の多くは年内に変態を完了し陸上で生活するが、高標高の地域などでは一部の幼生が越冬する。

【生息環境】

一般には低地から丘陵地の湧水や、水田（イネやセリ）と隣接した二次林、竹林、草地に生息するが、中国山地では高標高域の自然林にも生息する。産卵や幼生の成長に必要な比較的浅い止水環境と変態後の個体が生息する林が連続して存在する必要がある。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，耕作放棄地 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域，(4) 河川・湿地地域

【分布域】

これまで中国地方の狭い範囲（島根県、山口県）のみから知られ、丘陵地から山地に生息する。既知の産地の標高は 150～970 m。分布域は西方をヤマグチサンショウウオ、東方をイワミサンショウウオに仕切られる。イワミサンショウウオとの分布の境界地域では、より標高の高い場所に生息する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

多くの産地は市街地や山地によって著しく分断され、すでに絶滅した地点が多い。

【生息地の現況】

生息に必要な水の枯れない止水環境と、それに隣接した森林、草地などの陸上環境という条件は、都市近郊では丘陵地に集中しているが、その様な場所は近年もっとも開発が進む環境となっている。比較的標高が低い生息地では、生息状況の劣化が進行していると考えられる。現在の生息状況はほとんどの地点で不明であるが、山口県十種ヶ峰の産卵池で

は夏季の乾燥化により水位が低下して幼生が死亡し、島根県津和野町の産卵地では 12 月に水が涸れ、産出された卵嚢が干上がって死滅した例がある。

【個体数の現況】

個体数は不明だが、絶滅地点が多いことから近年急速に個体数も減少していることは間違いない。生息密度は季節的、年次的ともに不明である。

存続を脅かす要因

大規模な土地開発による生息地の消失と、それにともなう汚水の流入などの水質悪化、減反による水田の乾燥化が最大の脅威となってきた。愛好者等による採集も頻繁に行われている。アメリカザリガニの他、地域によっては外来の捕食性魚類も本種の生存を脅かしている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，湿地開発，圃場整備，交通事故，捕獲・狩猟/園芸採取，管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害，交雑（在来種による)
	（現在）	森林伐採，湿地開発，圃場整備，交通事故，捕獲・狩猟/園芸採取，管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害，交雑（在来種による)

特記事項

四国西部産のトサシミズサンショウウオに最も近縁で、系統地理学的に極めて重要な種である。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義カスミサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	アブサンショウウオ	*Hynobius abuensis*	EN
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- 川原康寛・見澤康充，2021．山口県萩市産アブサンショウウオ *Hynobius abuensis* 幼生にみられる形態変異．爬虫両棲類学会報，2021(1): 88．
- 松井正文，2021．アブサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 26．サンライズ出版，彦根．
- Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa, and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. Current Herpetology, 38: 32–90.
- 大川博志・奥野隆史，2011．カスミサンショウウオの阿武型について．九州両生爬虫類研究会誌，2: 49-52．
- 大川博志・奥野隆史・宇都宮妙子，2019．西日本のカスミサンショウウオの 3 つの大きなグループ．爬虫両棲類学会報，2019(1): 9‐21．
- 大川博志・奥野隆史・宇都宮妙子，2005．阿武.津和野地方および山口市に分布するカスミサンショウウオの一集団．両生類誌，14: 11-14．
- 高川学園高校理科部，2006．十種ヶ峰産カスミサンショウウオの幼体成熟について．山口県．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius abuensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius abuensis* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest,

	Abandoned farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Wetland development, Field preparation, Vehicle collision, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters, Hybridization (with native species)
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	見澤康充（建設環境研究所）・松井正文（京都大学）
Author:	Yasuchika Misawa and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

アキサンショウウオ

***Hynobius akiensis* Matsui, Okawa et Nishikawa, 2019**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A: ―	基準 B: EN	基準 C: ―	基準 D: ―	基準 E: ―

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
多くの産地は市街地や山地によって著しく分断されており、残存する小集団は絶滅リスクが高い状態にある。すでに絶滅した地点が多い。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息に必要な水の枯れない止水環境と、それに隣接した森林、草地などの陸上環境という条件は、都市近郊では丘陵地に集中しているが、その様な場所は近年もっとも開発が進む環境となっており、この状況が改善されなければ生息状況は更に悪化していくと推測される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種の分布域は狭く、中国地方中部（中南部を除く広島県と島根県南部）に限られている。開発等により生息環境が消失しており、絶滅した地点も多い。当初本種とされていた広島県中部産はヒロシマサンショウウオ、広島県南部と愛媛県北部産はゲイヨサンショウウオとして、それぞれ分離された。

基礎情報

【形態】

体は小型（オス全長 68～106 mm、平均 86 mm）、前後肢は比較的短くて雄で多くは 0.5 肋皺分、雌で多くは 2 肋皺分、分離し、鋤骨歯列は浅い V 字形。背面は濃褐色で黒点をもたないか、淡黄褐色で黒色か白色の斑点をもつ。腹面は灰褐色で銀白色の細点がある。通常尾の上下縁に黄色の条線をもたない。ヒバサンショウウオと単系統群をなすが、鋤骨歯列と第 5 趾相対長がより長く、前後肢の分離の程度が大きい。アブサンショウウオより頭胴長と前後肢間比が小さく、頭が短く、尾と四肢が短く、前後肢の重なりの程度が低い。

【生活史】

産卵期は 3 月から 4 月下旬で、水田の溝や湿地、緩い流水に産卵する。卵嚢は巻いたひも状で透明、表面には条線をもたない。1 卵嚢対中の卵数は 2～58 個である。幼生の多くは夏までには変態する。

【生息環境】

一般には低地から丘陵地の湧水や、水田（イネやセリ）と隣接した二次林、竹林、草地に生息するが、高標高域の自然林にも生息する。産卵や幼生の成長に必要な比較的浅い止水環境と変態後の個体が生息する林が連続して存在する必要がある。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流，ため池・池沼 【陸域_平地部】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

中国地方中部（広島県と島根県の一部）から知られる。既知の産地の標高は 260～930 m である。分布域は東方をセトウチサンショウウオ、西方をイワミサンショウウオ、南方をヒロシマサンショウウオ、北方をヒバサンショウウオで仕切られる。北部地域個体群はヒバサンショウウオとの中間型と考えられ、移行型と呼ばれてきた。

現在の生息状況

【分布域の現況】

多くの産地は市街地や山地によって著しく分断され、すでに絶滅した地点が多い。

【生息地の現況】

生息に必要な水の枯れない止水環境と、それに隣接した森林、草地などの陸上環境という条件は、都市近郊では丘陵地に集中しているが、その様な場所は近年もっとも開発が進む環境となっている。現在の生息状況はほとんどの地点で不明であるが、産卵場が道路工事や宅地造成のために削られたり、埋められたり、圃場整備により水が出なくなったりすることにより絶滅の恐れが高くなっている。

【個体数の現況】

個体数は不明だが、絶滅地点が多いことから近年急速に個体数も減少していることは間違いない。三次盆地に分布する個体群は、世羅台地に分布する個体群に比べ減少が激しい。

存続を脅かす要因

大規模な土地開発による生息地の消失と、それにともなう汚水の流入などの水質悪化、減反による水田の乾燥化が最大の脅威となってきた。愛好者等による採集も頻繁に行われている。アメリカザリガニの他、地域によっては外来の捕食性魚類も本種の生存を脅かしている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，湿地開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	森林伐採，湿地開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

佐藤（1943）は広島県産アベサンショウウオとして報告した。2019 年 2 月にカスミサンショウウオから分割され、新種記載されたが、その後、以前に広島型、大崎島型として報告されたものは、それぞれ別種として分離された。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義カスミサンショウウオ・広義アキサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アキサンショウウオ	*Hynobius akiensis*	EN
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【広島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種，都道府県条例指定種【愛媛県】

参考文献

- Matsui, M., K. Nishikawa, S. Tanabe and Y. Misawa, 2001. Systematic status of *Hynobius tokyoensis* (Amphibia: Urodela) from Aichi Prefecture, Japan: A biochemical survey. Comp. Bioch. Physiol. B., 130: 181–189.
- Matsui, M., K. Nishikawa, T. Utsunomiya and S. Tanabe, 2006. Geographic allozyme variation in the Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Urodela). Biol. J. Linn. Soc., 89: 311–330.
- Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa, and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. Cur. Herpetol., 38: 32–90.
- 大川博・奥野隆史・宇都宮妙子，2007．西日本におけるカスミサンショウウオの 3 つの大きなグループ．爬虫両棲類学会報，2007 (1): 58‐59.
- 佐藤井岐雄．1943．日本産有尾類総説．日本出版社．大阪.
- Sugawara, H., J. Naito, T. Iwata, and M. Nagano, 2022. Molecular phylogenetic and morphological problems of the Aki salamander *Hynobius akiensis*: Description of two new species from Chugoku, Japan. Bull. Kanagawa Pref. Mus. (Nat. Sci.) , 51: 35-46.
- 田辺慎吾．2014．カスミサンショウウオ．愛媛県レッドデータブック改訂委員会（編），愛媛県レッドデータブック 2014，pp. 97．愛媛県県民環境部環境局自然保護課，松山.
- Tomimori, Y., M. Matsui, H. Okawa, K. Nishikawa, S. Tanabe, and R. Kamasaka, 2023. Reassessment of species delimitation using nuclear markers in three lentic-breeding salamanders from the Chugoku District of Japan (Amphibia: Caudata: Hynobiidae). Zootaxa, 5293 (1): 145–160.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius akiensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius akiensis* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Wetland development, Field preparation, Land development, Transportation infrastructure construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora. Prefectural Ordinance-Designated Species【Ehime】.

執筆者:	松井正文（京都大学）
Author:	Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ヤマグチサンショウウオ

***Hynobius bakan* Matsui, Okawa et Nishikawa, 2019**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A: ―	基準 B: EN	基準 C: ―	基準 D: ―	基準 E: ―

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
多くの産地は市街地や山地によって著しく分断されており、残存する小集団は絶滅リスクが高い状態にある。すでに絶滅した地点も多い。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息に必要な水の枯れない止水環境と、それに隣接した森林、草地などの陸上環境という条件は、都市近郊では丘陵地に集中しているが、その様な場所は近年もっとも開発が進む環境となっている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は止水産卵性の種で、山口県の西部と九州東北部の一部から知られる。いずれの産地でも個体数は少ないが、各地で生息地の開発が進んで激減している。形態や遺伝形質にかなりの種内変異があり、分類学的に細分する考えもある。

基礎情報

【形態】

体はやや小型（オス全長 63～123 mm、平均 100 mm）。四肢は中庸で、尾は中程度に長く、常に上下縁に明瞭な黄色の条線をもつ。鋤骨歯列は浅い V 字形。四肢を体側に沿って伸長すると前後肢は多くは 1 肋鰭分離れる。 カスミサンショウウオ、ツシマサンショウウオと単系統群をなし、この群はイワミサンショウウオ、オキサンショウウオと単系統群をなす。本種はカスミサンショウウオより頭胴長が小さくて鋤骨歯列が幅広く、イワミサンショウウオより胴が長くて頭が短く、第 5 趾が良く発達する。

【生活史】

繁殖は 1 月下旬～4 月上旬に湿地、溝、水溜り、放棄水田などの止水と、非常に緩やかな流水で行われる。1 雌の産卵数は平均 96 個程度。

【生息環境】

低地から丘陵地の湧水や、水田と隣接した二次林、草地に生息する。産卵や幼生の成長に必要な浅い止水環境と変態後の個体が生息する林が連続して存在する必要がある。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域

【分布域】

山口県の西部と九州東北部の一部から知られる。いずれの産地でも個体数は少ない。九州東北部の個体群を独立種とする考えもある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

多くの産地は市街地や山地によって著しく分断され、すでに絶滅した地点が多い。現在の生息状況はほとんどの産地で不明である。

【生息地の現況】

生息に必要な水の枯れない止水環境と、それに隣接した森林、草地などの陸上環境という条件は、都市近郊では丘陵地に集中しているが、その様な場所は近年もっとも開発が進む環境となっており、この傾向が改善されなければ、生息状況は悪化し続けると推測される。

【個体数の現況】

個体数は不明だが、近年急速に個体数も減少していることは間違いない。

存続を脅かす要因

大規模な土地開発による生息地の消失と、それにともなう汚水の流入などの水質悪化、減反による水田の乾燥化が最大の脅威となってきた。愛好者等による採集も頻繁に行われている。アメリカザリガニの他、地域によっては外来の捕食性魚類も本種の生存を脅かしている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，湿地開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	森林伐採，湿地開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

本種はカスミサンショウウオから分離されたが、系統的には極めて近縁である。また種内には形態や遺伝形質にかなりの変異があって、分類学的に細分する考えもあり、今後の再検討が必要である。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義カスミサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヤマグチサンショウウオ	*Hynobius bakan*	VU
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種，都道府県条例指定種【大分県】

参考文献

- 松井正文，2010．カスミサンショウウオ．改訂レッドリスト付属説明資料 爬虫類・両生類，pp. 13．環境省自然環境局野生生物課，東京．
- 松井正文，2021．ヤマグチサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 25．サンライズ出版，彦根．
- Matsui, M., K. Nishikawa, T. Utsunomiya, and S. Tanabe, 2006. Geographic allozyme variation in the Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Urodela). Biol. J. Linn. Soc., 89: 311–330.
- Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa, and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. Cur. Herpetol., 38: 32–90.
- Sugawara, H., Y. Tahara, S. Nakazoko, T. Matsukoji. and M. Nagano, 2022. Taxonomic revision of the Yamaguchi salamander *Hynobius bakan*: Description of two new species from Chugoku and Kyushu, Japan. Sci. Rept. Yokosuka City Mus., 69: 1–17.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius bakan has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius bakan* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Wetland development, Field preparation, Land development, Transportation infrastructure construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora. Prefectural Ordinance-Designated Species【Oita】.



執筆者:	松井正文（京都大学）
Author:	Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ハクバサンショウウオ

***Hynobius hidamontanus* Matsui, 1987**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
既知の分布域は山脈で大きく分断され、近隣の分布地点も市街地、道路によって分断されており、残存する小集団は絶滅リスクが高い状態にある。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息地の一部は典型的なリゾート地域に含まれる。タイプ産地の湿原は、近年、規模が縮小するだけでなく、水量が減少して乾燥化が進み、水質が悪化したため、繁殖場所の一部は消滅した。また、周辺の生息地でも、道路や工作物の建設が進んでいる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種の存在は 1975 年に長沢武氏によって初めて知られ、1987 年に記載された。分布域は中部地方のきわめて狭い山地に限られており、一部地域ではすでに生息環境の消失が起こっている。

基礎情報

【形態】

全長はオスで 75～105 mm 程度。肋条数は 11～13 本で 12 本のことが多い。鋤骨歯列は浅いＶ字型。前後肢を体側に沿って折り返すと、前後の指間に 0.5～3 肋鰭分の隙間ができる。後肢は 4 指性。背面は紫がかった褐色で銀白色の細点を密布し、腹面は淡褐色で銀白色の小点を密布する。卵嚢表面には明瞭な条線をもたない。トウホクサンショウウオに似るが、それより小型である。また尾や四肢もずっと短い。卵嚢外被に顕著な条線をもたない点でもトウホクサンショウウオと明瞭に区別される。

【生活史】

成体は冬眠期を除き活動を行うと思われるが、人目に付くのは繁殖期のみである。繁殖は年 1 回、時期は 4 月中旬～5 月上旬で、浅い湿原中や、森林中の細流の淀んだ部分で行われる。完全な止水ではなく湧水があり、泥底で落葉、枯木などの堆積のある箇所が選ばれる。軟泥の中、水底の枯れ葉や小枝等に産卵がなされる。1 メスの産卵数は 30～76（平均約 52）個である。幼生は 6 月上旬から水中で水生の小さい節足動物を食べ、共食いもして成長・発育し、9 月以降 11 月までに変態、上陸するが、一部は幼生越冬し、翌夏に変態する。変態後は、草の根ぎわ、倒木の下、落葉の下などで生活する。成体は節足・軟体・環形動物を主食とする。繁殖個体の平均年齢は不明であるが、変態後 2 年目以降に成熟すると思われる。寿命は野外、飼育下ともに不明である。

【生息環境】

夏緑広葉樹の自然林、カラマツ人工林に生息する。森林の内部またはそれに沿う形で存在する、湿原ないし細流が繁殖場所となっている。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】森林，湿地・湿原・細流，河川上流域
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

長野県北安曇郡白馬村のタイプ産地とそれを取り囲む地域、新潟県青海町と、かつてヤマサンショウウオ（*Hynobius tenuis*）とされていた個体群の生息地である富山県、岐阜県北部域とに、飛騨山脈によって隔離されている。ヒダサンショウウオと混生する場合がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

既知の分布域は山脈で大きく分断され、近隣の分布地点も市街地、道路によって分断されている。

【生息地の現況】

生息地の一部は典型的なリゾート地域に含まれる。タイプ産地の湿原は、近年、規模が縮小するだけでなく、水量が減少して乾燥化が進み、水質が悪化したため、繁殖場所の一部は消滅した。また、周辺の生息地でも、道路や工作物の建設が進んでいる。他の産地の

環境は比較的安定しているようだ。生息環境の開発も事前調査の結果、避けられている事例がある。

【個体数の現況】

タイプ産地では記載当時より減少している。

存続を脅かす要因

タイプ産地では、近年の急激なペンションなどの建設にともない、湿原の縮小・乾燥化、生活汚水の流入やゴミの投棄による水質汚濁が生じ、生息環境が悪化してきた。周辺の生息地では、越冬場所から繁殖に向かう成体が道路側溝に落ちて繁殖活動の妨げとなっている。愛好者等による違法採集も脅威である。岐阜県下で湿原の乾燥化、夏緑樹林帯の減少による生息環境の悪化が報告されている。

要因の区分：	（過去）	湿地開発，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，違法採集
	（現在）	湿地開発，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

長野県産と、かつて別種ヤマサンショウウオとされた富山県・岐阜県産の個体群との遺伝的差異は小さい。また、本種は距離的に大きく離れて中国山地に分布するヒバサンショウウオとも遺伝的に極めて近く、今後の詳細な調査が必要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ハクバサンショウウオ	*Hynobius hidamontanus*	EN
第４次 2019：	ハクバサンショウウオ	*Hynobius hidamontanus*	EN
第４次 2018：	ハクバサンショウウオ	*Hynobius hidamontanus*	EN
第４次 2017：	ハクバサンショウウオ	*Hynobius hidamontanus*	EN
第４次 2015：	ハクバサンショウウオ	*Hynobius hidamontanus*	EN
第４次：	ハクバサンショウウオ	*Hynobius hidamontanus*	EN
第３次：	ハクバサンショウウオ	*Hynobius hidamontanus*	EN
第２次：	ハクバサンショウウオ	*Hynobius hidamontanus*	EN
第１次：	ハクバサンショウウオ	*Hynobius hidamontanus*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【新潟県】絶滅危惧Ⅰ類(EN),【富山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【長野県】絶滅危惧ⅠA類(CR),【岐阜県】絶滅危惧Ⅰ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，都道府県条例指定種【富山県・長野県】

参考文献

- 草間啓・澤田研太・稲村修，2018．富山県におけるハクバサンショウウオの新産地．魚津水族博物館年報，27: 20-23.
- Matsui, M., 1987. Isozyme variation in salamanders of the nebulosus-lichenatus complex of the genus *Hynobius* from eastern Honshu, Japan, with a description of a new species. Jpn. J. Herpetol., 12(2): 50–64.
- 松井正文，1995．ハクバサンショウウオ，日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（II），pp. 239‐243，日本水産資源保護協会，東京．
- 松井正文，2000．ハクバサンショウウオ，環境庁（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック―（爬虫類・両生類），pp. 76‐77，財団法人自然環境研究センター，東京．
- Matsui, M., K. Nishikawa, Y. Misawa, M. Kakegawa and T. Sugahara, 2002. Taxonomic relationships of an endangered salamander *Hynobius hidamontanus* Matsui, 1987 with *H. tenuis* Nambu, 1991 (Amphibia: Caudata). Cur. Herpetol., 21(1): 25–34.
- Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa, and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. Cur. Herpetol., 38: 32–90.
- Nambu, H, 1991. *Hynobius tenuis* (Caudata, Hynobiidae), a new species of salamander from Central Japan. Zool. Sci., 8(5): 991–997.
- 澤田研太・草間啓・亀谷三志・中田達哉，2021．富山県南部の一地域におけるハクバサンショウウオ *Hynobius hidamontanus* の生息状況．両生類誌，(33):8-15．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius hidamontanus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius hidamontanus* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest, Wetland/Marsh/Stream, Upper river basin
Threat types:	Wetland development, Land development, Transportation infrastructure construction, Water pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Prefectural Ordinance-Designated Species【Toyama・Nagano】.



執筆者:	松井正文（京都大学）
Author:	Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

イワミサンショウウオ

***Hynobius iwami* Matsui, Okawa, Nishikawa et Tominaga, 2019**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
多くの産地は市街地や山地によって著しく分断され、残存する小集団は絶滅リスクが高い状態にある。すでに絶滅した地点が多い。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息に必要な水の枯れない止水環境と、それに隣接した森林、草地などの陸上環境という条件は、都市近郊では丘陵地に集中しているが、一方で、その様な場所は近年もっとも開発が進んでおり、この状況が改善されなければ生息状況は更に悪化していくと推測される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種はヤマグチサンショウウオとともに、遺伝的異質性によってカスミサンショウウオから別種に区分された。各地で生息地の開発が進んで激減しており、地域個体群が絶滅した例もある。

基礎情報

【形態】

体は小型（オス全長 65～130 mm、平均 96 mm）、尾は中程度に長く、上下縁に明瞭な黄色の条線をもつ。オキサンショウウオ、ヤマグチサンショウウオ、カスミサンショウウオ、ツシマサンショウウオと単系統群をなすが、それらの全てと、通常第 5 趾を欠くことで異なる。またヤマグチサンショウウオ、カスミサンショウウオより頭が長くて胴が短い。カスミサンショウウオより前後肢の重なりが大きく、肋条数が少ない。

【生活史】

丘陵地から山地で生活する。繁殖は 1 月～5 月に沼、池、放棄水田、溝などの止水で行う。卵嚢はコイル状で外被は薄く条線はない。1 雌の産卵数は 56～125（平均 84）個。幼生は年内に変態するが、幼生越冬して翌年に変態するものもある。

【生息環境】

一般には低地から丘陵地の湧水や、水田（イネやセリ）と隣接した二次林、竹林、草地に生息するが、中国山地では高標高域の自然林にも生息する。産卵や幼生の成長に必要な比較的浅い止水環境と変態後の個体が生息する林が連続して存在する環境。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流 【陸域_平地部】森林，田地・畑地，湿地・湿原，農業用水路
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

これまで本州西部の主に日本海に沿った狭い範囲（島根県北西部と近接する広島県）から知られている。既知の産地の標高は 50～1,000 m と幅が広い。島根県北西部と近隣の広島県でサンインサンショウウオ、ヒバサンショウウオ、アキサンショウウオ、アブサンショウウオに取り囲まれている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

多くの産地は市街地や山地によって著しく分断され、すでに絶滅した地点が多い。現在の生息状況はほとんどの地点で不明である。

【生息地の現況】

生息に必要な水の枯れない止水環境と、それに隣接した森林、草地などの陸上環境という条件は、都市近郊では丘陵地に集中しているが、その様な場所は近年もっとも開発が進む環境となっている。

【個体数の現況】

個体数は不明だが、絶滅地点が多いことから近年急速に個体数も減少していることは間違いない。生息密度は季節的、年次的ともに不明であるが、ある個体群では 0.36 成体/m^2

という値が得られている。

存続を脅かす要因

大規模な土地開発による生息地の消失と、それにともなう汚水の流入などの水質悪化、減反による水田の乾燥化が最大の脅威となってきた。愛好者等による採集も頻繁に行われている。アメリカザリガニの他、地域によっては外来の捕食性魚類も本種の生存を脅かしている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，湿地開発，圃場整備，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	森林伐採，湿地開発，圃場整備，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義カスミサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	イワミサンショウウオ	*Hynobius iwami*	EN
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【広島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- 松井正文，2021．イワミサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 26，サンライズ出版，彦根.
- Matsui, M., K. Nishikawa, T. Utsunomiya, and S. Tanabe, 2006. Geographic allozyme variation in the Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Urodela). Biol. J. Linn. Soc., 89: 311–330.
- Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa, and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. Curr. Herpetol., 38: 32–90.
- 大川博志・奥野隆史・宇都宮妙子．2009．西日本のカスミサンショウウオの後肢趾の変異．爬虫両棲類学会報，2009(1): 12-18.
- 大川博志・奥野隆史・宇都宮妙子．2019．西日本のカスミサンショウウオの 3 つの大きなグループ．爬虫両棲類学会報，2019(1):9‐21.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius iwami has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius iwami* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland, Wetland, Agricultural ditch
Threat types:	Logging and wood harvesting, Wetland development, Field preparation, Transportation infrastructure construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.



執筆者:	松井正文（京都大学）
Author:	Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

アカイシサンショウウオ

***Hynobius katoi* Matsui, Kokuryo, Misawa et Nishikawa, 2004**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A:　—	基準 B:　EN	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
本種の生息環境は小さな渓流の源流域にあり、もともと局所的な分布をする特性があるうえ、移動能力も低いため、各集団は著しく分断されていると考えられる。特に山梨県産の集団や、愛知県産の集団はそれぞれ安倍川、及び天竜川の深い渓谷によって分断されており、現在では他地域の集団との遺伝的流動はほぼ見込めず、孤立した集団である可能性が高い。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
本種が生息する礫の多い急斜面は、崩落災害が懸念される環境であり、多くの産地において生息地内に砂防ダムや、それを建設・維持する目的で造成した林道が存在する。こうした人工構造物の建設にあたり、過去には多くの集団が消失してきたことが考えられ、また今後もそれらの補修や新設にあたり、新たな集団の消失が生じることも予想される。
　また、森林の乾燥化に伴って、各地で流水性サンショウウオの生息する沢の水量減が懸念されており。本種もその例外ではない。本種の場合、現時点ではまだ産卵環境すらわかっていない状態だが、おそらく地下深くの伏流水中で産卵することが考えられ、そうした環境は、微妙な沢水の減少や水筋の移動によって容易に失われる可能性がある。
　以上を考慮すると、本種の個体数が今後増加する見込みはほとんどなく、源流部の河川管理に関して細心の注意を払わなければ、今後も新たな個体群の消滅は免れない。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

　本種は赤石山脈の南端に沿ったきわめて狭い範囲に生息する小型サンショウウオで、野外での産卵環境や幼生の生育環境すらわかっていない等、生活史に不明点の多い種である。生息地は崩落の発生しやすい山間部の急峻な沢沿いにあたり、生息域内には無数の砂防ダムや林道が設置されている。それらの設置にあたり、本種は過去にも大きな影響を受けてきた可能性が高く、また今後もその補修や新設に伴って新たな個体群の消失が続くことが考えられる。産卵環境は未知だが、おそらく伏流水中の奥深くと考えられ、そうした

環境が、水位変動等の沢環境の微妙な変化に伴って大きな影響を受けることも懸念される。

協力者:　湯本光子（山梨県三富村）

基礎情報

【形態】

全長は 92～117 mm。肋条数は 13 本のことが多い。鋤骨歯列は浅いU字型。尾は円筒形だが、末端で側偏する。前後肢を体側に沿って折り返すと、前後の指間にオスで 1、メスで 3 肋鰭分ほどの隙間ができる。後肢第 5 指は短く、完全にないこともある。背面は紫褐色で、明瞭な斑紋がなく、部分的に小さな銀白色斑点をもつことがある程度。腹面は淡褐色で、のどに斑点をもつ。 同所的に生息するヒガシヒダサンショウウオは、背面に黄色の斑点をもつのが普通で、体は大きいが体型は太短く、鋤骨歯列もより深いU字型である。

【生活史】

これまでに知られる個体は、すべてが小さな渓流の付近にある、崩れやすい礫の多い斜面で、礫の間や落ち葉の下から見つかっている。抱卵メスの出現から、4～5 月上旬頃に、山地渓流の水源にある伏流水の中で繁殖すると推定されるが、野外で卵や幼生が確認されたことはまだない。幼生も地下で生活するものと考えられる。1 メスのもつ卵数は 9～13 個ときわめて少ないが、個々の卵は大きく、クリーム一色で地下での繁殖を示唆する。

【生息環境】

標高 500～1,200 m にある針広混交林に生息し、小さな渓流の源流域付近で礫の多い斜面に生活する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】森林，河川源流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(4) 河川・湿地地域

【分布域】

長野県東南部、静岡県中部から西北部、山梨県南部、愛知県北東部に位置する赤石山脈の南端に沿った狭い範囲に主な分布域を持つ。成体は分布域の多くでヒガシヒダサンショウウオと混生する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

原記載当時に知られていた地域よりはやや広い範囲に生息していることが明らかになってきたが、依然として分布域は狭小である。

【生息地の現況】

分布域の一部で道路建設が予定されている他は、原記載時に比べ大きな変化はない。ただし、生息環境の深刻な劣化をもたらし得る森林の乾燥化は、生息地である赤石山脈南部においても懸念されている。

【個体数の現況】

不明だが、大きな変化はないようである。

存続を脅かす要因

生息地は山地森林に限られるため、比較的安定しているが、生息地にかかる道路建設工事が予定され、森林伐採、河川の改修が行われる予定があるとの情報がある。これらの行為にともなう土砂の渓流への流入、水質汚濁、地下水脈の変化が存続を脅かす可能性がある。愛好者等による捕獲も、少なくとも過去には行われていた。また、産卵地と目される伏流水環境は、生息地の森林の乾燥化や、沢の減水により、減少・消失することが懸念されるが、野外での産卵環境が見つかっていない現況では、そうした評価すら適切に行うことができていない。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設

特記事項

最近発見された山梨県南部及び静岡県中部に生息する集団は、原記載に用いられた静岡県西北部を中心に生息する集団とは斑紋のパターン等において違いがあるとされ、より詳細な検討が必要とされている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アカイシサンショウウオ	*Hynobius katoi*	EN
第４次 2019：	アカイシサンショウウオ	*Hynobius katoi*	EN
第４次 2018：	アカイシサンショウウオ	*Hynobius katoi*	EN
第４次 2017：	アカイシサンショウウオ	*Hynobius katoi*	EN
第４次 2015：	アカイシサンショウウオ	*Hynobius katoi*	EN
第４次：	アカイシサンショウウオ	*Hynobius katoi*	EN
第３次：	アカイシサンショウウオ	*Hynobius katoi*	EN
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【山梨県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【長野県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【静岡県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【愛知県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種，都道府県条例指定種【山梨県・長野県】

参考文献

- 北野聡・四方圭一郎，2009．飯田市遠山川流域におけるアカイシサンショウウオの記録．長野県環境保全研究所研究報告，5：113‐115．
- 北野聡・高田孝慈・樽井奈々子・山岸亜矢・近藤絹代・山本雅道，2016．飯田市遠山川流域における アカイシサンショウウオの周年調査の記録．長野県環境保全研究所研究報告 12:45-49.
- 国領康弘，2010．アカイシサンショウウオ．NPO 法人静岡県自然史博物館ネットワーク編:しずおか自然史，静岡新聞社，静岡，p.182-183．
- 松井正文，2004．アカイシサンショウウオ．静岡県 自然環境調査委員会編:まもりたい静岡県の野生 生物 動物編，羽衣出版，静岡，p.120．
- 松井正文，2004．アカイシサンショウウオの発見と新種記載について．ハ・ペト・ロジー，2: 110．
- 松井正文，2006．小型サンショウウオ．森林技術，774: 38‐39．
- 松井正文，2010．アカイシサンショウウオ．改訂レッドリスト付属説明資料 爬虫類・両生類，pp. 12，環境省自然環境局野生生物課，東京．
- Matsui, M., Y. Kokuryo, Y. Misawa, and K. Nishikawa, 2004. A new species of salamander of the genus *Hynobius* from central Honshu, Japan (Amphibia, Urodela). Zoological Science, 21(6): 661–669.
- 中津元樹・島田知彦，2019．愛知県におけるアカイシサンショウウオの記録．爬虫両棲類学会報，2019(2): 137‐141．
- 佐々木彰央，2015．静岡市興津川流域から得られたアカイシサンショウウオ．静岡県自然誌研究報告，8: 23‐25．
- 佐々木彰央・佐藤拓也，2015．山梨県南部からのアカイシサンショウウオの記録．爬虫両棲類学会報， 2015(1): 32‐34．
- 島田知彦，2020．アカイシサンショウウオ．レッドデータブックあいち 2020 -動物編-，pp. 197．愛知県．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius katoi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius katoi* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest, River headwater
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Transportation infrastructure construction
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora. Prefectural Ordinance-Designated Species【Yamanashi・Nagano】.





執筆者: Author:	島田知彦（愛知教育大学）・松井正文（京都大学） Tomohiko Shimada and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

イヨシマサンショウウオ

***Hynobius kuishiensis* Tominaga, Matsui, Tanabe et Nishikawa, 2019**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab+2ab

基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B1+2．出現範囲が 5000 km²未満かつ生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。

【過度に分断】

大部分の生息地は山塊や水系ごとに分断されており、残存する小集団は絶滅リスクが高い状態にある。

【地点数】5 地点以下

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

生息地の多くが林道の建設、森林の伐採等により影響を受けている。さらに、豪雨等により産卵場所としての重要な谷環境が悪化している。また、シカの生息数の多い地域では、シカの食害による植生変化に伴う森林の乾燥化が進んでいる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は四国山地の固有種である。2019 年のコガタブチサンショウウオの細分化に伴い新種記載された。生息地の多くで、様々な環境破壊や自然災害などによって、生存が脅かされている。

基礎情報

【形態】

全長 87～119 mm、頭胴長 52～70 mm。背面は、基準産地の個体群などでは、紫褐色地に銀白色の斑紋や斑点が散在するが、石鎚山系から東赤石山系の個体群では、褐色地に黄白色の斑紋をもつ。遺伝的にはツルギサンショウウオやコガタブチサンショウウオと近縁で、それらと形態的に酷似する個体がいる。卵嚢は紐状で長さは 80～120 mm、一腹卵数は 17～27 個。

【生活史】

成体は山地の谷沿いの落葉広葉樹林や針葉樹林内の林床の倒木下や砂礫中に生息し、5～6 月に湧水中で産卵する。孵化した幼生は湧水部内で、生活し、ほとんど餌をとらなくても変態できる。

【生息環境】

四国の標高 600 m 以上の山地の谷沿いの森林地帯。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】森林，河川源流域，河川上流域 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

四国（徳島県、愛媛県、高知県）の山地。標高 600 m 以上の主に自然林に生息する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

山塊や水系ごとに生息地が分断している。

【生息地の現況】

林道や堰堤の建設のほか、生息地の多くで、シカの食害による林床植生の変化が認められる。特に地表性の植物の減少によって林床の乾燥化が進んでいる。豪雨多発の影響で、斜面の崩壊が起こり、その復旧工事も相まって産卵に適した環境が減少している。

【個体数の現況】

源流部に生息するため正確な個体数は把握できていないが、近年、発見できる個体数は減少傾向にある。特定第二種国内希少野生動植物種に指定されたことにより、販売目的の採集圧は減少していると考えられる。

存続を脅かす要因

豪雨による産卵に適した谷環境の悪化、それに伴う復旧工事の影響。シカの食害による林床植生の変化。植生の変化や渇水による林床の乾燥化。密猟。森林の伐採。林道建設。観光開発や登山客の増加による登山道沿いの微環境の変化。気温上昇による天敵となる捕

食動物の増加。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，自然災害
	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，自然災害，違法採集，シカ食害

特記事項

比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義コガタブチサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	イヨシマサンショウウオ	*Hynobius kuishiensis*	VU
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- 松井正文・田辺真吾，2021．イヨシマサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 15，サンライズ出版，彦根.
- Tominaga, A., M. Matsui, S. Tanabe, and K. Nishikawa, 2019. A revision of *Hynobius stejnegeri*, a lotic breeding salamander from western Japan, with a description of three new species (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). Zootaxa, 4651: 401-433.

- 吉川貴臣，2018．コガタブチサンショウウオ．高知県レッドデータブック 2018 動物編．pp. 82．高知県文化環境部環境保全課，高知．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius kuishiensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius kuishiensis* is listed as EN under criteria B1ab+2ab.

B1+2. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km² AND area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Natural disasters, Illegal harvesting of biological resources, Deer feeding damage
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.



執筆者:	田辺真吾（日本爬虫両棲類学会）・松井正文（京都大学）
Author:	Shingo Tanabe and Masafumi Matsui

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

イズモサンショウウオ

***Hynobius kunibiki* Sugawara, Iwata, Yamashita et Nagano, 2021**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
分布域の大部分を占める中山間地では谷の隅々まで圃場整備が行われて生息地が断片化しており、残存する小集団は絶滅リスクが高い状態にある。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
残存する生息場所でも、圃場整備、耕作放棄、降雨量の減少等によって、本種の繁殖場所となる水たまりが少なくなっており、幼生が確認されにくくなっている。また、産卵が見られる道路側溝や集水枡も垂直なコンクリート護岸で囲まれており、上陸や移動が阻害されて正常に再生産が行われていない可能性がある。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

比較的大型で、前後肢は長くて常に第 5 趾を持ち、尾の上下縁には明瞭な黄色の条線があり、体側に明瞭な白斑を持たない。島根県東北部の狭い範囲のみから知られる。混交林に生息し、既知の産地の標高は 10～375 m。12 月から 3 月に繁殖する。主な繁殖場所は、水田横の溝や休耕田の水溜りなどであるが、管理放棄、圃場整備等によって乾燥化が進み、繁殖場所が消失する傾向にある。

基礎情報

【形態】

全長は 92～124 mm、平均 107 mm で、前後肢は比較的長くて会合することが多く、知られる限り常に第 5 趾を持つ。尾の上下縁には明瞭な黄色の条線がある。ヒバサンショウウオ、ハクバサンショウウオ、アキサンショウウオと単系統をなすが、形態的には別系統のサンインサンショウウオに近く、本種はそれに較べて頭胴長に対する胴長は小さく、頭長、尾長、鼻孔間長、上眼瞼間長、吻長、上眼瞼長が大きい。ヒバサンショウウオは尾の腹側の黄条を持たず、多くは体側に明瞭な白斑を持ち、第 5 趾を欠く点で本種と区別される。

【生活史】

非繁殖期は混交林の林床、草地で生活している。12 月から 3 月に林縁の止水中で繁殖する。約 40 個の卵を含む卵嚢を 1 対、水中の植物などに産み付ける。孵化した幼生は一般に秋までには変態、上陸して陸上生活に入るが、一部は幼生越冬し、翌年に変態すると思われる。性成熟年齢は不明である。

【生息環境】

シイとコナラの混交林を中心に生息する。繁殖場所は、主に水田横の溝や休耕田などの水たまりで、道路側溝や排水升も繁殖に利用される。ため池でも繁殖する可能性がある。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流 【陸域_平地部】森林，田地・畑地，湿地・湿原，農業用水路，ため池・池沼
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

中国地方中北部（島根県東北部）のみから知られる。既知の産地の標高は 10～375 m。分布域は東方をサンインサンショウウオ、西方をイワミサンショウウオ、南方をヒバサンショウウオで仕切られる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布範囲に大きな変化はないが、分布域の大部分を占める中山間地では圃場整備により分布域の大部分を占める中山間地では谷の隅々まで圃場整備が行われて生息地が縮小し、また断片化している。

【生息地の現況】

分布域の大部分を占める中山間地では、谷の隅々まで行われた圃場整備により、水がたまることが少なくなっている。主な繁殖場所となる水溜りのある水田でも、今後、耕作放棄等によって乾燥化が進むと、繁殖が困難になる可能性がある。道路側溝や排水升は、垂直な壁に囲まれていることから、成長後の上陸が困難と考えられ、繁殖に寄与していない

恐れがある。本種の成体を捕食する外来種のアライグマも島根県東部で分布を拡大している。

【個体数の現況】

詳細は不明だが、生息環境の状況から悪化傾向にあると考えられる。

存続を脅かす要因

幼生の繁殖場所は、主に人為的に維持されている止水域に限られるが、そうした環境が管理放棄されると、乾燥化により繁殖が困難になる可能性がある。さらに、圃場整備により道路側溝や排水升の垂直な壁に囲まれると、上陸とその後の移動が阻害されていることも考えられる。また、外来種のアライグマが分布を拡大しており、捕食の影響も懸念される。

要因の区分：	（過去）	湿地開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	湿地開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

広義ヒバサンショウウオには遺伝的に異なる 2 系統が認められていたが、形態的に狭義ヒバサンショウウオと異なり、サンインサンショウウオに似る系統が独立種イズモサンショウウオとして記載された。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義カスミサンショウウオ・広義ヒバサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- 林成多・大井和之，2020．島根県東部における止水性サンショウウオ類の分子系統解析．ホシザキグリーン財団研究報告，(23): 99-104.
- 林成多・大井和之，2022．島根県東部における止水性サンショウウオ類の分子系統解析Ⅱ．ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (30): 19-28.
- Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa, and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. Curr. Herpetol., 38: 32–90.
- Sugawara, H., T. Iwata, H. Yamashita, and M. Nagano, 2021. Taxonomic reassessment of the Izumo lineage of *Hynobius utsunomiyaorum*: Description of a new species from Chugoku, Japan. Animals, 2021, 11(8), 2187.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius kunibiki has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius kunibiki* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland, Wetland, Agricultural

	ditch, Reservoir/Pond
Threat types:	Wetland development, Field preparation, Land development, Transportation infrastructure construction, Water pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.



執筆者:	松井正文（京都大学）・髙橋洋生（自然環境研究センター）
Author:	Masafumi Matsui and Hiroo Takahashi

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ブチサンショウウオ

***Hynobius naevius* (Temminck et Schlegel, 1838)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
繁殖場所となる渓流を含む山域は連続していない。また、林道の整備や砂防ダムの建設等の開発行為により各山域内で個体群の分断化が進み、絶滅のリスクが高まっていると考えられる。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
脊振山系の佐賀県側などでは、砂防ダムの建設、治水ダムの建設や周辺道路の整備により、いくつかの生息地は環境が悪化している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種はかつて西日本に広く分布するとされたが、近年の研究で細分され、現在では九州西部地方の山地にのみ分布する。佐賀県脊振山系などの一部の地域でダムや砂防ダムの建設、林道の整備、森林伐採で生息地や産卵環境が減少しつつある。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長は 63～94 mm。背面は青紫色で斑紋を欠く。側面、腹部には白色の斑紋を持つ。3 月から 6 月初旬に山地渓流で繁殖。卵嚢は三日月型。卵径は 4.6～5.9 mm、一腹卵数は 15～23 個。幼生は孵化した年の秋までに変態するが、一部は幼生越冬する。

【生活史】

流水性のサンショウウオで、繁殖は 3 月末から 5 月末までの間に、水のきれいな小規模な山地渓流の源流部近くで行われる。孵化した幼生の多くは、その年の秋ごろまでに変態し、陸上生活に移るが、一部は幼生越冬し、当歳の幼生よりも大きくなってから次の年の初夏までに変態する。本種と混生する他のサンショウウオ類は知られていないが、地域によっては、低地の止水性のカスミサンショウウオの分布域に近接することもある。

【生息環境】

九州北西部の低山地から高山地まで分布するため、生息環境の標高は幅広い。植生もスギ、ヒノキの優占する人工林から、低山地の常緑広葉樹が優占する森林、高標高の落葉広葉樹が優占する森林まで幅広く分布する。本種の生息に不可欠なのが産卵や幼生の生息場所となる森林内の小渓流であり、その周辺での確認が多い。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

長崎県・佐賀県・福岡県西部に生息する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

福岡県西部、佐賀県、長崎県の山地に生息する。近縁なチクシブチサンショウウオ、チュウゴクブチサンショウウオなどと比べると分布域の範囲はもともと狭い。

【生息地の現況】

生息地は杉・ヒノキの人工林や広葉樹林の源流域であり、低地性の種に比べると開発の影響は少ないが、多くの生息地で林道が整備されており、そのほかダム、砂防ダムが近年も建設されており、全体としては生息地や産卵環境は減少傾向にあるものと思われる。本種の生息域でも最近、アライグマが増加しているという情報もあり、その影響が懸念される。

【個体数の現況】

一部地域では減少傾向が見られる。陸上生活に移ると、隠遁性が高い種であるため、個体数の把握は難しいが、良好な生息地ではそれなりに高い密度で生息していると考えられる。本種の販売は、禁止されているため商用に乱獲が進む恐れは低くなったが、個人レベルの飼育のための採集は続いていると考えられる。

存続を脅かす要因

具体的に懸念される脅威としては砂防ダムの建設、道路建設、森林伐採等の開発などによる生息地の破壊や産卵環境の消失、ペット飼育のための個人による採集、外来生物のアライグマによる捕食。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取

特記事項

比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義ブチサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ブチサンショウウオ	*Hynobius naevius*	EN
第４次 2019：	ブチサンショウウオ	*Hynobius naevius*	NT
第４次 2018：	ブチサンショウウオ	*Hynobius naevius*	NT
第４次 2017：	ブチサンショウウオ	*Hynobius naevius*	NT
第４次 2015：	ブチサンショウウオ	*Hynobius naevius*	NT
第４次：	ブチサンショウウオ	*Hynobius naevius*	NT
第３次：	ブチサンショウウオ	*Hynobius naevius*	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【島根県】準絶滅危惧(NT)，【山口県】準絶滅危惧(NT)，【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福岡県】準絶滅危惧(NT)，【佐賀県】準絶滅危惧種，【長崎県】絶滅危惧ⅠB類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- 松井正文，2010．ブチサンショウウオ．改訂レッドリスト付属説明資料 爬虫類・両生類，pp. 15．環境省自然環境局野生生物課，東京．
- 松井正文・見澤康充，1996．ブチサンショウウオ．千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏（編），日本動物大百科 5 両生類・爬虫類・軟骨魚類，pp. 19. 平凡社，東京．
- Tominaga, A. and M. Matsui, 2007. Estimation of the type locality of *Hynobius naevius* (Temminck and Schelegel. 1838), a salamander from Japan (Amphibia: Caudata). Zool. Sci., 24: 940–944.
- 富永篤，松井正文，2021．ブチサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 13，サンライズ出版，彦根．
- Tominaga, A., M. Matsui, K. Nishikawa, S. Tanabe, and S. Sato, 2005. Genetic differentiations of *Hynobius naevius* (Amphibia: Hynobiidae) as revealed by allozyme analysis. Biochem. Syst. Ecol., 33: 921–937.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius naevius has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius naevius* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	富永篤（琉球大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Atsushi Tominaga and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

オオスミサンショウウオ

***Hynobius osumiensis* Nishikawa et Matsui, 2014**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
生息地の間は平地によって分断されており、個体の移動は困難と思われる。残存する小集団は絶滅リスクが高い状態にある。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
繁殖している渓流の源流部での道路工事や伐採により、生息環境の劣化や消失が生じている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は限られた分布域を持つが、林道・トンネル建設や観光地化によって、生息環境の悪化が起こっており、その影響を受けている可能性がある。

基礎情報

【形態】

中型、頑丈で、全長は 110～125 mm。尾は短く、頭胴長の 70%程度。基部は太い円筒形だが、後方に向かうと側扁し、末端は鈍く終わる。鋤骨歯列は幅広い V 字型で、体側には通常 13 本の肋条をもつ。前後肢を体側に沿って折り返すと、1～4 肋鰥分の隙間を生じる。後肢は 5 趾性。背面は一様な暗紫色で、斑紋や斑点をもたないが、小型の個体で白点が見られる。腹面は背面より淡色。アカイシサンショウウオと最も似ているが、体はより大きく、第 5 趾はより発達する。幼生はブチサンショウウオの幼生に似ているがより大型で、頭部はより角張る。ハコネサンショウウオの幼生と違い、四肢後面に皮膚のひだをもたず、背鰭は胴の中央から始まり、四肢端の黒色の爪も強くは発達しない。

【生活史】

繁殖は年 1 回、3 月と推定されている。繁殖場所は山地にある渓流の源流近くと思われるが、卵が発見されたことはない。1 メスの卵数は 13～18 個。幼生は 4 月頃から水中で成長・発育し、多くは年内、一部は越冬して翌年の 6 月頃までに変態する。幼生は水生昆虫、ミミズ類、カイアシ類、サワガニ、ダニ、陸生昆虫類を食べる。変態後は渓流近くや斜面で、積み重なった岩石の間、林床の落葉・倒木の下などで生活し、昆虫類、ミミズ類を餌とする。土中で越冬する。繁殖個体の年齢の中央値はオスで 9 才、メスで 8 才。野外での寿命は不明であるが、少なくとも 13 年間は生きる。

【生息環境】

夏緑広葉樹林、針広混交林に生息する。既知の分布地点は標高 200～1,750 m の間にあり、ほとんどは 400 m 以上である。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】森林，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

九州地方の大隅半島の山地のみから知られる。本種と混生するサンショウウオ属の他種は知られていない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

生息地は河川、平地によって細かく分断される。分布面積、分布域縮小率の詳細は資料が少なく推定不能。

【生息地の現況】

本州では生息域の各所で森林伐採、林道建設が進んでいる。

【個体数の現況】

個体数は不明だが確実に減少している。

存続を脅かす要因

山岳道路、森林伐採と、それにともなう土砂の渓流への流入や、観光地化による水質汚濁のような生息環境の消失が種の存続を脅かしている。愛好者等による乱獲のおそれがある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオスミサンショウウオ	*Hynobius osumiensis*	EN
第４次 2019：	オオスミサンショウウオ	*Hynobius osumiensis*	EN
第４次 2018：	オオスミサンショウウオ	*Hynobius osumiensis*	EN
第４次 2017：	オオスミサンショウウオ	*Hynobius osumiensis*	EN
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- 松井正文，1995．オオダイガハラサンショウウオ．日本水産資源保護協会（編），日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（II），pp. 410-415．日本水産資源保護協会，東京．

- 松井正文，2000．本州・九州地域のオオダイガハラサンショウウオ．環境庁（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック―（爬虫類・両生類），pp. 110-111．財団法人自然環境研究センター，東京．
- 松井正文，2010．オオダイガハラサンショウウオ．改訂レッドリスト付属説明資料 爬虫類・両生類，pp. 12．環境省自然環境局野生生物課，東京．
- 松井正文・西川完途，2021．オオスミサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 17．サンライズ出版，彦根．
- Nishikawa, K. and M. Matsui, 2008. A comparative study on the larval life history in two populations of *Hynobius boulengeri* from Kyushu, Japan (Amphibia: Urodela). Cur. Herpetol., 27(1): 9–22.
- Nishikawa, K. and M. Matsui. 2014. Three new species of the salamander genus *Hynobius* (Amphibia, Urodela, Hynobiidae) from Kyushu, Japan. Zootaxa, 3852 (2):203–226.
- Nishikawa, K., M. Matsui and S. Tanabe, 2005. Biochemical phylogenetics and historical biogeography of *Hynobius boulengeri* and *H. stejnegeri* (Amphibia, Urodela) from the Kyushu region, Japan. Herpetologica., 61(1): 54–62.
- Nishikawa, K., M. Matsui, S. Tanabe, and S. Sato, 2001. Geographic enzyme variation in a Japanese salamander, *Hynobius boulengeri* Thompson (Amphibia, Caudata). Herpetologica., 57(3): 281–294.
- Nishikawa, K., M. Matsui, S. Tanabe, and S. Sato, 2007. Morphological and allozymic variation in *Hynobius boulengeri* and *H. stejnegeri* (Amphibia: Urodela: Hynobiidae). Zool. Sci., 24(7): 752–766.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius osumiensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius osumiensis* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction, Water pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants
Law designation status for	Nationally rare species of wild fauna and flora.

conservation	

執筆者:	西川完途（京都大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Kanto Nishikawa and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

イワキサンショウウオ

***Hynobius sengokui* Matsui, Misawa, Yoshikawa et Nishikawa, 2022**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab+2ab

基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B1+2．出現範囲が 5000 km²未満かつ生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。

【過度に分断】

分布域に関する情報は十分でないが、生息環境の破壊のために、各地で個体群の分断・孤立化が急速に進んでおり、残存する小集団は絶滅リスクが高い状態にある。

【地点数】5 地点以下

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

福島県下・茨城県下において、土地開発、道路工事の影響や、山間部の林道建設、圃場整備等の環境破壊の影響を受け、急速に生息場所数が減少している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は、関東地方に分布するトウキョウサンショウウオから分離されたもので、福島県東南部、栃木県東南部、茨城県北部の狭い範囲にのみ分布し、海岸近くから丘陵地で、後背部に森林をもつ水田や湧き水で繁殖する。宅地造成地整備等の土地開発、道路工事、山間部の林道、圃場整備による水田の乾田化や用水のコンクリート化、雑木林の松枯れ等の影響で産卵生息環境が減少している。

基礎情報

【形態】

頭胴長は 41～69 mm 程度。体側の肋条は 11～13、通常 12 本。四肢は比較的短く、前後肢を体側に沿って折り返すと、触れ合う程度から 2.5 肋鰭分の隙間ができる。鋤骨歯列はU字型。体色は褐色で不明瞭な暗点を散布し、尾の縁に黄色の条線をもつことはまれ。腹側には白色の小点を散布する個体もある。卵嚢はバナナ形で巻く事はなく、外被に条線を持たない。姉妹種トウキョウサンショウウオは、前後肢間がより短いが胴は長くて、より浅い鋤骨歯列をもつ。分布が接するトウホクサンショウウオは、前後肢を体側に沿って折り返すと、オスでは指の先が重なり合う個体が多い。肋条の数はふつう 11 本で、卵嚢外被に幅の狭い特異な条線が見られる。

【生活史】

繁殖期は 3～4 月。1 メスの産卵数は 32～104 個。繁殖場所は通常、湧水、水溜り、水田などの止水だが、緩やかな流水のこともある。卵嚢は石の下や水中の植物に産み付けられる。その後の生活史はトウキョウサンショウウオと同様。

【生息環境】

海岸に近い低標高地から中標高の丘陵地に分布し、近くに森林のある水田や湧き水の溜りなどで繁殖する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原・細流，ため池・池沼 【陸域_平地部】森林，草地，湿地・湿原，ワンド，農業用水路，小河川
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

本州東部の東北地方東南部と関東地方北東部の狭い範囲にのみ分布し、福島県東南部（いわき市）、栃木県東南部（茂木町）、茨城県北部（常陸太田市）から知られる。産地の標高は 11 m から 321 m である。福島県・栃木県では、クロサンショウウオ、トウホクサンショウオと分布が隣接する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現在の分布地点の多くは、すでに 1931 年のトウキョウサンショウウオの原記載時に知られていた。現在まで分布域に大きな変化は無かったと思われるが、絶滅したと見られる地点もある。分布域に関する情報は十分でないが、各地で個体群の分断化・孤立化が急速に進んでいる。

【生息地の現況】

福島県下・茨城県下ともに、土地開発、道路工事の影響や、山間部の林道、圃場整備等の環境破壊の影響を受け、急速に生息場所数が減少している。

【個体数の現況】

詳細な調査はないが、茨城県下では繁殖個体群サイズが減少したと考えられている。

存続を脅かす要因

宅地造成地整備等の土地開発、道路工事、山間部の林道、圃場整備による水田の乾田化や用水のコンクリート化、雑木林の松枯れ等の影響で産卵生息環境が減少している。

要因の区分：	（過去）	圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による）
	（現在）	圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による）

特記事項

かつては関東地方に分布するトウキョウサンショウウオの一部とされていたが、遺伝的に異なる別種であることがわかり分離された。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義トウキョウサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【福島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【栃木県】絶滅危惧Ⅰ類(A ランク)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- 青柳育夫・林 光武，2004．栃木県におけるトウキョウサンショウウオの分布と 2003 年に確認された卵嚢数．栃木県立博物館研究紀要，21: 25‐35.
- 環境省，2001，生物多様性調査：動物分布調査報告書（両生類・爬虫類），264pp．環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田.
- 草野保・川上洋一（編），1999，トウキョウサンショウウオは生き残れるか？（東京都多摩地区における生息状況調査報告書），トウキョウサンショウウオ研究会，東京．69pp.
- 松井正文・草野保，1997．トウキョウサンショウウオ，日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（IV）両生・爬虫類，pp. 292-302．日本水産資源保護協会，東京.
- Matsui, M., Y. Misawa, N. Yoshikawa, and K. Nishikawa. 2022. Taxonomic reappraisal of *Hynobius tokyoensis*, with description of a new species from northeastern Honshu, Japan (Amphibia: Caudata). Zootaxa 5168(2): 207-221.
- Matsui, M., A. Tominaga, T. Hayashi, Y. Misawa, and S. Tanabe, 2007. Phylogenetic relationships and phylogeography of *Hynobius tokyoensis* (Amphibia: Caudata) using complete sequences of cytochrome b and control region genes of mitochondrial DNA. Mol. Phyl. Evol., 44: 204–216.
- Okamiya, H., N. Hayase, and T. Kusano, 2021. Increasing body size and fecundity in a salamander over four decades, possibly due to global warming. Biol. J. Linn. Soc., 132 (3): 634–642.
- 大野正男，1979．トウキョウサンショウウオ．第 2 回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書（両生類・は虫類）全国版．pp. 50‐56．環境庁，東京.
- 田子勝彌，1931．東京霞山椒魚 蠑螈と山椒魚，pp. 114-120．芸艸堂，京都.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius sengokui has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius sengokui* is listed as EN under criteria B1ab+2ab.

B1+2. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km² AND area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Farmland, Abandoned farmland, Wetland/Marsh/Stream, Reservoir/Pond

	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Wetland, Inlet, Agricultural ditch, Small river
Threat types:	Field preparation, Land development, Transportation infrastructure construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.



執筆者:	松井正文（京都大学）
Author:	Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

サンインサンショウウオ

***Hynobius setoi* Matsui, Tanabe et Misawa, 2019**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
各生息地の連続性が道路など様々な人為的改変によって寸断されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息地の多くが乾燥化や開発の影響を受けている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は山陰地方固有の止水産卵型の小型サンショウウオである。2019 年にカスミサンショウウオから分けられた。各地で生息地の開発が進んで激減しており、地域個体群が絶滅した例もある。

基礎情報

【形態】

体は大型（オス 83～117 mm、平均 103 mm）、四肢は比較的長く、ほとんど常に第 5 趾を持つ。尾の上下縁には黄色の条線をもつ個体が多い。ホクリクサンショウウオ、ミカワサンショウウオ、クロサンショウウオと単系統をなす。ヤマトサンショウウオより前後肢の重なりが大きく、肋皺の数が少ない。セトウチサンショウウオに比べ、大型で胴と鋤骨歯列が短く、肋皺の数が少ない。

【生活史】

本州の山陰地方東部（兵庫県北西部から島根県東部）に分布し、丘陵地で生活する。1 月から 3 月に湿地や水田の溝などの止水域に産卵する。孵化した幼生は止水中で生活し、初夏に変態上陸する個体が多い。ヒダサンショウウオ、チュウゴクブチサンショウウオと垂直的にすみ分けている。

【生息環境】

一般には低地から丘陵地の湧水や、水田と隣接した二次林、竹林、草地に生息する。産卵や幼生の成長に必要な比較的浅い止水環境と変態後の個体が生息する林が連続して存在する必要がある。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原・細流 【陸域_平地部】森林，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，ため池・池沼
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

兵庫県北西部から島根県東部までの日本海沿いの、主に低地から知られる。耕作放棄による湿地の減少などにより確実に減少していると思われる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

多くの産地は市街地や山地によって著しく分断され、すでに絶滅した地点が多い。現在の生息状況はほとんどの地点で不明であるが、基準産地付近では太陽光発電施設の設置により生息地が消失した。

【生息地の現況】

生息に必要な水の枯れない止水環境と、それに隣接した森林、草地などの陸上環境という条件は、都市近郊では丘陵地に集中しているが、その様な場所は近年もっとも開発が進む環境となっている。

【個体数の現況】

個体数は不明だが、絶滅地点が多いことから近年急速に個体数も減少していることは間

違いない。生息密度は季節的、年次的ともに不明である。

存続を脅かす要因

大規模な土地開発による生息地の消失と、それに伴う汚水の流入などの水質悪化、減反による水田の乾燥化が最大の脅威となってきた。愛好者等による採集も頻繁に行われている。アメリカザリガニの他、地域によっては外来の捕食性魚類も本種の生存を脅かしている。

要因の区分：	（過去）	湿地開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	湿地開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移，発電施設建設

特記事項

比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義カスミサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	サンインサンショウウオ	*Hynobius setoi*	EN
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【兵庫県】A ランク，【鳥取県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- 松井正文，2010．カスミサンショウウオ．改訂レッドリスト付属説明資料 爬虫類・両生類，pp. 13．環境省自然環境局野生生物課，東京.
- Matsui, M., K. Nishikawa, S. Tanabe, and Y. Misawa, 2001. Systematic status of *Hynobius tokyoensis* (Amphibia: Urodela) from Aichi Prefecture, Japan: A biochemical survey. Comp. Bioch. Physiol. B., 130: 181–189.
- Matsui, M., K. Nishikawa, T. Utsunomiya, and S. Tanabe, 2006. Geographic allozyme variation in the Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Urodela). Biol. J. Linn. Soc., 89: 311–330.
- Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa, and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. Cur. Herpetol., 38: 32–90.
- Matsuki, T. and M. Matsui, 2011. A skeletochronological study of breeding females in a population of Japanese clouded salamanders (*Hynobius nebulosus*). Zool. Sci., 28: 175–179.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius setoi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius setoi* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland/Marsh/Stream 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Reservoir/Pond
Threat types:	Wetland development, Field preparation, Land development, Transportation infrastructure construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Abandonment of management, Successional

	progression/Vegetation change/Natural succession, Power plant construction
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.

執筆者:	田辺真吾（日本爬虫両棲類学会）・松井正文（京都大学）
Author:	Shingo Tanabe and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ソボサンショウウオ

***Hynobius shinichisatoi* Nishikawa et Matsui, 2014**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
生息地の間は深い峡谷によって分断されており、個体の移動は困難と思われるため。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
繁殖している渓流の源流部での道路工事や砂防ダムの建設により、河川が埋まった例が大分県側と宮崎県側で確認されている。また近年の台風により表土の流失が起こり、繁殖場所を埋めている例もあり、それらの脅威は現在も継続していることから。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種には、林道建設や観光地化によって生息環境の悪化が起こっており、ただちに影響を受ける状態にある。

基礎情報

【形態】

体は大型、頑丈で、全長は 116～180 mm。尾は長く、頭胴長より少し短い程度である。鋤骨歯列は幅の広い V 字型で、体側には通常 13～14 本の肋条をもつ。前後肢を体側に沿って折り返すと、0.5～2.5 肋鰭分の隙間を生じる。後肢は 5 趾性。尾は胴より長く、基部は太く後半部で著しく側偏し、末端は鈍く終わる。背面は一様な石板色で、斑紋や斑点をもたない。腹面は背面より淡色。四国産のイシヅチサンショウウオに最も似ているが、体はより小さくて華奢、鋤骨歯列はより深い。幼生はブチサンショウウオの幼生に似ているがより大型で、頭部はより角張る傾向がある。ハコネサンショウウオの幼生と違い、四肢後面に皮膚のひだをもたず、背鰭は胴の中央から始まり、四肢端の黒色の爪も強くは発達しない。

【生活史】

繁殖は年 1 回、4 月～5 月で、産卵は渓流の岩盤の隙間や岩石の下など、日光の差し込まない場所でなされる。1 メスの産卵数は 30～57 個程度。幼生は 5 月頃から水中で成長・発育し、一部は年内、多くは越冬して翌年の 9 月頃までに変態するが、翌々年に変態するものもいる。幼生は水生昆虫、ミミズ類、サワガニ、陸生昆虫類を食べる。変態後は渓流近くや斜面で、積み重なった岩石の間などで生活し、クモ類、昆虫類、ミミズ類を餌とする。土中で越冬する。繁殖個体の年齢の中央値はオスで 9 才、メスで 11 才。野外での寿命は不明であるが、少なくとも 13 年間は生きる。

【生息環境】

夏緑広葉樹林、針広混交林に生息する。既知の分布地点は標高 550～1,400 m の間にある。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】森林，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

九州地方の祖母山地を中心とした狭い範囲（大分県、宮崎県、熊本県の 3 県）の山地からのみ知られる。本種と同様に流水産卵性のコガタブチサンショウウオと混生する場合がある。幼生段階で他種と生態的にすみ分けている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布面積は不明。峡谷によって細かく分断される。分布域縮小率は資料が少なく推定不能。

【生息地の現況】

繁殖している渓流の源流部での道路工事や砂防ダムの建設により、河川が埋まった例が大分県側と宮崎県側で確認されている。また近年の台風により表土の流失が起こり、繁殖

場所を埋めている例もあり、それらの脅威は現在も継続している。一部生息域では、堰堤が建設され幼生の生息場所が狭められている。

【個体数の現況】

個体数は不明だが確実に減少している。

存続を脅かす要因

山岳道路、砂防堰堤の建設、森林伐採と、それにともなう土砂の渓流への流入のような生息環境の消失が種の存続を脅かしている。愛好者等による乱獲のおそれがある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	森林伐採，河川開発，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取

特記事項

大分県の天然記念物に指定されている（地域指定）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ソボサンショウウオ	*Hynobius shinichisatoi*	EN
第４次 2019：	ソボサンショウウオ	*Hynobius shinichisatoi*	EN
第４次 2018：	ソボサンショウウオ	*Hynobius shinichisatoi*	EN
第４次 2017：	ソボサンショウウオ	*Hynobius shinichisatoi*	EN
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【熊本県】絶滅危惧ⅠA類(CR)，【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【宮崎県】絶滅危惧ⅠB類(EN-r)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- 松井正文，1995．オオダイガハラサンショウウオ．日本水産資源保護協会（編），日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（II），pp. 410‐415．日本水産資源保護協会，東京．
- 松井正文，2000．本州・九州地域のオオダイガハラサンショウウオ．環境庁（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-（爬虫類・両生類），pp. 110‐111．財団法人自然環境研究センター，東京．
- 松井正文，2010．オオダイガハラサンショウウオ．改訂レッドリスト付属説明資料 爬虫類・両生類，pp. 12．環境省自然環境局野生生物課，東京．
- 松井正文・西川完途，2021．ソボサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 17．サンライズ出版，彦根．
- Nishikawa, K. and M. Matsui, 2008. A comparative study on the larval life history in two populations of *Hynobius boulengeri* from Kyushu, Japan (Amphibia: Urodela). Cur. Herpetol., 27(1): 9–22.
- Nishikawa, K. and M. Matsui, 2014. Three new species of the salamander genus *Hynobius* (Amphibia, Urodela, Hynobiidae) from Kyushu, Japan. Zootaxa, 3852 (2):203–226.
- Nishikawa, K., M. Matsui, and S. Tanabe, 2005. Biochemical phylogenetics and historical biogeography of *Hynobius boulengeri* and *H. stejnegeri* (Amphibia, Urodela) from the Kyushu region, Japan. Herpetologica, 61(1): 54–62.
- Nishikawa, K., M. Matsui, S. Tanabe, and S. Sato, 2001. Geographic enzyme variation in a Japanese salamander, *Hynobius boulengeri* Thompson (Amphibia, Caudata). Herpetologica, 57(3): 281–294.
- Nishikawa, K., M. Matsui, S. Tanabe, and S. Sato, 2007. Morphological and allozymic variation in *Hynobius boulengeri* and *H. stejnegeri* (Amphibia: Urodela: Hynobiidae). Zool. Sci., 24(7): 752–766.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius shinichisatoi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius shinichisatoi* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest, River headwater,

	Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Land development, Transportation infrastructure construction, Water pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.



©江頭幸士郎（北九州市立自然史・歴史博物館）



©江頭幸士郎（北九州市立自然史・歴史博物館）

執筆者:	西川完途（京都大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Kanto Nishikawa and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ヒロシマサンショウウオ

***Hynobius sumidai* Sugawara, Naito, Iwata et Nagano, 2022**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　—	基準 B:　EN	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
生息範囲が小さいことに加え、開発等により分断され、残存する小集団は絶滅リスクが高い状態にある。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息地は都市部に近いため開発の影響を受けやすく、また圃場整備等による生息環境の劣化・消失も進行している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は広島県南部の特定の地域にある水田や湿地の周辺に固有の止水産卵型の小型サンショウウオである。2019 年にカスミサンショウウオから分けられ、新種とされたアキサンショウウオから、2022 年にゲイヨサンショウウオと共に、独立種として記載された。原記載では、東広島でゲイヨサンショウウオと同所分布するとされたが、それは誤りである。推定される生息範囲は極めて小さく、繁殖集団も、多くはごく小規模な集団として存在する。生息地は、人為的な環境改変に晒されやすい場所にあり、すでに分断も進んでおり、各集団が存続するための基盤は脆弱である。

基礎情報

【形態】

頭胴長は雄で 36～57（平均 48）mm、全長は 59～103（平均 83）mm、雌で 48～56（平均 52）mm、全長は 76～95（平均 87）mm と小型。肋条数は雄で 12 本から 13 本で多くは 12 本、雌で 11 本から 12 本で多くは 12 本。鋤骨歯列は V 字形。四肢は比較的短く、体側に沿って伸長すると前後肢は雄で 0～2 肋鰭分、多くは 1 肋鰭分、雌で 0.5～3 肋鰭分、多くは 2 肋鰭分分離する。後肢第 5 趾は発達しない。尾の基部は円筒形だが、後方に向って側偏する。背面は淡褐色で小さな暗色斑紋をもつ。腹面には小さな白色の斑紋がある。尾の上縁には不明瞭な黄色の条線があるが、下縁では不明瞭。

【生活史】

繁殖は 2 月～4 月に水田の溝、湿地、緩やかな流れで行われる。卵嚢は短くゆるいコイル状。1 雌の産卵数は 3～67（平均 26）個。幼生は通常秋までに変態する。

【生息環境】

既知の産地は混交林につながる湿地、水田で、標高は 160～455 m である。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流 【陸域_平地部】森林，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域

【分布域】

中国地方中部の狭い地域に極限される。即ち、広島県中南部の東広島市（かつての西条町、黒瀬町、福富町、豊栄町、安芸津町、八本松町を含む）、竹原市、呉市から知られる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域は Sugawara et al.（2021）と、その分類を正した Tomimori et al.（2023）の標本情報によるが、現在の生息状況が不明な場所も多い。竹原市ではタイプ産地である田万里町と仁賀町で 2019 年から 2022 年に確認されている。Sugawara et al.（2021）は仁賀町産をゲイヨサンショウウオとしている。東広島市では旧西条町、旧八本松町吉川、旧安芸津町で 2007-2021 年に確認されている。Sugawara et al.（2021）は、旧西条町には本種とゲイヨサンショウウオが同所分布するとした。旧黒瀬町でも 1986 以降、2023 年にも確認されている。また、旧高屋町、福富町、豊栄町でも記録があるというが確認年は不明。呉市では 1990 年に確認された後、2007-2017 年の間に Sugawara et al.（2021）によってゲイヨサンショウウオとして確認されているが、2018 年以降、絶滅した可能性もあるという。

【生息地の現況】

個々の産地の多くは市街地や山地によって分断され、すでに絶滅したと想定され地点もある。現在の生息状況はほとんどの地点で不明であるが、湧水の減少、開発等は進んでい

る。

【個体数の現況】

個体数は不明だが、断片的な調査記録から過去に比べ個体数が減少していることは間違いない。生息密度は季節的、年次的ともに不明。

存続を脅かす要因

土地開発による生息地の消失と、それにともなう汚水の流入などの水質悪化、減反による水田の乾燥化による繁殖地の消失が最大の脅威となってきた。アメリカザリガニや外来の捕食性魚類も本種の生存を脅かしていることが推定される。その他、気候変動に伴う気温、雨量の変化も天然の水場に影響していると思われる。

要因の区分：	（過去）	圃場整備，ゴルフ場，土地造成，捕獲・狩猟/園芸採取，遷移進行・植生変化/自然遷移，混獲・錯誤捕獲
	（現在）	圃場整備，土地造成，捕獲・狩猟/園芸採取，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

かつて西日本に広域分布するとされたカスミサンショウウオが、遺伝子解析等の研究が進んだ結果、細分された（Matsui et al., 2019）。その一つアキサンショウウオは、さらに細分され、ヒロシマサンショウウオとゲイヨサンショウウオが独立種として区分された（Sugawara et al., 2021）。原記載では、両者は同所分布する場合もあるとされたが、より詳細な解析の結果その分布域は見直され、広島県産のゲイヨサンショウウオの分布域は島嶼域に限定され、本種の分布域はここに示す範囲とされた（Tomimori et al., 2023）。こうした異なる見解の妥当性を確認するうえでも、各地の個体群がそれぞれ重要性をもっている。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義カスミサンショウウオ・広義アキサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—

第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa, and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. Current Herpetology, 38: 32–90.
- Sugawara, H., J. Naito, T. Iwata, and M. Nagano, 2022. Molecular phylogenetic and morphological problems of the Aki salamander *Hynobius akiensis*: Description of two new species from Chugoku, Japan. Bull. Kanagawa Pref. Mus. (Nat. Sci.) , 51: 35-46.
- Tomimori, Y., M. Matsui, H. Okawa, K. Nishikawa, S. Tanabe, and R. Kamasaka, 2023. Reassessment of species delimitation using nuclear markers in three lentic-breeding salamanders from the Chugoku District of Japan (Amphibia: Caudata: Hynobiidae). Zootaxa, 5293 (1): 145–160.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius sumidai has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius sumidai* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland, Abandoned farmland,

	Wetland
Threat types:	Field preparation, Land development, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.

執筆者:	松井正文（京都大学）
Author:	Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

タゴサンショウウオ

***Hynobius tagoi* Dunn, 1923**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab				
基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
森林伐採や河川工事で、生息環境が減少している可能性が高い。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

小さな島に生息する国内の小型サンショウウオは珍しく、さらに流水産卵性の種は限られる。繁殖場所かつ幼生の生息場所である渓流と、その周辺の変態後個体の生息環境である林床の破壊が絶滅に直結する可能性のある種である。

基礎情報

【形態】

全長 101～134 mm、頭胴長 56～71 mm。肋条数は 13 本、鋤骨歯列は深いＶ字型。体色は灰褐色で、細かい黒点がある。尾の背稜は他より少し色が薄い。幼生は、止水性のサンショウウオに見られるバランサーをもち、指先に爪がない。

【生活史】

2～3 月頃に産卵し、ツシマサンショウウオよりも早い。ゆるやかな渓流の浅い水中の石の下などに卵嚢が産みつけられる。産卵数は 21～62。幼生は渓流中で生活し、その年の秋に変態・上陸する。越冬幼生は知られていない。

【生息環境】

平地から丘陵の森林の小さな渓流周辺に生息する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(4) 河川・湿地地域

【分布域】

対馬のみに分布。上島に広く分布するが、下島の北部にもわずかに生息している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

上島と下島は 1900 年に掘削されて万関瀬戸が開通したために、現在は分断されている。他の島の分布記録はない。生息地では個体数が多いことが普通。

【生息地の現況】

沢の砂防堰堤建設や周辺の樹林伐採が進んでいるほか、丘陵の谷の開口部の舗装道路の建設、宅地化などの開発が進み、好適な生息環境が失われてきている。

【個体数の現況】

個体数は不明だが減少している可能性がある。

存続を脅かす要因

幼生は水温の上昇に弱いことから沢の水温環境の悪化が悪影響を及ぼす可能性がある。マニアや業者による違法捕獲が行われている可能性がある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，分布・産地局限

特記事項

比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義カスミサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- Niwa, K., M. Kuro-o, and K. Nishikawa, 2021. Discovery of two lineages of *Hynobius tsuensis* (Amphibia, Caudata) endemic to Tsushima Island, Japan. Zoological Science, 38: 259–266.
- Niwa, K., D. V. Tran, and K. Nishikawa, 2022. Differentiated historical demography and ecological niche forming present distribution and genetic structure in coexisting two salamanders (Amphibia, Urodela, Hynobiidae) in a small island, Japan. PeerJ, 10: e13202.
- Niwa, K., N. Yoshikawa, K. Nishikawa, and M. Matsui, 2022. Development of eight microsatellite markers for the Tsushima salamander, *Hynobius tsuensis*, and its close relatives (Amphibia: Caudata) with preliminary analysis of genetic differentiation. Current Herpetology, 41: 125–131.
- Niwa, K., K. Nishikawa, M. Matsui, S. Kanamori, and M. Kuro-o, 2023. Taxonomic reassessment of salamanders (genus *Hynobius*) from Tsushima Islands, Japan, with a resurrection of *Hynobius tagoi* Dunn, 1923 (Amphibia: Caudata). Zootaxa, 5339 (3): 201‑236.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius tagoi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius tagoi* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Transportation infrastructure construction, Limited distribution
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.



©戸田光彦（自然環境研究センター）



©戸田光彦（自然環境研究センター）

執筆者:	西川完途（京都大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Kanto Nishikawa and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ホクリクサンショウウオ

***Hynobius takedai* Matsui et Miyazaki, 1984**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B1. 出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
確認されている地点数が少ないことに加え、開発等により生息地が分断され、分断化された小集団は絶滅リスクが高い状態にある。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
既知の生息地では、開発、ゴミの投棄、異常渇水等により生息環境の消失と質の低下が断続的に生じていることに加え、愛好者等による採集やアメリカザリガニ等の外来種の侵入も進んでおり、絶滅リスクが高まっている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は 1971 年 4 月に竹田俊雄氏により、石川県羽咋市で発見され、1982 年 6 月に富山県下でも発見されたが、その後、これら 2 県以外では発見されていない。既知の生息地の多くで、環境の破壊と個体数の減少が起こっている。

基礎情報

【形態】

全長はオスで 108 mm、メスで 101 mm 程度。肋条数は通常 12 本。鋤骨歯列は比較的浅いU字またはV字型。前後肢を体側に沿って折り返すと、前後の指間に 0.5～2 肋皺分の隙間ができる。後肢は 5 指性。背面はオスでは黒褐色、メスでは黄褐色で、メスでは不明瞭な斑紋が散在する。卵嚢表面には明瞭な条線をもたない。アベサンショウウオほど尾が著しく側偏することはなく、オスでも顕著な鰭状にならない。トウホクサンショウウオより頭部が小さく、尾はずっと短い。卵嚢外被に顕著な条線をもたない点でもそれらと明瞭に区別される。

【生活史】

成体は冬眠期を除き、活動を行うと思われるが、人目につくのはおもに繁殖期のみである。年 1 回、1 月下旬～4 月上旬にかけて繁殖する。繁殖は林縁にある池や水田の溝、林道の側溝など、緩やかな流れの中で行われる。大型のオスは約 22 cm×22 cm の繁殖縄張をもつ。産卵は水中の石の裏、落葉や枝、藻の下、穴の中など、物陰になされる。繁殖密度は、最大でメス 50 個体程度。1 メスの産卵数は 26～148（平均約 89）個である。幼生は 3 月頃から水中で小さい節足動物、環形動物を食べ、共食いもして成長発育し、6～9 月頃に全長 40 mm ほどで変態、上陸するが、幼生越冬する場合もある。変態後は倒木や岩石の下、落葉の下などで単独で生活し、節足・軟体・環形動物を主食とする。繁殖個体の平均年齢は不明であるが、ふ化後、オスで 4～6 年、メスで 5～6 年かかって性的成熟し、寿命はオスで 7 歳という報告がある。

【生息環境】

丘陵地や低山地で、縁に湧水のある池や水田の溝、林道の側溝などの繁殖場所を有する夏緑広葉樹の二次林、スギ人工林に生息する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，湿地・湿原・細流 【陸域_平地部】森林，湿地・湿原，農業用水路，小河川，ため池・池沼
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（3）都市地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

石川県下のかほく市（旧宇ノ気町）以北の能登半島と、富山県下の数地点に限って分布する。すべての産地は 1970 年代以降に発見されたもので、存在が一般に知られ、また土地開発にともなう環境影響評価調査が進むとともに分布記録は増加してきた。アベサンショウウオと石川県中部で分布を接し、地理的に隔離されている。クロサンショウウオと混生する場合がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布面積は約 1,500 km²。石川県と富山県の分布域は完全に分断されている。開発や渇水

等によって本種の生息適地は減少しているが、分布域の縮小率は資料が少なく推定不能。

【生息地の現況】

石川県下の産地の多くは道路や人家の近くであり、時代とともに生息環境は悪化している。

【個体数の現況】

現在推定される石川県下の成体個体数は、2,000 個体前後と見積もられる。タイプ産地である羽咋市では毎年わずか約 30 腹分の卵嚢が見られるにすぎない。富山県下でも個体数は減少している。

存続を脅かす要因

タイプ産地である羽咋市の調査では、土砂崩れによって繁殖池が埋まった例、異常渇水によって水位が低下したため鳥による幼生の捕食が起こった例、水質悪化のため卵が白濁し、死滅した例が知られる。田鶴浜町のある産地では、開発によって繁殖池周囲が整備された後、産卵数の激減が起こり、現在ではほぼ壊滅状態である。七尾市の一部では、道路の側溝にかろうじて少数の産卵が行われているが、ゴミの投棄による水質汚濁が大きな脅威となっている。愛好者等による過度の捕獲の危険、アメリカザリガニによる幼生の捕食の可能性がある。

要因の区分：	（過去）	土地造成，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），捕食（在来種による），自然災害
	（現在）	土地造成，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），捕食（在来種による），自然災害

特記事項

日本産の小型サンショウウオ類は分化が著しく、各地域に固有の種が分布するが、本種は東北日本と西南日本の広域分布小型サンショウウオ類にはさまれる形の狭い分布域を有しており、日本産小型サンショウウオ類、とくに止水性の種の進化を探るうえで重要な種である。個体群間の酵素蛋白組成の違いはごくわずかである。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ホクリクサンショウウオ	*Hynobius takedai*	EN
第４次 2019：	ホクリクサンショウウオ	*Hynobius takedai*	EN
第４次 2018：	ホクリクサンショウウオ	*Hynobius takedai*	EN
第４次 2017：	ホクリクサンショウウオ	*Hynobius takedai*	EN
第４次 2015：	ホクリクサンショウウオ	*Hynobius takedai*	EN
第４次：	ホクリクサンショウウオ	*Hynobius takedai*	EN

第３次:	ホクリクサンショウウオ	*Hynobius takedai*	EN
第２次:	ホクリクサンショウウオ	*Hynobius takedai*	EN
第１次:	ホクリクサンショウウオ	*Hynobius takedai*	E

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【富山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【石川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

都道府県条例指定種【富山県・石川県】

参考文献

- 秋田喜憲，2010．ホクリクサンショウウオの移植．爬虫両棲類学報，2010(1): 22‐3．
- 秋田喜憲．2020．ホクリクサンショウウオ いしかわレッドデータブック 2020 動物編．pp. 87．石川県生活現境部自然環境課．
- 松井正文，2000．ホクリクサンショウウオ，環境庁（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック―（爬虫類・両生類）pp. 74‐75，財団法人自然環境研究センター，東京．
- 松井正文，2021．ホクリクサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 21．サンライズ出版，彦根．
- Matsui, M. and K. Miyazaki, 1984. *Hynobius takedai* (Amphibia, Urodela), a new species of salamander from Japan. Zool. Sci., 1: 665–671.
- 宮崎光二，1978．石川県のアベサンショウウオ．動物と自然，8(9): 21‐24．
- 宮崎光二・竹田俊雄，2000．ホクリクサンショウウオ．両生類誌，4: 18‐22．
- Nambu, H., 1986. On *Hynobius takedai* (Urodela, Hynobiidae) from lowland of Toyama Prefecture, Central Japan. Bull. Toyama Sci. Mus. 9: 73–85.
- 竹田俊雄，1995．ホクリクサンショウウオ，日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（II），pp. 401‐404，日本水産資源保護協会，東京．
- 富山県生活環境文化部自然保護課（編）．2012．ホクリクサンショウウオ．レッドデータブックとやま 2012，pp. 79．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius takedai has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius takedai* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two

of a-c: a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations. b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Wetland/Marsh/Stream 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Wetland, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond
Threat types:	Land development, Water pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Predation (by native species), Natural disasters
Law designation status for conservation	Prefectural Ordinance-Designated Species【Toyama・Ishikawa】.



執筆者:	松井正文（京都大学）
Author:	Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

トウキョウサンショウウオ

***Hynobius tokyoensis* Tago, 1931**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　A2

基準 A:　EN	基準 B:　―	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。

【比較年】

3 世代（30 年）

【過去の状況】

東京都での 1998 年～2018 年の 20 年間のモニタリング調査で、繁殖メス個体数が 6300 頭から 3900 頭に減少したと推定された。20 年間で 62%に減少したので、同じ率で減少すると 30 年間の減少率は 49%となる。そこで、現在の個体数をこの率で割ることによって 30 年前の個体数を推定した。

【近年の状況】

東京都での 2018 年の 20 年間のモニタリング調査で得られた各産卵場での産卵卵嚢数のデータより、2018 年時点の東京全地域で総卵嚢数を推定した。1 繁殖期に 1 メスは 2 卵嚢産卵するので、総卵嚢数の半数がメスの個体数となる。本種の分布域全体での個体群サイズの定量的評価に関する情報はないが、生息状況に関する文献情報等により他の 4 県においても個体群衰退の傾向はおおむね東京都と似たものであると推察される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は、関東地方の群馬・茨城県を除く 1 都 4 県に分布し、丘陵地の落葉広葉樹の二次林やスギ・ヒノキの人工林に生息し、山間の水田や湧き水の溜りなどで繁殖する。丘陵地の開発による生息地の破壊・消失により分布域の縮小・個体群の分断・孤立化が顕著である。近年は、休耕田化による乾燥化により産卵場が消失し、さらに外来種による捕食・愛好者等による採集により衰退傾向に歯止めが掛かっていない。

基礎情報

【形態】

全長は 80～130 mm 程度。体側の肋条は通常 12 本。四肢は比較的短く、前後肢を体側に沿って折り返すと、わずかに触れ合う程度から 2.5 肋鰓分の隙間ができる。鋤骨歯列は小さいU字型。体色は、黄色味の強い褐色から黒色まで変異に富み、尾の縁に黄色の条線をもつことはまれ。体側には青白色の小点が地衣状斑となっている個体もある。愛知県以西に分布する近縁種ヤマトサンショウウオは、深くて狭く長いV字型の鋤骨歯列をもち、肋条の数が普通 13 本で、尾の縁に黄色の条線が入る。栃木県にも分布するトウホクサンショウウオは、前後肢を体側に沿って折り返すと、オスでは指の先が重なり合う個体が多く、肋条の数はふつう 11 本で、卵嚢外被に幅の狭い特異な条線が見られる。

【生活史】

2～4 月の早春に繁殖場に集まり産卵する。メスは平均 50～140 個の卵をクロワッサン状の 1 対の卵嚢に入れて水中に産卵する。5 月末までにふ化した幼生は、動物プランクトンや水生昆虫などを捕食して成長し、初夏～10 月頃までには変態し上陸する。上陸した幼体は、繁殖場周辺の森林の林床に広く分散して土壌動物を捕食しゆっくり成長する。活動期は 4～11 月で、繁殖開始まで 3～5 年を要する。大多数の個体は変態上陸期以前に死亡するが、性成熟まで達した個体の年生残率は高く、寿命も長い。野外の繁殖オスの年齢構成を見ると 10 歳以上の個体が 7～35%を占め、最高 21 歳の個体が観察された。飼育下では 30 歳以上の記録もある。

【生息環境】

海岸地域から標高 300 m 程度の丘陵地の落葉広葉樹の二次林やスギ・ヒノキの人工林に生息し、山間の水田や湧き水の溜りなどで繁殖する。種分布モデルによる解析では、年平均気温 13℃以上で森林割合の高い地域が生息環境として好適であると推定された。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流，ため池・池沼 【陸域_平地部】森林，耕作放棄地，湿地・湿原，農業用水路，小河川，ため池・池沼
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

関東地方の群馬・茨城県を除く 1 都 4 県の丘陵地に分布する。近縁種であるヤマトサンショウウオは愛知県以西に分布し、全く分布域が重ならない。クロサンショウウオ、トウホクサンショウウオとは栃木県で、ヒガシヒダサンショウウオとは東京都・埼玉県で分布が隣接するが、同所的に生息する地域は知られていない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

地区により分布域に関する情報の量・精度は異なる。過去の生息地点も加えた生息地面積（2 km セルサイズで算出）は、全体で 1200 km²と推定された。都県別に見ると、栃木県は 170 km²、埼玉県は 290 m²、東京都は 220 km²、神奈川県は 50 km²、千葉県が最大で 510 km²となった。ただし、詳細な生息状況が 1990 年代後半よりモニタリングされている東京都では、2018 年時点では 184 km²と約 16%の減少が見られた。減少率推定は過小評価の傾向が強いと思われるが、他の地域でも開発等による土地改変などの影響でおおむね同じような状況かと推察される。

【生息地の現況】

東京都では、宅地開発・道路建設・ゴルフ場造成などによる丘陵地開発が進み、多くの生息環境が 1990 年代末までに失われた。その後 20 年間は開発よりも、山間部の水田の耕作放棄にともなう乾燥化による繁殖場環境の消失および劣化が問題となっている。千葉県・栃木県・神奈川県などその他の地域でも同様と思われる。

【個体数の現況】

東京都では、詳細な産卵調査の結果、繁殖メスの個体数は 3,900 個体と推定された。産卵場の消失および存続産卵場での繁殖個体群サイズの減少により、この 40 年間でほぼ 40%弱に減少したと推定された。千葉県・栃木県でもほぼ同じような減少傾向が報告されている。

存続を脅かす要因

1990 年代末までは、宅地開発・ゴルフ場造成・道路建設などの丘陵開発による生息地破壊が個体群衰退の主要な原因であった。最近は、谷戸田の休耕田化による繁殖場の乾燥化により多くの産卵場が消失している。さらに、アライグマ・アメリカザリガニなどの外来種による捕食、および愛好者等による採集が大きな脅威となりつつある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，ゴルフ場，土地造成，交通インフラ建設，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，ゴルフ場，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移，近交弱勢

特記事項

比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義トウキョウサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	トウキョウサンショウウオ	*Hynobius tokyoensis*	VU

第４次 2019：	トウキョウサンショウウオ	*Hynobius tokyoensis*	VU
第４次 2018：	トウキョウサンショウウオ	*Hynobius tokyoensis*	VU
第４次 2017：	トウキョウサンショウウオ	*Hynobius tokyoensis*	VU
第４次 2015：	トウキョウサンショウウオ	*Hynobius tokyoensis*	VU
第４次：	トウキョウサンショウウオ	*Hynobius tokyoensis*	VU
第３次：	トウキョウサンショウウオ	*Hynobius tokyoensis*	VU
第２次：	東京都のトウキョウサンショウウオ	*Hynobius nebulosus tokyoensis*	LP
第１次：	東京都のトウキョウサンショウウオ個体群	*Hynobius nebulosus tokyoensis*	LP

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【茨城県】準絶滅危惧,【栃木県】絶滅危惧Ⅱ類(B ランク),【埼玉県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（北多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【神奈川県】絶滅危惧Ⅰ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- 青柳育夫・林光武，2004．栃木県におけるトウキョウサンショウウオの分布と 2003 年に確認された卵嚢数．栃木県立博物館研究紀要，21: 25-35．
- 金田正人・大野正，1998．神奈川県のトウキョウサンショウウオの分布と生息状況．神奈川自然誌資料，19: 1-4．
- Kusano, T, 1980. Breeding and egg survival of a population of a salamander, *Hynobius nebulosus tokyoensis* Tago. Population Ecology, 21: 181–196.
- Kusano, T, 1981. Growth and survival rate of the larvae of *Hynobius nebulosus tokyoensis* Tago (Amphibia, Hynobiidae). Population Ecology, 23: 360-378.
- Kusano, T, 1982. Postmetamorphic growth, survival, and age at first reproduction of the salamander, *Hynobius nebulosus tokyoensis* Tago, in relation to a consideration on the optimal timing of first reproduction. Population Ecology, 24: 329–344.
- 草野保，2016．種分布モデリングによるトウキョウサンショウウオの好適生息環境の予測．爬虫両棲類学会報，2016: 135‐146．
- Kusano, T., T. Ueda, and H. Nakagawa., 2006. Body size and age structure of breeding populations of the Japanese salamander, *Hynobius tokyoensis* (Caudata: Hynobiidae). Current Herpetology, 25: 71-78.

- 草野保・川上洋一・御手洗望 (編著)，2022．トウキョウサンショウウオ：長期調査で分かった個体群の衰退と絶滅．東京都多摩地区における 2018 年度生息状況調査報告書．
- 小賀野大一・笠原孝夫・吉野英雄，2008．千葉県のトウキョウサンショウウオは減っている．千葉生物誌，58: 21‐23．
- 小賀野大一・笠原孝夫・八木幸市・田中一行・吉野英雄，2008．房総半島におけるトウキョウサンショウウオの生息域と特徴．両生類誌，18: 1-6．
- Okamiya, H., and T. Kusano., 2018. Lower genetic diversity and hatchability in amphibian populations isolated by urbanization. Population Ecology, 60: 347–360.
- Okamiya, H., N. Hayase, and T. Kusano., 2021. Increasing body size and fecundity in a salamander over the last four decades, possibly due to global warming. Biological Journal of the Linnean Society, 132: 634–642.
- Sugawara, H., T. Kusano, and F. Hayashi., 2016. Fine-scale genetic differentiation in a salamander *Hynobius tokyoensis* living in fragmented urban habitats in and around Tokyo, Japan. Zoological Science, 33: 476–484.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius tokyoensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius tokyoensis* is listed as EN under criteria A2.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥50% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Abandoned farmland, Wetland, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond
Threat types:	Logging and wood harvesting, Golf course development, Land development, Transportation infrastructure construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Inbreeding depression
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	草野保
Author:	Tamotsu Kusano

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ツシマサンショウウオ

***Hynobius tsuensis* Abe,1922**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
沢の砂防堰堤建設や周辺の樹林伐採が進んでいるほか、丘陵の谷の開口部の舗装道路の建設、宅地化などの開発が進み、好適な生息環境が失われてきている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

　小さな島に生息する国内の小型サンショウウオは珍しく、さらに流水産卵性の種は限られる。繁殖場所かつ幼生の生息場所である渓流と、その周辺の変態後個体の生息環境である林床の破壊が、絶滅に直結する可能性のある種である。

基礎情報

【形態】

全長 97～129 mm、頭胴長 56～71 mm。肋条数は 13 本、鋤骨歯列は深いＶ字型。体色は黄褐色から暗赤褐色と変異が大きい。尾の背稜があめ色、あるいは黒い斑点が散在する。幼生は、止水性のサンショウウオに見られるバランサーをもち、指先に爪がない。

【生活史】

3～4 月頃に産卵し、ゆるやかな渓流の浅い水中の石の下などに卵嚢が産みつけられる。産卵数は 34～74。幼生は渓流中で生活し、その年の秋ないし翌年に変態・上陸する。

【生息環境】

平地から丘陵の森林の小さな渓流周辺に生息する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

対馬のみに分布。上島と下島の両方に広く分布するが、下島の方が生息範囲が広い。

現在の生息状況

【分布域の現況】

上島と下島は 1900 年に掘削されて万関瀬戸が開通したために、現在は分断されている。他の島の分布記録はない。生息地では個体数が多いことが普通。

【生息地の現況】

沢の砂防堰堤建設や周辺の樹林伐採が進んでいるほか、丘陵の谷の開口部の舗装道路の建設、宅地化などの開発が進み、好適な生息環境が失われてきている。

【個体数の現況】

個体数は不明だが減少している可能性がある。

存続を脅かす要因

幼生は水温の上昇に弱いことから沢の水温環境の悪化が悪影響を及ぼす可能性がある。過去には愛好家や業者による違法捕獲が行われ、販売されていた。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，分布・産地局限

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ツシマサンショウウオ	*Hynobius tsuensis*	NT
第４次 2019：	ツシマサンショウウオ	*Hynobius tsuensis*	NT
第４次 2018：	ツシマサンショウウオ	*Hynobius tsuensis*	NT
第４次 2017：	ツシマサンショウウオ	*Hynobius tsuensis*	NT
第４次 2015：	ツシマサンショウウオ	*Hynobius tsuensis*	NT
第４次：	ツシマサンショウウオ	*Hynobius tsuensis*	NT
第３次：	ツシマサンショウウオ	*Hynobius tsuensis*	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

都道府県条例指定種【長崎県】

参考文献

- 松井正文，2021．ツシマサンショウウオ，日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 23，サンライズ出版，彦根.
- 松井正文，2001．(2) サンショウウオ目．生物多様性調査 動物分布調査報告書（両生類・爬虫類），環境省自然環境局生物多様性センター（編），30，pp. 197‐200.
- Niwa, K., M. Kuro-o, and K. Nishikawa, 2021. Discovery of two lineages of *Hynobius tsuensis* (Amphibia, Caudata) endemic to Tsushima Island, Japan. Zoological Science, 38, 259–266.
- Niwa, K., K. Nishikawa, M. Matsui, S. Kanamori, and M. Kuro-o, 2023. Taxonomic reassessment of salamanders (genus *Hynobius*) from Tsushima Islands, Japan, with a resurrection of *Hynobius tagoi* Dunn, 1923 (Amphibia: Caudata). Zootaxa, 5339(3): 201–236.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius tsuensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius tsuensis* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two

of a-c: a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations. b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Transportation infrastructure construction, Limited distribution
Law designation status for conservation	Prefectural Ordinance-Designated Species【Nagasaki】.



執筆者:	西川完途（京都大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Kanto Nishikawa and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ツルギサンショウウオ

***Hynobius tsurugiensis* Tominaga, Matsui, Tanabe et Nishikawa, 2019**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab+2ab

基準 A:　－	基準 B:　EN	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B1+2．出現範囲が 5000 km²未満かつ生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。

【過度に分断】

生息地が高標高地に限られ、生息地は山塊ごとに分断されており、残存する小集団では絶滅リスクが高い状態にある。

【地点数】5 地点以下

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

豪雨による流水環境の変化、シカの食害による植生の変化や乾燥化など生息環境が悪化し続けている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は四国東部の山地の固有種である。2019 年のコガタブチサンショウウオの細分化に伴い新種記載された。生息地の多くで、様々な環境破壊や自然災害などによって、生存が脅かされている。

基礎情報

【形態】

成体は全長 89～124 mm、頭胴長 51～74 mm。背面は褐色地に黄白色の斑紋がある。腹面は黒色で斑紋を欠く個体が多い。遺伝的にはマホロバサンショウウオと最も近縁だがイヨシマサンショウウオにも近く、形態的に酷似する個体がいる。幼体には金色を帯びた斑紋をもつ個体が多い。幼生の体色は紫がかった褐色。卵嚢は紐状で、数回巻き、長さは 80～120 mm、幅 8～13 mm。卵は黄白色で直径 6 mm ほど。

【生活史】

普段は林床の倒木下や砂礫中に生息し、5～6 月に湧水中で産卵する。一腹卵数は 19～28 個。孵化した幼生は水中で 1、2 ヶ月過ごし、夏頃変態する。変態直後幼体は全長 20 mm 程度。

【生息環境】

生息環境は、四国東部の標高 1000 m 以上の落葉広葉樹林や針葉樹林で、主に谷沿いである。剣山では頂上（1955 m）でも発見されている。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】森林，河川源流域
国土地域区分：	（1）奥山自然地域

【分布域】

四国東部（徳島県、高知県）の剣山周辺にのみ分布する。生息範囲は標高 1100 m 以上の主に自然林である。源流部に広く分布するため、個体数の把握は困難であるが、良好な生息地では、数十 m の枝沢に 20 個体前後が生息していた例がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

四国東部の徳島県から高知県に至る剣山系に分布する。最近、高知県側において、新たな分布が確認された。

【生息地の現況】

生息地の多くで、シカの食害による林床植生の変化が認められる。地表性の植物の減少によって林床の乾燥化が進んでいる。ゲリラ豪雨多発の影響で、斜面の崩壊が起こり、その復旧工事も相まって産卵に適した環境が減少している。

【個体数の現況】

正確な個体数は把握できていないが、近年、発見できる個体数は減少傾向にある。国内希少野生動植物種に指定されたことにより、採集圧は減少していると考えられる。

存続を脅かす要因

豪雨による斜面の崩落、産卵に適した谷環境の悪化、それに伴う復旧工事の影響。シカ

の増加による林床環境の変化。植生の変化や渇水による林床の乾燥化。密猟。森林の伐採。林道建設。観光開発や登山客の増加による登山道沿いの微環境の変化。気温上昇による天敵となる捕食動物の増加。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，自然災害，分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，自然災害，違法採集，シカ食害，気候変動，分布・産地局限

特記事項

比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義コガタブチサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ツルギサンショウウオ	*Hynobius tsurugiensis*	EN
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- 松井正文・田辺真吾，2021．ツルギサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 15，サンライズ出版，彦根.

- Tominaga, A., M. Matsui, S. Tanabe and K. Nishikawa, 2019. A revision of *Hynobius stejnegeri*, a lotic breeding salamander from western Japan, with a description of three new species (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). Zootaxa, 4651: 401-433.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius tsurugiensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius tsurugiensis* is listed as EN under criteria B1ab+2ab.

B1+2. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km² AND area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest, River headwater
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Natural disasters, Illegal harvesting of biological resources, Deer feeding damage, Climate change, Limited distribution
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.



©田辺真吾（日本爬虫両棲類学会）

執筆者:	田辺真吾（日本爬虫両棲類学会）・松井正文（京都大学）
Author:	Shingo Tanabe and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ヒバサンショウウオ

***Hynobius utsunomiyaorum* Matsui et Okawa, 2019**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　—	基準 B:　EN	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息地の多くは、これまで開発されにくい環境であったが、近年、林道の建設などの環境改変によって減少している。すでに絶滅した地点もあるようだ。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

長らくカスミサンショウウオ高地型と呼ばれてきた種で、中国山地の脊梁山地（兵庫県、岡山県、広島県、鳥取県、島根県）の低～中標高地で、小渓流や湿原の近くに生息する。各地で生息地の開発が進んで個体群が影響を受けている。

基礎情報

【形態】

体は小型（雄で全長 72～103 mm、平均 93 mm、頭胴長 43～60 mm、平均 54 mm）、前肢は比較的短く、後肢は中程度の長さ。四肢を体側に沿って伸長すると、前後肢は多くは 1 肋皺分分離する。一部個体群を除き、第 5 趾を欠くか痕跡的。鋤骨歯列は比較的短い。体色には大きな変異があり、チュウゴクブチサンショウウオに似る個体もいる。尾に黄色の条線を欠く。アキサンショウウオより前後肢の会合程度が大きく、鋤骨歯列と第 5 趾が短い。

【生活史】

繁殖は 3 月下旬～5 月下旬に湿地、溝、池と小渓流の、泥の中の日の射さない部分で行われる。1 雌の産卵数は 20～63、平均 39 個。幼生越冬して翌年に変態する場合も稀ではない。繁殖参加個体は摂食していることがある。チュウゴクブチサンショウウオ、ハコネサンショウウオと混棲することもある。

【生息環境】

山地の小渓流と隣接した自然林、二次林の小渓流や湿原の近くに生息し、中標高域にも生息する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，湿地・湿原・細流，河川上流域
国土地域区分：	（1）奥山自然地域

【分布域】

中国山地（兵庫県、岡山県、広島県、鳥取県、島根県）の脊梁山地（標高 35～1,216 m で平均は 350 m。）。

現在の生息状況

【分布域の現況】

大きな変化はないと考えられる。

【生息地の現況】

現在の生息状況はほとんどの地点で不明である。生息地の多くは、これまで開発されにくい環境であったが、近年、林道の建設などの環境改変によって減少している。すでに絶滅した地点もあるようだ。

【個体数の現況】

個体数は不明だが、近年急速に減少していることは間違いない。

存続を脅かす要因

森林伐採、湿地開発、土地造成、道路建設、水質汚濁、捕獲・狩猟、遷移進行・植生変

化、自然災害。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，湿地開発，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害
	（現在）	森林伐採，湿地開発，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害

特記事項

ハクバサンショウウオと遺伝的に非常に近く、アキサンショウウオと単系統群をなすので種分化の実態を解明するうえで重要性をもっている。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義カスミサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	ヒバサンショウウオ	*Hynobius utsunomiyaorum*	VU
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【兵庫県】A ランク，【鳥取県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【岡山県】情報不足，【広島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- 松井正文，2010．カスミサンショウウオ，改訂レッドリスト付属説明資料 爬虫類・両生類，pp. 13，環境省自然環境局野生生物課，東京.
- 松井正文，2021．ヒバサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 26-28，サンライズ出版，彦根.

- Matsui, M., K. Nishikawa, T. Utsunomiya and S. Tanabe, 2006. Geographic allozyme variation in the Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Urodela). Biological Journal of the Linnean Society, 89: 311–330.
- Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa, and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. Curr. Herpetol., 38: 32–90.
- 大川博志・宇都宮妙子・宇都宮泰明．1998．広島県のカスミサンショウウオ（2）．比婆科学, 188: 13-18.
- Sugawara. H., T. Iwata, H. Yamashita, M. and Nagano, 2021. Taxonomic reassessment of the Izumo lineage of *Hynobius utsunomiyaorum*: Description of a new species from Chugoku, Japan. Animals, 11(8), 2187.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius utsunomiyaorum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius utsunomiyaorum* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Wetland/Marsh/Stream, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Wetland development, Land development, Transportation infrastructure construction, Water pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.



執筆者:	松井正文（京都大学）
Author:	Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae

キタサンショウウオ

***Salamandrella keyserlingii* Dybowski, 1870**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab+2ab

基準 A:　—	基準 B:　EN	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B1+2．出現範囲が 5000 km²未満かつ生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。

【過度に分断】

釧路集団では、道路、農地、住宅地、太陽光発電施設等によって生息地が分断され、残存する小集団は絶滅リスクが高い状態にある。上士幌集団は、開拓以降、農地開発の影響を強く受けてきたと考えられ、現在はごく限られた場所でしかみられない。

【地点数】5 地点以下

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

釧路集団においては､国立公園等によって保護されている生息場所･繁殖場所は全体の 30%程度に過ぎず、その他の大部分の地域では、圃場整備、道路建設、ソーラー発電施設の建設などによる造成の影響が続いている。天然記念物指定のある釧路市、標茶町では、保全対策がとられてきているが､生息地改変の場合の代替措置としては移殖を行うことが多く､しかも移殖後に集団が長期に存続した事例がない。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種の分布はヨーロッパ東部からシベリア、サハリン、千島列島北部、国後島、北海道に広がっている。北海道においては釧路湿原と上士幌に生息する。湿原の止水域や林に隣接した池で繁殖し、卵嚢は水中の植物の茎などに産み付けられる。孵化幼生は小さく、全長で 12 mm 程度。変態上陸後の幼体と成体は、繁殖地近くの林床で生活する。釧路地域と上士幌地域で、あわせて 30 ヵ所ほどの繁殖地が知られているが、圃場整備やその他の土地利用によって、近年でも繁殖地が消失する事例がでている。釧路湿原の国立公園の特別地域内や釧路市と標茶町の天然記念物として保護されている集団もある。

協力者:　乙幡康之（ひがし大雪自然館）・照井滋晴（NPO 法人環境把握推進ネットワーク- PEG）・佐藤孝則（天理大学）

基礎情報

【形態】

頭胴長 6 cm 程度、全長 12 cm 程度の小型のサンショウウオ。体色は青みを帯びた褐色で、背面中央のほとんど全長にわたって黄褐色の縦条がある。腹面は背面よりも色が淡く、暗青色の斑点が散在する。胴は円筒状で、肋条は 13 本、四肢は短く、細い。尾長は頭胴長よりもやや短く、後方に向かって側扁してひれ状になっている。

【生活史】

北海道では 4 月中旬頃から 5 月中旬頃にかけて産卵し、幼生は 7 月頃に変態・上陸する。繁殖水域は止水で、周辺は「谷地坊主」などがある湿原であることが多い。卵嚢は巻いた短いひも状で、透明、産卵直後は青白い蛍光を発する。繁殖開始は 3 歳以上で、雌が産卵する卵嚢 1 対には合計で 230 卵程度（110～340 卵）が含まれる。孵化幼生の全長は 12 mm 程度。変態上陸後は付近の林床で生活する。成体の食性は、ハエ目、コウチュウ目等の昆虫、トビムシ類、クモ類などの節足動物、オカモノアラガイなどの貝類など。

【生息環境】

サハリンでは林道わきの水たまりや緩やかな流れのある水路等の多様な水域で繁殖するが、北海道では主に谷内坊主と谷内眼が混在するような低層湿原に生息し、周辺の灌木林の林床が幼体、成体の生活圏となっている。繁殖では、止水または緩い流れのある水域に集まり、卵嚢は水辺のクサヨシなどの水中の茎などに付着して産みつけられる。孵化した幼生は水中の沈水植物のあいだなどに潜んで生育する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】草地，湿地・湿原・細流 【陸域_平地部】草地，湿地・湿原，ため池・池沼，その他（疎林に隣接する湧き水）
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

ヨーロッパのウラル山脈西からロシア沿海地方、サハリン、千島列島北部、国後島、北海道にかけて分布する。北海道では、釧路湿原のみに分布すると考えられてきたが、近年、十勝地方の上士幌町でも分布が確認された。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現在確認されている国内の分布域は、北海道の釧路湿原を中心とした地域と十勝地方の上士幌町の一部。国後島の状況は不明。釧路地域では、道路開発、宅地・農地開発、太陽光発電施設建設等による繁殖地消失が継続している。近年発見された上士幌集団の分布域はきわめて狭いが、開拓前の十勝地方の分布域はもっと広かった可能性がある。

【生息地の現況】

主な生息地である釧路湿原を中心とした地域では、部分的に国立公園特別地域指定や釧

路市、標茶町、上士幌町の本種の天然記念物指定によって保護されているところもあるが、生息・繁殖地の 3 分の 2 程度は保護区外にあり、道路開発、宅地・農地開発、太陽光発電施設建設等による繁殖地消失が継続している。上士幌では、わずかな繁殖地点で個体群が維持されており、絶滅リスクが特に高い。本種の分布地域のほとんどの繁殖環境は、地元の保全活動なしには存続が危ぶまれる状況にある。

【個体数の現況】

釧路地域と上士幌地域をあわせて 30 カ所ほどの繁殖地が知られていて、各繁殖地は数十の卵嚢対の産卵がある。おおよそ、1000 個体程度の成体雌と推定できるが、個別の繁殖地で個体数推定を行った調査は限られているので、全体の個体数は不明。

存続を脅かす要因

釧路湿原国立公園特別地域への指定や、釧路市、標茶町、上士幌町の天然記念物指定によって保護されているところもあるが、本種の生息・繁殖地の 3 分の 2 程度が保護区外にあり、道路開発、宅地・農地開発、太陽光発電施設建設等による繁殖地消失が継続している。また、天然記念物指定のない町村ではペットトレードを目的とした採集の影響が危惧される。

要因の区分：	（過去）	湿地開発，圃場整備，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，遷移進行・植生変化/自然遷移，競争/競合（在来種による），違法採集
	（現在）	湿地開発，圃場整備，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，遷移進行・植生変化/自然遷移，競争/競合（在来種による），違法採集

特記事項

サハリンと釧路地域の個体群の分岐年代は約 190 万年前、釧路地域と十勝地域の個体群では約 30 万年前と推定されている。釧路地域の繁殖集団間においても遺伝的隔離が進んでいることが推定されている。現在の分布域は、エゾサンショウウオとの生息環境の競合によって制限されてきたとも考えられるが、両種の分布域の変遷はかなり複雑であったと推察される。これらのことから、北海道の動物相を考える上で地誌的、学術的価値が高いと判断される。各個体群の現状把握と保全対策が必要と考えられる。釧路市、標茶町、上士幌町の天然記念物に指定されていている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	キタサンショウウオ	*Salamandrella keyserlingii*	EN
第４次 2019：	キタサンショウウオ	*Salamandrella keyserlingii*	NT
第４次 2018：	キタサンショウウオ	*Salamandrella keyserlingii*	NT

第４次 2017：	キタサンショウウオ	*Salamandrella keyserlingii*	NT
第４次 2015：	キタサンショウウオ	*Salamandrella keyserlingii*	NT
第４次：	キタサンショウウオ	*Salamandrella keyserlingii*	NT
第３次：	キタサンショウウオ	*Salamandrella keyserlingii*	NT
第２次：	キタサンショウウオ	*Salamandrella keyserlingii*	NT
第１次：	キタサンショウウオ	*Salamandrella keyserlingii*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅危惧ⅠB 類(En)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- 橋本正雄，1974．釧路市北斗におけるキタサンショウウオ *Salamandrella keyserlingii* Dybowski の繁殖について 一第 1 報一．釧路市立郷土博物館紀要，3:1-9．
- 橋本正雄，1991．北海道東部、釧路湿原におけるキタサンショウウオの移転について．釧路市立博物館紀要，16: 1-12．
- 羽角正人・神田房行，1996．釧路湿原大楽毛地区でのキタサンショウウオの繁殖．釧路市立博物館紀要，20: 1-4．
- Kuzmin, S. L. and I. V. Maslova, 2003. The amphibians of the Russian Far East (Advances in amphibian research in the former Soviet Union vol. 8). 464pp. PENSOFT, Sofia-Moscow.
- Matsui, M., N. Yoshikawa, T. Tanaka-Ueno, T. Sato, S. Takenaka, S. Terui, Y. Oppata, and A. Tominaga, 2019. A genetic study of a newly found population of Siberian salamander, *Salamandrella keyserlingii* (Amphibia, Caudata). Current Herpetology, 38: 122-127.
- 宮崎七奈衣・乙幡康之，2017．北海道上士幌町で確認されたキタサンショウウオの可能性のある卵嚢．爬虫両棲類学会報，2017: 148-150．
- 佐藤孝則・松井正文（編著），2013．北海道のサンショウウオたち．エコ・ネットワーク，札幌．258pp．
- 佐藤孝則・中林成広・成海信之・神松幸弘，1999．釧路湿原におけるキタサンショウウオの繁殖状況．釧路市立博物館紀要，23: 25-31．
- 照井滋晴・秋山吉寛・野本和宏，2022．キタサンショウウオの移転事業後の長期モニタリングの結果と移転の留意点．Wildlife and Human Society，10: 27-34．
- Tran, D. V., S. Terui, K. Nomoto, and K. Nishikawa, 2021. Ecological niche differentiation of two salamanders (Caudata: Hynobiidae) from Hokkaido Island, Japan. Ecological Research, 36: 281-292.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Salamandrella keyserlingii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Salamandrella keyserlingii* is listed as EN under criteria B1ab+2ab.

B1+2. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km² AND area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Grassland, Wetland/Marsh/Stream 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Grassland, Wetland, Reservoir/Pond, Other
Threat types:	Wetland development, Field preparation, Grassland development, Land development, Transportation infrastructure construction, Water pollution, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Competition (with native species), Illegal harvesting of biological resources
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	竹中践（東海大学）
Author:	Sen Takenaka

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　イモリ科 Salamandridae　　日本固有

オキナワシリケンイモリ

***Cynops ensicauda popei* (Inger, 1947)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　—	基準 B:　EN	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
沖縄島南部ではもともと少なかったが、都市部に近い那覇以南の地域の開発が進んでおり、生息地は明らかに減っている。都市公園の整備、調整池の整備で良好な生息地が消滅、縮小した例も見られる。沖縄中北部でも幹線道路の整備で、生息地が破壊されたり、生息個体数が減少した場所もある。こうした開発等により分断化され、狭い範囲に残存する小個体群は絶滅リスクが高い状況にある。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
沖縄島北部は世界自然遺産に登録された地域であり、観光やエコツアーなどでの森林環境の利用が増加しており、これに伴う環境の破壊、轢死の増加が懸念される。また、最近の有尾類の飼育ブームの飼育動物として頻繁に採集されて、安価な価格で多数、売買されており、他の種よりも高い捕獲圧にさらされている。長寿命な動物であり、再生産力はあまり高くない動物と考えられ、捕獲圧や轢死、環境破壊による影響は大きい。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本亜種は沖縄島・渡嘉敷島など、沖縄諸島の 10 島に分布するが、開発にともなう生息域・繁殖場所の縮小に加え、販売目的の成体の乱獲が個体群に深刻な影響を与えている。

基礎情報

【形態】

成体の全長は 106～179 mm 程度。頭胴長はオスが 50～63 mm、メスで 53～82 mm 程度。背面は黒褐色だが、ほぼ半数の個体で黄白色の地衣類様斑紋が背中線域に現れる。腹面は朱色から橙色ないし黄色で、黒褐色の不規則な斑紋がある。四肢の指の下面も橙色ないし黄色。オスには、繁殖期でも白色の婚姻色は現れない。

【生活史】

一年を通して湿潤な林床や草地などに生息し、繁殖はため池などの止水や流れの遅い流水で、おもに 11～6 月の間に行われる。地域によっては、繁殖期が 9 月までに及ぶことがある。この時期オスは水中でメスを待ち、メスが現れると儀式的な行動を通して精子の入った袋（精包）をメスに渡す。メスは、後肢を用いて水中の水草などに一つずつ卵を包み込むようにして産卵する。湿ったコケなどに付着させる形で、時には陸上でも産卵する。幼生はふ化後 3～4 ヶ月で変態・上陸するが、成熟までには数年を要すると思われる。

【生息環境】

生息環境は低地の湿地、池、水田から山地の渓流までと幅広い。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，河川上流域，河川中流域 【陸域_平地部】森林，草地，田地・畑地，湿地・湿原，潟・湖・ダム湖
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

沖縄諸島の 10 島に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

沖縄諸島の 10 島（沖縄島・瀬底島・浜比嘉島・渡名喜島・座間味島・阿嘉島・慶留間島・外地島・渡嘉敷島・前島）に分布する。

【生息地の現況】

土地開発にともなう生息域･繁殖場所の縮小、側溝等の敷設にともなう繁殖集団の分断･墜落死亡個体の増加、観賞・飼育用としての売買目的の成熟個体の乱獲などが見られる。

【個体数の現況】

分布域の広い範囲で生息地の消失、生息環境の悪化が進行していることは明らかであり、減少していることは間違いない。沖縄島南部のある水場では、ここ 15 年ほどの間に、繁殖期の出現個体数が密度にして 1/4 以下に減少してしまった。

存続を脅かす要因

開発にともなう生息域・繁殖場所の縮小、側溝等の敷設にともなう繁殖集団の分断・落下死亡、観賞用としての販売目的の成体の乱獲等が個体数減少の原因と考えられる。県外都市地区の多くのペットショップで販売されている。繁殖期以外は基本的に陸上生活を送るものの、産卵期には限られた水場に多数の個体が集まることも多く、一見、個体群密度が高いような印象を受ける。しかし実際には、卵や幼生時代の捕食・競争・共食いなどにより変態・上陸する個体は少ないと考えられ、成体の乱獲が個体群に深刻な影響を与えている可能性が高い。

要因の区分：	（過去）	土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，食用・薬用採取
	（現在）	土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，食用・薬用採取

特記事項

これまでは、鹿児島県産の基亜種と区分せずに、種シリケンイモリ *Cynops ensicauda* として扱われることが多かったが、奄美諸島との遺伝的分化程度が大きく、形態的な違いも明瞭なことから、最近では亜種オキナワシリケンイモリ *Cynops ensicauda popei* として扱われるようになった。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義シリケンイモリ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 太田英利・岡田滋，2003．爬虫類・両生類．鹿児島県環境生活部環境保護課（編），鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編 鹿児島県レッドデータブック，pp. 82-116．財団法人鹿児島県環境技術協会，鹿児島．
- 田中聡，1994．瀬底島におけるイボイモリとシリケンイモリの生態についての予備観察．沖縄生物教育研究会誌，26: 13-21．
- 田中聡，2005．シリケンイモリ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）-レッドデータおきなわ-，pp. 140-141．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．
- 富永篤，2018．シリケンイモリ，pp. 227-228，沖縄県環境部 自然保護課，那覇．
- 富永篤・松井正文，2021．オキナワシリケンイモリ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 31，サンライズ出版，彦根．
- Tominaga, A., H. Ota, and M. Matsui, 2010. Phylogeny and phylogeography of the sword-tailed newt, *Cynops ensicauda* (Amphibia: Caudata), as revealed by nucleotide sequences of mitochondrial DNA. Mol. Phylogenet. Evol., 54: 910-921.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cynops ensicauda popei has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cynops ensicauda popei* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Upper river basin, Middle river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Farmland, Wetland, Lagoon/Lake/Dam

Threat types:	Land development, Transportation infrastructure construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Harvesting of biological resources for food and medicinal use
Law designation status for conservation	—



執筆者:	富永篤（琉球大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Atsushi Tominaga and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　イモリ科 Salamandridae　　日本固有

オキナワイボイモリ

***Echinotriton andersoni* (Boulenger, 1892)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　—	基準 B:　EN	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
沖縄島の生息地は中北部と南部に分断されているほか、瀬底島、渡嘉敷島の生息地も隔離されている。特に沖縄島南部では、生息地点も道路やゴルフ場、住宅地などにより過度に分断された状態にある。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
沖縄島南部では、最近ではまとまって個体数がみられる地点は、極めて狭い範囲である。そうした生息地も宅地開発、道路建設で徐々に減少しつつある。それ以外の地域でも、生息地の破壊や路上での轢死が多く、個体数の減少が続いていると考えられる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

沖縄島、瀬底島、渡嘉敷島の平野部から山地にかけて分布する。アマミイボイモリが独立種として分割されたことに伴い、沖縄諸島のみに分布する種となり、混乱を避けるためにオキナワイボイモリという和名が提唱された。12 月頃に繁殖期が始まって、精包の授受を陸上で行い、2 月から 5 月に水際の陸上に産卵する。現在は那覇を中心とする市街地近くでは分布の記録がないが、過去には分布域が連続していた可能性もある。存続に影響する大きな要因は、宅地開発、道路整備、ダムや河川改修、森林伐採による生息環境の悪化と考えられ、良好な生息環境に道路ができることに起きる轢死も存続を脅かす要因になっている。

基礎情報

【形態】

全長は 120～210 mm、頭胴長 57～94 mm。背面、腹面、側面の基色は、黒色で体背面の肋骨末端の突起部分に小さいがよく目立つ赤色から濃い褐色の斑点をもつ。尾の腹面部、総排出孔、前後肢の掌も赤褐色を呈する。幼生は、孵化した時点から灰色の基色に黒斑をもち、頭部は丸身を帯び沖縄諸島で同所的に分布するオキナワシリケンイモリの幼生よりも大型になり、体型も太い。変態が近づくと、上陸個体の体色に近づき、体全体の大部分が黒色になる。

【生活史】

2 月から 5 月に平野の湿地や池、手掘りの水路、山地の池や水路、水たまりなどの水際の陸上に産卵する。多くの場合、卵は落ち葉や土壌の下に隠された状態で発見されるが、時として遮蔽されずむき出しの状態で見つかることもある。ただし、卵表面は粘着性が高く、多くの場合、土が付着しており、卵の外からはっきりと胚を確認することは難しい。孵化まで 1 か月はかからない。孵化した幼生は降雨時などに自力で水場にたどり着く。多くの地域では夏ごろまでに変態を完了する。10 月ごろまで幼生がみられる地域もある。上陸した幼体は数年をかけて成熟サイズに至ると考えられる。12 月ごろには繁殖期が始まり、徘徊する雄を見かける頻度が高くなる。精包の授受も陸上で行われる。

【生息環境】

平野部から山地の畑地、公園、森林などのさまざまな環境に生息するが、いずれの場所でも産卵場所として利用する水場が近くにある。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地，田地・畑地，湿地・湿原・細流，ため池・池沼 【陸域_平地部】森林，草地，田地・畑地，湿地・湿原
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（7）島嶼地域

【分布域】

沖縄諸島の沖縄島、瀬底島、渡嘉敷島の平野部から山地にかけて分布する。これまで絶滅した地域の確かな情報はないが、沖縄島ではその分布域が中北部と南部のごく一部地域に限られており、那覇を中心とする市街地近くでは本種の分布の記録はない。過去には、分布域が連続していた可能性もある。沖縄島南部、渡嘉敷島での生息密度は低いのに対して、沖縄島北部の生息密度は比較的高い。瀬底島では 1990 年ごろまでは高密度で分布していたようであるが、主要な産卵場所がコンクリートで固められたことなどにより、現在の密度はあまり高くないと思われる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

過去には、沖縄島南部でもより多くの地点で発見されているが、現在、過去に記録のあ

った場所でも長期間見つかっていない地点が多くある。沖縄島南部での減少には、生息環境の悪化が関係している可能性が高く、那覇に近接するため、宅地開発や大規模な道路の建設で、生息地が減少していると考えられる。沖縄島北部でも道路での轢死が頻繁に確認されており、過去に大量の轢死体が発見されていた地域で現在発見が困難になっている地点も知られている。

【生息地の現況】

大規模な幹線道路、林道の建設、宅地開発、大規模施設の建設に伴い、生息場所となっていた環境が破壊された場所も多い道路建設や観光地としての公園の整備が本種の生息環境を破壊している可能もある。沖縄島中北部では、生息地が道路に隣接する地域が多く、繁殖期になると多くの個体が轢死している。

【個体数の現況】

沖縄島南部、渡嘉敷島はもともと生息個体数が少ない。沖縄島南部では、さらに開発の影響で、近年の発見個体数は極めて少なく、安定して生息が確認されている場所は非常に狭い限られた地域である。瀬底島でもこの 30 年で個体数が激減していると思われる。沖縄島中北部では、現在でも比較的高密度に生息している地域が多く残されているが、生息環境は年々悪化しており、また路上での轢死が頻繁に起きている。

存続を脅かす要因

最も存続に対して影響の大きな要因は、宅地開発、道路整備、ダムや河川改修、森林伐採による生息環境の悪化と考えられる。さらに良好な生息環境に道路ができることに起きる轢死が本種の存続を脅かす要因になっている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，圃場整備，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，交通事故
	（現在）	森林伐採，圃場整備，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，交通事故

特記事項

長い間、沖縄県と鹿児島県の個体群は単一種イボイモリ *Echinotriton andersoni* と扱われてきたが、両者の遺伝的、形態学的差異が顕著であることを根拠に、2022 年に鹿児島県の個体群は別種アマミイボイモリ *Echinotriton raffaellii* として分けられた。これに伴い、狭義 *Echinotriton andersoni* は沖縄県の固有種となり、また和名も変更された。沖縄県の天然記念物に指定されている。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義イボイモリ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	イボイモリ	*Echinotriton andersoni*	VU
第４次 2019：	イボイモリ	*Echinotriton andersoni*	VU
第４次 2018：	イボイモリ	*Echinotriton andersoni*	VU
第４次 2017：	イボイモリ	*Echinotriton andersoni*	VU
第４次 2015：	イボイモリ	*Echinotriton andersoni*	VU
第４次：	イボイモリ	*Echinotriton andersoni*	VU
第３次：	イボイモリ	*Echinotriton andersoni*	VU
第２次：	イボイモリ	*Echinotriton andersoni*	VU
第１次：	イボイモリ	*Echinotriton andersoni*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- Dufresnes, C. and A. Hernandez, 2022, Towards completing the crocodile newts' puzzle with all-inclusive phylogeographic resources. Zool. J. Linn. Soc., zlac038.
- Honda, M., M. Matsui, A. Tominaga, H. Ota, and S. Tanaka, 2012. Phylogeny and biogeography of the Anderson's crocodile newt, *Echinotriton andersoni* (Amphibia: Caudata), as revealed by mitochondrial DNA sequences. Molecular Phylogenetics and Evolution, 65 (2): 642-653.
- Igawa, T., H. Sugawara, M. Honda, A. Tominaga,S. Oumi, S. Katsuren, H. Ota, M. Matsui, M, Sumida, 2020. Detecting inter- and intra-island genetic diversity: population structure of the endangered crocodile newt, *Echinotriton andersoni*, in the Ryukyus. Conservation Genetics, 21: 13 -26.
- 富永篤，2019．消滅しつつあるイボイモリの生息地．九州両生爬虫類研究会（編），九州・奄美・沖縄の両生爬虫類 カエルやヘビのことをもっと知ろう，pp. 200-201．東海大学出版部，平塚．
- 富永篤・奥代遼，2016．イボイモリをとりまく状況と保全にむけた課題．爬虫両棲類学会報，2016 (2): 50-56.
- 富永篤・松井正文，2021．イボイモリ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 29-30．サンライズ出版，彦根．
- 富永篤，本多正尚，太田英利. 2011. 渡嘉敷島のイボイモリ（両生綱: 有尾目）の分布について．AKAMATA, 22: 12-14.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Echinotriton andersoni has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Echinotriton andersoni* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Wetland/Marsh/Stream, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Farmland, Wetland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Field preparation, Grassland development, Land development, Transportation infrastructure construction, Vehicle collision
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	富永篤（琉球大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Atsushi Tominaga and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

ホルストガエル

***Babina holsti* (Boulenger, 1892)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A: ―	基準 B: EN	基準 C: ―	基準 D: ―	基準 E: ―

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
かつて本部半島にも生息していた本種は森林の縮小と、おそらくはマングースなどの捕食者の影響で分布域を狭めてきた。それらの要因は未だ取り除かれておらず、今後も分布域の縮小は進行していくものと思われる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

　沖縄諸島の沖縄島と渡嘉敷島に分布し、常緑広葉樹林および回復の進んだ二次林内の渓流とその周辺の林床に生息する。近年の圃場整備や林道の敷設・整備により生息域が縮小し個体数も減少している。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長は、オスで 100～124 mm、メスでは 103～119 mm 程度。頑丈な体格で、頭部は広く、頭幅は頭胴長の 39%ほど。第 1 指の内側に肉質の袋状の拇指が発達する。この拇指の中には骨質の棘が納まっており、危険を感じた時などに突出する。背面は比較的滑らかで、顆粒の発達は微弱。胴背面の色は褐色で体側には黒褐色の丸い隆起が散在する。虹彩は赤褐色で上部は金色。成熟したオスの脇腹には直径 1 cm ほどのオレンジ色の円形隆起がある。近縁のオットンガエルとは、胴背面および側面の隆起が弱いことで区別できる。

【生活史】

春から秋にかけて活動する。小型の個体は冬季でも活動することがある。繁殖期は 4 月下旬～9 月上旬で、このうち 7～8 月が最盛期。渓流の源流域や山地にできた湿地脇などのわずかに流れのある場所に低い土手に囲まれた直径 30～50 cm ほどの窪みを掘り、その中に直径 2.3～2.5 mm ほどの卵を 800～1,000 個産む。産みたての卵は水面に浮き、互いに緩く結合している。幼生は成長すると全長 80 mm ほどになり、生まれた年の秋までに変態するか、そのまま越冬し翌年の 5～6 月に変態・上陸する。性成熟までに要する年数、寿命等は不明。頭胴長 60～80 mm ほどの亜成体は陸貝類や小型ないし中型の昆虫類を捕食し、それより大きな成体では大型の昆虫類やムカデ類、小さなヘビ類まで食べることが知られている。

【生息環境】

常緑広葉樹林に覆われた山地の渓流沿いや源流部の湿地に生息する。山林のなかにある止水に近い水場で繁殖し、幼生の生育場所として清冽な渓流沿いの半止水環境が必要。成体は林道でも見かけることがある。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，河川源流域 【陸域_平地部】湿地・湿原
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（7）島嶼地域

【分布域】

沖縄島の北部山地と渡嘉敷島に分布する。近縁のオットンガエルは奄美諸島の奄美大島、加計呂麻島、枝手久島に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

沖縄島では塩谷湾と平良を結ぶラインの北側に生息している。1970 年代かそれ以前には、名護市東部や本部半島の本部町、今帰仁村の一部からも報告されている。しかし、名護市からは 2002 年以降の記録はなく、個体群が消滅した可能性が高い。また本部半島でも最近は確認されていない。渡嘉敷島では北部から南部にかけて分布していたが、南部で

は数が少なく、島内での南限が北上した可能性がある。

【生息地の現況】

沖縄島と渡嘉敷島の双方で林道の敷設や拡張が進み、生息環境は悪化している。沖縄島では農地開発による森林伐採もあり、本種の生息に悪影響を与えている。渡嘉敷島には、近年、外来のイノシシが定着し、山地部の尾根沿いから山腹、渓流沿いにおよぶ広い範囲で底質が掘り起こされている。本種も、直接的、間接的に大きな影響を受けていると考えられる。

【個体数の現況】

資料が不足しており、個体数やその動態を具体的に示すことはできないが、分布域の縮小と生息環境の悪化により、個体数が減少傾向にあることは間違いない。沖縄島では、生息密度が高い地点は分布域の北側に限定され、分布域の南端近くの個体群は遺伝的にも単調で、北側の個体群から隔離され、集団サイズも小さくなっていることが示唆されている。

存続を脅かす要因

道路の敷設や拡張、農地開発に伴う森林伐採などによる生息地の消失、生息環境の劣化が本種の生息を圧迫する主要因と考えられる。また、名護市や本部半島の個体群の衰退はマングースの影響によるところが大きいと考えられる。渡嘉敷島では野生化したイノシシによる食害に加え、水場や林床の掘り返しによる悪影響も小さくないと思われる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕食（外来種による）

特記事項

奄美諸島のオットンガエルとともに遺存性の高い系統群を構成しており、学術的に貴重である。また、沖縄島北部の山地に生息する大型のカエル類のなかでは例外的に渡嘉敷島にも見られることから、この地域の生物相の成り立ちや、古環境を知るためにも重要な種といえる。DNA 情報を用いた最近の研究により、沖縄島と渡嘉敷島の集団は遺伝的に明瞭に分化していることが示されている。また、沖縄島においては、現在の分布域の南限付近の個体群で遺伝的多様性が低下していることが明らかになっており、遺伝的変異の地理的パターンから、最近の集団サイズの縮小によると解釈されている。沖縄県の天然記念物に指定されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ホルストガエル	*Babina holsti*	EN

第４次 2019：	ホルストガエル	*Babina holsti*	EN
第４次 2018：	ホルストガエル	*Babina holsti*	EN
第４次 2017：	ホルストガエル	*Babina holsti*	EN
第４次 2015：	ホルストガエル	*Babina holsti*	EN
第４次：	ホルストガエル	*Babina holsti*	EN
第３次：	ホルストガエル	*Rana holsti*	EN
第２次：	ホルストガエル	*Babina holsti*	VU
第１次：	ホルストガエル	*Babina holsti*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- 千木良芳範，2005．ホルストガエル．改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 135‐136．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．
- Kakehashi, R., A. Kurabayashi, O. Oumi, S. Katsuren, M. Hoso, and M. Sumida, 2013. Mitochondrial genomes of Japanese *Babina* frogs (Ranidae, Anura): unique gene arrangements and the phylogenetic position of genus *Babina*. Gene. Genet. Syst., 88: 59–67.
- 松井正文，2021．ホルストガエル．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 55．サンライズ出版，彦根．
- 松井正文・前田憲男，2018．日本産カエル大鑑．文一総合出版，東京．
- Okochi, I. and S. Katsuren, 1989. Food habitsin four species of Okinawan frogs. In: M. Matsui, T. Hikida and R. C. Goris (eds.), Current Herpetology in East Asia. pp. 405–412. The Herpetological Society of Japan, Kyoto.
- 太田英利，2000．ホルストガエル．改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物（両生類・爬虫類），pp. 98‐99．環境省自然保護局野生生物課，東京．
- Tominaga, A., M. Matsui, and K. Nakata, 2014. Genetic diversity and differentiation of the Ryukyu endemic frog *Babina holsti* as revealed by mitochondrial DNA. Zool. Sci., 31: 64–70.
- 宇都宮泰明・宇都宮妙子，1983．南西諸島のカエルの卵および幼生について．広島大学生物生産学部紀要，22: 255‐270．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Babina holsti has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Babina holsti* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Wetland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

オキナワイシカワガエル

***Odorrana ishikawae* (Stejneger, 1901)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A:　—	基準 B:　EN	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
森林伐採などにより生息地面積は狭まっていると考えられる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

沖縄島のみに分布し、同島北部の常緑広葉樹の自然林および回復の進んだ二次林内の渓流沿いに生息する。近年の森林伐採や林道の整備により生息域が縮小し、個体数も減少している。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長はオスで 88～108 mm、メスで 103～115 mm。背面の基色は緑色で、暗褐色ないし黒紫色の円錐状の隆起が多数ある。虹彩は暗褐色で緑色の微小斑が散在する。四肢背面も緑色で、暗褐色斑が帯状になって暗帯を形成している。腹面は白色ないし淡黄白色で、淡褐色の斑紋で覆われるのが普通。吸盤、後肢のみずかきは比較的良く発達する。

【生活史】

繁殖期は 12 月～4 月で、2～3 月が最盛期。源流域の流れが緩やかな沢沿いの土手の穴の中や岩の割れ目などに産卵する。卵は黄白色で直径 2.9～3.5 mm、卵塊は球状だが個々の卵は遊離しやすい。幼生は産卵場近くの渓流の淀みなどで見つかり、多くは夏季に変態するが、越冬し、翌春に変態するものもある。性成熟までに要する年数は分かっていないが、オスの成体が 10 年以上にわたって繁殖地に現れたケースが報告されている。成体はヤスデやサワガニを捕食する。

【生息環境】

常緑広葉樹に覆われた山地の河川の源流域、上流域に生息する。本種の生息には一年を通して流れのある清冽な渓流の存在が不可欠である。非繁殖期の生息環境はよくわかっていないが、沢沿いで見かけることは多くなく、林内に分散していると思われる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

沖縄島北部の山林に固有。かつては名護市の山林や本部半島にも分布していた。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1970 年代には名護市の渓流でも確認されていたが、1993 年の確認を最後に記録がない。また、かつては本部半島にも少数が生息していたが、現在では確認できなくなっている。現在の生息地は、塩屋湾と平良を結ぶラインから北側の地域に限られる。

【生息地の現況】

生息域の各地で林道の整備が進み、生息環境は悪化している。

【個体数の現況】

個体数は不明だが、生息域が縮小し、生息環境も悪化しているため個体数は減少していると思われる。

存続を脅かす要因

林道の敷設・拡張などによる生息地の消失、劣化が本種の生息を圧迫する主要因と考え

られる。また、林道の整備と交通量の増加に伴い轢死事故も増加していると考えられ、生息を脅かす一因となっている。商業用に違法採集されているとの見方もあるが、実態は不明。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取

特記事項

DNA 分析に基づき、姉妹群のアマミイシカワガエルとの分岐は 200 万年よりも前に遡ると推定されている。また、両種を併せた系統は遺存性が高い。最近の集団遺伝学的研究により、本種の地理的な集団構造はアマミイシカワガエルと比べて単調であることが示されている。本種を含むニオイガエル属は中琉球・南琉球の地域から 6 種が知られ、琉球列島における種分化・多様化の過程を理解する上で学術的に高い価値を持つ。沖縄県の天然記念物に指定されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オキナワイシカワガエル	*Odorrana ishikawae*	EN
第４次 2019：	オキナワイシカワガエル	*Odorrana ishikawae*	EN
第４次 2018：	オキナワイシカワガエル	*Odorrana ishikawae*	EN
第４次 2017：	オキナワイシカワガエル	*Odorrana ishikawae*	EN
第４次 2015：	オキナワイシカワガエル	*Odorrana ishikawae*	EN
第４次：	オキナワイシカワガエル	*Odorrana ishikawae*	EN
第３次：	イシカワガエル	*Rana ishikawae*	EN
第２次：	イシカワガエル	*Rana ishikawae*	EN
第１次：	イシカワガエル	*Rana ishikawae*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- 千木良芳範，2005．イシカワガエル．改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 133‐134．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．
- Igawa, T., S. Oumi, S. Katsuren, and M. Sumida, 2012. Population structure and landscape genetics of two endangered frog species of genus *Odorrana*: different scenarios on two islands. Heredity, 110: 46–56.
- Kuramoto, M., N. Satou, S. Oumi, A. Kurabayashi, and M. Sumida, 2011. Inter- and intra-island divergence in *Odorrana ishikawae* (Anura, Ranidae) of the Ryukyu Archipelago of Japan, with description of a new species. Zootaxa, 2767: 25–40.
- 松井正文，2021．オキナワイシカワガエル．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 58．サンライズ出版，彦根．
- 松井正文・前田憲男．2018．日本産カエル大鑑．文一総合出版，東京．272pp.
- Matsui, M., T. Shimada, H. Ota and T. Tanaka-Ueno, 2005. Multiple invasions of the Ryukyu Archipelago by Oriental frogs of the subgenus *Odorrana* with phylogenetic reassessment of the related subgenera of the genus *Rana*. Mol. Phyl. Evol., 37: 733–742.
- 小原祐二，2025．同一個体と考えられるオキナワイシカワガエルを複数年にわたって確認した事例–その 2．Akamata，34: 1-5．
- 太田英利，2000．イシカワガエル．改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物（両生類・爬虫類），pp. 78‐79．環境庁自然保護局野生生物課，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Odorrana ishikawae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Odorrana ishikawae* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants
Law designation status for	Nationally rare species of wild fauna and flora.

conservation	



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

アマミイシカワガエル

***Odorrana splendida* Kuramoto, Satou, Oumi, Kurabayashi et Sumida, 2011**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
森林環境の改変や道路整備などにより生息地は減少している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

奄美大島の固有種で、山地渓流の源流域・上流域に生息する。幼生の生育には健全な森林内を流れる清冽な流水環境が必要である。林道の敷設・整備に伴う森林の伐採や、流域の開発は、本種の生息地の縮小および分断を引き起こしている。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長はオスで 74～124 mm、メスで 95～137 mm。奄美大島南西部の個体群は雌雄ともに他地域のものより明らかに大きい。南西部の個体群を除けば頭胴長は普通、オスで 100 mm、メスで 110 mm 程度。体色パターンは近縁のオキナワイシカワガエルに似るが、背面の暗色斑がより小さいこと、暗色斑の中心部が明らかに淡色なこと、胴側面がより黄色味を帯びること、腹面の斑紋が不明瞭なことなどで区別できる。体型もオキナワイシカワガエルに似ており、吸盤、後肢のみずかきは比較的よく発達する。

【生活史】

繁殖期は 1 月下旬～5 月で、最盛期は 2～3 月。卵は黄白色、直径は 2.9～3.5 mm ほどで、1 回に 1,000 個前後の卵を源流近くの常に水のある岩穴や土手の穴などに産む。幼生は孵化した岩穴から渓流に出て、それほど深くない場所を中心に生息する。幼生の下流方向への移動（流下）が確認されており、標識を付けた幼生がふ化地点から 90 m 下流に移動した例が知られる。幼生は 1 回または 2 回の越冬後、5～9 月にかけて変態する。オスは各産卵場所を占有し、繁殖期の間に複数回、産卵メスを獲得すると思われるが詳細は不明。成体の年間の行動範囲は水平の直線距離にして平均 200 m 程度、広い個体でも 500 m 程度であるという報告がある。カマドウマ、ヤスデ、ナメクジ、ミミズなどを捕食する。

【生息環境】

生息地は山地に限定される。常緑広葉樹林に覆われ、夏季にもあまり高温にならず、かつきれいな水が常時流れる渓流の存在が生息の必要条件と考えられる。繁殖は水量が少なく岩穴などが多い源流部でなされる。非繁殖期には渓流からやや離れるとされるが、渓流沿いにいることもあり、その場合は苔むした巨岩や岩盤上に静止している姿を見る。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

奄美大島の固有種。河川の源流域に生息している。笠利半島では確かな記録がない。かつて外来種のマングースの生息密度が高かった名瀬の周辺では確認数が顕著に少なかったという報告がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

生息地面積は広く見積もっても 400 km²を超えることはなく、実際の分布面積が 150 km² 未満とする推定もある。自然林を貫く道路の敷設、伐採により常緑広葉樹に覆われた山林が縮小していることから、生息地は狭まっていると考えられる。北部の笠利町には生息しないという情報があるが、確認が必要。

【生息地の現況】

かつて広い範囲で原生林が伐採され、また林道の敷設により多くの河川で環境が悪化した。近年でも開発は続いており、生息環境は悪化していると考えられる。

【個体数の現況】

具体的な数値は不明だが、生息域・繁殖場所の縮小を踏まえると、全体の個体数は本来の生息数から減少していると考えられる。マングースが定着していた島の中部では本種の個体密度が低下し、発見が難しくなっていた地域もあるが、防除事業によるマングース個体群の縮小に伴って、当該地域におけるカエル類の個体数は回復しつつある。

存続を脅かす要因

林道の敷設・整備に伴う森林伐採と河川環境の悪化が本種の存続を脅かす要因となっている。またマングースの捕食による明らかな影響もあったが、2024 年に奄美大島のマングースの根絶宣言がだされ、その悪影響は取り除かれている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，交通事故，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，交通事故

特記事項

DNA 分析に基づき、近縁なオキナワイシカワガエルと本種との分岐は 200 万年よりも前に遡ると推定されている。また、両種を併せた系統は遺存性が高い。最近の集団遺伝学的研究によって、本種内の集団構造はオキナワイシカワガエルと比べて複雑であり、遺伝的に異なるいくつかの地域個体群を含むことが示されている。本種を含むニオイガエル属は中琉球・南琉球の地域から 6 種が知られ、島嶼における種分化・多様化の過程を理解する上で学術的に高い価値を持つ。鹿児島県の天然記念物に指定されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アマミイシカワガエル	*Odorrana splendida*	EN
第４次 2019：	アマミイシカワガエル	*Odorrana splendida*	EN
第４次 2018：	アマミイシカワガエル	*Odorrana splendida*	EN
第４次 2017：	アマミイシカワガエル	*Odorrana splendida*	EN
第４次 2015：	アマミイシカワガエル	*Odorrana splendida*	EN
第４次：	アマミイシカワガエル	*Odorrana splendida*	EN
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- Igawa T., S. Oumi, S. Katsuren, and M. Sumida. Population structure and landscape genetics of two endangered frog species of genus *Odorrana*: different scenarios on two islands. Heredity, 110: 46-56.
- Iwai, N., K. Yasumiba, and M. Akasaka. 2018. Calling-site preferences of three co-occurring endangered frog species on Amami-Oshima Island. Herpetologica, 74(3):1 99-206.
- 岩井紀子・亘悠哉，2006．奄美大島におけるイシカワガエル・オットンガエルの生息状況．爬虫両棲類学会報，2006: 109‐114．
- Kuramoto, M., N. Satou, S. Oumi, A. Kurabyashi, and M. Sumida, 2011. Inter- and intra-island divergence in *Odorrana ishikawae* (Anura, Ranidae) of the Ryukyu Archipelago of Japan, with description of a new species. Zootaxa, 2767: 25–40.
- 松井正文，2021．アマミイシカワガエル．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 58．サンライズ出版，彦根．
- 永井弓子・岩井紀子・山室一樹・山田一生・大海昌平・亘悠哉，2011．奄美大島におけるイシカワガエルの生活史を通した行動圏と利用環境の解明．プロ・ナトゥーラ・ファンド第 20 期助成成果報告書，pp. 59‐80．自然保護助成金，東京．
- 大海昌平，2006．奄美大島におけるイシカワガエルの繁殖生態：繁殖期における雌雄の動きと飼育下の産卵行動．爬虫両棲類学会報，2006: 104‐108．
- 大海昌平・岩井紀子・小野桂壽，2011．野外におけるイシカワガエルオタマジャクシの成長・発育．爬虫両棲類学会報，2011: 8‐13．
- 大海昌平・岩井紀子・亘悠哉，2012．アマミイシカワガエル地域個体群間の体サイズ比較．爬虫両棲類学会報，2012: 101‐106．
- 戸田光彦・太田英利，2014. アマミイシカワガエル．環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編），レッドデータブック 2014 日本の説滅の恐れのある野生生物 3 爬虫類・両生類，pp. 108‐109．ぎょうせい，東京．
- 亘悠哉．2019．外来種対策のロードマップとチェックリスト：奄美大島のマングース対策からのフィードバック．日本鳥学雑誌，68(2): 263‐272．

- Watari Y., S. Takatsuki, T. Miyashita. 2008. Effects of exotic mongoose (*Herpestes javanicus*) on the native fauna of Amami-Oshima Island, southern Japan, estimated by distribution patterns along the historical gradient of mongoose invasion. Biol. Invasions, 10: 7–17.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Odorrana splendida has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Odorrana splendida* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Vehicle collision
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

コガタハナサキガエル

***Odorrana utsunomiyaorum* (Matsui, 1994)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A:　—	基準 B:　EN	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息地に関して具体的な資料が不足しているため、生息地面積を具体的な数字として示すのは難しいが、同所的に分布するオオハナサキガエルと比べると、より出現環境が限定的なのは間違いなく、繁殖地の要件も、小規模な滝が存在することなど、より厳しい。すなわち、森林周囲の人為的な環境改変によって影響をより受けやすいものと推測される。石垣島においては、外来種の影響により個体群の存続が危ぶまれている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

八重山諸島の石垣島と西表島に固有の中型種で、頭胴長はオス 40～48 mm、メス 46～60 mm 程度。常緑広葉樹の自然林に囲まれた山地の渓流の源流～上流域だけに生息し、数は多くない。西表島の個体群と石垣島の個体群は遺伝的に分化しておりそれぞれが保全される必要がある。石垣島での生息地は限られ、外来種の影響もあって個体群の存続が危ぶまれる。西表島でも、人為活動により渓流環境への過度の負荷がかかることがないよう注意が必要である。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長はオスが 40～48 mm、メスが 46～60 mm 程度。頭胴長に対する四肢の割合は、琉球列島の他の同属種に比して小さく、下腿長は多くの場合頭胴長の 49～56%程度。吻端はあまり尖らない。後肢を前屈すると、下腿と足根の間の関節は眼の前縁と鼻孔の間に達する。胴部背面の顆粒は顕著。背面の基色は淡褐色から緑褐色まで変異に富み、暗色の斑紋がある。

【生活史】

繁殖期は 2 月～4 月で、渓流に 45～140 個の卵を産むが、野外での卵や幼生の観察事例は限られている。卵は色素が沈着せず白色で、直径 3.5～4.0 mm と大きい。成体は、様々な規模の滝近くの飛沫帯で見かけることが多く、おそらくは伏流でも産卵するものと思われる。昆虫類、サワガニの稚ガニなどを捕食するのが観察されている。幼生は源流域の水たまりや静かな流れに生息するものと思われ、同種の卵食の可能性が示唆されている。

【生息環境】

発達した常緑広葉樹林に覆われた山地の源流域で見られ、河川中流域では枝沢の染み出しのようなところで見かける。オオハナサキガエルが河川の中流域の本流でも見られるのに対し、本種の生息域は明らかにそれよりも上流である。また、オオハサキガエルと違って渓流から離れた場所で見ることはほとんどなく、源流部の流れ脇の土手や、大小様々な滝の周囲の飛沫がかかるような環境でみつかる。また、そういった環境で鳴き声を聞く。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

八重山諸島の石垣島と西表島のみに分布。最近縁種のスインホーガエルは台湾に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

石垣島では於茂登岳とそれに続く山塊にだけ生息するものと思われる。西表島では河川の源流のような環境が散在する内陸部により多く生息していると思われるが、詳細は不明。

【生息地の現況】

石垣島では、競合と食害の両面で本種に悪影響を与えると思われるオオヒキガエルが山地にまで入り込んでいる。西表島では渓流のトレッキングなどが増えており、その影響が懸念されるが、実際の影響は評価されておらず、不明。

【個体数の現況】

西表島での観察から、もともと生息密度が高いカエルではないと思われるが、特に石垣

島では本種を見かけるエリアも機会も限られており、個体数は非常に少ないのではないかと思われる。

存続を脅かす要因

森林の後退と外来種のオオヒキガエルが本種の存続を脅かす主要因と思われる。渓流トレッキングや渓流からの取水を含む山地の利用に伴う環境の悪化が存続を脅かす一因となっている可能性が考えられる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，競争/競合（外来種による）
	（現在）	森林伐採，競争/競合（外来種による）

特記事項

石垣島の集団と西表島の集団は遺伝的に大きく分化しており、遺伝的多様性保全の観点から双方を保全する必要がある。また、このような大きな分化はオオハナサキガエルには見られず、島嶼における同属種の共存のメカニズムを知る上でも学術的に貴重な存在である。また、台湾、中琉球地域の同属種と合わせて、島嶼隔離に伴って種分化したグループを構成しており、学術的に貴重である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	コガタハナサキガエル	*Odorrana utsunomiyaorum*	EN
第４次 2019：	コガタハナサキガエル	*Odorrana utsunomiyaorum*	EN
第４次 2018：	コガタハナサキガエル	*Odorrana utsunomiyaorum*	EN
第４次 2017：	コガタハナサキガエル	*Odorrana utsunomiyaorum*	EN
第４次 2015：	コガタハナサキガエル	*Odorrana utsunomiyaorum*	EN
第４次：	コガタハナサキガエル	*Odorrana utsunomiyaorum*	EN
第３次：	コガタハナサキガエル	*Rana utsunomiyaorum*	EN
第２次：	コガタハナサキガエル	*Rana utsunomiyaorum*	EN
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠB類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- 秋田耕佑・戸金大・阿南一穂．2024．コガタハナサキガエル幼生による同種の卵の摂食．Akamata, 33: 23‐26．
- Matsui, M., 1994. A taxonomic study of the *Rana narina* complex, with description of three new species (Amphibia : Ranidae). Zool. J. Linn. Soc., 111: 385–415.
- 松井正文，2021．コガタハナサキガエル．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 61．サンライズ出版，彦根．
- 松井正文・前田憲男，2018．日本カエル大鑑．文一総合出版，東京．272pp.
- Matsui, M., T. Shimada, H. Ota and T. Tanaka-Ueno, 2005. Multiple invasions of the Ryukyu Archipelago by Oriental frogs of the subgenus *Odorrana* with phylogenetic reassessment of the related subgenera of the genus *Rana*. Mol. Phylogenet. Evol., 37: 733–742.
- 富永篤，2017．コガタハナサキガエル．沖縄県環境部自然保護課（編）改定・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 220‐221．沖縄県環境部自然保護課，那覇．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Odorrana utsunomiyaorum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Odorrana utsunomiyaorum* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Competition (with alien species)
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

ナゴヤダルマガエル

***Pelophylax porosus brevipodus* (Ito, 1941)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　―	基準 B:　EN	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
低湿地、特に水田に限って分布するが、愛知県などを除き、水田地帯は近年、都市部近郊を中心に、隔離・減少の傾向が強く、本種の分布も著しく分断されている。分断された小集団の絶滅リスクは高い状態にある。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
主要な生息地である水田の減少、営農形態の変更という人為的環境改悪は無くなっていない。山陽地方最西部のほとんどと四国では近年絶滅した。静岡県東部や広島県などのかつての生息地のほとんどで、近年絶滅や継続的な減少が推測される。保全活動のうち、移殖の試みはこれまでほとんどすべて失敗しており、保全活動における今後の課題である。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種の分布域は日本産のカエル類の中では狭く、中部地方から山陽地方と、四国地方の一部に限られているが、現在の生息状況はきわめて芳しくなく、各地で着実に絶滅に近づいている。

基礎情報

【形態】

体長はオスで 56 mm、メスで 63 mm 程度。後肢は短く、みずかきは良く発達する。幅広く明瞭な背側線隆条と、その間に短く弱い隆条をもつ。背面の基色は緑褐色、背側線は赤褐色で、孤立した円型の黒色斑紋をもつのが普通。個体によっては明色の背中線をそなえる。腹面は白く、暗色の雲状斑紋をもつことがある。重複して分布するトノサマガエルは体がより大きく、四肢は長く、背中線をもつのが普通で、背面の黒色斑紋は連続し、オスにはメスと顕著に異なる婚姻色が発達し、腹面には斑紋がなく、鳴き声の一声が短い。東日本に分布する基亜種トウキョウダルマガエルは、本亜種とトノサマガエルの中間的な特徴をもつ。

【生活史】

成体は春から秋にかけて活動を行い、4 月下旬～7 月中旬にかけて繁殖する。繁殖場所は水田が普通で、その他、溝、浅い池、沼など、いずれも浅い止水が利用される。オスは強い縄張性を示す。メス一腹中の完熟卵数は 1,300～2,200 個程度で、何回かに分けて放卵する。大型のメスでは産卵後しばらくすると、再び少量の卵が完熟し、2 度目の産卵を行う。幼生は 5 月から水中で成長・発育し、7 月～9 月に変態、上陸する。 繁殖個体の平均年齢は不明だが、オスの多くとメスの一部は変態した年の秋に成熟し、メスの残りも、翌年の繁殖期間中に成熟し、繁殖する。寿命は不明である。変態後は単独で生活し、クモ、昆虫、ムカデなど、各種の無脊椎動物の他、カエルも捕食する。

【生息環境】

ほとんど水辺から離れず、繁殖期、非繁殖期ともに低地湿原、低湿地帯の水田、その畔と農道、側溝、用水路、小河川で生活する。冬眠は水の干上がった水田の土中や敷き藁の下でなされる。

生息環境区分：	【陸域_平地部】田地・畑地，湿地・湿原，ワンド，農業用水路，小河川，ため池・池沼
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

分布域は、本州の中部地方南部、東海、近畿地方北・中部、山陽地方東部と四国地方の一部という温暖な地域に限られている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

福井県、広島県内陸部の産地は近年の発見であったが、より最近になり、京都府の日本海側での発見があった。既知の産地のうち、京都市・大阪市・豊中市・神戸市・岡山県・香川県の多くと、広島県のほとんどでほぼ確実に絶滅しており、静岡県東部などその他の多くの地点でも絶滅に瀕している。低湿地に生息するため、山地や市街地によって分断さ

れている。わずか 3 地域で確認されていただけの広島県下では、現在野生集団はほとんどいない。

【生息地の現況】

全分布域を通じて、かつては多量の農薬使用がなされた。岡山県下では、広大な水田地帯が埋め立てられて工場や住宅団地に変わり、農業改善によって河川や側溝のほとんどが 3 面コンクリート補強型となり、水が家庭廃液で汚染されたことが、すでに半世紀ほど昔に報告されている。

【個体数の現況】

山陽地方最西部のほとんどと四国の個体群は近年絶滅した。地域個体群別の推定個体数は不明だが、すべての地域で減少していることは疑いない。京阪神では、すでに今から半世紀ほど昔には水田が畑地、宅地になったため、激減した。

存続を脅かす要因

生息地破壊が最大の脅威で、水田の減少、家屋・道路の建設やそれにともなう水質汚濁、河川敷の公園化などを含む。また、生物教材用に捕獲されてきた。移入種ウシガエルによって捕食されていると思われる。生息環境の開発、破壊によって、トノサマガエルとの完全なすみ分けができなくなり、自然交雑を生じて遺伝的な純粋性を失いつつある。加えて近年の極端な異常気象による水害や干ばつも生存に被害を及ぼしている。

要因の区分：	（過去）	河川開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），捕食（在来種による），競争/競合（在来種による），交雑（在来種による）
	（現在）	河川開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），捕食（在来種による），競争/競合（在来種による），交雑（在来種による）

特記事項

トノサマガエルと長らく混同されてきた動物で、その発見年代が日本本土産のカエルとしては新しいこと、自然雑種形成、遺伝子浸透の絶好のモデル動物であることから、日本産の両生類のなかでもとくに注目に値する。また、東海・近畿地方産の名古屋種族と、瀬戸内海沿岸産の岡山種族では、形態や鳴声がある程度分化しており、種分化の解明のために各地の個体群が重要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ナゴヤダルマガエル	*Pelophylax porosus brevipodus*	EN
第４次 2019：	ナゴヤダルマガエル	*Pelophylax porosus brevipodus*	EN
第４次 2018：	ナゴヤダルマガエル	*Pelophylax porosus brevipodus*	EN

第４次 2017：	ナゴヤダルマガエル	*Pelophylax porosus brevipodus*	EN
第４次 2015：	ナゴヤダルマガエル	*Rana porosa brevipoda*	EN
第４次：	ナゴヤダルマガエル	*Rana porosa brevipoda*	EN
第３次：	ナゴヤダルマガエル	*Rana porosa brevipoda*	EN
第２次：	ダルマガエル	*Rana porosa brevipoda*	VU
第１次：	ダルマガエル	*Rana porosa brevipoda*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【福井県】県域絶滅危惧Ⅱ類，【長野県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【岐阜県】絶滅危惧Ⅱ類，【静岡県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【三重県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【滋賀県】絶滅危機増大種，【京都府】絶滅寸前種，【大阪府】CR+EN，【兵庫県】Bランク，【奈良県】絶滅寸前種，【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類，【広島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【香川県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【愛媛県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

都道府県条例指定種【滋賀県・京都府・奈良県・広島県・愛媛県】

参考文献

- Hirai, T. and M. Matsui, 2001. Food habits of an endangered Japanese frog *Rana porosa brevipoda*. Ecol. Res., 16(4): 737–743.
- Khonsue, W., M. Matsui, T. Hirai and Y. Misawa, 2001. A comparison of age structures in two populations of a pond frog *Rana nigromaculata* (Amphibia: Anura). Zool. Sci, 18(4): 597–603.
- Komaki, S., A. Kurabayashi, M. M. Islam, K. Tojo and M. Sumida, 2012. Distributional change and epidemic introgression in overlapping areas of Japanese pond frog species over 30 years. Zool. Sci., 29(6): 351–358.
- 松井正文，1996．ダルマガエル，日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（III），pp. 262-267，日本水産資源保護協会，東京.
- 松井正文，2000．ダルマガエル，環境庁（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック―（爬虫類・両生類）pp. 88-89，自然環境研究センター，東京.
- 松井正文，2022．日本のダルマガエル類：分類と分布．守山拓弥・中田和義・渡部恵司（編）．ダルマガエル 生態を知って農業で守る，pp. 31-46．農文協，東京.
- 大河内勇・宇都宮妙子・宇都宮泰明・沼澤マヤ，1997．ダルマガエル（*Rana porosa brevipoda* Ito）岡山種族の飼育下での繁殖と絶滅が危惧された個体群への補強的な再導入．保全生態学研究，2: 135-146.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Pelophylax porosus brevipodus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pelophylax porosus brevipodus* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland, Wetland, Inlet, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond
Threat types:	River development, Field preparation, Land development, Transportation infrastructure construction, Water pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Predation (by native species), Competition (with native species), Hybridization (with native species)
Law designation status for conservation	Prefectural Ordinance-Designated Species【Shiga・Kyoto・Nara・Hiroshima・Ehime】.



執筆者:	松井正文（京都大学）
Author:	Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae

チョウセンヤマアカガエル

***Rana uenoi* Matsui, 2014**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　—	基準 B:　EN	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
森林伐採や河岸の人工的整備、水田放棄などによる生息環境の悪化、丘陵の谷開口部の舗装道路の建設、土地開発による繁殖地の消失等によって、本種の生息に適した環境が分断している。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
河川改修や沢周辺の土地造成などによって、繁殖場所と生息環境が悪化しており、繁殖がみられなくなった地点がでてきている。現況で繁殖が見られる場所でも側溝の水たまりでかろうじて繁殖できている地点があり、今後も繁殖地の減少が予測される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は、中型のアカガエルで、雄の頭胴長は 52～64 mm、雌は 58～84 mm。小河川、沢、池といった水域周辺の林床や草むらに生息し、春に繁殖する。繁殖場所は、沢沿いや湿地の止水、水田や林道わきの水たまりで卵塊が付着して卵塊群となる。変態上陸後の生活はよくわかっていない。河川改修などにより、繁殖場所が減少してきている。

協力者:　松尾公則（長崎女子短期大学）

基礎情報

【形態】

オスは体長 52～64 mm、メスは体長 58～84 mm でメスのほうが大きい。ヤマアカガエルに似ているが、外蹠隆起はないことが多く、鼓膜は一般に大きくて、その直径が眼径の 2/3 に等しいかあるいはそれよりも大きいのを原則とする。左右の上眼瞼の間隔は比較的広く、左右の外鼻孔の間隔よりは狭いが、普通は上眼瞼の幅に等しい。褐色の体色は同所的に分布するツシマアカガエルと似ているが、ツシマアカガエルより大型で、鼓膜が眼よりやや小さい程度。鳴嚢をもつことや隆起状の背側線が大きく曲がらないことでも区別できる。染色体数は 24 本。

【生活史】

産卵期は 2～4 月で、湿地や河岸、林道脇の水たまり、浅い池、水田や畑の水路のよどみなどの止水域に球形に近い卵塊を産む。幼生期や変態上陸後の幼体、成体の生活は、他のアカガエル類と同様と考えられるが、あまり調査されていないので、成熟年齢等の生活史に関する情報は少ない。

【生息環境】

平地から山地に広く分布し、山間の沢周辺の林床や丘陵や平地の湿地、水田周辺の草地など多様な環境に生息する。緩い流れがあることもあるが、基本的に止水の水たまりや湿地で繁殖する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，草地，湿地・湿原・細流，河川上流域，河川中流域 【陸域_平地部】森林，草地，湿地・湿原，河川中流域，河川下流域，農業用水路，小河川
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

対馬に分布し、国外では朝鮮半島に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

対馬における本種の分布域は上対馬と下対馬の全域であったが、近年は下対馬での確認記録が得られていない。現在の繁殖場所の多くは、上対馬の北部地域に偏っている。

【生息地の現況】

本種が生息する丘陵地周辺の森林と草原、湿地が混在する地域は、河川改修や圃場整備など、人の生活と密接に関係した環境改変が継続している。いずれの開発行為も治水対策が重要な要素となっており、アカガエル類が繁殖する湿地が減少する傾向を生じる要因となっている。過去には本種が繁殖場所として利用していた耕耘前の水田や潅水用水路が水

路整備等により乾田化が進み、本種が利用できる条件はほぼ消滅した。現在の繁殖場所は河岸域の水たまり、廃田湿地、道路建設後の残存湿地といった場所で、地点数は少ない。また、河川改修による河岸の止水域の減少も本種の繁殖地の減少を生じている。

【個体数の現況】

アカガエル類は成体の目視・捕獲による個体数調査はかなりの労力を必要とするが、早春に繁殖する場面での繁殖地出現個体や卵塊数のカウントによって相対的な個体数密度を推定できる。対馬での継続的なアカガエル類の個体数や繁殖の調査はないが、2021 年 3 月に行った現況調査で、ツシマアカガエルの繁殖地が 31 カ所確認できたのに対してチョウセンヤマアカガエルの繁殖地は 14 カ所であった。ツシマアカガエルは、その後も繁殖が初夏まで継続した。チョウセンヤマアカガエルの繁殖場所は、廃田の残存水路や道路建設で分断された湿地など、安定的とは言えない環境が多かった。今回の現況調査で確認できた産卵後の卵塊数は約 470 で、情報のある地点を広域に回ったことから、すべての繁殖地を把握できていないとしてもアカガエル類としては少ない数値といえる。卵塊数を成体メスの個体数と考えると単純な推定では 1000 個体程度の成体数になっている可能性もある。

存続を脅かす要因

森林伐採や河岸の人工的整備、水田放棄などによる生息環境の悪化、丘陵の谷開口部の舗装道路の建設、土地開発による繁殖地の消失、侵入したヌマガエルやトノサマガエルの影響が懸念される

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，湿地開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設
	（現在）	森林伐採，河川開発，湿地開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，競争/競合（外来種による）

特記事項

本種は東アジアに分布するアカガエル類の中でもっとも絶滅危惧の程度が高いと推察できる。対馬に固有のツシマアカガエルは、繁殖期がやや長いことで湛水後の水田環境も繁殖に利用できており、絶滅危惧の程度は相対的に低い。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	チョウセンヤマアカガエル	*Rana uenoi*	NT
第４次 2019：	チョウセンヤマアカガエル	*Rana uenoi*	NT
第４次 2018：	チョウセンヤマアカガエル	*Rana uenoi*	NT
第４次 2017：	チョウセンヤマアカガエル	*Rana uenoi*	NT
第４次 2015：	チョウセンヤマアカガエル	*Rana dybowskii*	NT

第４次:	チョウセンヤマアカガエル	*Rana dybowskii*	NT
第３次:	チョウセンヤマアカガエル	*Rana dybowskii*	NT
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【長崎県】絶滅危惧ⅠB類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 松尾公則，2005．長崎県の両生・爬虫類．長崎新聞社，長崎．155pp.
- 松尾公則・富樫忠士・三谷奈保・藤田有希，2004．長崎県の壱岐・対馬に侵入したヌマガエル（講演要旨）．爬虫両棲類学会報，2004: 61-62.
- 三谷奈保・戸田光彦・萩野伊万里・玖須博一・野田一男・松尾公則，2009．対馬における 5 年間のヌマガエルの分布拡大（講演要旨）．爬虫両棲類学会報，2009: 86.
- 日本爬虫両棲類学会（編），2021．新日本両生爬虫類図鑑．サンライズ出版，彦根．232pp.
- Uéno S-I., and Y. Shibata, 1970. A brief account of the herpetology of the islands of Tsushima. Mem Nat Sci Mus. Tokyo, 3: 193-198.
- 浦田明夫・山口鉄男，1976. 対馬の両生類，長崎県生物学会（編）．対馬の生物，pp. 261-264．長崎県生物学会，長崎.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Rana uenoi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Rana uenoi* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Grassland, Wetland/Marsh/Stream, Upper river basin, Middle river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Wetland, Middle river basin, Lower river basin, Agricultural ditch, Small river
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Wetland development, Field preparation, Land development, Transportation infrastructure construction, Competition (with alien species)
Law designation status for conservation	—


©竹中践（東海大学）


©高橋洋生（自然環境研究センター）

執筆者:	竹中践（東海大学）
Author:	Sen Takenaka

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　ヌマガエル科 Dicroglossidae　　日本固有

ナミエガエル

***Limnonectes namiyei* (Stejneger, 1901)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B2ab

基準 A: ―	基準 B: EN	基準 C: ―	基準 D: ―	基準 E: ―

B2．生息地面積が 500 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
本種は、かつては名護市の山林でも確認されており、分布の南限が北上して現在の状態に至っている。分布の縮小には人為的な環境改変やマングースの影響が大きいと考えられ、それらの懸念材料は未だ取り除かれていないため、今後も減少していくものと思われる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

沖縄島に分布する。同島北部の常緑広葉樹に覆われた山地に生息し、清冽な渓流に強く依存している。圃場整備や林道の敷設・拡張により生息域が縮小し個体数も減少している。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長はオスで 79～117 mm、メスで 72～91 mm。非常に頑丈な体格で頭部が大きく、頭幅はオスでは頭胴長の 51%、メスでも 45%ほどに達する。鼓膜は皮膚の下に隠れ外見的には不明瞭。胴部背面の皮膚には不規則な隆起が密にある。体色は褐色ないし灰褐色で、両眼間には幅の広い暗色の帯があることが多い。

【生活史】

4～10 月によく見られる。冬季は目撃頻度が下がるが、12 月のリュウキュウアカガエルの一斉繁殖の時には大型の個体が多数出現する。これはリュウキュウアカガエルを捕食するためではないかと思われる。おもに 4 月下旬～6 月下旬にかけて繁殖し、源流域の浅くて流れの緩やかな砂泥底質の水場に、直径 2.2～2.5 mm ほどの卵がほとんどバラバラに産み落とされる。幼生期は 2 ヶ月間ほどで、6～8 月には渓流の流れの脇で変態上陸した幼体が多数見られる。性成熟に要する年数や寿命は不明。オスの方が大型であることから、繁殖期にオス同士が闘争することも考えられるが、確認はされていない。サワガニ類、エビ類、トビケラ類、ミミズ類等を食べるとされていたが、リュウキュウアカガエル、オキナワアオガエルの捕食が相次いで報告され、カエル類への依存度も低くない可能性があるうえ、ヤンバルトカゲモドキを捕食した例もある。他の多くの日本産カエル類と異なり、水中でも摂食する。繁殖期以外でも水場に強く依存して生活しており、水場と離れた場所で見ることは少ない。

【生息環境】

常緑広葉樹の自然林内を流れる河川の源流域に生息する。繁殖に必要な、砂泥底質の源流域をもつ清冽な渓流の存在が生息の必要条件と思われる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，河川源流域
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

沖縄島の北部山地に固有。最近縁種のフッケンクールガエル（*Limnonectes fujianensis*）は台湾から中国にかけて分布している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

1970 年代初頭までは本部半島を含む名護市以北の広い範囲に生息していた。しかし、その後 30 年弱の間に名護市のほとんどの河川、さらにはそれより北の多くの河川からも姿を消し、現在安定的に繁殖集団が存続しているのは塩屋湾と平良を結ぶラインの北側だけになっている。

【生息地の現況】

林道建設や農地開発に伴う森林伐採により、生息環境は悪化している。

【個体数の現況】

資料が少なく、個体数について具体的に示すことはできないが、分布域の縮小、生息環境の悪化に伴い、個体数が減少していることは間違いない。

存続を脅かす要因

道路の敷設・拡張工事、農地開発に伴う森林地域の縮小と、それにともなう河川への土砂の流入が存続を脅かす主要因と考えられる。また、名護市や本部半島で本種の個体群が消滅した背景にはマングースの影響があると思われる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕食（外来種による）

特記事項

クールガエル属で唯一琉球列島に分布する種で、やんばるに固有であることから、生物地理学的に貴重な存在である。同属の近縁種のなかでは大型で、島嶼における体サイズの進化を論じる上でも重要な存在といえる。沖縄県の天然記念物に指定されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ナミエガエル	*Limnonectes namiyei*	EN
第４次 2019：	ナミエガエル	*Limnonectes namiyei*	EN
第４次 2018：	ナミエガエル	*Limnonectes namiyei*	EN
第４次 2017：	ナミエガエル	*Limnonectes namiyei*	EN
第４次 2015：	ナミエガエル	*Limnonectes namiyei*	EN
第４次：	ナミエガエル	*Limnonectes namiyei*	EN
第３次：	ナミエガエル	*Limnonectes namiyei*	EN
第２次：	ナミエガエル	*Rana namiyei*	VU
第１次：	ナミエガエル	*Rana namiyei*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠB類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- 千木良芳範・富永淳，2017．ナミエガエル．沖縄県環境部自然保護課（編）改定・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版（動物編）－レッドデータおきなわ－，p. 223-224．沖縄県環境部自然保護課，那覇．
- 越野一志，2015． ナミエガエルによるクロイワトカゲモドキの捕食例．Akamata，25: 13‐14．
- 松井正文，2021．ナミエガエル．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 48．サンライズ出版，彦根．
- 松井正文・前田憲男，2018．日本産カエル大鑑．文一総合出版，東京．
- Matsu, M., N. Kuraishi, J - P. Jiang, H. Ota, A. Hamydy, N. L. Orlov, and K. Nishikawa, 2010. Systematic reassessments of fanged frogs from China and adjacent regions (Anura: Dicroglossidae). Zootaxa, 2345: 33–42.
- 森哲，2009．ナミエガエルによるリュウキュウアカガエルの捕食例．Akamata，20: 8．
- 中村泰之，2010．ナミエガエルによるオキナワアオガエルの捕食例．Akamata，21: 7‐8．
- Okochi, I. and S. Katsuren, 1989. Food habits in four species of Okinawan frogs. In: M. Matsui, T. Hikida and R. C. Goris (eds.), Current Herpetology in East Asia. pp. 405–412. The Herpetological Society of Japan, Kyoto.
- 太田英利，2000．ナミエガエル．改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物（両生類・爬虫類），pp. 94‐95．環境省自然保護局野生生物課，東京．
- 宇都宮泰明・宇都宮妙子，1983．南西諸島のカエルの卵および幼生について．広島大学生物生産学部紀要，22: 255‐270．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Limnonectes namiyei has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Limnonectes namiyei* is listed as EN under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 500 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater

Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

オオダイガハラサンショウウオ

***Hynobius boulengeri* (Thompson, 1912)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab				
基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
分布は河川、平地によって細かく山塊ごとに分断されており、小集団は絶滅リスクが高い状態にある。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息域の各所で森林伐採、林道建設が進んでいる。30 年以上前に、観光客の残すごみによって、幼生の生息場所である渓流が汚染され、個体数が減少している例が指摘されている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種では林道建設や観光地化によって、生息環境の悪化が起こっている。

基礎情報

【形態】

体は非常に大型、頑丈で、全長は 136～194 mm。尾は長く、頭胴長の 80～90%になる。鋤骨歯列はU字型に近い深いV字型で、体側には通常 13 本の肋条をもつ。前後肢を体側に沿って折り返すと、0.5～3 肋鰭分の隙間を生じる。後肢は 5 趾性。尾は後半部で著しく側偏し、丈が高い。背面は一様な石板色で、斑紋や斑点をもたない。腹面は背面より淡色。きわめて大型で、ほとんど斑紋をもたず、尾の側偏の程度が著しいことでイシヅチサンショウウオを除く他のどの種とも区別される。イシヅチサンショウウオは鋤骨歯列が本種より短い。幼生はブチサンショウウオの幼生に似ているがより大型で、頭部はより角張る傾向がある。ハコネサンショウウオの幼生と違い、四肢後面に皮膚のひだをもたず、背鰭は胴の中央から始まり、四肢端の黒色の爪も強くは発達しない。

【生活史】

繁殖は年 1 回、本州の低地では 2 月下旬から、高地では 5 月上旬～下旬である。繁殖場所は山地にある川幅の中程度の渓流で、とくに源流近くが利用され、水中にある大きな岩石・倒木の下など、日光の差し込まない場所に産卵がなされる。1 メスの産卵数は 19～63 個程度。幼生は 5 月頃から水中で成長・発育し、一部は年内、多くは越冬して翌年の 9 月頃までに変態するが、翌々年に変態するものもいる。幼生は水生昆虫、ミミズ類、ヨコエビ類、落下するクモ類、陸生昆虫類を食べ、よく共食いもする。変態後は渓流近くや斜面で、積み重なった岩石の間、林床の落葉・倒木の下などで生活し、クモ類、昆虫類、ミミズ類、とくにシーボルトミミズを餌とする。土中や石下、ときに渓流中で越冬するが、12 月、1 月にも活動することがある。繁殖個体の平均年齢、成熟時期、野外での寿命は不明である。

【生息環境】

夏緑広葉樹林、針広混交林に生息する。既知の分布地点は標高 200～1,750 m の間にあり、ほとんどは 500 m 以上である。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

本州の近畿地方南部を東西に走る紀の川、吉野川の一線以南（三重県、奈良県、和歌山県の 3 県)。過去に報告のある三重県北部の分布地点は他とかけ離れており、誤りの可能性が高い。本種と同様に流水産卵性のマホロバサンショウウオ、ハコネサンショウウオ、ホムラハコネサンショウウオと混生する場合がある。幼生段階で他種と生態的にすみ分けており、三重県下ではマホロバサンショウウオよりも上流に生息する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

生息地は河川、平地によって細かく分断される。分布面積、分布域縮小率の詳細は資料が少なく推定不能。

【生息地の現況】

生息域の各所で森林伐採、林道建設が進んでいる。30 年以上前に、観光客の残すごみによって、幼生の生息場所である渓流が汚染され、個体数が減少している例が指摘されている。近年は繁殖場所である河川源流域で土壌の流出が見られ、幼生が激減した地域が知られている。

【個体数の現況】

個体数は不明だが確実に減少している。

存続を脅かす要因

山岳道路、砂防堰堤の建設、森林伐採と、それにともなう土砂の渓流への流入や、観光地化による水質汚濁のような生息環境の消失が種の存続を脅かしている。愛好者等による乱獲のおそれがある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，交通事故，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	森林伐採，河川開発，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取

特記事項

分布する各県の指定天然記念物に指定されている（三重県、奈良県、和歌山県）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオダイガハラサンショウウオ	*Hynobius boulengeri*	VU
第４次 2019：	オオダイガハラサンショウウオ	*Hynobius boulengeri*	VU
第４次 2018：	オオダイガハラサンショウウオ	*Hynobius boulengeri*	VU
第４次 2017：	オオダイガハラサンショウウオ	*Hynobius boulengeri*	VU
第４次 2015：	オオダイガハラサンショウウオ	*Hynobius boulengeri*	VU
第４次：	オオダイガハラサンショウウオ	*Hynobius boulengeri*	VU
第３次：	オオダイガハラサンショウウオ	*Hynobius boulengeri*	VU
第２次：	本州・九州地域のオオダイガハラサンショウウオ	*Hynobius boulengeri*	LP
第１次：	本州・九州地域のオオダイガハラサンショウウオ個体群	*Hynobius boulengeri*	LP

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【三重県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【奈良県】絶滅危惧種，【和歌山県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【徳島県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- 松井正文，1995．オオダイガハラサンショウウオ．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（Ⅱ），pp. 410‐415，日本水産資源保護協会，東京．
- 松井正文，2010．オオダイガハラサンショウウオ．改訂レッドリスト付属説明資料 爬虫類・両生類，pp. 12，環境省自然環境局野生生物課，東京．
- 松井正文，2000．本州・九州地域のオオダイガハラサンショウウオ．環境庁自然保護局野生生物課（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－(爬虫類・両生類)．pp. 110‐111，財団法人自然環境研究センター，東京．
- 松井正文・西川完途，2021．オオダイガハラサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp .11，サンライズ出版，彦根．
- Nishikawa, K., M. Matsui and S. Tanabe, 2005. Biochemical phylogenetics and historical biogeography of *Hynobius boulengeri* and *H. stejnegeri* (Amphibia, Urodela) from the Kyushu region, Japan. Herpetologica, 61(1): 54–62.
- Nishikawa, K., M. Matsui, S. Tanabe and S. Sato, 2001. Geographic enzyme variation in a Japanese salamander, *Hynobius boulengeri* Thompson (Amphibia, Caudata). Herpetologica, 57(3): 281–294.
- Nishikawa, K., M. Matsui, S. Tanabe and S. Sato, 2007. Morphological and allozymic variation in *Hynobius boulengeri* and *H. stejnegeri* (Amphibia: Urodela: Hynobiidae). Zool. Sci., 24(7): 752–766.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius boulengeri has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius boulengeri* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Land development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Water pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.



執筆者:	松井正文（京都大学）・西川完途（京都大学）
Author:	Masafumi Matsui and Kanto Nishikawa

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

オオイタサンショウウオ

***Hynobius dunni* Tago, 1931**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2 B1ab

基準 A:　VU	基準 B:　VU	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2. 過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。
【比較年】
3 世代（12 年）
【過去の状況】
過去および近年の調査経験者へのヒアリングによる。
【近年の状況】
過去および近年の調査経験者へのヒアリングによる。大分県竹田市の生息地では、12～13 年前と 7～8 年前に実施された調査の結果、産卵場所・産卵数とも後年では 1／3 ほどになっていた（2022 年 2 月時点）。また熊本県の既知 3 地点のうち、少なくとも 1 地点では近年確実な記録が得られていない。

B1. 出現範囲が 20000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
種々の開発にともなう水体の減少、汚水や農薬の流入による繁殖環境の悪化、水田の耕作放棄による乾燥化といった生息地消失がもっとも影響が大きく、近年もその程度は弱まっていない。そのため、宮崎県個体群など他との分断された集団では特に絶滅リスクが高い状態にある。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
同一地域における調査から、長期にわたって減少が続いていることが示唆されており、その原因が排除されていないため、今後も減少傾向が続く可能性が高い。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種の分布域は九州東部の狭い地域に限られており、各地で生息環境が消失している。

協力者:　坂本真理子（九州両生爬虫類研究会）

基礎情報

【形態】

全長 101～169 mm 程度。四肢は長い。背面は黄褐色で黒点を散布する。同じく九州に生息する止水産卵性のカスミサンショウウオより大型で、尾の上下縁に黄色の条線がない。

【生活史】

丘陵地や低山地にある常緑二次林、竹林、水田に生息する。繁殖は年 1 回、12 月下旬～3 月下旬で森林に接した池、沼、小河川の溜まりで行われ、一腹卵数は 87～143 個（平均約 106 個）。幼生は 6～9 月に変態上陸し、林床の倒木、落葉、石の下などで生活する。

【生息環境】

丘陵地や低山地にある常緑広葉樹の二次林、竹林、水田に生息する。丘陵地や低山地で、変態後の生活場所となる森林と、繁殖場所となる渇水しない水辺環境が必要である。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，田地・畑地，農業用水路，湿地・湿原・細流，ため池・池沼 【陸域_平地部】森林，田地・畑地，湿地・湿原，農業用水路
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

大分県下の 12 の市、熊本県 3 地域、宮崎県の 1 地域に分布することが確認されているが、大分県以外の生息地は限定的。既知の産地の標高は 10～800 m。カスミサンショウウオ、ヤマグチサンショウウオ大分個体群（ニホウサンショウウオ）とはほぼ完全に地理的に隔離されているが、後者とは少数ながら分布を接している地域がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域のうち大分県・熊本県と宮崎県の個体群は大きく分断されている。分布域縮小率は資料が少なく推定不能だが、熊本県の一部の産地では近年生息が確認されない箇所がある。

【生息地の現況】

低山地のほか、人里近くにも生息する。人里近くの生息地では、近年とくに環境の破壊や汚染が進んでいる。

【個体数の現況】

地域個体群別の個体数は不明だが、繁殖場所の減少からみて個体数も減少していることは間違いない。生息密度は季節的、年次的ともに不明である。

存続を脅かす要因

種々の開発にともなう水辺の減少、汚水や農薬の流入による繁殖環境の悪化、水田の耕作放棄による乾燥化といった生息地消失がもっとも影響が大きく、近年もその程度は弱まっていない。大分県では外来種アライグマにより食害されている可能性がある。愛好者等によって過度に捕獲されている可能性もある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，農薬汚染/化学物質汚染，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，湖沼開発，湿地開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，農薬汚染/化学物質汚染，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による）

特記事項

他の小型サンショウウオ類同様、分布域が限られているだけでなく、大分県とそれに続く熊本県から大きく離れた宮崎県の一部に隔離分布することから、生物地理や地史を考えていく上でとくに重要な種といえる。大分県の天然記念物に指定されている（地域指定）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオイタサンショウウオ	*Hynobius dunni*	VU
第４次 2019：	オオイタサンショウウオ	*Hynobius dunni*	VU
第４次 2018：	オオイタサンショウウオ	*Hynobius dunni*	VU
第４次 2017：	オオイタサンショウウオ	*Hynobius dunni*	VU
第４次 2015：	オオイタサンショウウオ	*Hynobius dunni*	VU
第４次：	オオイタサンショウウオ	*Hynobius dunni*	VU
第３次：	オオイタサンショウウオ	*Hynobius dunni*	VU
第２次：	オオイタサンショウウオ	*Hynobius dunni*	VU
第１次：	オオイタサンショウウオ	*Hynobius dunni*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【熊本県】絶滅危惧ⅠB類(EN)，【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【宮崎県】絶滅危惧ⅠB類(EN-r)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- 日野勝徳，2023．オオイタサンショウウオ．大分県自然環境学術調査会（編），レッドデータブックおおいた 2022～大分県の絶滅のおそれのある野生生物～普及版，pp. 209．大分県生活環境部自然保護推進室，大分．
- 松井正文，2014．オオイタサンショウウオ．環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編），レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- レッドデータブック-3 爬虫類・両生類，pp. 98‐99．株式会社ぎょうせい，東京．
- 松井正文，2021．オオイタサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 25，サンライズ出版，彦根．
- 佐藤眞一，1996．オオイタサンショウウオ．日本水産資源保護協会（編），日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（III），pp. 244‐249．日本水産資源保護協会，東京．
- Sugawara H, Watabe T, Yoshikawa T, Nagano M. 2018. Morphological and molecular analyses of *Hynobius dunni* reveal a new species from Shikoku, Japan. Herpetologica, 74: 159–168.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius dunni has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius dunni* is listed as VU under criteria A2 B1ab.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 20,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland, Wetland, Agricultural ditch
Threat types:	Logging and wood harvesting, Lake development, Wetland development, Field preparation, Land development, Transportation infrastructure construction, Water pollution, Pesticide/Toxic chemical pollution, Hunting and collecting

	animals/Gathering plants, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.



執筆者:	江頭幸士郎（北九州市立自然史・歴史博物館）・松井正文（京都大学）
Author:	Koshiro Eto and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ヒガシヒダサンショウウオ

***Hynobius fossigenus* Okamiya, Sugawara, Nagano et Poyarkov, 2018**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B1ab+2ab

基準 A:　—	基準 B:　VU	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B1+2. 出現範囲が 20000 km²未満かつ生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。

【過度に分断】

生息地は分布域内でも渓流の源流部周辺の森林に局在していることに加え、ダム建設や林道建設などの環境改変、小雨による渓流の濁水、豪雨などによる斜面崩落や渓流への土砂流失による生息環境の悪化が深刻である。生息範囲は縮小傾向にあり、生息地は過度に分断され、孤立化した集団では絶滅リスクが高い状態にある。

【地点数】10 地点以下

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

一部地域では、生息環境の悪化により個体数が減少しつつある。ダム建設や林道建設などの環境改変に加え、特に近年は小雨による渓流の濁水、台風接近に伴う豪雨などによる斜面崩落や倒木の増加、渓流への土砂流失による生息環境の悪化が深刻で、本種の生息範囲が狭まり生息地の分断や個体群の孤立化を引き起こしているおそれがある。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は関東地方から中部地方にかけての山地に断続的に分布するが、一部地域で生息環境が悪化し、個体数の減少傾向が見られる。

基礎情報

【形態】

体は大型（オス頭胴長 65～98 mm）で前後肢は 2～1.5 肋皺分離れる。尾は長い円筒形で後方で側扁する。通常 5 趾性。鋤骨歯列は深く幅広い U 字型。背面は暗い紫褐色で黄金色の斑紋があり、腹面はより淡く斑紋がほとんどない。山地渓流で繁殖し、色素が無い大きな卵を少数産む。卵嚢は強靭で外皮は厚く虹色光沢があり、遊離端は鞭状構造を持つ。静岡以東の個体群はヒダサンショウウオより大型で鋤骨歯列がより浅いが、愛知県産はより小型（オス頭胴長 66～86 mm）で鋤骨歯列もより深く V 字型が多いため、中部地方産ヒダサンショウウオと区別することが難しい。

【生活史】

成体は渓流の源流部付近の、山地森林の林床に生息する。降雪期前に移動して渓流中で越冬し、2 月から 4 月にかけて雌は渓流中の岩石の下面や伏流水の砂利の中に卵嚢対を産出する。卵嚢には虹色光沢があり、遊離端が鞭状である。1 卵嚢対中の卵数が 17～72 個。4 月から 5 月に孵化した幼生は一ヶ月ほど卵嚢中に留まり、渓流中に出た幼生は水生昆虫などを捕食する。静岡以東の幼生は越冬して翌年に変態を完了するのが普通であるが、愛知県産は年内に変態するものが多い。変態後は陸上で生活する。長骨の横断面に出現する年輪（LAGs）によれば、繁殖個体群の年齢は、東京産では雄で 5～14（平均 8.8）歳、雌で 7～12（平均 9.4）歳と推定される。

【生息環境】

成体は渓流の源流部周辺の混交林やスギ・ヒノキ植林の林床に生息する。幼生は繁殖場所である渓流の源流部付近の、流れが緩やかな溜りなどに生息する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	（1）奥山自然地域

【分布域】

関東地方から中部地方（東京、埼玉、神奈川、山梨、長野、静岡、愛知、岐阜）の山地に分布する。分布の東限は神奈川県西部で西限は愛知県北部、南限は静岡県北部で北限は群馬県南部であるが、生息地は分布域内でも渓流の源流部周辺の森林に局在する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域に大きな変化はないと考えられる。

【生息地の現況】

一部地域では、生息環境の悪化により個体数が減少しつつある。ダム建設や林道建設などの環境改変に加え、特に近年は小雨による渓流の渇水、台風接近に伴う豪雨などによる斜面崩落や倒木の増加、渓流への土砂流失による生息環境の悪化が深刻で、本種の生息範囲が狭まり生息地の分断や個体群の孤立化を引き起こしているおそれがある。

【個体数の現況】

一部地域で幼生の生息個体数が減少しつつある。

存続を脅かす要因

ダム建設や林道建設などの環境改変、小雨による渓流の渇水、台風接近に伴う豪雨などによる斜面崩落や倒木の増加、渓流への土砂流失による生息環境の悪化、生息範囲の縮小による生息地の分断や個体群の孤立化。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，水質汚濁，農薬汚染/化学物質汚染，捕獲・狩猟/園芸採取，自然災害
	（現在）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，水質汚濁，農薬汚染/化学物質汚染，捕獲・狩猟/園芸採取，自然災害

特記事項

比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義ヒダサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヒガシヒダサンショウウオ	*Hynobius fossigenus*	VU
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【群馬県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【東京都（本土部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【東京都（西多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【静岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【愛知県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- Matsui, M., Y. Misawa, K. Nishikawa, and S. Tanabe., 2000. Allozymic variation of *Hynobius kimurae* Dunn (Amphibia, Caudata). Comp. Bioch. Physiol. B, 125(1): 115-125.
- 見澤康充，2025，東京都八王子市産ヒガシヒダサンショウウオ幼生の生息環境の変化による影響，両生類誌, 37: 43-48.
- Misawa, Y. and M. Matsui, 1997. Larval life history variation in two populations of the Japanease salamander *Hynobius kimurae* (Amphibia, Urodela). Zool. Sci., 14(2): 257-262.
- Misawa, Y. and M. Matsui, 1999. Age Determination by skeletochronology of the Japanese salamander *Hynobius kimurae* (Amphibia, Urodela). Zool. Sci., 16(5): 845-851.
- Okamiya, H., H. Sugawara, M. Nagano, and N. A. Poyarkov, 2018. An integrative taxonomic analysis reveals a new species of lotic *Hynobius* salamander from Japan. PeerJ, 6: e5084.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius fossigenus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius fossigenus* is listed as VU under criteria B1ab+2ab.

B1+2. Extent of occurrence estimated to be less than 20,000 km² AND area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Water pollution, Pesticide/Toxic chemical pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Natural disasters
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	見澤康充（建設環境研究所）・松井正文（京都大学）
Author:	Yasuchika Misawa and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

マホロバサンショウウオ

***Hynobius guttatus* Tominaga, Matsui, Tanabe et Nishikawa, 2019**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B1ab

基準 A:　―	基準 B:　VU	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B1．出現範囲が 20000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
生息地点数は少なくないが、それらの繋がりが分断されており、それぞれは生息環境の悪化や人間による採集圧等により絶滅リスクが高い状態にある。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息地の多くが開発やシカによる植生の改変、乾燥化、自然災害によって悪影響を受けている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は本州（中部から近畿）の山地に生息する固有種である。2019 年のコガタブチサンショウウオの細分化に伴い新種記載された。生息地の多くで、様々な環境破壊や自然災害などにより、生存が脅かされている。

基礎情報

【形態】

頭胴長 51～67 mm。背面には赤褐色ないし濃青色の基色に、褐色がかった白色の小さな斑点がある。胴に沿って押し付けられた前後肢は会合しない。コガタブチサンショウウオより体が小さく、上下顎歯数と鋤骨歯数が少なく、相対的に頭が大きく、尾が短く鋤骨歯列が深い。卵嚢は短い紐状で遊離端に明瞭な鞭状構造を持たない。卵は大型で黒色素を欠く。

【生活史】

成体や幼体は、山地の谷沿いに生息し、林床の浅い土壌中や砂礫の堆積中、倒木の下などに潜んでいる。4 から 5 月に山地源流部の伏流水中に産卵する。孵化した幼生は伏流水中で生活し、あまり大きくなることなく変態する。地域によってヒダサンショウウオ、オオダイガハラサンショウウオ、ハコネサンショウウオと同所分布している。

【生息環境】

山地の谷沿いで、自然林にも植林地にも生息する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，河川源流域 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(5) 沿岸域

【分布域】

岐阜県・愛知県から和歌山県までの中部地方から近畿地方の山地に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

岐阜県・愛知県から和歌山県までの中部地方から近畿地方の山地に分布する。

【生息地の現況】

分布域は比較的広いが、生息地の多くがダムや堰堤、林道の建設、森林伐採、乾燥化、シカによる植生の貧弱化などの影響によって環境が悪化している。

【個体数の現況】

個体数についての報告はない。

存続を脅かす要因

近年の異常気象による渓流の渇水と増水による生息環境の悪化が深刻で、一部地域では個体数が減少している可能性がある。過去にはペット業者による採集圧があり、現在も愛好家による採取がなされ、繁殖場所が撹乱されている。シカの増加による林床環境の変化が乾燥化等を招いている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，自然災害
	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，自然災害，気候変動

特記事項

比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義コガタブチサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	マホロバサンショウウオ	*Hynobius guttatus*	VU
第４次 2019：	コガタブチサンショウウオ	*Hynobius stejnegeri*	NT
第４次 2018：	コガタブチサンショウウオ	*Hynobius stejnegeri*	NT
第４次 2017：	コガタブチサンショウウオ	*Hynobius yatsui*	NT
第４次 2015：	コガタブチサンショウウオ	*Hynobius yatsui*	NT
第４次：	コガタブチサンショウウオ	*Hynobius yatsui*	NT
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【三重県】準絶滅危惧(NT),【滋賀県】希少種,【和歌山県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- 松井正文・田辺真吾，2021．マオロバサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 17，サンライズ出版，彦根.
- 田辺真吾・見澤康充・西川完途・松井正文．1998．岐阜県産サンショウウオの 1 種について．爬虫両棲類学雑誌，17 (4): 190.

- Tominaga, A., M. Matsui, S. Tanabe, and K. Nishikawa, 2019. A revision of *Hynobius stejnegeri*, a lotic breeding salamander from western Japan, with a description of three new species (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). Zootaxa, 4651: 401-431.
- 山上将史・中薗洋行・小野寺慎吾，2008．愛知県産コガタブチサンショウウオの産卵場所における卵嚢と雄成体の観察例．爬虫両棲類学会報，2008: 99-101．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius guttatus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius guttatus* is listed as VU under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 20,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, River headwater 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Natural disasters, Climate change
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.



©田辺真吾（日本爬虫両棲類学会）

執筆者:	田辺真吾（日本爬虫両棲類学会）・松井正文（京都大学）
Author:	Shingo Tanabe and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

イシヅチサンショウウオ

***Hynobius hirosei* Lantz, 1931**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B1ab

基準 A: ―	基準 B: VU	基準 C: ―	基準 D: ―	基準 E: ―

B1．出現範囲が 20000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
生息地点の多くが山塊や水系ごとに分断されており、残存する小集団は絶滅リスクが高い状態にある。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息地の多くが林道の建設、森林の伐採等により影響を受けている。さらに、豪雨等により産卵場所や幼生の生息場所として重要な谷環境が悪化している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は四国の固有種で、四国の山地一帯に広く分布する。様々な環境変化によって個体数が減少しているが、その実態はよくわかっていない。

基礎情報

【形態】

全長は 120～205 mm と大型で、肋条数は通常 13 本、後肢は 5 指性。尾は著しく側偏するなど、オオダイガハラサンショウウオときわめてよく似ているが、鋤骨歯列がより短いことで区別できる。背面もオオダイガハラサンショウウオと似て一様な石板色だが、小さな青白色の斑点を散布することがある。特に亜成体や幼体時には斑点が発達する。卵嚢は大きく湾曲し、外皮は強靭で、遊離端が発達している。

【生活史】

四国（南西部を除く）の山地に分布し、森林の渓流付近の斜面で生活する。4～6 月に山地渓流の源流近くで繁殖し、日光の差し込まない場所に産卵する。1 メスの産卵数は 23～48（平均約 36）個である。幼生の一部は年内、多くは越冬して翌年に変態する。動物食で、幼生の間は水中の、変態後は陸上の節足動物や環形動物などを捕食する。雨天時には昼間でも活発に行動する。ツルギサンショウウオやイヨシマサンショウウオ、シコクハコネサンショウウオと同所的に生息していることがある。

【生息環境】

山地の渓流沿いの森林に生息する。落葉樹林や針葉樹林の自然植生に生息数が多いが、スギの植林地にも生息する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，河川源流域，河川上流域 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

四国の山地に広く分布する（徳島県美馬市・三好市・吉野川市・上勝町・那賀町・つるぎ町・神山町・佐那河内村、香川県高松市・観音寺市・まんのう町、愛媛県松山市・四国中央市・西条市・西予市・東温市・愛南町・内子町・久万高原町、高知県高知市・安芸市・香美市・いの町・馬路村・津野町・本山町・大豊町）。

現在の生息状況

【分布域の現況】

四国（南西部を除く）の山地に広く分布するが、孤立した地点が多い。地点によっては、生息環境が悪化している例もあるが、絶滅が確認された地点はない。

【生息地の現況】

生息地の一部では、道路建設や豪雨により谷の崩落が頻発し、幼生の生息に適した安定した水環境が減少傾向にある。剣山では、シカの食害により、林床の植生が激変し、乾燥化や餌動物の減少を招いている。

【個体数の現況】

個体数の具体的なデータはないが、過去に多数の個体を確認できた地点でも、近年は発

見できる個体数が減少している例が多い。

存続を脅かす要因

生息域での山岳道路、砂防堰堤の建設、森林伐採、風力発電の建設と、それにともなう土砂の渓流への流入や、近年の豪雨により渓流環境の変化、観光地化による水質汚濁のような生息環境の破壊が種の存続を脅かしている。また、シカの食害による植生の変化が、林床の乾燥化や餌動物の減少を招いている。さらに、ペットとしての捕獲・採取が危惧される。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害
	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害

特記事項

最近の研究成果により、いくつかの集団に分けられることが示唆されている。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義イシヅチサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	イシヅチサンショウウオ	*Hynobius hirosei*	NT
第４次 2019：	イシヅチサンショウウオ	*Hynobius hirosei*	NT
第４次 2018：	イシヅチサンショウウオ	*Hynobius hirosei*	NT
第４次 2017：	イシヅチサンショウウオ	*Hynobius hirosei*	NT
第４次 2015：	イシヅチサンショウウオ	*Hynobius hirosei*	NT
第４次：	イシヅチサンショウウオ	*Hynobius hirosei*	NT
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【高知県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Nishikawa, K., M. Matsui, S. Tanabe, and S. Sato. 2007. Morphological and allozymic variation in *Hynobius boulengeri* and *H. stejnegeri* (Amphibia: Urodela: Hynobiidae). Zool. Sci. 24(7): 752-766.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius hirosei has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius hirosei* is listed as VU under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 20,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Water pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters
Law designation status for conservation	―



執筆者:	田辺真吾（日本爬虫両棲類学会）・松井正文（京都大学）
Author:	Shingo Tanabe and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ベッコウサンショウウオ

***Hynobius ikioi* Matsui, Nishikawa et Tominaga, 2017**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B1ab

基準 A:　—	基準 B:　VU	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B1. 出現範囲が 20000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
分布域はいくつかの水系に分断され、それぞれの水系内でも渓流ごとに細かく分断されており、各生息地の面積はきわめて狭く、絶滅リスクが高い状態にある。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
過去に生息していた渓流が林道工事や砂防ダムなどで開発され、環境の劣化した例が複数ある。こうした環境の劣化が継続していることに加え、近年は特に台風や大雨などによる森林や土壌の流失による生息地の破壊が生じ、さらにその修復工事によっても状況が悪化している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種の分布域は中央構造線以南の九州地方の脊梁山地で、阿蘇以南、霧島山系以北の狭い範囲に限られ、きわめて局地的であり、山岳地帯の開発により、生息環境は悪化している。近接して分布する天草産のアマクササンショウウオと遺伝的にきわめて近く、進化学的に重要な種である。

基礎情報

【形態】

全長は 137～159 mm 程度。肋条数は 12 本のことが多い。鋤骨歯列は非常に深いＶ字型。前後肢を体側に沿って折り返すと、前後の指間に 2～3.5 肋鰭分の隙間ができる。後肢は 5 趾性。尾は円筒形だが、末端で側偏する。背面は黒褐色の地に黄色斑紋が入ったべっ甲状を呈し、腹面に斑紋をもたないか、あっても数は少ない。同所的に分布するコガタブチサンショウウオより体が大型、頑丈で、後肢第 5 趾の発達が良く、より長い。鋤骨歯列もより長く、幅が狭い。体色もコガタブチサンショウウオでは基色が茶褐色で、斑紋は黄色がかった銀色である。

【生活史】

繁殖は年 1 回、4 月上旬～5 月上旬にかけて行われ、最盛期は 4 月下旬である。岩礫層よりなる山地渓流の水源から少し下流の、川床が砂や礫で、上部を朽木や岩に覆われて日の差さない部分が繁殖場所となる。繁殖密度は不明である。1 メスの産卵数は 21～57 個である。産卵後、卵嚢の近くにメスがとどまって卵を守ることが多いという。幼生は 5 月頃から水中で成長・発育し、7～9 月に変態、上陸する。幼生越冬し、翌年 4 月に変態、上陸する場合もある。成体はクモ類、昆虫類、ミミズ類等を食べる。幼生はヨコエビ類やトビケラ類、カゲロウ類の幼虫を食べ、共食いもする。繁殖個体の平均年齢は不明であるが、飼育下ではメスが変態後、約 4 年で性的成熟したという。寿命は不明だが、飼育下では 4～5 年以上は生存している。

【生息環境】

標高 500 m 以上 1,500 m 程度の、森林に覆われた幅 0.5～2 m ほどの渓流源流域とその斜面が生活場所である。生息域の植生は落葉広葉樹林ないし混交林だが、分布の南限では常緑広葉樹林である。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】森林，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

中央構造線以南の九州地方の脊梁山地で、阿蘇以南、霧島山系以北の狭い範囲（熊本県、宮崎県、鹿児島県北部）から知られているに過ぎない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域には大きな変化はないと思われる。

【生息地の現況】

分布域はいくつかの水系に分断され、それぞれの水系内でも渓流ごとに細かく分断されていると考えられる。近年になって、主要な分布域に山岳道路が建設され、森林伐採が行われて土砂の渓流への流入が生息環境の質を落としたと思われる。

【個体数の現況】

生息密度は季節的、年次的ともに不明で、個体数も不明。

存続を脅かす要因

生息地破壊の例として、すでに 70 年以上前に、宮崎県蘇陽峡における水力発電工事による水源の枯渇が、個体数の激減を引き起こしたという報告がある。その後も 40 年以上前から、本種の生息域でスーパー林道の建設、樹木の伐採、薪炭利用、植林などによる影響が出ていることが指摘されてきた。最近も山地を含む地域での開発は続いており、同様の環境悪化が続いていると思われる。かつては薬用によく捕獲され、燻製にするため採集されていたらしい。さらに愛好者等により捕獲されているおそれもある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	森林伐採，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取

特記事項

日本産のサンショウウオ類の中でも、生態的知見が明らかにされたのはかなり最近のことであり、不明な点がまだ数多く残ったままである。最近の研究結果では、分布域の近い天草のアマクササンショウウオと遺伝的にきわめて近いことが分かっており、進化学的にも興味深い種である。熊本県の天然記念物に指定されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ベッコウサンショウウオ	*Hynobius ikioi*	VU
第４次 2019：	ベッコウサンショウウオ	*Hynobius ikioi*	VU
第４次 2018：	ベッコウサンショウウオ	*Hynobius ikioi*	VU
第４次 2017：	ベッコウサンショウウオ	*Hynobius stejnegeri*	VU
第４次 2015：	ベッコウサンショウウオ	*Hynobius stejnegeri*	VU
第４次：	ベッコウサンショウウオ	*Hynobius stejnegeri*	VU
第３次：	ベッコウサンショウウオ	*Hynobius stejnegeri*	VU
第２次：	ベッコウサンショウウオ	*Hynobius stejnegeri*	NT
第１次：	ベッコウサンショウウオ	*Hynobius stejnegeri*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【熊本県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【宮崎県】絶滅危惧ⅠB 類(EN-g)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種，都道府県条例指定種【宮崎県・鹿児島県】

参考文献

- 松井正文，1997．ベッコウサンショウウオ．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（IV），pp. 309‐315．日本水産資源保護協会，東京．
- 松井正文，2000．ベッコウサンショウウオ．環境庁（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック―（爬虫類・両生類），pp. 100．財団法人自然環境研究センター，東京．
- 松井正文・西川完途，2021．ベッコウサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 17-19，サンライズ出版，彦根．
- Matsui, M., K. Nishikawa, and A. Tominaga, 2017. Taxonomic relationships of *Hynobius stejnegeri* Dunn, 1923 and *H. yatsui* Nishikawa, K., M. Matsui, and S. Tanabe, 2005. Biochemical phylogenetics and historical biogeography of *Hynobius boulengeri* and *H. stejnegeri* (Amphibia, Urodela) from the Kyushu region, Japan. Herpetologica, 61(1): 54–62.
- Nishikawa, K., M. Matsui, S. Tanabe and S. Sato, 2007. Morphological and allozymic variation in *Hynobius boulengeri* and *H. stejnegeri* (Amphibia: Urodela: Hynobiidae). Zool. Sci., 24(7): 752–766.
- Oyama, 1940, with description of the amber-colored salamander from Kyushu, Japan (Amphibia, Caudata). Zool. Sci., 34(6): 538–545.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius ikioi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius ikioi* is listed as VU under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 20,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants

Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora. Prefectural Ordinance-Designated Species【Miyazaki・Kagoshima】.



執筆者:	西川完途（京都大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Kanto Nishikawa and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

カスミサンショウウオ

***Hynobius nebulosus* (Temminck et Schlegel, 1838)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　A2 B1ab

基準 A:　VU	基準 B:　VU	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

A2．過去 10 年間もしくは 3 世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。
【比較年】
10 年
【過去の状況】
主に福岡県の調査記録から概算。
【近年の状況】
主に福岡県の調査記録から概算した値に加え、長崎県と熊本県で本種について調査を行っている者にヒアリングを行ったところ、この 10 年で概ね 2／3 程度に個体数・個体群が減少しており、特に島嶼個体群では減少が目立つとの意見が得られた（2022 年 2 月時点）ことから、減少率は 3 割以上 5 割未満程度と推定した。

B1. 出現範囲が 20000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
宅地開発、メガソーラー等施設開発、水田の耕作放棄等による生息地の環境改変のため、個体群の分断が進んでいると考えられる。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
開発や水田放棄等による生息地の消失や分断が今後も続くと予想される。このほか、各地で雨量の変動等によると見られる繁殖地の水場消失が報告されており、これが気候変動の影響によるものだとすると今後も継続すると予想される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は九州西北部に分布する小型サンショウウオ類の代表とされるが、形態や遺伝形質に変異がある。各地で生息地の開発が進んで生息状況が悪化しており、地域個体群が絶滅した例もある。

協力者:　松尾公則（長崎女子短期大学）・坂本真理子（九州両生爬虫類研究会）・中野紘一・康子

（北九州市立自然史・歴史博物館自然史友の会）

基礎情報

【形態】

体は大型で（全長 60～135 mm）、前後肢ともに比較的短く前肢に対する後肢の割合は中程度。尾は短く常に上下縁に明瞭な黄色の条線がある。ツシマサンショウウオ等と姉妹群をなし、この群とイワミサンショウウオ、オキサンショウウオ等が単系統をなす。付近に分布するヤマグチサンショウウオより頭胴長が大きくて鋤骨歯列幅が狭い。

【生活史】

九州地方の西北部に分布する。丘陵地から山地で生活し、止水域で産卵する。分布域の重複するブチサンショウウオ・チクシブチサンショウウオとは多くの場合、垂直的にすみ分けている。

【生息環境】

一般には低地から丘陵地の湧水や湿地、水田（イネやセリ）と隣接した二次林、竹林、草地に生息する。産卵や幼生の成長に必要な比較的浅い止水環境と変態後の個体が生息する林が連続して存在する必要がある。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流，河川上流域 【陸域_平地部】森林，田地・畑地，湿地・湿原，農業用水路
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

九州の北西部および、近隣の島嶼から知られる。既知の産地の標高は 15～670 m、平均 113.5 m。

現在の生息状況

【分布域の現況】

近年においても、生息自体は過去に知られる産地のうち広域から報告があるが、個々の産地のうち多くは市街地や山地によって著しく分断され、すでに絶滅した地点もある。現在の生息状況はほとんどの地点で不明であるが、過去 10 年で湧水や雨量の減少、開発等により、産卵の確認されなくなった地点の報告が散見される（2022 年 2 月時点）。

【生息地の現況】

生息に必要な水の枯れない止水環境と、それに隣接した森林、草地などの陸上環境という条件は、都市近郊では丘陵地に集中しているが、その様な場所は近年もっとも開発が進む環境となっている。また過去 10 年で耕作放棄、湧水や雨量の減少のためか、水場が減少・陸化したことにより、繁殖数の著しい減少が起こったり、繁殖が確認されなくなったりした地域が各地で見られる（2022 年 2 月時点）。

【個体数の現況】

個体数は不明だが、断片的な調査記録から近年急速に個体数が減少していることは間違

いない。生息密度は季節的、年次的ともに不明である。

存続を脅かす要因

大規模な土地開発による生息地の消失と、それにともなう汚水の流入などの水質悪化、ため池の護岸工事等による繁殖地の消失、減反による水田の乾燥化が最大の脅威となってきた。愛好者等による採集も頻繁に行われている。アメリカザリガニの他、地域によっては外来の捕食性魚類やアライグマも本種の生存を脅かしている。その他、気候変動に伴う雨量の変化などの影響と思われる天然の水場の枯渇が見られる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，湖沼開発，湿地開発，圃場整備，土地造成，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	森林伐採，湿地開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，農薬汚染/化学物質汚染，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

かつては本州西部・四国瀬戸内海沿岸にも生息する広域分布種とされていたが、遺伝子解析等の研究が進んだ結果細分され、執筆時点（2022 年 2 月）時点では九州と周辺島嶼の固有種とされた。また九州には、形態・生態の似るヤマグチサンショウウオ大分個体群（ニホウサンショウウオ）も分布しており、これら 2 種の分布境界についてはまだ不明点が残る。加えて、カスミサンショウウオ種内の遺伝的分化は比較的大きく、各個体群が隔離されてからの歴史が長いと推定される。こうした点を解明するうえで、各地の個体群がそれぞれ重要性をもっている。鹿児島県指定の天然記念物に指定されている。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義カスミサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	カスミサンショウウオ	*Hynobius nebulosus*	VU
第４次 2019：	カスミサンショウウオ	*Hynobius nebulosus*	VU
第４次 2018：	カスミサンショウウオ	*Hynobius nebulosus*	VU
第４次 2017：	カスミサンショウウオ	*Hynobius nebulosus*	VU
第４次 2015：	カスミサンショウウオ	*Hynobius nebulosus*	VU
第４次：	カスミサンショウウオ	*Hynobius nebulosus*	VU
第３次：	カスミサンショウウオ	*Hynobius nebulosus*	VU
第２次：	—	—	—

第１次:　　—　　—　　—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岐阜県】絶滅危惧Ⅰ類，【大阪府】CR+EN，【兵庫県】B ランク，【奈良県】絶滅寸前種，【島根県】準絶滅危惧(NT)，【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【徳島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【高知県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【佐賀県】準絶滅危惧種，【長崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【熊本県】準絶滅危惧(NT)，【大分県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種，都道府県条例指定種【大分県】

参考文献

- 松井正文，2010．カスミサンショウウオ．改訂レッドリスト付属説明資料 爬虫類・両生類，pp. 13．環境省自然環境局野生生物課，東京．
- 松井正文，2021．カスミサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 23‐25．サンライズ出版，彦根．
- 松井正文，2025．日本産サンショウウオ図譜．技術評論社，東京．311pp.
- Matsui, M., K. Nishikawa, S. Tanabe, and Y. Misawa, 2001. Systematic status of *Hynobius tokyoensis* (Amphibia: Urodela) from Aichi Prefecture, Japan: A biochemical survey. Comp. Bioch. Physiol. B., 130: 181–189.
- Matsui, M., K. Nishikawa, T. Utsunomiya, and S. Tanabe, 2006. Geographic allozyme variation in the Japanese clouded salamander, *Hynobius* nebulosus(Amphibia: Urodela). Biol. J. Linn. Soc., 89: 311–330.
- Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa, and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. Current Herpetology, 38: 32–90.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius nebulosus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius nebulosus* is listed as VU under criteria A2 B1ab.

A. Reduction in population size based on any of the following:

2. An observed, estimated, inferred or suspected population size reduction of ≥30% over the last 10 years or three generations, whichever is the longer, where the reduction or its causes may not have ceased OR may not be understood OR may not be reversible.

B1.　Extent of occurrence estimated to be less than 20,000 km², and estimates indicating at least

two of a-c: a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations. b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following: (i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream, Upper river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland, Wetland, Agricultural ditch
Threat types:	Logging and wood harvesting, Wetland development, Field preparation, Land development, Transportation infrastructure construction, Water pollution, Pesticide/Toxic chemical pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora. Prefectural Ordinance-Designated Species【Oita】.



執筆者: Author:	江頭幸士郎（北九州市立自然史・歴史博物館）・松井正文（京都大学） Koshiro Eto and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

オキサンショウウオ

***Hynobius okiensis* Sato, 1940**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D1				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－

2．成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測される。
【判断理由】
過去に記録のあった生息地が森林伐採などで破壊されていたため。
a) 個体群構造が次に該当
i) 1000 以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。
【判断理由】
全地点ではないが、数地点での産卵数の調査結果から推定。

D1．個体群が極めて小さく、成熟個体数が 1,000 未満と推定される。
【推定根拠】
生息地 8 地点のうち、いずれも 125 個体を超えることはないと推測されるため。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種の分布域は、日本産の流水産卵性サンショウウオ類の中でもっとも狭く、島根県隠岐島後に限られており、生息環境が消失したために絶滅した地点がある。

基礎情報

【形態】

全長はオスで 119 mm、メスで 129 mm 程度。肋条数は通常 13 本、まれに 14 本である。鋤骨歯列は後縁で狭まるＶ字型。前後肢を体側に沿って折り返すと、前後の指端は 1 肋鰓分近く重複する。後肢は 5 指性。尾は基部から後方 1/3 までは円筒形だが、それより後方でかなり側偏し、尾端ではキール状に近い。背面は赤紫がかった飴色で、さまざまな変異のある黄色の斑紋をもつ。若い個体は背面および側面に青白い点をもつことがある。腹面には斑紋をもたない。卵嚢表面にはやや明瞭な縦の条線をもつ。四肢はチュウゴクブチサンショウウオ（*Hynobius sematonotos*）、ヒダサンショウウオ（*Hynobius kimurae*）ほど強健、かつ短くはなく、カスミサンショウウオ群に似て弱く長い。チュウゴクブチサンショウウオやヒダサンショウウオでは、体側に沿って折り返すと、前後肢の指端が 2～3 肋鰓分離れる。また、チュウゴクブチサンショウウオ、ヒダサンショウウオでは尾は円筒形で側偏しないのが普通である。

【生活史】

繁殖は年 1 回、2 月下旬～3 月中旬に行われる。繁殖期に先駆けて晩秋に繁殖場所近くに集合し越冬するらしいが、冬眠するかどうかは不明。繁殖は尾根に近い渓流の源流域で、流れが岩石に被われて伏流水となった、日光の差し込まない場所で行われる。重なった石の下で、砂礫に半分埋もれたり、滝壷状の溜りの石下で卵が見つかっている。1 メスの産卵数は 20～50 個程度である。幼生は 5 月頃ふ化し、しばらくは卵黄から栄養を摂取し、その後は水生昆虫の幼虫やヨコエビ類を食べて成長・発育する。一部はふ化した年の 8 月下旬～9 月上旬に変態し、残りは幼生越冬して翌年の 5～7 月頃に変態する。変態後はクモ類、昆虫類、ミミズ類などを食べる。繁殖個体の平均年齢は不明だが、飼育下で 3 歳以上の個体が排卵した例がある。寿命は野外、飼育下ともに不明である。

【生息環境】

常緑広葉樹の二次林、スギ林に生息する。海岸付近の低地から山頂近くまで生息し、幼生は林内を流れる急俊な渓谷で、また変態後は渓流近くの斜面で生活する。従って、本種の生息には卵から幼生段階の生活場所となっている山地渓流と、変態後の生活場所となる渓流を取り囲む斜面の両方を含む、広範な森林が必要である。個体群は山系ごとに分断されているようである。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，河川源流域，河川上流域 【陸域_平地部】
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

島根県隠岐島後に限られる。隠岐諸島の対岸の山陰地方に分布し、海峡によって完全に隔離され、生態的に類似しているチュウゴクブチサンショウウオ、ヒダサンショウウオ、ヒバサンショウウオ（*Hynobius utsunomiyaorum*）は、いずれも本種よりはるかに広域に分

布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布面積は 52 km²未満。分布域縮小率は資料が少なく推定不能。1960 年頃までは、島内の大部分の河川渓流に分断されながら分布していたが、いくつかの生息地がすでに消滅している。

【生息地の現況】

すでに 30 年以上前から隠岐島後全体にわたって生息環境の悪化が指摘され、島の南部地域では絶滅が報告されていた。最近も絶滅地点は増加し、生息環境は各地でより悪くなりつつある。

【個体数の現況】

不明だが過去より減少していることは確実である。

存続を脅かす要因

もともと生息地が小さな島嶼の森林地帯に限られることに加え、生息地付近での林道建設工事、森林伐採、河川の改修が、減少や絶滅を引き起こした主因である。これらの行為にともなう土砂の渓流への流入、水質汚濁、水流の変化が存続を脅かしている。近年まで過度の捕獲があったと思われる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，分布・産地局限

特記事項

本種は、かつてブチサンショウウオやヒダサンショウウオなどの流水産卵性の種群に近縁と考えられ、ブチサンショウウオの亜種とされたこともあった。しかし、最近の分子系統学的解析の結果は、むしろカスミサンショウウオなど止水産卵性の種群に近いことを示しており、日本産の小型サンショウウオ類の系統進化や、島嶼の成立を考える上で鍵となるべき、きわめて重要な位置を占めている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オキサンショウウオ	*Hynobius okiensis*	VU
第４次 2019：	オキサンショウウオ	*Hynobius okiensis*	VU
第４次 2018：	オキサンショウウオ	*Hynobius okiensis*	VU

第４次 2017：	オキサンショウウオ	*Hynobius okiensis*	VU
第４次 2015：	オキサンショウウオ	*Hynobius okiensis*	VU
第４次：	オキサンショウウオ	*Hynobius okiensis*	VU
第３次：	オキサンショウウオ	*Hynobius okiensis*	VU
第２次：	オキサンショウウオ	*Hynobius okiensis*	VU
第１次：	オキサンショウウオ	*Hynobius okiensis*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【島根県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- 松井正文．1997．オキサンショウウオ．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（iv），pp. 303‐308．日本水産資源保護協会，東京．
- 松井正文．2000．オキサンショウウオ．環境庁（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック―（爬虫類・両生類），pp. 84‐85．財団法人自然環境研究センター，東京．
- Matsui, M., K. Nishikawa, Y. Misawa, and S. Tanabe, 2007. Systematic relationships of *Hynobius okiensis* among Japanese salamanders (Amphibia: Caudata). Zool. Sci., 24(7): 746–751.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius okiensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius okiensis* is listed as VU under criteria D1.

D1. Population size estimated to number fewer than 1,000 mature individuals.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Transportation infrastructure construction, Water pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Limited distribution
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.



執筆者:	西川完途（京都大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Kanto Nishikawa and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

チクシブチサンショウウオ

***Hynobius oyamai* Tominaga, Matsui et Nishikawa, 2019**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B1ab

基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B1．出現範囲が 20000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
分布範囲は九州北東部に限られ、各山系は、低地に囲まれており、生息域は不連続な状態にある。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
熊本県や福岡県の一部地域では人為的な攪乱に加え，自然災害による環境悪化が進行している。また生息地の一部では、アライグマの侵入も報告されており、今後も減少は予測される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は九州東部の山地にのみ分布するが、一部地域で人為的な環境改変によって産卵環境が悪化しつつある。

基礎情報

【形態】

成体の全長は 11.5～15.8 mm、頭胴長は 65～89 mm。背面は青紫色で通常、斑紋を欠くが、銀白色の斑紋を有するものもいる。側面、腹部には銀白色から白色の斑紋を持つ。卵嚢は三日月型。卵径は 4.7～6.3 mm、一腹卵数は 17～55 個。幼生は孵化した年の秋までに変態するが、一部は幼生越冬する。

【生活史】

流水産卵性のサンショウウオで、繁殖は 3 月から 6 月初旬に山地渓流でなされる。幼生は孵化した年の秋までに変態するが、一部は幼生越冬する。地域によってはコガタブチサンショウウオと混生する。成熟年齢など詳しくは不明であるが、骨年齢査定法で推定された成熟個体の年齢が 6～13 歳という報告がある。

【生息環境】

九州北東部の低山地から高山地まで分布するため、生息環境の標高は幅広い。その植生もスギ、ヒノキが優占する森林から、低山地の常緑広葉樹が優占する森林、高標高の落葉広葉樹が優占する森林までと幅広い。いずれの場所でも産卵場所となる川幅 50 cm 程度から 3 m 程度の山地渓流の付近である。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】森林，湿地・湿原・細流，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

福岡、大分、熊本の各県に生息。もともとは、九州北東部低山地から比較的標高の高い奥山まで広く分布していたと思われる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

福岡県東部、大分県北部、熊本県北部の山地に分布する。生息地はスギ植林地から広葉樹林の源流域であり、低地性の種に比べて開発に関する影響は少ないが、一部の地域でダムや砂防ダムの建設、林道の整備、森林伐採で生息地や産卵環境が減少しつつある。

【生息地の現況】

ペットとしての販売は、禁止されているが、ペットとして飼育するための個人レベルの採集は続いていると考えられる。また、生息地の一部にはアライグマが侵入しているという情報もあり、その影響が懸念される。

【個体数の現況】

―

存続を脅かす要因

ペット飼育のための個人レベルの採集、外敵捕食者であるアライグマの侵入。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取

特記事項

比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義ブチサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	チクシブチサンショウウオ	*Hynobius oyamai*	VU
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【福岡県】準絶滅危惧(NT)，【熊本県】準絶滅危惧(NT)，【大分県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- 倉本満・坂本真理子・菊水研二・橋元浩一，2014．ブチサンショウウオ，福岡県環境部自然環境課（編），福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック 2014－爬虫類・両生類・魚類・昆虫類・貝類・甲殻類その他・クモ形類等－．pp. 31，福岡.
- 松井正文，2010．ブチサンショウウオ．改訂レッドリスト付属説明資料 爬虫類・両生類．pp. 15，環境省自然環境局野生生物課．東京.

- 松井正文・見澤康充，1996．ブチサンショウウオ．千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏（編），日本動物大百科 5 両生類・爬虫類・軟骨魚類．pp.19‐23．平凡社，東京．
- Tominaga, A. and M. Matsui, 2007. Estimation of the type locality of *Hynobius naevius* (Temminck and Schelegel. 1838), a salamander from Japan (Amphibia: Caudata). Zool. Sci., 24: 940–944.
- 富永篤・松井正文，2021．チクシブチサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 13，サンライズ出版，彦根.
- Tominaga, A., M. Matsui and K. Nishikawa, 2019. Two new species of lotic breeding salamanders (Amphibia, Caudata, Hynobiidae) from western Japan. Zootaxa, 4550: 525-544.
- Tominaga, A., M. Matsui, K. Nishikawa and S. Sato, 2003. Occurrence of two types of *Hynobius naevius* in northern Kyushu, Japan (Amphibia Urodela). Zool. Sci., 20(12): 1467–1476.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius oyamai has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius oyamai* is listed as VU under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 20,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest, Wetland/Marsh/Stream, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.



執筆者:	富永篤（琉球大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Atsushi Tominaga and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

チュウゴクブチサンショウウオ

***Hynobius sematonotos* Tominaga, Matsui et Nishikawa, 2019**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B1ab

基準 A:　―	基準 B:　VU	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B1．出現範囲が 20000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
分布域は山地に限られていて、平野部や低地で不連続的になっており、残存する小集団は絶滅リスクが高い状態にある。特に分布域の西限の山口西部の個体群は、他の生息域から完全に分断されている可能性が高い。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
広島県や鳥取県では、森林伐採、道路建設、河川改修、土砂流入、砂防ダム、治水ダムの建設により、生息地が消失したり、環境が悪化している場所がある。また、愛好家による飼育目的の採集圧が高い種でもある。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は中国地方の山地に広く分布するが、一部の地域でダムや砂防ダムの建設、林道の整備、森林伐採で生息地や産卵環境が減少しつつある。愛好家による飼育目的で採集は続いていると思われる。

基礎情報

【形態】

全長は 100～148 mm、頭胴長 58～82 mm。背面は赤紫から青紫色で通常、灰色から茶白色の斑紋を持つ。側面、腹部にも白色の斑紋を持つ。幼生は爪をもたないか、白い爪状のものをもつ。

【生活史】

4 月から 6 月に山地渓流で繁殖。卵嚢は三日月型。卵径は 4.7～5.7 mm、一腹卵数は 11～39 個。幼生は全長で 38.5～50.0 mm に達し、孵化した年の秋までに変態するが、一部は幼生越冬する。地域によってはヒダサンショウウオ、ヒバサンショウウオ、シコクハコネサンショウウオ、ハコネサンショウウオと混生する。

【生息環境】

山口県、広島県、島根県、鳥取県、岡山県の中国山地の低山地から奥山の森林に生息する。その植生もスギ、ヒノキが優占する森林から、低山地の常緑広葉樹が優占する森林、中標高地の落葉広葉樹が優占する森林までと幅広い。いずれの場所でも産卵場所となる山地渓流の付近である。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

もともと、岡山県、鳥取県以西の中国地方の山地に広く分布していたと思われる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

生息地はスギ植林地から広葉樹林の源流域であり、低地性の種に比べて開発に関する影響は少ないと思われる。

【生息地の現況】

広島県や鳥取県の一部地域では、森林伐採、道路建設、河川改修、土砂流入、砂防ダム、治水ダムの建設により、生息地が消失したり、環境が悪化している場所がある。

【個体数の現況】

不明。ペットとして飼育目的で採集されており、その影響が懸念される。

存続を脅かす要因

一部の地域でダムや砂防ダムの建設、林道の整備、森林伐採で生息地や産卵環境が減少しつつある。販売は禁止されているものの、ペットとして個人レベルでの飼育目的で採集は続いている可能性がある。幼生は同所分布するヒダサンショウウオ幼生によって捕食されることがある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（在来種による）
	（現在）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（在来種による）

特記事項

比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義ブチサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	チュウゴクブチサンショウウオ	*Hynobius sematonotos*	VU
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鳥取県】準絶滅危惧(NT)，【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類，【広島県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- 岡田純，2022．チュウゴクブチサンショウウオ．レッドデータブックひろしま 2021．
- 岡田純，2022．チュウゴクブチサンショウウオ．レッドデータブックとっとり第 3 版（2022 年改訂）．
- 富永篤・松井正文，2021．チュウゴクブチサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 13．サンライズ出版，彦根．

- Tominaga, A., M. Matsui and K. Nishikawa, 2019. Two new species of lotic breeding salamanders (Amphibia, Caudata, Hynobiidae) from western Japan. Zootaxa, 4550: 525-544.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius sematonotos has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius sematonotos* is listed as VU under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 20,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by native species)
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.



執筆者:	富永篤（琉球大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Atsushi Tominaga and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

セトウチサンショウウオ

***Hynobius setouchi* Matsui, Okawa, Tanabe et Misawa, 2019**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B1ab

基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B1．出現範囲が 20000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
生息地の多くが開発等の影響を受けて寸断され、まとまった面積の生息地が減少している。残存する集団も道路工事や宅地造成、圃場整備等により容易に絶滅する恐れがある。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
多くの生息地で乾燥化や微環境の変化が認められる。近年消失した生息地がある。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は近畿地方西南部から山陽、四国地方東部固有の止水産卵型の小型サンショウウオである。2019 年にカスミサンショウウオから分けられた。各地で生息地の開発が進んで激減しており、地域個体群が絶滅した例もある。

基礎情報

【形態】

体は小型（全長 72～127 mm、平均 92 mm）、四肢は比較的長く、ほとんど常に第 5 趾をもつ。尾は長く、上下縁には通常黄色の条線を欠く。卵嚢外被には条線がない。トウキョウサンショウウオ及びヤマトサンショウウオのなす系統と単系統群をなす。ヤマトサンショウウオより鋤骨歯列が大きく、サンインサンショウウオより頭胴長が小さく、胴と鋤骨歯列が長く、肋皺の数が多く、頭が短い。

【生活史】

瀬戸内海東部の沿岸地域の本州（京都府、大阪府、兵庫県、和歌山県、岡山県、広島県）、四国地方東部（徳島県、香川県）に分布し、丘陵地から低山地で生活する。本州ではヒバサンショウウオ、ヒダサンショウウオ、マホロバサンショウウオ、チュウゴクブチサンショウウオと、四国ではイシヅチサンショウウオと垂直的にすみ分けている。

【生息環境】

一般には低地から丘陵地の湧水や、水田と隣接した二次林、竹林、草地に生息するが、四国では低山地の流れの緩やかな谷沿いにも生息する。産卵や幼生の成長に必要な比較的浅い止水環境や緩やかな流水環境と変態後の個体が生息する林が連続して存在する必要がある。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流，ため池・池沼 【陸域_平地部】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，農業用水路，ため池・池沼
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

これまで近畿地方西部（京都府、大阪府、和歌山県、兵庫県）、中国地方東部（岡山県、広島県）、四国東部（香川県、徳島県）、淡路島から知られる。京都府や大阪府ではヤマトサンショウウオと、広島県尾道市ではアキサンショウウオと側所的に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

多くの産地は市街地や山地によって著しく分断され、すでに絶滅した地点が多い。現在の生息状況はほとんどの地点で不明である。

【生息地の現況】

生息に必要な水の枯れない止水環境と、それに隣接した森林、草地などの陸上環境という条件は、都市近郊では丘陵地に集中しているが、その様な場所では近年もっとも開発が進んでいる。京都府では条例で保護対象となっているが、分布の東限に位置する生息地が開発により完全に消失した。今後も生息地が道路工事や宅地造成のために削られたり、埋

められたり、圃場整備によって水が出なくなったりすることにより容易に絶滅する恐れがある。

【個体数の現況】

個体数は不明だが、絶滅地点が多いことから近年急速に個体数も減少していることは間違いない。生息密度は季節的、年次的ともに不明であるが、ある環境条件の良好な個体群では 0.36 成体/m^2という値が得られている。

存続を脅かす要因

大規模な土地開発による生息地の消失と、それにともなう汚水の流入などの水質悪化、減反による水田の乾燥化が最大の脅威となってきた。愛好者等による採集も頻繁に行われている。アライグマやアメリカザリガニの他、地域によっては外来の捕食性魚類も本種の生存を脅かしている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，湿地開発，圃場整備，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，交通事故，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移，近交弱勢
	（現在）	森林伐採，湿地開発，圃場整備，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，交通事故，水質汚濁，農薬汚染/化学物質汚染，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移，発電施設建設，近交弱勢

特記事項

種分化の実態を解明するうえで、各地の個体群がそれぞれ重要性をもっている。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義カスミサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	セトウチサンショウウオ	*Hynobius setouchi*	VU
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【京都府】絶滅寸前種，【兵庫県】B ランク，【和歌山県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類，【広島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【香川県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種，都道府県条例指定種【京都府】

参考文献

- 松井正文，2000．京都・大阪地域のカスミサンショウウオ．環境庁（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-（爬虫類・両生類），pp. 104‐105．財団法人自然環境研究センター，東京．
- 松井正文，2000．愛知県のトウキョウサンショウウオ．環境庁（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-（爬虫類・両生類），pp. 108‐109．財団法人自然環境研究センター，東京．
- 松井正文，2010．カスミサンショウウオ．改訂レッドリスト付属説明資料 爬虫類・両生類，pp. 13．環境省自然環境局野生生物課，東京．
- 松井正文，2021．セトウチサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 21．サンライズ出版，彦根．
- Matsui, M., K. Nishikawa, S. Tanabe, and Y. Misawa, 2001. Systematic status of *Hynobius tokyoensis* (Amphibia: Urodela) from Aichi Prefecture, Japan: A biochemical survey. Comp. Bioch. Physiol. B., 130: 181–189.
- Matsui, M., K. Nishikawa, T. Utsunomiya, and S. Tanabe, 2006. Geographic allozyme variation in the Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Urodela). Biol. J. Linn. Soc., 89: 311–330.
- Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa, and A. Tominaga, 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. Curr. Herp., 38(1): 32-90.
- Matsuki, T. and M. Matsui, 2011. A skeletochronological study of breeding females in a population of Japanese clouded salamanders (*Hynobius nebulosus*). Zool. Sci., 28: 175–179.
- 大川博志・奥野隆史・宇都宮妙子．2019．西日本のカスミサンショウウオの 3 つの大きなグループ．爬虫両棲類学会報．2019(1): 9‐21.
- 田辺真吾・松井正文，1997．カスミサンショウウオ（京阪個体群）．日本水産資源保護協会（編），日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（IV），pp. 287‐291．日本水産資源保護協会，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius setouchi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius setouchi* is listed as VU under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 20,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Agricultural ditch, Reservoir/Pond
Threat types:	Logging and wood harvesting, Wetland development, Field preparation, Grassland development, Land development, Transportation infrastructure construction, Vehicle collision, Water pollution, Pesticide/Toxic chemical pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Power plant construction, Inbreeding depression
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora. Prefectural Ordinance-Designated Species【Kyoto】.



執筆者:	田辺真吾（日本爬虫両棲類学会）・松井正文（京都大学）
Author:	Shingo Tanabe and Masafumi Matsui

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

コガタブチサンショウウオ

***Hynobius stejnegeri* Dunn, 1923**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B1ab

基準 A: ―	基準 B: VU	基準 C: ―	基準 D: ―	基準 E: ―

B1．出現範囲が 20000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
本種が生息する各山系は平野部で隔離されており、九州山地以外の生息地はほぼ分断されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
森林伐採、道路建設、河川改修、土砂流入、砂防ダム、治水ダムの建設により、生息地が消失したり、環境が悪化している場所がある。また、愛好家による飼育目的の採集圧が高い種でもある.

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は西部を除く九州の山地から知られるが、生息環境の悪化、産卵環境の消失、販売、飼育目的の採集により、一部地域では減少傾向が見られる。

基礎情報

【形態】

長崎・佐賀を除く九州の各県に生息。頭胴長は 51～72 mm。背面は赤紫から暗褐色で白色から茶白色の斑紋を持つ。側面、腹部には白色の斑紋を持つ。卵嚢は紐状。卵径は 4.6～5.0 mm、一腹卵数は 7～19 個。幼生は、卵黄のみで成長し、孵化した年の夏に変態する。

【生活史】

流水産卵性のサンショウウオで山地の源流部に生息する。成熟年齢などは不明であるが、骨年齢査定法から、野外での寿命は 12 歳以上で、最高で 17 歳という報告がある。本種は非繁殖期には、山地の陸地の土壌の中、リターの中に生息する。ミミズなどの土壌動物を捕食している例が知られている。4～5 月に源流部の伏流水中で繁殖。幼生は、卵黄のみで成長し、孵化した年の夏に変態する。九州北部でチクシブチサンショウウオ、中南部でベッコウサンショウウオまたはソボサンショウウオと混生する。

【生息環境】

九州の低山地から高山地まで分布するため、生息環境の標高は幅広い。生息環境の植生もスギ、ヒノキが優占する森林から、低山地の常緑広葉樹が優占する森林、高標高の落葉広葉樹が優占する森林までと幅広い。いずれの場合も付近に産卵場所となる河川の源流域の付近であることが多い。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，河川源流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

長崎・佐賀を除く九州の各県に生息し、山地の源流部に付近に生息する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現在も分布域の一部地域では治水ダムの建設計画などもあり、生息地は減少傾向にある。

【生息地の現況】

砂防ダムの建設、道路建設、森林伐採等の開発による生息環境の悪化、産卵環境の消失が生じている。また、飼育目的の愛好家による採集では、生息環境の破壊を伴うことも懸念されており、ダム建設や森林伐採などの大規模な環境破壊のほかにも、個々の生息環境の劣化が懸念される。

【個体数の現況】

数多く生息する地域での生息数はあまり変わらないと思われる。

存続を脅かす要因

森林伐採、砂防ダム、治水ダムの建設、河川改修、道路建設などにともなう生息環境の破壊に加えて、愛好家による採集圧がこの 10 年ほどで大きく上昇していると思われる。また、種の保存法によって特定第二種国内希少野生動植物種に指定されているものの、最近の小型サンショウウオ類の飼育ブームにより、愛好家による採集が続いていると思われる。本種の採集は、生息環境の破壊を伴うことが多いことから、過度の採集による個体数の減少だけでなく、生息環境自体の劣化が懸念される。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取

特記事項

比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義コガタブチサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	コガタブチサンショウウオ	*Hynobius stejnegeri*	VU
第４次 2019：	コガタブチサンショウウオ	*Hynobius stejnegeri*	NT
第４次 2018：	コガタブチサンショウウオ	*Hynobius stejnegeri*	NT
第４次 2017：	コガタブチサンショウウオ	*Hynobius yatsui*	NT
第４次 2015：	コガタブチサンショウウオ	*Hynobius yatsui*	NT
第４次：	コガタブチサンショウウオ	*Hynobius yatsui*	NT
第３次：	ブチサンショウウオ	*Hynobius naevius*	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岐阜県】絶滅危惧Ⅱ類，【大阪府】VU，【奈良県】絶滅危惧種，【高知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【福岡県】準絶滅危惧(NT)，【熊本県】準絶滅危惧(NT)，【大分県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【宮崎県】絶滅危惧Ⅱ類(VU-g)，【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- Tominaga, A. and M. Matsui , 2007. Estimation of the type locality of *Hynobius naevius* (Temminck and Schelegel, 1838), a salamander from Japan (Amphibia: Caudata). Zoological Science, 24, 940–944.
- Tominaga, A. and M. Matsui, 2008. Taxonomic status of a salamander species allied to *Hynobius naevius* and a reevaluation of *Hynobius naevius yatsui Oyama*, 1947 (Amphibia, Caudata). Zoological Science, 25, 107–114.
- Tominaga, A., M. Matsui, K. Nishikawa, and S. Sato, 2003. Occurrence of two types of *Hynobius naevius* in northern Kyushu, Japan (Amphibia: Urodela). Zoological Science, 20, 1467–1476.
- Tominaga, A., M. Matsui, K. Nishikawa, and S. Tanabe, 2006. Phylogenetic relationships of *Hynobius naevius* (Amphibia: Caudata) as revealed by mitochondrial 12S and 16S rRNA genes. Molecular Phylogenetics and Evolution, 38, 677–684.
- Tominaga, A., M. Matsui, S. Tanabe, and K. Nishikawa, 2019. A revision of *Hynobius stejnegeri*, a lotic breeding salamander from western Japan, with a description of three new species (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). Zootaxa, 4651 (3): 401–433.
- Tominaga, A., M. Matsui, K. Nishikawa, S. Tanabe, and S. Sato, 2005a. Genetic differentiations of *Hynobius naevius* (Amphibia: Hynobiidae) as revealed by allozyme analysis. Biochemical Systematics and Ecology, 33, 921–937.
- Tominaga, A., M. Matsui, K. Nishikawa, S. Tanabe, and S. Sato, 2005b. Morphological discrimination of two genetic groups of a Japanese salamander, *Hynobius naevius* (Amphibia, Caudata). Zoological Science, 22, 1229–1244.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius stejnegeri has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius stejnegeri* is listed as VU under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 20,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, River headwater

Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.



執筆者:	富永篤（琉球大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Atsushi Tominaga and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ヤマトサンショウウオ

***Hynobius vandenburghi* Dunn, 1923**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B1ab				
基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B1．出現範囲が 20000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
生息地の多くが開発等により寸断され、残された小集団では絶滅リスクが高い状態にある。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
生息地の多くが様々な人為的な環境改変や乾燥化、捕食性外来種の侵入などにさらされている。滋賀県大津市や彦根市、栗東市、京都府木津川市などが生息地のいくつかが開発によって消失した。減少要因は取り除かれておらず、改善の対策が取られなければ、生息状況は今後も継続的に悪化していくものと推察される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は東海から近畿地方固有の止水産卵型の小型サンショウウオである。2019 年にカスミサンショウウオから分けられた。各地で生息地の開発が進んで激減しており、地域個体群が絶滅した例もある。

基礎情報

【形態】

体は小型（オス全長 73～126 mm、平均 95 mm）。四肢は比較的短く、尾の上下縁には通常、黄色の条線がある。トウキョウサンショウウオと姉妹群をなし、この群はセトウチサンショウウオと姉妹群をなす。セトウチサンショウウオに比べ鋤骨歯列が短く、サンインサンショウウオに比べ尾と前後肢間が長く、肋皺の数が多く、頭が小さく、眼窩間と尾幅が狭く、後肢が短く、前後肢の重なりが少ない。

【生活史】

本州（岐阜県、愛知県、三重県、滋賀県、奈良県、京都府、大阪府）に分布し、丘陵地から低山地で生活する。ヒダサンショウウオやマホロバサンショウウオと垂直的にすみ分けている。

【生息環境】

一般には低地から丘陵地の湧水や、水田（イネやセリ）と隣接した二次林、竹林、草地に生息する。産卵や幼生の成長に必要な比較的浅い止水環境と変態後の個体が生息する林が連続して存在する必要がある。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流，ため池・池沼 【陸域_平地部】森林，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，ため池・池沼
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（3）都市地域，（5）沿岸域

【分布域】

近畿地方の中東部と中部地方南部地域（岐阜県、愛知県、三重県、滋賀県、京都府、奈良県、大阪府）から知られる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

多くの産地は市街地や山地によって著しく分断され、すでに絶滅した地点が多い。現在の生息状況はほとんどの地点で不明である。

【生息地の現況】

生息に必要な水の枯れない止水環境と、それに隣接した森林、草地などの陸上環境という条件は、都市近郊では丘陵地に集中しているが、その様な場所は近年もっとも開発が進む環境となっている。滋賀県大津市や京都府木津川市の生息地の何箇所かは近年のニュータウン開発によって消失した。

【個体数の現況】

種全体の個体数は不明だが、絶滅地点が多いことから近年急速に個体数も減少していることは間違いない。かつて奈良県や京都府で個体群絶滅の例があり、現在も各種開発によ

る生息地の消滅および圃場整備に伴う水路の改変、早春繁殖期の乾田化、アライグマやアメリカザリガニによる捕食などにより各地で減少している。岐阜市の保全活動が行われている地域では、個体数が増加傾向にあり、80 対以上の卵嚢が確認されているが、そのような地点は稀である。生息密度は季節的、年次的ともに不明であるが、ある環境条件の良好な個体群では 0.36 成体/m^2 という値が得られている。

存続を脅かす要因

大規模な土地開発による生息地の消失と、それにともなう汚水の流入などの水質悪化、減反による水田の乾燥化が最大の脅威となってきた。愛好者等による採集も頻繁に行われている。アライグマやアメリカザリガニの他、地域によっては外来の捕食性魚類も本種の生存を脅かしている。

要因の区分：	（過去）	湿地開発，圃場整備，草地開発，ゴルフ場，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	森林伐採，湿地開発，圃場整備，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），管理放棄，遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害，発電施設建設，気候変動

特記事項

カスミサンショウウオとして、レッドリストに掲載されていたが、各地の個体群が遺伝的にきわめて大きく異なることから、2019 年に 9 種に分けられた。その後も愛知県名古屋市の個体群がオワリサンショウウオとされるなど、種分化の実態を解明するうえで、各地の個体群がそれぞれ重要性をもっている。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義カスミサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヤマトサンショウウオ	*Hynobius vandenburghi*	VU
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—

第１次:　　—　　—　　—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【愛知県】絶滅危惧ⅠB類(EN),【三重県】絶滅危惧ⅠB類(EN),【滋賀県】希少種,【京都府】絶滅寸前種

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種，都道府県条例指定種【京都府・奈良県】

参考文献

- 松井正文，2000．京都・大阪地域のカスミサンショウウオ．環境庁（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック―（爬虫類・両生類），pp. 104‐105．財団法人自然環境研究センター，東京．
- 松井正文，2000．愛知県のトウキョウサンショウウオ．環境庁（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック―（爬虫類・両生類），pp. 108‐109．財団法人自然環境研究センター，東京．
- 松井正文，2010．カスミサンショウウオ．改訂レッドリスト付属説明資料 爬虫類・両生類，pp. 13．環境省自然環境局野生生物課，東京．
- Matsui, M., K. Nishikawa, S. Tanabe, and Y. Misawa, 2001. Systematic status of *Hynobius tokyoensis* (Amphibia: Urodela) from Aichi Prefecture, Japan: A biochemical survey. Comp. Bioch. Physiol. B., 130: 181–189.
- Matsui, M., K. Nishikawa, T. Utsunomiya, and S. Tanabe, 2006. Geographic allozyme variation in the Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Urodela). Biol. J. Linn. Soc., 89: 311–330.
- Matsui, M., H. Okawa, K. Nishikawa, G. Aoki, K. Eto, N. Yoshikawa, S. Tanabe, Y. Misawa, and A. Tominaga. 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. Cur. Herpetol., 38: 32–90.
- Matsuki, T. and M. Matsui, 2011. A skeletochronological study of breeding females in a population of Japanese clouded salamanders (*Hynobius nebulosus*). Zool. Sci., 28: 175–179.
- 田辺真吾・松井正文，1997．カスミサンショウウオ（京阪個体群）．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（IV），pp. 287‐291．日本水産資源保護協会，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius vandenburghi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius vandenburghi* is listed as VU under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 20,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Reservoir/Pond
Threat types:	Logging and wood harvesting, Wetland development, Field preparation, Grassland development, Land development, Transportation infrastructure construction, Water pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters, Power plant construction, Climate change
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora. Prefectural Ordinance-Designated Species【Kyoto・Nara】.



執筆者:	田辺真吾（日本爬虫両棲類学会）・松井正文（京都大学）
Author:	Shingo Tanabe and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

シコクハコネサンショウウオ

***Onychodactylus kinneburi* Yoshikawa, Matsui, Tanabe et Okayama, 2013**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab

基準 A:　—	基準 B:　VU	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
生息域は四国、西中国山地、岡山県北部に分かれており、岡山県の集団はほぼ 1 地点の孤立した集団で他地域との交流はないと考えられ絶滅リスクが高い。また、四国では急峻な地形に加えて生息環境の劣化や気候の温暖化により生息地が山塊ごとの狭い高標高域に分断化され、絶滅リスクが高い状態にあると思われる。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
西中国山地の冠山地では生息地での森林伐採や林道建設が進んでいる。岡山県北部では生息地での森林伐採の影響で生息地の質が低下しているほか、今後は風力発電施設の計画に伴う各種開発行為などの影響が懸念される。さらに開発が続けば減少は避けられないものと考えられる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

全長 12～18 cm の小型サンショウウオで、背面に明瞭な黄色や橙黄色の縦帯または不連続な斑紋をもち、腹面は胸部に暗色斑紋を欠き、白点をもたない。四国 3 県（徳島、高知、愛媛）および中国山地（広島、山口、岡山）に分布する。中国山地では狭義のハコネサンショウウオと同所的に生息する。主として標高 700 m 以上の冷涼湿潤な森林を流れる山地渓流周辺に生息し、暑さと乾燥に非常に弱い。四国山地の生息環境は比較的安定しているが分断的で、中国山地、特に岡山県の生息地では劣化が著しい。全体として個体数は減少傾向にあるものと推測される。生息地となる森林の伐採、河川改修による渓流環境の悪化、砂防堰堤・林道の建設による生息地の分断化、外来魚類による捕食などが脅威となっている。2022 年 1 月に第 2 種国内希少野生動植物種に指定された。

基礎情報

【形態】

全長 12～18 cm 、細長い体で尾が長く、頭胴長に対する尾長の比率（尾率）はオスで平均 117%、メスで平均 105%程度。背面は灰褐色、暗灰色から黒色の地色に明瞭な黄色や橙黄色の縦帯または不連続な斑紋をもち、所々で地色と斑紋が溶けあうように混ざり合う。腹面は白から灰色で白点をほとんどもたない。狭義のハコネサンショウウオでみられる胸部腹面の暗色斑紋を本種は欠き、特に両種が同所的に分布する中国山地ではこの特徴によりほぼ識別可能である。

【生活史】

繁殖期は初夏で、四国の石鎚山系や徳島県の産地では 5 月中旬から 6 月上旬にかけて産卵し、渓流源流部の伏流水中に 1 対の卵嚢を産み付ける。一腹卵数は 7～15 個、卵はクリーム色で卵径は 5 mm を超える。産卵場所の湧水口からの深さは徳島県の産地での観察では 160 cm 以上。西中国山地の狭義のハコネサンショウウオとの混生地では、本種の繁殖期のピークが狭義のハコネサンショウウオよりも 1 か月ほど早いとされる。

【生息環境】

四国・中国山地ともに主に標高 700 m 以上の場所に生息するが、生息する渓流の源流を有する山の上部は 1000 m 以上の標高がある。落葉広葉樹の原生的で冷涼湿潤な森林を好み、暑さや乾燥に弱い。スギ植林地などを流れる渓流でもみられる場合がある。幼生はそういった森林を流れる渓流の中で生活し、同所的に生息する流水性サンショウウオ属の幼生よりも下流の水量が多い流れに多い。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】裸地，森林，草地，河川源流域 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

四国 3 県（徳島県、高知県、愛媛県）および西中国山地（広島県、山口県）と岡山県北部から記録がある。徳島県では剣山周辺の記録がほとんどである。高知県では中部の山地および愛媛県境の石鎚山系から記録がある。愛媛県では石鎚山系が多産地として知られ、高縄半島と内子町からも記録がある。大正時代の愛媛県東部の赤石山系の標本記録がある。西中国山地では広島県の北広島町から廿日市市、および山口県岩国市にかけての山地帯で記録されている。岡山県からは鏡野町の産地だけが知られている。中国山地では狭義のハコネサンショウウオも同所的に分布している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

四国の剣山周辺、高知県中部周辺、石鎚山系、高縄半島では近年も生息を確認しているが、愛媛県の内子町および赤石山系での現在の生息状況は不明である。また、急峻な地形

のため未調査の地域も多く、今後の追加の分布調査が必要である。西中国山地の分布域では近年新たな分布域が報告されたがそれも広島県西部の一部に限られる。岡山県北部の生息記録は具体的な地点が特定されていなかったが、近年の調査で判明した。極めて希少で、周辺地域も含めて調査が必要である。

【生息地の現況】

四国の生息地のうち四国山地の高標高部の生息環境は比較的安定している地域が多いと思われるが、森林伐採や林道建設、砂防堰堤建設などの影響を受けており分断的である。西中国山地の既知の生息地は大規模な林道開発の影響が危惧される。岡山県北部の生息地は環境の劣化が著しく、今後の動向に注意が必要である。

【個体数の現況】

急激な減少は確認できないものの、減少傾向にあるものと思われる。特に岡山県の集団は個体数が極めて少ない可能性がある。

存続を脅かす要因

生息環境となる冷涼湿潤な森林の伐採、河川改修による幼生の生息環境の悪化、林道建設や砂防ダム建設による生息環境の悪化と連続性の喪失（移動阻害）。場所によっては釣り目的で放流されたイワナなどの捕食性魚類による捕食の影響も危惧される。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，河川開発，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕食（外来種による）

特記事項

広島県の西中国山地の主要生息地で会った山域では近年、生息地となっている森林を横切る大規模な林道開発がおこなわれた。岡山県の生息地は近年の調査で初めて具体的に特定された（吉川、未発表）。周辺地域の詳しい生息状況について今後の調査が必要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	シコクハコネサンショウウオ	*Onychodactylus kinneburi*	VU
第４次 2019：	シコクハコネサンショウウオ	*Onychodactylus kinneburi*	VU
第４次 2018：	シコクハコネサンショウウオ	*Onychodactylus kinneburi*	VU
第４次 2017：	シコクハコネサンショウウオ	*Onychodactylus kinneburi*	VU
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—

第１次:　　—　　—　　—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岡山県】情報不足,【広島県】情報不足(DD),【愛媛県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN),【高知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

特定第二種国内希少野生動植物種

参考文献

- 稲葉正和・岡山健仁，2018．大正時代に赤石山で採集されたシコクハコネサンショウウオ *Onychodactylus kinneburi* の標本．愛媛県総合科学博物館研究報告，23: 43‐48.
- Naito J. and C. Kambayashi. 2022. Distribution pattern of Shikoku clawed salamander, *Onychodactylus kinneburi*, in th Western Chugoku Mountains. Biogeography, 24: 79–83.
- Naito J., C. Kambayashi, R. Namba, N. Yoshikawa, and N. Shimizu. 2022. Seasonal changes in breeding characters of two syntopic Onychodactylussalamanders with special reference to differentiation in their breeding seasons. Cur. Herpetol., 41: 196–204.
- 岡山健仁，2002．ハコネサンショウウオ．高知県レッドデータブック動物編，pp. 166-167，高知県文化環境部環境保全課，高知.
- 岡山健仁・千葉昇，1995．1995．愛媛県重信町阿歌古渓谷で発見されたハコネサンショウウオ．愛媛の自然，37：13‐14.
- 田邊真吾・宇和孝・岡山健仁，2014．シコクハコネサンショウウオ．愛媛県レッドデータブック2014 愛媛県の絶滅のおそれのある野生生物，pp. 98．愛媛県県民環境部環境局自然保護課，松山.
- Yoshikawa N., M. Matsui, S. Tanabe, and T. Okayama., 2013. Description of a new salamander of the genus *Onychodactylus* from Shikoku and western Honshu, Japan (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). Zootaxa, 3693(4): 441–464.
- Yoshikawa N., M. Matsui, K. Nishikawa, Y. Misawa, and S. Tanabe., 2010. Allozymic variation in the Japanese clawed salamander, *Onychodactylus japonicus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), with special reference to the presence of two sympatric genetic types. Zool. Sci., 27: 33–40.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Onychodactylus kinneburi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Onychodactylus kinneburi* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Bare area, Forest, Grassland, River headwater 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Land development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	Specified class II nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	吉川夏彦（国立科学博物館）
Author:	Natsuhiko Yoshikawa

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ホムラハコネサンショウウオ

***Onychodactylus pyrrhonotus* Yoshikawa et Matsui, 2022**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B1ab

基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B1. 出現範囲が 20000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
生息地が山塊ごとに分断されており、相互に交流がないと思われる。また、河川改修や治山ダム工事、道路建設により各生息地内も分断が進んでおり、残存する各小集団は絶滅リスクが高い状態にある。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
滋賀県のある産地で個体数が大幅に減少したが原因は不明である。原因究明と対処がおこなわれなければ、今後、他地域でも被害が拡大する可能性がある。また、低標高の植林地等に位置する生息地では皆伐等により個体群が壊滅する恐れがあり、配慮を求めていく必要がある。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

全長 13～17 cm の小型サンショウウオで、背面に明瞭な朱色やピンク色の縦帯または不連続な斑紋をもち、腹面には細かい白点を散布する。胸部の暗色斑紋はないことが多い。近畿から北陸にかけての地域（石川県、福井県、岐阜県、滋賀県、京都府、三重県、奈良県）に分布し、全域で狭義のハコネサンショウウオと同所的に生息する。主に標高 500 m 以上の山地渓流とその周辺に生息するが、紀伊半島では主に標高 1000 m 以上の山の周辺に生息する。暑さや乾燥に弱く、落葉広葉樹の原生的で冷涼湿潤な森林を好むが、スギ植林地などを流れる渓流でもみられる。幼生はそういった森林を流れる渓流の中で生活する。全体として個体数は減少傾向にあると思われ、とある産地では著しく個体数が減少した。生息環境となる森林の伐採、河川改修や治山ダム工事による渓流環境の悪化・分断、道路建設による生息環境の分断、渓流の流域の分断化、外来魚による捕食、ペット目的の乱獲が危惧される。

基礎情報

【形態】

全長 13～17 cm、細長い体で尾が長く、頭胴長に対する尾長の比率（尾率）はオスで平均 120%、メスで平均 103%程度。背面は黒色から黒紫色の地色に明瞭な朱色やピンク色の縦帯または不連続な斑紋をもつ。腹面は紫灰色から灰色で一面に多数の細かい白点をもつ。狭義のハコネサンショウウオでみられる胸部腹面の暗色斑紋はないことが多い。同所的に生息する狭義のハコネサンショウウオ（背面に褐色から黄土色のやや不明瞭な斑紋）との識別は比較的容易だが、紀伊半島では両種の外見は酷似する。幼生は同属他種と同様に頭は角ばっており、外鰓は小さく、尾びれの丈は低く、四肢に膜びれをもち、指先には黒いかぎ爪をもつ。

【生活史】

繁殖期は初夏の 5 月末から 7 月上旬にかけて、産卵場となる渓流源流部の湧水への成体の集結がみられ、伏流水中に 1 対の卵嚢を産み付ける。一腹卵数は 30 前後で、卵はクリーム色で卵径は 5 mm ほど。狭義のハコネサンショウウオとの生活史の違いについてはわかっていないが、同時期、同じ湧水に狭義ハコネサンショウウオの繁殖個体の集合がみられる。

【生息環境】

山地渓流性で、主に標高 500 m 以上の場所の山地渓流とその周辺に生息するが、紀伊半島では主に標高 1000 m 以上の山の周辺に生息する。暑さや乾燥に弱く、落葉広葉樹の原生的で冷涼湿潤な森林を好むが、スギ植林地などを流れる渓流でもみられる。幼生はそういった森林を流れる渓流の中で生活する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，草地，洞窟・地下浅層・地下水域，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	（1）奥山自然地域

【分布域】

これまでに石川県、福井県、岐阜県、滋賀県、京都府、三重県、奈良県で確認されている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域は Yoshikawa et al.（2022）で報告されたものが最新である。石川県、岐阜県は原記載で 1 地点ずつが初めて報告されたため今後のくわしい調査が必要である。紀伊半島では 2 地点だけで記録されている。

【生息地の現況】

深山の渓流の上流部に生息するため比較的生息環境の安定した場所も多いが、低標高の生息地ではその多くが植林地であることもあり森林伐採や林道工事、ダム建設などにより

生息環境の劣化がみられる場所もある。

【個体数の現況】

全体としては減少傾向にあるものと思われる。多産地であったある生息地はこの数年の間に急激に個体数が減少し、今は非常にわずかな数の幼生がみられるだけとなっている。この沢の流域にある複数の産卵場で同じような状況であり、何らかの理由で個体群が壊滅的な打撃を受けている可能性がある。なお、周辺環境は外見上は以前と変わらないブナを中心とした落葉広葉樹林となっている。

存続を脅かす要因

生息環境となる冷涼湿潤な森林の伐採による乾燥化、河川改修や治山ダム工事による渓流環境の悪化・分断、特に幼生の生息環境の悪化。道路建設による生息環境の分断、側溝落下、小渓流の分断（落差工、ヒューム管による幼生の上流への移動阻害）。また、イワナ・ヤマメ等の導入による捕食が危惧される。ペット目的の乱獲。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕食（在来種による）
	（現在）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕食（在来種による）

特記事項

2022 年 5 月に複数回ネットオークションに出品され、高額で落札された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【三重県】情報不足(DD),【京都府】絶滅寸前種

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Yoshikawa, N. and M. Matsui, 2022. A new salamander of the genus *Onychodactylus* from central Honshu, Japan (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). Current Herpetology, 41 (1): 82–100.
- Yoshikawa, N., M. Matsui, and K. Nishikawa, 2010. Allozymic variation and phylogeography of two sympatric genetic types of *Onychodactylus japonicus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae) in Kinki District, Japan. Zoological Science, 27: 344-355.
- Yoshikawa, N., M. Matsui, K. Nishikawa, J. B. Kim, and A. Kryukov, 2008. Phylogenetic relationships and biogeography of the Japanese clawed salamander, *Onychodactylus japonicus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its congener inferred from the mitochondrial cytochrome b gene. Molecular Phylogenetics and Evolution, 49: 249-259.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Onychodactylus pyrrhonotus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Onychodactylus pyrrhonotus* is listed as VU under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 20,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Grassland, Cave/Shallow underground/Subterranean water body, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Predation (by native species)
Law designation status for conservation	―





執筆者:	吉川夏彦（国立科学博物館）
Author:	Natsuhiko Yoshikawa

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　オオサンショウウオ科 Cryptobranchidae　　日本固有

オオサンショウウオ

***Andrias japonicus* (Temminck, 1836)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab

基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2. 生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
多くの河川において、人工の堰堤や護岸が移動の障壁となっており、各個体群は孤立化の一途をたどっている。また、外来のチュウゴクオオサンショウウオの侵入により、在来のオオサンショウウオとの交雑が生じている。その結果、遺伝的に純粋なオオサンショウウオは交配が難しくなり、小集団化している。以上の孤立化・小集団化により、絶滅のリスクが高まっている。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
近年の台風や洪水被害の増加から、河川改修や法面工事が多く施工され、オオサンショウウオの生息や繁殖に用いられる巣穴が減少していることは間違いない。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は現存する世界最大の両生類であり、特別天然記念物に指定されているが、河川の改修などによって好適な生息環境が狭められている。加えて、地域によっては外来種チュウゴクオオサンショウウオとの交雑による遺伝子汚染が予想以上に進んでいる。

基礎情報

【形態】

全長は 600～700 mm 程度のものが多いが、最大 1,500 mm 以上になる。頭部は偏平で大きく、体には多数の小さなイボをもつ。体側から四肢の後面にかけて皮膚の襞がある。鋤骨歯列は浅いハの字型。四肢は短く後肢は 5 趾性。尾は著しく側偏する。背面は一般に暗褐色で、不規則な黒色の斑紋をもつ。近縁種チュウゴクオオサンショウウオは、吻が偏平で頭が大きく、体の黒斑が大きくて独立しており、体のイボは小さくて二つずつ並ぶことで区別される。両者の間に生じる雑種個体はチュウゴクに似ることが多いが、識別の難しい個体もいる。

【生活史】

成体は周年活動を行うが、繁殖期を除いては夜行性で人目につきにくい。 繁殖は年 1 回、通常 8 月下旬～9 月にかけて、河川の岸にできた深い横穴でなされる。大型のオスは繁殖巣穴を占拠後、掃除してメスの集来を待ち、ここに他のオスが侵入すると闘争が起こる。しかし、メスが穴に入って産卵が行われ始めると、周辺に待機していた複数のスニーカーオスも穴に入るという。1 メスの産卵数は 400～500 個と言われる。変態までに 4～5 年を要する。繁殖個体の平均年齢は不明であるが、変態後、野外では最低 10 年は生存が確認され、飼育下では 51 年生存したという記録がある。変態後は単独で生活し、若い幼生はカワゲラ幼虫など、水生の小さい節足動物を食べる。成体はサワガニ、各種淡水魚を食べ、ヘビやカワネズミを食べた例も知られる。

【生息環境】

中部、近畿地方では比較的大きな河川を中心に、中国、九州地方では小河川に生息していることが多く、繁殖場所などの微細な環境要求は異なるものと思われる。繁殖場所となる横穴は、奥から湧水が流出していることが不可欠と見られる。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】森林，河川源流域，河川上流域，河川中流域，湖・ダム湖 【陸域_平地部】河川中流域，河川下流域，農業用水路，小河川
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

自然分布は岐阜県以西の本州と、四国、九州地方の一部のみと考えられる。和歌山県下に生息しているものは人為的に移入されたものの子孫といわれ、同様の例が過去に各地であった可能性は高い。青森県から鹿児島県まで野外での捕獲例があるが、それらは人為による導入と考えられ、外来種チュウゴクオオサンショウウオの誤認であることも多い。

現在の生息状況

【分布域の現況】

多くの地点で、かなり昔から河川改修などの人為的な生息環境の破壊を受けてきた。本

州の分布域のうち、少なくとも愛知、京都、滋賀、奈良、三重、岡山、広島では人為移入された外来種チュウゴクオオサンショウウオとの自然下での交雑が生じており、遺伝汚染が進んでいる。交雑個体は岐阜・大阪・兵庫でも見つかっているが個体群が維持されているかは不明である。

【生息地の現況】

生涯のほとんどを河川で過ごすため、各河川に生息する個体群は分断されていると思われる。また、多くの河川で、人工の堰堤や護岸が移動の障壁となっている。京都、三重、岡山などでチュウゴクオオサンショウウオとの交雑が進み、京都市の一部では純粋種は壊滅に近い。

【個体数の現況】

地域個体群別の推定個体数とその時代的変化は不明であるが、調査された河川の例では、三重県下で流域長約 6,000 m の区域に 150 個体、兵庫県下で約 3,000 m に 490 個体、広島県下では約 3,500 m に 50 個体の、変態後の個体の生存が確認されている。

存続を脅かす要因

かつては食用とされていたが、現在では法的に保護されているため個体自体の捕獲または採取は原則としてないはずである。しかし、実際には食用習慣は続いている可能性がある。もっとも重要なのは、堰堤やダムの建設、護岸工事など、河川の改変による生息地の消失である。それに加えて、近畿地方の一部では外来種チュウゴクオオサンショウウオと競合し、交雑した結果、純粋なオオサンショウウオが絶滅に瀕している事実が判明してきた。こうした交雑個体の存在は、最近では西は広島、東は愛知までの地域で知られている。

要因の区分：	（過去）	河川開発，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，競争/競合（外来種による），交雑（外来種による）
	（現在）	河川開発，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，競争/競合（外来種による），交雑（外来種による）

特記事項

現存する世界最大の両生類であり、化石種と形態的にあまり違いのないこと、近縁種は中国大陸や北米に隔離分布することなどから、有尾類の進化や生物地理を探るうえで、非常に重要な種である。鈴鹿山地の東西で遺伝的に異なることを除き、地域間での遺伝的多様性は高くない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオサンショウウオ	*Andrias japonicus*	VU
第４次 2019：	オオサンショウウオ	*Andrias japonicus*	VU
第４次 2018：	オオサンショウウオ	*Andrias japonicus*	VU

第４次 2017：	オオサンショウウオ	*Andrias japonicus*	VU
第４次 2015：	オオサンショウウオ	*Andrias japonicus*	VU
第４次：	オオサンショウウオ	*Andrias japonicus*	VU
第３次：	オオサンショウウオ	*Andrias japonicus*	VU
第２次：	オオサンショウウオ	*Andrias japonicus*	NT
第１次：	オオサンショウウオ	*Megalobatrachus japonicus*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【福井県】県域絶滅，【岐阜県】絶滅危惧Ⅱ類，【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【三重県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【滋賀県】絶滅危惧種，【京都府】絶滅危惧種，【大阪府】VU，【兵庫県】B ランク，【奈良県】絶滅危惧種，【和歌山県】絶滅(EX)，【鳥取県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【島根県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【岡山県】絶滅危惧Ⅰ類，【広島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【山口県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【徳島県】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)，【愛媛県】情報不足(DD)，【高知県】情報不足(DD)，【福岡県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)，【熊本県】情報不足(DD)，【大分県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国指定特別天然記念物，都道府県条例指定種【京都府】

参考文献

- 生駒義博（編），1973．日本ハンザキ集覧．津山科学教育博物館，津山．478 pp.
- 松井正文，2017．チュウゴクオオサンショウウオが在来のオオサンショウウオに与える影響．地域自然史と保全，39(1): 13-19.
- 松井正文，2000．オオサンショウウオ．改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック―（爬虫類・両生類），pp. 101．環境庁，東京.
- 松井正文，2009．外来生物クライシス．小学館，東京．254 pp.
- 松井正文・西川完途・吉川夏彦．2010．京都賀茂川産チュウゴクオオサンショウウオの現状（I）．爬虫両棲類学会報，2010 (1):77-78.
- Matsui, M., Tominaga, A., Liu, W. -Z., Tanaka-Ueno, T., 2008. Reduced genetic variation in the Japanese giant salamander, *Andrias japonicus* (Amphibia: Caudata). Mol. Phyl. Evol., 49: 318–326.
- 小原二郎，1985．大山椒魚．どうぶつ社，東京．236 pp.
- 栃本武良，1995．オオサンショウウオ．日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（II），pp. 42 2-428．日本水産資源協会，東京.
- 栃本武良，2005．オオサンショウウオの生態，松井正文（編），これからの両棲類学，pp. 28-39．裳華房，東京.

- 栃本武良，2005．オオサンショウウオの保全，松井正文（編），これからの両棲類学，pp. 204-215．裳華房，東京．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Andrias japonicus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Andrias japonicus* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin, Middle river basin, Lake/Dam 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Middle river basin, Lower river basin, Agricultural ditch, Small river
Threat types:	River development, Dam/River structures construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Competition (with alien species), Hybridization (with alien species)
Law designation status for conservation	Nationally Designated Special Natural Monument. Prefectural Ordinance-Designated Species【Kyoto】.



執筆者:	西川完途（京都大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Kanto Nishikawa and Masafumi Matsui

有尾目 Caudata　イモリ科 Salamandridae　　日本固有

アマミイボイモリ

***Echinotriton raffaellii* Hernandez et Dufresnes, 2022**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab

基準 A:　－	基準 B:　VU	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

B2. 生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
生息地は、奄美大島、請島、徳之島に限定される。平野部でも開発の影響の少ないところであれば、個体群が存続しているが、市街地周辺では生息は確認できない。奄美大島では森林域を中心に分布しているが、発見数が限られており、生息地が島内でも分断化している可能性もある。
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
森林伐採、道路建設、それに伴う轢死の影響は顕著であり、個体数は減少しつつあると思われる。奄美大島では、以前比較的多くみられた地点で近年全く確認できない状態になっている場所もあり、徳之島でも過去の良好な生息地において、土地の整備により個体数が減少していると思われる場所もある。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

奄美大島、請島、徳之島の平野部から山地にかけて分布し、畑地、公園、森林などのさまざまな環境に生息する。イボイモリの鹿児島個体群とされていたが、遺伝学的根拠に基づいて種が分割された。2 月から 4 月に水際の陸上に産卵する。道路建設や観光地としての公園の整備に伴う、繁殖場所、幼生の生息場所の水たまりの消失、繁殖期の複数個体の轢死によって、個体数は減少しており、生息が確認できなくなった地域もある。

基礎情報

【形態】

全長は 110～160 mm、頭胴長 55～82 mm。背面、腹面、側面の基色は、黒色で体背面の肋骨末端の突起部分に小さいがよく目立つ赤色から濃い褐色の斑点をもつ。尾の腹面部、総排出孔、前後肢の掌も赤褐色を呈する。幼生は、孵化した時点から灰色の基色に黒斑をもち、頭部は丸身を帯び奄美大島では同所的に分布するアマミシリケンイモリの幼生よりも大型になり、体型も太い。変態が近づくと、上陸個体の体色に近づき、体全体の大部分が黒色になる。

【生活史】

2 月から 4 月に平野の湿地や池、手掘りの水路、山地の池や水路、水たまりなどの水際の陸上に産卵する。多くの場合、卵は落ち葉や土壌の下に隠された状態で発見されるが、時として遮蔽されず、むき出しの状態で見つかることもある。ただし、卵表面は粘着性が高く、多くの場合、土が付着しており、卵の外からはっきりと胚を確認することは難しい。孵化までは 1 か月かからず、多くの地域では夏ごろまでに変態を完了する。幼生越冬は知られていない。上陸した幼体は数年をかけて成熟サイズに至ると考えられる。12 月ごろには繁殖期が始まり、徘徊する雄を見かける頻度が高くなる。精包の授受も陸上で行われる。奄美大島と請島では、別属のアマミシリケンイモリと同所的に分布するが、アマミシリケンイモリに比べると個体群密度は低いと考えられる。

【生息環境】

平野部から山地の畑地、公園、森林などのさまざまな環境に生息するが、いずれの場所でも産卵場所として利用する水場が近くにある。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地，田地・畑地，湿地・湿原・細流，ため池・池沼 【陸域_平地部】森林，草地，田地・畑地，湿地・湿原
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（7）島嶼地域

【分布域】

奄美大島、請島、徳之島の平野部から山地にかけて分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

これまでに絶滅した地域の確かな情報はないが、過去に生息が確認された奄美大島の地域などで生息が確認できなくなっている地域はある。しかしそもそも、奄美大島、請島での生息密度は低いと考えられ、分布域の増減について評価できるだけの十分な調査は行われていない。奄美大島と請島では、生息密度は極めて低い。奄美大島の個体群に関する過去の文献資料では、もう少し個体数が多かったことを示唆する記述もあり、本来の生息個体数が減少した結果、現在のような低密度になってしまった可能性もある。徳之島でも生

息地に多くの道路があり、毎年多くの轢死が確認されている。

【生息地の現況】

奄美大島の生息地の一部では、林道の建設に伴い、産卵場所、幼生の生息場所となっていた水たまりが消失し、アスファルトで舗装された場所もある。こうした道路建設や観光地としての公園の整備が、本種の生息環境を破壊している可能性が高い。徳之島では、生息地が平野部まで及んでいることもあり、繁殖期になると多くの個体が轢死している。

【個体数の現況】

奄美大島と請島で発見個体数も極めて少なく、幼生や卵の発見も少ないことから、生息密度は低いものと思われる。徳之島は比較的密度高く分布しているが、毎年多くの個体が路上で轢死していることを考えると、地域によっては個体数が減少しているものと考えられる。良好な生息地での個体数は過去と変わらず維持されているようである。

存続を脅かす要因

最も存続に対して影響の大きな要因は、森林伐採と、道路整備、ダムや河川改修、観光地などの整備による生息環境の乾燥化、アスファルトでの舗装と考えられる。さらに良好な生息環境に道路ができることに起きる轢死が本種の存続を脅かす要因になっている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，交通事故
	（現在）	森林伐採，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，交通事故

特記事項

長い間、沖縄県と鹿児島県の個体群は単一種イボイモリ *Echinotriton andersoni* と扱われてきたが、両者の遺伝的、形態学的差異が顕著であることを根拠に、2022 年に鹿児島県の個体群は別種アマミイボイモリ *Echinotriton raffaellii* として分けられた。鹿児島県の天然記念物に指定されている。沖縄県の天然記念物に指定されている。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義イボイモリ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—

第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- Dufresnes, C. and A. Hernandez, 2022, Towards completing the crocodile newts' puzzle with all-inclusive phylogeographic resources. Zool. J. Linn. Soc., zlac038.
- Nishikawa, K., A. Tominaga, and M. Matsui. 2022. Morphological and taxonomic reexamination on a crocodile newt recently described from Japan (Urodela, Salamandridae, *Echinotriton*). Zootaxa, 5196 (2): 223-234.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Echinotriton raffaellii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Echinotriton raffaellii* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Wetland/Marsh/Stream, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Farmland, Wetland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Vehicle collision

Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.


©浅野真輝（自然環境研究センター）


©戸田光彦（自然環境研究センター）

執筆者:	富永篤（琉球大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Atsushi Tominaga and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

オットンガエル

***Babina subaspera* (Barbour, 1908)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　B2ab

基準 A:　―	基準 B:　VU	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 2000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。
【地点数】10 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
近年の森林伐採、道路の敷設などによる環境改変に伴い、生息環境は悪化している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

奄美諸島の奄美大島、加計呂麻島、枝手久島に固有の大型のカエルである。常緑広葉樹の森林およびそれに隣接する水場で見られる。近年の森林伐採、道路の敷設が生息環境の悪化を招いており、個体群の縮小が懸念される。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長はオスで 93～138.5 mm、メスで 111～140 mm。頑丈な体格で、頭幅は広く、雌雄ともに頭胴長の 40%程度。胴背面はほぼ一様に緑色がかった暗褐色で、多数のいぼがある。体側は色が淡く、また、淡色の斑紋がある。第 1 指の内側に肉質の袋状の拇指が発達する。この拇指の中には骨質の棘が納まっている。形態はホルストガエルに似るが、背面のイボが発達すること等で容易に識別できる。

【生活史】

繁殖活動は散発的で、集団繁殖は行わない。繁殖期は 4～10 月で、7 月上旬～8 月上旬が最盛期。掘れば水がしみ出るような水辺の土砂に、低い土手に囲まれた内径 20～30 cm、深さ 2 cm ほどのくぼみを掘り、その中に直径 2.0～2.5 mm ほどの卵を 800～1,300 個産む。この他、自然にできた水溜りや人工池などでもしばしば産卵し、山地に囲まれた農地の水桶でも幼生が確認されることがある。幼生は生まれた年の秋までに変態するか、そのまま越冬し翌年の 5～6 月に変態・上陸する。指骨の切片を用いた年齢査定により、野外では性成熟までに約 3 年を要し、平均して 4 歳あまりまで生存し、雌雄とも 7 歳までは生きるとされている。オスは長期間にわたり繁殖場所周辺にとどまり、毎年同じ場所を訪れることが知られる。サワガニ類、マダラカマドウマ、オオゲジ、ミミズ類、ナメクジ類などを捕食し、ヒメアマガエルを食べていた記録もある。卵が同種の幼生やシリケンイモリ、モクズガニに捕食されること、卵および幼生がガラスヒバァに捕食されることが報告されている。

【生息環境】

常緑広葉樹林に覆われた山地や丘陵地の渓流や湿地などに生息する。成体は農地や公園などの人為的な環境も含め、比較的幅広い環境下で見られる。しかし変態後の幼体の生育には、湿潤で小型の無脊椎動物に富んだ常緑広葉樹の自然林が必要と思われる。源流域のよどみなど、流れのほとんどない水域や止水域で繁殖し、林道の集水マスや堰堤の水溜まりなど、人為的な止水もしばしば利用する。とはいえ、本種の出現環境がアマミイシカワガエルと重複することを示した研究もあり、山地森林の源流部が原来の主たる生息環境と考えられる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，河川源流域，河川上流域 【陸域_平地部】森林，湿地・湿原
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

奄美諸島の奄美大島、枝手久島、加計呂麻島から知られ、山地から低地まで生息している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

本種は山地から低地まで比較的広く分布し、山間部の畑地のため池などでも繁殖している場合がある。龍郷および加計呂麻島の集団が遺伝的に分化していることが報告されている。

【生息地の現況】

主要な生息地である奄美大島の山間部で舗装道路の敷設が進んでおり、個体群への影響が懸念される。森林の伐採や林道の敷設とともに、幼体の生育や繁殖に適した場所が失われていると思われるが、具体的な縮小率は不明。奄美大島ではマングースによる影響を強く受けてきたが、マングースの根絶によってその圧迫要因は取り除かれた。

【個体数の現況】

具体的な数値は不明であるが、環境改変に伴う生息環境の悪化により個体数は減少していると思われる。アマミハナサキガエルに比べると目撃頻度は高くない。マングースの影響により少なくとも一部の地域で個体数の減少が報告されていたが、マングース防除の進展に伴い個体数は回復傾向にある。2024 年に出された奄美大島におけるマングースの根絶宣言は本種の存続にとってプラスの要素であり、今後の生息状況の変化を注視したい。

存続を脅かす要因

奄美大島においてマングースが根絶された現在、道路整備に伴う森林伐採が本種の存続を脅かす主要因といえる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設

特記事項

本種はホルストガエルとともに遺存性の高い系統を構成しており、その存在はユーラシア大陸の一部であった時代以降の琉球列島の地史、古地理と強く結び付いていると考えられる。また窪みを掘って産卵する本種の繁殖生態は東アジアに分布するアカガエル科の種の中では独特で、こうした点でも高い学術的価値が認められる。鹿児島県の天然記念物に指定されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オットンガエル	*Babina subaspera*	EN
第４次 2019：	オットンガエル	*Babina subaspera*	EN
第４次 2018：	オットンガエル	*Babina subaspera*	EN
第４次 2017：	オットンガエル	*Babina subaspera*	EN
第４次 2015：	オットンガエル	*Babina subaspera*	EN

第４次:	オットンガエル	*Babina subaspera*	EN
第３次:	オットンガエル	*Rana subaspera*	EN
第２次:	オットンガエル	*Babina subaspera*	VU
第１次:	オットンガエル	*Babina subaspera*	V

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】絶滅危惧Ⅰ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

国内希少野生動植物種

参考文献

- 岩井紀子，2010．ガラスヒバァによるオットンガエル（卵，オタマジャクシ）の捕食例―．爬虫両棲類学会報，2010: 111‐112．
- 岩井紀子，2010．オットンガエルの捕食行動―ガラスヒバァからの横取り例―．爬虫両棲類学会報，2010: 103‐105．
- 岩井紀子，2011．オットンガエル卵の捕食者 3 種の観察例．爬虫両棲類学会報，2011: 19‐24．
- Iwai, N., 2013. Home range and movement patterns of the Otton frog: integration of year-round radiotelemetry and mark-recapture methods. Herpetol. Conserv. and Biol., 8(2): 366–375.
- Iwai, N., 2013. Morphology, function and evolution of the pseudothumb in the Otton frog. J. Zool., 289: 127–133.
- Iwai, N. and E. Shoda-Kagaya, 2012. Population structure of an endangered frog (*Babina subaspera*) endemic to the Amami Islands: possible impacts of invasive predators on gene flow. Conserv. Genet., 13: 717–725.
- 岩井紀子・亘悠哉，2006．奄美大島におけるイシカワガエル、オットンガエルの生息状況．爬虫両棲類学会報，2006(2): 109-114．
- 岩井紀子・亘悠哉・戸田光彦・阿部慎太郎・加賀谷隆，2006．奄美大島固有種オットンガエルの保全生態学的研究．プロ・ナトゥーラ・ファンド第 15 期助成成果報告書，pp. 51‐59．自然保護助成金，東京．
- Iwai, I., K. Yasumiba, and M. Akasaka, 2018. Calling-site preferences of three co-occurring endangered frog species on Amami-Oshima Island. Herpetologica, 74(3):199-206.
- 松井正文，2021．オットンガエル．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 53-55．サンライズ出版，彦根．
- 松井正文・前田憲男，2018．日本産カエル大鑑．文一総合出版，東京．
- 戸田守・角田羊平・前之園唯史，2017．奄美諸島の 6 つの無人島の両生爬虫類相．Akamata，27: 56-64．

- 戸田光彦・太田英利，2014. オットンガエル．環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編），レッドデータブック 2014 日本の説滅の恐れのある野生生物 3 爬虫類・両生類，pp. 114-115．ぎょうせい，東京.
- 亘悠哉，2011．衰退から回復へ：日本の爬虫類・両生類を救うマングース対策．爬虫両棲類学会報，2011: 137-147.
- 亘悠哉・岩井紀子・大海昌平・加賀谷隆，2007．奄美大島固有種オットンガエルの保全生態学的研究（継続）．プロ・ナトゥーラ・ファンド第 16 期助成成果報告書，pp. 17-24．自然保護助成金，東京.
- Watari, Y., Nishijima, S., Fukasawa, M, Yamada, F., Abe, S., Miyashita, T., 2013. Evaluating the "recovery level" of endangered species without prior information before alien invasion. Ecol. Evol, 3(14): 4711–4721.
- Watari Y., S. Takatsuki, and T. Miyashita, 2008. Effects of exotic mongoose (*Herpestes javanicus*) on the native fauna of Amami-Oshima Island, southern Japan, estimated by distribution patterns along the historical gradient of mongoose invasion. Biol. Invasions, 10:7–17.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Babina subaspera has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Babina subaspera* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at ten or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Wetland
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Transportation infrastructure construction
Law designation status for conservation	Nationally rare species of wild fauna and flora.





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

ヤエヤマハラブチガエル

***Nidirana okinavana* (Boettger, 1895)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2				
基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－
D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。 【判断理由】 本種は、石垣島と西表島にしか生息していない。それぞれの島においても生息地が限られている。島嶼では、本種の脅威と想定される生息阻害要因（外来種、病原体、大規模な開発や自然災害等による生息環境の改変等）の影響が、比較的速やかに全体に及ぶ可能性がある。				
評価分科会：　爬虫類・両生類分科会				

概要

本種は石垣島、西表島のみに分布している。小河川、池沼、休耕田にできた湿地などで繁殖するが、砂泥質の岸辺に浅く掘った巣穴の中に産卵するため、干ばつなどによる湿地の乾燥化に弱い。石垣島、西表島ともに個体群は小規模で分断化が進んでいる。西表島では道路の拡幅工事や大規模宿泊施設の建設などによって、繁殖場所である湿地が失われ、急速に生息数が減少している。

協力者: 戸金大（慶應義塾大学）・ 秋田耕佑（大阪市立環境科学研究センター）・阿南一穂（平岡環境科学研究所）

基礎情報

【形態】

雌雄の体長は 45 mm 前後で、雌雄差は小さい。胴に対して四肢が相対的に短く、いわゆる寸胴な印象を受ける。体色は茶褐色から灰褐色で、背面の眼後方から後肢の付け根にかけて明色の背側線をもつ。上唇から前肢の付け根の上部にかけて白線が走り、この白線と背側線隆条の前部、眼、眼鼻線に囲まれた領域は暗褐色である。胴部は腹面を除き褐色。同所的に分布するオオハナサキガエルやコガタハナサキガエルと類似するが、上唇の白線の有無によって識別可能である。

【生活史】

繁殖期は長く、3～10 月頃まで続く。産卵は水際の湿った砂泥質の岸に掘られた巣穴の中で行われる。巣穴は直径 4～5 cm の球形で、通常、地上からは確認できないが、浅く掘られているため、天井が崩れて中の卵が見えることもある。巣穴内は湿ってはいるが、水が全くないこともある。1 回の産卵数は 18～80 個。卵は巣穴の中でふ化し、降雨によって水位が上昇すると、幼生が巣穴から周辺の水域へ流れ出し、その後、変態するまで水生生活を送る。幼生から成体になるまでの生活史については明らかになっていない。成体は、繁殖期には水辺に留まるが、非繁殖期には水辺から離れた森林の林床や林道などにも分散している。なお、本種は、砂泥質の岸に産卵用の巣穴を造るという特殊な生態学的特性をもつため、他のカエル類より乾燥化に弱いと推測される。

【生息環境】

海岸沿いから標高の高い山麓まで、標高とはあまり関係なく、小河川、池沼、草地にできた湿地などの湿潤な場所に生息する。さまざまな湿地で見られるが、水田には少ない。非繁殖期には湿地から離れた森林の林床などで見かけることもある。

生息環境区分：	【陸域_平地部】河口域，ワンド，小河川
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(4) 河川・湿地地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

台湾から八重山諸島までの範囲に分布する。八重山諸島では、面積の大きな石垣島と西表島のみに分布し、両島以外の島では確認されていない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域および島内の出現範囲に大きな変化はない。

【生息地の現況】

石垣島では、中部から北部にかけての森林地帯の湿地や宮良川水系の湿地などに生息地が点在するが、いずれの個体群も小規模で孤立化が著しい。西表島では、島内全域に生息地が散在するが、大規模宿泊施設の建設や道路の拡張工事の影響で、標高の低い生息地の環境悪化が進んでいる。一方、標高の高い場所の開発は顕著ではないが、元々大きな湿地

は少ないため、小雨による乾燥化の影響を受けやすい。本種の生息条件として、巣穴を掘れる砂泥質の岸辺、幼生が成長する止水、成体が生息できる草地や林が必須であるが、狭い島内ではそれらの条件が揃う場所は限られるため、小規模個体群が点在する要因となっている。

【個体数の現況】

石垣島と西表島共に個体数は不明。

存続を脅かす要因

西表島と石垣島の両島で、森林伐採、湿地や草地の開発、土地造成、道路建設などによって、繁殖場所である湿地が消失している。また、工事にともなう排水路の整備などにより生息地の乾燥化が進み、本種の生息を脅かしている。とくに西表島では、西部から東部にかけての幹線道路の拡幅工事が断続的に続いており、海岸沿いの低湿地の消失が著しい。さらに最近増加傾向にある大型台風の通過による増水や崖崩れなどで生息地が消失している。それらに加え、近年、放牧地の増加により湿地の減少と植生変化にともなう生息地の乾燥化が進んでいる。これらの他、外来カエル類の影響も懸念されている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，湿地開発，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害
	（現在）	森林伐採，湿地開発，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，遷移進行・植生変化/自然遷移，自然災害

特記事項

本種の学名は、2006 年に公表された第 3 次レッドリストでは *Rana psaltes* とされていたが、最新の分類学的整理に基づき、第 4 次レッドリストでは *Rana okinavana* に、更に第 5 次レッドリストでは *Nidirana okinavana* に変更された。なお、本種は台湾にも生息するとされてきたが、2025 年に台湾の個体群は独立種 *Nidirana shyhhuangi* として記載された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヤエヤマハラブチガエル	*Nidirana okinavana*	VU
第４次 2019：	ヤエヤマハラブチガエル	*Nidirana okinavana*	VU
第４次 2018：	ヤエヤマハラブチガエル	*Nidirana okinavana*	VU
第４次 2017：	ヤエヤマハラブチガエル	*Nidirana okinavana*	VU
第４次 2015：	ヤエヤマハラブチガエル	*Rana okinavana*	VU
第４次：	ヤエヤマハラブチガエル	*Rana okinavana*	VU
第３次：	ヤエヤマハラブチガエル	*Rana psaltes*	VU
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kuramoto, M., 1985. A new frog (genus *Rana*) from the Yaeyama Group of the Ryukyu Islands. Herpetologica, 41: 150–158.
- Lin, CF., C. Chang, M. Matsui, CC. Shen, A. Tominaga, and SM. Lin, 2025. Description of a new music frog (Anura, Ranidae, *Nidirana*) critically endangered in Taiwan. ZooKeys, 1229: 245–273.
- Matsui, M., 2007. Unmasking *Rana okinavana* Boettger, 1895 from the Ryukyus, Japan (Amphibia: Anura:Ranidae). Zool. Sci., 24: 199–204.
- Matsui, M., 2011. On the brown frogs from the Ryukyu Archipelago, Japan, with descriptions of two new species (Amphibia, Anura). Cur. Herpetol., 30(2): 111–128.
- 松井正文・前田憲男，2018．日本産カエル大鑑．271pp．文一総合出版，東京．
- 当山昌直・太田英利，1990a．西表島崎山半島における両生・爬虫類の生態的分布．世界自然保護基金日本委員会（編），南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する研究．平成元年度西表島崎山半島地域調査報告書，pp. 167‐172．環境庁自然保護局，東京．
- 当山昌直・太田英利，1990b．西表島の両生・爬虫類相．世界自然保護基金日本委員会（編），南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する研究．平成元年度西表島崎山半島地域調査報告書，pp. 159‐166．環境庁自然保護局，東京．
- Watanabe, S., N. Nakanishi, and M. Izawa, 2005. Seasonal abundance of the floor-dwelling frog fauna on Iriomote Island of the Ryukyu Archipelago, Japan. Journal of Tropical Ecology, 21: 85–91.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Nidirana okinavana has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Nidirana okinavana* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Estuary, Inlet, Small river

Threat types:	Logging and wood harvesting, Wetland development, Grassland development, Land development, Transportation infrastructure construction, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters
Law designation status for conservation	—





執筆者:	福山欣司（慶応義塾大学）
Author:	Kinji Fukuyama

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

アマミハナサキガエル

***Odorrana amamiensis* (Matsui, 1994)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2

基準 A: ―	基準 B: ―	基準 C: ―	基準 D: VU	基準 E: ―

D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。

【判断理由】

奄美大島と徳之島のみに分布する。本種は山地森林に広く見られるものの、渓流の限られた場所に多数の個体が集合して繁殖するため、その存続のためには河川源流域～上流域の良好な環境が保存される必要がある。本種の代置種であり、よく似た繁殖生態をもつ沖縄島固有のハナサキガエルでは、かつてやんばるの稜線と平行に長い林道が敷設された際に、林道と直交する多くの河川における産卵場の環境が一気に悪化したことがあった。河川の中でも特定の場所で産卵する本種群の特性を考えたとき、今後の環境改変による影響が広く及ぶ可能性もあり、現在の生息地面積は十分に広いとはいえない。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

奄美諸島の奄美大島と徳之島に分布し、常緑広葉樹の自然林および回復の進んだ二次林内の渓流に生息する。近年の森林伐採が生息域の縮小を招いており、とくに徳之島では産地が限られ、かつ分断されている。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長はオスで 56～70 mm、メスで 68～101 mm。近縁のハナサキガエルよりも明らかに大型で、オスは 56 mm を超える点で区別できる。四肢は長く、後肢を前屈すると、ハナサキガエル同様に、脛跗関節は吻端に達するか吻端より前に出る。背面の色彩・模様に大きな個体変異がある点もハナサキガエルと共通しており、褐色のもの、緑色のもの、両色が斑状になったものが見られる。ハナサキガエルよりも相対的に鼓膜と目が小さい。

【生活史】

冬季を中心に繁殖活動が活発になる。奄美大島では、繁殖は 10 月中旬～5 月上旬にかけて見られ、12～1 月が最盛期。多くの場合、多くの個体が渓流の狭い範囲に集合し、抱接ペアは渓流内の石の陰などに黄白色の卵塊を産みつける。徳之島では 2 月に卵が確認されている。1～7 月にかけて、河川上流の淵で幼生が確認されており、幼生は 8 月までに変態する可能性が示唆されている。アマミイシカワガエル、オットンガエルに比べると林道で見かける頻度が高い。繁殖に集まった個体は、しばしばヒメハブに捕食されている。

【生息環境】

常緑広葉樹に覆われた山地・丘陵地の渓流周辺に生息する。山間部の森林に覆われた清流の存在が生息に必要な条件と考えられる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，河川源流域 【陸域_平地部】森林，小河川
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

奄美諸島の奄美大島と徳之島に固有分布する。分布域は山地に限定され、奄美大島では比較的大きな河川の源流域・上流域でよくみかける。徳之島では井之川岳山系と、同島北部の天城岳山系に生息している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布は健全な森林が残る山地に限られる。徳之島においては、島中央部の井之川岳山系と、北部の天城岳山系の間で生息地が分断している。奄美大島では、笠利半島に生息しないとの情報があるが確認が必要である。

【生息地の現況】

奄美大島と徳之島のいずれにおいても林道の敷設・整備等にともなって森林が縮小し、生息地は狭まっていると考えられる。奄美大島においてはマングースによる捕食が本種の個体数減少の一大要因であり、防除事業によるマングースの減少に伴って本種個体群の回復が示されていた。同島のマングースは 2024 年に根絶宣言が出され、その点においては

今後のさらなる回復が期待される。

【個体数の現況】

個体数に関する具体的なデータはないが、生息地の縮小にともない個体数が減少していることはほぼ間違いない。一方、マングースが高密度で生息していた奄美大島の中央部では、マングースの駆除後、本種の個体群密度が回復しつつあることが示されている。

存続を脅かす要因

道路の敷設・拡張や農地開発に伴う森林の後退は本種の存続を脅かす主要因の一つと考えられる。マングースによる食害の影響も大きかったが、この点について状況は改善した。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設

特記事項

本種は沖縄諸島および八重山諸島の近縁種とともに琉球列島に広く分布する異所的固有種群を形成しており、琉球の陸生生物相の成り立ちを考える上で、高い学術的価値を有する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アマミハナサキガエル	*Odorrana amamiensis*	VU
第４次 2019：	アマミハナサキガエル	*Odorrana amamiensis*	VU
第４次 2018：	アマミハナサキガエル	*Odorrana amamiensis*	VU
第４次 2017：	アマミハナサキガエル	*Odorrana amamiensis*	VU
第４次 2015：	アマミハナサキガエル	*Odorrana amamiensis*	VU
第４次：	アマミハナサキガエル	*Odorrana amamiensis*	VU
第３次：	アマミハナサキガエル	*Rana amamiensis*	VU
第２次：	アマミハナサキガエル	*Rana amamiensis*	VU
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】絶滅危惧Ⅱ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 前田憲男・松井正文，1989．日本カエル図鑑．文一総合出版，東京．206pp.
- Matsui, M., 1994. A taxonomic study of the *Rana narina* complex, with description of three new species (Amphibia: Ranidae). Zool. J. Linn. Soc., 111(4): 385–415.
- 松井正文，2021．アマミハナサキガエル．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 59．サンライズ出版，彦根.
- 松井正文・前田憲男．2018．日本産カエル大鑑．文一総合出版，東京．272pp.
- 迫田拓・永井弓子・水田拓，2007．アマミハナサキガエル *Rana amamiensis* 幼生の野外での初確認．爬虫両棲類学会報，2007: 1‐4.
- 迫田拓・永井弓子・迫田裕子，2008．奄美大島におけるアマミハナサキガエル幼生の出現時期．Akamata，19: 1‐8.
- 戸田光彦・太田英利，2014. アマミハナサキガエル．環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編），レッドデータブック 2014 日本の説滅の恐れのある野生生物 3 爬虫類・両生類，pp. 136‐137．ぎょうせい，東京.
- 亘悠哉，2011．衰退から回復へ：日本の爬虫類・両生類を救うマングース対策．爬虫両棲類学会報，2011: 137‐147.
- Watari, Y., Nishijima, S., Fukasawa, M, Yamada, F., Abe, S., Miyashita, T., 2013. Evaluating the “recovery level” of endangered species without prior information before alien invasion. Evolutionary Ecology 3(14): 4711–4721.
- Watari Y., Takatsuki, S., Miyashita, T. 2008. Effects of exotic mongoose (*Herpestes javanicus*) on the native fauna of Amami-Oshima Island, southern Japan, estimated by distribution patterns along the historical gradient of mongoose invasion. Biological Invasions, 10: 7–17.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Odorrana amamiensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Odorrana amamiensis* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Small river
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Transportation infrastructure construction

Law designation status for conservation	—





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

ハナサキガエル

***Odorrana narina* (Stejneger, 1901)**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2

基準 A:　－	基準 B:　－	基準 C:　－	基準 D:　VU	基準 E:　－

D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。

【判断理由】

本種は、渓流の上流域の特定の場所に集合して産卵する。かつてやんばるの稜線と平行して長い林道が敷設された際に、その林道は、直交する多くの河川の産卵場の環境を一気に悪化させた。その後、そのような大規模な林道敷設はなされていないが、河川の特定の場所に集合して産卵する本種の繁殖特性を考えれば、人為的な環境改変の影響が広く及ぶ可能性も考えられ、現在の生息地面積は限定されていると見なさざるを得ない。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

沖縄諸島の沖縄島のみに分布し、同島北部の常緑広葉樹の自然林および回復の進んだ二次林内の渓流とその周辺の林床に生息する。近年の森林伐採や林道、ダムの建設により生息域が縮小し個体数も減少している。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長はオスで 42～55 mm、メスでは 65～75 mm。四肢は比較的長く、後肢を前屈すると、脛跗関節は吻端に達するか吻端より前に出る。近縁のアマミハナサキガエルよりも明らかに小型で、オスの頭胴長は 56 mm を越えない。背面の色には個体変異があり、基色は通常、灰褐色または褐色で、暗褐色あるいは緑色の不規則な斑紋があるが、ほぼ全面が緑色の場合もある。四肢には暗褐色の横帯がある。背側線は鼓膜の後方で多少外側へ曲がったごくにぶい隆条となるが、胴後半ではほぼ消失する。

【生活史】

繁殖期は 12 月～3 月上旬で、4 月に及ぶこともあるが、個々の産卵場所で見れば明らかに一斉産卵型の繁殖様式を示し、産卵は数日のうちに終わる。渓流の源流域から上流域の決まった滝壺や淵に多数の個体が集合し、直径 3.5～3.7 mm ほどの黄白色の卵、150～250 個からなる卵塊を水中の壁面や岩の下に固めて産みつける。孵化した幼生はしばらくの間、卵の抜け殻に食いつくようにぶら下がって、卵殻を食べて成長する。卵殻を食べ尽くすと、色素が沈着して水底に下り、やがて分散していく。一部は産卵場所である滝壺や淵に残って変態上陸まで過ごすが、多くは多少なりとも移動し、渓流の流れのなかで育つようである。5 月から 7 月に上陸した稚ガエルをみるようになる。成体は陸貝類、ムカデ類や昆虫など小型の無脊椎動物を捕食する。成熟年齢や世代期間などはよく分かっていない。

【生息環境】

常緑広葉樹林に覆われた山地の渓流域とその周辺に生息する。本種の生息にはある程度の流量と流速のある清冽な渓流の存在が不可欠である。周年にわたって渓流沿いで成体がみられるが、非繁殖期には林床も利用しており、林道にも多くの個体が出現する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，河川源流域，河川上流域 【陸域_平地部】小河川
国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

沖縄島の北部山地に固有。最近縁種のアマミハナサキガエル（*Odorrana amamiensis*）は奄美諸島の奄美大島と徳之島に、ハナサキガエル種群に属するそれ以外の種は八重山諸島と台湾に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現在の分布域は塩屋湾と平良を結ぶラインの北部に限定されている。1980 年代には本部半島でも観察され、名護市でも記録があったが、両地域ともその後確認記録がなく、個体群は消滅した可能性が高い。

【生息地の現況】

森林伐採や林道建設により、生息地は継続的に減少している。また、林道工事や林道敷設にともない河川へ土砂が流入し、産卵場所となる淵が埋まるなどの影響があった場所もある。分布域の広い範囲でマングースの防除が進んでいるが、塩屋湾-平良ライン以南では対策が進んでおらず、仮に分散個体がいてもマングースの捕食圧から逃れることは難しい。

【個体数の現況】

個体数の変化について具体的なデータはないが、生息範囲の縮小、生息環境の悪化に伴い個体数が減少しているのは明らかである。

存続を脅かす要因

森林伐採や道路の敷設・整備のほか、山地で行われている農地開発が本種の生息のおもな圧迫要因と考えられる。これらの環境改変に起因する渓流への土砂の流入は、流程の特定の場所で繁殖する彼らに強い負の影響を与えている。また、本部半島と名護市での個体群の消滅の背景にマングースの影響があることはほぼ間違いない。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕食（外来種による）

特記事項

本種は奄美諸島および八重山諸島の近縁種とともに琉球列島に広く分布する異所的固有種群を形成しており、琉球の陸生生物相の成り立ちを考える上で、高い学術的価値を有する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ハナサキガエル	*Odorrana narina*	VU
第４次 2019：	ハナサキガエル	*Odorrana narina*	VU
第４次 2018：	ハナサキガエル	*Odorrana narina*	VU
第４次 2017：	ハナサキガエル	*Odorrana narina*	VU
第４次 2015：	ハナサキガエル	*Odorrana narina*	VU
第４次：	ハナサキガエル	*Odorrana narina*	VU
第３次：	ハナサキガエル	*Rana narina*	VU
第２次：	ハナサキガエル	*Rana narina*	VU
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠB類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 千木良芳範・当山昌直，2017．ハナサキガエル．沖縄県環境部自然保護課（編）改定・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版（動物編）－レッドデータおきなわ－，p. 221-222．沖縄県環境部自然保護課，那覇．
- Matsui, M., 1994. A taxonomic study of the *Rana narina* complex, with description of three new species (Amphibia: Ranidae). Zool. J. Linn. Soc., 111: 385–415.
- 松井正文，2021．ハナサキガエル．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 58-59．サンライズ出版，彦根．
- 松井正文・前田憲男，2018，日本産カエル大鑑．文一総合出版，東京．
- Matsui, M., T. Shimada, H. Ota, and T. Tanaka-Ueno, 2005. Multiple invasions of the Ryukyu Archipelago by Oriental frogs of the subgenus *Odorrana* with phylogenetic reassessment of the related subgenera of the genus *Rana*. Mol. Phylogenet. Evol., 37: 733–742.
- 森哲・戸田守・村山望，2009．リュウキュウアカガエルとハナサキガエルの繁殖日の12年間にわたる年変動．Akamata，20: 19‐23．
- 太田英利，2000．ハナサキガエル．改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物（両生類・爬虫類），pp. 90‐91．環境省自然保護局野生生物課，東京．
- 宇都宮泰明・宇都宮妙子，1983．南西諸島のカエルの卵および幼生について．広島大学生物生産学部紀要，22: 255‐270．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Odorrana narina has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Odorrana narina* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater,

	Upper river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Small river
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	—



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

リュウキュウアカガエル

***Rana ulma* Matsui, 2011**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧Ⅱ類（VU）　D2

基準 A: ―	基準 B: ―	基準 C: ―	基準 D: VU	基準 E: ―

D2．生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている。

【判断理由】

本部半島や名護の山地の小さな隔離個体群は、かつてはもっと広く生息していたものの残存個体群と思われ、いつ消滅してもおかしくない。生息地周辺の森林環境は良好に見えるが、それでも小規模な個体群となっている事実は、森林環境の劣化以外にも本種を減少させる要因が存在することを示唆している。したがって、本種の生息域がさらに減少していく懸念は払拭できない。久米島のものも徐々に数が減っているという情報がある。これらの状況を勘案すると、沖縄島、久米島ともに、本種の安定した生息地の面積はかなり限られていると見なされるべきである。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

沖縄諸島の固有種で、沖縄島の北部と久米島の山地に生息する。アマミアカガエルに似るが、相対的に後肢長が短く、背側線隆条が弱いことなどで区別できる。山地から丘陵地の森林地域に生息し、冬季に源流域の流れの緩い流れなどで繁殖する。繁殖期が終わると林床に分散する。森林環境の改変により、徐々に分布域は狭まっている。名護市や本部半島に孤立集団と思われる集団が残存しており、消滅が危ぶまれている。

基礎情報

【形態】

アマミアカガエルと似るが、相対的に眼径小さく四肢が短い。また、水掻きの発達がやや悪いこと、背側線隆条が弱いこと、膝関節を折り曲げた状態で後肢を前方に向けたとき、膝が前肢基部に届かないことでアマミアカガエルと区別できる。全長はオスで 33～39 mm、メスでは 42～51 mm。背面は淡褐色または赤褐色で肩甲部に逆 V 字の黒斑がある。上唇には明瞭な白条がある。腹面は白色ないし象牙色で、淡赤褐色の模様がある。2 島の個体群は遺伝的に明確に分化している。

【生活史】

沖縄島のものでは 12 月に、おもに渓流源流の流速が緩やかな水場で産卵する。卵は少数ずつ産み出され大きな卵塊とはならないが、産卵数の多い場所では複数のペアによって底質に産み付けられた卵がマット状に広がった状態になることもある。捕食者としてガラスヒバァやヒメハブなどのヘビ類のほか、ナミエガエル、ハシリグモなどが報告されている。

【生息環境】

山地の森林に生息し、流れの緩い源流部で繁殖する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(4) 河川・湿地地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

沖縄島の北部山地と久米島に固有である。久米島では宇江城山系と南部のアーラ岳山系の両方に分布している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

沖縄島では本部半島と名護市でも見つかっているが、その範囲は狭く、孤立個体群として小集団化していると考えられる。久米島のアーラ岳山系と宇江城岳山系の個体もそれぞれ集団サイズが小さくなっている可能性がある。

【生息地の現況】

農地開発や林道の敷設により、生息に適した環境は徐々に狭まっている。沖縄島北部の名護市や本部半島の生息地周辺には外来種のマングースが高い密度で生息している。

【個体数の現況】

具体的なデータはないが、生息環境の縮小に伴い、数は減っていると思われる。特に名護市や本部半島では産地は極限まで狭まっている可能性が高い。久米島の 2 つの山系それぞれで産卵期に目撃される個体数が少なくなっていることから、同島でも個体数は徐々に減っていると考えられる。

存続を脅かす要因

農地開発や林道の敷設・拡張による生息地の縮小や繁殖場の消失がおもな圧迫要因と考えられる。沖縄島の個体群についてはマングースの捕食による影響が大きいと考えられる。久米島個体群はウシガエルによる捕食の影響も懸念される。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，圃場整備，ダム・河川工作物建設，捕食（外来種による），分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，圃場整備，ダム・河川工作物建設，捕食（外来種による），分布・産地局限

特記事項

アマミアカガエルとともにツシマアカガエルの姉妹群をなすことから、琉球列島の陸生生物相の成因や同地域の地史を考えるうえで貴重な存在といえる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	リュウキュウアカガエル	*Rana ulma*	NT
第４次 2019：	リュウキュウアカガエル	*Rana ulma*	NT
第４次 2018：	リュウキュウアカガエル	*Rana ulma*	NT
第４次 2017：	リュウキュウアカガエル	*Rana ulma*	NT
第４次 2015：	リュウキュウアカガエル	*Rana ulma*	NT
第４次：	リュウキュウアカガエル	*Rana ulma*	NT
第３次：	リュウキュウアカガエル	*Rana okinavana*	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Matsui, M,, 2007. Unmasking *Rana okinavana* Boettger, 1895 from the Ryukyus, Japan (Amphibia : Anura : Ranidae. Zool. Sci., 24 (2): 199-204.

- Matsui, M., 2011. On the brown frogs from the Ryukyu Archipelago, Japan, with descriptions of two new species (Anphibia, Anura). Curr. Herpetol., 30 (2): 111-128.
- 松井正文，2021．リュウキュウアカガエル．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 65-66．サンライズ出版，彦根．
- 松井正文・前田憲男，2018．日本産カエル大鑑．272p．文一総合出版，東京．
- 森哲，2013．ナミエガエルによるリュウキュウアカガエルの捕食例．Akamata，24: 8．
- 富永篤，2017．リュウキュウアガカエル．沖縄県環境部自然保護課（編）改定・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版（動物編）－レッドデータおきなわ－，226p．沖縄県環境部自然保護課，那覇．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Rana ulma has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Rana ulma* is listed as VU under criteria D2.

D2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Field preparation, Dam/River structures construction, Predation (by alien species), Limited distribution
Law designation status for conservation	―



執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ヒダサンショウウオ

***Hynobius kimurae* Dunn, 1923**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②③				
基準 A:　—	基準 B:　VU 未満	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
幼生の生息する山地森中の小渓流は、人為的な環境改変、ニホンジカによる森林荒廃、降水量の極端な増減による地形変化などによって、近年とくに悪化している。

③過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。
【判断理由】
近年までオークション出品やペットショップでの販売のために卵、幼生、成体共に乱獲されていた。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は本州を代表する流水産卵性の種であったが、近年の分類の変更により、分布域は南部を除く中部地方から中国地方にかけてとなった。山地森林の小さな渓流付近で生活するが、人為的な環境改変、ニホンジカによる森林荒廃、降水量の極端な増減による渓流環境の悪化によって個体数が減少している。

協力者:　見澤康充（建設環境研究所）

基礎情報

【形態】

全長 102～175 mm、頭胴長 57～102 mm。分布域の西端の中国地方では大形。鋤骨歯列は深い U 字型で、尾は円筒形。背面は紫褐色で黄色の斑点があり、腹面には斑点がない。肋条数は多くは 13 本。四肢は短く、体側に沿って伸長すると前後肢は 0.5～3 肋鰓分、多くは 1.5 肋鰓分重なり合う。後肢は普通 5 趾性。尾は円筒形。背面は紫褐色で黄色の斑点があり、腹面には斑点がない。

【生活史】

1～4 月頃に源流近くの水中で岩石下面に虹色光沢のある強靭な卵嚢対を産み付ける。1 卵嚢中の卵数は 11-47 個。幼生の多くは年内に変態するが、幼生越冬が普通の地域もある。マホロバサンショウウオ、チュウゴクブチサンショウウオと混生する地域もある。

【生息環境】

山地森林の小さな渓流付近で生活する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

現在同様、南部を除く中部地方から中国地方にかけて分布していたものと考えられる。

現在の生息状況

【分布域の現況】

愛知県西部・長野県・新潟県以西の本州の山地森林に生息する。産地の標高は 35-1800 m。

【生息地の現況】

一部地域で減少している。林道工事や治山事業に伴う側溝の設置により、落下乾燥死する例があったが、近年はニホンジカの食害による森林荒廃、風力発電開発などに加え、特に小雨による渓流の渇水、台風接近に伴う豪雨などによる渓流への土砂流失や倒木の増加による生息環境の悪化が深刻である。

【個体数の現況】

京都市内など一部地域で、幼生の生息個体数が減少している。

存続を脅かす要因

林道工事や治山事業に伴う側溝の設置による落下乾燥死。ニホンジカの食害による森林荒廃、風力発電開発。降水量減少による渓流の渇水、台風接近に伴う豪雨による渓流への土砂流失や倒木の増加。かつては一部地域で食用・薬用とされたが現在はほとんど行われ

ていない。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，スキー場，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，交通事故，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（在来種による），自然災害，競争/競合（外来種による），食用・薬用採取
	（現在）	森林伐採，スキー場，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，交通事故，水質汚濁，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（在来種による），自然災害，競争/競合（外来種による），シカ食害，気候変動

特記事項

比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義ヒダサンショウウオ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヒダサンショウウオ	*Hynobius kimurae*	NT
第４次 2019：	ヒダサンショウウオ	*Hynobius kimurae*	NT
第４次 2018：	ヒダサンショウウオ	*Hynobius kimurae*	NT
第４次 2017：	ヒダサンショウウオ	*Hynobius kimurae*	NT
第４次 2015：	ヒダサンショウウオ	*Hynobius kimurae*	NT
第４次：	ヒダサンショウウオ	*Hynobius kimurae*	NT
第３次：	ヒダサンショウウオ	*Hynobius kimurae*	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【埼玉県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類，【新潟県】準絶滅危惧(NT)，【富山県】準絶滅危惧(NT)，【石川県】地域個体群(LP)(宝達山系以北のヒダサンショウウオ)，【福井県】県域準絶滅危惧，【山梨県】要注目種(N)，【長野県】準絶滅危惧(NT)，【岐阜県】準絶滅危惧，【愛知県】絶滅危惧ⅠB 類(EN)，【三重県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【滋賀県】希少種，【京都府】絶滅危惧種，【大阪府】VU，【兵庫県】B ランク，【奈良県】絶滅寸前種，【鳥取県】準絶滅危惧(NT)，【島根県】準絶滅危惧(NT)，【岡山県】絶滅危惧Ⅱ類，【広島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【山口県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 秋田喜憲，2010．宝達山系におけるサンショウウオ類の生態と現状．両生類誌， 29: 27-29.
- Matsui, M., Y. Misawa, K. Nishikawa, and S. Tanabe. 2000. Allozymic variation of *Hynobius kimurae* Dunn (Amphibia, Caudata). Comp. Bioch. Physiol. B, 125(1): 115-125.
- 松井正文・見澤康充，2021．ヒダサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 11，サンライズ出版，彦根.
- Misawa, Y. and M. Matsui, 1997. Larval life history variation in two populations of the Japanese salamander *Hynobius kimurae* (Amphibia, Urodela). Zool. Sci., 14(2): 257-262.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius kimurae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius kimurae* is listed as NT under criteria ②③.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

③There is significant pressure from over-harvesting.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Ski resort development, Land development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Vehicle collision, Water pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by native species), Natural disasters, Competition (with alien species), Deer feeding damage, Climate change
Law designation status for conservation	―



執筆者:	松井正文（京都大学）
Author:	Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

トウホクサンショウウオ

***Hynobius lichenatus* Boulenger, 1883**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②③

基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
近年、どの県でも土地利用の変化など、生息条件の種々の悪化にともなって分布域が狭まっているとされている。

③過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。
【判断理由】
ペット業者や愛好家等によって乱獲され、売買されている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

東日本に広域分布する普通種であったが、環境悪化に伴って、各地で個体群が減少している。

基礎情報

【形態】

全長は雄で 75～131（平均 110）mm、雌で 89～127（平均 105）mm 程度。肋条数は雌雄とも多くは 12 本、鋤骨歯列はU字形のことが多い。四肢は長く、体側に沿って伸長すると前後肢は雄で多くは 0.5 肋鰓分分離、雌で 0.5 肋鰓分会合する。後肢第 5 趾は退化していることが多い。尾は後方に向かって側偏する。背面は褐色で青白色の小さな斑点をもつことが多い。腹面は灰白色で、細かい暗点を密布する。

【生活史】

繁殖は 1～6 月に、渓流の淀みや水路、池の流入口など、ゆるい水流のある場所で行われ、曲がったひも状で透明、外被に明瞭な条線のある卵嚢対を産み出す。1 雌の産卵数は 20～100 個。卵は動物極が黒褐色で、直径 2.4～3.5 mm。幼生越冬して変態することも多い。3～7 歳で性的成熟に達するらしい。

【生息環境】

海岸近くから標高 1,500 m まで、人里近くの低地二次林から、山地の混交樹林にまで生息し、ゆるい流水のある場所を必要とする。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，草地，農業用水路，湿地・湿原・細流，河川上流域，ため池・池沼 【陸域_平地部】森林，草地，湿地・湿原，市街緑地
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

東北地方および新潟県・群馬県・栃木県という広い範囲から分布報告があり、茨城県からも記録はある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

茨城県からの記録は怪しい。分布域の地方版 RDB によれば、近年、どこでも土地利用の変化など、種々の環境悪化にともなって狭まっていると思われる。

【生息地の現況】

森林伐採、水路整備、農薬汚染などによって大きな影響を受けている。例えば、宮城県仙台市近郊では多数の産卵池が、都市開発により消滅したとされる。

【個体数の現況】

不明だが、福島など各地で減少傾向が著しいという。

存続を脅かす要因

森林伐採、林道工事とコンクリート U 字溝の設置、湿地の乾燥化などが生存に悪影響を

及ぼしており、外国産肉食魚類による食害に加え、外来種アライグマを通しての寄生虫感染も危惧されている。またペット業者や愛好家による乱獲も行われている。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，感染症/病原菌，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

群馬県の天然記念物に指定されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	トウホクサンショウウオ	*Hynobius lichenatus*	NT
第４次 2019：	トウホクサンショウウオ	*Hynobius lichenatus*	NT
第４次 2018：	トウホクサンショウウオ	*Hynobius lichenatus*	NT
第４次 2017：	トウホクサンショウウオ	*Hynobius lichenatus*	NT
第４次 2015：	トウホクサンショウウオ	*Hynobius lichenatus*	NT
第４次：	トウホクサンショウウオ	*Hynobius lichenatus*	NT
第３次：	トウホクサンショウウオ	*Hynobius lichenatus*	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【青森県】希少野生生物(C ランク)，【岩手県】留意，【宮城県】準絶滅危惧(NT)，【山形県】準絶滅危惧(NT)，【福島県】準絶滅危惧(NT)，【栃木県】要注目，【群馬県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【新潟県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 本郷敏夫，2016．両生類概説．秋田県の絶滅の恐れのある野生生物．秋田県版レッドデータブック 2016，pp. 69-70．秋田県．

- 松井正文，2021．トウホクサンショウウオ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 23．サンライズ出版，彦根．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius lichenatus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius lichenatus* is listed as NT under criteria ②③.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

③There is significant pressure from over-harvesting.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Grassland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream, Upper river basin, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Wetland, Urban green area
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Transportation infrastructure construction, Disease, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	—



執筆者:	松井正文（京都大学）
Author:	Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

クロサンショウウオ

***Hynobius nigrescens* Stejneger, 1907**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
どの地域でも生息環境は悪化して個体数は減少している。新潟県周辺では 10 年間で産卵数が 2 割減少したことが報告されている。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
水田整備、農薬散布、ゴルフ場化、観光地化、森林伐採、林道工事など生息地の破壊，放流された外来魚による幼生への食害が生存に悪影響を及ぼしている。岩手県、岐阜県、石川県などでは生息環境の劣化・消失により生息状況が悪化した事例が知られている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種はトウホクサンショウウオとともに、東日本の代表的サンショウウオであったが、各種の環境劣化によって個体数・分布域が減少している。

基礎情報

【形態】

全長は雄で 71～157 mm、平均 146 mm 程度、雌で 108～147 mm、平均 131 mm 程度。鋤骨歯列はU字型のことが多い。四肢は長く、前後肢を体側に沿って折り返すと、前後肢は重なり合う。尾は長くて側偏する。背面は褐色か緑褐色で濃褐色の小さな斑点をもつことがある。卵嚢は紡錘型で外被は白いのが普通だが透明に近いこともある。

【生活史】

2～7 月頃に繁殖する。産卵数は 20～70 個。幼生は貪欲でよく共食いをし、幼生で越冬することも多い。新潟県産の 1 個体群では、成熟して繁殖に参加するのは雄で 5～6 歳、雌で 7～8 歳の個体が多く、年老いた個体は 10 年以上生存して繁殖に参加すると推定された。

【生息環境】

池、沼、水路など、比較的水深のある水体で繁殖する。

生息環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地 低標高地】森林，田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流，ため池・池沼 【陸域_平地部 海岸部】森林，田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，ため池・池沼
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域

【分布域】

東北・北陸・近畿（滋賀県は西限）と、関東・中部の一部に分布し、海岸近くから高山の標高 2,500 m 以上にまで生息する。埼玉県の記録は誤りの可能性が高い。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域は過去と大きく違わないが、どの地域でも生息環境は悪化して個体群は減少している。佐藤（1943）が分布地点に挙げた長野県諏訪郡平野村（現在岡谷市）は本種の南限の一部であるが、現在諏訪湖の近傍の低地では生息環境がなくなり、かつて繁殖場所であったと思われる池は鯉等の養殖に用いられていることが多い。

【生息地の現況】

岩手県下では、繁殖池の水質汚濁、魚の養殖への利用や、森林伐採によって湿地や沼の水枯れが生じ、繁殖池周辺の開発整備によって、周囲の森林生息域と分断されて産卵数が減少した。岐阜県下でも、多くの生息地で湿原の乾燥化、夏緑樹林帯の減少、道路などの建設、改修によって生息環境が悪化・消失している。また、石川県下でも平野部で開発によって生息域が一部減少している。

【個体数の現況】

新潟県下を中心とした地域の 10 年間の繁殖状況の調査結果によれば、特に低地では産

卵数が 2 割ほど減少したという報告があった。現在も個体数は減少の方向に動いていると推察される。

存続を脅かす要因

水田整備、農薬散布、ゴルフ場化、観光地化、森林伐採、林道工事など生息地の破壊、放流された外来魚による幼生への食害が生存に悪影響を及ぼしている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，圃場整備，ゴルフ場，土地造成，交通インフラ建設，農薬汚染/化学物質汚染，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	森林伐採，圃場整備，ゴルフ場，土地造成，交通インフラ建設，農薬汚染/化学物質汚染，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による）

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	クロサンショウウオ	*Hynobius nigrescens*	NT
第４次 2019：	クロサンショウウオ	*Hynobius nigrescens*	NT
第４次 2018：	クロサンショウウオ	*Hynobius nigrescens*	NT
第４次 2017：	クロサンショウウオ	*Hynobius nigrescens*	NT
第４次 2015：	クロサンショウウオ	*Hynobius nigrescens*	NT
第４次：	クロサンショウウオ	*Hynobius nigrescens*	NT
第３次：	クロサンショウウオ	*Hynobius nigrescens*	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【青森県】希少野生生物(C ランク),【岩手県】準絶滅危惧,【宮城県】絶滅のおそれのある地域個体群(LP),【山形県】準絶滅危惧(NT),【福島県】準絶滅危惧(NT),絶滅のおそれのある地域個体群(LP)(阿武隈高地のクロサンショウウオ),【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類,【栃木県】準絶滅危惧(C ランク),【群馬県】準絶滅危惧(NT),【埼玉県】情報不足(DD),【新潟県】準絶滅危惧(NT),【福井県】県域準絶滅危惧,【長野県】準絶滅危惧(NT),【岐阜県】絶滅危惧Ⅱ類

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 秋田喜憲，2010．宝達山系におけるサンショウウオ類の生態と現状．両生類誌，29: 27-29.
- Matsui, M., H. Iwasawa, H. Takahashi, T. Hayashi, and M. Kumakura, 1992. Invalid specific status of *Hynobius sadoensis* Sato: Electrophoretic evidence (Amphibia: Caudata). J. Herpetol., 26(3): 308-315.
- Matsui, M., Yoshikawa, N., Aoki, G., Sasamori, K., Matsui, Mm., Tanabe, S., Misawa, Y., and Nishikawa, K., 2020. Wide distribution but low differentiation: Phylogenetic relationships and phylogeography of *Hynobius nigrescens* (Amphibia: Caudata). Zool. Sci., 37(6): 529-537.
- Sato, I., 1940. On *Hynobius* from Sado Island. Bull. Biogeogr. Soc. Jpn., 10(11):163-170.
- 関慎太郎・水戸直．2023．滋賀県初記録のクロサンショウウオについて．爬虫両棲類学会報，2023(2):165‐169.
- 高橋 久，2001．最近 10 年間でのクロサンショウウオの減少と産卵環境の変化．両生類誌，6:1-6.
- 高橋 久，2008．新潟県弥彦角田山系クロサンショウウオの産卵状況．両生類誌，18: 31.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius nigrescens has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius nigrescens* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area, Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】Forest, Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Reservoir/Pond
Threat types:	Logging and wood harvesting, Field preparation, Golf course development, Land development, Transportation infrastructure construction, Pesticide/Toxic chemical pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	―



執筆者:	松井正文（京都大学）
Author:	Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

タダミハコネサンショウウオ

***Onychodactylus fuscus* Yoshikawa et Matsui, 2014**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
只見町内の 1 カ所の生息地が人為的な改変により繁殖が確認できなくなった。福島県只見町入叶津地区から新潟県三条市笠堀地区にかけて国道 289 号線開通工事が続けられており、数年以内の開通を目指している。建設地周辺では工事の影響により生息環境が悪化した沢もある。開通後は路上での轢死が増えることも考えられる。新潟県内の生息は標高 300 m 以下の低山地でも確認されており、開発などの人間活動の影響を強く受ける恐れがある。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

全長 12～17 cm の小型サンショウウオ。一般に背面の斑紋を欠き、ほぼ一様に暗褐色で、個体によって不明瞭な黄褐色の斑点を散布する程度。狭義のハコネサンショウウオと同所的に分布する。福島県只見町と新潟県の越後山地に固有の種で、標高 300～400 m 以上の山地渓流とその周辺のブナなどからなる落葉広葉樹林に生息する。生息地の状況はおおむね安定しているが、一部の生息地では道路工事や砂防ダム建設による悪影響を受けている可能性が高い。他に森林伐採や河川改修による生息環境の悪化も懸念される。

基礎情報

【形態】

全長 12～17 cm 、体型は細長くて尾が長く、頭胴長に対する尾長の比率（尾率）はオスで平均 122%、メスで平均 100%程度。同所的に分布する狭義のハコネサンショウウオに比べるとややずんぐりしており尾率は小さい。一般に斑紋を欠くのが大きな特徴で、背面はほぼ一様に暗褐色で、個体によって不明瞭な黄褐色の斑点を散布する程度で帯状にはならない。 体側部から腹面にかけて白点を持つものが多い。幼生の外見上の識別は難しいが、3 年目の変態時期が近い幼生では成体と同じく模様のない暗褐色の体色を呈するものが多い。

【生活史】

繁殖期は晩秋から初冬で、只見町内のある場所では 11 月上旬から中旬ごろに繁殖個体の集結と産卵が観察されている。同所的に生息する狭義のハコネサンショウウオは初夏に産卵するが、本種の初夏産卵は確認されていない。産卵環境は山中の斜面や渓流源流部などから湧出する湧水内部の地下水脈中で、まれにその周辺の岩石の下にも産み付けられる。メスは 1 対の卵嚢を産み、一腹卵数は 13～16 個、卵はクリーム色で卵径は 5～6 mm 程度。幼生は初夏までに孵化して渓流中に流れ出すと思われる。幼生期間は同属の他種と同様に 3 年程度と推定される。

【生息環境】

標高 270～400 m 以上のブナなどの落葉広葉樹からなる原生的な森林と、その中を流れる渓流に主に生息する。スギやヒノキなどの植林地にも生息する。湧水地の周辺でもみられる。幼生は下流の川幅 5 m ほどの河川本流部でもみられるが、小規模な枝沢に多く生息する傾向がある。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】裸地，森林，湿地・湿原・細流，岩壁・ガレ場（石灰岩地等），河川源流域 【陸域_平地部】森林
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

福島県只見町内では只見川左岸側の越後山地の各渓流に広く分布するが右岸側の産地は 3 カ所確認されているに過ぎない。新潟県側では魚沼市、三条市、長岡市、加茂市、五泉市、阿賀町で確認されている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域は新種記載当時よりも広がっているが、これはその後の生息状況調査が進んだためである。分布は従来福島県只見町の只見川左岸側の越後山地にほぼ限られていたが、近年の調査で只見町を南限、東限として新潟県五泉市（北限）、長岡市（西限）の範囲から知

られるようになった。しかしその面積は 600 平方キロメートル程度に過ぎず、これ以上の大幅な分布域拡大の可能性は低いと考えられる。

【生息地の現況】

只見町内の少なくとも 1 カ所の産卵地が水利用目的で改変され、その後繁殖が確認されていない。只見町内のその他の生息地の状況はおおむね安定しているが、道路工事の影響が強く懸念される生息地がある。三条市内の生息地も道路工事の影響が懸念される。新潟県側では魚沼市の生息地の状況は安定しているが、近年発見された生息地では標高 300 m 以下の低山地でも確認されており、今後の開発等の影響に留意する必要がある。

【個体数の現況】

具体的な個体数及びその変動については不明だが、生息環境の悪化が一部で見られるためやや減少傾向にあるものと思われる。

存続を脅かす要因

生息環境となる森林の伐採、河川改修による幼生の生息環境の悪化、道路建設や砂防ダム建設による生息環境の悪化と連続性の喪失（移動阻害）。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設
	（現在）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設

特記事項

福島県只見町以外の地域では調査が進んでいなかったが、新潟県内で新たに 4 地点が富森・吉川（2024）により報告された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	タダミハコネサンショウウオ	*Onychodactylus fuscus*	NT
第４次 2019：	タダミハコネサンショウウオ	*Onychodactylus fuscus*	NT
第４次 2018：	タダミハコネサンショウウオ	*Onychodactylus fuscus*	NT
第４次 2017：	タダミハコネサンショウウオ	*Onychodactylus fuscus*	NT
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【福島県】準絶滅危惧(NT)，【新潟県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 富森祐輔・吉川夏彦，2024．新潟県におけるタダミハコネサンショウウオの新産地について．爬虫両棲類学会報，2024: 147-153.
- 吉川夏彦，2015a．最近の日本産ハコネサンショウウオ属の分類に関する雑記．両生類誌，27: 1-8.
- 吉川夏彦，2015b．只見町に生息するタダミハコネサンショウウオについて．只見の自然 只見町ブナセンター紀要，4: 2-6.
- 吉川夏彦，2022．沼ノ平地域の爬虫類・両生類相．只見の自然 只見町ブナセンター紀要，10: 96-104.
- Yoshikawa, N. and M. Matsui, 2014. Two new salamanders of the genus *Onychodactylus* from eastern Honshu, Japan (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). Zootaxa, 3866: 53-78.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Onychodactylus fuscus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Onychodactylus fuscus* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Bare area, Forest, Wetland/Marsh/Stream, Cliff/Talus area (e.g. limestone area), River headwater 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction
Law designation status for conservation	―





執筆者:	吉川夏彦（国立科学博物館）
Author:	Natsuhiko Yoshikawa

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

バンダイハコネサンショウウオ

***Onychodactylus intermedius* Yoshikawa et Matsui, 2014**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　—	基準 B:　VU 未満	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
茨城県北部では森林伐採や太陽光発電施設の建設の影響で個体数が減少した地域がある。福島県郡山市では太陽光発電施設建設による生息地破壊により減少した。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
茨城県北部の生息地は元来分布が不連続で分断化しているが、近年の太陽光発電所建設や森林の皆伐で生息地の環境は悪化している。福島県郡山市熱海町では山麓部の生息地での太陽光発電所の建設により生息環境の一部が破壊された。同じく郡山市と猪苗代町境界から南に延びるタイプ産地付近の稜線上にも風力発電施設建設の計画があり生息条件が大きく悪化する懸念がある。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種はハコネサンショウウオに含められていたが、主に遺伝的調査の結果、独立種とされた。東北地方南部、茨城県北東部、新潟県北部に分布し、冷涼で湿潤な山地渓流周辺の森林の林床に生息する。生息地の一部周辺では太陽光発電所建設により生息環境が悪化している。

基礎情報

【形態】

全長 12～18 cm、体形は細長く、背面に暗褐色から黄土色、黄色の斑紋や縦帯をもつ。繁殖期には雌雄ともに指先に黒い爪があらわれる。尾は雌雄ともに頭胴長より長い。幼生は頭は角ばっており、外鰓は小さく、尾びれの丈は低く、四肢に膜びれをもち、指先には黒いかぎ爪をもつ。

【生活史】

冷涼で湿潤な山地渓流周辺の森林の林床に生息する。渓流源流部の地下水中で産卵するが、産卵期については情報が少ない。新潟県北部では初夏に繁殖期の特徴である黒爪を持った雄が捕獲されており初夏産卵が示唆されるが、福島県大玉村では 12 月に黒爪がある抱卵メスが確認されており冬産卵の可能性がある。阿武隈山地のある地点では 8 月中旬と 11 月上旬にふ化直前の卵嚢が発見されており、この地点での夏冬の年 2 回産卵の可能性が示唆されている。孵化した幼生は渓流に泳ぎ出し、3 年ほどかけて成長し、変態・上陸する。上陸から成熟までの期間は不明。

【生息環境】

山地渓流性で、太平洋側では概ね標高 400 m 以上の標高域でみられるが、日本海側や阿武隈山地北部では 100 m 程度の比較的低標高の山地にも生息する。高山帯でもみられる場合がある。暑さや乾燥に弱く、落葉広葉樹の原生的で冷涼湿潤な森林を好むが、スギ植林地などを流れる渓流でもみられる。幼生はそういった森林を流れる渓流の中で生活する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，草地，湿地・湿原・細流，洞窟・地下浅層・地下水域，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

東北地方南部（山形県、宮城県南部、福島県中北部・東部）、茨城県北東部、新潟県北部に分布する。北限は日本海側の朝日山地では山形県酒田市付近、奥羽山地脊梁部では蔵王山南麓。南限は太平洋側では茨城県日立市付近。標高およそ 400 m 以上のところに多いが、阿武隈山地北部の太平洋岸や日本海側の低山地では比較的低標高の場所にも生息し、標高 100 m 前後の場所にも生息する場合がある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域の現況は過去に比べて大きな変化はないが、新潟県北部は未調査地が多く、分布を接し側所的に分布する狭義のハコネサンショウウオとの分布境界が明らかでない。福島県内では喜多方市～会津若松市、白河市を結ぶ地域が、茨城県内では久慈川付近が境界となる。

【生息地の現況】

比較的安定している地域が多いが、生息地上流部で開発が計画されている地域があり影響が懸念される。低標高で傾斜が緩やかな阿武隈山地や山裾部の生息地では太陽光発電所建設により渓流周辺の環境が悪化している場所がある。

【個体数の現況】

全体としては近年の個体数の大きな減少はないと思われるが、生息環境の悪化で局所的に減少した場所がある。分布南限に近い茨城県内の太平洋岸では個体数が減少しているとみられる地域もある。

存続を脅かす要因

森林伐採、植林地の皆伐、砂防堰堤建設等の治山工事、河川改修、道路・林道建設、ダム建設、太陽光発電施設建設、風力発電施設建設。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設
	（現在）	森林伐採，河川開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，発電施設建設

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	バンダイハコネサンショウウオ	*Onychodactylus intermedius*	NT
第４次 2019：	バンダイハコネサンショウウオ	*Onychodactylus intermedius*	NT
第４次 2018：	バンダイハコネサンショウウオ	*Onychodactylus intermedius*	NT
第４次 2017：	バンダイハコネサンショウウオ	*Onychodactylus intermedius*	NT
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【宮城県】準絶滅危惧(NT)，【山形県】準絶滅危惧(NT)，【福島県】準絶滅危惧(NT)，【茨城県】絶滅危惧Ⅱ類，【新潟県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 永山駿・平澤桂・稲葉修，2020．福島県川内村におけるバンダイハコネサンショウウオ *Onychodactylus intermedius* 卵嚢の初記録．爬虫両棲類学会報，2020(2):165‐168．
- 吉川夏彦，2015． 最近の日本産ハコネサンショウウオ属の分類に関する雑記．両生類誌，27: 1-8．
- Yoshikawa, N. and M. Matsui, 2014. Two new salamanders of the genus *Onychodactylus* from eastern Honshu, Japan (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). Zootaxa, 3866: 53-78.
- Yoshikawa N., M. Matsui, and K. Nishikawa, 2012. Genetic structure and cryptic diversity of *Onychodactylus japonicus* (Amphibia, Caudata, Hynobiidae) in northeastern Honshu, Japan, as revealed by allozymic analysis. Zool. Sci., 29: 229-237.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Onychodactylus intermedius has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Onychodactylus intermedius* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Grassland, Wetland/Marsh/Stream, Cave/Shallow underground/Subterranean water body, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Power plant construction
Law designation status for conservation	―





執筆者:	吉川夏彦（国立科学博物館）・松井正文（京都大学）
Author:	Natsuhiko Yoshikawa and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　イモリ科 Salamandridae　　日本固有

アマミシリケンイモリ

***Cynops ensicauda ensicauda* (Hallowell, 1861)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②③

基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
生息地の大部分は良好な状態で保たれているが、市街地付近には現在はほとんど見られなくなっている。森林内でも林道整備、基地建設、森林伐採が行われており、局所的には生息地が破壊されている。世界自然遺産に登録された地域であり、観光やエコツアーなどでの森林環境の利用が増加しており、これに伴う環境の破壊、轢死の増加が懸念される。

③過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。
【判断理由】
最近の有尾類の飼育ブームの飼育動物として頻繁に採集されて、安価な価格で売買されており、他の種よりも高い捕獲圧にさらされている。長寿命な動物であり、再生産力はあまり高くない動物と考えられ、捕獲圧による影響は大きい。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は奄美諸島の 5 島に広く分布しているが、市街地ばかりでなく森林でも生息環境が悪化している。加えて、飼育・販売目的で大量に採集され、販売されているため、個体数が激減している。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長はオスが 50～75 mm、メスで 60～80 mm 程度。背面は黒褐色で、背側部に朱色から橙色ないし黄色の不連続な線状の模様を持つことが多い。灰色の細かい多数の斑点が背面に現れることもある。腹面は朱色から橙色ないし黄色で、黒褐色の不規則な斑紋がある。四肢の指の下面も橙色ないし黄色。

【生活史】

一年を通して湿潤な林床や草地、湿地の水中などに生息し、繁殖はため池などの止水や流れの遅い流水で、おもに 11～6 月の間に行われる。この時期オスは水中でメスを待ち、メスが現れると儀式的な行動を通して精子の入った袋（精包）をメスに渡す。幼生はふ化後 3～4 ヶ月で変態・上陸するが、成熟までには数年を要すると思われる。沖縄諸島のオキナワシリケンイモリとは遺伝的にも形態的にも大きく分化している。

【生息環境】

奄美諸島の計 5 島に分布する。生息環境は低地の湿地、池、水田から山地の渓流までと幅広い。土地開発にともなう生息域・繁殖場所の縮小、側溝等の敷設にともなう繁殖集団の分断・墜落死亡個体の増加、観賞・飼育用としての売買目的の成熟個体の乱獲などが、個体数減少の主な原因と考えられる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流，河川源流域，河川上流域，河川中流域，湖・ダム湖 【陸域_平地部】森林，河川中流域，河口域
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

奄美諸島の 6 島（奄美大島、加計呂麻島、請島、与路島、枝手久島、江仁屋離）の合計 809.2 km²に低地から山地まで幅広く分布していた。

現在の生息状況

【分布域の現況】

奄美諸島の自然環境は良好な状態で保たれているところが多いが、市街地付近には現在はほとんど見られない。

【生息地の現況】

大部分の生息地は良好な状態で保たれているが、森林内でも林道整備、基地建設、森林伐採が行われており、局所的には生息地が破壊されている。世界自然遺産に登録された地域であり、観光やエコツアーなどでの森林環境の利用が増加しており、これに伴う環境の破壊、轢死の増加が懸念される。市街地付近では水路のコンクリート化が見られ、生息環境は少なくなっている。また、最近の有尾類の飼育ブームの飼育動物として頻繁に採集されて、安価な価格で売買されており、他の種よりも高い捕獲圧にさらされている。

【個体数の現況】

もともと生息地では個体数の多い種ではあるが、現在も比較的多くの個体数が維持されているが、長寿命な動物であり、再生産力はあまり高くない動物と考えられ、捕獲圧や轢死、環境破壊による影響は大きい。

存続を脅かす要因

森林内の林道整備、基地建設、森林伐採による生息地破壊。観光やエコツアーに伴う環境の破壊、轢死。飼育動物としての採集と売買による高い捕獲圧。最近の有尾類の飼育ブームの飼育動物として頻繁に採集されて、安価な価格で売買されており、他の種よりも高い捕獲圧にさらされている。

要因の区分：	（過去）	土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取
	（現在）	土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取

特記事項

これまでは、沖縄県産の別亜種と区分せずに、種シリケンイモリ *Cynops ensicauda* として扱われることが多かったが、沖縄諸島との遺伝的分化程度が大きく、形態的な違いも明瞭なことから、最近では基亜種アマミシリケンイモリ *Cynops ensicauda ensicauda* として扱われるようになった。比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義シリケンイモリ）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	シリケンイモリ	*Cynops ensicauda*	NT
第４次 2019：	シリケンイモリ	*Cynops ensicauda*	NT
第４次 2018：	シリケンイモリ	*Cynops ensicauda*	NT
第４次 2017：	シリケンイモリ	*Cynops ensicauda*	NT
第４次 2015：	シリケンイモリ	*Cynops ensicauda*	NT
第４次：	シリケンイモリ	*Cynops ensicauda*	NT
第３次：	シリケンイモリ	*Cynops ensicauda*	NT
第２次：	シリケンイモリ	*Cynops ensicauda*	NT
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】準絶滅危惧

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 太田英利・岡田滋，2003．爬虫類・両生類．鹿児島県環境生活部環境保護課（編），鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物 動物編．鹿児島県レッドデータブック，pp. 82-116．財団法人鹿児島県環境技術協会，鹿児島．
- 田中聡，1994．瀬底島におけるイボイモリとシリケンイモリの生態についての予備観察．沖縄生物教育研究会誌，26: 13-21．
- 田中聡，2005．シリケンイモリ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）-レッドデータおきなわ-，pp. 140-141．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．
- Tominaga, A., H. Ota, and M. Matsui. 2010, Phylogeny and phylogeography of the sword-tailed newt, *Cynops ensicauda* (Amphibia: Caudata), as revealed by nucleotide sequences of mitochondrial DNA. Mol. Phylogenet. Evol. 54: 910-921.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cynops ensicauda ensicauda has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cynops ensicauda ensicauda* is listed as NT under criteria ②③.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

③There is significant pressure from over-harvesting.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream, River headwater, Upper river basin, Middle river basin, Lake/Dam 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Middle river basin, Estuary
Threat types:	Land development, Transportation infrastructure construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants
Law designation status for conservation	—





執筆者:	富永篤（琉球大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Atsushi Tominaga and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　イモリ科 Salamandridae　　日本固有

アカハライモリ

***Cynops pyrrhogaster* (Boie, 1826)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②③

基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
生息地や出現範囲は、広いが、低地は圃場整備に伴う乾田化、水路のコンクリート化で、例えば、福岡県平野部など各地で個体群自体が消失している。山間部の林縁の水田も離農に伴う放棄水田の増加で、陸地化、乾燥化が進み個体数が減少している。それに加えて、飼育・販売目的の乱獲が散見される。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
全国の平野部で圃場整備に伴う生息環境の悪化、山間部の放棄水田の増加は見られており、全国的に生息環境の劣化や消失が見られる。九州北部の平野部の水田ではほとんどの個体群が消失している。

③過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。
【判断理由】
インターネットサイトなどでは、野外で採集された個体が 100 個体単位で、大量に安価に販売されている事例がかなりの頻度で見られ、高い捕獲圧による圧迫を受けている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

　本種は本州から九州まで広く分布していたが、各地で生息環境が悪化し、加えて、飼育・販売目的で大量に採集され、販売されているため、個体数が激減している。

基礎情報

【形態】

全長 70～140 mm。鋤骨歯列は深い逆 V 字型で、四肢は長く、尾は極度に側偏する。背面は黒褐色で、腹面は赤色に黒色の斑紋がある。雌雄多型が著しく、オスは尾が短く先端は糸状をなし、青白色の婚姻色を生じる。オスの総排出腔開口部は膨大する。

【生活史】

求愛行動（体内受精）は 4～7 月と秋に行われ、どちらの精子も授精能力がある。卵は 1 粒ずつ、水草などに産み付けられる。幼生は水中生活を送ったあと、年内に変態するのが普通。その後は陸上で生活し、3 歳で性的成熟して、水中に留まるようになると考えられている。各地で遺伝的分化が進んでおり、とくに関東・東北産は他地域と大きく異なる。求愛行動にも地域差が見られる。強い神経毒をもつが、鳥類、ウシガエル、マムシが天敵として知られる。

【生息環境】

低地から山地に分布。水田、池、渓流、溝などで生活する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流，河川中流域，ため池・池沼，湖・ダム湖 【陸域_平地部】裸地，森林，草地，河口域，ワンド，農業用水路
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

本州、四国、九州の低地から山地。

現在の生息状況

【分布域の現況】

低地の田んぼや池などから高標高地域の止水環境に広く分布しているが、かつて広く分布していた低地では、圃場整備に伴い、水田の乾田化や用水路のコンクリート化が進み、激減している。また、最近では、林縁部の良好な環境の残された山間部の水田も、放棄水田となっていることが多く、水田跡の陸地化、乾燥化が進み、山間部の水田などでも減少している。

【生息地の現況】

圃場整備、耕作方法の変化、用水路・溝のコンクリート化、農薬散布、水質悪化、乱開発による生息地の消滅、轢死、乱獲などにより、各地で生息数が激減している。

【個体数の現況】

生息地の悪化に加え、飼育・販売目的で大量に採集され、安価に販売されていることもあり、減少傾向にあるのは間違いない。

存続を脅かす要因

変態後、性成熟して水に戻る間の生活場所である草地や森林の開発、成体の生息場所であり、繁殖場所でもある水環境の悪化、消失が最大の脅威である。マムシなど外敵による捕食もあるが、かつては実験用に大量に捕獲され、現在もペット用としての採取がかなりの程度で行われ、脅威となっている。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，草地開発，土地造成，交通事故，水質汚濁，農薬汚染/化学物質汚染，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（在来種による）
	（現在）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，草地開発，土地造成，交通事故，水質汚濁，農薬汚染/化学物質汚染，捕獲・狩猟/園芸採取

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アカハライモリ	*Cynops pyrrhogaster*	NT
第４次 2019：	アカハライモリ	*Cynops pyrrhogaster*	NT
第４次 2018：	アカハライモリ	*Cynops pyrrhogaster*	NT
第４次 2017：	アカハライモリ	*Cynops pyrrhogaster*	NT
第４次 2015：	アカハライモリ	*Cynops pyrrhogaster*	NT
第４次：	アカハライモリ	*Cynops pyrrhogaster*	NT
第３次：	アカハライモリ	*Cynops pyrrhogaster*	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【青森県】希少野生生物(C ランク),【岩手県】留意,【宮城県】絶滅のおそれのある地域個体群(LP),【山形県】準絶滅危惧(NT),【福島県】準絶滅危惧(NT),【茨城県】準絶滅危惧,【栃木県】絶滅危惧Ⅱ類(B ランク),【群馬県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【埼玉県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【千葉県】最重要保護生物(A),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（北多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【神奈川県】絶滅危惧Ⅰ類,【新潟県】準絶滅危惧(NT),【富山県】準絶滅危惧(NT),【福井県】要注目,【山梨県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【長野県】準絶滅危惧(NT),【静岡県】準絶滅危惧(NT),地域個体群(LP)(南伊豆集団),【愛知県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)(渥美種族),準絶滅危惧(NT)(中間種族),

【滋賀県】要注目種，【京都府】要注目種，【大阪府】NT，【兵庫県】要注目種，【奈良県】希少種，【和歌山県】準絶滅危惧(NT)，【鳥取県】その他の保護上重要な種(OT)，【岡山県】準絶滅危惧，【広島県】準絶滅危惧(NT)，【山口県】準絶滅危惧(NT)，【香川県】準絶滅危惧(NT)，【愛媛県】準絶滅危惧(NT)，【高知県】注目種，【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)，【熊本県】準絶滅危惧(NT)，【鹿児島県】準絶滅危惧

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

都道府県条例指定種【埼玉県・愛知県】

参考文献

- 富永篤，松井正文，2021．アカハライモリ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 30-31，サンライズ出版，彦根.
- Tominaga, A., Mf. Matsui, and Mm. Matsui, 2021. Structure and movement of the hybrid zone between two divergent lineages of the Japanese newt *Cynops pyrrhogaster* (Amphibia: Urodela) in Central Japan. Journal of Zoological Systematics and Evolutionary Research, 59(5): 1097-1112.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cynops pyrrhogaster has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cynops pyrrhogaster* is listed as NT under criteria ①②③.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

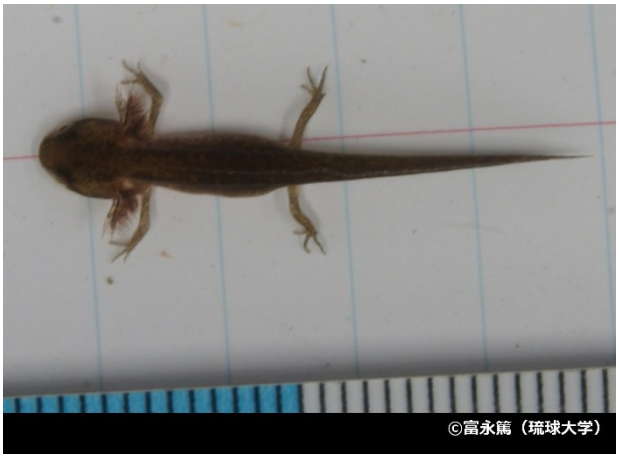
②Habitat conditions are deteriorating.

③There is significant pressure from over-harvesting.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream, Middle river basin, Reservoir/Pond, Lake/Dam 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Bare area, Forest, Grassland, Estuary, Inlet, Agricultural ditch
Threat types:	Lake development, River development, Wetland development, Field preparation, Grassland development, Land development, Vehicle collision, Water pollution, Pesticide/Toxic chemical pollution, Hunting and collecting animals/Gathering plants

Law designation status for conservation	Prefectural Ordinance-Designated Species【Saitama・Aichi】.





執筆者:	富永篤（琉球大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Atsushi Tominaga and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

ムカシツチガエル

***Glandirana reliquia* Shimada, Matsui, Ogata et Miura, 2022**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
各地で減少傾向にあると考えられるが、特に関東地方の低平地では極端に減少しており、二次的な分布の空白域が生じている。都県レベルでは、少なくとも東京都、千葉県、埼玉県で著しい分布の偏りが生じていることが報告されており（東京都，2023; 千葉県，2011; 埼玉県，2018）、その傾向は今後より悪化することが懸念される。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
水田の乾田化や水路のコンクリート化、河川やため池の人工護岸等の環境改変に加え、外来種のウシガエルによる捕食圧も大きな問題となっている。こうした生息環境の悪化は生息地全体で見られるが、特に関東地方の低平地では、生息に適した環境がほとんどなくなりつつある。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種はもともと平地から低山地にかけてさまざまな水辺環境に生息していた種であったが、水田における乾田化や水路のコンクリート化、及び河川やため池における人工護岸等、様々な人為的な環境改変に伴って好適な生息環境が失われたことにより、特に平地において数を減らしつつある。また捕食性の外来種であるウシガエルによる捕食圧も深刻である。こうした減少傾向は分布域の中心に位置する関東平野において特に顕著であり、関東平野の低平地には二次的な分布の空白が生じている。

基礎情報

【形態】

ツチガエル属 *Glandirana* に属する中型のカエルで、頭胴長はメスで 31-54 mm、雄で 29-43 mm。体の背面は暗褐色または灰色がかった暗赤褐色で、不規則な黒い斑点を散布している。雄は単一の鳴嚢をもつ。体表は粒状の突起でおおわれ、胴と四肢の背面には多数の短い縦隆がある。腹面は円い顆粒で密におおわれる。成体の形態はツチガエル *Glandirana rugosa* とよく似ており、頭胴長に対するいくつかの計測値の比率が異なるのみである。幼生の形態も基本的にはツチガエルの幼生に類似しているが、ツチガエルの幼生では全身に皮膚腺が密生しているのに対し、本種の幼生では腹面に皮膚腺の密度が低い、あるいはほとんど見られない部分があることが特徴である。

【生活史】

5 月から 8 月下旬にかけて、水田、池沼、水路、枯渇した河床に残された水たまりなど様々な止水で繁殖するほか、ゆるやかな流れのある水域でも繁殖する。1 年間に複数回産卵する雌も存在する。卵は水田と幹線水路をつなぐ小水路のような、きわめて流れのゆるやかな浅い水域で、植物体に付着させて産み付けられる。栃木県市貝町の河川環境で得られた知見によれば、卵塊の密度は流速の影響を強く受けて決定されていた。繁殖期の終盤に産み付けられた卵から孵化した幼生は通常幼生越冬し、翌年に変態する。

【生息環境】

平野域から低山にかけて、都市の人工的な池から水田、河川、山地渓流、湿地まで様々な水域の近傍に広く生息する。ただし、圃場整備を受けた水田には見られない傾向が強い。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流，河川上流域，河川中流域，ため池・池沼，湖・ダム湖 【陸域_平地部】田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，市街緑地，河川中流域，農業用水路，ため池・池沼
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

本種は、現在では東北地方東部から関東地方、中部地方の一部にかけて生息しているが、分子遺伝学的解析や性染色体の比較からは、かつては現在の分布域より広い地域に生息していたことが推測されている。特に本種と類似したミトコンドリア DNA 塩基配列が、佐渡島固有種のサドガエルや、九州南東部のツチガエルから見つかっていることから、本種の祖先種は北陸地方や九州地方を含む日本列島全域に生息していたことが推測され、後になって朝鮮半島から侵入したツチガエルの分布拡大を受け、一部のツチガエル集団と交雑しながら、分布域を狭めてきたと考えられている。ただし、これらのイベントは基本的には人為的影響でなく、有史以前の分布の変遷であると考えられており、本欄で記述すべき明治時代以降、都県レベルでの大きな分布域の変更は生じていないものと思われる。

一方で、都県内の地域レベルでは局所的な絶滅が生じたと考えられるケースが多々あり、例えば現在では大きな分布の空白地帯となっている関東平野の低平地にもかつては本

種と思われるカエルが広く生息していたことがわかっている（e.g. 埼玉県，2018; 千葉県，2011）。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現在の分布は東北地方東部から関東地方、中部地方にかけての地域であるが、関東地方低平地の集団は極端に減少しており、二次的な分布の空白地帯となっている。以下、過去の研究等から生息地点として確認できる地点を市町村レベルで挙げる。東北地方東部：岩手県（奥州市、北上市、一関市、平泉町、遠野市、花巻市）・宮城県（南三陸町、仙台市、川崎町）・福島県（いわき市）、関東地方：茨城県（つくば市、常陸大宮市）・栃木県（市貝町、足利市、那須塩原市、宇都宮市、鹿沼市）・群馬県（渋川市、片品村）・埼玉県（小川町、東秩父村）・千葉県（茂原市、鴨川市、君津市、市原市）・東京都（あきる野市）・神奈川県（山北町、小田原市、相模原市、南足柄市、伊勢原市）、中部地方：山梨県（甲府市、上野原市）・長野県（中野市、山ノ内町、長野市、千曲市、上田市、東御市、小諸市、佐久市、松本市、塩尻市、白馬村、南牧村）。

【生息地の現況】

平野域から低山地にかけての地域に生息するカエルだが、既知の分布域のほとんどの都県で、域内の一部（多くは平野部）での減少が指摘されており、本種の記載前から「ツチガエル」として都県レッドリスト等で何らかの指定を受けているか（宮城県，2016; 茨城県，2016; 栃木県，2023; 群馬県，2022; 埼玉県，2018; 東京都，2023; 神奈川県，2006; 千葉県，2019; 長野県，2015）、本種の記載を受けて指定がなされた（福島県，2023; 岩手県，2024）。分布域のうち都県レベルでの絶滅危惧種としての指定を受けていないのは山梨県のみだが、同県についても県下の生息確認地が少なく、甲府盆地の中心部では生息が確認できないとの報告があり、やはり局所的な減少が生じている可能性が高い。

【個体数の現況】

本種が現在生息している地点では、しばしば高密度で多数の個体が観察されるが、そうした集団であっても近隣には同種の集団がまったく見られず、明らかに孤立した集団となっている例が少なくない。生活史を構成する環境要素が揃っていれば本来は高密度で集団を維持しやすい種なのであろうが、特定の環境要素が欠けると個体群を維持できなくなってしまうものと考えられる。おそらく現在でもそうした局所集団の逐次的消滅が進行している可能性が高く、高密度で生息している地点があるからと言って楽観はできない状況にある。

存続を脅かす要因

本種が生息する生息環境の代表的なものとして、水田・河川・ため池の各環境が挙げられるが、このうち水田環境に生息する集団は減少の一途をたどっている。特に圃場や水路の人工物護岸や田面の乾田化は、本種の成体の繁殖場所や幼生の生息場所・越冬場所の劣

化、消失をもたらし、圃場整備済水田では本種の生息は強く制限を受けることがわかっている。また、特に山間の水田では、耕作放棄による水田の消失も大きな問題となっている。

一方、河川環境ではまだ相当の個体群が残っているものと思われるが、こちらにおいても人工護岸によって岸辺や水面下の多孔空間が失われることにより、成体や幼生の生息場所・越冬場所が喪失していることが指摘されている。ため池環境も、人工護岸等で環境が悪化しているうえ、現在では外来捕食者のウシガエルが侵入している場合が多く、強い捕食圧を受けている。ウシガエルと共存している場合、本種の高密度な生息は望めず、本種の生息地点数を減らす大きな要因となっている可能性が高い。

要因の区分：	（過去）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，捕食（外来種による）
	（現在）	湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，捕食（外来種による）

特記事項

比較的最近分類変更があったため、地方自治体のレッドリストや保護に係る法令指定、各種文献等では、分類変更前のタクソン（広義ツチガエル）として扱われている場合があることに注意が必要。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	—	—	—
第４次 2019:	—	—	—
第４次 2018:	—	—	—
第４次 2017:	—	—	—
第４次 2015:	—	—	—
第４次:	—	—	—
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岩手県】情報不足,【宮城県】準絶滅危惧(NT),【福島県】情報不足(DD),【栃木県】絶滅危惧Ⅱ類(B ランク)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 芦澤航・大澤啓志・勝野武彦．2013. 谷戸におけるツチガエルの産卵場所選択．環境情報科学 学術研究論文集 27: 33‐36.
- Atobe, T., Y. Osada, H. Takeda, M. Kuroe, and T. Miyashita, 2014. Habitat connectivity and resident shared predators determine the impact of invasive bullfrogs on native frogs in farm ponds. Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences, 281: 20132621.
- 千葉県，2011．千葉県レッドデータブック―動物編（2011 年改訂版）．
- 千葉県，2019．千葉県レッドリスト動物編（2019 年改訂版）．
- 福島県，2023．ふくしまレッドリスト 2022 年版．
- 群馬県，2022．群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編（2022 年改訂版）動物レッドリスト．
- 茨城県，2016．茨城県版レッドリスト（動物編）2016 年改訂版．
- 岩手県，2024．岩手県における絶滅のおそれのある野生動植物のリスト（2024 年度）．
- 神奈川県， 2006．神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006．
- Matsushima, N., M. Hasegawa, and J. Nishihiro, 2022. Effects of landscape heterogeneity at multiple spatial scales on paddy field-breeding frogs in a large alluvial plain in Japan. Wetland Conservation, 106.
- 宮城県，2016．宮城県の希少な野生動植物―宮城県レッドリスト 2023 年版．
- 長野県，2015．長野県版レッドリスト（動物編）2015．
- 埼玉県、2018．埼玉県レッドデータブック動物編 2018（第 4 版）．
- Shimada, T., M. Matsui, M. Ogata, I. Miura, M. Tange, M. -S. Min, and K. Eto. 2022. Genetic and morphological variation analyses of *Glandirana rugosa* with description of a new species (Anura, Ranidae). Zootaxa 5174(1), 25–45.
- 栃木県，2013．栃木県版レッドリスト（第 4 次／2023 年版）．
- 東京都，2023．東京都レッドデータブック 2023―東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）解説版．
- 宇賀神知則，1995．水田環境に生息するツチガエル（*Rana rugosa*）の分布を制限する要因．筑波大学環境科学研究科環境科学専攻修士論文．31p.
- 湯本光子，2018．山梨県における両生類の分布と生息適地評価．爬虫両棲類学会報，2018(1): 1‐13．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Glandirana reliquia has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Glandirana reliquia* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are

likely to continue. ①The number of individuals is decreasing. ②Habitat conditions are deteriorating.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream, Upper river basin, Middle river basin, Reservoir/Pond, Lake/Dam 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Urban green area, Middle river basin, Agricultural ditch, Reservoir/Pond
Threat types:	Lake development, River development, Wetland development, Field preparation, Predation (by alien species)
Law designation status for conservation	—



©梨木之正

執筆者:	島田知彦（愛知教育大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Tomohiko Shimada and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

オオハナサキガエル

***Odorrana supranarina* (Matsui, 1994)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
環境改変に伴う生息地の消失などで、生息条件は悪化している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

八重山諸島の石垣島と西表島の固有種。成体の頭胴長は少なくとも 60 mm に達する、本種群のなかでは大型の種で、胴部背面の顆粒は弱いことなどで、同所的に生息するコガタハナサキガエルと区別できる。渓流を伴う森林域に生息するが、河川の源流域から中流域まで、その出現範囲はコガタハナサキガエルよりも広い。開発に伴う森林の減少により、生息地は徐々に縮小している。

基礎情報

【形態】

成体の頭胴長はオスが 59～77 mm、メスでは 81～115 mm。体色と模様は個体変異に富み、背面の基色は淡褐色から緑色まで様々で、明瞭な斑紋を持たないことが多い。背側線隆起の外縁に沿って暗色の斑紋があり、同様な斑紋は胴側面にも散在する。後肢の大腿部と脛部には暗色の横帯がある。胴部背面の顆粒は弱く、同所的に生息するコガタハナサキガエルに比べて明らかに平滑にみえる。また、コガタハナサキガエルよりも吻が長く、尖る。

【生活史】

繁殖行動は冬季から春季にかけてよくみられるが、繁殖は周年におよぶと思われる。滝壺や伏流のほか、緩やかな流れのなかの底質に卵塊を産みつける。卵の直径は 2.6～2.9 mm ほど。産卵場所の周辺では幼生や変態したばかりの幼体が見られる。成体はゴキブリ類やワラジムシ類などを餌とする。

【生息環境】

本種の出現環境はコガタハナサキガエルよりも広く、河川の源流部から中流部まで広く見られる。ただし、比較的良好な森林に覆われ、澄んだ渓流が存在することが生息の条件である。成体は流れから離れた林床で見かけることも多く、山地・丘陵地の森林に隣接した路上でもよく見かける。西表島では海岸近くでも確認される。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，河川源流域，河川上流域，河川中流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(4) 河川・湿地地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

八重山諸島の石垣島と西表島に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

八重山諸島の石垣島と西表島の森林域に分布する。

【生息地の現況】

開発や道路の敷設・整備などに伴い、本種の生息環境である渓流を伴う森林は一貫して減少している。

【個体数の現況】

個体数に関する具体的な資料はないが、生息適地が減少していることから、個体数も減っていると考えられる。

存続を脅かす要因

森林に覆われた清流を必要とするため、開発に伴う環境撹乱に弱いと考えられる。石垣島では幼体の捕食者ともなり、成体の競争者ともなり得るオオヒキガエルの影響が懸念される。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，土地造成
	（現在）	森林伐採，土地造成

特記事項

石垣島の集団と西表島の集団の間の遺伝的違いの程度は低く、その点で同属のコガタハナサキガエルとは対象的であり、生物地理学的に興味深い。また、コガタハナサキガエルとは生息環境が異なっており、島嶼における同属種の共存のメカニズムを知る上でも学術的に貴重な存在である。また、台湾、中琉球地域の同属種と合わせて、島嶼隔離に伴って種の多様化を遂げたグループを構成しており、学術的に貴重である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	オオハナサキガエル	*Odorrana supranarina*	NT
第４次 2019：	オオハナサキガエル	*Odorrana supranarina*	NT
第４次 2018：	オオハナサキガエル	*Odorrana supranarina*	NT
第４次 2017：	オオハナサキガエル	*Odorrana supranarina*	NT
第４次 2015：	オオハナサキガエル	*Odorrana supranarina*	NT
第４次：	オオハナサキガエル	*Odorrana supranarina*	NT
第３次：	オオハナサキガエル	*Rana supranarina*	NT
第２次：	オオハナサキガエル	*Rana supranarina*	NT
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Matsui, M., 1994. A taxonomic study of the *Rana narina* complex, with description of three new species (Amphibia : Ranidae). Zool. J. Linn. Soc., 111: 385–415.

- 松井正文，2021．オオハナサキガエル．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 59-61．サンライズ出版，彦根．
- 松井正文・前田憲男．2018．日本カエル大鑑．文一総合出版，東京．272pp.
- Matsui, M., T. Shimada, H. Ota and T. Tanaka-Ueno, 2005. Multiple invasions of the Ryukyu Archipelago by Oriental frogs of the subgenus *Odorrana* with phylogenetic reassessment of the related subgenera of the genus *Rana*. Mol. Phyl. Evol., 37: 733–742.
- 環境庁（編）．2000．改訂版日本の絶滅危惧生物レッドデータブック両生類・爬虫類．環境庁，東京．120 pp.
- 富永篤，2017．オオハナサキガエル．沖縄県環境部自然保護課（編）改定・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp.229．沖縄県環境部自然保護課，那覇．

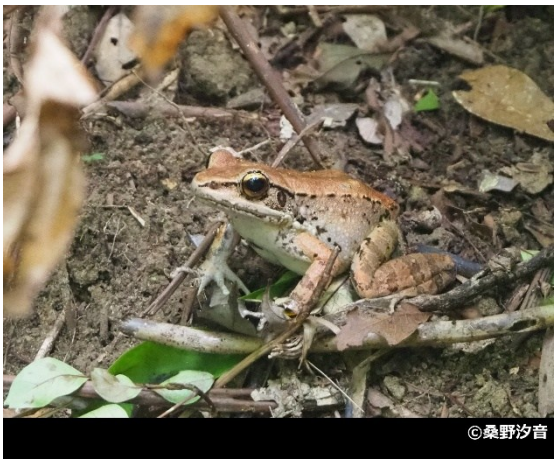
アセスメントサマリー（Assessment summary）

Odorrana supranarina has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Odorrana supranarina* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin, Middle river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development
Law designation status for conservation	―



執筆者: 戸田守（琉球大学）

Author: Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae

トノサマガエル

***Pelophylax nigromaculatus* (Hallowell, 1861)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②				
基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
減少傾向は生息するすべての府県で起こっている。特に宮城県、福島県、神奈川県、新潟県、徳島県、愛媛県、福岡県、長崎県では減少傾向が甚だしく、絶滅危惧種に指定されている。この他、17 府県で準絶滅危惧種に指定されている。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
水田面積の減少と圃場整備や中干しなどによる生息環境の悪化がほぼすべての生息地で見られる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

九州、四国、本州の平野部を中心に、広い範囲に分布するが、一部地域を除いて、トウキョウダルマガエルの分布域と重複しない。北海道と対馬には人為的に移入された。水田、河川敷の湿地、池沼などに生息する。非繁殖期には水辺から離れた草地などでも見かけることがある。かつてはどこの水田でも普通に見られたカエルであるが、水田の減少に加え、圃場整備や水稲耕作の近代化にともなう水田の自然環境の悪化により、全国的に減少傾向が続いている。

基礎情報

【形態】

雌雄の体長は、それぞれ 55～80 mm、60～90 mm。メスは白地に暗色の雲上模様、オスは緑色ないし黄色地に暗色の雲上模様の体色をそれぞれ呈する。日本のカエルでは珍しく雌雄で体色が異なる。

【生活史】

生活史を通して水辺から遠く離れることは少ないが、非繁殖期には水辺から離れた草地などで生活することもある。繁殖期は、地域差が大きいが、おおむね 4 月から 6 月。繁殖期には、オスは水面の一定の範囲を縄張りとして守っている。オス同士の縄張り争いは頻繁で、通常、鳴き声による争いであるが、時には直接的な衝突も観察される。メスはオスと抱接した後、2,000 個前後の卵を一塊の卵塊として水中に産卵する。幼生は水田もしくは池沼の浅瀬で、水底の珪藻類や有機物を餌に成長し、6 月下旬から 9 月にかけて変態する。気温が低下してくると、水田内や畦、池の周辺などに穴を掘って冬眠する。変態後、オスは約 2 年、メスは約 3 年で成熟すると考えられる。

【生息環境】

浅い止水とその周辺で生息する。水田がおもな生息地であるが、湿地、池沼や小河川などにも見られる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】田地・畑地，湿地・湿原・細流，ため池・池沼 【陸域_平地部】田地・畑地，湿地・湿原，農業用水路，小河川，ため池・池沼
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

本種は、本州から四国、九州にかけての広い範囲に分布するが、トウキョウダルマガエルが分布する関東から仙台平野にかけては分布しない。一方、ナゴヤダルマガエルとは分布域が重複する地域がある。国外では朝鮮半島などに生息している。

現在の生息状況

【分布域の現況】

ここ数年は全国的な分布域に変化は見られないが、水田に依存する個体群が多いため、水田耕作地の減少や水田環境の悪化により、分布域は減少傾向にあると推測される。本来の生息地ではない北海道や対馬に人為的に持ち込まれている。

【生息地の現況】

水田の他、ため池、小河川、水路などに生息する。1 年を通じて水辺環境に依存して生活している。

【個体数の現況】

かつては、水田に多数生息する普通種との認識があったが、近年では、ほぼすべての生

息地において個体数（個体密度）の減少が起こっており、一部では局所絶滅も起こっている。

存続を脅かす要因

本種の生存を脅かすおもな要因として、水田の減少、耕作放棄地の増加、圃場整備に伴う水田の乾燥化、コンクリート製水路による移動の妨害、農薬などによる餌資源の減少、産卵場所となる苗代の減少、中干しによる幼生生育場所の消失などが挙げられる。

要因の区分：	（過去）	圃場整備，土地造成，農薬汚染/化学物質汚染，管理放棄
	（現在）	圃場整備，土地造成，農薬汚染/化学物質汚染，管理放棄，その他（水田の中干し）

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	トノサマガエル	*Pelophylax nigromaculatus*	NT
第４次 2019：	トノサマガエル	*Pelophylax nigromaculatus*	NT
第４次 2018：	トノサマガエル	*Pelophylax nigromaculatus*	NT
第４次 2017：	トノサマガエル	*Pelophylax nigromaculatus*	NT
第４次 2015：	トノサマガエル	*Rana nigromaculata*	NT
第４次：	トノサマガエル	*Rana nigromaculata*	NT
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【青森県】希少野生生物(C ランク),【岩手県】準絶滅危惧,【宮城県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【山形県】準絶滅危惧(NT),【福島県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【神奈川県】絶滅危惧Ⅰ類,【新潟県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【富山県】準絶滅危惧(NT),【福井県】要注目,【山梨県】準絶滅危惧(NT),【長野県】準絶滅危惧(NT),【静岡県】準絶滅危惧(NT),【滋賀県】要注目種,【大阪府】NT,【兵庫県】要注目種,【奈良県】希少種,【和歌山県】準絶滅危惧(NT),【岡山県】準絶滅危惧,【広島県】準絶滅危惧(NT),【山口県】準絶滅危惧(NT),【香川県】準絶滅危惧(NT),【愛媛県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【高知県】注目種,【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【長崎県】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【熊本県】準絶滅危惧(NT),【大分県】準絶滅危惧(NT),【宮崎県】準絶滅危惧(NT-g),【鹿児島県】準絶滅危惧

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 愛知県，2020．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2020―動物編―．愛知県環境局環境政策部自然環境課，名古屋．768pp.
- 青森県，2020．青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2020 年版）－．青森県環境生活部自然保護課，青森．397pp.
- 愛媛県，2024．愛媛県レッドリスト 2024．
- 福井県，2016．改訂版福井県の絶滅のおそれのある野生動植物．福井県安全環境部自然環境課，福井．535pp.
- 福岡県，2014．福岡県の希少野生生物福岡県レッドデータブック 2014－爬虫類／両生類／魚類／昆虫類／貝類／甲殻類その他／クモ形類等－．福岡県環境部自然環境課，福岡．276pp.
- 福島県，2022．ふくしまレッドリスト 2024 年． https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/16035b/redlist-kaiteikouhyou.html
- 長谷川雅美・草野保・福山欣司，2000．日本における両生類個体群減少の認識過程．千葉中央博自然誌研究報告，特別号 3：1-7．
- 広島県，2022．広島県の絶滅のおそれのある野生生物（第 4 版）―レッドデータブックひろしま 2021―．広島県環境県民局自然環境課，広島．761pp.
- 岩手県，2024．レッドリスト(2024 年度)．https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyou/shizen/yasei/rdb/1074862/index.html
- 香川県，2021．香川県レッドデータブック 2021 香川県の希少野生生物．香川県環境森林部みどり保全課，高松．503pp.
- 鹿児島県，2016．改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物:鹿児島県レッドデータブック 2016．一般財団法人鹿児島県環境技術協会環境生物部，鹿児島．
- 熊本県，2019．レッドデータブックくまもと 2019-熊本県の絶滅のおそれのある野生動植物．熊本県環境生活部自然保護課，熊本．631pp.
- 松井正文・前田憲男，2018．日本産カエル大鑑．文一総合出版，東京．271pp.
- 宮城県，2024．宮城県の希少な野生動植物-宮城県レッドリスト 2024 年版-．https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/sizenhogo/red2021.html
- 宮崎県，2022．宮崎県レッドリスト（2020 年度改定）．https://www.pref.miyazaki.lg.jp/shizen/kurashi/shizen/page00193.html
- 長野県，2015．長野県版レッドリスト（動物編）2015．https://www.pref.*nagano*.lg.jp/shizenhogo/kurashi/shizen/hogo/kisyoyasei/redlist/redlist-download.html

- 長崎県，2022．長崎県レッドリスト 2022．https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/kurashi-kankyo/shizenkankyo-doshokubutsu/rarespecies/reddata/547398.html
- 新潟県，2016．新潟県第 2 次レッドリスト（新潟県の保護上重要な野生生物の種のリスト）両生類・爬虫類編．新潟県県民生活・環境部 環境企画課，新潟．24pp.
- 日本爬虫両棲類学会（編）， 2021．新日本両生爬虫類図鑑．サンライズ出版，滋賀．232pp.
- 大分県，2022．レッドデータブックおおいた 2022～大分県の絶滅のおそれのある野生生物～．大分県生活環境部自然保護推進室，大分．310pp.
- 岡山県，2025．岡山県版レッドリスト 2025．https://www.pref.okayama.jp/page/965573.html
- 大阪府，2014．大阪府レッドリスト 2014．大阪府環境農林水産部みどり・土地環境室みどり推進課，大阪．48pp.
- 佐賀県，2003．佐賀県レッドリスト Red List 2003．佐賀県環境生活局，佐賀．60pp.
- 滋賀県，2021．滋賀県で大切にすべき野生生物（滋賀県版レッドデータブック）2020 年版．https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/kankyoshizen/shizen/322847.html
- 静岡県，2020．静岡県版両生類レッドリスト 2020．https://www.pref.shizuoka.jp/kurashikankyo/shizenkankyo/wild/1017683.html
- 高桑正敏・勝山輝男・木場英久，2006．神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006．神奈川県立生命の星・地球博物館，小田原．442pp.
- 徳島県，2014．徳島県版レッドリスト両生類リスト<改訂：平成 25 年>．https://www.pref.tokushima.lg.jp/kankyo/kankoubutu/red_date.html
- 富山県，2025．富山県版レッドリスト 2025（3.爬虫類・両生類）．https://www.pref.toyama.jp/1709/r7_red_list_toyama2025.html
- 和歌山県，2022．保全上重要なわかやまの自然－和歌山県レッドデータブック－［2022 年改訂版］．和歌山県環境生活部環境政策局環境生活総務課自然環境室，和歌山．783pp.
- 山形県，2018．山形県レッドリスト（両生類）．https://www.pref.yamagata.jp/documents/2444/hachu-ryoseiruilist.pdf
- 山口県，2019．レッドデータブックやまぐち 2019 山口県の絶滅のおそれのある野生生物．山口県環境生活部自然保護課，山口．986pp.
- 山梨県，2018．2018 山梨県レッドデータブック山梨県の絶滅のおそれのある野生生物．山梨県森林環境部みどり自然課．290pp.
- 渡部恵司・中島直久・小出水規行，2021．水田域の圃場整備におけるカエル類の生息場の保全．応用生態工学， 24: 95-110.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Pelophylax nigromaculatus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pelophylax nigromaculatus* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat

status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue. ①The number of individuals is decreasing. ②Habitat conditions are deteriorating.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Farmland, Wetland/Marsh/Stream, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland, Wetland, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond
Threat types:	Field preparation, Land development, Pesticide/Toxic chemical pollution, Abandonment of management, Other
Law designation status for conservation	—





執筆者:	福山欣司（慶応義塾大学）
Author:	Kinji Fukuyama

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

トウキョウダルマガエル

***Pelophylax porosus porosus* (Cope, 1868)**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　①②

基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
①個体数が減少している。
【判断理由】
生息が確認されている 12 都県すべてで減少傾向が見られる。特に東京都、千葉県、神奈川県、群馬県、新潟県、長野県では絶滅危惧種に指定されている。

②生息条件が悪化している。
【判断理由】
ほぼすべての生息地で中干しによる幼生の生息環境の悪化が見られる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

関東平野から仙台平野、信濃川流域、 新潟平野の一部に分布する。北海道の一部地域に人為分布している。池沼や河川敷などに生息することもあるが、ほとんどの地域では水田に生息している。水辺への依存性が高く、年間を通して水田や周辺の水路などを離れることはない。かつては水田で普通に見られる動物であったが、圃場整備や稲作の効率化などの影響で、各地で急速に減少している。

基礎情報

【形態】

体長はオスで 39～75 mm、メスで 43～87 mm。脛長は体長の 42%程度で、トノサマガエルより短い。体背面は概ね緑色から暗緑色を基調とし、暗灰色や黒色の小斑紋が広がる。緑がかった明色の背中線を持つ個体もいる。体色に雌雄差はない。背面にはミミズ状の隆条が不規則に並ぶ。トノサマガエルと比較すると、隆条は短く、浅く、不明瞭である。趾間のみずかきは発達している。

【生活史】

繁殖期は 4～7 月。オスは水田などの水面を泳ぎながら鳴いて縄張りを形成し、メスを待つ。メスは水中に 2,000 個前後の卵を卵塊として産むが、水底に広がって、泥などが付着するので、発見しにくい。幼生は珪藻や有機物を食べて成長し、7～9 月に変態する。成熟年齢はオスで 1 才から 2 才、メスで 2 才から 3 才と推定されている。10 月を過ぎると、落水した水田内や畦、周辺部などの土に穴を掘って冬眠する。本種は生活史の全体を通して、水辺から離れることは少ない。

【生息環境】

山間地の水田にも生息するが、おもな生息地は平地の水田である。一部の個体群は小河川、水路、池沼、湿地、河川敷などにも生息している。浅い止水を好み、水辺や周辺部の草地などが生息範囲である。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】田地・畑地，耕作放棄地，農業用水路，湿地・湿原・細流，ため池・池沼 【陸域_平地部】田地・畑地，耕作放棄地，湿地・湿原，農業用水路，小河川，ため池・池沼
国土地域区分：	（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

関東平野から仙台平野にかけて、および新潟県と長野県の一部に分布する。基本的に亜種のダルマガエルや近縁種のトノサマガエルとは分布域が重ならないが、新潟県と長野県の一部地域ではそれらと同所的に分布することもある。

現在の生息状況

【分布域の現況】

本来の分布域に加え、北海道の一部に人為分布する。最近、東京都江東区でも確認されている。

【生息地の現況】

おもな生息地である水田が減少し、水耕栽培の効率化の影響で生息環境は悪化している。

【個体数の現況】

おもな生息地である水田の消失、圃場整備による水田環境の変化、中干しによる幼生の減少などにより個体数は減少している。特に関東平野では、孤立した小規模な個体群になっている生息地が多い。

存続を脅かす要因

おもな要因として、都市化による水田の減少、耕作放棄による水田の陸地化、圃場整備、水路のコンクリート化、水管理の強化に伴う湛水期以外の水不足、中干しの導入など水稲耕作法の変化、農薬の使用、生息環境が類似する侵入種ヌマガエルの分布拡大などが挙げられる。

要因の区分：	（過去）	湿地開発，圃場整備，土地造成，農薬汚染/化学物質汚染，管理放棄，競争/競合（外来種による）
	（現在）	湿地開発，圃場整備，土地造成，農薬汚染/化学物質汚染，管理放棄，競争/競合（外来種による），その他（水田の中干し）

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	トウキョウダルマガエル	*Pelophylax porosus porosus*	NT
第４次 2019：	トウキョウダルマガエル	*Pelophylax porosus porosus*	NT
第４次 2018：	トウキョウダルマガエル	*Pelophylax porosus porosus*	NT
第４次 2017：	トウキョウダルマガエル	*Pelophylax porosus porosus*	NT
第４次 2015：	トウキョウダルマガエル	*Rana porosa porosa*	NT
第４次：	トウキョウダルマガエル	*Rana porosa porosa*	NT
第３次：	トウキョウダルマガエル	*Rana porosa porosa*	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【岩手県】留意,【宮城県】準絶滅危惧(NT),【福島県】準絶滅危惧(NT),【茨城県】情報不足①注目種,【栃木県】準絶滅危惧(C ランク),【群馬県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【埼玉県】準絶滅危惧 1 型(NT1),【千葉県】重要保護生物(B),【東京都（本土部）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（区部）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（北多摩）】絶滅危惧ⅠA 類(CR),【東京都（南多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【東京都（西多摩）】絶滅危惧ⅠB 類(EN),【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類,【新潟県】絶滅危惧Ⅱ類(VU),【長野県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 千葉県，2020．千葉県の保護上重要な野生生物―千葉県レッドリスト動物編 2019 年改訂版．https://www.bdcchiba.jp/redlist_animal_2019
- 福島県，2024．ふくしまレッドリスト 2024 年版．https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/16035b/redlist-kaiteikouhyou.htm
- 福山欣司・草野保，2013．東京都におけるカエル類の生息状況の現状と課題．爬虫両棲類学会報， 2013: 111-127．
- 群馬県，2022．群馬県の絶滅のおそれのある野生生物（群馬県レッドデータブック）動物編 2022 年改訂版．群馬県環境森林部自然環境課，前橋．296pp.
- 長谷川雅美・草野保・福山欣司，2000．日本における両生類個体群減少の認識過程．千葉中央博自然誌研究報告， 特別号 3：1-7．
- 茨城県，2016．茨城における絶滅のおそれのある野生生物動物編 2016 年改訂版（茨城県版レッドデータブック）．茨城県生活環境部環境政策課，水戸．327pp.
- 岩手県，2024．レッドリスト(2024 年度)．https://www.pref.iwate.jp/kurashikankyou/shizen/yasei/rdb/1074862/index.html
- 松井正文・前田憲男，2018．日本産カエル大鑑．文一総合出版，東京．271pp．
- 宮城県，2024．宮城県の希少な野生動植物-宮城県レッドリスト 2024 年版-．https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/sizenhogo/red2021.html
- 長野県，2015．長野県版レッドリスト（動物編）2015．https://www.pref.*nagano*.lg.jp/shizenhogo/kurashi/shizen/hogo/kisyoyasei/redlist/redlist-download.html
- 日本爬虫両棲類学会（編）， 2021．新日本両生爬虫類図鑑．サンライズ出版，彦根．232pp．
- 新潟県，2016．新潟県第 2 次レッドリスト（新潟県の保護上重要な野生生物の種のリスト）両生類・爬虫類編．新潟県県民生活・環境部 環境企画課，新潟．24pp.
- 埼玉県，2018．埼玉県レッドデータブック動物編 2018（第 4 版）．埼玉県環境部みどり自然課，さいたま．419pp.
- 高桑正敏・勝山輝男・木場英久，2006．神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006．神奈川県立生命の星・地球博物館，小田原．442pp.
- 栃木県，2023．栃木県版レッドリスト（第 4 次／2023 年版）．https://www.pref.tochigi.lg.jp/d04/redlist.html
- 東京県，2023．東京都レッドデータブック 2023– 東京都の保護上重要な野生生物種（本土部）解説版 –．東京都環境局自然環境部，東京．879pp.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Pelophylax porosus porosus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pelophylax porosus porosus* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Farmland, Abandoned farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Farmland, Abandoned farmland, Wetland, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond
Threat types:	Wetland development, Field preparation, Land development, Pesticide/Toxic chemical pollution, Abandonment of management, Competition (with alien species), Other
Law designation status for conservation	—





執筆者:	福山欣司（慶応義塾大学）
Author:	Kinji Fukuyama

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

アマミアカガエル

***Rana kobai* Matsui, 2011**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　－	基準 B:　VU 未満	基準 C:　－	基準 D:　－	基準 E:　－

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
農地開発などに伴う森林環境の消失により、生息環境は徐々に悪化している。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

奄美諸島に固有で、リュウキュウアカガエルに似るが、遺伝的には明確に分化している。相対的に眼径が大きく後肢長が長いことなどでリュウキュウアカガエルとは区別できる。奄美大島、加計呂麻島、徳之島の山地から丘陵地の森林地域に生息し、冬から早春にかけて源流域の流れの緩い水場や林道の水たまりなどで繁殖する。繁殖期が終わると林床に分散する。森林環境の改変により、徐々に分布域は狭まっている。

基礎情報

【形態】

リュウキュウアカガエルと似ているが、頭胴長に対する眼の直径、最長指端から肘までの距離、脛長、後肢全長などがより大きな値を示すなどの違いがある。膝関節を折り曲げた状態で後肢を前方に向けたとき、膝が前肢基部と会合するか重なり合えばアマミアカガエルである。リュウキュウアカガエルとは遺伝的にも明確に分化している。全長はオスで32～41 mm、メスでは35～46 mm。背面は淡褐色または赤褐色で、背側線隆条ははっきりしている。上唇には明瞭な白条がある。腹面は淡色で、淡い赤褐色の網目状の模様が現れることがある。

【生活史】

繁殖期は11月下旬から4月におよび、河川源流域の流れの緩い水場や、林道の水たまりなどで産卵する。卵は少数ずつ産み出され大きな卵塊とはならないが、産卵数の多い場所では複数のペアによって底質に産み付けられた卵がマット状に広がった状態になることもある。

【生息環境】

山地から丘陵地の森林に生息する。繁殖期には多数の個体が河川源流域などの水場に集まるが、繁殖が終わると分散し、林床で生活するようである。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

奄美諸島の固有種で、奄美大島、加計呂麻島、徳之島の3島に分布する。山地から丘陵地の森林に生息する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

森林の後退により分布域は徐々に狭まっている。

【生息地の現況】

森林の後退に伴い、生息環境は徐々に悪化している。奄美大島では分布域の広い範囲にマングースが定着していたため、その食害による影響が懸念されていたが、2024年に同島のマングースの根絶宣言が出された。今後の動態を注視したい。

【個体数の現況】

個体数について具体的な数字による言及は難しいが、森林の後退により個体数は減少傾向にあると考えられる。

存続を脅かす要因

農地造成などの森林伐採。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採，ダム・河川工作物建設，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，圃場整備，ダム・河川工作物建設

特記事項

リュウキュウアカガエルとともにツシマアカガエルの姉妹群をなすことから、琉球列島の陸生生物相の成因やこの地域の地史を考えるうえで貴重な存在である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	アマミアカガエル	*Rana kobai*	NT
第４次 2019：	アマミアカガエル	*Rana kobai*	NT
第４次 2018：	アマミアカガエル	*Rana kobai*	NT
第４次 2017：	アマミアカガエル	*Rana kobai*	NT
第４次 2015：	アマミアカガエル	*Rana kobai*	NT
第４次：	アマミアカガエル	*Rana kobai*	NT
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】準絶滅危惧

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Matsui, M. 2011. On the brown frogs from the Ryukyu Archipelago, Japan, with descriptions of two new species (Anphibia, Anura). Curr. Herpetol. 30 (2): 111-128.
- 松井正文，2021．アマミアカガエル．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 66．サンライズ出版，彦根．
- 松井正文・前田憲男，2018，日本産カエル大鑑．文一総合出版，東京．272p.

- 戸田光彦，2014. アマミアカガエル．環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編），レッドデータブック 2014 日本の説滅の恐れのある野生生物 3 爬虫類・両生類，pp. 145．ぎょうせい，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Rana kobai has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Rana kobai* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Field preparation, Dam/River structures construction
Law designation status for conservation	―





執筆者:	戸田守（琉球大学）
Author:	Mamoru Toda

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

オキタゴガエル

***Rana okiensis* Daito, 1969**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
主要生息地である島後島内では、過去の豪雨被害を受けて河川改修が進められており、今後も繁殖地に触る開発が続く可能性がある。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

　隠岐諸島の島後島・西ノ島の森林地帯に限って分布するが、道路建設や護岸工事等により、生息環境が悪化している。

基礎情報

【形態】

成体の体長はオスで 38～43 mm、メスで 45～53 mm で、近縁種のタゴガエルとよく似ているが、より細身で、鼻先がより円いなどの特徴があるほか、後肢の腹面の暗色斑紋がより多く見られ、みずかきがより強く発達する傾向がある。卵や幼生もタゴガエルに似る。

【生活史】

2～3 月に渓流沿いの伏流水中で繁殖する。幼生は摂餌を必要とせず、卵黄の消費のみでカエルへと変態できる。詳しい寿命等は不明。

【生息環境】

山地森林の渓流付近を中心に生活する。人工林でも見られる。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，湿地・湿原・細流，岩壁・ガレ場（石灰岩地等），河川源流域，河川上流域
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

隠岐諸島の島後島で知られていたが、後年西ノ島でも記録された。

現在の生息状況

【分布域の現況】

隠岐諸島自体の陸地面積が小さいため、分布縮小率等の推定が難しい。

【生息地の現況】

人工林や低地林でも生息可能である一方、繁殖に利用される渓流付近の環境が、護岸工事等で悪化しているとされる。

【個体数の現況】

島後島の個体密度は低くないが、西ノ島での確認事例は限定的かつ各回の記録頭数も少なく、個体数は多くない可能性がある。

存続を脅かす要因

もともと生息地が小さな島嶼の森林地帯に限られるのに加え、生息地付近での道路建設や、繁殖地である渓流の護岸工事等により、生息環境が悪化している。

要因の区分：	（過去）	河川開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，分布・産地局限
	（現在）	河川開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，分布・産地局限

特記事項

タゴガエルの亜種であったが、近年行われた研究により、遺伝的分化や音声形質の違い等に基づき独立種とされた。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	オキタゴガエル	*Rana tagoi okiensis*	NT
第４次 2019:	オキタゴガエル	*Rana tagoi okiensis*	NT
第４次 2018:	オキタゴガエル	*Rana tagoi okiensis*	NT
第４次 2017:	オキタゴガエル	*Rana tagoi okiensis*	NT
第４次 2015:	オキタゴガエル	*Rana tagoi okiensis*	NT
第４次:	オキタゴガエル	*Rana tagoi okiensis*	NT
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【島根県】準絶滅危惧(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Eto, K. and M. Matsui, 2023. A new brown frog from the Goto Islands, Japan with taxonomic revision on the subspecific relationships of *Rana tagoi* (Amphibia: Anura: Ranidae). Current Herpetology, 42: 191–209.
- 林成多，2013．隠岐諸島西ノ島の高崎山でオキタゴガエルを撮影．ホシザキグリーン財団研究報告特別号，8:110.
- 岩田貴之，2014．オキタゴガエル．改定しまねレッドデータブック 2014 動物編，pp.74，島根県自然環境課， 松江.
- 松井正文・江頭幸士郎， 2021．オキタゴガエル ．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 63．サンライズ出版，彦根.
- 島田孝，2005．隠岐島前の西ノ島からオキタゴガエルの初記録．ホシザキグリーン財団研究報告，8: 218.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Rana okiensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Rana okiensis* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Wetland/Marsh/Stream, Cliff/Talus area (e.g. limestone area), River headwater, Upper river basin
Threat types:	River development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Limited distribution
Law designation status for conservation	—



執筆者:	松井正文（京都大学）・江頭幸士郎（北九州市立自然史・歴史博物館）
Author:	Masafumi Matsui and Koshiro Eto

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

ツシマアカガエル

***Rana tsushimensis* Stejneger, 1907**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
上対馬の生息状況は比較的良好だったが、2021 年の現地調査により、近年まで確認されていた繁殖場所が水域環境の条件悪化によって消失した事例が複数確認された。また、対馬全域で道路建設等による河岸の繁殖地消失が見られている。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は、チョウセンヤマアカガエルよりも体サイズが小さく、雄で頭胴長が 31～37 mm、雌で 37～44 mm である。小河川の河岸の草むらや水田周辺に生息し、河岸や湿地の水たまり、池、水田などで繁殖する。緩い流れの水路でも繁殖することがある。数百以上の卵塊が見られる繁殖地もあるが、数十以下の卵塊しか見られなくなっている繁殖地もあり、繁殖地の数と繁殖地における卵塊数は減りつつあると推定される。

協力者:　松尾公則（長崎女子短期大学）

基礎情報

【形態】

オスは体長 31～37 mm、メスは体長 37～44 mm でメスのほうが大きい。褐色の体色は同所的に分布するチョウセンヤマアカガエルと似ているが、より小型で、鼓膜が眼径の半分程度であることや、オスも鳴嚢をもたないこと、隆起状の背側線が鼓膜のうしろで外側にいったん大きく曲がることで区別できる。染色体数は 26 本。

【生活史】

産卵期は 1～5 月で、水田や浅い池、河岸の水たまりなどの止水に球形に近い卵塊を産む。なお、初夏にも繁殖することがわかってきており、田植え後に繁殖することもある。変態上陸後の生活はよくわかっていない。

【生息環境】

平地から丘陵の湿地、水田周辺などに生息する。また、河川の中下流部の沢周辺でも見られる。林床や草むらで生活し、繁殖場所は主に池や湿地などの止水域であるが、緩い流れの水路などでも草などに卵塊を付着させて産卵する。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地，田地・畑地，農業用水路，湿地・湿原・細流 【陸域_平地部】森林，草地，田地・畑地，湿地・湿原，河川中流域，河川下流域，農業用水路，小河川
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域，(4) 河川・湿地地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

日本固有種。対馬のみに分布。

現在の生息状況

【分布域の現況】

対馬のみに分布。対馬全域に分布し、分布の状況はあまり変わっていない。

【生息地の現況】

本種の生息場所は、平地や丘陵地の沢や小河川周辺や湿地、池、水田周辺など、繁殖地となる水辺環境（止水または緩い流水域）が存在する場所に広く生息する。河川改修による河岸の整備や道路建設による湿地の分断といった環境改変によって、繁殖地の減少が生じている。しかしながら、水田における田植え時期頃まで繁殖期間が長引くことや人工的な改変後の水域においても卵塊を水草などに付着させて産み付けるといった繁殖習性によって、繁殖個体群が存続している例がみられる。ただ、水深のある池の状態は維持されていても、繁殖が行われなくなっている場所もあり、水質などの状況変化を注視していく必要がある。

【個体数の現況】

成体の個体数は不明であるが、繁殖期の各繁殖地における卵塊数は、数百以上の地点も

あるが、数十以下になっている地点もある。また、早春の繁殖期に水域が形成されずに、初夏の田植え時期に繁殖する地点もある。一方、水が涸れることがない大きい池で繁殖が見られなくなった地点もある。繁殖地点数と各繁殖地での繁殖数が減少傾向にあることから、全体として個体数は減少傾向にあるものと推定される。

存続を脅かす要因

河岸の人工的整備、水田放棄、圃場整備などによる生息環境の悪化、丘陵の谷開口部の舗装道路の建設、土地開発による繁殖地の消失、侵入したヌマガエルやトノサマガエルの影響が懸念される。また、一部の繁殖地で水質の悪化が懸念される。

要因の区分：	（過去）	河川開発，湿地開発，土地造成，交通インフラ建設，管理放棄
	（現在）	河川開発，湿地開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，水質汚濁，管理放棄，競争/競合（外来種による）

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ツシマアカガエル	*Rana tsushimensis*	NT
第４次 2019：	ツシマアカガエル	*Rana tsushimensis*	NT
第４次 2018：	ツシマアカガエル	*Rana tsushimensis*	NT
第４次 2017：	ツシマアカガエル	*Rana tsushimensis*	NT
第４次 2015：	ツシマアカガエル	*Rana tsushimensis*	NT
第４次：	ツシマアカガエル	*Rana tsushimensis*	NT
第３次：	ツシマアカガエル	*Rana tsushimensis*	NT
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【長崎県】準絶滅危惧種(NT)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 松尾公則，2005．長崎県の両生・爬虫類．長崎新聞社，長崎．155pp.
- 松尾公則・富樫忠士・三谷奈保・藤田有希，2004．長崎県の壱岐・対馬に侵入したヌマガエル（講演要旨）．爬虫両棲類学会報，2004: 61-62.
- 三谷奈保・戸田光彦・萩野伊万里・玖須博一・野田一男・松尾公則，2009．対馬における 5 年間のヌマガエルの分布拡大（講演要旨）．爬虫両棲類学会報，2009: 86.
- 日本爬虫両棲類学会（編），2021．新日本両生爬虫類図鑑，サンライズ出版，彦根．232pp.
- 浦田明夫・山口鉄男，1976．対馬の両生類．長崎県生物学会（編），対馬の生物，pp. 261-264，長崎県生物学会，長崎.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Rana tsushimensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Rana tsushimensis* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland, Farmland, Agricultural ditch, Wetland/Marsh/Stream 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Farmland, Wetland, Middle river basin, Lower river basin, Agricultural ditch, Small river
Threat types:	River development, Wetland development, Field preparation, Land development, Transportation infrastructure construction, Water pollution, Abandonment of management, Competition (with alien species)
Law designation status for conservation	―





執筆者:	竹中践（東海大学）
Author:	Sen Takenaka

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

ヤクシマタゴガエル

***Rana yakushimensis* Nakatani et Okada, 1966**

カテゴリー判定結果　準絶滅危惧（NT）　②

基準 A:　VU 未満	基準 B:　VU 未満	基準 C:　VU 未満	基準 D:　VU 未満	基準 E:　―

生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。
②生息条件が悪化している。
【判断理由】
本種への悪影響が懸念されるシカ増殖が近年収まりつつあるとされる一方、屋久島にツーリズムで訪れる観光客数は、2007 年ごろのピークに比べれば減少しているものの依然として多く、生息地における踏み付けや水質・土壌への悪影響は引続き懸念される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

屋久島の森林地帯に限って分布するが、観光地化による遊歩道の設置や踏み付け、水質汚濁、シカの増加等による森林環境の悪化によって繁殖環境が悪化し、存続が脅かされている。

基礎情報

【形態】

成体の体長はオスで 37～48（平均 44）mm、メスで 42～54（平均 48）mm。近縁種のタゴガエルとよく似ているが、顎や後肢の腹面に暗色斑紋がより多く見られ、みずかきがより強く発達する傾向がある。卵や幼生もタゴガエルに似る。

【生活史】

10～4 月に渓流沿いの伏流水や湿地、高層湿原で繁殖する。岩石の隙間やミズゴケの下をゆるく流れる伏流水中に、60～120 個ほどの卵を球形の卵塊として一度に産み付ける。幼生は伏流水中で成長する。

【生息環境】

屋久島に分布し、低地から山地の森林帯の標高 1,800 m まで生息する。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，湿地・湿原・細流，岩壁・ガレ場（石灰岩地等），河川源流域，河川上流域，河川中流域
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域，（7）島嶼地域

【分布域】

屋久島のみに分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

屋久島自体の陸地面積が小さいため、分布縮小率等の推定が難しい。

【生息地の現況】

ツーリズムの発展により、生息地植生や個体の踏み付けが懸念される。シカの増加に伴う植生減少による悪影響も懸念されるが、シカの増殖自体は近年収まりつつあるとの報告もあり、将来的には植生の回復も期待できるかもしれない。

【個体数の現況】

市街地周辺の森林では稀だが、山地林における個体群密度は低くない。

存続を脅かす要因

もともと生息地が小さな島嶼の森林地帯に限られるのに加え、観光地化による遊歩道の設置や踏み付け、水質汚濁、シカの増加等による森林環境の破壊によって繁殖環境が悪化し、存続が脅かされている。一時期増加していたヤクシマザルによる捕食が確認されていた他、本種を捕食し得ると考えられる外来種のイエネコが生息地の林内で確認されている。

要因の区分：	（過去）	交通インフラ建設，水質汚濁，人の踏みつけ，捕食（在来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，分布・産地局限
	（現在）	人の踏みつけ，捕食（在来種による），分布・産地局限

特記事項

タゴガエルの亜種であったが、近年行われた研究により、遺伝的分化や音声形質の違い等に基づき独立種とされた。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ヤクシマタゴガエル	*Rana tagoi yakushimensis*	NT
第４次 2019：	ヤクシマタゴガエル	*Rana tagoi yakushimensis*	NT
第４次 2018：	ヤクシマタゴガエル	*Rana tagoi yakushimensis*	NT
第４次 2017：	ヤクシマタゴガエル	*Rana tagoi yakushimensis*	NT
第４次 2015：	ヤクシマタゴガエル	*Rana tagoi yakushimensis*	NT
第４次：	ヤクシマタゴガエル	*Rana tagoi yakushimensis*	NT
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【鹿児島県】準絶滅危惧

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 揚妻直樹・揚妻-柳原芳美・杉浦秀樹，2021．捕獲圧のない地域におけるヤクシカ密度指標の 18 年間の増減：屋久島世界遺産地域・照葉樹林の事例．保全生態学研究，26 : 87-100．
- Eto, K. and M. Matsui, 2023. A new brown frog from the Goto Islands, Japan with taxonomic revision on the subspecific relationships of *Rana tagoi* (Amphibia: Anura: Ranidae). Current Herpetology, 42: 191–209.
- 松井正文・江頭幸士郎，2021．ヤクシマタゴガエル．日本爬虫両棲類学会（編），新日本両生爬虫類図鑑，pp. 63-65．サンライズ出版，彦根．
- Suzuki, S., D. A. Hill, T. Maruhashi and T. Tsukahara, 1990. Frog- and lizard-eating behaviour of wild Japanese macaques in Yakushima, Japan. Primates, 31(3): 421–426.

- 辻野亮・揚妻-柳原芳美，2006．鹿児島県屋久島の森林で発見された外来哺乳類．保全生態学研究，11：167-171．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Rana yakushimensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Rana yakushimensis* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Wetland/Marsh/Stream, Cliff/Talus area (e.g. limestone area), River headwater, Upper river basin, Middle river basin
Threat types:	Human trampling, Predation (by native species), Limited distribution
Law designation status for conservation	—





執筆者:	松井正文（京都大学）・江頭幸士郎（北九州市立自然史・歴史博物館）
Author:	Masafumi Matsui and Koshiro Eto

公表年月：2026 年 3 月

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

エゾサンショウウオ

***Hynobius retardatus* Dunn, 1923**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　③

基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　―

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

分布域は北海道本島のみであり、日本産の同属他種とは系統的にかけ離れているほか、染色体数が大きく異なるといった独自性を有する。北海道全域の数量的情報は得られていないが、平野部では開発による繁殖環境の劣化や消失、外来種による捕食の影響等がみられており、個体数の減少が危惧される。山間部の状況はほとんどわかっていない。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種は日本のサンショウウオ属の中で特異的で、北海道のみに分布しているということだけでなく、染色体数が 40 本と他のサンショウウオ属の種（56 本ないし 58 本）と大きく異なる。また、尾が長いことも特徴的である。北海道本島のほぼ全域に分布することから、種全体の個体数や分布地点の減少の具体的な情報の集約はむずかしいが、開発による繁殖地の消失や外来種による捕食の影響がみられており、個体数の減少が危惧される。

基礎情報

【形態】

体の背面は一様に青みを帯びた暗褐色または黒褐色、腹面は灰色で微細な暗褐色の点があることがある。頭部は卵形で大きく、胴部は短く、肋条数は 11 本、四肢は長く後肢は 5 趾。尾は長く頭胴長の 111%ほどに達する。繁殖期のオスは尾がひれ状になり、顎がはって体側の皮膚がたるむ。全長 110～200 mm、頭胴長 60～87 mm。染色体数は 40 本。

【生活史】

繁殖期は普通 4～5 月だが、高地では 7 月になるところもある。止水や流れのゆるい流水中で産卵し、湖沼や沢だまり湿地など、多様な環境で繁殖する。水中の植物の茎葉、枯れ枝などの卵嚢の 1 端を付着させて産卵するが、多数のオスが待ち構えている場合や次々とメスが産卵に現れる場合があり、集合規模の大きい繁殖地では数百対以上の卵嚢が見られる場合もある。卵嚢 1 対中の卵数は 66～110 ほど。幼生期に頭部が大型化する表現型が知られており、エゾアカガエル幼生の捕食への適応や同種幼生の共食いが知られる。孵化時の幼生は全長 12～15 mm、変態時には 50 mm 以上に達する。幼生のまま越冬する場合があり、全長 100 mm に達することもある。変態上陸後は繁殖地周辺の林床などで生活する。オスで 4～6 歳、メスで 5～7 歳で性成熟し、16 歳の個体が捕獲された例がある。

【生息環境】

北海道に分布し、平地から山地まで広く沼沢地周辺に生息する。幼体、亜成体、成体は陸上生活で林床などに生息する。成熟後の個体は、春の繁殖期に湿地や沢沿いの水たまりなどの止水域または流れが緩い水たまりなどに集まってきて繁殖する。林道わきの水たまりにおいて繁殖することもある。また、沢などに敷設された砂防提が形成する緩い流れの水域でも繁殖することがある。広い湿原や小河川の河川敷といった環境だけでなく、耕作地域や住居地域における残存的な小規模な林地と湿地の混在する場所でも生息することがある。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，草地，湿地・湿原・細流，ため池・池沼 【陸域_平地部】森林，湿地・湿原，河川中流域，ため池・池沼
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

島嶼を除く北海道（北海道本島）の全域から記録されている。

現在の生息状況

【分布域の現況】

島嶼を除く北海道（北海道本島）の全域から記録されている。分布域としては大きな変化はないが、農地化地域および都市化地域における繁殖地消失が進行してきている。

【生息地の現況】

成体、亜成体および幼体が生息するための林地と繁殖地となる水域の両方が、生息の継続に必要である。林地の消失または生息環境としての悪化は農地化、都市化等によって長期にわたって進行してきている。湿原の開発や水系の護岸等の改変も本種の生息に影響を与えてきている。また、北海道に人為導入および定着が進んできているアライグマによる捕食（とくに繁殖地における集合個体の捕食）の報告もある。

【個体数の現況】

本種の成体、亜成体、幼体の個体数密度の調査は困難な面があり、個体数の推移については、繁殖地における卵嚢数によって推定することになる。継続的に繁殖状況を調査されてきている地点では繁殖地の消失や繁殖数の減少が報告されている例もあるが、北海道全体の状況あるいは全体の状況が推定可能なほどの地点数の報告はない。

存続を脅かす要因

河川改修や丘陵地の牧草地化、土地開発、道路建設などによる生息地、繁殖地の減少が進み、外来種のアライグマの捕食の影響が確認されている。大規模な土地開発による影響もあるが、太陽光発電施設の設置、農地内の圃場整備、小規模な水路建設等による林床の断片化や乾燥化による生息環境の悪化がある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，湖沼開発，河川開発，湿地開発，圃場整備，土地造成，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），発電施設建設

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	エゾサンショウウオ	*Hynobius retardatus*	DD
第４次 2019：	エゾサンショウウオ	*Hynobius retardatus*	DD
第４次 2018：	エゾサンショウウオ	*Hynobius retardatus*	DD
第４次 2017：	エゾサンショウウオ	*Hynobius retardatus*	DD
第４次 2015：	エゾサンショウウオ	*Hynobius retardatus*	DD
第４次：	エゾサンショウウオ	*Hynobius retardatus*	DD
第３次：	エゾサンショウウオ	*Hynobius retardatus*	DD
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【北海道】絶滅のおそれのある地域個体群(Lp)(十勝平野個体群)(石狩平野個体群),留意種(N)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- 北海道環境生活部環境室自然環境課（編），2001．両生類・爬虫類：北海道の希少野生生物．北海道レッドデータブック 2001，pp. 191-195，北海道，札幌.
- 堀繁久・水島未記，2002．野幌森林公園の両生類について．北海道開拓記念館紀要，30: 21-26.
- 環境庁（編），1978．第 2 回自然環境保全基礎調査．動物分布調査報告書（両生・は虫類）（日本の重要な両生類・は虫類の分布 北海道版Ⅰ），大蔵省印刷局，東京．67pp.
- 環境庁（編），1982．日本の重要な両生類・は虫類の分布 全国版，大蔵省印刷局，東京．263pp.
- Michimae, H. and T. Emura, 2012. Correlated evolution of phenotypic plasticity in metamorphic timing . Journal of Evolutional Biology, 25:1331-1339.
- 日本爬虫両棲類学会（編），2021．新日本両生爬虫類図鑑，サンライズ出版，彦根．232pp.
- Nishihara, A., 1996. High density induces a large head in larval *Hynobius retardatus* from a low density population. Japanese Journal of Herpetology, 16(4): 134-136.
- 佐藤孝則・松井正文（編著），2013．北海道のサンショウウオたち．エコ・ネットワーク，札幌．258pp.
- 徳田龍弘，2015．改訂版北海道爬虫類・両生類ハンディ図鑑．北海道新聞社，札幌．95pp.
- 上野俊一，1981．エゾサンショウウオ．第 2 回自然環境保全基礎調査．動物分布調査報告書（両生・は虫類）全国版（その 2），pp. 123-125，大蔵省印刷局，東京.
- Weisrock, D. W., J. R. Macey, M. Matsui, and D. G. Mulcahy, 2013. Molecular phylogenetic reconstruction of the endemic Asian salamander family Hynobiidae (Amphibia, Caudata). Zootaxa 3626 (1): 77–93.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius retardatus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius retardatus* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Grassland, Wetland/Marsh/Stream, Reservoir/Pond 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Wetland, Middle river basin, Reservoir/Pond
Threat types:	Logging and wood harvesting, Lake development, River development, Wetland development, Field preparation, Land development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Power plant construction
Law designation status for conservation	—





執筆者:	竹中践（東海大学）
Author:	Sen Takenaka

公表年月：2026 年 3 月

無尾目 Anura　アカガエル科 Ranidae　　日本固有

ヒメタゴガエル

***Rana kyoto* Eto, Matsui et Sugahara, 2022**

カテゴリー判定結果　情報不足（DD）　①④

基準 A:　データ不足	基準 B:　データ不足	基準 C:　データ不足	基準 D:　データ不足	基準 E:　—

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生息状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生息地においても生息密度が低く希少である。

【判断理由】

本種が近縁種タゴガエルと分布を接する・重複する地域においては、明らかに本種の方が生息地密度が低い。ただし、特に本種が単独で分布する地域では必ずしも密度は低くない。

④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。

【判断理由】

繁殖習性は基本的に近縁種タゴガエルと似るものの、本種のほうが河川の源流に近い、より小規模な伏流水・湧水環境で産卵することが多いとされる。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

近畿地方北部を中心に京都府、滋賀県、福井県、兵庫県、大阪府、鳥取県から知られ、2022 年に独立種として記載される以前は、分布が大きく重複する近縁種タゴガエルと混同されていた。タゴガエルと似た生活史を送り、山地森林の渓流付近を中心に生活して、源流部の伏流水中で繁殖する。正確な分布域がまだ把握されていないが、模式産地周辺ではトレッキングによる個体や産卵場所の踏み付け、シカの増加による生息地植生の減少や、それに伴う産卵好適地の崩落などが懸念される。

基礎情報

【形態】

成体の体長は地域によって差があり、原記載によればオスで 29～44 mm、メスで 27～48 mm。近縁なタゴガエルと形態的によく似るが、四肢の腹面に暗色斑紋がより多く見られ、みずかきの発達がより弱く、また両者が同所的に分布する地域においては本種のほうが明らかに体が小さくなる。

【生活史】

4～5 月に源流部の伏流水や湧水口、岩盤の染み出しなどで繁殖する。水が流れる岩石の隙間などに 30～50 個ほどの卵を球形の卵塊として産み付ける。幼生は伏流水中で成長する。その他、近縁なタゴガエルと似た生活史を送るものと考えられる。

【生息環境】

山地森林の渓流付近を中心に生活する。人工林でも見られる。

生息環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林，湿地・湿原・細流，岩壁・ガレ場（石灰岩地等），河川源流域
国土地域区分：	（1）奥山自然地域，（2）里地里山・田園地域，（4）河川・湿地地域

【分布域】

近畿地方北部を中心に京都府、滋賀県、福井県、兵庫県、大阪府、鳥取県から知られる。山地森林の渓流付近を中心に生活する。人工林でも見られる。しかし、過去にはタゴガエルと混同されていたため、その詳細な分布域は不明である。

現在の生息状況

【分布域の現況】

詳細な分布域がまだ把握されておらず、評価が難しい。

【生息地の現況】

トレッキングによる個体や産卵場所の踏み付け、シカの増加による生息地植生の減少やそれに伴う産卵好適地の崩落などが懸念される。

【個体数の現況】

詳細は不明だが、下記の要因によって個体数は減少していると思われる。模式産地周辺では、本種に相当する個体群が初めて報告された約 30 年前と比べて繁殖地点数が減少している。

存続を脅かす要因

トレッキングによる個体や産卵場所の踏み付け、シカの増加による生息地植生の減少やそれに伴う産卵好適地の崩落などにより、本種の生息が脅かされている地点がある。潜在的には、河川改修等による産卵地破壊の影響を受けると考えられる。

要因の区分：	（過去）	河川開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，人の踏みつけ，遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	河川開発，交通インフラ建設，ダム・河川工作物建設，人の踏みつけ，遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	—	—	—
第４次 2019：	—	—	—
第４次 2018：	—	—	—
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【京都府】要注目種

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Eto, K., M. Matsui, and T. Sugahara, 2022. Description of a new subterranean breeding brown frog (Ranidae: *Rana*) from Japan. Zootaxa, 5209(4): 401–425.
- 中津元樹・室岡優，2023．大阪府北部におけるヒメタゴガエルとタゴガエルの分布状況．爬虫両棲類学会報，2023: 191‐198.
- 菅原隆博・松井正文， 1997．京都雲ヶ畑産タゴガエル 2 型の繁殖期と繁殖場所．爬虫両棲類学雑誌，17: 68‐69.

- Sugihara, T., M. Matsui, and T. Sugahara, 2022. A comparison of growth patterns between large- and small-sized *Rana tagoi* (Amphibia: Ranidae) from Kitayama, Kyoto, Japan. Current Herpetology, 41: 230–237.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Rana kyoto has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Rana kyoto* is listed as DD under criteria ①④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area, Low-altitude area】Forest, Wetland/Marsh/Stream, Cliff/Talus area (e.g. limestone area), River headwater
Threat types:	River development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Human trampling, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	—



執筆者:	江頭幸士郎（北九州市立自然史・歴史博物館）・松井正文（京都大学）
Author:	Koshiro Eto and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月

第５次レッドリスト（爬虫類・両生類）においてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった種（亜種を含む）または地域個体群の解説

レッドリスト 2020 掲載名	日本固有
有鱗目	トカゲ科
オガサワラトカゲ	
Cryptoblepharus nigropunctatus	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	○
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	

具体的理由

本種の生息地の多くで比較的普通に見られることから、近いうちに絶滅が心配される状態に陥るとは考え難い。とはいえ、本種の主要な生息地ともいえる父島、母島、兄島にはグリーンアノールが定着しており、その影響で少なくとも一部の地域で密度の低下や分布の後退が報告されている。また、グリーンアノールが多い場所では利用微環境が変わっているという研究もあるため、今後もそれらの地域を中心に、本種の生息状況の変化には留意する必要がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	オガサワラトカゲ	*Cryptoblepharus nigropunctatus*	NT
第４次 2019:	オガサワラトカゲ	*Cryptoblepharus nigropunctatus*	NT
第４次 2018:	オガサワラトカゲ	*Cryptoblepharus nigropunctatus*	NT
第４次 2017:	オガサワラトカゲ	*Cryptoblepharus nigropunctatus*	NT
第４次 2015:	オガサワラトカゲ	*Cryptoblepharus nigropunctatus*	NT
第４次:	オガサワラトカゲ	*Cryptoblepharus nigropunctatus*	NT
第３次:	オガサワラトカゲ	*Cryptoblepharus boutonii nigropunctatus*	NT
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- Hayashi, F., A. Shima, K. Horikoshi, K. Kawakami, R. D. Segawa, T. Aotsuka, and T. Suzuki, 2009. Limited overwater dispersal and genetic differentiation of the snake-eyed skink (*Cryptoblepharus nigropunctatus*) in the Oceanic Ogasawara Islands, Japan. Zool. Sci.:26(8): 543-9.
- 堀越和夫，2022．硫黄列島のハ虫類．神奈川博調査研報(17): 65-68.
- 川上和人・飴田洋祐，2020．2019 年における北硫黄島の爬虫類相．小笠原研究(47): 179-183.

- Suzuki, A. and M. Nagoshi, 1999. Habitat utilization of the native lizard, *Cryptoblepharus boutonii nigropunctatus*, in areas with and without the introduced lizard, *Anolis carolinensis*, on Haha-jima, the Ogasawara Islands, Japan. Ota, H. (ed.), Tropical Island Herpetofauna, Elsevier Science, Amsterdam. pp. 155-168.
- 戸田光彦，2014．オガサワラトカゲ．環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編）レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物－3 爬虫類・両生類．pp. 76．ぎょうせい，東京.

執筆者：　戸田守（琉球大学）

公表年月：2026 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	日本固有
有鱗目	トカゲ科
クチノシマトカゲ	
Plestiodon kuchinoshimensis	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	○
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	

具体的理由

本種の唯一の生息地である十島村口之島は面積が 13.3 km²であり、そもそもその潜在的な絶滅リスクは低くないと考えられるが、2022 年に島内の広い範囲におよぶ様々な環境で実施された調査では多くの地点で本種が確認され、生息密度も低くないことが示唆された。同島に外来種として定着しているホンドテンにより爬虫類が食害されているという報告があり、その影響が本種に対して顕在化したときに、急速に個体数が減少に向かう事態も想定され、定期的にモニタリングする必要はあるが、上述の現地調査の結果から、現時点で絶滅の危険度が高いと考える状況にはない。また、島の景観や環境、人間活動の状況からは、本種の個体数が減少し続けていると疑う根拠はない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	クチノシマトカゲ	*Plestiodon kuchinoshimensis*	DD
第４次 2019:	クチノシマトカゲ	*Plestiodon kuchinoshimensis*	DD
第４次 2018:	クチノシマトカゲ	*Plestiodon kuchinoshimensis*	DD
第４次 2017:	クチノシマトカゲ	*Plestiodon kuchinoshimensis*	DD
第４次 2015:	オオシマトカゲ	*Plestiodon marginatus oshimensis*	NT
第４次:	オオシマトカゲ	*Plestiodon marginatus oshimensis*	NT
第３次:	オオシマトカゲ	*Plestiodon marginatus oshimensis*	NT
第２次:	悪石島以北のトカラ諸島のニホントカゲ	*Eumeces latiscutatus*	LP
第１次:	—	—	—

参考文献

- 疋田努，2017．クチノシマトカゲ．環境省自然環境局野生生物課 希少種保全推進室（編），環境省レッドリスト 2017 補遺資料．pp. 18. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室.

- 稲留陽尉・塩谷克典・岡田滋，2014．トカラ列島口之島で確認されたテン *Martes melampus*. Nature of Kagoshima 40: 7-11.
- Kurita, K. and T. Hikida, 2014. A new species of *Plestiodon* (Squamata: Scincidae) from Kuchinoshima Island in the Tokara Group of the northern Ryukyus, Japan. Zoological Science 31 (7): 464-474.
- 中園和憲・炭山大輔・三谷奈保，2020．トカラ列島口之島における外来テン(*Martes melampus*) の分布と在来種の捕食．環境情報科学学術研究論文集 (34): 168‐173.

執筆者：　戸田守（琉球大学）

公表年月：2026 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　爬虫類・両生類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	日本固有
有鱗目	トカゲ科
イシガキトカゲ	
Plestiodon stimpsonii	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	○
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	

具体的理由

外来性の捕食者であるイタチやクジャクの影響などから、波照間島、黒島、小浜島などで昔に比べて個体数が減少したという情報もあるが、2010 年代初頭に行われた広域におよぶ調査では、波照間島を含むほとんどの島で、それなりの数が確認されている。石垣島では郊外で土地開発が進み、昔より減っていると考えられるが、もともと個体数が少ない種ではないため、種の存続にとって危険な状態、もしくは近くそれに移行しそうな状況ではない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	イシガキトカゲ	*Plestiodon stimpsonii*	NT
第４次 2019:	イシガキトカゲ	*Plestiodon stimpsonii*	NT
第４次 2018:	イシガキトカゲ	*Plestiodon stimpsonii*	NT
第４次 2017:	イシガキトカゲ	*Plestiodon stimpsonii*	NT
第４次 2015:	イシガキトカゲ	*Plestiodon stimpsonii*	NT
第４次:	イシガキトカゲ	*Plestiodon stimpsonii*	NT
第３次:	イシガキトカゲ	*Plestiodon stimpsonii*	NT
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 太田英利，2014．イシガキトカゲ．環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編）レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物－3 爬虫類・両生類．pp. 77．ぎょうせい，東京.

- 当山昌直・戸田守・田中聡・徳里政哉（編），2013．キシノウエトカゲ生息実態調査報告．沖縄県天然記念物調査シリーズ第 46 集．沖縄県教育委員会，那覇．148pp.

執筆者：　戸田守（琉球大学）

公表年月：2026 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
有鱗目	トカゲ科
三島のヘリグロヒメトカゲ	
Ateuchosaurus pellopleurus	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	○

具体的理由

LP の基準に該当しないため、不掲載とした。

なお、ヘリグロヒメトカゲは分割され、奄美諸島以北の個体群は独立種アマミヒメトカゲとされた。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020:	三島のヘリグロヒメトカゲ	*Ateuchosaurus pellopleurus*	LP
第４次 2019:	三島のヘリグロヒメトカゲ	*Ateuchosaurus pellopleurus*	LP
第４次 2018:	三島のヘリグロヒメトカゲ	*Ateuchosaurus pellopleurus*	LP
第４次 2017:	三島のヘリグロヒメトカゲ	*Ateuchosaurus pellopleurus*	LP
第４次 2015:	三島のヘリグロヒメトカゲ	*Ateuchosaurus pellopleurus*	LP
第４次:	三島のヘリグロヒメトカゲ	*Ateuchosaurus pellopleurus*	LP
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- Hikida, T., H. Ota, and M. Toyama. 1992. Herpetofauna of an encounter zone of the Oriental and Palearctic elements: Amphibians and reptiles of the Tokara Group and adjacent islands in the Northern Ryukyus, Japan. Biological Magazine, Okinawa 30: 29-43.
- Makino, T. T. Nakano, T. Okamoto, and T. Hikida, 2023. Taxonomic revision and re-description of *Ateuchosaurus pellopleurus* (Hallowell, 1861) (Reptilia, Squamata, Scincidae) with resurrection of *A. okinavensis* (Thompson, 1912). Zoosystematics and Evolution, 99(1), 77–91.
- 森田忠義．1987．黒島の陸生動物相．鹿児島県高等学校教育研究理科部会 28: 12-20.
- 森田忠義．1996．鹿児島郡三島村の竹島および硫黄島の両生・爬虫類相．自然愛護 (22): 2-4.

- Ota, H., H. Miyaguni, and T. Hikida. 1999. Geographic variation in the endemic skink, *Ateuchosaurus pellopleurus* (Reptilia: Squamata), from the Ryukyu Archipelago, Japan. Journal of Herpetology 33: 106-118.

執筆者：　太田英利（兵庫県立大学）

公表年月：2026 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
有鱗目	ナミヘビ科
宮古諸島のサキシママダラ	
Dinodon rufozonatum walli	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	○

具体的理由

第 5 次レッドリストにおける LP の評価対象の基準に該当しないため、不掲載とした。

宮古諸島では農地改良やホテルの建設などによる環境改変が進んでいるため、本種の生息地が減少していることは間違いない。それでも本種は、緑地を中心にもっとも頻繁に目撃されるヘビであり、少なくとも現時点では種の存続を危険視する状況にないと考えられる。一方、上述したような環境改変は分布域の広い範囲に及んでおり、また開発のスピードも非常に早いことから、本種の宮古諸島の個体群については今後の動向を注視する必要がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	宮古諸島のサキシママダラ	*Dinodon rufozonatum walli*	LP
第４次 2019:	宮古諸島のサキシママダラ	*Dinodon rufozonatum walli*	LP
第４次 2018:	宮古諸島のサキシママダラ	*Dinodon rufozonatum walli*	LP
第４次 2017:	宮古諸島のサキシママダラ	*Dinodon rufozonatum walli*	LP
第４次 2015:	宮古諸島のサキシママダラ	*Dinodon rufozonatum walli*	LP
第４次:	宮古諸島のサキシママダラ	*Dinodon rufozonatum walli*	LP
第３次:	—	—	—
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- 池原貞雄・与那城義春・宮城邦治・当山昌直，1984．陸の脊椎動物琉球列島動物図鑑．新星図書，那覇．351 pp.
- 饒平名里美・当山昌直・安川雄一郎・陳陽隆・高橋健・久貝勝盛，1998．宮古諸島における陸生爬虫両生類の分布について．平良市総合博物館紀要 (5)： 23―38.

- 高良鉄夫．1962．琉球列島における陸棲蛇類の研究．琉球大学農家政工学部学術報告（9）: 1-202，22 pls.
- 当山昌直．1981．宮古群島の両生爬虫類．沖生教研会誌 (14): 30-39.
- 当山昌直，2019．両生類・爬虫類. 宮古島市史編さん委員会（編），みやこの自然．pp. 419-442. 宮古島市教育委員会，宮古島.

執筆者：　戸田守（琉球大学）

公表年月：2026 年 3 月

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　　爬虫類・両生類分科会

レッドリスト 2020 掲載名	日本固有
無尾目	ヒキガエル科
ミヤコヒキガエル	
Bufo gargarizans miyakonis	

第５次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
① 現時点での絶滅危険度は小さい	○
② 評価するに足る情報が極めて少ない	
③ 最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④ その他	

具体的理由

本種の分布範囲の全体にわたって農地改良やホテルの建設などの環境改変が続いているため、本種が減少傾向にあることは確実であるが、生息域の広い範囲で相当数の個体が見られることから、現時点では種の存続を危険視する状況にない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第４次 2020:	ミヤコヒキガエル	*Bufo gargarizans miyakonis*	NT
第４次 2019:	ミヤコヒキガエル	*Bufo gargarizans miyakonis*	NT
第４次 2018:	ミヤコヒキガエル	*Bufo gargarizans miyakonis*	NT
第４次 2017:	ミヤコヒキガエル	*Bufo gargarizans miyakonis*	NT
第４次 2015:	ミヤコヒキガエル	*Bufo gargarizans miyakonis*	NT
第４次:	ミヤコヒキガエル	*Bufo gargarizans miyakonis*	NT
第３次:	ミヤコヒキガエル	*Bufo gargarizans miyakonis*	NT
第２次:	—	—	—
第１次:	—	—	—

参考文献

- Kasatani, K. and H. Takeuchi, Phylogeography of the Miyako toad, *Bufo gargarizans miyakonis* (Anura: Bufonidae), inferred from mitochondrial sequence data. Curr. Herpetol. 42(2): 144-161.
- 饒平名里美・当山昌直・安川雄一郎・陳陽隆・高橋健・久貝勝盛，1998．宮古諸島における陸生爬虫両生類の分布について．平良市総合博物館紀要 (5): 23-38.
- 太田英利, 2014. ミヤコヒキガエル. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編），レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物－3 爬虫類・両生類，pp. 145．ぎょうせい，東京.

- 当山昌直, 2019. 両生類・爬虫類. 宮古島市史編さん委員会（編）, みやこの自然. 宮古島市教育委員会, 宮古島市. pp. 419-442.

執筆者：　戸田守（琉球大学）

公表年月：2026 年 3 月

■学名索引

Achalinus formosanus chigirai 78
Achalinus werneri 234
Andrias japonicus 587
Ateuchosaurus pellopleurus 712
Babina holsti 476
Babina subaspera 598
Bufo gargarizans miyakonis 716
Calamaria pavimentata miyarai 23
Calamaria pfefferi 83
Caretta caretta 33
Chelonia agassizii 274
Chelonia mydas 103
Cryptoblepharus nigropunctatus 706
Cuora flavomarginata evelynae 109
Cyclophiops herminae 238
Cynops ensicauda ensicauda 647
Cynops ensicauda popei 466
Cynops pyrrhogaster 652
Dermochelys coriacea 282
Dinodon rufozonatum walli 714
Diploderma polygonatum donan 157
Diploderma polygonatum ishigakiense 201
Diploderma polygonatum polygonatum 205
Echinotriton andersoni 471
Echinotriton raffaellii 593
Elaphe carinata carinata 88
Elaphe carinata yonaguniensis 182
Elaphe taeniura schmackeri 242
Emoia atrocostata atrocostata 17
Emydocephalus ijimae 98
Eretmochelys imbricata 2
Gekko shibatai 131
Gekko sp. 1 136
Gekko sp. 2 192
Gekko tawaensis 197
Gekko yakuensis 141
Geoemyda japonica 40
Glandirana reliquia 657
Glandirana susurra 352
Goniurosaurus kuroiwae 51
Goniurosaurus nebulozonatus 121
Goniurosaurus orientalis 7
Goniurosaurus sengokui 57
Goniurosaurus splendens 126
Goniurosaurus toyamai 12
Goniurosaurus yamashinae 62
Hebius concelarus 93
Hebius vibakari danjoensis 247
Hemidactylus bowringii 147
Hynobius abei 357
Hynobius abuensis 362
Hynobius akiensis 367
Hynobius amakusaensis 322
Hynobius bakan 372
Hynobius boulengeri 511
Hynobius dunni 516
Hynobius fossigenus 521
Hynobius geiyoensis 327
Hynobius guttatus 526
Hynobius hidamontanus 377
Hynobius hirosei 531
Hynobius ikioi 536
Hynobius iwami 382
Hynobius katoi 387
Hynobius kimurae 623
Hynobius kuishiensis 393
Hynobius kunibiki 398
Hynobius lichenatus 628
Hynobius mikawaensis 332
Hynobius naevius 403
Hynobius nebulosus 541
Hynobius nigrescens 632
Hynobius okiensis 547
Hynobius oni 338

Hynobius osumiensis 408
Hynobius oyamai 552
Hynobius retardatus 696
Hynobius sematonotos 557
Hynobius sengokui 413
Hynobius setoi 418
Hynobius setouchi 561
Hynobius shinichisatoi 423
Hynobius stejnegeri 567
Hynobius sumidai 428
Hynobius tagoi 433
Hynobius takedai 437
Hynobius tokyoensis 442
Hynobius tosashimizuensis 342
Hynobius tsuensis 448
Hynobius tsurugiensis 452
Hynobius utsunomiyaorum 456
Hynobius vandenburghi 572
Laticauda colubrina 292
Laticauda laticaudata 297
Laticauda semifasciata 302
Lepidochelys olivacea 278
Lepidodactylus lugubris 307
Limnonectes namiyei 506
Lycodon multifasciatus 251
Lycodon rufozonatus rufozonatus 256
Mauremys japonica 114
Mauremys mutica kami 46
Nidirana okinavana 604
Odorrana amamiensis 609
Odorrana ishikawae 481
Odorrana narina 614
Odorrana splendida 486
Odorrana supranarina 663
Odorrana utsunomiyaorum 491
Onychodactylus fuscus 637
Onychodactylus intermedius 642
Onychodactylus kinneburi 577
Onychodactylus pyrrhonotus 582
Onychodactylus tsukubaensis 347
Opisthotropis kikuzatoi 28
Pareas iwasakii 230
Pelodiscus japonicus 287
Pelophylax nigromaculatus 668
Pelophylax porosus brevipodus 496
Pelophylax porosus porosus 674
Perochirus ateles 152
Plestiodon barbouri 162
Plestiodon kishinouyei 210
Plestiodon kuchinoshimensis 708
Plestiodon latiscutatus 313
Plestiodon marginatus 215
Plestiodon oshimensis 220
Plestiodon stimpsonii 710
Plestiodon takarai 67
Protobothrops tokarensis 270
Rana kobai 679
Rana kyoto 701
Rana okiensis 683
Rana tsushimensis 687
Rana uenoi 501
Rana ulma 619
Rana yakushimensis 692
Salamandrella keyserlingii 461
Sinomicrurus boettgeri 260
Sinomicrurus iwasakii 187
Sinomicrurus japonicus 265
Takydromus amurensis 167
Takydromus dorsalis 172
Takydromus smaragdinus 225
Takydromus toyamai 72
Zootoca vivipara 177

■和名索引

アオウミガメ 103
アオカナヘビ 225
アオマダラウミヘビ 292
アカイシサンショウウオ 387
アカウミガメ 33
アカハライモリ 652
アカマダラ 256
アキサンショウウオ 367
アブサンショウウオ 362
アベサンショウウオ 357
アマクササンショウウオ 322
アマミアカガエル 679
アマミイシカワガエル 486
アマミイボイモリ 593
アマミシリケンイモリ 647
アマミタカチホヘビ 234
アマミハナサキガエル 609
アムールカナヘビ 167
イイジマウミヘビ 98
イシガキトカゲ 710
イシヅチサンショウウオ 531
イズモサンショウウオ 398
イヘヤトカゲモドキ 12
イヨシマサンショウウオ 393
イワキサンショウウオ 413
イワサキセダカヘビ 230
イワサキワモンベニヘビ 187
イワミサンショウウオ 382
エゾサンショウウオ 696
エラブウミヘビ 302
オオイタサンショウウオ 516
オオサンショウウオ 587
オオシマトカゲ 220
オオスミサンショウウオ 408
オオダイガハラサンショウウオ 511
オオハナサキガエル 663
オガサワラトカゲ 706
大東諸島のオガサワラヤモリ 307
三宅島、八丈島、青ヶ島のオカダトカゲ 313
オキサンショウウオ 547
オキタゴガエル 683
オキナワイシカワガエル 481
オキナワイボイモリ 471
オキナワキノボリトカゲ 205
オキナワシリケンイモリ 466
オキナワトカゲ 215
オキナワヤモリ 136
オサガメ 282
オットンガエル 598
オビトカゲモドキ 126
カスミサンショウウオ 541
キクザトサワヘビ 28
キシノウエトカゲ 210
キタサンショウウオ 461
クチノシマトカゲ 708
クメトカゲモドキ 62
クロイワトカゲモドキ 51
クロウミガメ 274
クロサンショウウオ 632
ゲイヨサンショウウオ 327
ケラマトカゲモドキ 57
コガタハナサキガエル 491
コガタブチサンショウウオ 567
コモチカナヘビ 177
サキシマアオヘビ 238
サキシマカナヘビ 172
サキシマキノボリトカゲ 201
サキシマスジオ 242
サキシマバイカダ 251
宮古諸島のサキシママダラ 714
サドガエル 352
サンインサンショウウオ 418
シコクハコネサンショウウオ 577
シュウダ 88

セトウチサンショウウオ 561
センカクトカゲ 67
ソボサンショウウオ 423
タイマイ 2
タカラヤモリ 131
タゴサンショウウオ 433
タシロヤモリ 147
タダミハコネサンショウウオ 637
タワヤモリ 197
ダンジョヒバカリ 247
チクシブチサンショウウオ 552
チュウゴクブチサンショウウオ 557
チョウセンヤマアカガエル 501
ツクバハコネサンショウウオ 347
ツシマアカガエル 687
ツシマサンショウウオ 448
ツルギサンショウウオ 452
トウキョウサンショウウオ 442
トウキョウダルマガエル 674
トウホクサンショウウオ 628
トカラハブ 270
トサシミズサンショウウオ 342
トノサマガエル 668
ナゴヤダルマガエル 496
ナミエガエル 506
ナンヨサンショウウオ 338
ニシヤモリ 192
ニホンイシガメ 114
ニホンスッポン 287
ハイ 260
ハクバサンショウウオ 377
ハナサキガエル 614
バンダイハコネサンショウウオ 642
バーバートカゲ 162
ヒガシヒダサンショウウオ 521
ヒダサンショウウオ 623
ヒバサンショウウオ 456
ヒメウミガメ 278
ヒメタゴガエル 701
ヒャン 265
ヒロオウミヘビ 297
ヒロシマサンショウウオ 428
ブチサンショウウオ 403
ベッコウサンショウウオ 536
三島のヘリグロヒメトカゲ 712
ホクリクサンショウウオ 437
ホムラハコネサンショウウオ 582
ホルストガエル 476
マダラトカゲモドキ 7
マホロバサンショウウオ 526
ミカワサンショウウオ 332
ミナミトリシマヤモリ 152
ミヤコカナヘビ 72
ミヤコトカゲ 17
ミヤコヒキガエル 716
ミヤコヒバァ 93
ミヤコヒメヘビ 83
ミヤラヒメヘビ 23
ムカシツチガエル 657
ヤエヤマイシガメ 46
ヤエヤマセマルハコガメ 109
ヤエヤマタカチホヘビ 78
ヤエヤマハラブチガエル 604
ヤクシマタゴガエル 692
ヤクヤモリ 141
ヤマグチサンショウウオ 372
ヤマトサンショウウオ 572
ヤンバルトカゲモドキ 121
ヨナグニキノボリトカゲ 157
ヨナグニシュウダ 182
リュウキュウアカガエル 619
リュウキュウヤマガメ 40

The 5th Red Databook Reptiles and Amphibians: Threatened wildlife of Japan

Edited by
Ministry of the Environment, Japan
1-2-2 Kasumigaseki, Chiyoda-ku, Tokyo
100-8975, JAPAN

第５次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　爬虫類・両生類

2026 年 3 月　初版　発行

編集／環境省
〒100-8975　東京都千代田区霞が関 1-2-2
電話　03-3581-3351（代表）

The 5th Red Databook Reptiles and Amphibians: Threatened wildlife of Japan